

高嶺の華と路傍の花

山本イツキ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オレはかつては、道端に咲く枯れかけの花だった。

それでも、失恋を経てオレは新たに返り咲いた。

”女” という存在を己の中から消し去ることで!!

これは、女嫌いの自称不良生徒が花咲川高校で過ごす3年間の物語である。

こちら、月島 奏のイメージ像になります。

目次

プロローグ	1	第10輪	突風に揺れるクレマチス	181	
第1輪	可憐な青い花	19	第11輪	夏風に揺らぐダリア	204
第2輪	高貴な金の華	36	第12輪	優美な華には毒がある	232
第3輪	凛々しくも脆い花	51	第13輪	夏夜の空に咲く火の花	255
第4輪	牙をむく荒くれの花	70	第14輪	踏まれ散るジュリエット	283
第5輪	枯れかけの花	89	第15輪	寝返りのダリア	305
第6輪	枯れかけの花は返り咲く	115	第16輪	咲き誇るナスタチウム	327
第7輪	彷徨う綿毛	145			
第8輪	欲の蕾	166			
第9輪	欲に塗れたチューベローズ				

567	第24輪	華の訪れ／花の戯れ	
	第23輪	花の行方	546
	第22輪	蝕まれた花	523
	第21輪	猛毒の薔薇	492
431	第20輪	花を枯らす害薬	461
	第19輪	咲くことを諦めた花	404
	第18輪	荒くれの花が変わり咲く時	
387	第17輪	気高き華が変わり咲く時	
348			

831	第34輪	ソメイヨシノ 〜純潔〜	
	第33輪	生花	812
	第32輪	造花	788
768	第31輪	病のあなたにガーベラを	
	第30輪	白色の水仙	733
	第29輪	杏	716
	第28輪	蕾たちの開花	696
	第27輪	春は再び	674
	RED ROSE		639
	第26輪	Bittersweet	603
	第25輪	降り積もる雪花	

第35輪 バーデンベルキア く奇跡

的な再会く 853

第36輪 向日葵 873

第37輪 火の花 897

第38輪 秋明菊く淡い思いく

925 第39輪 ハナズオウく裏切りく

第40輪 アザミ く報復く

975 第41輪 トリカブトくあなたは私に

死を与えたく 999

第42輪 キンセンカく絶望く

姿は百合の花

第43輪 ダイビーく死んでも離れな

1022 第44輪 花に風

い 1079 第45輪 言わぬが花

1109 第46輪 事件と喧嘩は花咲川の花

1154 第47輪 花は折りたし梢は高し

1181 第48輪 立てば芍薬座れば牡丹歩く

1212 第49輪 高嶺の華

1212 第49輪 路傍の花

第50輪 高嶺の華と路傍の花

1237

番外編

番外編 大人になった花たちは今

……

1263

プロローグ

恋愛というものは実に残酷だ。

この超少子高齢化の時代、運命の人と出会うなんてそうあることじゃない。

例え出会ったとしても、相手が自分に相応しいと思わなければ、結ばれることは決してあり得ることの無い話だ。

オレもその経験をした1人である。

オレには、中2の頃に好きになった女の子がいた。

クラスの人気者だったその子は、美女の見本とも言える顔つきで、栗色の長い髪を風に靡かせるその姿は、美しいという言葉では表現しきれないほどだ。

オレからしたらその女の子は、高嶺の花。

道端に咲く、あまりにも醜い花のようなオレには、その存在があまりにも眩しいものだった。

当時のオレは、親の影響もあって気性が荒く、揉め事もしょっちゅう起こす問題児

だった。

だけど、その子に好かれようと必死に抑え、大人しい性格を演じてきた。

知り合って暫くが経ったある日。

誰もいない教室にその子呼び出し、勇気を振り絞って告白をした。

結果は惨敗だったが、告白したこと自体に後悔はなかった。

後日、その事がクラス及び学年で知れ渡り、ちよつとした騒ぎになった。

噂を垂れ流したのは、オレが告白した女の子で、面白おかしく話していたとクラスメイトが言う。

今まで抑えてきたものが一気に爆発し、殺意と怒りを身に纏い、教室に入る。

クラスメイト、止めに入った教師、男女関係なく次々と殴り飛ばし、教室の窓ガラスをあらゆる手段を持って大破。

これらの暴挙を経て、重軽傷者を数十名出す大参事となり、遠い学校への転校を余儀なくされた。

これがオレ、月島つきしま奏かなでが起こした、最初の重大事件だ——。

転校先では、あのような過ちを繰り返さないように明るいキャラに徹した。

流行りのギャグを堂々と披露したり、話の内容の引き出しも多かったことから、転校生ながらクラスの中心になるのはそう時間がかかることじゃなかった。

腹が立つツツコミをしてくるやつには多少イラつきはしたが、あの時に比べれば些細なものだ。

しかし、オレにとって友達と言える人達の中で、女は存在しない。

話しかけられても、素っ気ない態度をとったり酷い時は無視もしていた。

女という存在全てが、あいつと同じように見えたから………仕方なかったのだ。

執拗に理由を聞かれても、まあ不器用なりに上手くかわしていただろう。

それもこれも、全部あの女の所為だ。

オレは何一つ悪くない。

女子生徒なんて、存在しているようで存在していないもの………空気で

いうと窒素といったところか。

ホモだと言われようが、趣味の合う友達と話したり遊んだりする日々が楽しくて仕方なかった。



3年生になり、オレにも進路に悩む時期が訪れた。

「なるほど……男子高校希望か」

「ああ、家から近いし、オレにお似合いな学校だと思うからな」

自業自得ではあるが、遊び過ぎて勉強をほとんどわしてないせいで成績はあまり良くない。順でいうと、下の中といったところだ。

例えば偏差値が悪くても、男子校にさえ行ければなんでもよかった。

先生は頭を抱え、少し不満そうに答える。

「お前の成績から考えても、問題ないだろう。しかし、お前が女子生徒を毛嫌いしてい

ることは、学年の先生も生徒も、みんな知っている」

「自我共に認めるぐらいだから当然だ。自分で言うのも何だが、オレは学校の有名人だからな」

はははつと、わざとらしく照れた素振りを見せると、先生は小さくため息をついた。

そんな先生に一つ、オレが最近仕入れたとっておきの情報を流す。

もちろん、内容は今話している先生についてだ。

「そんなことより、せんせーは自分の心配をしたらどうだ？」

「なんだ、突然。そんなことよりお前についてだな——」

「ここだけの話、せんせーは最近、奥さんと上手くいってないという噂を聞いてな。40歳も半ばを迎えたとはいえ、些細なことで喧嘩ばかりしては中学生になられたばかりの娘さんからも嫌われ——おっと、これ以上は何も言わねえよ」

せんせーの鋭い眼光を見て、思わず口を閉じる。どうやら、本人もあまり触れて欲しくない話題だったらしい。

先生は額から出た汗を、ハンカチですつとぬぐい続けている。

やはり学年の有名人ともなると、こういう噂が絶えず流れ込んでくるから面白い。

「わたしのことはどうでもいい。心配しているのはお前の将来についてだ。女性とはどうあっても関わる世の中だ。今、諦めてしまつては必ず後悔することに——」

「アンタ、オレの前の中学でどんな目にあつたか、知らねえのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

せんせーの言葉を遮り、オレが食いつくように話すとコイツは黙り込んだ。

勿論、オレの経験したことは母親を通じてだがこの学校の教師陣はみんな知っている。

クラスメイトをはじめ、同級生たちが知らないのは、オレが言わないでくれと止めたからだ。

こんな格好悪い過去をみんなに知られたくないだろ？

「誰が何と言おうと、オレは男子高校に行く。頭も悪いからな。しかもうちは母子家庭でお金がないから最低限公立には受かるように頑張るつもりなんで。それじゃっ」

「おいっ、待て！・・・・・・・・・・・・・・・・全く、好き勝手に言つてくれるな」

半ば強引に進路相談を終え、一人で帰路に立つ。

学校から家まで、歩いて1時間の道のりは本当に憂鬱だ。

自転車通学禁止のうちの学校は、本当にどうかしている。

前の学校なんて歩いて10分もあれば余裕でついてたはずなのにな……。

しかし、住んでる家自体に不満はない。

周りには、でかいスーパーマーケットと、二つの高校があり、一つはオレの受験予定の男子校で、もう一つは長い歴史があるお嬢様校。

おふくろは、その女子校出身らしい。

そこで起こした数々の伝説は、今でもこの近所で語り継がれているがこれは後々話すことにしよう。

家の扉を開けると、そこには仕事に行っているはずのおふくろが鬼の形相で似王だちしていた。

腕に青筋を浮かべ、今にも襲い掛かってきそうな猛獣のようだ。

あまりの恐ろしさに外へ引き返そうとするも、制服の襟を掴まれリビングに引きずられ、正座させられる。

金髪に染めた短めの髪はさながら、元ヤン感をかもちだす。

まあ、実際にそうなんだが………。

若くして結婚、出産を経験したおふくろの佇まいは、一切の老いを感じさせない。

この人の旦那、もといオレの親父は、オレが5歳の時に浮気がバレて即離婚した。その時のおふくろは今でも覚えている。

手をほきほきと鳴らし、顔がパンパンなるまで殴り続けたその拳に恐怖したものだ。

その前に、こんな女房がいるのに浮気をする父親の神経もどうかしていたな。

しかし、女手一つでオレを育ててくれたことには本当に感謝してる。

ワガママも散々言ってきたが、そのほとんどを叶えてくれた優しい人でもある。

2人でいるときは、常に笑顔だったしオレはその笑っている顔が好きだった。

そして現在——おふくろの目の前に正座しているオレは、親父の二の舞になりかけている。

「あんた、進路相談を投げ出したって本当か？」

静寂に満ちた部屋に母は、静かながらも怒気に満ち溢れた男口調の声を発する。燃えるような真つ赤な怒りのオーラを纏ったその姿はまさに豪鬼。

あまりの恐ろしさに、顔も上げられない。あまりの重圧に意識が刈り取られそうだなんだこりや、覇〇色の覇気か？

「投げ出してはない。ちゃんとオレの気持ちを伝えて——」

「言い訳無用!!」

そう言うと、物凄い勢いの平手打ちがオレの頬に炸裂する。

あまりの痛みに思わず苦痛の声を上げた。

クソっ、このババア……武〇色も身につけてやがるのか……!!

「先生が親身になって相談してくれてるのにその態度はどう言う事だ!! 男子校を受けるなんて絶対に認めないからな!!」

「なっ!? どう言う事だよおふくろ——」

「話の腰をおるなあああ!!」

おふくろの怒号が部屋中に響き渡る。

腕を大きく振りかぶり、いつ平手打ちが来てもおかしくない状況にある。

「あんたが辛い思いしたのは重々知ってるけどね、みんな心配してるのよ？ 前の学校の時はあまり言わなかったけど、あんまりナヨナヨしてたら舐められっぱなしだぜ？」

「あの頃は、喧嘩や殴り合いが好きだと知られたくなかったからな」

「それでも、女から逃げてきたんだろ？」

「逃げたんじゃない、避けてただけだ」

「どっちも同じことだろ」

「いや違うね。オレにとって女は必要ないだけ……あ、おふくろは別な。料理上手いし」

「その凶太い神経は、多分旦那のだろうね。全く、変なところ引き継ぎやがって」

オレがわざとらしくおだて、おふくろはため息混じりにそう言うのと、木椅子に腰掛ける。

「じゃあ、あんたは一生、女という存在を避け続けるっていうんだな？」

「ああそうだよ。ホモだと言われようが知ったことか。オレは、男たちとつるんでいたらそれでいいんだよ」

「ふーん。なるほどねえ．．．．．」

おふくろは組んだ片側の足に肘を置き、顎を手のひらに乗せて何かを考えるように沈黙した。

そして部屋に再び、静寂な時間が流れる。

「まあ、あんたがそこまで言うんならアタシに言うことはないな．．．．．
わかった、先生にはちゃんと伝えるから、受験勉強しときな。ただでさえ頭悪いんだから」

「へいへい分かりましたよ．．．．．」

気怠そうに返事を返し、狭い一人部屋に入ると、力なくベッドに背中から飛び込む。そして、ふっと前の中学の思い出が頭をよぎる。

「ああ、考えるのもめんどくせえ．．．．．」

オレの口からは、そんな投げやりな言葉しか出てこなかった。



あれからというと、おふくろが先生を説得してくれて、オレの男子校への受験が正式に決まった。

悲しいことに、その男子校を受けるのは学校でもオレだけだ。

理由は一つ。その学校の受け入れ人数が1校に1人で、全校生徒は100にも満たないかららしい。これも、超少子高齢化の影響か……。

受験することが決まってからは早かった。

塾に行く金もなかったからファミレスで友達から勉強を教えてもらい、家で勉強して寝そうになったらおふくろにハリセンで叩き起こしてもらおう、そんな日々が続いた。

その甲斐あって、高校には余裕で合格。

中学も無事卒業して、また遊びまわる生活が始まった。

髪も金のメッシュを入れ、カラオケやらボーリングやら………思いつく限りの楽しいことをして、春休みを謳歌していた。

オールで遊びまわって帰ってきたある日、
家に着くとおふくろから衝撃の事実が伝えられる。

「男子校、無くなるらしいぞ?」

「そうか、男子校がなくなるのか。それは残念な………はっ?」

おふくろの言っていることが理解できずに、ポカンと口を開ける。

「なんか突然決まったことらしくてね。昨日の夜に、先生から電話があつたよ」

「ちよちよっ!!? ちよつと待てよ?!? オレの進学先はどうなるんだよ!!」

「そう慌てるな。まあ、まずは座れ。話はそれからだ」

オレは無言で頷くと、おふくろからコーヒーが入ったカップを手渡される。

ありがたく受け取ると、それを机に置き木椅子に腰掛けた。

「簡単に説明するとだな、男子校と女子校が統合されて共学になったらしい」

「共学ってことは……………まさか……………!?!」

「必然的に、女子と同じになるな。それも、比率は圧倒的に女子が上で」

「なんということだ……………オレの、オレだけの、オレのためのパラダイスが……………。あまりの衝撃の出来事に、落胆し肩を落とす。」

「まあ気にするな。先生も喜んでたぞ？ 奏の女嫌いを克服できるチャンスだってな」

「人ごとだと思いやがって、あのクソ担任!!」

「困みにだが、あんたと同じ中学の人も何人かそこに入学するらしいぞ」

「マジかよ……………」

「マジだな」

「はあ……………仕方ねえ、行ってやるよ!女の園に!!」

「おお、それでこそ男だ!さっすが私の息子く♪」

やけくそで燃え上がるオレに、おふくろは嬉しそうに肩を叩く。

カッコつけた方がいいが、突如変わった理想の学校生活にとつてもない怒りを感じる。オレを入学させたことを、精々後悔するといひ——。

桜が満開に咲き誇る並木道に、新しい制服に身を包んだ生徒たちが歩み行く。家のベランダから見える学校には、入学式と書かれた看板が立ち、新入生を迎え入れる。

時刻は8時10分。集合時間まであと20分もある。

オレは寝巻きのまま、優雅にコーヒーを飲み、朝のひと時を堪能——

「してる場合じゃないだろ、バカッ」

突如、おふくろの鉄拳が飛んでくる。

「早く支度して学校行きな。入学早々遅刻なんてするものじゃないよ」

オレは気怠げに返事をし、ハンガーにかけられた制服に袖を通す。

制服はベージュのブレザーで、中学の時のようなかつちりとした黒の学ランとは違

い、ゆったりと着れそうだ。

冷めた残りのコーヒーを一気に飲み干し、おふくろに一言伝え、家を出る。

アパートを出て 信号を一つ超えるともう学校に着く。やっぱ、もう少し朝のテイ
ブレイクを堪能したらよかつたな……………。

正門を潜り、中庭にデカデカと佇む掲示板には新生生のクラス分けが表示されてい
た。

群がる新生生たちに構わず前へ出る。

さて、オレのクラスは……………。

「なるほど、A組か」

自分のクラスを確かめると、足早にここを去る。

校舎に入ると、在校生含め何十人もの生徒とすれ違う。

そして何より、女子率が高い。2、3年生は全員女子だとしても、男子生徒の姿が一
向に見えない。

全く、先が思いやられる……………。

教室に入ると、既に大半の同級生がクラスにいた。

そして、オレが入る度視線が集まる。

まあ、無理もないか。高校生らしくない髪色と髪型、鋭い目つき、どれをとつても普通とは程遠いからな。

そんな視線を完全に無視し、自分の机に腰掛ける。

しばらくすると、担任の先生が入ってきて入学式の説明を行い、体育館に移動する。

目を見渡せば、視界には必ず女子が映り、嫌悪感に見舞われる。

本当に男子生徒が入学したのかよ……………。

殆ど寝てて覚えてない入学式が終わると、再び教室に戻り、親睦を深めるための自己紹介タイムが始まった。

出身校はどこだとか、部活はどこに入るのだとか、かしくまった挨拶に全く興味を示さない。どこか上の空で聞き流す。

「次、お願いします」

「……………」

「……………？月島くん？次、あなたの番ですよ」

「……………ああ、オレか」

クラス中の視線がオレに集まる。

明らかに異質な存在に少なからずの興味があるのだろう。

オレは臆することなく堂々と言い放つ。

「名前は、月島 奏。家はすぐそのア・パート。本当なら隣の男子校に通うはずだったんだが、不本意ながらここに通うことになった。嫌いなものは女。正直、この学校に馴染む気は一切ないし、絡む気もない。以上だ」

この挨拶に誰も、何も返せなかった。

クラスはしんと静まり返り、異様な空気が漂う。

あーっ………これは、男子生徒からも嫌われたか。

まあ、今はどうでもいいか。

頭の中を瞬時に切り替え、着席をする。

こうしてオレの高校生活は、過去に例を見ない最悪なスタートを切った。

第1輪 可憐な青い花

オレは今日、高校生活2度目の春を迎えた。

もう見慣れた校舎に、今年入学する新入生が次々と校門をくぐる。

唐突に1年とんだから、オレが今どんな学校生活をわからないだろう。

はじめに、オレの去年の学校生活を振り返ってみる――。

授業は遅刻、サボる、テストは赤点ギリギリ回避でそれはもう、先生からは問題児扱いを受けている。

学校内の揉め事は特に起こさないが、学校外は別だ。

吹っかけられた喧嘩は全て受け、全てを返り討ちにした。

高校生だろうが、中坊だろうが、大人だろうが………拳一つで圧倒し続けた。

その噂は瞬く間に広がり、近辺でオレを知らない人間なんていなくなつた。

オレは、悪い意味の有名人と成り果てたということだ。

そのせいか、この学校では全く友達ができなかった。

女は眼中にないとして、男友達ができなかったのは少し誤算だ。

高校と中学とでは、何か感性というものが違うのだろうか……？いや、この学校にいる生徒がたまたま知的なのが多かったただけだろう。気にすることはない。実際、一匹狼というのも悪くない。

誰かに気を使う必要もないし、気を使われなくて済む。これほど楽なことはない。ただ、ナメられないようにすればそれでいい。

そして、今日も時間ギリギリに家を出る。

新クラスの発表があるらしいが、オレにとつては些細なことだ。

予鈴のチャイムが鳴ると同時に校門をくぐると、生活指導の先生に捕まり、お叱りを受けるが適当に聞き流す。

先生からオレの配属されたクラスを聞き、駆け足もどきで校舎に入る。

廊下ですれ違う生徒たちは皆、静かに着席していて、冷たい視線が送られる。

それでも、オレに手をあげようとする奴は一人もない。所詮は根性無し「チキン」の集まり、他愛もない。

空気を読まず教室のドアを開けると、クラスメイト全員の視線がオレに集まる。

それはを全て無視し、自分の机に腰掛ける。

担任もオレの行動に驚きを隠せない様子だ。

「月島君！新学期早々遅刻するのはいけないことですよ！」

「あー……………学校に行くかどうか迷ってたら遅れました」

「行くかどうかって……………」

「そんなことより、ほらっ。さっきの話の続きをしようぜ？始業式がどうかか」

「そ、そうですね……………それでは気を取り直して、始業式の説明に戻ります」

担任は、やや不満そうな表情を見せつつも、淡々と話を続けた。

オレに向けられた視線も全て担任へと集中するが、影でこそオレのことを話す声が少ないからずある。

こんなつまらない学校生活が続くんだったら、退学することも考えるべきか。

この時間は、そのことで頭がいっぱいだった。

始業式が終わり、教室に戻ると明日の注意事項を述べるとすぐに下校することになった。
誰よりも早く立ち上がり、教室を出ようとしたその時、担任に呼び止められた。

なんでも、この学校の学園長がお呼びだとか……。

仕方なくそれに応じ、気だるげにそこへ向かう。

とうとう退学宣告がなされるのかと、半ば胸に期待を膨らませながら、ノックもなしに堂々と学園長室に入る。

部屋に入りまず見えたのは、最奥にある窓から、生徒たちが帰宅する姿を眺める禿頭のおっさんが佇む姿だった。

やや肥満体の佇まいからは、なんの覇気も感じない。

50回も歳を取れば、オレもそうなるのだろうか。思わず、自分の将来を想像して気分が悪くなる。

オレが部屋に入ってきたことに気づき、顔をこちらに向け笑みを浮かべた。

「まあ、そこに座りなさい」と一言告げられ、向かい合うソファに座り足を組むと、オレの正面に学園長も腰を掛ける。

そして、笑顔のまま口を開く。

「急に呼び出してすまないね。少し、話をしたいと思って、君の担任の先生にお願いし

「たんだ」

「どうせ帰つても暇だからな。アンタの戲事にも少しは付き合つてやるよ」

「それは感謝しないといけないね。最近の若い子たちは威勢が良くて感心するよ」

「それはどういう意味だ？」

「いや、気にしないでくれ。ただ、君を褒めているだけだ」

「……………そんなことを言うために、オレをここに呼び寄せたのか？ 戲事に付き合うとは言ったが、あまり長引かせるんじゃないやねえ。用件を早く言え」

「はははっ、すまないね。それじゃあ、早速話すでしょう。ここからが本題だ——」



オレが、どんな威圧的な態度を取ろうが、学園長の表情は一切変わらない。

物腰柔らかく話すその姿は、オレに対する敵意を一切感じない、穏やかなものだ。

寧ろ、オレのことを理解しようとしてくれるようにも感じる。

すると、学園長は立ち上がり、本棚にある一冊のアルバムを取り出し、机にそつと置いた。

古びたそのアルバムには、今から20年前のものだと記されていて、今と全く変わらない校舎が映し出されていた。

しかも、このアルバム、どこかで見た記憶が……………。

「おい学園長、一体なんのつもりだ？20年も前のアルバムを見せて、オレと思いい出話をしようってか？」

「大まかに言うと、その通りだ。ページを一つ、めくってみてくれ」

学園長の言う通りにすると、そこには、1人の女子生徒の写真が映し出されていた。

金髪スケパンのショートヘアに、煌びやかに光るピアスをいくつも身につけ、何世代も前の女番長を思わせるその姿は、どこか親近感を感じる。

次のページを開くと、まだ毛の生えている若かりし学園長と肩を組み、満面の笑みを浮かべるこの女……………どこかで見覚えが……………。

「もしかして……………うちのおふくろか？」

「その通りだ。20年前、この学校を卒業した時の写真だよ」

「へえ、正直、今とあんま変わらないな」

「彼女は今も元気になっているのかね？」

「ああ、毎日オレの頭にゲンコツするぐらい元気にしてるよ」

「そうかそうか、それなら安心だ……………」

学園長はどこか思わせぶりの態度をとる。

「あんた、おふくろの担任だったのか？」

「ああ、その通りだ。当時の彼女は、みんなから慕われていてね……………荒っぽい性格はあったが、隣にあった男子校に絡まれる、うちの生徒を何度も守り続けていたんだよ。

極め付けは、手を上げられた生徒がいたと聞いた時は、主犯の男子生徒全員を病院送りにして、ニュースにもなったんだよ」

ははは、と笑いながら話す学園長と、おふくろの過去に思わず身震いする。

昔はなんでもありだったんだな……………。それまでの騒動を起こして退学にならなかったのが不思議でならない。

「そこまでするってことは、オレと同じぐらいの問題児だったんだろ？」

「確かに、問題ではあったね……………でも、彼女の功績を見れば、我々教師陣も彼女を嫌いになれなかったし、寧ろ感謝するほどだったよ。この学校の顔……………もとい、今で言うところの街の風紀を取り締まる存在だったね」

「変わってるんだな、この高校……………」

「でも、彼女の唯一の欠点が一つ——男運が全くなかったんだよ」

その話をする、突如、学園長は腹を抱えて笑い出した。

そうし出す理由も分かる。現に離婚してるしな。

「何度か、『アタシに男ができた！』って報告をしに来ては、すぐに『別れを告げた』と愚痴を言いに来るんだよ。本当に変わっていたなあ、あの子は」

「ああ、ちなみにだが離婚したぞ。オレが5歳の時に」

「本当かい!?それは知らなかったなあ、はははっ」

「あんな、学園長……………そろそろこの話し、飽きたんだが?帰ってもいいか?」

「おっと、すまない。彼女の話になるとついつい話し込んでしまうんだよ」

学園長は一度咳き込み、場の空気を戻すと先程とは違い少し悲しそうな表情を浮かべ

る。

「君の素行は、度々耳にしているよ。中学時代に何があつたかも、少しだけ調べさせてもらった」

その言葉に思わず怒りがこみ上げる。
学園長は変わらず淡々と話を続ける。

「それから、多数の暴力事件、他校への殴り込み……去年だけで、かなりの騒ぎを起こしたそうだね」

どうやら、本題はこつちだったようだ。

それなら、さつきみたいに思い出話に浸っておけば良かったか……。

「……………それで？オレに退学しろってか？」

「そんなことを言うために、ここへ呼んだんじゃない。君に、頼みたいことがあつただよ」

「頼み事？」

学園長は息をスウツと吸い、一呼吸置いてから話を戻した。

「彼女と同じように、この学校の風紀を取り締まってほしいんだ」

「風紀？それはどう言う意味だ？」

「近年、いじめや少年犯罪が多発する世の中になりつつある。特に、この街はその傾向が強くてね……………。学校だけではどうしても、動くことができない状況にある」

「おいおい、オレは正義の味方じゃないんだぜ？事件を多発させる疫病神……………この学校にとっては不必要な存在だ——」

「だが、私は知っている。これらの事件は全て、誰かを守るために行ってきたんだろう？」

「……………」

学園長の言葉に、声を詰まらす。

揉めていた連中の仲裁に入ったり、吹っかけられた喧嘩……………もとい、不良たちに絡まれたガキの身代わりになり、それを沈めたのは事実だ。

だが、助けた奴はオレを置き去りにしてすぐに逃げ出す。

オレが相手を圧倒することによって感じる恐怖によって、一目散に逃げ出す。そこに残るのは、相手を屈服させたオレの姿だけだ。

それまでに何があつたかを話しても、通じることはない。

人は、表面上のことしか見ようとしぬい。

だからこそ、オレは諦めていたのかもしれない。誰かに理解されることを。

理解者を………友達を欲することを。

「アンタ、オレに何が言いたい？」

「そのままの意味さ。この学校の風紀委員として、この学校を………この街を、取り締まってくれ。キミのお母さんのように」

そう言うと、学園長は深々と頭を下げた。

オレが沈黙する数十秒間も、ずっとずっと、オレが言葉を発するまで頭を上げることが決してなかった。

「……………わかったよ。風紀委員ってやつに入ればいいんだろ？」

「ああ、その通りだ。本当に感謝する！」

学園長はオレの手を握り、笑みを浮かべる。

おっさんの涙に興味はないが、誰かに頼られる感覚を久々に味わった。

「早速だが、明日の授業ではクラス委員を決める時間があるはずだ。キミの担任にはよく言い聞かせておくから、堂々としてくれて構わない」

「ああ、わかったよ」

「後日、風紀委員長を連れてくるから、また話をしよう」

「……………はっ？それはどう言う——」

「私の話はこれで終わりだ。今日はありがとう。キミと話せて楽しかったよ」

半ば強引に話を切られ、学園長室を後にする。

結局は、自分の頼み事を伝えたかっただけなのかよ……………。

あの学園長^{ハゲ}に、少量の怒りを覚え、家路についた。



校門を出ると、昼飯を買いにコンビニへ向かった。

学園長のせいで、昼飯を食う時間が遅れた。もう腹が減って仕方ない。

信号をいつもとは違う道で渡ると、背の低いオレと同じ学校の女子生徒の姿が見えた。

ふわふわとした薄い青の長髪で、身長はオレの肩ぐらいしかない。あれは、おそらく新入生か。こんな時間まで何をしているのか。

しかし、ただ道を歩いている訳じゃなさそうだ。

敵つい2人組の男に囲まれ、少女は声を発せず、ビクビクと怯えていた。

片方の男が少女の強引に手首を掴み、路地裏へと連れて行き、もう1人もその後を追う。

明らかに、少女を連れ去ろうとする計画的犯行だろう。

様子を伺うためにそこを覗き込むと、片方が手で口を塞ぎ、もう片方が手と足を抑えている。

どう考えても、如何わしいことをする気満々の面だ。

女は嫌いだ、集団で犯罪に手を染める奴はもつと嫌いだ。

足音も立てずに駆け込み、手足を抑える男の顔面に飛び蹴りをかます。

唐突の出来事に驚くもう1人の男の頬に右ストレートをお見舞いし、2人同時に気絶させた。

襲われていた少女も何が起きたかわからず、困惑しているように見える。

「おいつ」

「……………!!は、はい!!」

オレの問いかけにビクつき、頬からは涙がポロポロと滴る。

「怪我はないか?」

「……………えつ?」

オレの言っていることが理解できていないようだ。

まあ、こんな目にあつたんだし、仕方ないか。

「怪我はないかと聞いている」

「えつ、えつと……………大丈夫です」

「そうか、なら安心だ。これからは、別の道を通ることだな。最近、物騒な連中が増えたと、さつき学園長から聞かされたものでな。いきなり遭遇するとは、驚きだ」

「あ、あのっ……………」

「なんだ？早くコンビニで昼飯を買いに行きたいんだが？」

「月島 奏くん……………だよな？」

突如、その少女の口から放たれたオレの名前に、今度はオレが困惑する。

「なんでオレの名前を？」

「私、同じクラスなんだけど……………覚えてないかな？」

—— 前言撤回、この見た目で、オレの同級生だったらしい。

「実は、去年も私と同じクラスだったんだけどなあ……………」

「……………悪い。全く記憶にない」

「そ、そうだよな。自己紹介の時に、女の子は苦手って言ってたもんね」

「そんなことも覚えているのか。変わってるな、お前」

「……………あつ、言うの遅れちゃったけど、助けてくれてありがとう！」

「礼なんて必要ねえよ。そんなことより、お前がこれから襲われないように、自己防衛に努めるよう心掛けることだな」

「う、うん……………頑張るね」

「じゃあオレはコンビニに——」

「あつ、よかつたらお昼ご馳走させてよ！これは私からのお礼！」

「礼は要らねえって言っただろ」

「それだと私の気が済まないの！だからお願い！」

必死に頭を下げる彼女に根負けする形で、昼飯を奢ってもらうことになった。

後に、交番にいた警官にさっきの二人組を逮捕してもらい、この事件は幕を閉じた。

「それにしても、すごい食べるんだね……………見てるだけでお腹いっぱいになるよ」

「体動かしたら、腹も減る。人間の3大欲求の一つだからな」

「うふふ、月島君って面白いんだね」

「……………女にそんなこと言われたのは、初めてだな」

「えっ……………!?そ、そうなんだ」

「ついでと言ってはなんだが、お前の名前を聞いていいか？」
「うんっ！私は、松原 花音って言います！」

「松原か……覚えておく。昼飯、ご馳走になったな」

「こちらこそ！さつきはありがとう！また明日、学校でね！」

松原はそう言うと、笑顔で手を振り別れを告げる。

退屈なオレの学校生活ものがたりに、異質な登場人物が現れた。

第2輪 高貴な金の華

良いことをした次の日の朝は、何だか清々しい。

今日は遅刻するどころか、誰よりも早く登校して教室の鍵を開け、自分の席に着席する。

普段のオレからしたら、絶対にあり得ない行動だ。鍵を職員室に取りに行った時も、その場にいた教師陣全員が驚きの表情を見せてくれた。

こういうドツキりも、案外悪くない。オレのSな性格が滲み出る。

次に教室に入ってくる奴の反応が、実に楽しみだ。早く誰かこないか、ソワソワする。まるで、餌を心待ちにする子犬のような気分だ。

そう考えていると、早速誰かが入室したようだ。驚く姿を一目見ようとそつちに顔を向けると、そこには見覚えのある……というか、昨日に名前と顔を覚えたやつが現れた。

「ふえっ!? つ、月島くん!？」

「お前は確か、飯を奢ってくれた……………」

「は、はい! 松原 花音です!」

昨日ぶりの再会に言葉も出ない様子だ。

全く知らない奴より、面識のある奴の方がこうやって会話もできるから、当たりと言ったら当たりか。

松原はドアを閉めると、オレの隣の席に腰掛けた。

……………どうやら、こいつはお隣さんだったらしい。

「お前、学校来るの早いんだな。真面目か」

「い、いや、今日は道に迷わずに来れたからなんだ……………普段はもう少し遅いよ」

「一度来た道ならすぐ覚えられるだろ」

「それが私、極度の方向音痴で……………」

「方向音痴？そんな人間が実在するのか？」

「う、うん……………実は昨日も、駅までの道で迷子になって、ああなったの……………」

こいつは天然か、はたまたアホなのか。

女とは、わからないものだ。

「なら、携帯でナビゲーションアプリを入れたらいいだろう？」

「何度か試したんだけど……………何もしてなくても、携帯内の私の位置が勝手に動いて迷子になるんだ……………」

「それはもう末期だろ」

ペットは飼い主によく似ると言うが、こいつの場合、機械にもその影響を及ぼすようだ。

やはりこいつは、人間の中でも特に異質な存在らしい。

束ねられた青い髪は触覚かなにかで、怪電波でも発しているんだろう。それ以外、迷子になる理由がオレにはわからない。

しばらく2人で話していると、続々とクラスメイトたちが登校してきた。松原と同様に、素直に驚く奴もいれば特に気にしない奴も見受けられた。

しかし、どうやらクラスメイトたちはオレと松原の仲がいいと勘違いしてしまったようだ。

嫌われ者のオレはともかく、小動物のような松原はクラスでは、どう思っているのだろうか？

オレみたいな不良とでも仲良くできる、寛大な心の持ち主だと周知されているか、た

だの変人だと思われているのか……………。

まあ、オレは断然後者だと考えるだろう。

どんな物好きでも、こんな不良と仲良くしようだなんて普通思わない。むしろ避ける対象になる。関わってもろくなことにならないからな。

そうしてオレから人は離れていく。話したとしても、一度きりの出来事に過ぎない。

だからこそ、松原とこうして再び言葉を交わすのに違和感を覚える。

松原の考えてる事が、オレには全くわからない。

ニコニコと浮かべる笑みは繕ったものか否か。もう少し、関係を深めてから確かめるのも悪くないな。

殆どのクラスメイトが登校し終えた頃、教室に異質なオーラを纏った人間が入ってきた。

長く艶やかな金髪をなびかせ、颯爽と入室したそのクラスメイトは、皆に「おはよう」と一言発し、教室に笑顔を撒き散らす。

友人関係に恵まれなかった高1の時から、学校で唯一オレに絡み、執拗に話しかけようとするこの女は、オレにとつての天敵となる存在だ。

名は白鷺 千聖。松原以外で唯一、顔と名前が一致する唯一の女だ。

「あらっ、月島くん、おはよう。今日は遅刻をせず登校したのね」

「……………おう」

「……………ねえ月島くん。おはようと返しなさいって、お母様から教わらなかつたの?」

「るっせえよ。お前はオレのなんだ?」

「ふふふっ、最近になってようやく返事をしてくれるようになったのね。感心だわ。最初はひたすらに無視を続けていたのに」

「……………あんなにしつこく絡まれたら反応しざるを得ないだろ。とにかくうぜえから、とつとつとオレの視界から消えてくれ。今は、松原と話をしてんだよ」

さつきまでワイワイと賑やかだったクラスに不穏な空気が漂う。主に、オレとこの女の周りが。

隣に座る松原も、オドオドと交互を見つめて、これから起きるであろう争いに不安の表情を見せる。

「そう、それはお邪魔して悪かつたわね。でも、珍しい光景を目の当たりにしたわ。あ

の女の子嫌いの月島くんが、私以外のクラスの女の子と話をしてるなんて」

「……………あんまり調子に乗るんじゃないやねえぞ。それ以上無駄口を叩くようなら、女優であろうと傷ひとつじゃ済まさねえぞ」

「あら、私に脅迫？別に構わないわよ。あなた如きに恐怖心なんて一切抱かない。あなたと話すのも、ただだからかうのが面白いだけだからなのよ？」

「……………もう我慢ならねえ——」

「——ぶっ潰す!!!」

机から身を乗り出し、拳を振り上げたその瞬間、ホームルームをの始まりを知らせるチャイムが鳴り響く。

それと同時に担任が教室に入り、何があったか問いただしてきた。

オレは何を言っても信じてもらえないだろうから、黙秘を続けると、目の前にいる女はたつた一言「なんでもありません」と答え、この争いは終戦を迎えた。

そして去り際に、クスリと笑いながら「残念だったわね」と告げられ、奴は席につく。
ああ、ダメだ—— やっぱ、こいつとは仲良くなれそうにないわ。



せつかく早く登校したのに、授業を真面目に受ける気が完全に失せ、意気消沈として
いる。

一時限目は委員会決めで、昨日の学園長の話によると『堂々としてたらしい』とのこ
とだったから、その言葉に従い堂々と寝る態勢になる。

オレが風紀委員になる事が決まったと担任から言われた時、クラス中が驚きの声を上
げたがオレは変わらず夢の中へ入ろうとする。

その後の授業も、オレは机に突つ伏したまま微動だにしない。開いたノートと教科書
は、もはや飾りだ。

教科担当の先生も、呆れ果てオレを夢から覚まさせようともしなかった。

そうして、あつという間に今日の学校が終わりすぐ帰ろうとしたが、昨日に続き担任
に呼び止められ、学園長室に行くよう指示される。

恐らく要件は、風紀委員長との対面だろうな。願わくば男であってほしい。

もし、風紀委員長が女なら最悪だ。

ただでさえ、女とはいいい思いが無いのにさつきあいつとあんな事があったから、会
う前なのに憂鬱な気分が襲われる。

少々荒っぽく学園長室の扉を開けるとそこには、こちらを振り向く2人の姿があった。

1人は学園長。もう1人は、おそらく昨日の話に出た風紀委員長だろうか。

見るまでもなく、制服からして、こいつは女だ。なんだか、期待して損した。

自分だけに聞こえるように舌打ちし、嫌そうな顔を見せると、風紀委員長もオレの顔を見るなり、ムツとした表情を見せ返してきた。

なんだ、オレの喧嘩をかう気か、この女？

「おお、月島くんか、よく来てくれたね。まあ、立ち話もなんだからそこに座りなさい」

入り口で立ち止まるオレに学園長は、昨日と同じソファに座るよう催促する。

適当に返事を返し、そこに腰かけると、学園長と女はオレの対面側に腰を掛ける。

「早速だが、紹介させてもらおうよ。彼女は氷川 紗夜。この学校の風紀委員長を担ってくれている子だ」

「ご紹介に預かりました。2年B組、風紀委員長の氷川 紗夜です。あなたの事情は、学園長から話は聞かせて頂きました。不束者ですが、よろしく願います」

淡々と話すこいつの口調からは、どこか生真面目そうな人間性だと察知した。

差し出された右手は、握手を求めているんだろうが、オレはそれに応じず挑発するよ
うに笑みを浮かべる。

それに対しても、こいつは不満そうな顔をあからさまに見せ、手を引つ込めた。

こいつの名前は、確か――。

「えっと、氷川……………き〇し?」

「それは演歌歌手です。しかも男です」

「確か、紅白歌合戦で龍に乗って歌ってた……………」

「うん、それは完全に氷川 き〇しだね」

「あの……………本当に彼で大丈夫なんでしょう? さつきの反応といい、私とコミュニ
ケーションを取ろうとする気が、全く感じられません」

オレの態度に、風紀委員長がとうとう怒りを露わにしました。

なるほど、不真面目な人間に対しては、許すことのできない程の真面目な人間なんだ
な。所詮は女、つまらねえやつだ。

学園長は、風紀委員長を宥めるように話す。

「君が心配しているほど、彼は悪い人間ではないよ。まあこんな見た目ではあるがね」
「こんな見た目だからこそ、信用ができませんのですが……………」

「……………おい、こんな見た目とはどういう意味だ？ 学園長だろうが風紀委員長だろうが、あまり調子に乗っていると、吹っ飛ばすぞ」

「はははっ、冗談だよ。そんなに怒っていると、氷川くんの良い印象をもってくれないぞ？」

「もうすでに良くはないのですが……………」

「チツ……………」

学園長のわざとらしい笑いが、更にオレをイライラさせる。

今日は、教室でのあいつの事といい、本当に災難だ。ああ、早く帰らせてえ。

「それで、今日は何のためにオレを呼んだんだ？ まさか、風紀委員長の声を聞くためだけにこの場を設けたわけじゃないよな？」

「もちろん、そんな事のためにキミを呼んだわけじゃないよ」

「なら、早く要件を言ってくれ。今日は災難続きで、気分が良くない」

「そうか。なら、始めるとしよう。氷川くんには説明したが、今から2人で校内の見回りをしてもらう。それが、今日のミツシヨんだ」

「ミツシヨンねえ……………正直、気乗りしねえな」

「それは私も同感です。どうしてあなたなんかと……………」

「これも委員長としての役目だよ、氷川くん。何かあつたら、すぐに知らせてくれ」

「わかりました……………それでは、月島さん。不本意ですが、行きましょう」

「それはこつちのセリフだ。ポケット」

オレの、風紀委員初仕事が始まった。



学園長室を出ると、まずは校庭の見回りから始まった。

しかし、帰宅途中やら、部活動に行く途中とかで特に異常はない。

続く校舎内も、体育館も、屋上も、何一つ風紀委員としての仕事が見つかからない。

流石は元お嬢様校。問題の一つも起きる気配がない。すれ違う生徒達は皆、生き生き

としていて、オレみたいにフラフラした奴は誰一人としていない。

「今日は特に問題なさそうですね」

「……………今日は、と言うより、今日も、と言ったらどうだ？」

「いえ、風紀を乱す生徒は稀にいますよ。しかし、それも大した事ではありません。ここは真面目な生徒が多くて助かります」

「お前は教師か」

「ええ、いずれなれたらいいですね」

「本気かよ」

「もちろん、本気です。だからこそ今は信頼を得て、実績を積まなければいけません」
「つまらねえ生き方だな」

オレがそう言うと、奴はムツと表情を強張らせる。
どうやら、オレの言葉が気に入らなかつたようだ。

「あなたこそ、自分の人生がつまらないと感じたことはないんですか？」
「ないな。自由奔放こそが、オレの心情だからな」

「学園長から聞いてはいましたが、あなたは本当にこの学校に相応しくありませんね」
「オレは、この学校が大嫌いだ。来るはずもなかったのに、オレの人生は、生まれた時から災難に見舞われ続けっぱなしだ」

「……………お互い、苦勞しますね」

「あつ？お前の苦勞なんて、たかが知れてるだろ？親の機嫌を損ねないように、良い娘で居続けられればいいんだろうからな」

「あなた、何を……………」

言葉の意味が理解できず困惑する奴の顔にグツと近づき、さらに問い詰める。

「お前のその性格も、親に気に入られるためにわざとそうしているんじゃないのか？オレに、本当のお前を曝け出してしろよ」

「……………やめなさい」

「そんないい子ぶってないで、さつさと本性見せやがれ。それとも何か？生真面目なお前と比べられる対象が、身内に——」

「やめろと言っているでしょう!!!」

誰もいない廊下に、怒鳴り声が鳴り響く。

耳を覆うには、あまりにも唐突で、奴からは考えられないほどの声量がオレの耳とキーンと痛めつける。

「テメエ、一体何しやが——」

「あなたに何がわかるって言うのよ!? あなたなんか………!?」

オレの言葉を遮り、両手で胸ぐらを掴む奴の目からは涙がこぼれ落ちた。

女の涙には興味ないが、一つだけ分かったことがある。

「……………お前、真面目すぎてつまらない奴だと思っていたが、訂正するぜ。ちよつとは面白いところ、あるじゃねえか」

「あなたなんかは何と思われたって構わない! お願いだから、これ以上私の事情には踏み込んでこないで!」

奴は手を離し、泣きながら走り去っていった。

それにしても、結構力あったな。ああいうことは、され慣れてるがなかなか息苦し

かった。

踏み込んでこないで、か……………。

「踏み込んでくれって言っているようなもんだよな」

自分の中で結論づけ、あいつの話を聞きに再度学園長室に向かう。

第3輪 凜々しくも脆い花

私には、双子の妹がいる。

顔は瓜二つで、小さい時はよく間違えられそれに戸惑う人を見てケラケラと笑うのが楽しくて仕方なかったのをよく覚えている。

しかし私たちは早々に、色々な面で差が生まれはじめた——。

両足で立ち上がったことも、言葉を発するようになったことも、文字を書けるようになったことも、あらゆることの ”初めて” は全て妹がやってのける。

天才、と言つて片付けるのは好きじゃないけれど、あの子はその言葉でしか言い表せない逸材なのは間違い無い。

私は、そんな妹に心の底から嫉妬していた。

いくら努力しても、あの子は何でも簡単にこなしてしまう。『姉という存在は、妹の手本となるべき存在だ』と父からよく言われていたから、尚更私は許せなかった。

不甲斐ない自分の才能が……………。

妹は私と仲良しだと本気で思っているらしく、その無邪気さが更に私を苛立たせる。両親の前では良い姉妹であり続けたけど、私にも限界の時が来た。

あれは、中学の時。

学年末のテストで必死に勉強したけれど、良い成績を残せなかった私に対し、妹は全ての教科でオール満点を叩き出した。

それだけならまだ許せた。しかしあの子はクラスで平然と、あることを口にする。

「テスト？こんな余裕だったよ。授業で先生の話聞いてたら頭に入るじゃん？勉強しても点が取れない人の気が知れないな〜」

偶然それを耳にした私は、目の前が真っ赤に染まり、体中の血液が煮え繰り返るような状態に陥る。

妹の何気ない言葉と、情けない自分自身に激しい怒りを覚えた瞬間だった。

それ以来、あの子とはろくに言葉を交わしていない。

一方的に私から関わるのを拒否している。

妹のことが憎くて、疎ましくて、忌まわしくて……様々な負の感情が入り混じり、余計に遠ざかる。

そんな中、出会ったのがギターだった。

テレビで演奏する女の人の姿を見て、強烈な憧れを抱き、妹には内緒でギターを購入した。

はじめはやはり上手いかず、『きつと妹なら……』という言葉も脳裏に浮かんだけれど、全て薙ぎ払い練習に没頭する。

次第に上達していき、いつしかステージの上に立つまでになった。

様々なバンドで演奏してきたけれど、私の練習量に応えてくれる人は誰もいない。

並大抵の練習しかこなさず、上手い人が現れた途端、その人を天才呼ばわりする。

限界まで努力を積み重ね、それでも敵わないと思った人にしか出せない台詞を、淡々と吐き出すメンバーたちを許すことができず、1人になる。

今まで、ずっとその繰り返しだ。

初めて夢中になるものを見つけても、共有してくれる人と出会うことは決してない。

今の私は、群れと逸れた動物と同じような存在だ。心に蓋をし、誰に認められることもなく、ただひたすらに練習を積み重ねていく。

そんな自分に酔いしれる私は、一体何のために生きているんでしょうか？

その答えを見出してくれるのはきつと——いや、他人に期待などしない。私は私である為に、誰にも縋らず孤独な道を歩んでいくと心で誓う。



奴と別れた後、オレはまず自販機に缶コーヒーを2つ買いに向かった。

一つはオレの分。もう一つはあのいけない学園長の分だ。

話を聞き出すからには、手ぶらで行くわけにはいかない。缶コーヒーと奴の事情、いわゆる、等価交換というやつだ。

とりあえず温かいのと冷たいのを両方購入しそれをポケットに忍ばせ、学園長室へと向かう。

道中、風紀委員長らしき人を見かけたが今、用があるのは学園長だ。構わずオレは歩き続ける。

「邪魔するぜ、学園長」

例の如くノックも無しに、部屋に入ると学園長はソファに腰掛けたまま、顎に手を置き何か考える素振りを見せる。

「どうやら、オレの入室に気付いていないようだ。」

「おい、学園長。聞こえているのか？」

対面に腰掛けると、ようやく学園長はオレの存在に気がつき、ニコリと笑みを浮かべる。

「ああ……………風紀委員の務め、ご苦労だったね」

「全くだ。本来こんな委員会必要ないと思うぐらい、問題なんて起きやしねえ。つまらなくて欠伸が止まらない」

「はははっ、まだまだこれからだよ」

「ところでアンタは、熱いのと冷たいの、どっちが好きだ？」

「随分と唐突だね。そうだな……………冷たい方が好きかな」

そう答える学園長に、オレのポケットから冷たい缶コーヒーを投げ渡す。

難なくそれをキャッチし、不思議そうにそれを見つめる。

「サービスだ。ありがたく頂戴しろよ？」

「これは驚きだ。では、頂くとするよ」

カシャつと缶コーヒーを開け、少し口に含む。オレも同様に、温かいコーヒーを飲む。

「言い忘れていたが、それを飲んだからにはオレの相談に乗ってくれよ？」

「なるほど、それが目的か。こんなことしなくても、話は聞くといいのに」

「育ちがいいものでな。アンタのよく知るおふくろのせいだ。それに、この学園のトップに話を聞いてもらんだ。手ぶらなんてありえない」

「本当に変わっているな、キミは。それで、私に話があるとはどういうことなのかね？」

「ああ、風紀委員長についてだ」

「やはり、氷川くんか……………。そういえばさつき、見回りの終了を報告すると共に、キミとは一緒に仕事をしたくないと言われたよ」

「どうやら、オレより一足先に学園長と話をしたらしい。あんなことを言われたら、そりゃあ一緒にいたくなくなるか。」

「あいつはどんな様子だった?」

「様子?別にいつもと変わらなかつたが?」

「そうか」

「そこは、何で聞かれたかを問うところではないのかね?」

「ちよいと面倒なことになってな。主に原因はオレなんだが……」

「氷川くんにも大まかな話は聞かせてもらったが、詳細はわからないんだ。良かったら、キミの言い分も聞かせてくれ」

「いいだろう。まずは——」

オレはこの数十分で起きたことを話した。

オレと奴の会話、行動、覚えてる限りの全てを詳細に伝える。

学園長の反応からすると、奴は同じことを言ったんだろう。

全てを話す頃には、窓から夕日が差し込む時間を迎えていた。

「なるほど……………氷川くんがそのようなことを……………」

「オレ独特の解釈も入ってるだろうから、奴からも事情徴収したらどうだ？」

「ああ、勿論そのつもりだ。次は、キミの番だね。氷川くんの何が知りたい？」

「あいつの全て、だ」

「……………わかった。少し待っていたまえ」

学園長はそういうと、ゆっくりと立ち上がり柵にしまつてある青いファイルを取り出しオレに寄越してきた。

中を開くと、この学園の生徒の顔写真が添えられた履歴書のようなものがファイリン
グされていた。

さらに進めると、そこには風紀委員長長のデータが見つかった。

「学園長、説明してくれ」

「これは入学前に学園に提出してもらうものだ。本来、生徒に見せるのは禁止されて
いるが、キミなら問題ない」

「オレが他人に全く興味がない、と言いたげだな」

「事実その通りだろう？」

「……………もうその事はどうでもいい。これであいつの過去を知れるんだな？」
「ああ、補足も兼ねて私からも話をさせてもらおうよ」

名前は氷川 紗夜。血液型はA B。

弓道部所属の風紀委員長。この辺の内容はカットでいいか。

家族構成は、母と父、そして……………妹？

「そう。彼女には双子の妹がいるんだよ」

（なるほどな、分かったぜ。それで、比較対象の話をした途端ブチ切れた訳か）

「その子はここからそう遠くない羽丘女子学園に通っている。昔から、近所では神童だと噂されていたようだ」

「神童ねえ……………。面白くない言われようだな」

「自分より優秀な妹に、憧れていたんだろう。氷川くんも努力を積み重ねてはいたものの、全く歯が立たなかったそうだ」

「憧れてるなら、どうしてあんなにキレル必要がある？抱えているのは、もつと複雑な感情だとオレは思うな」

「……………そうだね」

オレの発言に、学園長は言葉を詰まらせる。

「話を戻すが、アンタは、その妹についてどこまで知っている?」

「あくまで、氷川くんから聞いた話だが、『妹は自由奔放で明るくて、まるで自分とは正反対のような存在だ』と言っていた」

「2人の仲は?」

「全く良くないと聞いている」

恐らく、奴の生真面目な性格は嫌いな妹と差別化をする為にそうならざるをえなかったのだろう。

誰だって、気に入らない人間と同じになりたくないと思うものだ。

奴だと、尚更それに当てはまる。

オレはそれを分かって、あの時に挑発じみた行動を奴にとつたが案の定、奴はブチ切れ手をあげた。

奴の考えてることなんて、手に取るように分かる。

あいつ自身はとても単純。そんな自分を偽りつづけて、さぞや苦しんでるだろうな。

「奴のことは大体分かった。要するに、あいつは自滅してるってことだ」

「自滅？」

「どうでもいいことに悩まされ、勝手に苦しんでやがる。アンタもあいつがどこかおかしいと感じたことはないのか？」

「なぜキミにはそれが分かる？」

オレに問いかける学園長に、逆にオレから一つ疑問を投げかける。

「アンタ、殴り合いの喧嘩ってしたことあるか？」

「殴り合いの喧嘩……いや、ないな」

「なら、分からなくて当然だ」

「キミは何が言いたい？」

「喧嘩っていうのは、いわば駆け引き。ただ殴り合うだけじゃないんだぜ？相手の思考を読み取り、次何してくるかを考える。そういう奴が、不良として最も強い分類に値する人間だ」

「なるほど、幾千もの喧嘩を乗り越えたキミは、相手の思考を読み取る能力に長けてい

ると言いたいんだね?」

「その通り。オレは、学力としてはバカでも、人間としてはバカじゃねえ」

「……………やはり、キミのお母さんと似ているな。情熱的で、困った人を放っておけない、リーダーの素質がある」

「よせよ。オレはただの面倒くさがりだ。興味を持ったことにしか動く気はねえよ」

「それなら、私から頼みがある」

学園長はそう告げると、ツルツルのてっぺんをオレに向け、深々と頭を下げた。

「————氷川くんを救ってあげてくれ」

「……………いいだろう。オレに手をあげる女は、そうはいねえからな。救うといって、方法はどうする?」

「それはキミが判断してくれて構わない。やり方も、私からは何も言わないよ」

「どうなっても知らないからな」

「大丈夫。キミを信用しているからね」

「ぬかせ。……………今度ここに来る時は、風紀委員長を連れてくる」

「ああ、楽しみに待っているよ」

満面の笑みを浮かべる学園長に背を向け、右手を上げて返事をする。
さあ、風紀委員の仕事を再開だ。



「よお、数時間ぶりだな」

「……………何故あなたがここに……………？」

平然と現れたオレに、風紀委員長は嫌悪感をあらわにする。

履歴書通りなら、奴は弓道部の部員であるはずだと考えたオレは、真っ先に弓道場に向かった。

下校時刻まであと15分とないが、奴の性格上、最後まで居残って練習している可能性が高い。

ものの見事にその予想は的中したわけだ。

「ちよつとツラかせや」

「な、なんなんですか急に!？」

「このままでと、今日の事が気になって気持ちよく眠れそうにないからな」

「……………分かりました。着替えるので外で待っていてください。万が一、覗きでもしたら——」

「安心しろ。お前の裸になんて興味ねえよ」

オレは適当に返事をして、弓道場を後にする。5分もしたら奴も弓道場から出てきて、並んで校舎を出る。

どこか座れるところで落ち着いて話したかったが、奴が『寄り道なんてもつてのほかです』と頑なに断ってきたから、強引に連れて行くこともできなかつた。

とりあえず、奴は電車通いだから駅まで歩きながら話すことになった。

「単刀直入に言わせてもらおう。さっきは悪かつたな」

「だから、いきなり何なんですか!？」

オレの唐突の謝罪に、奴は困惑した表情を浮かべる。

人に、それも女に頭を下げるなんて初めての行為だ……………クソつ、屈辱だ。

「学園長から、お前の話を聞かせてもらった。妹のこともな」

「……………!!何故そのことを……………!?!」

「お前が今のお前になった原因。それは妹への嫉妬からだろ?間違っていたら、首を振るだけで構わん」

「……………」

下をむき、口を開かないことから察するにイエスということだ。

「お前はそいつが大嫌いなんだろ?率直に聞くが、自分より優秀で神童とまで呼ばれていた妹を、手にかけたいたと思っただことはないのか?」

「はっ!?!あなた……………何を言っ……………!?!」

「お前がバカみたいに真面目だから、しようにもできなかつたんだろ。なら、オレが代わりになつてやるよ」

「なっ……………!?!」

オレの考えている事がわからずに、奴は言葉を失う。

学園長からは、好きにしろと許可を得ている。ならば、オレはオレが最善だと思う手を尽くすだけだ。

「そ、そんなことさせる訳ないでしょう!？」

「そうだよな。お前の在籍する学園から犯罪者が出たら、将来の大学受験にも影響するだろうからな」

「そういう意味じゃなくて——」

「ああそうだ。お前にとって、オレはどうでもいい存在だろう。実の妹を失うのが怖いんだ」

「……………あなた、何が言いたいの?」

そう問いかけられたオレは一呼吸おき、こいつの胸ぐらを掴み怒るように叫ぶ。

「——少しは妹の気持ちも考えろって言ってるんだよ!!!」

オレの音量に思わず耳を押さえた。

すれ違う人は皆、オレたちのことを見ている。まあ、学生の戯れだと思われて終わり

だろう。

オレはそのまま、怒鳴るように言葉を続ける。

「お前が妹にどんな気持ちを抱いてるかは分かる。だが、その理由も知らずひたすらに無視をされ続ける妹はどう思う!? 神童だから平気だ、とでもいうつもりじゃないだろうな!」

「……………」

奴は再び黙り込む。

そして、これと同時に両の目から涙がポロポロとこぼれ落ちる。

「どんな出来事があっても、大事なんだろうが! その妹が!! なら、大切にしやがれってんだ!! このボケツ!!」

最後にとどめを刺し、強引に手を離す。

それから、奴の目から流れる涙は止まらない。

そんな時だった――。

「道の真ん中でピーピーうるせえんだよっ!!学生はとつと家へ帰やがれ!!」

突如現れたチンピラに絡まれる。

数は5人。オレたちを囲うように固まり、威圧してくる。

「帰るのは——お前らだ!!!」

話の腰を折られたことに腹が立ち、全員の顔面に拳を入れる。

全員が一発ノックアウト。所詮は小物。口程にもない。

「あなた……!!?暴力は……!!?」

「これが、学園長から頼まれたオレの風紀委員としての仕事だ。この頃、こんな連中が多くて手を焼いてるんだとき」

「が、学園長がそういうなら、私からいうことはありません。もし、あなたが風紀委員をやめると言い出したら——」

「この役は、お前を含む委員会で行うことになるだろうな」

「それは……………考えたくありませんね。認めたくありませんが、あなたを風紀委員の一員として迎えます」

「ああそうかよ。なら、まずは放課後にできなかったことをしようぜ」

「放課後にできなかったこと？」

「まずはどちらの手でもいい、オレの前に差し出せ」

「……………？」

意味もわからず奴は右手を出すと、オレはその手を握る。

奴は驚きつつも、どこか嬉しそうな表情を見せた。

「よろしくな、風紀委員長」

「その呼ばれ方は嫌です。氷川と、苗字で呼んでください」

「ああ。わかったよ、氷川」

こうして、オレの風紀委員初の仕事は幕を閉じた。

それと同時に、この学校で2人目の友人が誕生した。

第4輪 牙をむく荒くれの花

風紀委員の朝は早い。

朝の8時から校門に立ち、登校する生徒の服装や髪型、その他諸々のチェックをしなければならぬ。

生徒の模範となる風紀委員会は皆、異常はなく生徒会役員と共に朝の挨拶運動を開始する。

ただ一人、オレを除いて――。

「おはようございます、月島くん。時間ギリギリですよ」

「うるっせえなあ、間に合ったんだから別にいいじゃねえか。ふわあゝゝ、ねむっ……………」

大きなあくびをし、涙を袖で拭う。

氷川を筆頭とした真面目生徒の集団に属するオレは、どこか異質な存在として扱われる。

見た目からして、明らかにおかしいとは自覚してるから、どう思われようが知った事か。

「貴方以外の風紀委員は既に活動に移っています。服装を正してから、合流してください」

「わーったよ……………」

気怠げに返事を返し、緩んだネクタイを締め、シャツをズボンに入れる。

教室に戻ったら、元に戻すか……………」

そういえば、ずっと気になっていた事がある。

この学園の生徒はどこか、髪色が派手な傾向にあるように思う。

黒は当然として、青、橙、黄、白。もう何でもありだな。

恐らく、こいつらはハーフの類なんだろう。

もしも地毛だったら、とある高校生の超能力者がマインドコントロールで操作したに違いない。

「おい氷川。お前のその髪、地毛なのか？」

「ええ、もちろん。それが何か？」

「いや何でもない。気にするな」

「気にするのは私の方です。貴方のその髪、どう見ても染めているでしょう。校則で禁止されているはずですよ？」

「あーはいはい、その内直しまーす」

「ちよつと！ちゃんと話を——」

「じゃつ、今日は顔出したから先あがるぜ。おつかれさ〜ん」

「ま、待ちなさい！月島くん!!」

呼び止める氷川を振り切り、教室までの階段を逃げるように駆け上がる。

日々の鍛錬……………という名の喧嘩のおかげで、教室までの道のりは決して苦ではなく、息切れひとつ起こさず到着する。

ああ、体を動かすというのは、なんと素晴らしいことか。

そうひしひしと感じるオレの背後を見ると、驚きの表情を浮かべる奴の姿があった。

「あらつ、おはよう、月島くん。最近遅刻しないのね。感心だわ」

「……………最高の朝が台無しだ」

「ふふふつ、それは私のセリフよ？朝から貴方みたいな異物と遭遇するなんて、こつちの身にもなつて欲しいわね」

「なら関わつてくるんじゃないわね。いい加減にしねえと、風紀委員の権限でお前を血祭りにあげるぞ」

「何度も言うけれど、私に脅迫しても無駄よ。それに、もしそのようなことをするならば、私の権限で貴方の存在を無かつたことにするのも可能よ？」

「……………おもしれえ。地獄で後悔しろよ！くたばりやが——！！」

「ふ、二人とも、喧嘩はダメだよーっ！！」

右腕を振り上げた瞬間、オレとこいつの間に入り仲裁を図つたのは誰であろう、松原だった。

目をギュツと瞑り、ビクビクと震えるその姿はまるで生まれたての小鹿のようだ。

「おいつ!!オレは今こいつと——」

「それでも手を出しちゃダメツ！千聖ちゃんも、あんまり人をからかつたらダメだよ！」

「ごめんなさい、花音。貴方まで巻き込む気はなかつただけど……………」

「私は大丈夫だよ。2人が仲直りしてくれるならね」

松原は安心した表情を浮かべる。

すると奴は、冷めたパープル・アイでオレをチラツと見た後、深いため息をついた。やっぱこいつ、とことんオレをおちよくつてやがる。こう言うタイプは、力の差を見せつけるのが一番だ。

全身から殺意のオーラを発し、威嚇する。

第二ラウンドを始めようとしても、松原はオレの前から退こうとしない。

無理やりにも退かすことはできるが、オレの友達第一号を傷つけるわけにはいかな
い。

しかし、松原は何故こんな女を庇うのか？

奴を名前呼びする辺り、仲がいいのは間違いないはずだ。

それを差し置いても、こんなお高く止まった奴に友達がいるなんて信じ難い。

実際、奴は1人であることが多く、自分から誰かと関わろうとはしない。

こいつは、孤高の女王様。悪く言えば、孤独。

奴の表現方法なんて、いくらでも思いつく。それほど憎い相手なのだ。

「……………わーつたよ。殴らねえから早く席につけよ。担任に見られたら面倒だろ？」

「う、うん！落ち着いたならよかったかな」

「ふふふつ、命拾いしたわね」

「こつちのセリフだ、ボケツ。いつか必ず、お前の顔面に右ストレートをぶちかます」
「そのいつかが、くるといいわね♪」

不敵な笑みを浮かべ、奴は自分の席についた。オレも、松原に宥められる形で無理矢理席につく。

「おいつ、なんでお前はあいつのことを庇うんだ。友達だからか？」

「そ、それは……………」

口を開かない松原にも苛立ちを感じる。

オレは奴に何かをしたわけでもない。むしろ、関わらないように避けているはずなんだが、毎度毎度オレの前に現れやがる。

例えオレが女だったとしても、こんな奴とは仲良くしようとは思わない。

他のクラスメイトも、誰も奴に近づこうともしない。高嶺の女王。人を見下す人間には誰も心を開かない。

その点において、松原は謎の多い女だ。

オレのような不良生徒も、奴のような歪んだ性格の持ち主でも、平等に接しようとする。

そのせいか、オレも奴も松原のことを嫌いになれない。決して目立つような人柄じゃないはずなのに……不思議な奴だ。

「おい松原」

「ど、どうしたの？」

「昼休みに屋上で待っている。奴の話を聞かせてもらおうぞ」

「う、うんっ。わかった」

そう松原に告げ、オレは机に突っ伏し遅れながらの二度寝を堪能することにした。

昼休みまで後4時間。それまで決して起こすんじゃないぞ。

それでは、また後で会おう。

おやすみ——。



本日四度目の授業を終えるチャイムが鳴り、オレたちは昼休みを迎える。

この時間の利用方法は千差万別だ。

学食・教室で昼食を取る生徒、部活の昼練に参加する部員、委員会等で先生にこき使われるパシリ。

オレはそれらのどれにも属さず、学校で一番高い場所で横になり、ただブーツと雲を眺めている。

ここは、オレのサボリスポット。危険だからと言って、近づく奴はいないから先生が探しに来ても見つかるとは決してない。

そして今日、この場所に高校生活初の友人を招き入れようとしている。
オレのおもてなしの心を全開に、盛大に迎え入れるでしょう。

「月島くーん！松原ですーん！」

早速、オレを呼ぶ声が聞こえる。

長い水色の髪をふわりとなびかせ、おどおどとオレを探す様子は、まるで群れから逸れた小動物のように見えた。

「上だ、松原！」

少し距離のある松原に対し、声を張って自分の居場所を知らせる。案の定奴は、オレの姿を見るなり、降りるように諭してきた。

「ふえっ!? そ、そんなところにいたら危ないよ!？」

「安心しろ、落ちはしねえよ! そこに梯子があるから登ってきてくれ!」

「う、うんっ………わかった! すぐ行くから待っててね!」

松原はそう言うと、手に持っていた水色の小さい手提げ袋を手首に引つ掛け、屋上の入り口付近にある長い梯子をよじ登る。

女だから登るのに一苦労するかと思いきや、こいつは息切れひとつ起こすこともなければ、平然な顔をしてオレの元へたどり着いた。

そして、寝転がるオレの横に立ち、街を一望できるここの景色に感動の声をあげる。

「すごく綺麗だね！ずっとずっと、遠くまで見えるよ！」

「今日は晴れているからだな。お前はついてる。夜は、これと比べ物にならないぐらい綺麗だぞ」

「えっ!?夜の学校に忍び込んだの!?!」

「ちげえよ。去年の文化祭の準備で、大半のクラスメイトが徹夜してたのを利用しただけだ」

「要するに、サボってたんだね……………」

「まあこの話はどうでもいい。そんなことより、松原、あの梯子を登るのは大変じゃなかったか?」

「えっ、全然なんともなかったよ……………」

純粋な目で不思議そうにこつちを見つめる松原の反応を察するに、自覚していないらしい。

見た目からは全く想像できない腕の筋肉、ブレない体幹の強さ、そしてスタミナ。

こいつは、現在進行形の運動部員か元部員。もしくは校外のクラブチームに所属している可能性もある。

松原の謎は、深まるばかりだ……………。

「何かスポーツでもやってるのか？この梯子、女なら登るのは困難だと思うんだが」
「スポーツはやってないよ。部活も茶道部だから……………。あ、でもドラムはよく叩いてるよ。あまり上手くないけど……………」

「なるほど、ドラムか……………はっ？ドラム!？」

松原からの衝撃の発言に面をくらう。

この華奢な体でままなるのか？全く想像がつかないどころか、真実かどうか疑ってしまふ。

某有名ドラマーの姿を連想しても、松原からはあの熱のこもった音は一切聞こえてこない。オレの妄想の中ではなんか、バタバタしてやがる……………。

「意外、だったかな……………？」

「意外すぎるわ!?!だってドラムだぞ!! YOSHII——とか山田〇矢みたいなの、ロツクな奴らが蔓延る中で松原が……………。意外性からしたら、話題沸騰間違いなしだな」

「あはは……………。今はまだバンドのメンバーを集めてる途中だけど、いつか月島くん

に聞いてほしいなあ」

「その時が来たら、な。……………腹減ったし、飯でも食うか」

「うんっ！」

オレは側に置いてあつたビニール袋からコロツケパンを取り出し、一口かじる。売店で適当に選んだものだが、結構美味いな。

前に選んだ激辛カレーパンは、まるでカレーに喧嘩を売られているかのような酷い味だった。

しかし、あのカレーパンはこの学園でも人気に分類されるメニューらしく、リピーターも多いと聞く。

あれを食べ続けたら舌がバカになるだろうに。お嬢様学校が聞いて呆れる。

オレの隣に座った松原は、手首に引っ掛けていた青の小さな手提げ袋から、これまた小さな二段の弁当箱を取り出し食べ始めた。

中も、女らしさ満載のメニューが詰め込まれていた。

「お前、普段は学食じゃないのか？」

「食堂には一度だけ行ったことがあるけど、人が多くてもう行ってないかな……………」

「確かに、あれじゃあ落ち着いて飯も食えないだろうな」

「月島くんはいつもここで食べてるの?」

「ああ、オレは嫌われの身だからな。一人で、この特等席で楽しく食ってるよ。そう言うお前も、いつもは奴と一緒になんだろう?」

「奴? えつと、千聖ちゃんのことだよね……………? いつもじゃないけど、一緒に食べる事が多いかなあ」

「やっぱりそうか」

「う、うん。でも最近、千聖ちゃんはすごく忙しいみたいなんだ……………。今度、アイドルバンドも兼任することになったらしくて……………」

「女優、そしてアイドルか。芸能人ともなると、それだけの仕事をこなさないとイケないんだな。全く、ご苦労なことだ」

「オレはここで言葉を区切り、残ったパンを全て腹に収める。

再度ビニール袋から、自販機で購入した紙パックのヨーグルト飲料を取り出し、一気に飲み干す。

これでオレの昼飯は終わり。身体も頭も大して動かしてないから、腹はほとんど空かない。

おふくろから渡される、1日の昼食費用500円を有効活用するには、これが一番ベストだ。

釣り銭は返さず、将来買うバイクのためにオレの手に置いておく。

これを一年続けて、たまった金はざっと5万円。道のりはまだまだ遠い……………。

「ちなみになんだが、二人はどんな話をするんだ？」

「え、えつと……………千聖ちゃんのお仕事の話とか、美味しいお茶の話とか、がつこうのこととかかな？」

「その学校の話についてだが、奴はオレのことについて、何か話していなかったか？」

オレが松原を呼んだ1番の理由は、これを聞き出すためだ。

クラスで一番仲のいいこいつになら、奴は必ずオレへの愚痴を零すと確信していた。

奴がオレに高圧的な態度を取る理由をどうしても知りたい。気に入らないところがあれば治すし、顔面が嫌なら整形だってやってやる。

とにかく、あの女王様と今後一切関わることをない学校生活を送りたいんだ。

松原はオレの質問に対して、目を瞑り深く考えるそぶりを見せる。

「月島くんについて……………?」

「何かあるはずだろ? 逆に、松原から奴に聞き出したことでもいい。なんでも教えてくれ」

松原は更に眉間にシワを寄せ、腕を組む。

過去を遡り、遡った結果思い出した記憶は——。

「そういえば、高校一年生のとき……………。千聖ちゃんに聞いたことがあったんだ。『なんであの怖い人を挑発するような言い方をするの?』って……………」

「それで、奴はなんと答えた?」

「たった一言だけ、『彼の無鉄砲さがとてつもなく気に入らない』とだけ言ってくれたんだ……………。その時の千聖ちゃんの顔、今まで見たことのないぐらい怖かったなあ……………」

松原の “あの怖い人” と言う表現は置いといて、奴がオレを嫌う一端が見えた。

無鉄砲——つまり、後先考えずに本能の赴くままに動くオレの身勝手さを疎ましく思っているんだろう。

理解はできる。

芸能界の住人として、将来のことを常に考え今を生きるリアリストにとって、オレの考えが理解できない上に認めたくないはずだ。

レールの敷かれた人生なんて何が楽しい？

先のことばかり考え、無駄に苦しむのはどこの誰だ？

奴の考えが全て間違っているとは言わない。だが、オレの考えを否定される筋合いはない。

この世は自由だ。

己の人生を満喫し、楽しんだ者こそが真に正しいと言える。
オレはそんな人間でありたいと心の底から願う。

「……………奴のことが少し分かった気がする。恩にきるぜ、松原」

「う、うんっ！月島くんの役に立てたなら私も嬉しいよ！」

松原が満面の浮かべ返事をしたと同時に、昼休み終了まであと5分を告げるチャイムが鳴り響く。

オレからしたら、このままサボるのも悪くないが、休みすぎておふくろにバレるのも面倒くさい。

次の授業は、確か現代社会。

はあ、仕方ない、教室に戻るか……………」

「それじゃあ行くぞ、まつ——」

「あ、あのっ！もしよかったら……………その……………」

オレの言葉を遮り、松原はいつも以上に大きな声を出し、モジモジと焦った態度を取る。

「……………何だよ。早くいかないと遅刻するぞ」

「わ、わたしと……………連絡先、交換……………してくれませんか……………？」

松原の言っていることと考えることがわからず、首を傾げる。

それを察したのか、言葉が続けた。

「その……………携帯ならいつでもはなせるし、月島くんが良ければ……………わたしの相談にもものつて欲しい……………です」

「……………よく分からんが、オレは構わんぞ」

「ほ、ホントにつ!? ありがとう!!」

「ただし、風紀委員長の氷川にだけは黙っていてくれ。『学校で携帯電話を触るなんて許せません』なんて言われかねないからな」

「あはは……………紗夜ちゃんの尻に敷かれてるんだね」

「怒らせたなら面倒なだけだ。ほらよ、QRコードだ」

「……………うんつ、読み取ったよ! 今からメッセージ送るから、追加しておいてね!」

松原は、オレから携帯に目線を移し文字を打つ。

数十秒後に着信が鳴り、携帯を開しメッセージの内容を見る。

『月島くんと二人きりで話せて楽しかったよ! また誘ってくれたら嬉しいな♪』

送られたメッセージには、感謝を告げる言葉が綴られ、ニコリと笑うスタンプが添えられていた。

『……………オレも楽しかったぞ。またそのうちにな』

そう返信を返し、オレたちは大急ぎで教室へと戻る。

この時オレの携帯に初めて、同級生の女の連絡先が追加された。

第5輪 枯れかけの花

ある日の朝、事件は起きた。

いつも通りの時間に起床しおふくろが作り置きした朝食を食っていたそのとき、家のチャイムが鳴り響いた。

朝っぱらから一体何の用だ。

突然の訪問に苛立ちを覚える。

おふくろは鍵を持っているから、チャイムを鳴らすことなんてまずありえない。ではいったい誰が？

予想がつくのは、閲覧板の受け渡しに某テレビ局の集金。

もし後者ならとつちめてやる。

「いったい何の用………だ？」

少し荒めに扉を開けると、そこには予想だにしない人物が姿を現した。

オレと同じ高校の制服を見にまとう女子高生。

生真面目な風紀委員長こと、氷川 紗夜が何食わぬ顔で頭を下げる。

「おはようございます。月島くん。あなたを迎えにきました」

淡々と話す氷川の真意がわからない。

だがまず、どうやってオレの家の場所を突き止めた。

オレは一度だつて家に招いたことはないし、教えたこともない。

ストーキングされてたか？

いや、そんな姑息な手段を奴が取るとは思えない。

だとしたらもう、考えられるのは一つ。

あの学園長「ハゲ」が耳打ちしたに違いない。

今日あつたら問い詰めてやる。

オレは後頭部を掻き、大きなため息をつきながら言う。

「……………何しにきやがったんだ」

「さつき言った言葉の通りです。貴方がサボらないように私から出向かせてもらいました。その様子だと……………寝起きでしょうか？」

「残念だったな。朝食食つてる途中だ。あーっ、そうだな、8時には校門に着くようにするから学校まで待——」

「信用できません」

氷川は表情を変えず即答する。

「どうやら、オレのことを一切信用していないらしい。

まあ日頃の行いが悪いから認めるしかないな。」

「まったく、仕方ねえな……。なら玄関で待つてろ。それなら文句は——」

「やはり信用できません」

またしても即答。

オレとこいつの間に信頼関係など無いという口ぶりだ。

「おいおい氷川さんよお。オレがここからどうやって逃げると言うんだ？ お前が玄関を陣取つてる時点でもう詰んでるんだぜ？ 抗う気すらおきねえよ」

間近まで詰め寄り、挑発するように問いかける。

それでも奴は凜とした態度を崩さない。

「そう言っただけあなたにはベランダから飛び降りる気なのでしょう?」

「バカかっ!?ここはアパートの5階!飛び降りたら骨折だけですまねえだろうが!」

「貴方の身体能力なら可能かと」

氷川の考えた策に驚きを隠せない。

オレはスパ○ダーマンではない。普通に怪我をする一般人だ。

確かに下の階のベランダを伝ったら降りれなくも無いが、そんな無理をするほど頭は悪くない。

逃げるなら堂々と逃げるわ。

「……………わかりました」

氷川は不服そうな顔を見せる。

ようやく観念したか……………。

「なら、リビングで待たせてもらいます。もし逃げるようなそぶりを見せたら強硬手

段に出ます」

こいつ何も分かつちやいねえ！

氷川は強引に家へ入り靴を揃えてリビングへ向かう。

いくら信頼してないとは言え、ここまでの管理体制を敷かれる必要はないはずだ。

大前提として留年しなければそれでいい。

法を犯さない限り、学校生活および風紀委員活動で何をしようがオレの勝手だと思ってるんだが……。

オレは氷川の後を追い、テーブルに残された朝食の残りを食べ始める。

氷川はソファに腰掛け自分のカバンから一冊の本を取り出し読み始めた。

朝食を食べてる最中も、皿を片付けている時も、歯を磨いている時も、制服に着替えている最中もオレたち二人の間に会話は無い。

聞こえるのはテレビから流れるニュースだけ。

締め切った部屋の中に異様な空気が漂う。

「待たせたな。いくぞ」

オレが口を開き、数十分の沈黙を破る。

「わかりました。それでは——」

氷川はオレの背後に立ち、突如何かで両手首を拘束された。

それに気を取られていると、今度は首輪をつけられ締め付けによる強い圧迫感に襲われる。

振り返ると無の表情を浮かべる氷川の姿があつた。

「……………イテエじゃねえか。なんのマネだ……………う？」

いつも以上に低い声を出し、怒りを露わに問いただす。

こめかみに浮き出た血管がその度合いを物語る。

それに対し氷川は平然とした態度を保ち淡々と答える。

「あなたを逃さないために拘束させてもらったただけですが？」

「オレは見せ物じゃねえぞ……………おお？」

「もちろん分つていますよ。なら、私の言うことに従っていただけますね？」

どれだけ詰め寄ってもこいつの顔色が変わる気配がない。

認めたくはないが、今のオレにはどうすることもできないようだ。

脅しを諦め渋々こいつの言いなりになる覚悟を決める。

「……………おいつ、せめて首輪だけは——」

「ダメです」

「即答かよ」

「逃げられては元も子もありませんから」

覚悟を決めると同時にオレは心の中で決意した。

オレをペットにしたがる主犯の全身を縛り上げて、火で炙り、ヒイヒイ言わせてやろうと。



家を出てから学校に着くまでの短時間で、すれ違う人皆に痛々しい視線を送られる。首輪に手錠をかけられる男子高校生。

首輪に繋がれたロープを握りしめる女子高生。

側から見ればアダルトビデオの撮影とかだと、変な妄想をされているのだろうか。言っておくがオレはMではない。

そしてこういうアダルトテイなプレイも一切興味がない。

至って普通。ノーマルパーソンだ。

背後にいる氷川は――。

「言っておきますが、私も健全な高校生です」

「何も言っておえだろ」

「いえ、何かあなたが良からぬことを考えていそうな顔だったので」

こいつはエスパーか、はたまた人の心を読む第六感の持ち主か……………。

オレの考えなどお見通しのようにだ。

「お前はそんな格好をした男を連れ出して、恥ずかしくないのか？」

「これも委員会の為です。この程度、どうってことありません」

「オレは明日から近所さんに何を言われるか、不安で仕方ねえよ」

「自業自得です」

「これで今日一日過ぐすとか、オレの学校生活は終わりを迎えるな」

「安心してください。朝の挨拶運動が終わり次第外します。それまでは決して、逃げ

ることのないようにお願いしますね」

「へーへーわかりましたよ、調教師様（ごしゅじんさま）」

「その言い方やめてくださいー！」

平然を装っていた氷川がついに恥じらいの声を上げた。

その様子に生徒たちは驚き視線を向ける。

してやったり、と少し頬が緩む。

だが氷川はそのことにもとせせず、コホンと咳き込み冷静を取り戻す。

オレたち以外の風紀委員も続々と集まり、活動が始まる。

その異様な格好に登校してきた生徒はもちろん、風紀委員、朝練の連中、男女問わず視線が集まる。

指を差し小声で何かを話したり、フツと小声で笑つう奴もいれば、ただただ引いてる

のもいた。

どう考えても今のオレは風紀委員の恥さらしだろうな。

一切動じることなく、オレの横に立ち風紀活動に勤しむこいつのメンタルは鋼かそれとも冷え切った氷か……………。

ホント恐ろしいやつ。

この無様な姿を知り合いの生徒には見られたくないものだが――。

「あつ、月島くん！おはよ……………？」

はい、フラグ回収。

小さい体から発せられた松原の声は、だんだんと遠くなる。

そして、オレの姿を見るなり青ざめた表情を浮かべる。

「よつ、松原」

オレは何事もなかったかのように、平然と挨拶を交わす。

「な、なんでそんな格好してるの!？」

「それがだな——」

「松原さん、おはようございます」

松原の疑問に答えようとしたその時、氷川が割って入ってきた。

「あつ、紗夜ちゃん！何が一体どうなってるの!？」

「オレが朝飯食ってたらこいつが乗り込んできてな」

氷川に向けられた疑問を、今度はオレが割って入り簡潔に説明する。

「人聞きの悪いことを言わないでください」

「それでなんやかんやあつてオレは今、こいつの下僕になつてるといふわけだ」

「だから！そもそもあなたが悪いんですよ！」

とうとう氷川は怒りを露わにし、右手に握っている首輪のロープをぐつと引つ張る。

「…………ツテエな!! テメエいい加減にしろよ!!」

「なら私が悪者みたいな言い方をしないでください!」

「け、喧嘩はダメだよ〜!」

松原がオレ達を止めに入ったその時だった。

「何ですかその髪色は!?! あなたはそんな髪で登校して我が校の恥晒しになりたいんですか!?!」

突如聞こえた耳がキーンとなりそうなデカイ声が響き渡った。

声のする方に顔を向けると、一人の女子生徒の頭を鷲掴みにし怒鳴り声を上げる女教師の姿が目に入る。

見たところ生徒指導の一環だろうが、アレはどう見ても指導じゃない。
ただの恐喝だ。

女子生徒も涙を流し、ビクビクと震えその教師に怯えているのがわかる。

「……………おいつ、氷川。あの教師の名前は?」

怒気を含んだ小さな声で氷川に問いたです。

「生徒会顧問の藤村先生です。この学校の卒業生で、とても厳しい指導をすることで有名ですね」

「特に髪型の検査は厳しいんだ……………。髪色は学校に申請する書類を持ってなかったら問答無用で怒ってくるよ」

二人の話を聞く限りだと、このお嬢様学校にピッタリな人材だと言える。

だが、その考えはすぐに覆された。

服装はスーツじゃなくてどこぞのブランド物で、首にはネックレスを引っさげ、髪色も地毛とは思えないほどの金色。

生徒にああだ、こおだ言うには説得力に欠ける。

指導される生徒も納得できないだろう。

「矛盾してやがるな」

オレが下したあの教師の印象。

「そうですね。しかし、これはどうしようもないことです」

「おいおい、風紀委員長ともあろう者が随分と弱気だな」

「権力において、教師と生徒では雲泥の差があります。私では力不足です」

「あつそ。お前が行かねえならオレが論破していてやるよ。だから手錠を外し——

——」
「そんなことさせません」

オレの言葉を遮り氷川は首輪の紐でオレを静止させる。

互いに痛みにも、扱いにもだいぶ使い慣れてきた。

「おいつ………！まさかこのまま見過ごせて言うわけじゃねえだろうな？」

「ええその通りです。もし、あの生徒が髪色に関する書類を持参していれば防げたはずです。一概に藤村先生が悪いとは言えません」

「だとしてもだな………!?!」

「それに、あなたも人のことは言えないでしょう？」

氷川はオレの目線より上、頭を凝視する。

松原は苦笑いで誤魔化しているが、氷川に賛同しているように見える。

言われてみれば、ど正論。

こんな髪型で制服もちやんと着こなせないオレが何を言っても無駄だろう。

まあ、その時はその時だ。

黒染めでもなんでもしてやる。

だが、問題は今だ。

あの教師に対抗できる手段が必要不可欠。

そのためにも、あの学園長ハゲにも協力を要請するしかなさそうだな。

「おいつ、氷川。放課後すぐに学園長室前に集合だ」

「あなたはまた強引に……………！」

「いきなり家に押しかけて拘束する奴よりマシだ、ボケツ。お前の選択肢は、はいかY

E S。それ以外は認めねえ」

「……………わかりました。学園長には私からアポイントメントをとっておきます」

「ああ、助かる。松原もくるか？」

「えっ!?わ、わたしは遠慮しておこうかな………」

「そうか、なら仕方ないな。もうすぐでチャイムなるし、先に教室に行つててくれ」
「うんっ!また後でね!」

松原は笑顔を向け、教室に向かって走り出す。

「随分と気に入られてるんですね」

「うるせえ」

氷川の冷やかしを交わし、挨拶運動に戻る。



授業中、オレはずっと今朝の出来事を振り返っていた。

怒鳴り声を上げる教師。

それに怯える女子生徒。

そして傍観するオレたち。

あの時何かしらの行動を起こせば状況が変わっていたのかもしれない。

氷川の拘束があったとはいえ、オレは何も出来なかった。

自分自身に苛つき、あの時のオレを殴り飛ばしてやりたい衝動に駆られる。

それに対する氷川の淡々とした言動も不可解だ。

いくら教師とはいえ間違った指導をしていれば、何かしらの感情は湧いてくるわずもかかわらず、奴からはそんなものが一切感じさせなかった。

寧ろいつも以上に冷静でいるようにも見えたほどだ。

オレには全く理解できない。

後頭部を掻き大きくため息をつく。

今日の授業が終わり、オレは一目散に学園長室に向かう。

拘束された手足は朝のうちに解放され、今もその感覚が残っている。

もう二度とあんなプレイはごめんだ。

変な癖がついたらどうしてくれるんだ、全く……………。

学園長室に着く頃には、すでに氷川の姿をあとした。

2人で部屋に入ると学園長はニパツとした笑みを浮かべる。

待っていたと言わんばかりのその顔に氷川は一礼、オレは無視していつものソファに腰掛ける。

まずは、オレから話を切り出す。

「今日この場を設けた理由はわかっていているだろうが、その話をする前に一つ。何故あんな真似をした？」

怒気がこもった声で話しても、学園長が表情を崩すことはない。

「今となつてはもうあのことでキレる気はない。だが、あそこまでする必要がどこにある？その理由を説明しろ。オレの納得するようにな」

多少矛盾しているだろうが関係ない。

その理由さえ理解できれば、だがな。

「実は氷川くんからキミのサボリ癖について相談されてね。逃げるようであればいつそ捕らえてみてはどうだろうかと提案したんだ。まさか、やってのけるとはね。実に驚いたよ」

——やはりこの学園長が真犯人だったか。

分かつてはいたが、こうも堂々とされていると、どうも気に入らない。オレの隣に座る氷川は学園長の態度に苦笑いする。

「オレがサボる度にこんなことを続けるつもりか？」

「んー、そうだねー……………」

考えるフリをする学園長を他所に、氷川は即答する。

「私は続けるつもりですよ。今度はもっと酷い仕打ちを——」

「ははは、氷川くんは見かけによらず面白いことを言うねー」

「笑えるか!!やられる方の身にもなってみる！」

「ならば明日からも風紀委員として活動に尽力することだね」

「学園長の言う通りです。次は容赦しません」

「しようがねえなあ……………」

半ば強制的に今後サボらないと誓わされる。

氷川の口述による恐ろしさはお袋並だ。

そう痛感させられる。

だが、拘束してくる氷川を殴り飛ばすことも可能だがオレにそんな趣味はない。女に手をあげる男はゴミかそれ以下だ。

脳裏に白鷺千聖「あいつ」の姿が浮かんでくるが奴は別とする。

非力な人間がする挑発行為ほど醜いものはない。

奴は身の程をわきまえたほうがいいだろう。

そして喧嘩を売る相手を慎重に選ぶべきだ。

「それじゃあ本題に入らせてもらおう」

オレがそう言うと、学園長から笑みが消え真剣な眼差しを向ける。

「オレたちが今朝に見た金髪教師について教えてくれ」

「金髪の……………教師……………?」

「生徒会顧問の藤村先生です」

「……………ああ！藤村くんか！彼女がどうかしたのかい?」

氷川の言葉でオレの言いたかった人物が一致したようだ。

奴が何をしたかわからず首を傾げる学園長に今朝起きた出来事を全て話す。多少オレ独自の見解もあつたが、氷川がそれを上手くまとめ補足も入れる。

「なるほど、そんなことが……………」

全てを話し終えてからは、学園長はそれ以上何も言わず腕を組み何かを考えるそぶりを見せる。

「酷い話だろ？地毛だと主張しても書類がないと言ったらその仕打ちだけ？」

「私自身、見てて気持ちの良い光景ではありませんでしたね」

思い出しただけで腹が立つ。

どう考えてもあれは理不尽だ。

あの光景を言葉にするなら、権力という名の暴力。弱いものいじめ。

力無き生徒が権力を持つ教師から一方的に責め立てられる。

これがこの学校の指導方針だというなら、根本的な原因は目の前の男だということになるだろう。

だが、そんな考えを持つ人物でないことは重々理解しているつもりだ。

そんな危険思想の持ち主なら今すぐにも全身をロープで縛り、残り少ない髪の毛を全て剃り上げる。

まあ、そんなことをしたら退学どころの騒ぎじゃないだろうな。

「キミたちの考えはよく分かった。そこでだが、私から一つ君たちに聞きたい」

「——藤村先生のことをどう思う？」

真面目な質問に、オレと氷川は顔を合わせ数秒間シンキングタイムをとる。

「いけすかない。矛盾ヤロオ。反面教師。声量お化け」

「生徒側も非があるとはいえ、先生の指導は正しいとはいえません。まずは自分から手本となるように服装や髪型を整えるように心掛けるべきだと考えます」

幼稚な言葉遊びのように答えるオレに対し氷川は大人な回答をする。

そこで学園長はオレたちが予想だにしない言葉を放つ。

「率直にいうとだね、私もキミたちと同じ意見なんだ」

オレたちはその言葉に驚き目を見開く。

「おいおい、この学園のトップであるアンタが否定するのかよ？こりや傑作だ！」

「そんなにおかしいかい？」

「こんなに面白いことはなかなかないぜ？」

あまりにも面白すぎて笑いが止まらない。

学園長にまで否定されるってことは、よっぽど嫌われているんだろうな。

「彼女かなり頑固だからどれだけ注意しても治らないんだよねえ……」

「学園長ですか？」

「それでも優秀なのは確かだよ。彼女が受け持つクラスは成績がいい上に礼儀がしっかりとしているからね。一概に否定できない」

「間違っている中にも正しいものはある、ということでしょうか？」

「ま、そういうことになるだろうな」

氷川と学園長は、ため息をつき頭を抱える。どうやらお手上げの様子だ。

この件をハッピーエンドで迎えるためには、オレたちが無傷で勝利することが必須条件。

その上で、反面教師藤村を改心させることができれば尚よし………という感じか。1日2日で達成できる難易度じゃないな。

——だが、だからこそ面白い。

心の底から高揚感が溢れ出る。

起こしてやろうじゃねえか。

弱者が強者を打ち倒す革命を——。

「学園長。この一件、オレに任せてもらってもいいか?」

「正気ですか!? 相手は教師ですよ! 太刀打ちできるわけないでしょう!」

隣で座っていた氷川が声を荒げる。
奴の考えてゐることは今ならわかる。

オレがこの革命に失敗して返り討ちに遭い、退学させられるのを恐れているんだろ？

そんなこと百の承知だ。

オレ自身教師に楯突くなんて無謀だとは思ふ。

だが、このまま放置し続けたらさらなる被害者が出るのは確実だ。

人間、時には賭けに出ることも重要。

平凡な人生にロマンは無い。

逃げ腰なんでもつてのほか。

いつでも勝負し続けるのがオレ、月島 奏の生き様だ。

「……………わかった。私も出来る限りのことは協力しよう」

「おう、1ヶ月でケリをつける。楽しみに待ってな」

オレはニツと白い歯を見せて笑い、学園長室を後にする。
さあ、楽しくなってきたぜ。
早速行動開始だ。

第6輪 枯れかけの花は返り咲く

学園長と話をした次の日の朝。

やはり奴は玄関にいた。

「おはようございませす、月島くん。迎えにきました」

「おう、ご苦労ご苦労。それじゃあ行くか」

「えっ………?!」

オレの言動に氷川は驚き目を大きく見開く。

まあ無理もない。

嫌悪な表情で出迎え無抵抗ながらも敵意剥き出しだった昨日の相手が、その様子を一切見せていない。

氷川からしたら不思議で仕方ないだろう。

いや、不思議というより何か企んでいそうで気味が悪い、と言った方が正しいか。

今や氷川は腕を組み、目を細めジツとオレを見つめている。

「……………んだよ。お前、ここに何しにきたんだよ？」

やや高圧的に問う。

「あなたを……………迎えに……………」

「なら、とつと朝の仕事片付けて藤村の情報収集に取り掛かるぞ」

「そ、そうですね。正直こんな朝を迎える日は来るとは思っていませんでした」

「ああ、言い忘れていたが——」

そこで言葉を区切り、振り向きざまにこう告げる。

「お前の鞆に入ってる拘束具、もう使うこともないだろうから持つてこないほうがいい。無駄に重いだろう？」

「……………いえ、念のため入れておいたままにさせてもらいます」

「どうやら、まだ完全に信頼されておるわけではなさそうだ。」

物騒な拘束具もを持ち歩いて、変な噂でも立ったらどうするつもりなんだろうか。

『あの真面目な風紀委員長がそんなマニアックなことを………！』なんてことになりかねない。

いや、その前に氷川の家族、特に妹にドン引きされるのが先か。

本人もそこまでバカじゃないだろうが、一応注意しておくことにしよう。

校門での朝の風紀活動は風紀委員が中心となつて行うのだが、生徒会も絡むことが多い。

一般生徒の手本として示すことが目的なんだろうが、その顧問が逸脱してる為か寧ろ示しがつかない状況にあると見る。

風紀活動後に生徒会メンバーの1人に、藤村について聞いてみた。

Q. 藤村についてどう思う？

A. 嫌いじゃないけど好きでもない。でもどちらかと言えば苦手。

Q. 藤村の髪型、服装についてどう思う？

A. 全く似合っていないし、指導者とは思えない。

話を聞く限り、良い印象は持たれていたいような口ぶりだ。

登校してすれ違う一般生徒からも同様に尋ねて回る。

学年、性別関係なく藤村のことを知る人は皆、口を揃えてこう答えた。

藤村のことは苦手である——と。

これは面白い情報だ。

学園長の話だと極一部でも慕う人物がいるという見解だったが、そんな言葉を放つ人間が1人としていない。

どれだけ好かれていないか丸わかりだった。

いくら実績があればと説得力の欠ける人物に何を言われても心に響くことはない。

「氷川、トーマス・カーライルって知ってるか？」

「……………誰なんですか？」

隣に立つ氷川に問いを投げかけるが、何を言っているかわからない様子だ。

「イギリスの思想家だ。奴はこんな名言を残している。『自分より立場の弱い人に対する接し方に、人の偉大さは現れる』ってな。果たして藤村は偉大な人間なのか、奴だけに関わらずオレも断然、否と答えるな」

「その方ならともかく、月島くんは何故そう考えるのですか？」

「自分が手塩にかけて育てた生徒たちに嫌いと言われるんだ。こんな悲しいことはない」

「しかし、実績は確かにあるんですよ？」

「そんなものただの飾りだ。もっと視野を広げてみたらどうだ？」

「……………正直私にはよくわかりません。実績がなければ頼られるということ自体ないはず。それ以外に必要なことって……………？」

氷川が困惑するのわかる。

今の社会は実力主義。

成果を出す人間が生き残り、それ以外は地位を失う。

そういう意味では藤村は前者だと言える。

成果を残しているからこそ役職を担い、人に意見することが許される。

だがそれは目に見える実績でありそれまでの過程は無視したものだ。

わかりやすく、例え話をしよう。

あるところに野球が大好きな少年がいるとする。

その少年は、超強豪として有名な少年野球チームに入団しようとしているそうだ。

だが実はそのチームの内面は、体罰や恐喝はお構いなし。

人格を失うほどの練習としごきで強制的に作り上げられ、野球の楽しさも忘れてしま

まった軍団だと知ったら彼の考えは変わるだろうか？

答えは人それぞれによるだろうが、オレは人格を失うまでそのチームで野球をやりた

いとは思わない。

そして、この例え話の肝は ” 野球の楽しさ ” という言葉にある。

野球の楽しさ、つまり野球をどれだけ深く理解し好きであるかということだ。

そんな感情を持たず、ただただ白球を追いかけるスポーツなんてなんの魅力も感じな

い。

野球を愛しているプレーヤーがやるからこそ、観戦してエキサイトする。

このことを藤村に置き換えると、奴に育てられた生徒達の大半は、外面は完璧だが内心は腹黒く暴力や恐喝で育ったためか性格が常軌を逸脱する人間が社会に輩出されて

いることになるはずだ。

これが上つ面な成績というもの。

こいつらが社会に適合するなんて到底思えない。

「要するに、自分がどれだけ慕われる指導をしてきたかどうか。そして、人に感謝することのできる人材に育成することができたかが重要なんだよ」

「なるほど……………。あなたの考えはよく分かりました。つまり、藤村先生にはそれが圧倒的に欠けているというんですね？」

「そういうことだ。まあこればかりは卒業生に聞かないとわからないことなんだから」

「いえ、実際にその通りだと思いますよ。中身のない人間は、いずれ破滅の道を歩みます」

「……………お前、結構冷たいんだな」

「事実です。だからこそ、私たちがそうならないようにちゃんとした指導が必要なんです」

覇気のコもった言葉から、その重大さが伝わる。

教師藤村の更生。

これは、思っていたより壮大な計画になりそうだ。



昼休みを迎え、オレは学園長室に直行する。もちろん昼飯を持参して。

「入るぜ」

例の如く荒っぽく扉を開けるが、そこに学園長の姿は見えない。

アポを取っていないとはいえ、いつも暇そうにしている男が……………。

思わず呆気にとられる。

「学園長なら、しばらく学校にはいないわよ」

背後から聞こえた声に驚き、距離をとる。

「あなたも学園長に用があるのかしら？」

金髪の憎き女、白鷺千聖が笑顔で話しかけてきた。しかし、その笑顔はどこか冷たさを感じる。

「お前には関係ない」

「まあ、私にとつてどうでもいいことは確かのようなね」

「さあな。もしかしたらオレのおかげでこの学校が前より過ごしやすくなるかもしれないぜ？」

「ふふふ、そんな時が来るなんてことはないでしょうから、笑って聞き流しておくわね」
♪

「……………好きにしろ」

いちいちかんにさわる奴だ。

こんな一面を見ているからこそ、奴が子役からの有名人というのも不思議に思う。

この性格でよくもまあ人間関係を作るものだ。

——いや、奴だからこそというべきだろうか。

演技を極めてきた人間にとって、偽りの自分を演じるなんてことは容易いはず。性格が良くて人当たりもいい女優。

それが、テレビ関係者が下した白鷺千聖に対する性格分析の結果なんだろう。それが偽りの姿だということも知らず――。

「お前は学園長に何の用だ」

「あなたには関係のないことよ？それでも知らないのなら教えてあげても構わないけれど？」

「……………興味ねえよ。オレの失言だ。適当に聞き流せ」

「ええ、そのようね」

2人の間に異様な空気が流れる。

帰ろうにも帰れない。互いが一步も引けない状況にある。

この場から去ること、すなわち己の敗北を意味することだと自負しているのだ。沈黙を破ったのは奴だった。

「あなたが手に待っているのってお昼ごはんよね？」

「だったらなんだ」

「よかったら、私とお昼を共にしていただけるかしら？」

「……………はっ？」

奴の言い放った言葉の意味がわからない。

そんなオレに構わず奴はを続けて話す。

「本当は花音と2人きりだったところをあなたも一緒にどうかと聞いてるのよ？」

「んな上から目線で話す相手と飯なんて食えるか、ポケット」

「確かに、それもそうね……………」

拒否するように顔を背けると、奴は手を顎に添え考えるそぶりを見せる。

数秒の沈黙の後、何かを閃いたと言わんばかりの不敵な笑みをこぼす。

「何がおかしい。これ以上オレに用がないならここから消えやがれ。目障りだ」

「そう……………。なら、言い方を変えるわ。藤村先生について知りたいなら話してあげる。」

「……………!？」

「喉から手が出るほど欲しいでしょ？もちろん、花音に聞こうとしても無駄よ。あの子は絶対に話さない」

そんな美味い話があるはずがない。

だが、一つでも多く情報を手に入れたいのは確かだ。

話す前からオレはもう詰んでいたようだな――。

「……………いいだろう。その提案にのってやる」

「ふふふ、月島くん？あなたはあくまで立場上頭を下げても教えを乞う必要があるのよ？その誠意は見せてくれるのかしら？」

「お前の情報が本場で、且つオレが藤村に敗北したその時に土下座でもなんでもしてやるよ」

「それは楽しみね♪」

奴は不適な笑みを浮かべ、言葉を続ける。

「なら、早速行きましょう。花音を待たせてるの」

「ああ、そうだな」

オレはそう言い、奴は背を向け歩き出しその後ろをついていく。

その間にも言葉を交わすことはない。

『月島 奏と白鷺 千聖は犬猿の仲だ』という噂はもう学校中に広まってるらしく、すれ違う生徒から驚きの視線を送られる。

オレだつてこんな奴と関わるのなんてごめんだ。

だが今はそんな悠長なことを言つてられない。

怒りのこもつた握り拳を引つ込め、オレはただ奴の背中を追う。

校舎を出て陽の当たる中庭に出ると、茶色のベンチに腰掛ける松原の姿が目に入る。弁当には手をつけず、ウトウトと首を動かし眠りに入っている様子だった。

「花音、お待ちせ」

「……………すう」

松原が呼びかけに応じることはない。

「花音……………！花音……………！」

「……………ふえ？」

奴が肩を強く揺るとようやく反応を見せる。
目覚めかけの両目を擦り、大きく腕を伸ばす。

「花音、お目覚めかしら？」

「……………うん。今日はなんだか日差しがポカポカしてて気持ちいいんだ」

「……………花音？……………まだ寝ぼけているのかしら？」

オレと奴がこの場にいることに驚かないということは、松原は奴の姿しか目に入っていないようだ。

目がまだしょぼしょぼとしている。

「よう、松原。居眠り中に悪いな。邪魔するぜ」

「あゝ月島くん……………いらつしや……………い？」

そこで言葉を区切り、異変に気付いたかのように目を大きく見開く。

オレと奴の姿を交互に顔を動かし目視する。

寝ぼけた頭が完全に働き、この場の異様さに驚き、腰を抜かし尻餅を着く。

「ふえつ、ふええ〜?!?こ、これはどういう状況なの〜!?!」

松原の華奢な体から大音量の声が放たれる。

近くにいた生徒たちは一点にその方向を向く。

松原は真つ赤に染まった顔を隠し、奴はやれやれと言った様子で苦笑いする。

松原の予想通りの反応に、オレはフツと小さく笑う。

「こいつが藤村について、いろいろ教えてくれるらしくてな」

「何度も彼と顔を合わせるのはアレだったから、今日この場ですることになったのよ」

「こつちだつてまつぴらごめんだ。こいつとさしで話すのもアレだから、松原に仲裁役になつてもらつて欲しい」

「ごめんなさいね、花音。ついでと言つてはなんだけれど、あなたからお話ししてあげて欲しいの」

「う、うん、わかった！なんとなくだけど……」

松原の心配をよそに、オレはベンチに腰掛けビニール袋から菓子パンを取り出し一口かじる。

それと同時に、2人も弁当に箸をつける。

「それじゃあ、早速だが聞かせてもらおうか。お前は藤村の何を知っている？」

オレがそう問いかけると、奴は弁当のおかずを口に含み不適な笑みを見せながら答える。

「知っている、というより、思い知らされたと言うべきかしら」

「どう意味なの？千聖ちゃん？」

「藤村先生は頭髪が目立つ色の人に対しては厳しく指導する。そうよね、月島くん？」

「ああ、その通りだ」

「藤村先生が過剰に頭髪チェックをする理由は、あの人の過去にあるのよ」

「藤村先生の……過去？」

松原は首を傾げ疑問を投げかける。

「あいつがこの学園の出身の時の話か？」

「ええ、そうよ。この学園の図書室には過去の卒業生のアルバムを見ることができ
の」

「そうなんだ！ 図書室にはあまり行かないから知らなかったなあ」

「学園創立から現在まで、何十年もの記録が残っているのだけど、ある年だけそのアル
バムが残されていないのよ」

「それってまさか……………」

「そう、月島くんが察した通り、藤村先生の代のものよ」

自分の過去を知られたくないがために、学園に保管されてるアルバムを処理。

藤村の本気度が窺える。余程知られたくないのだろうか。

ここで、一つの疑問が浮かんでくる。

そのアルバムが無くなったことで、図書室内で問題にならなかつたのだろうか？

図書委員をはじめ、毎度のように本を読みに来る連中なら必ず気づくはずだ。

奴が気づいたくらいだからな。

「なるほど、それは確かに思い知らされるに値する決定的な証拠だ」

「すごいよ千聖ちゃん！よくそのことに気づいたね！」

「ふふふつ、お役に立てたのなら光栄だわ」

認めたくはないが、認めざるを得ない。

これは貴重な情報だ。

「ついでと言ってはなんだけれど、もう一つ教えてあげるわね」

「ああ、聞かせてもらおう」

「藤村先生は頭髮チエツクにとても厳しい……そうよね、花音？」

「う、うん。私も何度も注意されたことがあるんだ……」

「それはオレもこいつも同じだ」

「あの人がそうなったのにもちゃんとした理由があるわ。これは、疑念じゃなくて確信よ」

「自信満々な面しやがって。そう言い切れる根拠があるんだな？」

「ええ、もちろん。それは、ある人物の影響が大きいわ」

「ある人物……?」

「その人の名前は——」

松原たちと昼飯を共にした後は、更なる情報収集を行った。

無くなったアルバムの搜索、当時の藤村を知る人間からの証言……どれもオレ一人で行ったものではない。

松原や氷川、そして中学時代に親しかった友人たちにも協力を依頼し、確たる事実も手に入れた。

計画を練りはじめてから2週間。

執行する時はきた。

さあ、いっちょ始めようか。

放送室から学校中にオレの声が流れる。

「風紀委員長の下僕から通達だ。3年A組担任の藤村^{ふじむら}梅子^{うめこ}。至急2年A組の教室に

来るように。アンタの思想をひっくり返してやるから覚悟しろよ——」



放課後を迎えた教室には、オレと藤村以外誰の姿もない。

外は夕日が立ち上り、部活に勤しむ生徒たちは皆練習に明け暮れている。

「それで、私に何の用かしら？」

藤村がやや高圧的に言葉を投げかける。

ここに呼び出された意味なんてわからないような様子だ。

「まず始めに、ノコノコと丸腰でこの場に来てくれたことに感謝するぜ」

オレはそんなことを意にも介さず返答する。

藤村はオレの言葉使いに不満そうな顔を見せる。

「あなたはまず礼儀を覚えなさい。私に齒向かうなんて10年早いわ」
「くくつ。そう思ってオレは、齒向かう為の武器をいくつか用意した」

オレはそこで言葉を区切り、手に持っていた茶封筒から一枚の写真を取り出した。
藤村はその写真を凝視し、驚きの表情を見せる。

「——っ!!」

「気づいたか？これは、アンタの学生時代の写真だ」

「どこでそんなものを……………!?!」

「学園で保存されていたアルバムは処理されていたからな。学園長に頼んで拝借させてもらった。他人の、ましてや学園長の所有物ともなれば処分出来なかつただろ？」

藤村はオレに詰め寄り、手に持っていた写真を強奪しビリビリに破り捨てた。

こうなることも想定内。

写真なんて携帯端末を含め、パソコン内にも保存済み。

オレがその気になればいつでもばら撒くことも可能だ。

「黒髪のおさげでメガネ。今のアンタとは大違いだ。誰がどう見ても、3年A組担任の学生時代の写真だとは思わないだろうな」

「黙りなさい!!」

「それに、こんな証言もある。昔アンタの担任をしていた教師からだ。”自分の下の名前が嫌いで、もし呼ばれでもしたらとても腹を立てていた” ってな」

「黙りなさいと言っているのが聞こえないの?!?!」

二人きりの教室に藤村の怒鳴り声が響き渡る。

どれだけ威圧されようが、オレは言葉を続けた。

「まだまだ情報はあるぜ? 耳の穴かつぼじってよおく聞けよ?」

「……………いやっ!! いやああああ!!」

発狂する藤村に、オレが手にした情報を次々と告げる。

信じられないと言った時には、その証言を録音したものを流し、それでも納得しない時には、オレと証言者が写った写真を見せ、確たるものに仕立て上げた。

そんな奴だが、オレにも異議を唱え始める。

「あ、あなたはどなのよ!? 髪を染めているのは事実!! あなたに言われる資格なんてないわ!!」

「あつ? お前、ちゃんとコンタクト入ってんのか? その細い目をさらに細めてよく見てみるよ?」

「何を言って……………あつ———」

オレはこう言われることも予想していた。

金のメッシュを入れた髪について言われたら、オレは完全にアウトだ。

そのためにオレは、この日に備え1週間前から黒に染め直していた。

ワックスで固められたヘアスタイルも捨て去り、七三分けで整え真面目さを演出する為に伊達眼鏡もつけた。

オレが悪く言われる筋合いはどこにもない。

「人に指導する時は、まず自分が手本となれる存在であれ。お前は在籍したこの学園で何も学ばなかったのか?」

「……………っ!」

「アンタの指導方法は、実績を残せても人間関係は最底辺だ。お前は間違えたんだ」

藤村に抵抗する余力はもう残っていない。

腰を抜かして床にへたり込み、ピクリとも動かない。

失神寸前の状態だ。

そんな奴を、さらにどん底に突き落とす証言を言い渡す。

「最後になるが、これはアンタが憧れる名女優からの言葉だ。もうその名前はわかっているな？」

「……………し、白鷺……………千聖……………」

顔を下に向け、囁くような声で放ったその人物の名前。

白鷺千聖はこの事を知っていた。

これは、2週間前の昼休みの回想だ。

『その人の名前は——白鷺千聖』

『つまりは、お前ってことか』

『なんでそう確信できるの?』

『藤村先生は、他の誰よりも私に対して厳しく指導した。私の容姿が羨ましくて仕方なかったのでしょうね』

『自信過剰だ、ボケッ』

『そう言えるのも、確信しているからよ? 藤村先生は、私のSNSの公式アカウントをフオローしているわ』

『なんでそれがわかるの?』

『私もあの人に一矢報いようと考えたからよ。こっちも色々調べていたのだけれど、もうその必要も無くなったわ』

『そうだな。全部オレが担うんだからな』

『あの人は私対して何かしら特別な感情を抱いている。間違いないわ。もし、この事を武器にするならこう付け加えて頂戴』

「白鷺千聖はこう言っていた。”あなたののような芋女に、私の真似事なんてできっこないわ” ってな。全く、どこまでも傲慢な奴だ」

「うそよ……………うそよ……………!!」

「なんなら、本人の音声でも流してやろうか? オレが言った方より何百倍も迫力があ

るぞう？」

そう言つて携帯をチラつかせると、藤村は顔を背け拒否の反応を示す。そんな奴の頭を鷲掴みにし、さらに追い討ちをかける。

「つまりはそういう事だ。アンタにその髪は似合わない」

目には涙を浮かべ、体の力は完全に抜け切っていた。

こんな人間でも、昔はもつとまともな存在だったろうに。

哀れだ、全く。

「いいか？まずは自分の姿に目を向ける。そしてこれまでの行いを戒めろ。今のアンタにオレたちを指導するなんて10年早い」

鷲掴みにした頭を離し、吐き捨てるように言った。

その後のやつがどうしたのかは知らない。

明日、藤村がどうなっているのか実に見ものだな。



結果から言うと、奴の容姿は何も変わらなかった。
少し期待はしたんだが、実に残念だ。

「あつ、月島くん！おはよう！」

「おお」

朝の挨拶運動の最中、松原が歩み寄ってきた。

その背後には、奴の姿もあった。

「藤村先生は、何も変わってないように見えるのだけど？」

「ああ、もう手遅れだったみたいだ」

「月島くんでも無理でしたか……………」

オレの隣に立つ氷川が大きいため息をつく。

「氷川も何ヶ月か前に直談判したんだろ？前に学園長室で話してた時、」学園長も
”つて言つてたもんな？”

「気づいていましたか……………」

「だが、今回の件で変わったこともある。藤村をよく見てみる」

そう促すと、3人は奴に視線を向ける。

特に注意することもなく、ただボーッと突っ立っているだけ。

まるで力カシシそのものだ。

「何も……………言わないね」

「相当応えた様子だったからな。とりあえずオレは敗北していかない。そういうことで
いいか？」

オレは過去にその言葉を言った人物に顔を向ける。

そいつもそれを察したようだ。

「ええ、及第点にでもしといてあげましょう」

「お前に借りを作るのは嫌だったんだがな……………」

「でも、それがなかったら今頃あなたは土下座をしていたのよ？ 私たちの目の前で」

「あの、それはどういう……………」

オレと奴の会話の意味が分からず、氷川と松原は首を傾げる。

「お前たちが知る必要はない。とりあえず、一件落着だ。今後またあいつが不穏な動きをすることはないだろうが、注意しててくれ」

今回の一件でわかったことがある。

それは、人はどうしても変えることが難しいということだ。

藤村の姿を見る限り、以前のような光り輝くような金髪ではなくなった。

おそらく、一度は黒染めしたんだろう。

だが、自分の姿を鏡で見て過去のトラウマを思い出した。

藤村 梅子という自分の存在を好きになれずにいる。

奴がそんな自分を好きになれる方法。

それは、偽りの自分であり続けること。

己が好む姿でいること。

そんな人間が、今まで見下してきた生徒から事実を突きつけられてどんな気持ちなんだろうな。

もう、知ったこつちやない。

奴にはもう、恵まれた人生を歩めるはずもないのだから。

第7輪 彷徨う綿毛

時は黄金週間。
ゴールデンウィーク

日々の授業の褒美として神が授けた憩いの休日を、皆は何をして過ごすのだろうか？
ダラダラと家で満喫すること奴もいれば、部活動で汗を流す奴もいるだろうな。

ああ、小旅行もいいな。海外旅行も捨てがたい。

だが実際のところオレはいずれも当てはまらない。

なら何をしていたと思う？

………まあノーヒントじゃあ分からなくて当然かな。
なら、勿体ぶらず教えよう。

答えはこれだ——ワン、ツー、スリー。

オレは、とある場所にいる。

手提げ鞆には必要書類と証明写真、そして印鑑と筆記用具が入っていて、右手には受験番号が記された紙を握り締めている。

オレを含めた100人近い人数が一齐に、頭上のモニターに視線をやった。人それぞれ反応は違っているが、オレはどちらかと言うと喜びに位置する感情を抱く。

モニターには、オレの受験番号が記載されており、それは合格を告げていた。

「奏く、試験どうだった〜?」

試験会場まで引率してくれたおふくろが、軽い口調で聞いてきた。

オレはそんなおふくろに、グッドサインを見せながら答える。

「余裕だったぜ」

「おお! 流石はアタシの息子だ! アホだけど馬鹿じゃないだけのことはある!」

「……………それ、褒めてるのか?」

オーバリアクションで喜ぶおふくろに少々の怒りを覚える。受けた本人より親の方が喜ぶってどんな状況だろうか。

「まあ何にせよよかったな。これでどこにだって行けるじゃん」

「まあな。それにしても、こんな簡単に取れるのか？ バイクの免許って」

そう、ことばどおりオレはこの黄金週間でバイクの免許を取りに来ていた。

校則に ” バイクの免許を取ってはいけない ” という項目はなかったから、氷川にとにかく言われることはないはずだ。

国だって16歳になったなら、中型バイクの免許を取ることが法律で認められている。

だが、国で認められていても金銭面でオレは大きな足枷がついていた。

教習所に通う金なんてなかったし、おふくろも『学生の頃に飛び込みで受けた』なんて言うから試してみれば……………。

常識さえあれば受かるんだなあ、これが。

全く、簡単すぎてため息が出る。

「本当にいいのか？あのバイクで。アタシのお古なんだけど」

「別に構わないぜ？お古つつつても、そこまで乗ってねえから綺麗だし色だってオレの理想とぴったりだ」

「それならよかった！なら、帰ってすぐ運転するか？」

「ああ、もちろん」

数十分後には、オレの手元に発行された免許証が渡される。

試験会場を出て、おふくろが待つ車の中に乗り込み、家へと走り出した。

.....

.....

「アンタ、最近学校はどうなんだ？」

突如、おふくろが話を振ってきた。

「別に、特に変わりねえよ」

た。
オレは素っ気なく返すが、おふくろは白い歯を見せながらケラケラと笑い声を上げ

「特に変わるわけないだろ？先生に楯突く生徒がさあ」

「……………はあっ!?知ってたのかよ!」

「当たり前だよ。ちなみにだけど、花咲川の先生にアタシの同級生がいてな」

「マジかよ……………」

「色々聞いてるけど、聞きたい？」

「なんで事の張本人がその話を聞かないといけないんだよ!」

「はははっ、確かにその通りだ」

オレが試験に受かった喜びからか、おふくろはずっと上機嫌だ。

機嫌が悪いと一言も話さないし、接しづらいから正直めんどくさい。

このままの状態でいてくれたら最高だ。

心の底からそう思う。

「先生も感謝してたぜ？藤村つてのは気に入らないから清々したつてな」

「そうか。だが、そいつは傍観を決め込んでいただけだろ？そんな奴に感謝されても嬉しくはないな」

「大人の世界つてのは難しいもんだ。言いたくても言えない、そんなことで溢れてる」

「理不尽極まりないな」

「アンタも、少しは大人になりなよ」

「大人になる、ねえ……………」

その言葉が妙に引つかかる。

オレにとって大人は、せこい生き物の象徴だと思う。

年功序列で全ては決まり、下のものはずっと迫害され続ける。

藤村がいい例だ。

あいつのようにデカイ態度を取り続ければ必ず天罰が下る。

出る杭は打たれるとはよくいったものだ。

もちろん、それに該当しない大人もいるだろう。

だが、全てを信用していいわけではない。

人間誰しも、自分が一番。

誰しも他人に構う余裕があるとは限らない。

「まあ、おふくろが近所に自慢できるぐらいにはならないとな」
「おおっ！よくいった!!母さん鼻が高いぞ！」

おふくろは突如、両手で握っていたハンドルを右手だけに持ち替え、離れた左手をオレの右肩に伸ばし思いっきり叩いてきた。

ジンジンと痛みが広がり思わず、ウツと声が出る。

上機嫌でも、おふくろが危険なことがよくわかった。

自分の怪力を少しは自覚して欲しいものだな。



家に帰ってすぐに予め購入していた真紅のヘルメットとグローブを装着し、同色のバイクに跨り発進した。

木々が生茂る並木道を颯爽と駆け抜け、風を置き去りにする。

普段何分もかけて歩く道は、バイクにかかれば一瞬。

実に清々しい気分だ。

幼少期に憧れた仮面ライダーもこうやってバイクに乗って行く先々で事件を解決していた。

昔のオレは本当にピユアだったと思う。

ヒーローになりたい、なんてはしゃいでたガキが、今や学校の悪役になっっているなんて誰が想像してたんだろうか。

いや、元不良のおふくろに育てられていた時点で運命は多少決まっていたのかもしれないな。

万が一にありえないがオレに子供ができたなら、おふくろやオレみたいにならないで欲しい、心底そう思う。

そう考えているうちに30分ほどが経った。

オレが向かった先は、夏場に人で賑わう ”海” 。だが、ここには泳ぎに来たわけじゃない。

最近、柄の悪い連中が昼夜問わず屯していると噂を耳にしたから、ちよいとこらしめに来ただけだ。

あと数ヶ月もすれば真夏日がやってくる。

そうなれば海の利用者は増え、時期に始まる海の家バイトで荒稼ぎしようというのがオレの策略。

不良たちのせいで中止にでもなればたまつたもんじやない。

邪魔する奴は誰であろうと許さねえ。

今のうちに釘を刺してやる。

バイクを路肩に止め、辺りを見渡す。

.....

.....

残念なことに屯するは不良共は見当たらない。
ターゲット

「ちつ、ハズレだったか」

吐き捨てるようにそう嘆き、長い階段下の砂浜に目を向けるとある光景を目にする。

三人組の厳つい男たちが一人の少女を取り囲み、何かを話している最中だ。

いや、話していると言うにはあまりに男たちが一方的に見える。

高圧的な態度を察するに、ナンパだな。間違いない。

その光景を見てオレはそいつらの元へ一目散に走り出した。

音もなく近づき、不意打ちとばかりに一人の男の脇腹に蹴りを入れる。

残りの二人は同時に首根っこを掴み、互いの顔をぶつけて地面に叩きつけた。

かかった時間はおよそ5秒。声を出す隙すら与えない速攻で、既に三人はピクリとも動かない。

「ナンパする暇があるなら、黙ってど〇森でもやってな」

二人の後頭部を離し、囲まれてた少女に声をかける。

「ふう〜、危なかったなあお嬢さん。今後は一人でこの付近は歩かないように――」

「あの……………もしかして、月島くん？」

ナンパされてた少女の顔をはつきりと見ていなかったが、間違いなくオレの名前を口にしました。

オレの知り合い？ いや、知り合いと言っても限りがある。

恐る恐る振り向くと、その少女は嬉しそうな表情を見せた。

「あつー！やっぱり月島くんだ！」

「……………なんでお前がこんなところ？」

髪と同じ水色のワンピース姿のその少女の正体は、同じクラスの松原だった。オレが疑問を投げかけると、松原は照れた表情で答える。

「実は、この辺りで有名なカフェがあつて……………」

「道に迷つたつてか」

「うんっ、そうなんだ……………」

何がどうなつたら砂浜まで歩み寄るのか。

こんなところにカフェなんてないだろ普通。

正直、この前松原から聞いた話は嘘だと思つていたが改めなければならない。こいつは正真正銘の方向音痴だ。

「はあ……………仕方ねえ。このまま放つてたら国境を超えかねないからな」

「そ、そんなことしないよ!……………多分」

「携帯までバグらせるお前に説得力なんてねえよ。目的地はどこだ?」

「えつと、”Charlotte” って言う喫茶店んだけど……………」

「しゃーろつと? 変わった名前だが……………少し待ってろ」

ズボンの右ポケットから携帯を取り出し、検索をかける。

ヒットした場所を凝視すると、そこはここから3キロも離れた場所にあった。

「……………松原、ちよつと携帯見せてみる」

「えつ? う、うん、いいよ」

松原から手渡された携帯からマップを開く。

現在地は……………名古屋?

ああ、今度は渋谷か。次は小樽……………。

「……………インターネットが壊れたか?」

「それは世紀の大事件だよ!!」

いやいや、そう言わざるを得ない動きを見せてるのは誰の携帯だよ。

現在地が瞬きする間にどんどん変わっていく。

なにこれ気持ち悪っ。

群れにはぐれた小魚かよ。

「まったく、頼りになれねえ携帯だな」

「う、うん……………」

「今、上でバイク止めてるから乗れよ。送るぞ」

「ええっ!?も、申し訳ないよ!!」

「いいから来い。また変な族に絡まれたらどうしようもできないだろ?」

「そ、それはそうだけど……………」

「なら決まりだ。ほら、行くぞ」

半ば強引に松原を連れ走り出した。

そういえば、あの三人組は……………。

まあ、どうでもいいか。

察が見つけて保護なり拘束なりするだろ。

奴らが同じ過ちを繰り返さなかったらいいんだがな。



バイクに乗れば3キロの道なんてあつという間だ。ホントつくづく免許をとって良かったと思う。

この道ので驚いたこと、というか面白い発見があつた。

それは、後ろからオレの腰に腕を回していた松原の締め付ける力が強い事だ。

華奢な体でどんな腕力だよ、まったく。

このままジャーマンスープレックスをされるんじゃねえかと、本気でヒヤヒヤしていたんだからな。

まあ、こいつの性格じゃあ不可能か。

ナンパしてくるヤロオなんて容易く撃退できる力があるのもつたいない。

これじゃあ宝の持ち腐れだ。

「ついたぞ松原……………つておい、いい加減力緩めろ。ジャーマンかますつもりか」
「だ……………だつて……………」

そう言うと、松原は目を潤ませる。

だが確かにオレがスリップでもすれば、松原の肌は傷だらけになってただろうな。
怖くなるのも無理はない。

半袖でスカート姿のやつをバイクに乗せるのは間違いだつたか。

「ともかく目的地には着いたんだ。帰りは一人で——」

「あ、あのっ！よかつたら一緒にお茶しませんか？もちろん、お金は私が出すよ！」

オレの言葉を遮り、松原は案を持ちかける。

「奢らせる為に人助けしてるわけじゃねえんだ。悪いが、その申し出は受け取れねえよ」

「私は、月島くんとお話がしてみたいなあと思って……………その……………」

モジモジと言葉に詰まる松原。

「そう言うことなら話は別だ。オレもお前に多少興味がある」
「ほ、ホント!?!なら一緒に行くこうよ」

松原に連れられて店に入る。

シックな雰囲気漂わせる内装は、やはりオレのような乱暴者には合わん。

コーヒーは好きだが、他所で飲みに行くなんてことはしない。

どうも落ち着かないからな。

中は店主とオレたちのみだが………こんな状況で経営が成り立つのか？

オレたちはカウンター席に腰掛け、メニューを開く。

「ロイヤルブレンドと、日替わりケーキを一つお願いします」

松原はメニューを見ずにすぐ注文する。

口ぶりからして、何度かここに来たことありそうだな。

………ただ道に迷うんだな、こいつ。

「オレはマスターに任せる。オススメなのを頼むぜ」

マスターは無言で頷くと、準備に取り掛かった。

適当な注文で申し訳ないと思う。

だが、正直メニユーを見ても何がなんだかさっぱり分からん。

キリマンジャロ？

フランボワーズ？

なにそれ美味しいのか？ってレベルでだ。

所詮インスタントコーヒーか缶コーヒーしか飲んだことない男「ヤロオ」には無理な話だったな。

「それで、オレと話したいってどう言う意味だ？」

そう問いかけると松原は俯きながらも笑顔で答えた。

「今まで男の子とあまり話したことなかったから、いい機会だなあと思って……………」

「男なら世の中にいっぱいいるぜ？」

「その……男の子の友達って、月島くんしかないから……」

「そうか。オレも女の友達って松原しかないな」

「……………えっ!？」

松原は驚いた表情を見せる。

まあ、事実そうだしな。

水川は友達と言うより ” 仕事仲間 ” と言う印象が強い。

気兼ねなく話せる女と言ったら、今のところは松原しか思いつかない。

「なんだ？ 以外だったか？ それとも嫌だったか？」

「ううん、違うよ……………嬉しいよ」

ニコツと笑みを浮かべる松原はどこか、嬉しさというか、喜びを露わにしてる感じがする。

やっぱ変わってるよな、松原は……………。

しばらくするとマスターが頼んだメニューを持ってきた。

松原には例のものを、オレにはオリジナルブレンド&日替わりケーキという名のを差し出した。

「お前、それ紅茶か？」

「うん。すごくいい香りで好きなんだあ」

「ふーん」

「き、興味ないんだね……………」

「生憎な。上品なものは性に合わねえ」

「そんなことないと思うけどなあ……………」

「オレはこのコーヒーを堪能させてもらおう」

香りは……………コーヒーだな。

——うん、コーヒーだ。それ以外の感想はない。

ソムリエ風になちよつとカツコつけてみただけだ。

そのコーヒーを少し口に含む。

——おお、なんだこれ！

今までに飲んだことのない味だ。

インスタントとも缶コーヒーとも違う。
ちやんとしたコーヒーって感じがする。

これをスーパーとかで製品化したら絶対に買い占めるな、間違いなく。
……………この味をどう表現したらいいんだろな。
自分の語彙力の無さに、恥ずかしくなってきた。

「どう？ 気に入った？」

「……………ああ、悪くない」

「そっか！ 喜んでくれたなら嬉しいなあ♪」

日替わりケーキも無駄に甘すぎず、苦すぎず程よい感じだ。

喫茶店……………いいな、気に入った。

「また良い店があつたら教えてくれ、松原」

「うん！ えへへ、月島さんと共有できて私、嬉しいよ」

「んな大袈裟な」

「また一緒にカフェめぐりしようね！」

「ああ、約束する」

松原にそう誓い店を出る。

カフェめぐり……巡るのは構わないが道案内するやつがアレだから少し不安だ。

帰り道、再び松原を後ろに乗せたんだが……やっぱジャーマンかますぐらいの力で締め付けてきやがった。

”こいつと二人乗りは絶対にしない”。

オレは心の中で勝手に誓った。

第8輪 欲の蕾

「はあっ？盗聴器と盗撮カメラが女子トイレで見つかったなあ？」

「……………!!」

この事件が発覚したのは、黄金週間が明け平穏な日々が始まってすぐの頃だった。

唐突に呼び出された学園長室で、この事件を告げられたオレと氷川は驚きを隠せない。
い。

オレの場合、こんなお嬢様学校でそんなバカをした犯人に呆れただけだが氷川は違う。
う。

眉間にシワを寄せ、殺意すら感じるオーラを身に纏う。

目を閉じ無言で腕を組むその佇まいからも、氷川の怒りの度合いが窺える。

その姿はまさに鬼神の如し。恐ろしい奴め。

「おそらく、創立以来初の出来事だろうね」

「当然だな。もし過去に事例があったら、それはそれで一大事だろ」

「それがね月島くん。極一部だが、同性同士の恋愛なんて起こりうることもあるんだ
よ」

「はっ、そんなものどこに需要があるんだか……………」

「———そんなことはどうだっていいんです!!!!」

無言を貫いた鬼神がとうとうキレた。

あまりの形相に学園長はゴホンツと咳払いし、話を戻す。

「話が脱線してしまったが、二つが見つかったのは2Fの女子トイレ。何かに見られてる気がすると感じた女子生徒が探し出し、発見した」

「……………私も使ってる場所ですね」

「しっかし、犯人もバカだな。こんなマネしてただでは済まないだろうに」

「目的は不明だが、学園長としてこの事件を見過ごすわけにはいかないつもりだ」

「目的なんて一つしかないだろ？ その撮った写真や音声をヤラシイ事に使うに決まってる。犯人は男ヤロオだな」

「……………考えたくありませんね」

氷川の顔が青ざ、組んだ腕に更なる力が加わる。

どこの男に利用されてるか分からないからこそ気色悪い。

そこから最悪のシナリオは――。

「それで、この件は学校に伝えるつもりなのか？」

「他の生徒がパニックを起こす可能性もあるからこれは極秘事項でお願いしたい。くれぐれも内密にね」

「わかりました。必ず犯人を見つけ出してみせます」

「ああ、よろしく頼むよ」

学園長はそう告げ、オレたちは部屋を後にする。

そこから並んで歩いているが、二人して会話は無い。

学園長からこの話を聞いた時から、眉間のシワが寄ったままだ。

よほど切羽詰ってるらしい。

ここは話題を変えて空気を変えたいところだが………気難しいこいつには、変に気を使わないほうがいいか。

オレはストレート、ど直球で尋ねる。

「お前、犯人のことどう思う？」

「最低で卑劣……同じ学校の生徒として恥ずかしくて仕方ありません」

「今は未成年だが、これは立派な犯罪行為だからな」

「ええ、決して許せません」

氷川の揺るがない意志がビシビシと伝わる。

被害者になってるだろうし、仕事仲間として助けないとな。

「とりあえずどうする？場所が場所だけに、オレは立ち入れないぞ？」

「そうですね……なら、あなたは男子生徒から聞き込みをお願いします。私はこの学校の女子トイレ全てを見て回ってきますので」

「了解だ。なら、1時間後ぐらいに2年A組の教室で待つ」

「わかりました。では、お願いします」

氷川に別れを告げ、対の方向へ歩き出す。

盗聴、盗撮……何故その行為に及ぶのか全く理解できない。

はつきり言うが、オレにとつて女とはクソみたいな生き物だと思つていいや、思つていたと言つたほうが正しいか。

この学園に入学して時を過ごし、オレの中の考え方が少し変わった。

クソみたいな女の中でも、松原や氷川のような比較的まともなやつもいると気づかされた。

中学の頃のオレが聞いたら驚くだろうな。

まあ、二人のどちらかと恋愛に発展するなんてことは絶対にありえない。

そう断言できる。

オレの色恋沙汰は中学で終わったんだ。

人を好きになることに恐怖すら感じる。

だが、こつから先、恋愛に発展しなくとも二人のような性格の女が現れて、仲良くなれることを願いたいな。

そして、聞き込み等々を終え教室に戻る時には約束の時間を迎えようとしていた。

氷川はオレより数分遅れで教室に入ってきた。

手には袋詰めされた数個の白い物体が見える。

どうやら回収には成功したようだ。

「すみません、少し遅れてしまいました」

「いや、ご苦労だった。まあお前の様子を察するにかなり深刻な状況にあるようだな」
「ええ、正直驚きです」

袋に詰められていた白い物体を机の上にはら撒くと、氷川は指を刺しながらどこにあつたかオレに伝える。

「これが3F教室近くの女子トイレ。それが視聴覚室の隣にある女子トイレ。そつちが1F職員室の隣にある女子トイレに仕掛けられていました」

「結構ばらけてるな」

「はい、かなり小型だったので探すのに苦労しました……」

大きさはだいたい5センチ程度。

触れてみるとなんだか塗装されたような感触がある。

色が色だけに、真っ白の空間のトイレ内だと気付かないだろう。

これだけの数を氷川はよく探し出してくれた。

「もしかしたら、学年関係なしの上に、教師陣も被害にあつてゐる可能性が高いな」

「職員室近くのトイレに仕掛けられたとなると、そう考えざるを得ないですね」

「認めたくはないが手際が異常に良かったんだらうな。それに度胸もある」

「これだけの数を一体どうやって……………？」

「考えられるのは複数犯。休日か平日の夜にでも忍び込むのなら一人でも可能だが

……………数が数だけに、ちーつとばかり大変かもな」

「こんな犯罪行為を、複数人で行つてゐるなんて……………」

「風紀委員の名の下に成敗致す！」 ってか？」

「ふざけないでください！」

何もない空間を握り、敵を切る仕草をすると氷川は声を荒げた。

「……………でも、確かにその通りですね」

すると今度はクスツと笑つて見せた。

「忙しいな」

「ほ、放っておいてください！」

「あつ、そうだったそうだった。今日はもう遅いから明日で構わないが——」

「無視しないでください！」

「各部活動の女子更衣室もチェックしといた方がいい。被害箇所がトイレだけだとは限らないからな」

「……………!!な、なるほど」

「んじゃあ、今日は解散でことで。回収したそのちっこいのは学園長にでも渡しといてくれ。頼んだぜ」

氷川の返事も聞かず一目散に教室を後にする。

更衣室の確認は明日でもいいと言ったが、一箇所だけでも負担を減らしてやるか。オレは目的地へ向かい走り出す。



「よおつ、邪魔するぜ」

花咲川学園ではあまり知られていない畳部屋。

和を感じるその内装は日本を象徴すると言つても過言ではない。

ここを使用するのは主に茶道部だ………と氷川から耳にした。

茶道部に入部してるあいつもきつとここにいるはずだ。

例の如く、ノックも挨拶も無しに襖を力強く開ける。

作法も何も知らないヤンチャ者がズカズカ入ったにも関わらず、この部屋にいる唯一の生徒、松原花音は正座で満面の笑みを浮かべ迎え入れた。

「あつ、月島くん！いらつしやい！」

「急に押しかけて悪いな」

「ううん、大丈夫だよ。何かあつたの？」

首を傾げる松原の真正面に腰掛け、胡座をかく。

「少し聞きたいことがあるんだが………緊張しなくていいから、包み隠さず話してく

れ

「う、うんっ！」

「まずは茶道部の活動についてなんだが、普段は制服か？」

「うん、そうだよ。でも文化祭の時は着物を着たりすることもあるよ」

「週にどのくらい集まっている？」

「基本は自由かな？部員は14人で、男の子と女の子でちょうど7人ずつだよ」

全員が活発に活動してるわけではなさそうで且つ、文化祭は年に一回。

茶道部の女子部員としての被害は、限りなくゼロに近いと言つてもいいだろう。

「なるほどな。ちなみにだが、お前はいつもどこの女子トイレを使っている？」

「……えっ？ふえええええ！」

——おっと、率直に聞きすぎた。

今の言い回しだと、オレが変態だと自白してるようなものだな。

「えっと……結局、何が知りたいのかな……？」

松原は怯えるようなそぶりをみせる。

まあ、普通こんなこと言うはずもないな。

仕方ない、ここは正直に答えてやるか。

「これは機密事項なんだが仕方ない。実は、この学園で盗聴と盗撮をしてる人間が現れた」

「ええっ!? そ、それは犯罪なんじゃあ……」

「ああ、学園長も笑って見過ごす気はないだよ」

「つまり、女子トイレのどこかにその盗聴機器が見つかったってこと？」

「そういうことだ」

松原は困惑した表情を見せる。

氷川とは違つて怒りといった感情はなさそうだ。

どちらかと言うと酷く怖がっているような、そんな感じ。

自分も被害に遭っているだろうか、まあ当然の反応だな。

「一刻も早くとつ捕まえられるように頑張るけど、これから女子トイレ使うときは注

意するようにな」

「うんっ！わかった！」

「ところでだが、お前、今までずっと何をしてたんだ？」

唐突な疑問を松原に投げかけた。

一人で使うには広すぎるこの空間だけに少々違和感を感じる。

「今日は部活動が無いからだよ」

「はあっ？部活動もないのに来たってのか？」

「家だとあまり集中できないから、ここでよく勉強してるの」

確かに入ってきた時から勉強してる姿は見えたが………テストはまだ先なのに、今勉強する必要があるのか？

「オレからしたら、意味がわからんな」

「ええっ？この勉強の内容が？」

「違げえよ。天然ボケかますな」

「ふえっ!?じ、じゃあ、勉強してる私に対してってこと?」
「そう、それだ」

オレが人差し指を向け肯定すると、松原は考えこむように首を傾げる。

「うーん……………」将来のため”、かな?」

「将来ため、か……………」考えたことないな」

「ええっ!」

「全てが行き当たりばったり。もっとオレが利口なら、もっと楽な生き方ができただろうな」

「でも、何も考えずに今を生きるっていうのも大事だと思うよ。私は、将来のことばかり気にして時々苦しい思いをすることもあるから……………」

「人それぞれ、ってことか。オレからしたら松原が羨ましいよ」

「ええっ!?!な、なんで!」

「上手くは言えねえけど、なんか青春をしてる感じがする」

「青春……………」?

「友達と遊び行ったり趣味に没頭したり部活に行ったり……………」なんでオレはこう

なつちまつたんだか……………」

自分で言つてて悲しくなる。

中学の時は、毎日毎日クラスメイトたちとバカやって、笑い合つて、本当に楽しかつた。

女との関わりはなかつたけど、それでもオレなりに最高の日々を過ごせていたと思ふ。

今のオレときたら……………相変わらず女を毛嫌いし、女子どころか男子生徒ですらオレに近づかなくなつた。

もう一度、あの日々を取り戻せたらいいのにな——。

「今からでも遅くないよ！きつと！」

「松原……………」

俯くオレに、松原は ”大丈夫だよ” と言わんばかりに声を上げた。

ホントつ、こいつは変わっている。

こんなオレにも松原は他の人と同等に扱ふ。

白鷺千聖もきつと、この一面を気に入ってるんだろ
うな方向音痴なのがたまに傷だが……………。

「……………悪いな。恥ずかしい姿を見せちゃった」

「うんうん、大丈夫だよ。私にもできることがあつたらなんでも言つてね！」
「ああ、その時は頼む」

松原の為にも、一刻も早く犯人を見つけ出さないと
な。心の禪を締め直し、部屋を後にした。

第9輪 欲に塗れたチューベローズ

事件が発覚してからと言うものの、オレと氷川は懸命に搜索を続けているが手掛かり一つ掴めない。

昨日氷川に話した通り、各部活の女子更衣室にも盗撮カメラと盗聴器が数十個発見された。

しかしそれ以降なんの発展もすることなく、ただただ時間だけが過ぎていく。

「それでは、始めさせていただきます」

そして今日も放課後の教室に2人で集い、無意味な会議が開かれる。

「まずは私からですが、相変わらず盗撮機器が見つかりません。おそらく犯人は、この犯行を辞めた可能性が非常に高いものと思われまます」

「まあそう考えるのが妥当だろうな」

氷川から手渡された書類を片手に、缶コーヒーを一口飲む。

この紙に書かれている内容はどれも憶測でしかなく、確実なものとは言い難い。ちなみにだが、オレの調査も全く進捗していない。

『盗撮・盗聴犯がいた』とは言えない為、言葉を濁しながら説明してるが怪しい人物の目撃証言は一向に得られずにいる。

この際だからはっきり言おう。

事件は迷宮入りの一歩手前まで来ている。

「盗撮機器が見つかったから3週間弱。犯人もビビって動けないんだろ。学校側にバレたと気づいているわけだし」

「ええ。少しでも手がかりを得る為にも残しておくべきでしたね……」

「そういうえげだが、松原にも協力を依頼した」

「えっ？ 何故そのようなことを？」

「これ以上オレたちだけで動いても何もできねえ。苦肉の策つてやつだ。察しろ」

「……………松原さんには説明したんですか」

「もちろんだ。ただ、じつと待ってるより自分で少しでも解決に導きたいと意気込んでる」

「松原さんには感謝しなければいけないですね。それで、彼女にはどんな指示を？」

「決して動じるな、とだけ伝えた」

「あのっ、それはどういう……？」

「後々分かることだ。オレの仮説が正しければ、犯人は時期動き出す」

仮説……と言ったが、これもあくまで憶測であり妄想だ。

人に言いふらしても何も得をすることなんてないだろう。

「私にはその仮説を聞かせないと言った口ぶりですね」

「その通りだ。お前は引き続き、盗撮機器の有無だけ確認してくれたらそれでいい」

「……………わかりました。これで会議は以上とします。今日は部活動に行きますので、学園長に最終報告をお願いします」

「はいはい、分かりましたよ」

氷川はやや不満気に教室を後にする。

そんなに聞きたければ教えてやる——と言うには遅すぎた。

全く、氷川の真面目すぎる性格は面倒だ。

全てを知ろうとする必要はないだろうに、奴はそれでも食い下らない。

オレにはその手を通じないと最近やっと学習したようだが、それでも奴は決して引こうとしない。

だが、そういう姿勢が無ければ今回のような一向に進まない事件でも諦めず捜査を続けていられるんだろう。

オレは感謝せざるを得ない。

松原も含めて、気持ちの良い学校を過ごさせてやれるように尽力しないと。



「——というのが今日の調査報告だ。何か質問は？」

「いや、特にはないよ。書類も見やすくて分かりやすい。何も言うことはないよ」「そりゃあ氷川が製作してるんだ。当然だろ？」

学園長と向かいあい、足を組みながら話す。

こいつ自身何か策を論じてるんだろうが、こちら側に一切語ろうとはしない。

きつとオレと同じタイプの人間なんだろうな。

「念のため聞いておくが、オレたち以外に口外したりしてないだろうな？」

「もちろんだよ。もし外部にでも漏れれば、学園の評判はガタ落ちだからね」

あくまで学園長は学園の評判が落ちないか否かで頭がいつばいなようだ。

こいつも一人の大人。

学園の為と言いつつ、結局は自分の保身が目的で口外を禁止してるに違いない。

「もういつそのこと女子校に戻したらどうだ？」

「少子化のこの時代だとなかなか厳しいんだ。それに、犯人が男の子って決まったわけでもない」

「確かにその通りだ」

「それで、進捗はどうなのかね？」

「書類に書いてる通り、なーんの進展もねえよ。お手上げ状態だ」

わざとらしく、両手を上げて降参のポーズをとる。

「はははっ、どうも長年教員生活を続けていると生徒の考えることがわかるようになってね」

「……………なんの話だ」

唐突の学園長の話に全く理解できないが奴は構わず話し続ける。

「キミは私に嘘をついているね？」

「なんのことだか、さっぱりだ」

「具体的にいうと、”なんの進展もない” という発言。2人での調査は上手くないかなくとも、キミ独自では順調に進んでいるんだろう？」

確かに、学園長の言っていることは事実だ。

さつき言った ” 仮説 ” の実証に向けて、オレは準備をし始め、現段階では良い具合に進んでいる。

オレの仕草か言葉遣いからかどこで察したかは知らねえが、こいつの見る目は確かだ。

これはもう認めるしかない。

オレは本当に観念したかのように、ケラケラと笑いながら答える。

「流石は学園長、と言ったところだな」

「君は素直で良い子さ」

「はっ、どこが。ただの捻くれだろ」

「顔に全て出ているんだよ。少しはポーカーフェイスを覚えたらどうかね？」

「そうだな、善処する——って、オレの話はどうだっけいいんだよ！」

「ああ、すまない。脱線してしまったね」

学園長も同様に笑い、話を戻す。

「生徒の考えてることがわかるなら、一人一人アンタが尋問してやればいいんじゃないかねの？」

「それも一つの方法だろうね。それを踏まえて、ここで一つ質問しよう。この私が生徒のことをじっと見ている姿を見て、キミはどう感じる？」

「シンプルにキモい。何かヤラシイことでも考えていそうで」

「そうだろう？」

「分かりやすい例えだこと」

「そんな方法より、キミが考えてる計画の方がよっぽど確実じゃないかな？」

「……………そこまでわかるんだったら、アンタはエスパ―だろ」

「なら、この一件が解決次第答えよう。紙にでも書いて保存しておくよ」

「おお、それは面白れえ。楽しみにしてるぜ」

「もし私が正解していたのなら、一つ約束を聞いてもらおうかな」

「金を要求するのと、オレが圧倒的不利に陥ること以外ならなんでもどうぞ」

その話は半分聞き流し、学園長室を後にする。

部屋を出たと同時に、何事にも動じず動いてくれている松原に携帯で一報入れる。

『周りに誰もいないことを確認してから始めてくれ』

すぐに既読がつき、クラゲのキャラクターのOKスタンプが返ってきた。

松原だから少し心配だが、これさえ上手くいけば後は芋づる式で次々謎が解けていくだろう。

過去に放送した有名なドラマの名台詞を拝借するなら、きつとこういうだろう。

やられたらやり返す。

被害にあった生徒の人数分だ。



秘密裏に練った策もいよいよ大詰め。

学園長の持つ生徒の個人情報載っているファイルから、犯人と思われる人物の経歴を調べ上げた。

そして、松原の勇氣ある行動のおかげで犯人を特定することに成功。

そしてこの事件の犯人は今、確実に指定した場所にいるはずだ。

なんの確証もなかった仮説を、確実なものに仕立て上げるまでに費やした期間はおよそ1ヶ月。

期末試験を目前にしたその日、いよいよ行われる。

時はきた。ただ、それだけだ――。

放課後を迎えてから1時間たった16時半ちょうど。

犯人と思わしき人物が、下駄箱入れ付近の壁にもたれ掛かり携帯をいじっている。身長はオレと同じぐらいだが、体型は明らかに違う。ぽっちゃり……いや、アレはもう完全にデブの類か。

どこか清潔感を感じさせない髪型も、近寄りがたい印象を受ける。オレはそいつに向かってゆっくりと歩み寄り、肩を掴み声をかける。

「よお、探したぜ。盗撮&盗聴犯さんっ！」

ニカッと笑うオレとは対照的に、その人物は驚きを隠せないとおった表情を見せた。

それもそのはず。

ここへ来るのは本来オレじゃない。

このデブを釣るために仕掛けた罠だ。

そんなことをお構いなしに、話を続ける。

「ここで話すのもなんだ、場所を変えようぜ。もし逃げ出しでもすれば………わかつてるよなっ？」

さっきの笑いとは一転、威圧するように語ると、奴は暑さと違った汗を流しながら黙ってついてきた。

歩いている最中もオレたちに会話はしない。

そこにあるのは今から取り調べを行う捜査官と、尋問されることに怯える容疑者の図だけだ。

いつも氷川と集うオレの教室に招き入れ、適当な場所に座らせる。

「まずは、お前の言い分を聞こうか。一言目、お前は何を話す？」

容疑者はポケットからハンカチを取り出し、額の汗を拭き取りながら震えた声で答える。

「ボつ、ボクは何も知らない！ここへきた理由も、キミが怖くてついてきただけだ！」

よく聞く言い逃れから話し始めた容疑者にイラツとしながらも、オレは平常通りのトーンで返す。

「まあ、何とか誤魔化そうとするその度胸だけは褒めといてやる。だが今から行うのはお前が犯人だと実証するための尋問だ。心して答えろよ」

「うっ、うう……………」

「それじゃあ、まずオレがどれだけお前のことを知っているか教えてやろう」

ここで言葉を区切り、あらかじめ教室の机に置いてあった書類を取り出し読み上げる。

「名前は丸岡 大輝。2年B組、写真部所属でバイトもしているようだ。10人家族の長男坊で親や兄弟からも慕われている……………か。ここまでで間違っている点は？」

「あ……………ありません」

「これはオレの推測なんだが、お前の家、生活が苦しいんじゃないの？」
「……………!!」

オレの言葉に、容疑者は目を大きく見開いた。

「肯定、と考える良さそうだな」

「ど、どうしてそのことを……………」

「家族構成を知ってるぐらいだぜ？家の住所も当然調べてある。さっきの言葉を思い出してみろ。」両親や兄弟からも慕われてる”　　っていうのは、実際に聞いたからだぜ？」

両親から聞いたというのは嘘になるが、口が固そうな次男坊には確認済み。

あまり小さいのだと、口を滑らせる可能性があるから怪しまれないようにするのに苦労した。

一つ聞いたら十個返ってくるような弟君で助かった。

「お前よお、何で盗撮や盗聴なんてマネをしたんだ？」

「ま、まだボクが犯人だと決まったわけじゃないじゃないか！勝手にボクだと決めつけて……………せ、先生に言いつけるぞっ！」

必死に足掻こうとする容疑者に心底呆れる。

家族にまで接触しといて、犯人だという証拠がないわけなのに。

オレはため息まじりでゆっくりと実証する。

「いいか？お前が犯人だという証拠をひとつ一つ挙げていく。まずはお前の脳内に語るでしょう」

「ぼ、ボクの脳内……………？」

「今から一週間前、お前が接触した人物を思い出せ。それも、顔を合わせてでは無く、手紙等を通じてだ」

「手紙……………あつ！もしかして!？」

「お前に女子生徒の下着写真を要求した人物がいるな。そいつはオレの友達だ。お前に名前を知られるのを覚悟で手伝ってくれたんだ」

学園長室を後にした出来事を思い出してほしい。

オレはこの学園唯一の友達に、あることを頼んでおいた。

それがこの容疑者に向けて手紙を差し出すことだ。

内容は至ってシンプル。

『ある女子生徒の下着写真をください。お金は用意しています』というもの。

容疑者はそれに応じ、金と引き換えに写真を提供した。

つまりは、オレがこの事件を最初に聞かされたときに浮かんだ最悪のシナリオ通りに

なつてたというわけだ。

約1ヶ月もの間、オレたち風紀委員に見つかるのを恐れて売買できなかった容疑者にとつて、この案件は受けざるを得なかったのだろう。

相手が誰であろうと、やるしかなかった。

何故ならそこに何千円という金が舞い降りてくるのだから。

オレの学園の友達でこれら全てを行った張本人は、松原花音その人だ。

「実際に、金は指定された口座に振り込み済みのはずだ。お前の銀行口座さえ調べれば容易にわかる」

「そ、そんなマネさせるわけないじゃないか！人の銀行を覗こうなんて……最低だよっ！」

「人の下着姿を覗いておいて何を言ってるんだか……。なら、お前が犯人だという決定的な証拠を見せてやる」

手に持っている書類と共にクリップで挟まれた茶封筒から数枚の写真を取り出し、容疑者に差し出す。

そこには、容疑者の一連の行動が全て写されている。

奴の顔は真つ青に変わり、手渡した写真をこれでもかというぐらいに破り捨てた。

「そんなことしても無駄だ。パソコンの中に全てバックアップしてある」

「な、何故この写真を!?!」

「お前、下駄箱の奥をちゃんと見てなかったな?」

「下駄箱の……奥?」

「真つ暗でほとんど何も見えなかったはずだ。そこに黒塗りの隠しカメラが仕込まれてることに気づかず、写真を置くんなんてな」

「うっ……嘘だ……?!?!」

松原の下駄箱には少し細工を施した。

黒い隠しカメラをより見えにくくする為に、下駄箱の奥を丁寧に黒く塗りつぶし、写真を置く時間も下校間近にしておいた。

残り少ない下向時間と日が落ちてることも相まって、全く見えなかっただろう。

「さあ、証拠は以上だ。観念しろ」

容疑者は椅子から崩れ落ちて、泣き始めた。

これで丸岡　大輝は一連の盗撮・盗聴犯だと確定した。

「それにしても、何でこんなことをしたんだ？下手したら警察沙汰になるところだったんだぞ？」

「……………お金が欲しかったんだ」

「家が貧しいからか」

「ああ、そうだよ……………。真つ当なバイトをしても、高校生が稼げるバイトなんて限られてる。ボクの特技が活かせて、稼げる行為は……………盗撮と盗聴で売買することしか考えられなかったんだ……………」

「盗撮と盗聴で得られた金で賄われて、親や兄弟が喜ぶと思うのか？」

怒りを含んだ声を発するが、奴は興奮したかのように語り出した。

「それだけじゃないんだ！その写真を渡した人と友達ができた!!ボクの陰湿な特技を通じて欲しいものが次々と手に入った……………!もうやめられな—————」

奴が話し終わる前に、鼻っ柱に力を込めた右ストレートを思いつき振り抜く。

4〜5メートル飛んだところで止まり、苦痛の声を上げ、悶え転がり回る。

血のついた握り拳を緩めることなくゆっくりと歩み寄ると、奴の姿はどこか哀れみに満ちていた。

鼻からは大量の血が流れ、額からは汗が止めどなく溢れ出る。

濡れた髪を鷲掴みにしてから引つ張り、奴の顔近くで怒鳴りながら語る。

「そんなクソみたいな関係の何が楽しい!? 友達つてのは、一緒に笑って、楽しんで、思
い出を共有しあえる関係だ!! そんな人間関係も、犯罪行為で得られた金も、全て捨てち
まえ!!」

手を離し立ち上がる頃には、奴はピクピクと痙攣し言葉を発せない状態になっ
た。

ああ、ダメだ。まだ怒りが収まらねえ。

今回のヤロオは下劣すぎた。

とりあえず、学園長室にこいつを連れ出して事情を説明するか……………。

オレは動かない奴の首根っこを掴んで、学園長室まで引きずりながら歩き出す。



事件が解決してから後日。

オレと氷川と松原で、ささやかながら学校の屋上で祝杯をあげていた。

嫌がる氷川を無理やし連れ出し、炭酸ジュースやお菓子を持ち寄るミニパーティー。夏の日差しも鎮まり、夕方を迎えたところで開催した。

「いやあ、ほんつと松原には助けられた」

「ええ、本当にありがとうございました」

「うんうん、2人の苦勞に比べたら、私なんて……………」

笑顔で頬をかきながら照れる松原にチョコスティックを差し出す。

「それにしても、月島くんの身勝手さにはほとほと呆れます。私にだけでも、教えてく
れてもよかったのに……………」

「だから言っただろう？ 確信はないって。あそこでオレがベラベラ話しても、所詮は憶測

でしかねえんだよ」

不機嫌そうな表情を見せる氷川にもチヨコステイックを差し出す。だが奴は頑なに受け取ろうとはしない。

「それに、構内でお菓子を食べるだなんて……………」

「紗夜ちゃん、今日ぐらいいいんじゃないかな?」

「松原さんまで……………」

「だって、紗夜ちゃんが頑張ってくれなかったらカメラは放置されたまままで今も被害が続いていたかもしれないんだよ?」

「そうそう、お手柄だ氷川」

「そう言われましても……………」

氷川の口が開いた瞬間を見逃さず、チヨコステイックを無理やし押し込む。

「いいから食え!この菓子類は松原の奢りだぞ?食わなきゃ損損!」

「そこまで言われたら……………仕方ないですね……………。しかし、後片付けはちゃんと

行い、ゴミは持ち帰ること。いいですね？」

「うんっ！わかった！」

「うーい」

風紀委員長の許可も下りたことで、ようやく本題に入る。

最初に切り出したのは松原。

「それで、犯人はどうなったの？」

唐突に投げかけられた疑問に氷川が答える。

「学園長に謝罪を行い、これまで盗撮や盗聴で得たお金は全て返金。わからない分は福祉団体に寄付することになりました。もちろん、それらのデータは完全消去し二度とこんなマネをしないように誓っていたいただきましたよ」

「売買で渡した写真は出来るだけ回収しているが、全部とまではいかなそうだ。なにせ数が多すぎる」

「そっか……でも、これからはそんなことをされるのはなくなっただね！」

「少なくとも、それは保証する」

丸岡から買い取った写真でまた売買が行われるとなると、また面倒ごとになるだろう。

だが、奴がその一件に関わらないと周りに知れたら少なからず学校側にバレたと思えるはずだ。

これで迂闊に行動できまい。

まあ、売買に参加した男子生徒から逆恨みされることは間違いないが、今更しれたこと。

オレにとってはどこ吹く風だ。

「ちなみにだが、松原」

「うん? どうしたの?」

「お前は丸岡に誰の下着姿を所望したんだ?」

「ええっ!?! ふええええ!?!」

手紙を差し出すとき、誰でもいいから適当に下着姿の女の名前を書いておけと伝えた

んだが、急に思い出した。

「月島くん……それを聞くなんて、最低ですよ」

「まあそれもそうだな。松原、無理に答えようとするとするな。オレは全く気にしてない。

「そ、そうしてくれるとありがたい……かな」

「さあつ、仕切り直して再開するぞー！期末テストなんて糞食らえだつ！」

「そんなことさせるわけないでしょう！」

氷川のツツコミに、オレたちは笑い声を上げ、小さな宴会場は笑顔に包まれた。

第10輪 突風に揺れるクレマチス

長かった一学期も終了間近に迫り、オレの気分は最高潮に達している。

しかしその高揚も束の間、オレたち学生には避けて通れない道————
が今日から始まろうとしていた。———— 期末テスト

学期内に教わった全ての教科から出題されるそのテストは宛ら、長篠の戦いにおける織田信長の鉄砲隊。

銃弾と化した様々な問いが雨のように降り注ぐ。

勉強するのは不可避。

もし赤点を取ろうものなら、夏休みは補修地獄に見舞われる。

去年は受けずに済んだが、今年はそうはいかない。

なにせ、理数系が目も当てられないぐらい壊滅的だ。

相加平均と相乗平均？

複素数？

等加速度直線運動？

なにそれ日本語？というレベルである。

国語は文章の中に答えがあるし、英語も単語さえ覚えればなんとかなるんだが……数字を使って解を求めるのはどうも苦手だ。

こういうのは氷川のような生真面目な性格の人間が向いている。

将来使うことのない事を勉強して、なんになるんだか。

何でもかんでも真面目に勉強して、先生に媚を売り少しでも成績を上げようとする人間の気が知れねえ。

布団の中でそう考えてる内に起床の時間を迎えていた。

外は生憎の雨。

今日から1週間、期末テストを受ける身からするとこれほど憂鬱になるものはない。

空は黒雲に包まれ、台風でも近づいているのかと言わんばかりの豪雨が窓ガラスにぶち当たる。

部屋の中からも聞こえる雷の音もゴロゴロと鳴り、いつ落ちてもおかしくない状況だ。

「いつそのこと台風が直撃してこのまま期末テストが延期してくれたらな」

窓越しで外を見つめながらポツリと嘆く。

ポツドで湯を沸かし、トースターでパンを焼く間にテレビをつける。チャンネルをニュースに変えると、ちょうど天気予報を伝えていた。

『本日の天気は非常に荒れた雷雨となっております。降水量も東京では過去に例を見ないほどの数値を記録しており——』

……………非常に荒れた雷雨？

お天気キャスターの言葉を頭の中で繰り返していると、各都道府県の最大1時間降水量のグラフが表示された。

どこもかしこも100mm越えを記録し、ことの異常性を強調している。確かにここ最近天気は悪かったが、まさかこれほどまでとは……………いやあ、お天道様には頭が上がらねえ。

「奏っ！アタシは今日も出勤だけど、学校ちゃんと行きなさいよ！」

「はいほーい。わかりやしたよー」

玄関先で声を上げるおふくろに適当な返事を返す。

仕事で忙しいおふくろには申し訳ないが——学生には学生の特権がある。

視線をテレビ画面に戻すと、東京都を含むほとんどの都道府県に大雨洪水警報が発令されていた。

警報の発令、つまりは学校に登校することが許されない状況になったのだ。

今の時刻は8時10分。

何人かの生徒は既に登校を終えている時間だろうが、目と鼻の先にあるアパートに住むオレからしたら全く関係ない。

今も焼き上がったトーストとインスタントコーヒを堪能しているとところだ。

ちなみにだが、風紀委員の仕事はテスト期間の為に行うことはない。

のんびりゆったりできる幸せ………今のうちに堪能しておかないとな。

そう考えていると、携帯に着信が入った。

かけてきたのは松原だ。

「はいはい、こちら月島」

「あつ！おはよう月島くん！」

「おお。それで、一体何のようだ？こっちはテレビを見ながら朝飯をゆーっくり食

べてるところだけど?」

「そのことで電話したんだあ! さっきすれ違った先生に聞いた話なんだけど、今日は警報が出たからテストは中止らしいよ」

「やっぱり中止か。あと、電車も止まつてるみたいだな。全線運転見合わせだよ」
「ええっ!?! そ、それは困ったなあ……………」

「そうか、お前電車通学だったか」

「うん……………お母さんに迎えにきてもらおうかな……………」

この雨の中だとそうせざるを得ないか。

しかしまあ、車で来るにしても道路が水浸しの上に松原と同じ考えの輩が多いに違いない。

いずれは渋滞を起こして帰るに帰れない状況に陥ることは容易に想像できる。
そこでオレは、ある提案を松原に持ちかける。

「もしよかったら、うちに来るか? すぐそこにあるんだが」

「そ、それは申し訳ないよっ!」

「気にするな、家には誰もいない。もう一人、確実に学校にいますであろう奴にも声をか

けるつもりだ」

「いるであろう？それでもしかして……………」

「お察しの通りだな。それじゃあ、お前はどうしたい？」

「うーん……………」

2人の間に数秒の沈黙が流れる。

「……………せっかくだから、お邪魔してもいいかな？」

「もちろんだ。なら、今から奴にも連絡する。オレの家はそいつが知ってるから連れて行ってもらうてくれ」

「もし勧誘に失敗したら……………」

「安心しろ。絶対に成功する」

「う、うん、わかった！また後で連絡するねっ！」

松原の着信を切り、すぐさま奴に電話をかける。

1コールと待たずそいつは出た。

「……………一体何の用ですか？もうすぐで試験が始まりますが、今伝えなければいけない用件なんですか？」

いつもより荒っぽい口調で話してきたのは、仕事仲間の氷川だ。テスト前からか、やけにピリピリしてるように感じる。

「今伝えないといけないことだな」

「なら、手早くお願いします」

「二つ目、クソ真面目に追い込みをしてるお前に残念なお知らせから」

「大きなお世話です！」

「今日の期末テストは警報発令に伴い中止となった」

「……………そうだったんですか」

「二つ目、電車も止まって全く身動きが取れない状況にあること」

「それは困りましたね……………」

「三つ目、そんな困り果てた氷川に朗報だ。今からオレの家で松原も来るんだが、お前

にも———」

「お断りします」

オレの言葉を遮り電話がプツンと切られた。氷川に再度着信を鳴らす。

「お断りしたはずですが？」

「まあまあ、最後まで話を聞いたらお前の考えも変わる。お前はただ遊ぶ為だけに招くわけじゃないんだぜ？」

オレは苛つく氷川を宥めるように話す。

「あなたの考えならお見通しです。どうせ、私に勉強を教えて欲しい、とでも言うつもりなんでしょ？」

「流石だ氷川。まさにその通り」

「勉強は1人で行うものです。大勢でやると、かえって集中出来なくなります。それに、期末試験ではある意味私たちは敵同士。双方、特に私側にメリットがあるとはとても思えません」

的確な分析で詰みを狙う氷川だが、まだ考えが浅い。

お前は確かに優秀だ。

オレや松原では氷川より勉強において確実に劣る。

だが、今回はあくまで期末テストだ。

莫大な範囲の広さと問題量。とても一人で捌き切れるとは思わない。

比較的頭の良い松原と秀才の氷川でバカのオレを教育する。

そうすることでインプット・アウトプットが成立して双方メリットが得られるだろうに。

この方式を”バカも育てば役に立つ”とでも名付けようか。

しかしまあ、こつち側が得をしているように見えなくもない。

これはあまり使いたくない策なんだが……………仕方がない。

オレは氷川を必ず招くことができる一手を打つ。

「確かにお前の考えはもつともだ。けどな、これを聞けばお前は必ずうちに来る」

「……………一体なんだというんですか？」

「まず、お前には行きつけのキャンディー屋があるんだよね？」

「な、何でそれを……………!？」

「その店主はオレの中学時代の友達の親御さんでな、よく味見役を頼まれてたんだ」

「それとこれと、何の関係があるんですか？」

「今季登場予定の新作が何種類かあるんだが……なんと今、それがオレの手元に
ある」

「……………!?!」

「その味見役をお前に譲ろう」

「何故そんなに上から目線なんですか！」

「何故って、お前の好みで出す品が決められるんだぜ？現にお前が味見役となれば、誰よりも発言権があることになる」

「誰よりも……………」

「どうだ？引き受ける気になったか？」

無言で考え始める氷川。

きつと携帯越しに、頭を抱えて悩みまくってるんだろな。
考えた結果、思いのか早く答えを出してきた。

「……………わかりました。その味見役を受けさせていただきます。その代わり、あなたが勉強以外のことをしだしたら即帰らせていただきます。この条件、のんでくれますね」

？」

「ああ、いいだろう。時期に松原がお前の元に行くはずだから、一緒に来てくれ。場所はわかるな？」

「はい、もちろんです………あつ、ちょうど松原さんが来られました。今からそちらに向かいます」

「くれぐれも気をつけろよ」

そう言い残し電話を切る。

物で釣って頼み事をするなんて、男らしくないとオレ自身思う。

だからこそ使いたくない一手。

だが、氷川の考えを詰むことには成功したようだ。

まあせっかくの機会だ。

氷川と松原の頭脳を有効利用させてもらおう。

そしてこの時のオレはまだ知る由もなかった。

この後、とんでもないことをやらかすということ——。



氷川との通話後、急いで朝飯を完食し部屋を片付け、身のこなしも整えた。2人を迎える準備ができたと同時に家のチャイムが鳴る。

「こんな雨の中悪いな。どうぞ入ってくれ」

「お邪魔します」

「……………よっほど酷かったらしいな」

雨風が激しい外は、もはや傘なんて使い物にならない状況にありそうだ。

松原に至っては雨を凌げるものを手にしておらず、全身がずぶ濡れ状態にある。

「松原、お前傘はどうした？」

「あはは、風で飛ばされちゃった……………くしゅっ」

松原はブルブルと震え、くしゅみをした。

「学校を出たのはよかったです、ここに辿り着くまでが難関でした……………」

「風邪をひかれては元も子もねえな。ほらっ、このバスタオルで体を拭け」

「ありがとうございます。助かります」

「うん、ありがと……………でも、この濡れた制服じゃあお家に上がれないかな……………」

「なら、オレの服を貸してやるよ。その制服も全部洗濯して乾かしてくれて構わん。なんならシャワーも貸すぜ？」

「し、シャワーはちよつと……………」

「安心しろ、下心なんてものは持ち合わせてないし覗く気もさらさらない」

「そんなこと私が許しません」

「しねえつつつてるだろ！正直、このまま風邪をひかれたらオレが困る。だから松原、遠慮すんな」

「……………うん、わかった！月島くんの言葉に甘えさせてもらうね」

「氷川はどうする？」

「私はあまり濡れなかったので遠慮しておきます。靴下も替えの物を持ってきているので」

「用意がいいことで。じゃあ松原、浴室まで案内する。氷川は適当にリビングで寛い

でくれ」

「寛ぐ前に試験勉強の準備です」

「ハイハイ、ソウデシタ」

松原を浴室まで連れて行き、シャワーがお湯になるよう設定して部屋を出る。

リビングに戻ると氷川は机に教材を並べ、つけっぱなしにしたテレビを凝視していた。

「今日は警報が解除されることはないだろうな」

「ええ、この大雨ですから当然です」

「……………悪いな。こんな形で招いちまって」

「今更なんですか？もうとつくに過ぎたことなので気にしてません。それに、風紀委員から赤点者を出すなんて真似は絶対にさせません」

「なら、このバカにも分かるように解説頼むぜ」

「望むところです」

氷川は自信満々の笑みを見せると、テレビを消し勉強にとりかかった。

やはりコイツを招いて正解だったな。

「そういえば、松原に着替えを貸すんだったな。さてどれにしようか……………」

オレは自室に入り、適当なジャージを取り出して浴室へと向かう。

「松原、これでいいか……………」

「ふええ、下着もびちゃびちゃだよお……………えっ？」

——唐突の光景に思わず固まる。

だが、オレはとんでもないことをやらかしたということだけはハッキリと理解した。ノックもせず入った脱衣所には、上下水色の網柄で統一した、下着姿の松原の姿が目に入る。

まだ全裸ではなかったのは不幸中の幸いだった。

しかし、『覗く気もさらさらない』と言った矢先、こんな奇行に走るオレはアホだ。

意識してないとはいえ、松原からしたらオレは『自分の破廉恥な姿を覗きに来た変態』としか映らないだろう。

この時、オレは誓った。

これから部屋に入る時は、必ずノックをしよう——と。

「……………」

「……………」

互いに顔を合わせ、無言の時間が流れる。

「……………着替え……………持ってきたから……………ここに……………置いとくぞ

……………」

「……………うん、ありがとう……………」

松原は掛けてあったバスタオルを急いで体に巻き、無理な笑みを浮かべた。それと同時にオレは逃げるかの如く勢いよく部屋を出る。

「洒落になってねえぞ、オイ……………」

肝心の氷川は——勉強に集中してるようでこちら側に気づいていない様子だ。あたかも、何事も起きなかったようにリビングに戻り鞆から教材を取り出す。

「月島くん」

「な、なんだ？」

突如オレの名前を呼ばれた。

「まさかとは思いますが、自ら覗きに行つたのですか？それとも、たまたま目に入ったのですか？」

——どうやらお気づきのだったようだ。

動かしていた手を止め、冷たい目でこちらを見つめる。

隠してもどうせバレるだろうし、ありのままの真実を伝えよう。

「後者だ。断じて好んで覗きに行つたわけではない」

「ハア……………月島くん。あなたは丸岡さんと等しい行為をしたという自覚はありま

すか？」

「もちろん。だからこそ、お前に頼みたいことがある。松原に頼んでも絶対断られることだ」

オレの言葉を察したかのように氷川は立ち上がりオレの側まで歩み寄ると、右足を半歩下げ右手を大きく振りかぶった。

「……………覚悟はよろしいですね？」

「ああ。手加減なしで頼む」

氷川は表情を変えず、右手を鞭のようにしならせオレの左頬に強烈なピンタを喰らわした。

これは戒めだ。

心の中でそう呟きジワジワとくる痛みを必死に堪えた。

松原が浴室から出る頃には、無言で机に向かう女と左頬を腫れさせた男が勉強している異様な光景を見せていた。

「あのっ、月島くん……………シャワー貸してくれてありがとう。なんだか頼つぺたが腫れてるように見えるけど……………大丈夫?」

「ああ、気にするな。服はちよつとデカかったか?」

「ううん、大丈夫だよ。ズボンも紐を縛ればなんの問題もないよ」

某スポーツメーカーのTシャツ+同じメーカーの上下セットのジャージを貸したが、ややブカブカのように見える。

「そういえば、浴室に行った時下着も濡れてたと言つてたよな?」

「つまりは今、何も履いてな——いや、これ以上は何も考えないようにしようか。」

「えへへ。この服、月島くんの匂いがするなあ」

「……………そんなに臭うか?」

「ふえっ!?ち、違うよ!!心地いいって意味で、決して悪い意味じゃないんだよ!」

両手と顔を同時にブンブンと振り、大袈裟に否定する。

「まあなんでもいいんだけどな」

「あ、あはは……………」

「それは置いといて、試験勉強始めるか。早速だが氷川、数学教えてくれ」

「本当に早速ですね……………。少しは自分で解けるようになってくださいね？」

「ハイハイ」

オレの脳内詰め込み時間が幕を開けた。



勉強を始めて早3時間。

オレは分からないところを氷川と松原に聞きまくった。

そのおかげか、何とか赤点回避までは持ち込めそだ。

いつの間にか雨はピークを過ぎ去り、雷も鳴らなくなった。

しかし未だ強風が吹き荒れ、外に出るには危険な状況にある。

一方で洗濯された松原の衣類は、全て浴室乾燥で乾かしている途中だ。

もちろん、オレは指一本それらに触れていない。

「そろそろ昼だし、休憩にするか」

「うんっ。はあ………疲れたなあ」

「そうですね。お二人ともお疲れ様です」

「紗夜ちゃんもお疲れ様！」

オレはテレビをつけ、昼に放送する人気ニュース番組にチャンネルを変える。

「それでも、今日の大雨について話題が挙げられていた。」

「警報もしばらくは解除されなさそうだな。」

「——あつ、月島くんの写真だ！小さくて可愛いなあ」

松原は部屋に飾られていた写真立てのひとつを見つめ呟いた。

それは、5歳の時に水族館へ行った時の写真。

水槽の中を豪快に泳ぐデカイサメに大興奮したのをよく覚えている。

おふくろに『もしオレが水槽の中に放り込まれたらサメに食い散らかされる』と言われたときは恐怖で震え上がったものだ。

まあもちろん、こんな恥ずい出来事を語るわけがない。

「昔から純粋無垢でアホ丸出しのクソガキだったよ」

「純粋……………無垢……………？」

「おいつ、そこは肯定するところだろ氷川？」

真剣な眼差しで首を傾げる氷川にツツコミを入れる。

飾られている写真は全て、オレが幼稚園や小学校の頃だった物ばかりだ。

どれも懐かしい思い出。

全て語り尽くすには少々時間がかかる。

「ねえ月島くん？」

「卒アルを見せろ、という申し出は受けないが？」

「あはは、バレちゃった……………」

「少しぐらいいいのでは？私も少し興味があります」

「お前がそこまで言うのは珍しいな」

「ええ、人の過去を散々遡った挙句、あんなイタイ台詞を語るあなたの過去を知るせつ

かくの機会なので」

「ひつどい言われよう」

「勉強を3時間月つきりで教えたお礼ということはどうでしょう?」

「飴の味見役で手をうっただろうが!」

「さあ? 何のことでしょう?」

白々しい態度を取る氷川に苛つきを覚えるが、まあ最もな取引だな。

オレが奴の立場なら絶対に同じ手段を取る。

取引というのは自分がやや有利になるようにしたいものだ。

「……………いいだろう。ただし、中学の卒アルだけだ」

「わかりました。それで構いません」

「えへへ、楽しみだなあ」

オレは自室に戻り、机の引き出しから卒アルを取り出し二人の待つリビングのテーブルに荒っぽく置き、適当なページを開く。

それは丁度、中学一年時から中三までのクラス写真が載せられていた。

「多分、真ん中にいるのがオレだ」

「この時からヤンチャそうだねっ……………」

「……………？月島くん、ひとつ聞いてよろしいですか？」

「はいはい、なんなりどうぞ」

「私の見間違いかもしれないですけど、中学一年、二年当時のあなたの姿が見当たらないのですが……………」

「おお、よく気付いたな。実は中二の秋ぐらいに転校してな、その時のオレの写真は存在しない」

「……………!!本当だっ、紗夜ちゃん、よく見つけたね!」

「このアルバムの中で一番幼い月島くんの姿を探しただけのことです」

「からかうつもりだったんだろうが、残念だったな」

「それでも、なんだか楽しそう。心の底から学校生活を楽しんでるような……………そんな気がするなあ」

「実際楽しかったぜ。毎日アイツらとバカやって、派手に暴れまわったこともあった。藤村の件でも丸岡の件でも、情報収集で世話になった」

「すごく優秀な方々ですね」

「ああ、見返りは半端ねえけどな」

「それで、なんで月島くんは転校したの？親の都合とか……………？」

松原の問いに言葉を詰まらせる。

元クラスメイトを病院送りにして逃げました、なんて言えねえし……………。
まさか松原からこのことを聞かれるとは思ってなかったから、本当驚いた。
さて、どう返そうか……………。

「……………あつ！言えないような事情なら言わなくていいんだよっ！」

「あなたが言わなくても、そのうち私が調べて知ることになりますよ？」

「氷川に言われると、本気でやりかねないな。……………なら、この学園で唯一信頼に値するお前らにだけ伝えとく」

オレは一呼吸おき、ある異名を告げた。

「……………羽丘女子学園の女帝には気を付けろ」

「羽丘女子学園の……………」

「女帝……………？」

「噂に聞いた話だが、オレが転校するきっかけをつくったクソ女がそこに在籍してるらしい。オレに強い恨みを抱いてな」

「羽丘女子学園は私の妹が在籍してる高校ですね……………」

「なにつ!? そうか……………なら尚更気をつけたほうがいい。奴は、あまりに危険すぎる」

「わかりました、妹には私から伝えておきます」

「ああ、頼んだぞ」

羽丘の女帝。久々に口にした名だ。

かつてオレが恋心を抱いた女が、どういう経緯か不良娘に成り下がり、男顔負けの力を身につけ暴れまわっているという話を高校入学と同時に耳にした。

この1年間はなんの接点もなかったが……………花咲川からも近いしオレがそこにいと知られれば、何をされるか分かったもんじやない。

このまま平穏な日常が続けば幸いなんだが……………。

しばらく無言が続いたあと、氷川の携帯に着信が入る。

噂をすればなんとやら、かけてきたのは氷川の妹からのようだ。

「もしもし、日菜？……ええ、今は友達の家で……!?……ええつ、わかつたわ。また後でね」

「なんの電話だった？」

「私の母が車で迎えに来てくれるそうです。松原さんも家までお送りしますよ」

「ほんと?!?ありがとう、紗夜ちゃん！」

「話がまとまったなら早く帰った方がいい。雨も風も今が今日で一番マシだ」

「うんつ、少し着替えてさせてもらうね！貸してくれたこのジャージは洗って返すね」

「いや、そのまま洗濯機に放り込んでくれ。学校で渡されても変な噂が立つかもしれないからね」

「そっか、ならお願いします！」

松原は礼をするとそそくさと脱衣所に向かった。

氷川は机に置きっぱなしの教材を鞆の中に詰め帰り支度を行う。

15分も経つと氷川の親御さんがアパート前まで迎えにきた。

二人を玄関先まで見送る。

「今日は助かった。明日は確実に試験があるから、お互いベストを尽くそうぜ」

「ええ、もちろんです」

「そうだねっ！お互い頑張ろう！」

「それじゃあまた明日。風邪ひくなよ」

「お邪魔しました」

「お邪魔しました、また明日ね、月島くん！」

笑顔で手を振る松原に手をサッと挙げ答えた後、扉を閉める。

「さて……………勉強の続きでもするか」

足早にリビングへ戻り、再びオレは机に向かいペンを握った。

第11輪 夏風に揺らぐダリア

夏の香りが漂い、青い空と輝く海がやたらと綺麗に見える今日この頃。

藤村の事件以降真っ黒に染めていた髪に再び金のメッシュを入れた。

学校が始まって、オレの容姿に文句を言えるヤツはもういない。

これがオレのトレードマークだ。

そんなオレだが、期末テストも赤点なしで切り抜け毎日バイトに明け暮れていた。

おふくろの知り合いが経営しているという海の家で、ここ2週間働きづめの生活を送っている。

給料はその日の売り上げにもよるが、1日大体1万円。

そこからバイトするよりもよっぽど稼ぐことができているのだが………まあ、心身共にすり減らしながら感じて。

今日も真夏の太陽を直に浴びながら、海パン一丁のオレは店長にこき使われながらせつせと働く。

従業員もオレと店長の2人だけだから、休んでいる間すら与えられない。

「チンタラすんなや奏！次は3番テーブルに生ビール追加や！」
「わーっつてるわ！このクソ髭だるま!!」

あまりの忙しさにお互い口が悪くなるが、連携は乱れず次々と注文してくる客を捌いている。

横も縦もデカく、黒いグラスンをかけてるこの店長はもうシティー○ンターの海○主にしか見えない。

本人にそのことを告げると笑いながら締め技を決めてきたから、自覚してるんだろ
う。

「本人曰く、生粋の大阪人……らしいが。」

おふくろとどういいう繋がりか全くわからんが ”ヤンキー仲間” だというのは間違いないさそうだ。

「おい奏、そろそろ店仕舞いといこうや」

「そうだな。あゝゝ疲れた………」

17時を過ぎようやく今日の仕事が終わった。

朝の8時半からぶっ通しで働き続けだオレはもう店長の立派な下僕いぬだと言える。

「今日もよく頑張ったな。ほれ、差し入れのジュースや」

「おっ、サンキュー。助かるぜ」

店長は店の冷蔵庫から冷えた炭酸ジュースを取り出し、オレに差し出す。

蓋を開け、乾いた喉に一気に流し込む。

……………ああ、コレだこれ!!

体中の細胞が炭酸を得て喜んでるように感じるこの感覚!

たまらねえ。仕事の疲れが吹っ飛んだ。

これのおかげでオレは乗り切れたと言っても過言ではない。

「……………つたく、人の気も知らねえではしやぎやがつてあのチャラ男軍団……………!!

次にナメた態度とりやがったら顔面に右ストレートぶちかましてやる」

「ハツハツハ、その短気な性格も母親譲りやなっ!」

「るっせえ。アンタも同じこと考えてたくせによ」

「ああっ? オレがいつそんな事言うたんや?」

「目」だよ。飯が不味いとヤツらがほざいた瞬間、殺し屋みたいな目つきで睨んでたろ。殺意をこもったオーラでな」

「……………よしっ！なら、明日もあのクソガキ共が来て何か文句言ってきたら、ダブルリアットかますぞっ！」

そう言つてニカツと笑いながら、筋骨隆々の腕をこれ見よがしにアピールする。

「アンタの丸太みたいなお腕に比べたらオレは貧相で仕方ねえよ」

「あつたりまえや！漢は筋肉があつてなんぼなんや！お前はまだまだガリガリの分類なんじゃー！」

「そう言いながらも、奥さんの尻に敷かれてるつておふくろが笑いながら話してたぞ」
「……………奏よ、男は皆自分の嫁さんには敵わへんねんや。女はな、嫁になったら誰よりも強うなんねん」

さつきまでの笑みとは違い、何かを悟らすかのような口調で話し出す。

嫁に手を上げるDV夫ではないのは確かだし、見た目はこんなだが人柄的には非常に良いと働いてるうちに思い知らされた。

人は見かけによらないとは、よく言ったものだな。

「オレには負け犬の遠吠えにしか聞こえないぜ?」

「アホっ! 違うわ!! お前もいずれば……いや、ゲイのお前には一生わからへんことやな」

「オレは結婚願望がないだけでゲイじゃねえ。だがそんなことが起こりえたのなら、アンタより幸せな家庭を築いてみせるよ」

「ハッ、ぬかせガキが。お前みたいなヒヨロガリに家族が守れるかい」

「オレがヒヨロガリなら、日本の男子高校生は皆ヒヨロガリだわ、ボケっ!」

そう言い頭に巻いてたタオルを手に取り、店長の背中に鞭の如く打ち付ける。

しかし、奴はびくともせず『何かしたのか?』と言わんばかりに笑ってみせた。

ムカつくが、肉弾戦ではコイツに敵いつこなさそうだ。

「そうやったそうやった。明日からの予定やけどな、ここの店やなくて別の店で働いてもらうで」

「はあっ? 急になんだよ」

「なんや、ゲームのコラボカフェかなんかでそっちの方で人手がいるんやと。オレはこの店離れられへんし、バイトのお前なら問題ないやろ？」

「おいおい、オレが居なくなったらこの店パンクするぞ？ただでさえこつちも忙しいのよ」

「どうせそのコラボカフェとやらに客をとられて暇になるから、安心しろや。それに、その店はうちのお隣さんやからな」

「なら、この店の店長は、あるアニメキャラにそっくりだつて噂をしといてやるよ」

「忙しくさせるのは勘弁してくれや。明日は常連客と、この店で一緒に乾杯する予定なんやからな！ハツハツハ！」

「仕事サボつて飲んでんじゃねえよ！」

高笑いする店長にカラになったペットボトルを投げつける。

店長は難なくそれをキャッチし、足元にあるゴミ箱に入れた。

「そのコラボカフェなんやけどな、どうやらアイドルが宣伝に来るらしいで？」

「アイドル？」

「そう！しかも現役女子高生やで！俺みたいなおっさんはともかく、奏でやったら

知つとるんとちやうか？名前が確か………なんやつたかな？」

「そういうの、全く興味ねえからなあ」

「羨ましいなあ、俺がお前の立場なら間違いなくアタックするのに」

「オレはアンタみたいに変態思考じゃねえよ」

「誰が変態や！これは思春期男児の健全な思考や！むしろお前の方が変態やで！」

「興味ねえもんは仕方ねえだろ」

「まあ折角の機会やし、仲良くなつたらどうや？案外合い合うかもしれへんで？」

「あんま期待されても、オレは健全とは程遠い高校生だ。オレは一人が好きなんだよ」

オレはテーブル席と調理場の清掃を全て終え、バイクのヘルメットを被り荷物を持つた。

「何にせよ女は信じられたもんじゃねえのは確かだ。過去の経験もあるしな。アンタは、嫁さんとうまく過ごこせるように祈つてるぜ。それじゃあお疲れ、また明日もよろしく」

店長に背を向け、別れを告げた。

期末テスト前に松原と氷川に話してからずっと、あの嫌な女の顔が浮かび上がってくる。

羽丘の女帝。オレが女嫌いになった原因。

コイツに恋をしなければオレは、今誰かを好きになつていたりするのだろうか？

否、別の女に恋をしてもオレは必ず失恋していただろう。

あの根暗な格好だと、好きになる要素を見つけ出すのは限りなくゼロに等しい。

少なからず相手から告白されることなんて起こり得ないに決まっている。

だからこそ、オレはあの失恋から変わった。

一から己を鍛え上げ、男としてより逞しく、勇ましい肉体と決して何事にも屈しない精神力を会得した。

オレに怖いものなんて存在しない。

唯一警戒すべきは、おふくろの怒りを纏った鉄拳だろうな。



一夜明け迎えた翌朝。

いつも通りバイクでバイト先へと向かい、指定された店舗の開店準備に取り掛かった。

スタッフは全員で8名。

調理組とホール組みで分かれたらちようど4人ずつでオレはホールに属された。

前の店に比べて随分と楽できそうだな。

だが、給料は以前よりガタンと落ちる。

こういう大きなイベントではガツポリ稼げると想像していたが、実際はそうでは無いらしい。

それでも割高だ。金がもらえることに感謝して仕事するか。

……しかしまあ、店の外装を見る限りかなり凝っているように感じる。

ゲームに関しては全く心得てないから、何が特別で、何が目的で客がここへ来るかが分からない。

手渡されたメニュー表もカタカナ表記ばかりで理解に苦しむ。

わざわざ難しい名前にしなくてもいいだろうに。

注文を受け付ける身にもなって欲しい。

間違えて怒鳴り散らして今日ものなら、店長を呼びつけてダブルラリアットをかまし

てやろうか。

頭の中は、いちやもんをつけてくる客と、それを力でねじ伏せるオレとおっさんの図しか浮かんでこない。

力加減、考えないとな……………。

そして驚きなのが開店まであと1時間程あるにもかかわらず、店の前には既に何人かの列が出来上がっていた。

これも、ゲームに対する熱意なのか……………？

暑いのは夏のこの気温だけでいい。

ゲームの為にわざわざこの店に赴き、半袖半ズボンで汗だくのゲーマー達よ。

その熱意や想いは確と受け取ったが、絶対に熱中症で倒れるな。

ホール+介抱まで仕事に入れられると、投げ出したくなる気持ちを察してくれ。

水分補給は忘れずに取ること、いいな？

全ての準備が整いミーティングを行う前に若い店長から一言告げられた。

「皆さんおはようございます。本日から10日間、ゲームとのコラボカフェがオープンとなります。くれぐれも粗相の無いようお願いいたします」

丁寧なその口調は、どこぞの関西弁店長と比べ物にならないぐらいしつかりとした人間に見える。

少しは見習え、似非海〇主。

店長はそんなことを他所に、続けて話す。

「そして本日から2日毎にアイドルグループ、”Pastel? Palettes”のメンバーが、一日店長として我々を手伝ってくれます」

グループ名が告げられた瞬間、スタツフたちも、おおつと小さな歓声をあげた。

このコラボカフェはゲーマーだけじゃなくて、そのアイドルのファンたちも握手会感覚で来店するようだな。

これなら客が増えて当然か。

全く、面倒なことをしてくれる。

「それでは、挨拶をよろしくお願いします」

天頂の言葉と共に店の奥から一人の女が出てきた。赤と青の花が付いた麦わら帽子を被り、濃い青色の水着で身に纏うその女の正体は――

「はじめまして。Pastel? Palettesのベース担当、白鷺千聖です。本日からよろしくお願ひします」

アイドルご本人の登場にスタツフたちが歓喜の声を上げた。

オレはこの女を知っている。

それは同じ学校、そしてクラスメイトのウザイヤツ。

藤村の事件後しばらく見ないと思っていたら、こんなところに現れやがった。

「……………テメエ……………ツ!!」

心の声が発せられる。

怒気を含んだオレの声が聞こえたのか、ヤツはこつちに目線を向け、不敵な笑みを浮かべた。

「ふふつ、月島くんもここにいたなんて驚いたわ。それに、髪も染め直したのね」

「……………何しに来やがった。ここはお前のようなお高くとまったクソ女が訪れるようなところでは無えんだが？」

「あらつ、私の話は無視？」

「答える義理は無え。用がないならとつと家に帰れ」

「おあいにく様、私は仕事でここに赴いてるのよ？それに私はあなたが思っているほど、嫌な女では無いのだけど？」

「ホザけつ、この店の従業員を女王の権力で支配しようって腹立ったらうが残念だな。

オレがお前を顎で使つてやるよ」

「ええ、楽しみにしてるわ♪」

ヤツは薄っぺらい笑みを浮かべ、会話を絶つ。

オレとコイツの間に異様な空気に、スタツフたちが深く追求することは決してなかった。

そして迎えた開店の時間。

待ちに待ったと言わんばかりの客たちが一斉に押し寄せる。

用意した50個近い席はすぐ満席となり、オーダーが殺到し、一日店長の名札をつけた白鷺千聖の前にはファンと思しき男たちが集まった。

どれだけ捌こうがすぐに人はすぐにやってくる。

かつて経験した喧嘩でも、多対一なんてことはよくあつたがそれを遥かに凌駕する数に圧倒される。

この状況を打開する方法は——ダメだ、考える隙さえ与えてくれねえ。

8人で何とかなると考えていた数時間前の自分が恥ずかしい。

助けを呼ぶべく隣のおっさんの店を覗く。

………あつ、やつぱり酒を飲んでやがる！

おいっ！こつちを助ける!!

ゲラゲラ笑ってんじやねえ!!

タバコを蒸すな!!

オレがいくら叫んでも声が届くことはない。

聞こえるのは、注文を促す客の声と隣の店のおっさんたちの笑い声だけ。

この店のオープン期間は残り10日。

オレの体は持つだろうか——。

昼の13時に差し掛かり1時間の休憩をもらった。

既に体はボロボロ。

前の店の数倍は確実に働いてる。

文句を言うついでに昼飯をたかりに隣の店へと顔を出した。

おっさん軍団はまだ飲んでいた。

「おいつ店長！聞いてねえぞ！なんであんな忙しきでたった8人なんだ!!」

「ハツハツハ！随分と寝れた顔をしやがって、これでも食えっ！美味いぞ！」

上機嫌に笑いながら店長はつまみのメンマを差し出した。

あまりの適当な対応に机を強く叩いて抗議する。

「空腹の男子高校生が、これで満足するか！」

「なら、作り置きのカレーがあるからそれを食えっ！代金はいらねえよ！」

「よっ！店長、日本一！」

「太っ腹!!」

「その心遣いに痺れるわ！」

天頂の案に、酒に酔ったおっさん軍団がゲラゲラと笑いながら相槌を打つ。

それはもう、やかましいと言ったらありやしない。

コンロの火をつけ、カレー鍋を温める。

オレがこうしている間にも、あの店のスタッフたちは今も押し寄せる客の対応で右往左往している。

白鷺千聖の前に並ぶ列も一切途絶えない。

それに比べてこっちは、むさ苦しいおっさんたちとのレッツパーティ。

誰も近寄って来ようもしない。

「なあ店長、休憩明けからこっち手伝ってくれよ。人手不足ってレベルじゃねえぞ」

「あんま若い坊ちゃん嬢ちゃんの店にこんなおっさんが働けるわけないやろ？それに、酒も飲んで酔ってるし、フラフラしながら接客はできひんわ」

「クツ、それは禁句だろ……………」

店長のボケにおっさん軍団が笑い声を上げる。

「だーっ!! もうっせえ!! 今から飯食うんだから静まりやが——」
「あのー………月島くん、だよね………?」
「おいっ! 人の話を………ああ?」

オレの言葉を遮りおっさん軍団の背後に現れた少女は、ビクビクと怯えながら名前を口にした。

淡い赤色の水着と蒼い髪を水に濡らし、黄色のビーチサンダルを履いたその少女に身に覚えがなくオレは首を傾げる。

「お前………誰だ?」

「ふえっ? ふええええええ!」

その少女は聞き覚えのある奇声を発した。



「……………はあ!? 松原だあ!」

「う、うん。松原だよ?」

ふええという口癖と松原という名前。

その2つの単語がオレの思考回路をつなぎ合わせた。

「嘘つけ! 松原って確か、髪を横に束ねてたヤツだろ。騙そうだったってそうはいかねえぞ?」

「私の顔は覚えてないんだね……………」

「奏く。結婚願望がねえとか言つときながら可愛子ちゃん知り合いなんかよく。羨ましいな〜このこの〜♪」

店長が膝をついておちよくつてきた。

それを振り払うようにオレは声を荒げる。

「うっせえよ! ただのクラスメイトだったの。なー、松原?」

「そ、そうだね……………」

「ところで、なんでお前はこんなところにいるんだ？まさかまたナンパされに来たんじゃないだろうな？」

「違うよっ！今日はバンドのメンバーと泳ぎに来たんだけだ。ほら、あそこでビーチボールで遊んでるのがそっかよ」

松原が指差す方向を見ると、4人グループの女共が戯れていた。

やはりというべきか、髪色の癖が凄え。

紫、金、オレンジ、そして黒。まともなのが見当たらん。

「遊びに来てるとこ悪いんだが、今日からバイトの手伝いしてくれねえか？人手が足らなすぎる上に、そこのおっさん軍団は全く役にたたねえからよ」

「役に立たへんとは失礼なヤツやな！」

「お前より喧嘩強いわ!!」

「このボケっ！」

「関節決めたるぞ!!」

おっさん軍団からブーイングの嵐が舞い上がる。

松原はしばらく考えた後、『少し待ってほしい』と告げてから、ビーチボールで遊ぶメンバーの元へ駆け出した。

ものの数十秒でヤツは戻ってきた。

「メンバーのみんなも手伝いたいわって言ってるけど、いいかな？」

「もちろんだ。超絶助かる」

オレが歓迎の意思を示すと松原は嬉しそうに笑った。

「……………おっと、そろそろ休憩は終わりだ。松原、何度も悪いがそのメンバーを呼んできてくれ。大至急仕事に取り掛かる」

「うん！すぐに呼んでくるね」

「奏〜！ハーレムやないけ〜！」

「俺たちと変わってや〜！」

「客としてならいつでも行くで！」

「お嬢ちゃんも奏に襲われへんように気をつけや〜！」

「黙ってるや酔っ払い軍団!!」

オレが切れておっさんたちはゲラゲラと笑い出した。

人にかかわれるのは慣れてないからなんだか不思議な感じだ。

本来なら力づくで黙らせるところだが、あの連中に素手では絶対に敵わない。

体格も負けてりや踏んだ場数も桁違いだ。

だが、酒とタバコに埋もれたあんなオヤジにはなりたくないな。

松原のバンドメンバーを引き連れ、店に戻り店長に手伝いの許可をもらう。

思っていたよりあっさり了承され、再び仕事に戻った。

松原は冷め切った笑顔を続ける白鷺千聖のもとに歩み寄った。

「千聖ちゃん！なんでこんなところに？」

「か、花音！なんでこんなところに？」

「それはこっちのセリフだよ」

「ええ、私も驚いたわ。見ての通り私はここの一日店長を任されたの。実際は何もしてないのだけどね」

「私は、月島くんとそこでばったりあつてバイトのお手伝いを頼まれて……」

「巻き込んでしまつてごめんなさい。正直、人手不足で困っていたの」

「ううん！ 私たちでよかつたらいくらでも頼りにして！」

「人手不足で困っているはこっち側だ、白鷺千聖。テメエは椅子に座って握手して宣伝して終わりだろうが」

「あらつ、顔色一つ変えずお仕事するのも大変なのよ？」

「握手会は終わりにしてこつちを手伝え。他のスタッフの負担を考えろ」

「あなたに言われなくてもそのつもりよ。はあ……………ホント、今日は災難だわ」

ため息まじりにそう呟くとヤツは、紫髪で宝塚歌劇団ばりの長身女に視線をやった。どうやらそいつが気に入らないらしい。

ヤツが嫌ってるのはオレだけじゃなさそうだ。

「さつきから ” 儂い ” って連呼してるが、あれは癖か？」

「うん、そうだよ」

「お前の ” ふええ ” と同等だな。あの羊みみたいな泣き声の」

「ふええええ!？」

「そう、それ」

オレがケラケラ笑うと松原の顔は恥ずかしさからか真つ赤に染まった。

「それじゃあ今日からよろしく頼むぜ、松原と愉快的仲間たち」

オレは去り際に言い、客の注文を取りに行った。

第12輪 優美な華には毒がある

私は現役のアイドルで女優。

それは誰もが疑わない事実であり、テレビにも出演することだって珍しくない。

——にも関わらず大した取材もない上に、テレビで報じられることもない極小規模のイベントの宣伝大使をさせようと、事務所は私に依頼した。

私は子役からずっと脚光を浴びてきたから知名度だってそれなりにもあるはずなのに……。

こういう仕事は、まだデビューしたての新人さんがやるものだと思う。

それに、肌や髪に悪影響を及ぼしかねない海で仕事をさせるなんてとても正気の沙汰じゃない。

全く、無能なスタッフたち——。

アイドル結成時だってそう。

エアーバンドになる予定が急遽演奏を強いられることになったし、その理由も全てス

タツフたちのミスによるもの。

頼りの大人でさえこのザマ。決してお説教で済む話ではない。

私の名前に泥を塗り、歩むべき人生「みち」を壊そうとしてくる人たちは皆敵だ。彼もそのうちの1人。

はじめは私に興味を示さない言動から、からかったり挑発混じりの言葉も発した。しかし、彼は私に見向きもしない。

それが私は許せなかった。

私は子役からテレビに出てる有名人。

おまけに容姿淡麗で性格もよく、その笑顔は人を幸せにするとまで言われてきた。

こんな女を世間の男たちは放つてはおかない。どんなゲスだろうと虜にしてきた。それが私にとっては当たり前。

人気や支持を得なければ、芸能界では生きていけない。

そんな気持ちも見えず知らず彼は私を敵視する。

芸能人とは誰もが仲良くしたいと思うもの。しかし彼にはそんな考えが一切なく女” というだけで私に牙をむく。

本気で殴られかけたこともあった。

殺意にも近いオーラを見に纏うその姿は、まさに獣。

標的である私に危害を加えようと両手の拳を握りしめる。

どんな歪んだ形であれ、彼が私に興味を示してくれたことは嬉しかった。

女優として、アイドルとして、テレビに出続ける者として、人の目に入ることへの喜びというものを感じた。

それも、もう一年半もの月日がたった。

今の私はそれだけでは満足できない。

例えば……そう、彼が私を好きになり告白してくるようなシチュエーションが見てみたい。

主演は私も月島くん。

男嫌いだった彼が健気なクラスメイトに恋心を抱くラブストーリー……ええ、これが理想的な物語だわ。

他のモブ女共に渡してはならない。

女優の頂点に立つ為の第一歩は、女嫌いの彼を魅了し盛大に振ること。欲しいものはどんな手を使ってでも手に入れる。

性格の良いアイドル？

なんでも演じれる女優？

そんな表現はバカげてる。所詮は表の顔、そんな可愛らしいものじゃない。

ドライでワガママなりアリスト。

それが私の本性。そして裏の顔。

何人たりとも、私の邪魔をするのは許さない。



2日目を迎えた朝。

今日で仕事は最終日だけど、やはり憂鬱な気分になる。

何しろ苦手な幼馴染がいることに心底不愉快だわ。

小学校まで『ちーちゃん』、『かおちゃん』と呼び合い幼馴染として仲が良かった上に
両親の親交もあった。

しかし、そんな彼女も中学になって変わってしまった。

とにかくあのキャラクターが気に入らない。

今はもう、彼女と顔を合わせただけで不快感に陥る。せつかく演技の才能があるのに……非常に残念ね。

昨日も目も合わさないように必死だったし、あまり関わらないようにしなくちゃ。

集合時間まで残り1時間を切ったところで家を出て、スタツフの運転する車に乗り込む。

電車でも行けるらしいけど、私は乗り換えが苦手だからどんな遠出だろうと必ず車で現場まで向かう。

人が少ないから落ち着くし、何より必ず現場に着くという安心感がある。

40分を経ったところで海に到着。

持参した日焼け止めクリームをふんだんに塗り、髪には日焼け止めスプレーを振りかけた。

ドアを開け、空を眺めると雲ひとつない真っ青な空が一面に広がっていた。

流れる海も太陽の光を反射しキラキラと輝いているように見える。

それでもなるべく海には近づきたくない。

どれだけ予防しても日焼けはするし、海水は肌にも髪にも悪い。

芸能人として日焼け痕とこんがり焼けた肌を世間に晒したくないなら、海で泳ごう

なんて自殺行為。

明日からの仕事のためにもケアは怠らない。

今日も我慢して愛想良くこなさなくちゃ——。

更衣室に入ると花音の姿が目に入った。

足音をたて近づくと、カノンが私に気付いて笑顔で手を振った。

「千聖ちゃん！おはよう」

「おはよう、花音。急に手伝ってもらってごめんなさい」

「ううん、気にしないで。少しでも千聖ちゃんの力になれるなら嬉しいな」

「ふふつ、もちろんよ」

彼女は私と違い裏表がない。とても綺麗で純粋な子。

誰とでも普通に接することが出来る優しさに私は惹かれた。

「そういえば、千聖ちゃんは8月の予定ってまだないのかな？」

「ドラマの撮影が所々であるけど、盆は休みが取れそうよ」

「ほんとっ!?それなら、一緒に夏祭りに行きたいなあ」

「ええ、もちろんいいわよ。楽しみにしているわ」

「えへへ、楽しみだなあ」

「それじゃあ現場へ向かいましょうか。今日も1日お願いね」

「うんっ、千聖ちゃんも頑張っつてね」

そう話しながら水着に着替え、車の中でやった日焼け対策をもう一度行い外に出る。

太陽から降り注がれた熱が砂浜を伝い、裸足で触れるとそれがより感じられる。

今日も日差しが眩しい。

日焼けだけじゃなくて、熱中症対策もしないと。

「—————それでは、今日も一日よろしくお願いします」

店長さんから連絡事項を聞き、スタッフを含め私も開店の準備を整える。

昨日は私と握手や写真を求めたりしてなんの戦力にも慣れなかつたけれど、今日はホールとして花音や月島くんと共に仕事をする。

正直、知らない人と握手をするのは好きじゃない。

洗ってもない手を素手で触りたくないし、何より不潔だわ。

それを満面の笑みで、愚痴も溢さずにこなすパスパレのメンバーには心底驚かされる。

昨日も汗まみれの手を何度も握り、寒気さえした。

彼は私の仕事を楽とみなしているようだけど、その考えは甘すぎる。

一度体験してみるといいわね。

私が日々どれだけの苦労を味わっているのかを。

「月島くん、今日もよろしくね」

「……………足引っ張るんじゃないぞ」

私が愛想よく話しかけても彼はすぐに背を向けた。

嫌われているのは重々承知してたけど、ここ最近は特に関係が悪化しているようにも感じる。

”彼と仲良くなりたい” という感情は一切ないけれど、私は彼の後についていく。

「そういえば月島くん、学校の盗撮犯を捕まえたって本当なの？」

「登校もして来ねえ芸能人に話すことなんて何もねえ」

「私は単純な興味を持つて聴きたいのだけだ」

「心配しなくても、テメエの写真は全て松原と氷川が処分済みだ。それに単純な興味と言いつつ、自分の保身を守ることに必死なのが見え見えだぜ？」

「ふふつ、否定も肯定もしないでおくわ。あなたは何も知らないだろうけど、芸能人も結構大変なのよ？」

「聞いてねえよ」

「普段の仕事に比べたら、昨日今日の仕事内容はあくびが出るほど楽に思えるわ。月島くんも同じことを考えたことはないのかしら？」

「お前とこんなところまで来て一緒に仕事するほど、苦痛なものねえだろうな」

「私はそうは思わないけれど」

「まあ多額の金がもらえるならそれなりに我慢はしてやるよ。もう仕事が始まる時間だ。これ以上用がないならとつと戻れ」

「ええ、そうするわ。今日も私たちと楽しい仕事を共にしましょうね♪」

「ホザけつ、この阿婆擦れが」

私は無言の笑みで返し、彼に背を向け元の位置へと戻ると既に何十人ものお客さんが

列をつくっていた。

目的の大半はコラボカフェによるものだと思うけれど、SNS上に私が宣伝大使をしていることが少なからず広まっていたらしい。

今日はアイドルや女優としてではなく、店員の一人として働くから、握手や写真を求められても遠慮させてもらおうかしら。

「千聖ちゃん！こっち向いてー！」

「水着姿も最高に可愛いよ〜！」

案の定、私を求める人もいたけれど笑顔でそれを全て回避する。

その対応に怒るファンも少なからずいた。

今私が接客している人がまさにそれだった。

「ねえねえ、千聖ちゃん」

「はい、なんでしょうか？」

「昨日はここに来た人たちといっぱい写真撮ったんだろ？なんで今日はダメなの？」

半袖短パンのその男は、髪が水をかぶったように濡れシャツも汗で色が変わってまるで清潔感がない。

おまけにバンバンとテーブルを叩きながら高圧的に抗議をしているところを見ると自己中心的な人間だと窺える。

そんな男に対しても私は笑顔を絶やさない。

「申し訳ございません。本日はアイドルとしてではなく、この店の一員として働かせてもらっています。そういったことは昨日までだとホームページにも記載されていますが、よくご覧になられなかったのですか？」

私はそう言い携帯からコラボカフェに関するページを開いてお客さんに見せた。

それでもお客さんは食い下がる。

「じゃあせめて握手ぐらいしたっていいじゃないか。それがファンに対するせめてもの礼儀じゃないの？」

「確かにあなたのようなファンがいてくれて私は嬉しいです。それなら、昨日はなぜ来られなかったのですか？」

「昨日はどうしてもやらなければならぬゲームのイベントがあったんだ！だから今日を楽しみにしてたのに……………あんまりじゃないか！」

自己中心的な発言と態度に他のお客さんは呆れ顔を浮かべていた。

正直私も話したくない。

店長に視線を送っても、メニューの調理でそれどころではないらしい。

みんなも忙しそうだし、私一人でなんとかするしか——。

「あ、あのっ！お客様！」

私の背後から勢いよく花音が出てきた。

「なんだよ、キミには用はないんだけど？」

「花音、私は大丈夫だから他の仕事に戻って」

「ううん、ダメだよ。千聖ちゃんが強く言っちゃうと噂が広まっちゃうかもしれないから……………っ！」

「か、花音……………ごめんなさい、少しだけお願いするわ」

私は一步下がり、花音に全てを任せた。

「何度も言うけど僕は千聖ちゃんに用があるんだ。はやくどいてもらえるかな？」

「いいえ、退きません……………！ルールはちゃんと守るべきです。他のお客様もちゃんと守ってもらってますので……………」

「そんなの僕には関係ないね。僕は他の奴らとは違って忙しいんだ。特別扱いするのは当然だろ？」

「それは間違っています。忙しいのは皆さんと同じ、千聖ちゃんもあなたのためだけに仕事をしているわけではありません！」

「なんだと!?!この生意気な女め、もうどうでもいい。はやく僕の言う通りにしないと事務所にクレーム入れるぞ！」

「そ、そんな……………ふええ……………」

男の言葉に花音が飲まれてしまった。

もうこれ以上は見えられない。

私が前へ出ようとしたその時、男は花音を突き飛ばしそのまま足で彼女の体に砂をか

けた。

「きやつ……………！」

「花音!？」

花音の手を取り、起き上がらせる。

いい加減、我慢の限界がきた。

「あのっ！お言葉ですが——」

「おい兄ちゃん、そんなデカイ声出してどうした」

男の肩を掴み、月島くんが割って入った。

「また無関係の人間かい？いい加減飽きたんだけど」

「この店の従業員だ。その二人の関係者になるはずだぜ？」

「なら言わせてもらうけどね、その青い髪の女が僕にいちやもんをつけてきたんだ。

これは明らかに僕を侮辱していると思えなくてね、千聖ちゃんには申し訳ないけ

ど、事務所には報告させてもらうからね」

「ああ、お前たちのやりとりは全部聞かせてもらつてた。確かにアンタの事情も知らずにうちの従業員が無礼を働いていたな」

「だろ〜？ そうだよね〜？」

彼の言葉に男は調子良く腕を組み頷いた。

そんな彼に私と花音は小声で異議を唱える。

「ちよつと月島くん、一体何を……………！」

「黙つてろクソ女。松原、怪我はないか？」

「月島くん……………。うん、大丈夫だよ」

「お前を悪く言つて悪い。だが、決してお前に非があるわけじゃねえから安心しろ。今はこの男の気分を高まらせて、最後はお前が気持ちよくなるように話をつけてやる」

「う、うん！」

私たちは二人から距離をとり、彼は男と同じテーブルに腰掛けた。

「兄ちゃんよお、こんな暑い中わざわざ来店してくれてサンキューな」

「これも千聖ちゃんのファンとして当然のことさ。それで、さっきの話なんだけど――」

「要するにアンタは、白鷺千聖となんらかのアクションを起こしたいってんだろ？ なら話は簡単だ。ちよつと待ってろ」

月島くんはおもむろに立ち上がると調理場へと向かい、店長に何かを告げ戻ってきた。

彼は一体何を考えているの？

私にはさっぱりわからない。



それから15分もの間、月島くんとその男は雑談を交えながら時間を潰し店長が来るのを待った。

お客さんの全視線が二人に集まる。

そして店長が運んできたのは、一面真っ白な生クリームが際立つクリームパイだった。

た。

普段はカットされたものを提供しているけれど、持ってこられたのは一ホール丸々だった。

店長の様子を察すると、月島くんの考えが全く分からないみたい。それは他の人も同じ。私自身、彼の奇行に思考がついていけない。

「この店自慢の一品だ。たんと味わえよ」

「……………もしかして、これで許しを乞おうなんて思っているのかい」

ケラケラと笑いふざけたような態度をとる月島くんとは対照的にその男は、額に青筋を浮かべ怒りを露わにしていた。

彼はその姿勢を崩さない。

「まさか、そんな酷いことする訳ないだろう？おいつ、白鷺千聖、手を貸せ」

「え、ええ」

二人に一步近づくと、月島くんはいきなり手首を掴んで引つ張り、私の手を無理矢理

クリームパイに押し付けた。

綺麗な形をしていたパイは形を崩し、私の手痕を大きく残しその歪さを物語っている。

突然の出来事に、私を含めたこの店にいる全員が驚愕し開いた口が塞がらない。そんな中、彼はただ一人笑みを浮かべ男の前に腰掛けた。

「コイツと握手したいんだろ？ほらっ、そこにあるじゃねえか。さっさと手を合わせろよ」

「……………はあ!?!キミ、何を考え……………」

「このアイドルと写真を撮るのも握手するのもホームページの記載通りで不可能だ。だが、これならどうだ？直に感じることはできねえが、間接的に触れることができるんだぜ？これならなんの問題もないだろ、白鷺千聖」

「え、ええ、特に問題ないはずよ」

彼の言葉に乗せられて肯定する。

まさかこんな方法で男を満足させようとは、誰も考えないと思う。

さつきから驚かされてばかりね。

「これを許されたのは、昨日ゲームで頑張ったアンタだけだ。このご褒美、確と受けとれよ」

「こ、こんなのまかりとおる訳がないだろ!!」

「まだ足りないのかよ、欲張りな野郎だ。他に何を求めるってんだ?」

「だ・か・ら!僕は千聖ちゃんと触れ合いたいんだ!キミみたいな野蛮な男に用はないの!だからはやく僕の視界から消え——」

その言葉が言い終わる直前、誰が男の顔にペットボトルを投げた。

「ふざけるな!何様なんだお前!」

「そうだつ!良い加減にしろ!」

「自己中にも程があるぞ!今すぐ帰れ!」

店内がお客さんたちの帰れコールで包まれた。

次々と物が投げ入れられ、収集がつかなくなりつつある。

男は頭を腕で覆い、涙目を浮かべていた。

そして、この状況を喜ぶかのように月島くんは立ち上がり、テーブルの上に飛び乗った。

テーブルにたつやいなや、大きく息を吸いスピーカーから発せられたような声が鳴り響いた。

「デメエエラアア!!ちゆうもおおおくつ!!」

彼の大声量が周りの空気を鎮まらせ、全員の視線が集まる。

「この男は白鷺千聖を、そしてオレの大切な仲間を傷つけた!これは許される行為か否か……………選択肢は二つに一つ!どちらだと思っ!」

「許せねえ!」

「今すぐ追放だ!」

「同じ目に合わせよう!!」

月島くんの問いかけに、周りの人々は賛同の意思を見せた。

とても熱狂的で、まるで私たちのライブのような盛り上がりが目の前で起こってい

る。

「テメエらの考えはよくわかった。ここにいるヤツらは全員、この男に鉄槌を下そうってことをな!!」

人々は握り拳を高く掲げ、声をあげた。

反対の意はない。満場一致。

これを覆すなんて……………今のあの男には不可能ね。

「それじゃあ、テメエ、テーブルに上がれ」

「……………!?!」

月島くんの声に肩をびくつかせ、男は彼の指示に従った。

テーブルに立つや否や、ブーイングの嵐が巻き起こる。

その光景はまさに、コロシウムで猛獣の餌食にされようとしている小動物のよう。

周りの人たちもまた、その観客を思わせるような盛り上がりを見せている。

「こいつは許されざる行為を犯した。オレ自身、コイツを殴り飛ばしてやりてえが世間はそれを許しちゃくれねえ。皮肉な話だ。それでもオレはこの男に罰を与えたい。テメエらは賛同してくれるな？」

月島くんのその言葉にも反論の言葉はない。

彼は手を上げ静粛にさせると、再び声を上げた。

「テメエらが賛同してくれたことに感謝する。おいつ、覚悟はできてるんだろうな？」
「……………う、うう……………怖いよお……………」

「ウジウジしてねえで答えろや!!」

「は、はひ!ずみません!!」

「よしつ、いい返事だ。反撃の時は来た。それじゃあ——行くぜえええ!」

勢いよく叫んだ彼は握られた拳を大きく振りかぶり、思いつきり頬に殴るかと思いきや足元に置いてあった手形付きのクリームパイを手に取り、男の顔面目掛けて押し付けた。

そして勢いを殺さずテーブルから男もろとも飛び降り、握られていた漢の顔面をその

まま地面に叩きつけた。

砂浜には大きな穴ができ、男は声にならない声を上げる。

「徳と味わいやがれ、甘さの中に秘められた白鷺千聖の怒りをよ」

月島くんが左腕を高々と上げ、勝利のスタンディングをすると今までと比べ物にならない歓声が店内を包んだ。

「ありがとう、月島くん」

私の口からは、素直な感謝の言葉だけが出てきた。

男の身柄はすぐに警察へと引き渡されて、月島くんや被害にあつた花音も事情聴取される形となった。

とりあえず店は営業を続け、二人の欠員分私も必死になって働いた。夕方を迎える頃に二人は警察署から戻ってきた。

「おかえりなさい。どうだった？」

「私は問題なかったよ。でも……………」

「どうやらオレはやりすぎたらしい。男は頭蓋骨の損傷で数日間入院が必要だよ」
「確かに、すごい音がしたものね」

それでも当然の報いとも言えるわね。

正直、月島くんのおかげで胸がスツとなった。

「まあヤツのことは置いて、オレは悔いはない」

「な、なるべく暴力以外で解決できるようにしようね？」

「ああ、善処する」

「でも、私は怒っているのよ？いきなりクリームパイに手を突っ込ませるなんて……………あれ、かなり痛かったのだけれど？」

「テメエの利用価値なんてその程度ってことだ」

「酷い言い草ね」

「事実だ。今更オレに優しさなんて求めるな。オレは入学した時からずっとテメエのことが大嫌いなんだからな」

「あらっ、私はあなたのこと、嫌いじゃないのだけれど？」

「知るかつ。でもとりあえずオレは、今日限りでこのバイトを辞める。店にも迷惑をかけたからな」

「月島くん……………」

「私も今日で終わりだから、店長に挨拶に行くわ。あなたもご一緒してくれるかしら？」

「絶対にいかねえよ」

「それじゃあ花音、行ってくるわね」

「おいつ！人の話を……………」

「うんっ！ここで待つてるね！」

嫌がる月島くんを無理やり引っ張り、店長のもとへ向かい歩き出す。

そんな私の手を彼は力づくで引き離れた。

「おいつ、いきなり何なんだ！」

「これでも、私はあなたに感謝してるのよ？」

「チツ、テメエなんか感謝される筋合いはねえよ。オレは松原を助けただけだ」

「それでも言わせれ欲しいの」

「あつ?」

「花音を助けてくれてありがとう」

極自然に、ほんのりと浮かべた笑顔で感謝の言葉を告げる。

「だから、テメエの為じゃねえって言ってるんだろ。テメエのことは大嫌いなんだからな」

「感謝するついでに一つ聞きたいことがあるのだけれど」

「ついであつて何だよ」

「何故あなたはそんなに私を敵視するの? 私がそんなに憎い? それとも、あなたの過去と何か関係があるの?」

私の言葉に彼は口を閉ざした。

「私の勝手な想像だけど、あなたが女嫌いになった原因と私はそっくりじゃないのかしら? 例えば………そう、性格だとか容姿とか」

「……………!?!」

「もし良ければ教えて欲しい。あなたの過去と、その原因を」

私がそう問いかけると、彼はとうとう口を開いた。

「……………やっぱ、お前にだけは話したくないな」

「そう……………。なら仕方ないわね」

「だが、今日の一件でオレたちの関係性がネットに出てくるだろうから忠告はし
てやる」

「忠告?」

「羽丘女子学園の女帝」には気をつけろ。ヤツはオレを恨んでいる。オレの関
係者にさえ手を出しかねない危険性を持つ」

「羽丘女子学園の……………女帝……………?」

「忠告はした。あとは自分で何とかしろ」

彼は一目散に店長の元へと駆け出した。

羽丘女子学園……………確か、パスパレのメンバーにもそこへ通っている子がいたはず。

「……………少し、調査する必要があるわね。」

私も彼の後を追い、駆け足で向かった。

第13輪 夏夜の空に咲く火の花

夏休みも残り半月まで迫ってきた。

提出する課題は当然の如く手をつけず、バイト三昧の日々を送っている。

コラボカフェでの暴力事件後、店長に辞めることを告げ新たな稼ぎ所を模索していたオレに、天使のお声がかけられた。

それも天使の仮面を被った、ただのおっさんだったんだが………まあ気にしないで
おこう。

オレにとっては有難い申し出だ。

その内容というのが、今夜近所で行われる祭りの屋台運営の手伝いだ。

でかい鉄板に切った野菜と解した麺を炒めてソースをかけるだけの簡単なメニューを作れと言うが、料理以前に接客が問題だ。

面倒な客が来たら、問答無用で殴り飛ばす自分の姿が目に見えている。

肝心の店長も、絶対に酔い潰れて使い物にならないだろう。

最悪、暴れ回るオレに便乗して喧嘩をさらにヒートアップさせる可能性だって大いに

ありえる。

せめて、オレからは事を起こさないようにしないな——。

陽が落ちて夜を迎えようと空が暗くなってきたタイミングで夏祭りが開催された。今年もまた長身の赤毛の女が和太鼓を叩き、アナウンスと共に開店されたすべての店が人で溢れかえる。

オレの営業する店の前にもすでに何人かの列が作られていた。

「焼きそば2つください！」

「600円だ。そのハゲに金を渡してくれ」

「はいどくもくっ！髪なし金なしふ〇っしゅ！ひゃっはー!!」

「余計なことは言わなくていいからさっさと仕事しろ。後ろが詰まってる」

案の定、店長は酒に飲まれ既に出来上がっていた。

金を渡す客も少し引いている。

オレの言葉もおっさんの耳には届かず執拗に絡んでくる。

「おいおいおい、奏さんよお！誰のおかげで働けてると思ってるんや？おお！」
「他の誰でもないアンタのおかげだよ。早くしないと、客が捌けない上に売り上げが悪くなる。頼りにしてやるからきつちり頼むぜ」

「おうよ！おじさんに任せなさい！」

丸太のような右腕を強調させ、気色悪い台詞を吐く。

おっさんの着ている服がタンクトップだからか、余計にそれが逞しく見える。

「うだうだ言うてねえでさつきとやれ。ところで、その片手に持つてるビール入りのジョッキーはなんだ？」

「ああ？そんなん決まっとるやろ。オレは今日このビールと、さつきその店で買ったフランクフルトで優勝してるんや！」

「自分がアニメキャラだと信じて止まない YouTuber かつての。ほらっ、焼きそば2つ上がり」

「冷たいなあこの野郎」

おっさんに構うこともなくオレは坦々と調理を進める。

味が評判になったか、キモい接客が話題を呼んだのかは分からんが、列が途切れることはなかった。

売れ行きは上々。この勢いなら完売も難しくないだろう。

開店から一時間が経過し材料も残り僅かとなった時、異質な客が来店した。

「おにーさん、焼きそば2つちよーだい！」

テンションがやたらと高いその女は来店するや突然、腰を低くし調理に集中するオレと強引に顔を合わせてきた。

満面の笑みを浮かべるその表情は、この祭りを心の底から楽しんでることが窺える。しばらくすると、もう一人の女が駆け足で向かってきた。

「こらっ、日菜！急に走り出したら危ないでしょう！」

「だって焼きそばの屋台を見たらるんっ♪てなつまし、ソースの匂いを嗅いだらビュンって体が勝手に走り出したんだよー」

「あなたは相変わらず訳のわからないことを……………!」

全くもってその通りだ。

擬音だらけで何を言いたいのかさっぱり分からん。

「失礼しました。改めて、焼きそばを2つお願いします」

「600円だ。その厳ついおっさんに——」

顔を上げるとそこには、同じ顔が二つ並んでこちらを覗いていた。

髪は長短分かれていたが、瓜二つの顔つきと同じ柄の浴衣姿に少々度肝を抜かれる。後に来店した髪の長い方の女は、オレの顔を見て驚いた表情を見せた。

「月島くん……………?」

「おう。らっしやい」

「ええっ!?おねーちゃんとおにーさんって知り合いな?」

「ええ、まあ一応」

目をキラキラと輝かせる氷川妹とは対照的に、氷川姉は嫌そうな顔を浮かべる。

「知り合いと言つてもただの仕事仲間だ。心配しなくても、アンタの家族を取りやしねえよ」

「そっかー、なら安心だねー!」

「ちよつ、ちよつと!」

「焼きそば2つだったな。ほらよつ、冷めないうちに食いな」

「わーい!ありがとうー!」

氷川妹に焼きそばの入ったパツクを2つ渡し、代金を受け取る。

「せっかくの機会だ、このキンキンに冷やしたラムネもやろう」

「ホントっ!? やったー!」

「そんな、申し訳ないです……………」

「気にするな。その代わり、お前の家族を少しだけ借りてくぞ。話しがしたい」

「うんつ、いいよー! おにーさん優しいから大丈夫っ!」

「私を差し置いて話を進めないでください!」

「そういうことだ。その辺のベンチにでも座って待ってる」
「はい！」

氷川妹は嬉しそうに駆け出した。

どうやらヤツは、氷川姉とは真逆の人間性を持っているらしい。

氷川があんな無邪気に走り出すところなんて想像もつかないな。

姉妹はよく似ると聞くが、双子のこの2人に関しては顔だけが当てはまるだけでそれ以外は点で合わない。

一人っ子のオレからしたら、実に面白い現象だ。

「あれが双子の妹か。何というか、”天真爛漫” という言葉がよく似合う女だ」

「全く、恥ずかしい限りです……………」

オレは調理後の片付けに入り、氷川は店前から動かず深いため息をつく。

「だが驚いたぜ、険悪の仲だったはずの妹と一緒にオレの前に現れやがったからな」
「何週間も前から誘われていましたから仕方ありません」

「それはウザいな」

「何度も何度も、しつこいと思えるぐらい誘ってきましたからね。私が行くと言った時はとても嬉しそうにしていたのを覚えています」

「今も心底楽しんでる様子だったからな。無下にするのは少し可哀想だと思ったか」
「そうですね、以前の私ならきつと——」

氷川はそこで言葉を区切り、咳払いをする。

「私自身、態度を改めて妹と向き合ってるつもりです。今日はその第一歩ということ
です」

「そうか、まあこれからも精進することだな」

「勿論そのつもりです」

「……………おっと、お前の妹が手を振って呼んでるな。行ってやれ、呼び止めて悪かったな」

「こちらこそお世話になりました。また学校で会いましょう」

氷川はそう告げ、妹の待つベンチまで歩き始めた。

2人の仲が良くなっていくのを心から願おう。



氷川姉妹が来店して以降、客足が完全に止まってしまった。

だが材料も残りわずかであと2、3人きたら完売できるであろう数だ。前半で大量に売れたおかげで何とか黒字まで待っていけそうだ。

「店長、そろそろ店閉まいするか？」

「まだ最後のトリが残つとるから閉めんで大丈夫や」

「最後のトリ？ ああ、花火のことか」

「まだまだ客は来るはずや。最後まで売り切るでー」

「アンタは酒飲んで、つまみ食べて、酔ったまま接客してただけだろ」

「その接客がまともにできへん野郎はどこ誰や？」

「はいはい、感謝してるぜ」

「わかりやいいんだわかりや！ ハッハッハ！」

上機嫌なおっさんはそのまま、新たなつまみを買いに店を後にした。

オレは満月が昇る夜空を見上げる。

この夏祭りの目玉でもある打ち上げ花火は雑誌にも取り上げられるほどの知名度を誇る。

この一面の夜空に花火が舞い上がる図を想像すると、絶景になるのはもう間違いない。

幼少期ガキの頃から毎年のように観ているが、全く飽きない魅力がそれにはある。

今からでも楽しみな。

思い出に浸っていると聞き覚えのある声が2つ、この店に近づくのが見えた。

青と黄色の浴衣を見に纏うその人物たちと目が合い、片方は笑みを浮かべて手を振って返し、もう片方はオレから顔を逸らしてきた。

「月島くんっ、お疲れ様！」

「おう、松原。らっしやい」

「随分と仕事熱心なのね。関心だわ」

「……………白鷺千聖、心にも思っていないことを口にするな。目が全てを物語っている

ぞ

「あらっ、失礼ね。本心から出た言葉よ？」

「ふ、2人とも………」

一触即発のオレたちの間に松原が割って入った。

どうもヤツがオレに対して放つ言葉は全て、おちよくっているようにしか聞こえない。

こんな女がテレビやドラマに出続けられるのだから不思議で仕方ない。

「ここに来たからには、飯食ってくんだろ？」

「うんっ、2人前お願いします！」

「あいよ。600円だ。しばらく待ってな」

慣れた手つきで野菜や麺を炒め、ソースを絡ませあつという間に完成させる。

氷川たちと同様にキンキンに冷やしたラムネとセットで手渡す。

「それにしても、お前たちってホント仲いいんだな」

「中学からの付き合いだからかしらね。今日も前々から誘われていたのよ」
「えへへっ」

松原は照れ臭そうに笑う。

中学からの友達と、か。

そのほとんどが今や、高校の友達や新しくできた彼女と共に夏休みを満喫すると言うものだから、ボッチ青年のオレからしたら羨ましい話だ。

「祭りは楽しんでるか？」

「うんっ！勿論だよ！」

「たまにはこういったことも悪くないわね」

「後10分もすれば花火が打ち上がるはずだ。人も多いし逸れるんじゃないわね。特に
松原」

「ふえっ!？」

「うふふっ、ちゃんと手を繋いでいくからご心配なく」

「テメエは人集りをつくって松原に迷惑をかけるなよ。仮にも芸能人なんだからな」

「心配してくれてありがとう。あなたのその言葉、一応耳に入れておくわね♪」

あーホントっ、集まってきた人々に踏み散らされたらいいのに……………。

「いいからさっさとさっさと食いやがれ。これで飯が不味いと言われたら癩だからな」

「有り難く頂くわ」

「またメールで感想送らせてもらうね♪」

「くれぐれもSNSには投稿するなよ」。学校で騒がれたら面倒だからな」

店を後にする2人を見送り、残ったラムネを手に取り一気に飲み干す。

焼きそばも残り1人分だ。

このまま完売を目指したいと考えていた矢先、1人の女がオレを訪ねてきた。

「すみません、少しよろしいでしょうか?」

物腰柔らかく話すその女は、白を基調とした服装や話し方がどこかお嬢様を思わせる雰囲気漂わせている。

それに似合わず、腰あたりまで伸びている長い髪はド派手な赤い色をしてるのが少し気になるが、触れないでおこう。

見知らぬ女との会話は好かないが、オレもこの半年で松原たちとの関わりで成長したんだ。

その成果を今ここで披露しよう——。

「オレに何の用だ？ 後5分ほどで始まる花火を観たいから、他をあたって欲しいんだが」

……少々言い方は強くなったが、言いたいことは全て伝えた。

今までみたく、無視したり敵視することもなくあくまで対等に接したつもりだが、どうだろうか？

「とても重要な用事なので少しお時間をもらえたら幸いです」
「なるべく早く済ませてくれると助かる」

「それじゃあ、付いて来て貰ってもよろしいですか？」

「……………？ああ、別に構わねえけど」

オレは背を向け歩くその女の後をついていく。

祭りの会場を離れ、道を歩く間にもオレたちが会話をすることは決してない。

気がつくともオレたちは人目のつかない裏路地まで足を踏み入れていた。

初めの印象が悪くなかったから気がつかなかつたが、コイツ、ヤバイやつだな。

初対面の男をこんな場所に連れ込むなんて普通じゃない。

この場所を選んだのとオレに用があることから察するに、復讐とかその類によるものだ
だと推測できる。

これはもう、この女に優しくする必要はなさそうだ。

気を引き締めなければやられる。

オレの野生の感が、そう囁く。

「お前、何者だ？」

やや上から目線から問いかけると、ヤツは背を向けたまま不敵な笑い声を上げた。それはあまりにも不気味で、しんと静まり返ったこの空間と相まって余計際立つて聞こえる。

ヤツが振り返るとそこには、青筋を浮かべさつきの笑い声の持ち主とは思えぬ顔つきでオレを睨んだ。

「……………やっぱり、思い出してくれなかったのね」

「お前みたいな不吉な女は知り合いいはいねえよ。さつさと名乗りやがれ」

「あの時より背丈が伸びたかしら？ 体つきも逞しくなったわね。でも、言葉遣いは相変わらずね……………」

「さつきから何ブツブツ言ってるんだ？ オレは花火を——」

「これでも思い出せないかしら？ 元クラスメイトの月島 奏くん」

元クラスメイトと名乗るその女は、肩に掛けてある小さいカバンから一枚の写真を取り出しオレに投げつけた。

それを拾い写真に目をやると、そこには女と並んで立つ制服の男が写っていた。

………驚愕だ。その写真に写る双方をオレは知っている。

中学生の頃のオレともう1人は——。

「随分久しぶりね。やっと思い出してくれたかしら？」

「……………ああ、この写真のおかげで一致した。お前の名は北谷^{きただに}桃子^{ももこ}。そして、”羽丘女子学園の女帝”という異名を持つ、ここいらで有名な女番長だな？」

オレが中2の頃告白した女。

オレを振り侮辱した女。

オレを女嫌いにした張本人。

その女が今、目の前にいる。

「うふふ、正解よ。覚えてくれていて嬉しいわ。しかも、今の私についても何か知っているようで驚いたわ」

「驚いたのはこっちのセリフだ。あの綺麗だった栗色の髪はどこへやった？」

「そんなもの、とうの昔に捨て去ったわ。気に入らなかつたんですもの。あなたの好む全てのものが」

「酷い言われようだな」

「当然よ。あなたは私を地の底まで墮とした張本人なのだから」

「それはお互い様だ。今じゃあオレは大抵の女が敵にしが見えねえ上に、普通の恋愛なんてできなくなつたんだ。どう責任を取るつもりだ？」

「うふつ。なら、私とお付き合ひしましょうか？」

「あの頃のオレなら涙を流して喜んで受けただろうが、殺意剥き出しの雰囲気をかもちだすお前とじゃあ無理な話だ。それに、冗談でも告白は軽率に行うものじゃないと思うぜ？」

「恋愛なんて私にとってどうでもいいことよ。大っ嫌いなあなたでも付き合うことは可能だけれど？」

「残念だが、答えはノーだ。諦めろ」

「こんな言葉のやりとりをすることになるとは、当時のオレでは考えられなかつただろう。」

そして、この短時間で一つ気づいたことがある。

長い髪といい、話し方、格好から何までオレの嫌う白鷺千聖にそっくりだ。

ヤツと仲が最悪なのはきつと、同じような人間に恋心を抱き、屈辱を味わったことが起因しているんだろう。

そう考えていると、外では花火の打ち上げ音が鳴り響き薄らとその光が目に入る。

「花火が始まったみたいだ。そろそろ本題に入ってもいいんじゃないか？」

「そうね。なら、そうさせてもらうわ——」

北谷がフツと小さく笑うと、突如オレに向かって走り出し携えていたポケットナイフをオレの腹部目掛けて突いてきた。

それを間一髪かわし、左右に振り回す攻撃も対応し、二歩三歩飛び跳ねながら後退する。

あまりの出来事に驚いたが、所詮は女。

女帝と名乗られるには実力がまだまだ乏しく感じる。

「元クラスメイトに向かって刃を突き立ててくるとは、いい度胸じゃねえか」

「お見事よ。全てかわすなんてね」

不満げに答える北谷は、手をプルプルと震えさせ怒りを露わにしている。

「あのいい女だった人間が殺人未遂とは………本当に堕ちちまつたんだな」

「それも全てあなたのせいよ。これを見たら、その理由もわかるはずよ」

ヤツはポケットナイフをしまい、前髪を上げ額を見せてきた。

端から端まで深々と残っている傷跡。

それはおそらく、オレが当時暴れた時にできた傷だともいうつもりだろうか。もちろんオレにそんな自覚はない。

あの時はただ、己の欲望に身を任せ力を奮ったんだからな。

「痛々しいな」

「……………私は癒えることのない傷を負わされた。月島 奏、あなたを殺すことでこの傷は名誉あるものへと変わると私は考えてるわ」

「酷い理屈だな」

「私はあなたを許さない。真つ当な人生を送るはずだった私にこんな仕打ちをするなんて、死ぬ以外に償うことなんてできないわ」

「まさか、その目的の為だけに不良へと成り果てたつてか？もつとまともな人生を遅れただろうに……哀れみすら覚えるぜ」

「なんとでもいいなさい。次にあなたと会う時は、殺す準備が整った時よ」

「ああ、全力で返り討ちにしてやるよ」

北谷は薄暗い裏路地を真つ直ぐ進み、姿を消した。



外はまだ花火が打ち上がっている真つ最中だが、もうそれを見る気になれない。疲労した体を壁に預け、ぐったりと腰を下ろす。

「まさか、こんな形で再会するとはな……」

オレは頭を掻き、独り言を呟きさっきの出来事を思い出す。

北谷の目は本気だった。

ヤツは確実にオレを殺るために策を練ってくるはずだ。油断はしてられない。

もちろん、オレだけが危害を加えられることなんてないだろう。

オレの身内、特に仲の良くなった松原や氷川なんかは特に注意しておいたほうがいいな。

ヤツが手段を選ばないのなら、こつちも手を尽くそう。

この学園で築き上げた2人の信頼関係を踏みにじる真似は絶対しない。

オレは心にそう誓った。

第14輪 踏まれ散るジュリエット

長い長い夏休みも終わりを迎え、オレたち学生は二学期を迎えた。

久々に登校した学校だが、家で毎日と言つていいほどその形を見てるから感動もクソもない。

見慣れた光景の中には、部活動に邁進したであろう生徒たちの肌がこんがりと焼けた姿も目に入る。

それはオレにも言えることなんだがそれとは別で、通り過ぎる生徒からやたらとオレに視線が集まっている。

気のせいならありがたいんだが、今のところ百発百中。

もちろん、心当たりは何もない。

強いて言うなら髪をまた金のメッシュに戻したところぐらいだが、もうすでに見慣れているはずだ。

その程度で注目されるほど、オレはこの生徒から好かれていない。

無言で教室の扉を開くと、先ほどまで夏休み明けの話で盛り上がっていたはずのクラスがシンと静まりかえり、オレをまじまじと見つめる。

それと並行してヒソヒソと陰口を叩かれるように話し出した。
なんだか気が悪い。いくら嫌われてるとはいえ、このクラスの居心地は最悪だ。

「月島くん、おはよう」

「おう。夏祭り以来だな」

「うん、すごく久しぶりな気がするなあ」

既に着席していた松原に声をかけられる。

夏休み明けだろうが、コイツはなにも変わらない。

白い肌に青い髪、そして薄紫の瞳には一切の淀みも感じさせない純粹さをかもちだす。

「そんなことよりも松原、一つ聞きたいことがあるんだが」

「どうしたの？」

「さっきからと言うか、今日登校してからずっと周りから視線を感じるんだが………何故だか分かるか？」

「視線？」

「気味が悪い上にイラってくるんだよ。コソコソ話しやがって、この根性無し共が」
「うーん……………なんでかな？」

2人で頭を悩ませていると、教室に白鷺千聖が入ってきた。

「2人とも、おはよう」

「あつ、おはよう、千聖ちゃん！」

「何か話してみたみたいだけど、どうしたの？」

「それがね——」

「オレを見てコソコソ話される原因を松原に聞いていただけだ。お前には何も関係ねえよ」

松原が答える前に白鷺千聖にことの経緯を伝えた。

オレの予想だにしない返答に2人は驚きの表情を見せる。

今までなら無視か高圧的な言葉で応対してたが、コラボカフェの一件以降、こいつの見方が少々変わった。

人を嘲笑うかのような態度をしていたコイツでも、松原を助けるために動くようになった

あの瞬間、確かにコイツは本気だった。

理由はただそれだけだが、友達を守ろうとする心、特にコイツみたいな有名人だとそれが問題になり難しいだろう。

それを恐れず客に立ち向かったコイツを悪くいうことはできない。

だからこそあのとき力を貸した。

それでも、これまでの見方から毛一本分程度しか良くはなっていないがな。

白鷺千聖はすぐさま笑みへと変え答える。

「恐らくだけど、私に関係してるわね」

「千聖ちゃんが？」

「どういう意味だ」

オレがそう問うと、白鷺千聖は携帯を取り出しある記事をオレたちに見せた。

それは夏休みにバイトしてたコラボカフェの写真が映されたものだった。

「月島くんはここで事件を起こしたのは、覚えてるかしら」

「汗だくの野郎を地面に叩けつけたアレか」

「そう、翌日からそれがネットニュースにも流れてかなり話題になったの」

「あつ、それなら私も見たよ。顔は映ってないし名前も公表されてなかったけど、すごく話題になったのは覚えてる！」

「それで周りからこんなに噂されてるとでも言うのか？だが、松原の言ったことが本当なら、なんで実名が出てないのにオレだってわかるんだ」

「うふつ、そんなこと、その場にいた人がSNSに投稿すれば自ずとアナタへと辿り着くことはできるわ」

白鷺千聖は笑いながらそう言うと、携帯画面をスライドさせ別の写真を表示した。

そこにはオレの顔がモザイクなしで映っていて、『この青年の情報を求む！』という眩きと共に投稿されていた。

「なるほどな。それでこの投稿を見た誰かがオレをリークしたと」

「そのようね」

「全く、迷惑なことをしてくれる。どうせオレに対する誹謗中傷の言葉で溢れかえったんだろ？」

「いえ、結果はその逆よ」

白鷺千聖は更にスライドさせると、様々な眩きが保存された写真を表示した。眩かれた言葉はどれもオレを擁護するものばかり。

”迷惑な客を成敗した英雄” とまで謳う投稿も見受けられた。

「アナタの言う通り、暴力をしたことに対する異論は確かにあったわ。でも、この場にした人のほとんどが思ったはずよ。月島くんが正しいと」

「別に他人に認められる為にやったことじゃねえよ。それにオレはこの学校では嫌われてる身。ネットでいくら褒め称えられようが花咲川の生徒たちにとっては、この一年半で与えたオレの悪い印象が強いに決まってる」

「そんなこともないわよ。現に月島くんが風紀委員として解決した事件の数々も、大多数の生徒は耳にしてるわ」

「盗撮事件は私たちが知らないけど、藤村先生のことはみんな知ってるよ。放送で呼び出した日から、先生は変わったって」

「少しは月島くんがしてきたことが報われてきたんじゃないかしら?」

「はっ、女に幾ら好かれようが関係ねえよ。オレは女が嫌いなんだ。それにさつきみたいニコソコソされると鬱陶しくて仕方ない」

「大丈夫だよ。ほらっ、人の噂も七十五日って言うよ！」

「……………おい松原、なんのフォローにもなっていないことに気がついてないのか？」

「2ヶ月なんてあつという間だよ、うんっ！」

3人で話していると始業のチャイムが鳴り、白鷺千聖は席についた。

2ヶ月なんてあつという間か。

およそ60日間もの期間を短いと感じれる松原のポジティブ思考を見習いたいものだな――。

始業式を終え教室へ戻ると、担任からある行事について説明を受けた。

それが花咲川学園文化祭。通称、花咲祭だ。

在校生や卒業生、保護者や学外の生徒も出入り自由のこの行事は高校としてかなりの知名度を誇っているらしい。

クラスメイトたちもこの行事の名を聞いた時、笑みを浮かべて話しているところを見るとそれなりの楽しさもあるようだ。

去年のオレは確か――そうだ、屋上でサボり倒してたな。

らしい、とか、ようだ、と口にしたのはこの行事を直に経験していないからだ。

”女と力を合わせて”なんて一年前のオレでは考えもしなかっただろう。今年、風紀委員の面目もあるし、オレがどう足掻こうが強制参加させられるのは間違いない。

オレはオレなりに、この行事を楽しむとしよう。



クラスの話し合いの結果、2年A組の出し物は演劇。それも、オレと白鷺千聖が主演の”ロミオとジュリエット”に決まった。

もちろんオレと白鷺千聖は反対したが、夏休みに広まった噂はどう言うわけか、オレたちが恋人関係にあるという根も歯もない噂にまで発展していた。

犬猿の仲と言われたオレたちがそんな関係にまでなると妄言したやつはアホか、はたまた頭の中が花畑か。

それに、メルヘンチストの言葉を間に受ける他の人間もどうかしてる。全く迷惑この上ないな——。

そして迎えた放課後。

予め考えられていた台本を手渡され、パラパラと本の中身に目を通す。

内容は原作とは少しばかり変更点を設けているらしいが、そもその話を全く知らないオレには関係ない。

クラスメイトに見つめられる中、台本の読み合わせが始まった。

「ああ、ロミオ、ロミオ！どうしてあなたはロミオなの？」

「しら………ジュリエット、ワタシハココダ」

「カーーツト!!」

読み合わせ開始と同時に、気の強い女監督が止めに入る。

「月島くん、もう少し棒読みするのを何とかできないかな？」

「いきなりでそんなことできるか。それに相手は白鷺千聖だ。あの名女優と同じ演技力を求める方がどうかしてると思うが？」

周りに見られる気恥ずかしさもあるが、何より相手が悪い。

空想上の恋愛話だとしても、その役を担っているのはあまり好かない人間だ。嫌でも顔に出る。

「別に私に合わせなくて構わないのだけど、感情がこもってないことが丸わかりよ」
「望まねえ役をやってる人間に、そんな感情を求めんな。代役なら他にもたくさんいるぜ」

オレはエキストラである他の男子生徒の名指しする。
しかしそれにも目もくれず、監督はため息まじりに答える。

「ロミオってかっこよくて紳士なイメージなんだよねえ……………それを他の男子が務めるとなると、ちょっと……………」

監督は遠回しに、他の男子を「ブサイクだ」と発言した。

その言葉に男子たちは怒りの表情を見せる。まあ当然の反応だよな。
しかしオレにだって合致しない点はある。

「アンタの言っていることは間違ってるな」

「ま、間違ってるって?」

監督は不思議そうに首を傾げる。

なるほど、さっきのは何も考えずに発言したということか。

少々言い方はキツくなるが、コイツの為にクラスの野郎共の代弁をしてやろう。

「まず、オレは紳士なんかじゃねえ。そんな野郎が授業をサボったりしないはずだろ?それに比べたらここに居る野郎共の方が紳士だと思うけどな」

「それは……そうだけど」

「それから、このクラスの野郎共をブスだといったことに対して謝罪しろ」

「べ、別にそう言ってるなんか……!」

「アンタはそう思ってるなくても、少なからずオレたちはそう捉えたんだ。オレの演技にとにかく言う前に、自分の態度を改めるんだな」

監督は不満げな様子を見せるが、すぐさまエキストラたちに謝罪の言葉を述べた。

ヤツらもその謝罪を受け入れて事なきを得たように見えるが、少しばかり教室の空気

が悪くなった。

それを監督も察して、各々個別練習をすることを提案し、皆が受け入れる。

白鷺千聖も、脇役の女たちに連れて行かれたからなあ………仕方ない、屋上に行くか。

………

………

昼休み以外で屋上に来るのは随分と久しぶりだ。

夕方を迎えたとはいえ外はまだ残暑が残っていてかなり暑い。

それでも、屋上に時たま吹く冷たい風はその暑さを忘れさせてくれる。

まさに春夏秋冬問わず楽しめる場所だと言えるだろう。

今日も学校で一番高い場所までよじ登り、台本を枕代わりに寝転び目を閉じる。

今オレに伝わるのは、風の音、生徒たちの声、虫達の囁くような鳴き声、誰かが梯子をよじ登る音、そして――

「あつ、やっぱりここにいた!」

聴き慣れた女の声だった。

「つんだよ松原。仕事はどうした？」

オレは目を閉じたまま問いかける。

「急に教室からいなくなったから、もしかしてここにいるのかなあって思って来ただけだよ」

「そうか。ならお前は衣装作りの仕事を放り投げて、オレを探してたって訳か」

「ふええく……………そう言われると、そうだけど……………」

「まあ気にするな。文化祭まではまだ時間がある。あんまり気を張り詰めてると、当日まで持たねえよ」

「あはは……………月島くんは落ち着いてるね」

「今からジタバタしたって無意味だからな。お前も横になつてみると分かるはずだ」

「そ、そうかな？それじゃあ、お邪魔します」

松原はポケットに入っていた水色のハンカチを床に敷き、オレの横に寝転がる。

さつきまでオレが感じていたものを全て味わった松原は心地良さそうな表情で呟く。

「これ……………凄く……………いい」

「だろ？秋になるとまた違った良さが——」

「……………ぐう」

唐突に聞こえた松原の寝息に、思わず目を開き音の鳴る方へ目線を向ける。手を腹の上に置き、目を閉じ完全に寝る態勢に入っていた。

「……………まさか寝落ちばくすいするとはな」

全く、無防備な女だ。

他の野郎なら間違ひなく襲われていただろうに。そう考えたらコイツをこのまま放置するわけにもいかないよな……………。

やれやれ、仕方ない。

初日ではあるが、今日は2人でサボりを決め込むとしよう。

そう考えた矢先、更なる客人が屋上を訪れた。扉の解放音が鳴ると同時にゆつくりと歩く足音が聞こえる。

入学当初から屋上を解放されてるとは教師陣が一切口実していない上に、扉の前には立ち入り禁止の看板まで表示されている。

それにオレが高一の時にはこの扉は鍵がかけられていて中に入ることは出来なかつたから、あくまで周りでは「屋上には絶対に入れない」という事実だけが残る。

しかしオレはそれを蹴って壊し、誰でも容易に屋上へ入れるように仕向けた。

幸いなことに、屋上には監視カメラが一切設置されてなかつたから教師陣に知られてすらない。

もちろん壊したドアノブは接着剤で誤魔化したから、目視だけではバレることもない。

まさに完璧。

屋上はオレだけの楽園と化した——はずなんだが、現に何者かがこの場所へと足を踏み入れた。

一体どんな野郎だ。

学園の一番高いところから恐る恐る顔を覗かせる。

オレの目に映ったのは、左肩を抑え右足を庇うように歩く女子生徒の後ろ姿。

金色の長い髪を風になびかせ、その生徒は金網にもたれ掛かり崩れるように座り込んだ。
だ。

見ただけで誰だかわかる。

2年A組のジュリエット様だ。

「はあ……………ホント、どうしようもない人たち……………」

ため息混じりに嘆くジュリエット口振りにはまるで、手も足も出せず諦めているかのようだ。

今に至るまでの言動を察するに、オレと松原がサボりを決め込んでいる間にクラス間で何かあったに違いない。

変に気を使うのもオレの性に合わない上に、相手が相手だからな……………よしつ、ここはいつも通りに振る舞うか——。

学園の一番高い所から梯子を使わずに飛び降りると、屋上にドンツと鈍い音が響き渡る。

およそ5メートルある高さからのジャンプ、そして着地に足がジーンとするが平然を装いゆつくりと歩み寄った。

「どうした、ジュリエット。そんな人殺しみたいなツラしてよお」

「……………どうしてあなたがここにいるの」

オレの投げかけにもジュリエット——白鷺千聖は下を向いたまま答える。

「簡単に言うと松原とサボりだ。お前は？」

「……………放っておいて」

オレの問いに白鷺千聖は答えようとしなない。

「なら話を交えるぜ。その腕と足の傷、誰にやられた？」

「……………!?!」

オレの予想外の言葉に思わず顔を上げ、驚いたと言わんばかりの表情を見せる。

そんなヤツの前にしやがみ、話を続けた。

「お前がそんな目に合うとは、よほど恨まれるようなことをやらかしたんだろな。オレですら手は出さなかつたのによ」

「……………あなたには関係ないでしょう」

「ここで話すのも何だ、お前も上に来ないか？」

「……………あなたから申し出るなんて珍しいわね」

「花咲川の名女優に手を出す野郎がどんな奴か気になるだけだ。ウダウダ言つてねえでついてこい。オレの気が変わらないうちにな」

「ええ、わかつたわ」

オレたちは立ち上がり、松原が寝て待つ所へ歩き出した。



「———そうか、そんなことがあつたんだな」

これまでの経緯を聞き、白鷺千聖はゆっくりと頷く。

要約すると、学校にあまり来てないことや白鷺千聖自身の態度、今回の主役を奪われた仕返しとかで一方的にやられたらしい。

その相手は、脇役で出演予定の女の3人組で、クラスでもカースト上位に位置する奴ららしい。

「そこまで詳しくは知らなかったが、女嫌いのオレですら　面倒な3人組」と位置付ける程のグループだ。

授業中もやたらデカイ声で話すわ人を見下したかのような態度をとるわけで本当にこの学園の生徒かって思うほどの……………いや、人の素行をとやかく言う資格はオレにはなかったな。

「それで、お前はこのままでいいのか？」

「……………私が抵抗したところで、どうにもならないもの」

「まあ、お前がそれでいいならオレは傍観するだけだ。助けたところで、本人の意思が無けりゃ何の意味もねえからな」

テレビに出ている芸能人、だからと言う理由もあるんだろう。

問題を起こせばメディアは放っては置かない。

そう考えると、オレは死んでもテレビに出たくないな。

「お前がイジメられるのを受け入れるのは勝手だが、他人を巻き込むなよ」

「どういうこと？」

「仮に、お前がその時暴力を振るわれていたとしよう。そして運悪くそこに、お前の大親友が鉢合わせる。傷つくお前を見たコイツがどんな行動をとるか——容易に想像できる」

横で寝ている松原を指差すと白鷺千聖も、どうなるか察したように顔が強張る。

「お前がどうなろうと知ったことじゃねえけど、松原が同じ目に合うことになったら……………お前を絶対許さねえ」

「ええ、もちろん、花音には気づかれないように努めるわ」

「その自信のない根拠はどこから出てくる？100%、確実に松原にバレないようにするなんて、この学園に通う限りありえないことだろ」

「そんなこと言ったって……………」

「どうしたらいいかわからない」　　って言うんだろ？そんなこと、簡単じゃねえか」

オレはそこで区切り、枕がわりにしていた台本を丸めてコンクリートの地面に突き立てた。

「——二度とそんな目に合わないように、恐怖を与えてやればいい」

オレの放った一言が理解できず呆気にとられたような顔をする白鷺千聖。

「もちろん、お前の芸能人としての身が脅かされるようなことは一切しない。これを行うのはあくまで、オレだ」

「月島くんが？どうして……………？」

「松原のために決まってるだろ。あんな友達思いのいい女に手出しさせねえ為だ」

「そう。あなた、花音のことが好きなのね」

「茶化すな、ボケツ。心配しなくてもお前の大親友を獲るようなマネはしねえよ。それに、女を好きになる愚かさを、中学の時に身に染みて覚えたからな」

そう、これは恋愛感情で動かされてる訳じゃねえ。

あくまで松原花音の友達として、そして松原花音の身を守るための行動だ。

「オレにいい案がある。少し耳を貸せ」

「あなたって、ほんと自分勝手よね」

白鷺千聖は呆れながら呟く。

夏休みの一件で少しはクラスメイトからマシな扱いを受けているが、そんなことはどうでもいい。

最小限、せめて松原と氷川と友好的関係にあればそれで十分だ。

第15輪 寝返りのダリア

とある日の放課後。

文化祭開催まで残りわずかという今日この日も、文化祭で演じる劇の練習をしている。

しかし、未だオレの演技力が向上することも無く、ただ意味のない時間が流れている。クラスメイトたちも、疲れの色を見せ始めているのにホント申し訳ないんだが、相手がやはり白鷺千聖だとなあ……………。

「仕方ないわね、今日も残りの時間は個人練習にしましょう」

ジュリエットの一声で役者たちは散り、各々練習をし始めた。

それと同時に、白鷺千聖の姿もあの脇役の3人組と共になくなった。

オレは荒っぽく椅子に座り、机に置いてあった缶コーヒを開けて口に含んだ。

「月島くん、お疲れ様」

「おう。松原もな」

松原が隣で衣装作りながら、劳いの言葉を掛けた。
手にしてるのは一体誰の――

「これは千聖ちゃんの衣装だよ」

「なんだジュリエットのか。良くできてるんじゃないの？」

「えへへ、ありがとう」

松原はそう言うと、はにかむような笑みを見せる。

その衣装は、目立つこと間違いなしと言ったような赤と、キラキラと光に照らされ輝く装飾物が特徴的だ。

女優が着るに相応しい。

そう言わざるを得ない出来栄えだと言える。

「やっぱ主演ともなると、結構派手なの着るんだな」

「黄色とどっちにしようか迷ってたけど、アイドル活動で着慣れてるからって千聖

「ちやんが断ったんだ」

「どちらにせよ目立つだろ、こんな明るい色なんだから」

「どっちを着てもきつと可愛いよね♪」

「知るかつ、そんなこと」

女にとつての ” 可愛い ” の基準はよく分からん。

近年は ” ブサ可愛 ” だとか、 ” キモ可愛 ” だとか、もはや褒めてるのか貶して
るかすら危うい言葉すら存在している。

そういえば、この前青森県の有名なブサ可愛犬が死んだってニュースが流れてたな。

オレはあの犬を、『まるで百戦錬磨の強者の佇まいをした逞しい犬』だと解釈してたんだが、もうあの立ち姿を見ることができないとは……………非常に残念だ。ご冥福を祈ろう。

「そうだつ、松原。よかつたらオレの稽古に付き合ってくれよ」

「ふええ!?!け、稽古!?!」

「誰がお前と殴り合いあおうなんて言った?」

「そ、そうだよね……………」

「はあ、全く、オレをなんだと思ってるんだか」

松原にツツコミを入れたのもなんだが、コイツの前では結構荒っぽいことしてきたな。

初めて会ったナンパ野郎とか、海であったクレーマーとか――。

「……………そんなことはどうでもいいんだよ。芝居の稽古だ、ロミオのな」

「うんつ、私で良ければ協力するよ。役は、ジュリエットでいいのかな？」

「察しが良くて助かる。それじゃあ、いくぞ」

……………

……………

「ど、どうだったかな？」

「――お前、ジュリエットやれよ」

「ふええ!!？」

事実、松原の演技は素晴らしかった。

この学園内で唯一とも言える親しい関係を持つ女な上、練習と言えど真面目に演技してくれたおかげでオレもロミオを演じれた。

「なんかお前とだと、自然にできる気がするな」

「そう言ってくれると嬉しいけど、千聖ちゃんの代役となるとちよつと……」

確かに、あの演技力の代わりともなると引き受けてくれないのは当然か。

他クラスの連中にも、「白鷺千聖が演劇の主演を務める」と知れ渡っているだろうから今からの変更は不可能。

反感を買うに違いない。

だがまあ、それはあくまでジュリエット役に限った話だがな。

「缶コーヒー捨てに行くついでに、屋上でもう少し練習してくる。監督に何か言われたら、『昼に食べた菓子パンが当たって便所に箆ってる』って伝えといてくれ」

「なんで本当のことを言わないの？」

松原は不思議そうに見つめる。

「本番で奴らにオレと白鷺千聖が最高の舞台シヨウを披露する為の下準備だ。当然、松原にも手伝ってもらうからな」

「奴……………ら……………」

残りのコーヒーを一気に飲み干し、誰にも気づかれないうちに教室を後にする。

オレが向かうのは屋上でもなければ、便所でもない。

奴らが事を起こすであろう、とある無人の教室へとゆっくり歩き出した。



この学園は広大な面積を誇る高校の為か、普段使われていない教室が無数に存在する。

鍵さえ借りることができるなら、そこは出入り自由らしいがちゃんとした理由を説明しなければならない。

例えば『今度開催される文化祭の劇の練習がしたい』と言えば、その場所が使用可能になる。

まさかその事を上手く利用し、イジメに使おうなんて誰も考えようとは思わないだろう。

なにせここは県内有数の元お嬢様校。

そんな考えを持つ輩がいるはずない、そんな理念が染み付いてやがる。

そしてここに一人、その被害を受けた女子生徒、基ジュリエットが制服を汚し床に倒れ込むように転がっていた。

何も知らないといったように平然と扉を開け、白鷺千聖の前にしゃがむ。

「よお、調子はどうだ？」

「そんなこと、聞くまでもないでしょう。……………最悪よ」

腕で目を覆い、ため息混じりにそう答える。

「もはや今のお前は、気高きジュリエットなんかじゃねえ。嫌われ者の薄汚えシンデ

レラだな」

「……………差し詰めあなたは、英雄気取りの王子様かしら」

「助けてやろうつてのに酷い言い草だな。テメエ、コラツ」

手に持っていた台本を丸めて、白鷺千聖の頭部目掛けてそれを当て、ポコツと腑抜けた音が鳴る。

白鷺千聖は怒る様子も見せず、淡々と話し始めた。

「それで、あなたの方は順調なの？」

「さあな。本番までどうなるか、オレにもわからねエよ」

「……………本当に大丈夫かしら」

「全てはお前の根気次第だ。途中で投げ出したり、抵抗するようなら水面化でこの演劇は失敗する。今更計画がぶち壊しになるなんて、たまったもんじやないからな」

「ええ、わかつてるわ」

白鷺千聖はゆっくりと立ち上がり、汚れた制服を手で払い、埃を落とす。

目立った外傷は見られないが、制服で隠された場所、特に腹部には相当な負荷「ダメー

「ジ」を受けてるのは間違いない。

イジメの常套手段。見つかりさえしなければ、何をしても許される。

今が夏服で助かった。もし袖の長い冬服だったのなら、腕にも危害を受けていただろうからな。

この女、本当に悪運が強い。

「そつちは問題なさそうだな」

「問題があるのはあなたの方ね」

「お前が弱気にならない限り、オレに問題が起こるのはあり得ねエ。今のままいけば、確実に奴らを殺れる」

「その言葉遣い、気をつけた方がいいわよ」

「物理的に殺すわけねエよ、バーカ。仮にアイツらをゴコつたとしても武が悪いのはこつちだぞ？女と男の立場を使われでもすれば、もう確実に勝ち目が無くなる」

「もちろん、私がハマすることはないから安心してくれて構わないわ」

「あつそ」

一人じゃ何もできないクセに、妙に自信満々な態度がむかつく。

「ひとつ聞いてもいいかしら?」

「急にどうした、改まって」

「折角クラス内で好かれ始めたというのに、何故それをみすみす捨てる行為をするの? ハッキリ言つて意味がわからないわ」

真剣な顔つきでオレに問う白鷺千聖。

いつもなら適当にはぐらかすか、無視して話を逸らすのだがこの場の雰囲気はそれを許してくれねエ。

オレもそれに便乗して真面目に答える。

「対して関わりのない奴らに好かれても、何とも思わねエよ」

「どうして?」

「今まで人から避けられていたオレが、この夏で話題になっただけで好かれるようになるなんて、おかしな話だとは思わないか? 所詮オレは、女嫌いの一匹狼。ちよつと良い行いをしただけで印象が変わるような人間関係なんて、求めてねえよ」

「それじゃあ月島くんは、どれだけ他人に嫌われようが、無視されようが、構わないと

「いうの？」

白鷺千聖は声のトーンを低くし、その言葉の重みを伝える。

オレはそれに肯定すると、奴はため息まじりに『おかしな人ね』と嘆いた。

別にオレは人に好かれる為、感謝される為に今まで行動を起こしてきたわけじゃねエ。

事実この高校にきて助けたのは女ばかりだ。

オレはオレの持論を話す。

「自身の知る中でもごく僅か、たった一人でもいい。心から大切だと思える奴にだけ本当の自分を知ってもらってたら、それで十分だろ？」

「なるほど………確かに、その通りね。それなら、今のあなたにとってその存在は、花音だともいうつもりかしら」

「その通りだ。ついでに言うと、氷川もな」

「その大切な人たちの為にも、私は頑張らなくちゃいけないのね」

「多勢の人間関係は崩れるが、本当の大切なものは守ることができる。オレはそれで

構わないが、お前はどうか？」

オレがそう問うと、白鷺千聖は考える間もなく即答する。

「私は花音に酷い目に合つて欲しくない。その為にも私はあなたの言う通りにするわ」

「いい心がけだ。残り数週間、くれぐれも頼んだぜ」

「ええ、もちろん」

白鷺千聖はうなずいて答え、オレたちは教室を出る。

別れを告げたオレは一人、白鷺千聖とは反対方向へと歩きだす。

目的は、そこへいるであろう奴等と話すため。

力を込めた握り拳を両の手に作り、苛立ちを覚えながら早足で向かう。

案の定そこにいた奴等は笑い声を上げながらトークを楽しんでいた。

そんなことを気にすることなくオレは勢いよく窓を開け、堂々と姿を晒した。

「白鷺千聖潰し、楽しんでるか？卑劣な女共——」



「由緒正しきお嬢様校でイジメが起きるとはな……。……。全く、この学園の生徒には失望するぜ」

普段は使われていないはずの教室に居座る女の3人組。
見ただけでわかる。

コイツらが白鷺千聖をイジメていた張本人たちだ。

教室の鍵を持っていないところを見ると、何らかの方法でここの扉をこじ開けたに違いない。

「暴力行為に恐喝、窃盗、そして不法侵入か。そんなに罪を重ねて、お前たちは犯罪集団にでもなるつもりか？」

窓枠にしゃがみながら乗っかり話すオレを視界に捉え、女たちは驚きを隠せないと言った表情でオレを見る。

オレの投げかけにも奴らは、口を小さく開けたり閉じたりを繰り返すだけで、何も話そうとはしない。

窓枠から教室へと飛び移ったと同時に、取り巻きたちが焦りながらも声を発した。

「な、何しに來たのよ!」

「何つて、白鷺千聖潰しを楽しんでる奴らはどんな顔をしてるのか気になって見に來ただけだ。まさか、それがクラスメイトだとはオレ自身驚きだ」

「先生に告げ口しようつて言うの!」

「早まるな。オレが白鷺千聖を嫌ってるのはお前たちも重々承知のはずだろ?」

「だからつて信用できるわけないでしょっ!」

「そうよ!この夏休みで貴方達がどれほど親密な関係になつてるのか知ってるんだからね!」

さっきの焦りから一転、激情に振る舞う奴らは勘違いをしている。

親密になつたなんてのは完全なデマだ。

だが、今のコイツらでは冷静な判断ができないだろう。

訂正するだけ無意味。

ここはあえて否定的な言葉は出さず、宥めるように話す。

「お前達がオレの何を知っているかまでは問わねえが、何故そこまで白鷺千聖に暴行を加えるんだ？そこまで親しい間柄でもないだろうに、不思議で仕方ねえよ」

「そんなの決まつてるじゃない！」

「だって種村さんはあなたを——」

「二人とも、少し黙ってくれるかな？」

「た、種村さん……………」

これまでの沈黙を破り、主犯の女、種村と呼ばれる奴が割って入る。

長い髪を二つに束ねたその女は、丁寧な言葉使いとは裏腹に、鋭いその目つきは野蛮な人間達となんら遜色ないといった感じだ。

「月島くんは私たちの味方ってことでいいんだよね？」

「味方も何も、オレはただ白鷺千聖が気に入らないだけだ」

「そんな曖昧な返事じゃなくて、ちゃんと示して欲しいかな。月島くんを信用してないわけじゃないけど、やっぱり白鷺さんと関係してるのは確かだからね」

「示すつてのは、具体的にどういふことだ？」

「簡単なことだよ。ここでアタシたちに協力すると言ふ事を誓つて欲しいの。それから、アタシたちがやつてきた事を全て黙認してくれたらもつと嬉しいかな」

「へエ、風紀委員であるこのオレに圧力をかけようつてか。やめておけ。女だろうと、向かつてくる奴は全員なぎ倒すぜ？」

指をボキボキと鳴らし攻撃の意を見せる。

だがもちろん、オレにそんな乱暴をする気はない。

あくまで威嚇。これで引き下がってくれるのならありがたいんだが……そう簡単にはいかないのは目に見えてる。

「た、種村さんの提案を断るのなら……」

「こつちだつて容赦しないんだから……」

想像通り、取り巻きの二人はビクビクと足を震わせながらも、オレとの戦闘態勢に入る。

この光景はいわば、獣の王に相對する小動物のよう。

武力による戦闘では敵わないとは分かっているながらも ” 数 ” による力でオレを打ちのめそうと言う魂胆が窺える。

この三人をこの場で制圧するのは簡単だが、分が悪いのはコチラの方だ。

例えオレがここで奴らの要求を無視し、暴行を加えたとしても、それは ” 数 ” による力で覆る。

三人が口を揃えて ” 無抵抗な私たちは月島くんは一方的に暴行を受けました ” なんて証言すればオレは間違いなく退学になる。

白鷺千聖が自分のイジメについて話せばそれも緩和されるだろうが、アイドルが一般人のクラスメイトにイジメを受けているなんて世間に晒されるのは、奴のプライドが許さないだろう。

ここで奴らを片付けるのはNOだ。

もう一つの手段、オレが奴らと共に問題行動を起こせば、すぐさま学校側が介入し、問答無用で退学処分を言い渡すだろう。

しかしここで奴らの行動を黙認し、白鷺千聖が潰れるようなことにでもなればオレがこの学園での存在意義が失われると同時に、オレは自主退学を余儀なくされる。

どれを選んででも結局は、最悪の結末を迎えるのはオレの方。
最高の結末を迎えるには果たしてどの選択をするべきか……………？

ここでオレは今日奴らに会ったことを後悔する。

白鷺千聖の受けた傷を見て、危害を加えた奴らに少し苛立ったのは事実だ。

だが、その激情に左右され判断を誤った。

そのせいでまた白鷺千聖を苦しめることになりそうだ。

———
いや、待てよ。

何でオレは白鷺千聖の事をこんなに擁護しようとしてるんだ？

オレは決して白鷺千聖とは友達ではないし、一方的な恋愛感情を抱いていることもない。むしろ嫌いな分類に入る人間だ。

そんな奴を助けようとか何でオレは必死になっている？

松原のため？

—— 違う。

風紀委員の務め？

—— 違う。

なら、どうして——？

(そうか……………そうだったよな……………)

少し冷静になると考えもすぐにまとまった。

「いいだろう。お前たちの悪行を見逃してやる」

「本当？なら、これからは——」

「だが、白鷺千聖に手を上げる気はない。奴もそれだけはオレにしなかつたからな」

「それなら仕方ないね。わかつた。月島くんはあくまでも傍観者ということね」

「ああ、そういうことだ。ちなみにだが、お前たちの最終目的は何だ？白鷺千聖を殺すってわけじゃないだろう？」

オレがそう問いただと、取り巻きの一人が口を開く。

「私たちは白鷺千聖を退学させる。そしてあわよくば……………」

「種村さんと付き合ってあげて欲しい」

「……………はっ? どういうことだ?」

奴らの言葉の意味がわからず腑抜けた声を出す。

肝心の種村はというと、笑顔で少し顔を赤らめながらもオレに視線を向けていた。

「二人には言われちゃったけど、私の目的は二つ目がメインなの。月島くん。私はあなたのことが好き」

「オレのことがか? 変わった奴だ」

「アナタのそのワイルドなところがとても魅力的なの。どんな人にも媚を売らない強い心の持ち主。アタシは陰ながら月島くんのことを想っていたの」

種村はそういうと、オレの両手を握ってきた。

この部屋に入ってきた時とは違い、まるで恋に執着する乙女のような目つきに変わっている。

「彼女いない歴〓年齢のオレからしたら嬉しい話だな。……………いいだろう。お前たちの目的が達成されたのなら、お前の彼氏になろう」

「約束ね？」

「もちろん、約束は守る」

この女と付き合う事は正直どうでもいい。

白鷺千聖が、オレに対してのみやってきた悪行の報いを受ければそれで満足だ。

第16輪 咲き誇るナスタチウム

彼と話した次の日から、彼女たちは私に対して暴行することを止めなかった。寧ろ、前よりも更に悪質に、強い力を持つて……………。

制服にはわからない程度に切り込みを入れられ、素手や足での暴行は勿論、最近ではモノを使った行為があからさまに増えてきた。

もう、体中は傷だらけ。

肌を露出させることなんて、とてもできない程にまで悪化している。

どうして私がこんな目に……………。

そんな言葉がずっと頭を過ぎる。

もういつそのこと、芸能界を引退するなんて手も……………などと、いつも私の思考はマイナスの方向へ傾いている。

誰に相談することも許されない。

そんな状況はとても心苦しい。

彼には強気な態度を取ったけれど、これ以上は耐えれそうにないと体中が叫ぶ。文化祭まで残り2日。

たとえこの行事が終わったとしても、彼女たちの暴行が終わるとは限らない。

けれど私はただ、この悪夢のような生活から一刻も早く抜け出して、花音と楽しい学校生活を送りたいと心の底から願う。

「ねえ花音、私を助けて……………」

その言葉が彼女に届く事は決してない。

花音までこの醜いイジメに加えさせるわけにはいかないもの。

”何としても耐え抜いて、私の力だけでこの状況を打開しなくちゃ——”
そう

考えはするけど、今の私はそんなポジティブな考えに至らない

教室の床に転がる私は涙を流し声を震わせる。

これ以上は、もうおかしくなりそう。
お願い……………早く……………。

ハヤク、ワタシヲ、タスケテ――



文化祭まで残り2日。

間近に迫ってきたその行事に向けてクラス全員が居残りやらで必死にやってる中、オレたち4人はサボリを決め込んでいる。

あの日からオレは、傍観者として奴らと関わってはいるが白鷺千聖を含めクラス全員このことを知らない。

白鷺千聖を痛ぶる姿を三人は、録画した映像を見せてくるが、実に不快だ。何が楽しくてこんな行為に及んでいるのかオレには理解できないな。

無抵抗な一人の人間を多勢で蹴り、殴り、罵倒し、心身ともに傷つける。

それらを不敵な笑みを浮かべ甲高く笑いながら行うコイツらは、まるで悪魔だ。

正直、まともな神経では見ていられない。

以前のオレなら、感情に流されこの3人組を殴り飛ばしていただろうな。

だが、オレにはもう関係ない。

この映像を報いだと思って鑑賞した。

「前半は特に、白鷺千聖の憎むような目が見れて面白いが、後半はもう完全に死んだ目になってつまらねエ」

「最近の白鷺さん抵抗しようとしないうか、何も話してくれないんだよね。全てを諦めてるといふか……そんな感じがするかな」

何度もこんなひどい暴力を受ければ、誰だつてそうなるとは思うが、あえて口には出さないようにしよう。

種村に便乗してか、取り巻きたちも次々とも口を開く。

「もう痛みで感覚がなくなつたんじゃない？」

「次はもつと別の方法で痛みつけようよ！」

「それいいねっ！そろそろバットとか使っちゃおう？」

「あつ、それならうちの家にいい感じの金属バットがあるよ！それなら白鷺千聖もきつと——」

「二人ともそろそろ黙ろうか。あんまり大きな声で話したら、周りにバレちゃうでしよっ！」

「ご、ごめんなさい……………」

「誰もいないからつい……………」

「オマエたちが何をしようが知ったことじゃないが、暴行する箇所は気を付けろよ。万が一、奴の事務所にバレたらオレたちは訴えられて、まとめて退学処分だ」

「もちろん分かっているよ。彼女が派手な衣装を着ようが、肩まで出した大胆な衣装を着ようが、絶対に他人には分からないところを狙っているから」

「感心するな。オマエたちは一体どんな場所でそんな技術を身につけやがった？」

オレがそう問いかけると種村は信じ難い返答をしてきた。

「月島くんはさ、」羽丘女子学園の女帝「って知ってる？」

「……………!?!? テメエ、どこでアイツと接触した!!」

オレは唐突に出てきたその名に焦りを隠せず、勢いよく種村の胸ぐらを掴んだ。

取り巻きたちはオレの様子に驚き止めようともしなかったが、種村はこの状況をクスクスと笑ってみせた。

怒るでも泣くでもなく、種村はどこか嬉しそうに話した。

「詰まるところ月島くんは、過去に彼女と何かあったのかな？それとも、喧嘩して負けたりなんてことも——」

「んなことはどうでもいい。問題は、アイツが今どこで何をしているのかということだけだ」

種村の胸ぐらを掴む右腕を更に力を込め問い詰めても、奴の表情は変わらない。

「やだなあ、そんなこと私にも分からないよ。彼女とは本当に偶然出会ったの。」羽丘女子学園の女帝　という異名（？）も、その時彼女の口から聞いたの。私は本名すら知らないよ？」

「……………ちっ」

不敵に笑う種村を離し、オレは誰も使わない木椅子に腰をかけた。

「今度は私が聞く番だね。月島くんは何で彼女のことを知ってるの？」

「日陰者の人間からしたらその名は有名すぎるぐらいだ。アイツは危険すぎる」

「よく知ってるんだね。彼女と一悶着あったのかな？」

「夏休みに一度だけ手合わせしたが、平気でナイフを使うような女だった。だが、オマエの想像してたのとは違って、オレが負けた訳でも勝った訳でもねエ」

「確かに彼女からは今まで経験したことのない十二力を感じたね。まさに、月島くんのような雰囲気かな？」

「そんな女に、暴力の教えを乞うたのか？」

「うん、彼女から教われれば私たちはもつと強くなれると思つたからね。まだ1ヶ月ちよつとだけど、彼女のおかげで私たちは白鷺千聖を退学に追い込めるまで心身共に鍛え上げた。まあ、代償も払ったけどね……………」

種村は語尾を小さく発した後、制服のボタンを外しシャツのボタンも下側だけはらずに腹部を見せてきた。

取り巻きたちも種村と同様の行動をとる。

奴らを見ると、腹部があざだらけになっていた。

何度も何度もそこを強打されたように傷ついたその部分は、もう手の施しようのない状態になっている。

「……………これは？」

オレがそう問いたですと種村は少しばかりの笑みを浮かべながら答えた。

「彼女の指導によるものよ。『人に痛みを与えたいのなら、自分の身体で理解するべき』だとか言っと思って思い切り殴ってきたの。でもそのおかげで、的確に白鷺さんにも傷を与えることができた。むしろ彼女には感謝しているぐらいだよ？」

「もうそこまでいったらオレに止めることはできなそうだな。やるなら最後までやりきれ。じゃないと、その受けた腹の傷が浮かばねえからな」

「もちろん。そのためにも……………邪魔だけはしないでね？」

「ああ、わかってる。ところで、そのボッコボコにした奴はどこにやった？」

「いつものところ、誰もいない教室に置いてきたわ。きつと、道端に置かれてるゴミみたいに動けずにいるはずよ」

「それじゃあオレは、そのゴミ処理にでも赴くとするか。お前たちもバレないように教室に帰れよ」

「月島くんも、気をつけて」

そう投げかけられた言葉に返事を返すこともなくオレは教室を後にした。

種村と話していると、なんかこう………全身を冷気でガチガチに凍らされたような感覚に陥る。

どこまでも冷たい目。

人を人とも思わない冷徹さ。

とても真つ当な人生を歩んだとは言い難い人格の持ち主であることは間違いない。

こんなことを言うのは人として最低だとは思うがな。

あそこまで堕ちた人間を更生させるのはそう容易いことじゃないがオレは、オレのできることをするだけだ。

………

………

「よお。探したぜ、ジュリエット」

「……………そう」

屋上のフェンスに倒れ込むように座る白鷺千聖に対しオレは平然と話しかける。そんな白鷺千聖はオレには目もくれず下を向いたまま返事を返す。

「今日もまた随分とやられたな。文化祭まであと2日、耐えられそうか？」

「……………」

オレの問いかけに、今度は答えない。

キュツと手に力が入り、より一層小さく縮こまる。

そんな奴の隣にオレは腰掛け、途中の自販機で買った缶コーヒーを開け一口含んだ。

「アイツ等から聞いたぜ。もう立つのも結構キツイ状態だろ？なんかその黒いのを履いて誤魔化してるだろうが、歩き方で丸わかりだ。腕だってもう痛みで——」

「あなたに何がわかるのよ!!」

突如として白鷺千聖は立ち上がり、オレの胸ぐらを掴む。

その手はブルブルと震えていて、奴の目からは一滴、また一滴と涙がこぼれ落ちる。

「私が……………何をしたっていうのよ……………」

「分かったから手を離せ。もう何も言わねエよ」

オレは宥めたように腕をタップすると、白鷺千聖は我に返ったように手を離し、深々と頭を下げる。

「取り乱してしまつて、ごめんなさい」

「気にすんな。オレのコーヒーは……………やっぱ、ほとんど残っちゃねエな」

そう言つて笑つてみせると、白鷺千聖は再び小さく縮こまる。

奴に胸ぐらを掴まれた衝撃で手に持っていたコーヒーのほとんどは溢れてもう飲めなくなった。

まあ、せいぜい100円やそこらだからよしとするか。

「本当に……………ごめんなさい」

「気にすんなつたつただろ？お前がそんなしよげてると、こつちも気が狂いそうなんだが？」

「もう私は、ダメなのかもしれない」

白鷺千聖が言い放った唐突な一言はとても弱々しく聞こえた。

「文化祭まで後2日。この数週間、お前はよく耐えた。その苦しみも後2日以内に終わる。だからそれまで——」

「それまで、待ってっていうの!?!」

奴はオレの言葉を遮る。

「あなたはずつとそう言ってきた!もうすぐだ、もうすぐ終わると……………でも、あなたは何をするでもなくただ私を慰めるだけ。あなたは本当に私の問題を解決しようとしているの!?!内心私がイジメられて喜んでるんじゃないの!?!あなたは私が嫌いだから……………こんなことなら、あなたを頼るんじゃないかった!?!」

白鷺千聖は涙ながらに全てを言い切る。

奴のこんなに余裕のない姿は初めてみた。

人間誰だつてあそこまで痛ぶられたら精神的にも肉体的にも崩壊する。ましてや日々、アイドルと学生の二足の草鞋を履くこいつなら尚更だ。重圧「プレッシャー」だつて計り知れない。

そんな人間にこの方法は間違いだつたかと、今更ながら後悔する。だが、オレはすぐに切り替えた。

今更後悔したつてもう遅い。

コイツが納得する形で、完璧に、あの3人組への復讐を終えたい。そう心から思う。

「なら今のうちに教えてやる。その答えは明日になればわかる事だ」

「だから私は——」

「だから今日はもう家に帰れ。その状態で練習なんてできやしない。オレから適当な理由つけといてやるから安心しろ」

何せこの後、コイツにいては困るからな。

「ホント、あなたつて人は……!」

「だが、勘違いするなよ。オレは約束は必ず守る。さつきは2日以内に肩をつけると

言ったが訂正しよう。明日中にけりをつける」

「……………信用できないわ」

「なんなら録音するか？この約束を守らなかったら退学したっていいだけ」

そのぐらゐの覚悟がある、と自信げに伝える。

白鷺千聖も、ほとんど期待をしていないかのような顔を見せる。

「もうなんだっていいわ。あなたの退学も、あの3人がどうなるうとも。私はもうあなたの言うことは何も信じない」

白鷺千聖はそう言うと、静かに立ち上がりオレの元を去る。

「それはそれで構わないぜ。まあ明日は、楽しみにしてな」

オレとの訣別を意味するかのように、奴は一切振り返らず、返事も返さない。

もう奴への信頼感はゼロになったといつてもいい。

だからこそ、オレが今伝えるべき言葉はたった一つ

「明日も学校こいよー！」

最後の一言まで奴は返事を返さず、一人で屋上を後にする。

「さてと、ヒロインも帰ったことだし始めるとするか」

オレはそう独り言を呟き、教室へ向かって歩き始めた。



「白鷺さん、今日も付き合ってもらっていいかしら？」

(私に拒否権なんてないクセに……………)

文化祭を明日に備えた今日でさえ、あの3人組は私を呼び止める。

変に笑みを浮かべたその顔は、これから私にするであろう行為への期待だと受け取っていいはずだ。

実に醜く、下劣な顔。

返事をするのも煩わしけれど、仕方がない。

あくまで表面上の友達として振る舞う。

「ええ、もちろん。今日もあそこでいいのよね？」

「一緒にいきましよう」

種村さんが笑顔にそう言うと、取り巻きの二人は私の背後に回り込み逃げられなくした。

まあ、その気は毛頭ないけれど。

私は3人に連れられいつもの教室へと入っていく。

「文化祭まで残り1日。いよいよって感じだね」

種村さんは相変わらず、微笑むように語りかける。

「うんっ！もちろんそれも楽しみだけど、今からやることだつて——」

「あなたには一言もそんなこと聞いてないのだけれど？」

「ご、ごめんなさい、種村さん……………」

彼女は丁寧な口調から一変、凍てつくような冷たい目になって相手を黙らせることもある。

何年も芸能界にいた私だからわかることだけれど、この手の人間はそうそう長続きすることはない。

何せ喜怒哀楽がはつきりしている。

たとえ薄っぺらい笑みで取り繕っても所詮は化けの皮。すぐに剥がれ落ちてしまう。そんな彼女は咳払いをして、場の空気を元に戻す。

「私はね、明日の文化祭が楽しみで仕方がないの」

「……………それで？」

「勿論嘘じゃないわ、本当よ？ クラスみんなと一致団結して、より良い ” ロミオとジュリエット ” にしたいと思ってるの」

「話の筋が全くわからないわね。そんな話をするために私はここにきたわけじゃない。やるのならさっさと終わらせて欲しいのだけれど？」

もう私がかれこれ数週間、彼女たちひどい暴行を受けている。

今日を乗り切れば明日からはこんな目に遭わなくて済む——とは決してならない。

彼女たちはまた陰湿に、かつ加減のない力で私を痛めつけるに決まっている。

確かに少し前までは月島くんを頼ろうとも思った。

だけど彼は一切何もしてこない。

むしろ彼女たちのアシストをしている疑いまである。

現状頼れる人がいない今、私一人の力で対処するしか道はない。

「あなた、種村さんに向かってなんてことを!!」

「そうよ! 謝りなさい!!」

「だって本当のことでしょう? こんな無駄な時間を過ごすなら、今すぐ教室に戻って明日に備えて演技の練習をしたいと誰だって考えるはずよ。ただお喋りしたいだけなら、あなたたち3人ですればいい。それでしょ?」

私は今思っていることを彼女たちにぶつける。

今までは彼女たちの暴力が怖くて萎縮していたところはあるけれど、もう誰にも頼れない以上自分自身でなんとかやるしかない。

私の言葉で種村さんは怒りをあらわにするかと思っただけれど、それとは正反対に微笑むように返事を返す。

「それもそうね。なら、始めましようか。あなたも段々癖になつてるのかしら？これから受ける暴行を」

そう言い終わると彼女はポケットから今まで見せたことのないものを取り出す。

「種村さん……………まさか……………」

「本当にやる気なの……………!?!」

取り巻きの二人も完全に萎縮してしまった。

それもそのはず。

彼女が取り出したのは、刃渡り10センチほどのポケットナイフ。

高校生はもとい、大人でも所持していたら危険な代物だ。

「あなた、何をする気なの!？」

私も動揺を隠せない。

そんな中でも彼女は一人、この空気感とは異なり微笑む顔を歪めず答える。

「何って、わからないかなあ。刃物を持った人間が刃先を相手に向けたら、やることは一つ……………」

彼女はポケットナイフの刃先を私に向け、走り出す。

「傷つけるためだよ」

私との距離が1メートルほどになると、彼女は右手に持ったナイフをそのまま右下から左上へ振り上げる。

私は床にへたり込むようにして間一髪かわすが、彼女は私への攻撃を止めようとしな

振り上げたナイフを今度は逆、左上から斜めに斬りかかり、私の右腕を傷つける。長袖の制服が切り裂け、腕からは多量の血が流れる。

「ツ……………!?!」

あまりの激痛に目が眩む。

今まで受けたことのない痛みの中に体中が悲鳴をあげているのがわかる。

「演技ってやっぱり役作りから、だよな？ 確か、ジュリエットって母親から暴行を受けるシーンがあったから、こんなことがあっても不思議じゃないよね」

種村さんはまたしても、冷たい目になり言葉が続ける。

「白鷺さん、私はね、怒っているの。私がジュリエットの母親役に選ばれたのは仕方がないけれど、あなたがジュリエットに選ばれるのはどうしても納得がいかない。だってロミオ、月島 奏くんは私のものだもの。彼には私が相応しい。あの凛々しい佇まい。鍛え抜かれた身体。たとえ彼がクラス中から嫌われていたとしても、不良だっだとして

も、私は彼を愛してやまなかったわ。それをあなたは彼を侮辱し愚弄した。あなたは私の逆鱗に触れたのよ。罰を受けて当然だわ」

腕の痛みのせいで彼女が何を言いたいのかよくわからなかったけど、たった一つ理解できた部分があつた。

彼のが好き。

つまり月島くんのが好きで好きでたまらないと言うことを。

「要するにあなたは、巷に聞く」ヤンデレ「迷惑彼女」と言うやつかしら?」

「……………!?!」

「そんなに彼のが好きなら、彼に告白でもしたらどうなの? あなたほどの行動力のある人なら、簡単なことでしょう?」

「……………だまれ……………」

「……………だまれ!!!」

今まで冷静を保っていた彼女がとうとうブチ切れた。

顔は怒りで紅潮し、手に握られたナイフはプルプルと震えている。

「オマエはもう喋るな!!私の愛する月島くんをよくも……………!!死んで詫びろ……………!!この女アアアア!!」

種村は怒りのままにナイフを振り上げた。

ああ、私はここで死ぬんだ。

何もかもを諦め目、そつと閉じる――。

「はい、カーツト!」

緊張で満たされたこの空間に場違いな声が響き渡った。

その声の主は私たち四人のものではない。

この部屋にいるはずのない声の主は続けて言葉を続ける。

「本物のナイフを用いた臨場感の演劇だったが、それ以上は危険と判断して止めさせてもらったぞ。いくら演技だとしてもな種村、白鷺千聖を実際に殺しちゃあ元も子も

ねエぞ」

「この声は……………」

「月島くん……………!?!」

唐突な出来事に私たちは驚きを隠せない。

その様子を知ってか、声の主である月島くんはケラケラと笑いながら話す。

「なんでその場にいないオレが、種村が白鷺を殺そうとしたのかを知ってるか教えてほしいって面をしてるなア」

どこか上から目線な言葉遣いに少々苛立ちを覚えるけど、彼はそんなことを気にせず続けて話す。

「仕方ない、特別に教えてやるよ。箒が入ってるロッカーの上を隈なく探してみな。そこに答えはある」

月島くんの指示通り、取り巻きの一人がロッカーの上を搜索する。

手には小さな何かを持っているのが見えた。

「これは……………極小の隠しカメラとスピーカー？」

「その通り。全てオレが仕込んだものだ」

種村さんは先程の怒りとは一転、あり得ないといった表情に切り替わる。取り巻きたちも種村さんと同様に驚きを隠せない、といった様子だ。

「お前ら、最初の頃は警戒しまくってた癖に、日が経つに連れて散漫になったからな。おかげで容易に、そして大量に仕込むことができた」

「アンタねえ！」

「わたしたちを騙すなんて最低!!」

「おいおい、ひどい言い草だなア。誰これ構わず信用するなんて愚かなマネをするお前たちが間抜けだったただけだぜ？」

月島くんは取り巻きたちを嘲笑うかのように話す。

当然二人は怒りをあらわにするが月島くんはもろともしない。

そして彼は種村さんにまで牙を剥く。

「種村もよ、そろそろ自覚したらどうだ？ お前がやってるのは立派な犯罪行為だ。未成年だろうと刃物持った時点で立派な犯罪者なんだよ。わかったら、とつとつその粗末なものを捨てて投降しろ」

彼の言葉で種村さんは冷静さを取り戻したのか、振り上げていたナイフを下ろし、取り繕ったような笑顔で答える。

「どこであなたが見ているのか知らないけれど、私は本気よ？ この女さえいなければ私は楽しいな学校生活が送れるの。それに、あなただけしか目撃していないのなら、この女を殺した後にあなたの元へも駆けつけるわ。このことは5人だけの秘密に——」

「おいおい、誰がオレしかこの現場を見ていないって言ったよ？」

「……………はっ？」

彼の突拍子もない言葉に種村さんは呆気にとられたような顔を見せる。

「教壇の上、天井からぶら下がってるものを見てみな」

彼がそう言うと、取り巻きたちは一目散にそこへ駆け寄る。

「な、何よこれ!?!」

2人が驚きの声を上げると共に、種村さんもそこへ近寄る。

種村さんも同様、無言ではあったけどまさかといった反応を見せた。

「これがあなたの狙いだったのね……………」

諦めるように嘆き、そのスマートフォンを私に向かって山なりに投げてきた。

それをなんとか掴み取り画面を覗く。

「はあ〜い! クラス全員がこの現場の目撃者で〜す!」

そのスマートフォンには月島くんを中心に、クラスメイト全員が映し出されていた。そこには心配そうにこちらを見つめる花音の姿も見える。

「長い間苦しませて悪かったな。だがもう安心しろ、オレたちがお前の味方だ」
「月島くん……………みんな……………」

彼のその言葉に、思わず涙がこぼれ落ちる。

今までずっと独りで耐えてきた。

あまりの恐怖に心身ともに深く傷を負わされた。

だけど、私はもう独りじゃない。

そのことを自覚できたからか、ただ単に気が抜けたのか、両の目から涙が溢れて止まらない。

「今すぐロミオが助けに行つてやるから少しだけ待つてろ。種村あ、白鷺千聖に少しでも手エだしたらその顔面の原型無くなるぐらい腫れ上がらせるから覚悟しろよ」

「ええ……………お願い……………」

彼の声が途切れると同時に、種村さんにある異変が起こった。

「ふふっ……うふふふふふふふふふふ……」

顔を下に向け、不敵な小さな笑い声を発し出した。

「た、種村……さん……？」

「大丈夫……？」

取り巻きの2人が彼女に近づいたその時——

ドスッ。

「……えっ？」

ナイフが体に刺さる鈍い音と共に発せられた取り巻きの1人の声が小さく聞こえ、もう1人は声を出すまでもなく脇腹にナイフを突き刺した。

「……………!?!」

私の目の前で今、間違いない人が刺された。

ナイフを抜き取ると同時に2人は床にドサッと倒れ込み、多量の血が流れているのが見える。

2人はピクリとも動かない。

「嘘ッ……………でしょ……………!?!」

あまりの出来事に腰が抜けて逃げるところか、立ち上がることもできない。

「あなたが悪いの……………全て……………あなたが悪いのよ……………!?!」

焦る私の前に彼女は小さくそう呟き、一步、また一步とゆっくり近づいてくる。

その距離わずか5メートル。

腕の痛みと合わさって、私はもう何もすることができない。

(何とか、何とかこの状況を打破する方法は……………!?)

冷静とは程遠い頭で考えても何も浮かばない。

そうしている間にも、種村さんは更に近づいてくる。

私が動けないと知ってか、先ほどみたいいきなり襲いかかってくる様子はない。演技とはまた違う、100%を標的ターゲットに向けられた殺意。

「コロス……………コロシテヤル……………」

そうブツブツと呟きながら近づく彼女の外見は、常人とは程遠いものだった。

血眼になった瞳。

ボサボサになった黒い髪。

それはもう、昔話に登場し幾多の女性を貪り尽くした山姥そのものだ。

「オマエナンカ……………オマエナンカ……………!!!」

彼女がナイフを振りかぶり、思わず身を縮こませたその時――

ガシャンツ!!

廊下とは反対側の窓ガラスが盛大に割れる音が響き渡り、それと同時に月島くんが教室へ飛び込み彼女の腕を静止する。

「これ以上無駄な罪を重ねるな種村。テメエ、正気の沙汰じゃねエぞ」
「月島くん!」

種村さんは彼の腕を強引に振り解き、矛先を彼に変えた。

「もうどうなつたつて構わないわ。月島くん、あなたと恋愛関係なれば、それで……!」

彼女の眼差しが、この言葉を確かなものにする。

病むほどに好きな彼を前に、種村さんはいつもの微笑むような顔つきから、目を大き

く見開き、異常者の顔つきで彼と話す。

そんな状況でも月島くんは、毅然とした態度を崩さない。

「確かに、お前はいい女なのかもしれねエな。外見だけは、な」

「なら、私と——」

「だが、オレの惚れるような女とは程遠い。好意を抱く相手に向けてナイフを突き出すような奴なんて、危なっかしくていけねエ」

「これは、あなたを傷つけるためのものじゃない、束縛するためのものよ。あなたが私以外の女と馴れ馴れしくされると無性に腹が立つの。あの横たわってる2人だってそう。きっと協力すると見せかけて私からあなたを奪うつもりだったのよ。私は何も信用しない。信用できない」

「ここまで堕ちたらもうどうしようもねエな。なら……………」

彼はそう小さく呟くと、右足を下から回転しながら蹴り上げ種村さんの持つナイフの刃先をへし折った。

カランカラン、と刃先が落ちる音が響く。

あまりの出来事に、彼女は驚きを隠せない。

「うそっ……………!?!」

「こんなこと、女にだつてできる技だ。オレができたつて不思議じゃないだろ?」

「それはアニメの話でしょう!?!人間離れにも程があるわよ!」

「これでもうお前には何もできない。諦めろ」

そういうと月島くんは彼女との距離を更に詰める。

彼女を見下ろすその姿に私は、異様な程の威圧感を受ける。

一切の感情を見せないその顔つきに、私は恐怖すら覚えた。

そんな彼に対して彼女は恐れることなく、叫び声を上げながら刃先の折れたナイフで彼に立ち向かう。

その行為も無駄に終わり、ナイフが彼に触れる前に彼女は床に倒れ込む。

一瞬の動作でよくは見えなかったけど、喉元に拳を突き立てたように思う。倒れた彼女はピクリとも動かなくなった。

「これで全て終いか。おい、白鷺千聖。今すぐ病院に……………?白鷺?」

ようやく、全てが終わった。

緊張感から解き放たれ、目の前が真っ白になった――。

.....

.....

あれから何時間あったのだろう。

気がつくと私はベッドの上にあった。

窓からは、夕日が差し込み雲ひとつない夕焼けの空が目に入る。

(……)は一体……(……?)

意識が朦朧とする中、私はゆっくりと周りを見渡す。

一面が真っ白の静かな空間。

先程の教室とは違った雰囲気にも包まれたこの部屋は、間違いなく病院だと確信する。

私はゆっくりと体を起こす。

目覚めた私の側にはパイプ椅子に腰掛ける花音がいた。私の目が覚めたことを知ると彼女は目に涙を浮かべ、私が起き上がると同時に思い切り抱きしめてきた。

「千聖ちゃん!!」

「か、花音? どうしたの?」

私の心配をよそに花音はわんわんと泣き喚く。

「千聖ちゃん! 私っ……………私っ……………!」

「落ち着いて花音、もう大丈夫よ」

私は花音の背中にそつと手を添える。

彼女の心を落ち着かせるために。

しばらくすると病室の扉が開き、月島君が入室する。

「よお、意識が戻ったか」

「月島くん……………」

彼はにこやかに話しながらこちらに歩み寄る。

「一時はどうなるかと思つたが、とりあえずは一件落着だな。ホント今回はヒヤヒヤさせられた」

はははっ、とゲラゲラ笑いながら話す月島くん。

教室での彼を見ているからか、今の彼の言動に私は多少の違和感を覚える。

「本当だよっ！何でこんな大事なことを教えてくれなかったの!？」

私の考えをよそに、花音は立ち上がり月島くんに詰め寄つた。

「悪かつたつて。だが今回は、直前まで誰にも話したくなかつたんだ。何せ奴らはク
ラスのカーズト上位に居座つていたから、情報が漏れたら今回のようには——」
「それでも伝えてほしかつた……………。だって、友達がこんな目にあつている時に私

は何もできなかつたから……………」

「花音……………」

花音のこんな必死な物言いは初めて目にして驚く。

私自身、彼女をこんな気持ちにさせてしまつて申し訳ない気持ちでいっぱい。

彼にも助けてもらつたし、私つて本当に無力だと痛感させられる。

「正直な話、松原にだけは伝えようか迷つた。だが、お前は必ず無茶をする。オレの静止を振り切つて奴らに飛び込んでいったらうな。そうなれば、被害は今以上になる。そう考へてのことだ。理解して欲しい」

彼の言葉に納得したのか、花音は無言で再びパイプ椅子に腰掛ける。

「ごめんなさい、2人とも。このようなことが起こつたのは全て私のせいだわ。本当に、ごめんなさい……………」

私は2人に向かつて誠心誠意謝罪する。

謝っても足りないけれど、今の私にはこれぐらいのことしかできない。

「顔を上げろ。お前はよく頑張った」

彼の優しい声に、私は三度涙する。

「ごめんなさい……………本当に……………」

彼には今、感謝しかない。

私の命を救ってくれた大恩人。

彼には今後、私ができる最大の恩返しをしたいと心に誓った。

第17輪 氣高き華が変わり咲く時

あの事件から一晩が過ぎ、私は今日も大事をとつてもう1日入院することになった。文化祭に参加できないのは少し寂しいけれど、私の代役である花音なら、十二分に演じれるはず。

私は心置きなくベッドに横たわれるわけだけれど………なんだかもどかしい気持ちでいっぱいになる。

それにしても、この1ヶ月は本当に色々なことがあった。

3人に暴行を受け、あわや殺されかけ、人目も憚らず涙も流した。

今となつては少し恥ずかしい気もするけれど………。

それでも私は、この経験を経て女優としてひとまわりもふたまわり成長することができたと確信している。

ドラマや演技などとは違う、実際の出来事を肌で知った女優は強い。

演じるだけでは味わえない臨場感は、どうやったって作り出せるものじゃない。心身共に追い込むまで過ごしたこの1ヶ月は決して無駄ではなかった。

今すぐにもそれを形にしたいところだけれど、お医者様からはしばらく安静にするように忠告を受けたからグツと我慢。

「何もすることがないなんて、随分と久しぶりね。暇で暇で、仕方ないわ……………」

独り言を呟いても誰からも返事がない。

少しばかり、寂しく思える——

「そんなには暇ならこのオレが話し相手になってやるよ」

「……………つ!?きやああああ!!」

突然の訪問者に思わず左頬をビンタをしてしまった。

部屋中にパチーンと高い音が響き渡りその人は『ぐふっ』と低い声をあげ、叩いた左頬を抑える。

「いつてえ……………全く、見舞いに来た人間をいきなり殴るなんて、酷い野郎だな。折角、菓子やら果物やらを持ってきたのによオ」

「な、なんであなたがここに!?!というか、どうやってここに入ったの!?!」

突然の訪問者、月島くんは今なら学校にいて花音やクラスメイトたちと一緒に 文化祭の劇場で”ロミオもジュリエット”を演じているはず。

そんな彼が私服で手土産を持って私の病室に来る理由がわからない。

サボリ?

それとも、ただ私をからかいにきただけ?

「何って、一人寂しく入院生活してるお前と話がしたかったから来ただけだ。それとここには、その窓ガラスから侵入した。正面からだ、面会許可?みたいなのがいるらしくて面倒だからな。いやーっ、ここが3階で助かった。7階以上はいくらオレでもビビって登れねエよ」

それはそれで十分危険な行為だとは思うけれど昨日の彼を見ると、全て可能に、それも楽勝にこなしてしまう姿の想像がつく。

「あなた学校は?まさか、主役を放棄したって言うんじゃないでしょうね」

私が一番聞きたかったことを食い気味に尋ねると、彼は冷静に答える。

「安心しろ。そんなマネはしねエよ。とりあえず、そのことも含めてお前が意識を失った後のことを話そうか。その椅子、借りるぞ」

彼はお菓子や果物の入ったカゴをミニテーブルに置き、来客用のパイプ椅子に腰掛け足を組む。

私もベッドを起き上がらせ、背もたれにして彼の話を聞く。

「おいおい、無理して起き上がる必要はないんだぜ？患者は寝転んどけ」

「これで構わないわ。昨日私が気絶した後に起こったことを話して」

私は真剣な顔つきになり、彼に問いかける。

「なら、遠慮なく話させてもらおう」

「ええ、お願い」

「昨日の放課後に起こったことはすぐに教師陣にバレて、察と救急車がきた。お前と種村の取り巻きたちは病院に搬送。オレと種村は署まで連行され、学園の生徒全員が強制帰宅となった」

「種村さんはまだしも、どうして月島くんも……………」

「ただの事情聴取だ。お前は精神的損傷の疑いがあったから、オレが代役として引き受けた。そのことを知らずにうちのお袋ときたら……………」

「あなたのお母様がどうかしたの？」

「アイツ、いきなりオレの首根っこを掴んで怒鳴り散らしやがってよ……………察に連れて行かれた。オレが罪を犯したってわけじゃないのに、せっかちな母親だよ、クソッ」

「そうなの、それは災難だったわね」

私の知らない間に本当に色々なことがあったらしい。

「ついでに言うと、オレが割った窓ガラス代も弁償しないとイケねエらしい」

「そ、そういえばそんなことがあったわね」

それまでの出来事があまりにも悲惨だったから、すっかり忘れていた。

普通に走れば済むものを彼はどうしてあんな奇行をしてしまったか、今更だけど理解できない。

まさか、いち早く駆けつけるためにわざと……………？

「なんであんなことをしたの？」

「そりゃあ、ああやって登場した方がカッコいいに決まってるからだろ」

——— どうやら私の思い違いだったみたい。

本当に男の子って、どうしてそんなにカッコつけたがるのか私には到底わからない。

「……………！そういえば、あの2人はどうなったの!？」

「奴らは傷がそこまで深くはなかったらしくて、命に別状はない。だが、出血がかなり多くて、今も意識が戻ってないらしい」

「そう、早く良くなるといいのだけれど」

「今までの悪行が全て返ってきただけだ。奴らも無意識の中で、必死に反省してるだろうよ」

確かに彼女たちは種村さん同様私を痛めつけてきた人たちだし、今だつて謝つてきたとしても許せるとは思えない。

この腕や足に受けた傷は、下手をしたら元に戻らないかもしれないものだから。これは女優として致命的なもの。

到底許されざる行為を彼女たちは行つた。

それでも、『死んで詫びろ』なんて無慈悲なことを私は言わない。

彼女たちは今も、そしてこれからも苦しむことは分かっている。

目覚めたとしても、一生残るであろう腹の傷を負つて生きなければならぬのだから。

「それで、種村さんは？」

「あいつは昨晩意識を取り戻して、今も署の中だ。オレが奴の喉をやちまつたせいで声が出せない状態らしいが、まあ問題ないだろう」

「出る杭は打たれる、というわ。正式な場で正しい処罰が下るのなら、私はそれで十分満足よ」

「ほお、てつきりお前のことだからもつと残酷な要求をすと思つたが、すつかり丸くなつちまつたな。ハハハッ」

月島くんは私を挑発するように笑う。

「彼女をいくら恨んでもこの身心の傷が癒えることはないって思っただけ。そんなことより、あなたは どうしてここへ来たの？」

「そういえばまだ話してなかったな。結論から言うと、オレは学園長から謹慎が言い渡された」

「えっ？ 謹慎!？」

月島くんの発言に思わず驚かされる。

あの3人組ならまだしも、私に一切危害を加えていない彼にこのような処分を下すのは少しお菓子か気がするけれど………何か意図があるのかしら？

あまりに重い処罰に疑問を覚える。

「お前が暴行を受けていることを知りながら、オレは学園長や風紀委員長に一切伝えてなかったからな。当然と言っちゃあ当然の罰だ。受け入れる他ねエよな」

「そうだとしても——」

「ちなみにだが、演劇の方も中止になったらしい。お前以外にも、シヨッキングな映像を見せられて気分を悪くしたクラスメイトの数人も昨日病院で検査して、今日も休んでる奴がいるって松原から聞いた。要は人数不足だ」

「……………クラスみんなにはたくさん迷惑かけたわね」

自分の不甲斐なさに心底落ち込む。

「結局そのことも含めて学園長や担任からどやされるわ、氷川にはめつつちや怒鳴られるわで最悪だったぜ……………。お袋のと合わせて怒りの3連コンボをくらったからな。」

「どちらかと言うと、紗夜ちゃんのお説教の方が辛そうに聞こえたのは気のせいかしら?」

「そうだつ、アイツときたら『土下座して頭下げて誠心誠意、謝罪の意を述べなさい』なんて抜かしやがったんだぜエ? 酷い奴だろ?」

「それほど危険な行為だったということよ。紗夜ちゃん自身、頼って欲しかったところもあつたんじやないかしら?」

「お前と全く同じことを言ってたな。『もつと私を頼ってください』って。だが、今回

は誰にもバレるわけにはいかなかった。事がことだけに。アイツの性格上、決定的証拠と隙さえなかったら言いくるめられる確率が高かったからな」

「助けてくれたのは本当に感謝しているけれど、方法としては少し強引だったと言わざるを得ないわね」

「今更悔やんだって仕方ない。反省点は次に生かす」

彼はそういうと立ち上がり、『喉が渴いたからコーヒーを買ってくる』と言って部屋を出た。

再び静まる病室。

1人取り残された私は、月島くんのお見舞い品の一つであるチョコ菓子を一つ取り出し口にする。

部屋には、ナッツが散りばめられているそれをゴリゴリと噛み砕く音だけが響く。

「……………美味しい」

少し苦味のあるチョコだけれど、何個でも食べられそうな味わいが口に広がる。

病み付きになる美味しさ。

だけど、食べれば食べ進めるほど、甘い飲み物が恋しくなるのはなんでかしら？
彼に頼んで買ってきてもらおう——

「そういえば、彼の連絡先を知らなかったわね」

そのことを後悔しながらも食べ進める手は止まることはなかった。



数分後、病室に戻ってきた彼は二つのコーヒー缶を手にしていた。

一つは甘いもの、もう一つはブラック。

どちらがいいか選ばされた時、私は甘いカフェオレを選択した。

私の口の中は、さっきまで食べていたビターチョコレートの余韻でいっぱい。

私の気持ちを察してくれたかのような行動に感謝して、カフェオレを一口含む。

彼もまた同様にブラックの缶コーヒーを開けた。

「今更だが、お前とI v s i でこんな会話をすることになるとは思ってもみなかったな」

「入学したての時から、私はあなたに嫌われていたものね」

私たちは感慨深いといった感じで話を進める。

「お前だけに限らず、この学校の女たちは皆嫌いだった。中学の一件があつて以来、女は敵だと思つてこなかったからな」

「その中でも私は特別嫌われていたような気がしたのだけれど？」

「オレが無視し続けてもちよつかいをかけてくるからだ、ボケツ」

ここで私はあることを思いつく。

今のこの空気感、そして私たちの関係性である頃のように一触即発の状態になるか試してみようと。

私はいつも以上に彼を挑発しながら話す。

「本当に、なんであの頃の私はあなたにそんな態度を取り続けていたのかしら？不思議

議で仕方ないわ」

「知るかつ!! 未来世界の青タヌキにでも頼んで過去に遡って確かめてきやがれ!」

「そんな事ができるのなら、私はもつと他のことで有効活用するわね。月島くんなら何に使うのかしら?」

「ああ? オレは高一の時に戻って今みたいなナメた態度を取れないように調教してやる。テメエは?」

「私はもつと前に遡って月島くんの初恋の相手にでもなつて既成事実をたくさん作るようにするわ。男女の関係を持った、なんてことになった時にはあなたは私の下僕いぬになるのは間違いないでしょうね」

「はあ、これだよ……………この返答の仕方がほんつとうに癪いらぬに触つたんだよなあ」
「うふふ、戯れに付き合ってくれてどうもありがとう♪もちろん今言ったことは全て嘘だから安心してね」

「本気だつたらその手土産に毒仕込んでるわ、ボケが」

もちろん月島くんも本気で言ってるわけじゃないのは分かっている。

でも、夏のアルバイトの件と今回の件を踏まえて、彼はそんなことをもやりかねない危うさを感じさせる。

もちろん嘘だと信じているけれど。

「話は少し変わるのだけれど、いくつかあなたに聞きたい事があるの。少ししいかしら?」

さつきまでとは違い真剣な顔つきで問う。

「なんだ?急に改まって。まあ好きに話せよ」

「ありがとう。私と月島くんが初めて話した日のことは覚えているかしら?」

「ああ、もちろん覚えてる。あれは確か、入学式が終わってすぐの時だったな。『何故あなたは女の子が嫌いなのか?』ってしつこく聞いてくるお前の事を、”超”が付くぐらいウザい奴って思ってたな」

「気になったのだから、仕方ないことよ」

「それ以降もズケズケと聞いてはおちよくってくるお前を、真冬のプールに沈めてやろうかって計画してたんだぜ?」

「あらっ、じゃあ真夏だとしてたの?」

「熱湯にしたプールに沈めてたな」

「季節に見合った嫌がらせ方法だとは思うけれど、どうしてそこまでプールにこだわるのかしら」

「さあな、特に理由はねえよ」

あまりにも突拍子のない回答に私だけじゃなくて、月島くんも吹き出して笑ってしまった。

「まさかお前と談笑する日が来るとは、夢にも思わなかったぜ」

「本当、月島くんこんな打ち解けることができるなんて信じられないわ」

2人でそう話していると、数回扉を叩く音が鳴り看護師さんが入ってきた。なんでも、私に面会したい人がいたけど知らない間に帰ってしまったとか。その面会人の見当はついてる。

だってその人とはついさっきまで隣で

「その人ならもう……………あらっ?」

少し目を離れた隙に、月島くんはどこかへ行ってしまった。

どこかへ隠れてるとも思いいベッドの下や天井を見上げても、どこにもその姿は映らない。

少し話し足りないとは思うけれど、月島くんは仮にも謹慎の身。公には外へは出られない中、わざわざ私に会いにきてくれた。

感謝の言葉を伝えたいけれど、彼はきつと拒むだろう。

だからこそ、今日話したことは全て私の心の中へとしまい、2人だけの秘密にしたい。

私の言動に不思議そうに見つめる看護師さんに何も無いことを伝え、部屋を出てもらい私はベッドに横になった。

——室内は再び静寂に包まれる。

先程までの和やかな雰囲気は嘘のよう。

私はひとり静まった病室で、大きくため息をつく。

(もう少しだけ、話したかったわね)

名残惜しくそう心の中で呟くと、私の携帯に一件の着信が入った。

内容は、『Kanadeがあなたの電話番号で友達登録されました』というものだ。しばらくすると、もう一件の着信が入る。

『とりあえず無事が確認できてよかった。くれぐれも、オレが来たことは誰にも言うなよ？ それじゃあ、また学校で』

そう短く綴られた文字には、彼なりの優しさが込められていた。

私と話している時は相変わらず言葉数が少ないけれど、今の私には彼の言いたいことは十分理解できる。

「次に学校で会えるのが、楽しみね」

ひとりそう呟き、彼にありがとうと返信した。

第18輪 荒くれの花が変わり咲く時

1週間の謹慎は心底キツかった。

自宅に届く大量の課題をこなし、反省文を10枚分書かされた。

挙げ句の果てには、お袋の24時間徹底監視で携帯もGPSやらでオレの位置がすぐわかるようにされた。

到底悪さなんてできっこねえし、する気も起きん。

白鷺千聖と話したのが最後でここしばらくは誰とも会ってねえから、やつとの思いで迎えた学校生活に多少なりともワクワクしてたんだが——

「さて、月島くん。私に何かいうことないかな?」

「なんで初っ端から学園長と顔合メエわさなきやいけねエんだよ、クソがつ」

「仕方のないことさ。キミのことは、学園長であるこの私に一任されてしまったのだから」

学園長はなんだかやむを得ないといった様子で話す。

コイツによると、オレの処遇について学校内でも結構な議論になったという。

退学、とまではいかなくてもそれなりに重い罰を与えるべきだと訴える教師や、退学にするべきだと声を荒げた教師もいたらしい。

何よりオレの担任は『私ではどうすることもできない』とどうやら学園長に丸投げしたようだ。

……いや、今のはオレの言い方がまずかったな。

見放した、というよりは、自分では手に負えない、と匙を投げたと訂正しよう。

そこで学園長は、自ら面倒を見るから退学だけは勘弁してやってくれ、と救済の措置を施したんだと。

言わば、このおっさんのおかげでオレは、こうして再び花咲川の制服に袖を通すことができていくわけだが、なんだかオレが貸しを作ったようで少々気持ち悪い。

「そんなに嫌なら放っておいたらいいものを……」

「そんなことをしたら、またキミは無茶な行動に出るに決まっている」

「今までの信用はどこへ行ったのやら」

「いいかい？これからは、何かするときは必ず私に相談すること。そして一人で突っ走らないこと。いいね？」

「わーっただよ。全く、自分からこんなお荷物を背負ってやることねえのによオ」

オレは大きいため息をつく。

「だいたいなあ、アンタに相談したところで何になるってんだ？オレのやることは全部、学園側としても擁護できないものばかりだろ。今回の件といい、盗撮野郎の件といいな。アンタの力なんか借りたってどうせ——」

「そのために私がいるんです」

「っ！氷川、いつの間に」

オレの話を遮り突如現れたのは、久方ぶりの風紀委員長だった。

奴はツカツカとオレたちの方へと歩み寄ると、学園長の隣に腰をかける。

「そう。私の力なんてたかが知れている。だからこそ、キミの抑止力として氷川くんに頼むことにしたんだ。彼女なら、十分に役割をこなしてくれるだろう」

「学園長の頼みとなると、断るわけにはいきません」

「っーかお前、風紀委員の仕事は？朝は生徒会と挨拶運動とかやってんじゃねエの？」

「それなら心配いりません。既に風紀委員の皆さんには周知済みです」
「さすが、用意周到なことだ」

相変わらず、氷川の万能さには恐れ入る。

学園長が太鼓判を押す理由も、察しがつく。

「それじゃあ、これからはより一層彼女と力を合わせて、学園の風紀保持をよろしく頼んだよ」

「はい、お任せください」

「オレに拒否権なんて存在しないってか」

「当然だよ」

「当然です」

「つたく、しょうがねエなあ」

オレは淡々と話を続ける二人に降参の意思を告げ承諾した。

学園長はともかく、氷川の頑固さはよく知っている。

このままではオレとあいつの意地の張り合いで埒があかないのことは目に見えてい

た。

承諾したのは渋々だ、渋々。間違っても氷川に根負けした訳じゃねエ。そこ、重要だからな。

「……………おっと、チャイムがなつてしまったね。それでは諸君、今日も一日勉強に励んでくれ」

「はい。放課後にまた、伺わせていただきます」

氷川はそう言い軽く礼をすると、部屋を後にする。

オレは軽いため息をつき、それに続いて退室しようとするが、ドアの一步手前で止まり学園長の方を向く。

「……………オレが退学にならなかったことだけは感謝しとく」

その言葉に学園長はニコリとするだけで何も言わなかった。

アイツの心情なんて知ったこっちゃねえが、オレが感謝してるのはアイツの ” 権力 ” だ。

あのハゲに対して礼なんてするかよ。

学園長室を出ると、ドアの側に氷川は無言で腕組みしながら立っていた。その横を素通りしようとしたが、奴はオレの横に並び歩き出す。

「んだよ。もうテメエに頭を下げるのは間に合ってるぜ？」

氷川とは視線を合わせず、言葉を交わす。

「もう謝罪の必要ありません。ただ、一つだけ言わせてください」

氷川はそう言うのと突如立ち止まる。

奴より一歩先で振り返ると、奴はオレに向かって深々と頭を下げている。

「この度は月島くんだけに責任を負わせてしまい、申し訳ありませんでした。あなたの力になることもできず、白鷺さんにも酷い傷を……………大変、申し訳ありません」

氷川は、今にも泣き出しそうなほど弱々しい声で謝罪を続けた。

誰も氷川を攻めてるわけでもねえのに、まるで自分が一番悪いと言わんばかりの謝り方だ。

奴の責任感の強さは異常だと痛感させられる。

「まあ……………なんだ」

少し言葉に詰まる。

「別にお前が謝る必要はねエだろ？全部オレが勝手にやってきたことなんだしよ」

「それでも私は何も知らずにいました。あなたの言動をもっと理解していれば、このようなことには……………」

「……………くっ、ハハハハツ」

氷川の言葉に思わず、小さく笑い声をあげる。

「な、何がおかしいんですか？」

氷川は顔をあげ、不思議そうにオレを見つめる。

そのポカンと何もわかってないような顔を見た瞬間、オレは吹き出すように大声で笑う。

「な、何ですか!?!」

「何って、お前の言ってること全部がおかしくつてよ………ククツ」

「月島くん! これでも私は真剣に——」

「だーかーら! お前は何事も考えすぎなんだよ。オレみたいなチャランポランな野郎の考えなんざ、分からなくて当然だぜ?」

氷川はますます分からなくなったと言わんばかりに、眉にシワを寄せる。

「もうお前は、アレだ。バカ真面目を通り越して、クソ真面目だな!」

「く、クソツ!?!」

「もつと思考を柔軟にしねえと余計疲れるだけだぜ? もつと気楽にやれよ、クソ真面目風紀委員長!」

オレは氷川の肩を叩き、ケラケラと笑いながら教室へ向かう。

「……………そ、その呼び方は認めませんからね!!こら、月島くん!待ちなさい!!」

氷川の言葉には目もくれず、オレは逃げるようにその場を後にする。

いつぞやのように、オレを逃さないための首輪をつけられるのだけは勘弁だし、説教されるのもうんざりだ。

だからこそオレは逃げる。

本気で怒らせて弓道の弓でも射られた日には、オレは天に召されること間違いなし。

まあ、いくらアイツでもそんな非人道的なことをするはずがないとわかってるけどな。



氷川の静止を振り切ったオレは一目散に教室へと向かう。

だが、この先に懸念していることがある。

言わずもがな、クラススの文化祭をぶち壊してしまった件だ。

あれだけ準備に時間をかけて、稽古にも付き合ってもらって、あげく無関係なクラスメイトまで気分を害させ、病院送りにしちまった。

謝つても謝り切れるものではない。

氷川からは逃げたが、この件は逃げるわけにはいけねえ。

段々と教室が近くなる。

それに伴い足取りも重くなる。

これほど憂鬱な気持ちになるのは初めてのことだ。

朝礼まで残り5分。

家に帰るなら今——

「月島くん？」

「っ!？」

振り返りざまに、オレを見上げる青髪の女が声をかけてきた。
唐突な出来事に思わず驚きの声を上げる。

「な、なんだよ、松原かよ……………」

「えへへ、おはよう。どうしたの？もうすぐでチャイムがなっちゃうよ？」

何も知らないと言わんばかりの言動に、少しばかり違和感を覚える。

「お前、何とも思わねえのかよ」

「えっ!? な、何のことかな？」

まるで察しがない松原に、少し話題を変えて話を進める。

「なあ松原、人って選択肢の連続だと言うけどよ、”YES” か ”NO” 以外の第三択があってもいいと思うんだが、どう思う？」

「あ、あの……………質問の意図が、わからないん……………ですけど」

——— 問いただし本人が言うのもおかしな話だが、全くもってその通りだ。

松原が困惑するのも無理はない。

何たって、本人が理解してないんだからな。

「ああ……要するにアレだ、せつかくの文化祭をオレがめちやくちやにした挙句クラスメイト全員に迷惑かけた問題児が悠々と登校してきて、ムカつかねえのかよ？」

強引にさつきの話を捻じ曲げる。

すると松原は小さく微笑みながら口を開く。

「ムカつく、なんてことは絶対じゃないよ。だって月島くんは千聖ちゃんを守るためにあんなことをしたんでしょ？ クラスのみんなはともかく、私はむしろ感謝してるよ。言うのが遅くなっちゃったけど、千聖ちゃんを助けてくれてありがとう。月島くん」

どこからか吹いて来た風で松原の髪が靡き、ほんのり紅潮した顔が目に入る。にこやかに話すその姿が、まるで天使に見えた瞬間だった。

あまりにも眩しいその姿に、思わず目を背ける。

「別に、感謝されるためにやったわけじゃねえよ」

「うふふ、照れなくてもいいんだよ月島くん」

「う、うつせえ！とつとと教室入るぞ!!こんなところまできて遅刻なんかしてたまるか」

「うん、そうだね♪」

オレたちは共に教室へと足を踏み入れる。

賑やかだったはずの教室内が一気に静まり返り、全ての視線がオレに集まる。

なんとも冷ややかな目だ。

歓迎されていないって嫌でも理解できた。

オレがこのシンと静まった教室でできることは——

「……………クラスの文化祭、オレのせいでめちやくちやにしちまって、その……………悪かった」

誠心誠意、頭を下げる。

またクラスメイトたちから浮いた存在になるのは覚悟の上。

隣にいる松原にだけオレのことをわかってもらえればそれでいい。

そうおもった矢先、意外な人物がオレの前に歩み寄る。

顔を上げた先にいたのは、白鷺千聖だった。

「月島くん。あなた、何か誤解しているようだけど？」

「あ？誤解なんて何も——」

オレが言い終わる前に、クラス中から拍手の音が鳴り響く。

先ほどまでの冷たい目はどこへいったのやら、ニコリとした表情で手を叩くクラスメイトで溢れかえる。

オレはこの状況を理解できずにいると、白鷺千聖はオレの手を握り天井に向けて高く上げた。

「月島くんのこの拳が私を救ってくれました。しかし、文化祭を台無しにしてしまったのもこの拳です。ですが今回は私を助けるために、彼自身の正義のためにこの拳を振るったのです。決して悪気があつたわけではありません。そうでしょう、月島くん？」

「あ、ああ、そりゃあもちろん」

奴の急な問いかけに不意をつかれ、半ば強引に肯定させられた。

すると白鷺はオレの手を下ろし、再び話を進める。

「この度は私自身が不甲斐ないばかりにクラスの皆さんにご迷惑をおかけし、大変申し訳ございませんでした」

白鷺千聖はそう言い終わると、深々と頭を下げた。まるで全ての責任は自分にあると言わんばかりに。

氷川といいコイツといい、真面目すぎるやつは本当に困る。

オレの言動一つひとつを真に受けなくていいのに、なんだかこつちまでそんな気持ちになつちまう。

クソツ、何なんだこの気持ちちは。

まるで喧嘩の最中に、仲間がオレの目の前でボコボコにされてるみてえだ。

その心情に駆られ白鷺に続いてオレは再び頭を下げる。

「謝らないで、月島くん！」

「気にすることないよ！」

「あの3人になんとかしたいっておもってたのは私たちも同じだったよ！」

クラスメイトたちが次々と励ましてくる。

種村たちの件はもう気にしないってか？

これからも仲良くしようって言いてえのか？

全く………甘い。甘すぎる。

根に持つって言葉を知らねえのか、このクラスメイト共は。

ちったあオレのことを悪くいえよ。

文化祭、楽しみにしてたんじやねえのか。

これじゃあオレはどうやって責任取ったらいいんだよ。

「顔を上げて、二人とも」

そばにいた松原が声をかける。

その方へと顔を向けると、満面の笑みを浮かべた松原の顔が目に入った。

「これからもよろしくね♪」

松原の言葉とともに再び拍手が舞い上がり、クラスメイトたちが口々に声をかけてくる。

「つたく、お人好しばつかで困るぜ……」

誰にも聞こえない声量で、そう呟いた。



昼休み、オレはいつも通り屋上の更の上、誰も寄り付くことのない場所へと向かう。今日は晴天。雲ひとつない青空の下寝転がり、少しばかり吹く風に煽られるのは気持ちがいい。

だが——季節はまだ夏がようやくやく過ぎ去ったばかり。

まだまだ蒸し暑いことに変わりない。

「暑つちいなあ……こんなことなら、冷房の効いた教室にいた方がまだマシだぜ」

普段使われない教室、なんてものはザラにあるが種村の一件後、セキュリティが強化され簡単に出入りができなくなった。

鍵は全て校長が管理の上、防犯カメラの取り付け数も倍以上にしたと言う。

オレのいる屋上もその管轄に入った訳だが、すでに手は打ってある。

屋上の下にある教室から監視カメラの映らない場所へと侵入して少しばかり細工を施した。

本来は屋上に入るために絶対通る必要のある扉を映していたのだが、その角度をずらし絶対映らないようにしつつ、修復されたドアノブを再度蹴り壊した。

これで鍵要らず、監視要らずって訳だ。

氷川にバレたらまあ間違いなく怒鳴られるから、奴には絶対バラさない。

伝えるとしたら、『学園長が特別に許可した』と言うだけだ。

オレの安息の地を他の誰かに奪われてたまるかっての。

現にこの学校はオレのやった悪戯のように、表沙汰になつてない問題が多々ある。

氷川の協力もあつて秘密裏に解決してはいるが、悪どい連中がいらないとは限らねえ。

オレはまた ” 終わりなき闇 ” に身を投じ、正義という名の拳を振るわなくちゃい

けねえようだ。

だが、もう一人でないことは自覚している。

オレには頼れる仲間がいる。

もう二度と自分の失態で謝らせるなんてことはさせねえよ。

オレは心にそう誓う。

「月島くーん！どこにいますか〜？」

屋上の入り口の方から松原の声が聞こえる。

昼休み前にオレがここへ招待したからだ。

「いつものところだー。早く上がってこ〜い」

オレは急かすように返事をする。

「ね、ねえこの梯子、本当に大丈夫なの？とても錆びているし、今にも崩れ落ちそうなのだけれど……………」

「大丈夫だよ。私、何回もここを登ってるけど落ちそうになったことは一度もないよ？見た目の割に結構丈夫なんだあ」

「それなら良いんだけど……。怪我だけは勘弁してほしいわね」

松原の他にもう一人、心配そうに話す白鷺の声も聞こえる。

奴には松原から誘うように頼んでおいた。

ここ数ヶ月で白鷺とは随分親密な関係になったから、今ならまともな会話ができると踏んだからだ。

この際、奴とは「犬猿さいあくの仲である」という事実を取っ払いたいと思っている。

奴がどう考えてるかは知らねえけど、今後は松原や氷川と同様に接したいというのが最終目標だ。

「月島くん、お待たせ」

「お邪魔するわね」

「おう、気にせず座れよ」

二人はオレの隣に腰を下ろし、持参した弁当に箸をつける。

オレも二人に続き、購買で買った焼きそばパンの袋を開ける。

「それにしても、本当に高い場所ね。隣町どころか、はるか遠くまで見えるわ」

「オレのお気に入りスポットだ。この3人しか知らねえ場所だぞ？」

「ふええ………お、落ちたらどうなっちゃうのかなあ………」

「柵もあるから落ちやしねえよ。万が一のために下に大量のクッションも敷いてんだ。怪我ひとつ負うことはねえから安心しな」

「月島くんって、ガサツなんだか几帳面なんだかよくわからない時があるわよね」

「何から何までキツチリやってたらキリがないだろ？細かいことは、氷川みたいなクソ真面目に任すのが一番良い」

オレはケラケラと笑いながら話す。

「そんなこと聞いたら、紗夜ちゃんはきつと怒るでしょうね」

「ああ、バカ真面目を通り越してクソ真面目だつて言つたら、案の定ブチ切れてたぜ？ククツ、あの時の氷川の顔は最高だったな」

「わ、悪口はよくないよお」

「オレとしては褒めてるんだけどな」

「紗夜ちゃんからしたら、貶してるとしか思えないでしょうね」

「これが風紀委員会の日常だ」

「紗夜ちゃんも、苦労してるんだね……………」

「何言つてやがる、苦労してるのはこっちも同じだぜ？」

オレは焼きそばパンを齧り、一呼吸置く。

「突如家に押しかけてくるわ、『逃がさないようにする為』とか言つて首輪をつけてくるわでなかなか酷いんだぜ？氷川つて女は」

「えっ？く、首輪？」

白鷺はまるで理解できないと言つた感じで首を傾げる。

「そつか、千聖ちゃんは知らないんだね。実は——」

「あー、松原。その話はもう過去のことだ。全部綺麗に忘れよう。なっ？」

「目が怖いよ、月島くん……………」

オレは強引に松原の口を閉ざす。

他人の赤裸々な話を聞くのは歓迎だが、オレの事は話させねえ。

他人にオレの弱みを握らせるなんてマネをさせたら、今後の学校生活に支障をきたすのが目に見えている。

「そういえば、藤村つて覚えてるか？」

「藤村先生？ああ、確か頭髪チエックが厳しい先生だったよね？」

嫌でもあの出来事を思い出す。

似合いもしない金髪に不器用に着飾ったブランド服をチラつかせるその女は、生徒指導という大役を担う教師だった。

あまりの横暴さに、オレはこの二人と氷川、そして学園長の手を借りて論破してやった。

奴のプライドもズタズタにしてやったのにも関わらず、次の日も同じ髪色、同じブランド物の服を着飾っていたのだ。

もはやその姿は見苦しいと言う他ない。

この話には実は、続きがある。

「2学期の開始と同時に、アイツは生徒指導の任を外された。1学期中に変わらなかつた理由つてのがまともな引き継ぎが出来なかつただけなのに、藤村は『まだ自分のことを信頼されてる』と勘違いして頑張つてたらしい」

「それもそうね。でも、あなたの楽しそうな口ぶりからすると、他に何かあるんでしよう?」

さすが白鷺、察しがいい。

オレはニヤリと笑い、話の続きを伝える。

「1学期期末テストの出来事だ。これまでトップのクラス成績を残した奴のクラスが突如最下位に転落した。理由はひとつ、生徒たちの反乱だ」

「生徒が!?!」

「ああ。藤村のいき過ぎた指導は、次第に生徒たちの不満を募らせた。今回の藤村はオレとの一件もあつて相当張り切つていたらしい。詰めに詰めた授業、成績の悪い生徒の居残り授業。まるで地獄のような環境で勉強させられた生徒たちはある計画を立てた」

「その計画というのは？」

「復讐だ」

オレは残った焼きそばパンを完食し、共に買ったコーヒー牛乳で流し込む。

「勿論、藤村の追い込みでそのクラスは今までにないぐらい完璧に仕上がった。だが、テストの成績は何故か全体クラスで最下位。おかしいと思わないか？それだけレベルが上がったのなら、自分のためにテストの点を上げたいところだろ？だが、そのクラスに属する生徒は全員点を取らなかった。白鷺はもうわかったよな？」

「ええ。それで、”復讐”と言ったのね」

「ふええ……全然話についていけないよお……」

「泣く必要ないぞ、松原。お前にもわかるように説明してやる」

涙目になる松原を慰め、オレは話を続けた。

「このまま高得点のテストを取ったら藤村の優秀さだけが露呈して、肝心のところを証明できない。だからクラス全員が団結して、わざと点数を落とした。それも、藤村の

教える教科だけな」

「ええっ!? そんなこと、ありえるの?」

「ありえるんだなあコレが。そこで藤村の指導が悪いとかでクラス全員が学園長に直談判したらしい。『こんな教師に教わりたくない。別の担任をつけてくれ』ってな」

「ふふっ。それで、それは達成できたのかしら?」

「学園長も悩んだ末、藤村は1学期が終わると同時に担任も外された。今はなんの教科も担当してないから、社内二トならぬ ” 校内二ト ” にでもなったんじゃねえの? ククツ、ザマアねえな」

「仕方ないわ。彼女の今までの行いが報いとして帰ってきたのよ。今更、あんな人を助けようなんて思えないわ」

「藤村先生、可愛そう……………」

「松原はいい奴だなあ。あんな残虐非道な女教師にも憐れむなんて、普通ありえねえぞ?」

「そうね、花音はとってもいい子よ♪」

「ちよつと、二人とも! 揶揄わないでよお!」

松原が声を上げたと同時に、チャイムが鳴り響いた。

どうやら昼休みも残りわずかわしい。

「さてっ、そろそろ教室に戻るか。今朝の出来事上、サボるわけにはいかねえよなあ」
「当たり前よ」

「紗夜ちゃんの代わりに、私たちが連れて行くからね！」

「はいはい抵抗しねえよ。ほらっ、とつとと行くぞ」

オレたちは屋上を後にする。

まあ、たまには穏やかな学校生活も悪くないよな。

第19輪 咲くことを諦めた花

2学期も中盤に差し掛かると、学校の体制が変わってくる。

それが、生徒会役員の世代交代だ。

この時期になると、その椅子を勝ち取ると言わんばかりに生徒会の立候補者とその補佐役の奴らが躍起になっている。

自分に清き一票を投じてくれ、だとか演説を行なってはいるが所詮口先だけにしか聞こえないのは事実だろう。

誰も親身になつて聞こうとはしない。

もちろんオレもその中の一人。

オレにとつてはどうでもいい行事の一つだ。

生徒会役員とは学校行事や日々の生活を取り仕切る、言わば ” 学校の犬 ” 。

自ら進んで立候補する奴なんてそういるものじゃない。

—— あつ？ 我らが風紀委員長はその一人だと？

アイツは……アレだ、そういうのがお似合いだからだろ。オレには理解できんが。

人に使われることだとか、誰かのために働くだとか、そういうことに快感を覚える奴。そう、Mだ。

いやしかし、以前オレに首輪を巻いてロープを手に取った奴の姿は紛れもない女王様だった。

うちの風紀委員長は、SかMか。

きつとそれは本人のみぞ知ることだろうな。

「勝手に人の性格を判断するのをやめてもらっていいですか？」

風紀委員長は鋭い眼光でオレを睨み、思考を静止させた。

「オレはまだ何も言ってるねえだろ？」

「あなたがニヤついて黙っているときは、何かよからぬことを考えてる証拠です」

「オレが、いつ、ニヤついてたって？」

「私がこの教室に入った瞬間からです」

「なるほど。それは気色悪いな」

「ええ。とても気分が悪かったです。あなたの顔を見ると」

「風紀委員長はSの可能性が高い」と……………」

「変なメモを取るのもやめなさい！」

「おお、怖え怖え」

いつもの敬語はどこかへ吹っ飛びキレてきた。

『怖い』と言いながら、全くその気がしないのを察してか氷川はさらに機嫌を悪くする。

「それにしてもお前、本当にもう一年風紀委員長をやるつもりか？」

「ええ、そのつもりです」

「お前ってほんと変わってるよな」

「月島くんには言われたくありません」

「それはお互い様だ」

……………

……………

氷川といるとどうも会話が続かない。

放課後の教室に二人きりのこの状況で、相手はお堅い風紀委員長。

互いに合う趣味もなければ共通する話題もないからな。

なぜ今、おれがこの状況下に置かれているか少し時間を遡る必要がある。

あれは昨日の放課後の出来事だ。

いつも通り風紀委員の見回りを氷川とこなしてる最中だった。

奴の知人が生徒会に立候補をするからその補佐をして欲しい、と頼まれたのだ。

オレは二つ返事で ” NO ” と答えた。

理由は二つ。

一つは、その立候補者がオレの知らねえ女だったから。

もう一つは、単純にめんどくせえからだ。

氷川の連れがどれだけ立派な理想を持つとうが、それはただの理想に過ぎない。

その女の可能性だけで手を貸そうなんて、考えが甘すぎる。

そう氷川に伝えたが、『とりあえず話だけでも』と言うことで、渋々OKしたわけだが

.....当の本人は未だ現れやしねエ。

苛立つ感情が徐々に募る。

「おい氷川。これ以上待たせるならオレは帰るが？」

「確かに、少し遅いですね」

「人を呼び止めておきながら自分が遅刻するとは、飛んだ非常識野郎だな。よくもまあ生徒会に入りたいたいだなんて言えたもんだ」

「私も詳しくは聞かなかったのですが、前生徒会長と——つ、どうやらきたようです」

氷川は会話を止め、ドアの方を見つめる。

遠くにいる小さな影がだんだんとこの教室へと迫り、近づいてくる。

数秒の後、その影は教室の前で立ち止まると深呼吸をするような動作を見せ、ゆっくりとその扉を開いた。

「お待ちせして……………申し訳ございません……………。初めまして……………2年B組の
白金 燐子、です……………」

深々と礼をするその女は、どこかおどおどとした様子で話し何秒経っても顔を一切上

げようとしなない。

律儀、というよりただ臆病なだけか。

ずっと震えてるし、どうやらそれは氷川に対してではなく、オレに対しての感情だろう。

「とりあえず顔を上げろよ。そのままだと話が進まねえ」

「は、はい……………」

オレの言葉と共にこの女はゆっくりと顔を上げた。

震える体は未だ治らない。怯える様子は、松原に少しだけ似ている。

「お前が氷川の言ってた、生徒会長の立候補者か？」

「え、えつと……………そ、その……………」

「……………なんだ、オレがそんなに怖いのか？」

「い、いえ……………！そんなことは……………」

この女とのたった数回の会話で分かったことがある。

松原とコイツとの決定的に違うところは初対面での印象だ。

松原は怯えながらも受け答えができていたが、コイツはそれ以前の問題。

まともに言葉を返さないどころか、目も合わせようもしない。

氷川の推薦だからよほど強情な野郎が出てくると思いきや、結果はその逆。

コイツはもはや、人見知りという言葉の領域を超えている。

「つたく、話にならねえな。おい氷川、代わりに説明しろ」

オレは深いため息をつきながら、氷川にバトンタッチを要求する。

氷川も仕方ないと言わんばかりに話し始めた。

「彼女は私のクラスメイト。そして、同じバンド仲間でもあります。あなたの想像通り臆病なところはありますが、これまで図書委員として活動していました。それに、芸術分野においても非凡な——」

「コイツの経歴なんてこれっぽっちも興味はねえよ」

「説明しろと言ったのはあなたでしよう」

「気になることはただ一つだ。お前はなぜ、生徒会長になろうとしている？」

氷川のことを無視して、率直な疑問を扉の前で立ち尽くす臆病女に問う。

案の定、奴はおどおどとするだけで返事を返さない。

オレの中で決心がついた。

「残念だが、お前に貸してやる力はねエ。じゃあな」

オレは机にかけてあつた鞆を持ち、教室から出ようとする。

しかし、氷川はオレの腕を掴み離そうとしない。

「待ちなさい！まだ話の途中ですよ！」

意味不明に怒る氷川の手を力任せに振り払う。

「待つも何も、一向に話が進まねエからだろうが。おどおどびくびくしやがって、そんなにオレが怖いらいつそオレなんていねエ方がマシだろうが。察しろボケツ」

「ですからっ！まだ何も始まってないのに帰るなんてそんな卑劣な行為がありますか

!？」

「オレの質問に答えねエコイツが悪いんだろが！」

「あなたが高圧的に話すからでしょう!!」

「ひ、氷川……………さん……………落ち着いて……………」

「だいたいお前はコイツの何なんだ!!通訳か!?他人を挟まないと会話もままならねえ奴が生徒会長にでもなったら学校が良くなるどころか悪化するわ!」

「何でもかんでもあなたの憶測だけで決めないでください!彼女には可能性がありません。見かけで判断するのはよしなさいと何度言ったらわかるんですかつ!!」

「そもそもこんなキョドリっぱなしの生徒会長がいてたまるかつ!こんな奴が生徒のトップになるならまだオレがやった方がマシだボケが!!」

「ふ……………二人、共……………争いは……………」

普段は話が合わないオレたちだが、いざ揉め始めるとマシンガンの如くそれぞれが不満をぶつけ合う。

もうこうなったら止まらない。

互いの気が済むまでこの口戦は永遠に続く。

オレはもう、臆病女の存在を完全に忘れ去っていた。

氷川もまた同様、視界にはオレしか入っていない。

互いの口が銃口となり、言葉が弾丸として発射される。撃ち撃たれ。この閉鎖された空間では誰もオレたちを止めることなど。――。

「お、落ち着いてください!!」

まるで砲弾のように放たれたその強い言葉が、臆病女から発せられた。

予想だにできなかった出来事に、一瞬硬直する。

直後臆病女の方を向くと、顔を下に向け先程と同様にプルプルと手が震えていた。

その震えは、オレへの恐怖からではない。

気迫やら、奴の本気さが窺えるものだった。

「やりやあでできるじゃねえか、テメエ」

オレはこの女の意外な一面を見て嬉しく思い、笑いながら話すとそばにある椅子に腰掛けた。

氷川は驚いた表情を出したまま何も言わず、心を落ち着かせるように静かに座る。

「さつき見せたお前の気迫に免じて話だけ聞いてやる。そんなところで突っ立つてねえで、適当に座れよ」

「は、はい……………失礼……………します……………」

女は深々と礼をしてから、手前にあつた椅子を引き、それに座る。

「月島くん。あなたは誰に対しても ” お前 ” だとか、 ” テメエ ” だとか失礼にも程があります。彼女の名前ならさつき紹介したでしょう」

「ああ？そんなのいちいち覚えてられるか。日本人口だけで一体何千万人いると思つてんだ」

「誰もそんな壮大な話はしてません。はあ、このことはまた後ほど話しますから、覚えててくださいね」

「ため息つきたいのはこつちだつての」

落ち着きは取り戻したが、互いにまだ銃口は向けたままの状態だ。

いつまた銃撃戦になつてもおかしくない。

「それじゃあ、えーっと……………名前は、何だったっけか」

「白金 燐子さんです」

「白金か。なら、お前はこれからプラチナな。ニツクネームと捉えてくれたらいい」

「は、はい……………よろしく……………お願いします……………」

なんの捻りもないがシンプルゆえに覚えやすい。

ガキの頃に熱中した、モンスターを捕獲して戦わせるゲームのタイトルでもあるしな。

「プラチナはなんで生徒会長になりたいんだ？」

「えと……………前生徒会長から……………推薦、されたから、です……………」

「へエ、スゲエじゃん」

”前生徒会長？ああ、あの役立たずか”。

それが心の中の第一声として発せられたが、その言葉を心の中で閉じ込める。どうせ氷川が横槍を入れるのは目に見えているからな。

しかしまあ、プラチナは不思議なやつだ。

人とコミュニケーションなんてとれねえだろう、という印象だったが学校の生徒代表でもある生徒会長から直々に指名が来たということは、よほどの統率能力があると見る。

なんの成果もあげず薄っぺらい表面上の、綺麗な部分だけの学校生活を整えていただけの前生徒会長の推薦ともなると、その凄みも薄れるけどな。

「スゲエけど、それだけが理由か？」

「い、いえ……………決して、それだけでは……………」

「なんだ？ 言ってみろ」

プラチナは一呼吸置くと、俯きながら答える。

「このままじゃ、嫌だなんて……………。私、変わりたいんです……………」

「要するにその弱気なその性格を治したいってことだな」

「は、はい……………」

「まあ、本音の動機としてはいいんじゃないかねえの」

「本音の動機？ どう言う意味ですか？」

「考えてもみろ。『私自身が変わりたいから生徒会長になりたいんです』なんて言われて、生徒たちはどう思う?」

「だから何ですか?と、言われても仕方ありません」

「そうだろ。赤の他人からすればお前の動機は不純すぎる」

「な、なら……どうすれば……?」

「月島くん。勿体ぶらず早く答えなさい」

なにも理解できず慌てふためくプラチナと回答を急かす氷川。

そんな二人にオレの考えを伝える。

「乗るか乗らないかはお前次第だが、一つオレの提案を聞いてくれ。まずはだな――」



そして迎えた候補者演説会。

体育館に全校生徒が集い候補者の熱弁を聞く、言わば最後のアピールチャンス。

オレたち補佐役は演説の準備やら街頭演説まがいな事を手伝うだけで仕事は終わり。あとは全て候補者たち次第だ。

この学校には幾つもの委員会があるがその中でも唯一、風紀委員のみ委員長候補する奴がいなかった。

オレを含めた全校生徒はてつきり、現委員長の氷川が引き継いでいくのかと思いきや、本人はこれを軽く否定した。

『他にやることがあるので』だとか『あなたには関係のないことです』だとか回りくどい言い方をするから考えないようにしてきたが——候補者がいないとでもなれば、風紀委員は解散か？

いや、学園長のことだ。

なにかしら対策を打ってくるだろう。

だがまあ、候補者が出なかった理由は大体わかる。

異端児オトがいるからだ。

教師陣ですら手に負えないオレを制御できる人間なんて学園長か氷川ぐらいだろう、と大半の生徒は考えるはずだ。

自らこんな足枷をつけたくないだろうからな。

——あつ？自分で言つてて悲しくならないかだと？

なるわけねえだろ。全部事実だ。

清く正しく真つ当で、綺麗な正義ばかりを貫いているやつてるようではこの学園の風紀委員長は務まらない。

氷川だつてそれを重々承知のはずだ。

これから風紀委員長になる奴は実に不憫だ。

足枷だけにとどまらず、自分勝手に動き回る猟犬を飼い慣らす必要があるんだからな。

「月島くん。隣子ちゃんにどんなアドバイスをしたの？」

1人で考え込んでいると、オレの隣に座る松原が話しかけてきた。

「たった一言だけ『下を向くな。前を見ろ』とだけ伝えた」

「えっと、それだけ？」

「ああ。たったそれだけだ」

「だ、大丈夫かな……………」

「なるようになる。それに、忘れられねえ演説会になると思うぜ」

「それはどういう——」

松原の問いに答える前に、司会者が演説会の開始を告げる言葉を発した。

その声と同時に、生徒会の立候補者たちが横並びで歩いてくる。

プラチナは左から2番目。

奴の他にも生徒会長になりたいと、変わった考えを持つ奴がいたそうでそいつがトツ
プッターを務めるようだ。

うっすら見覚えはあったものの、オレとは全く関わりのない男子生徒。

七三分けにした髪とでかい丸眼鏡をした容姿から、氷川と同様クソ真面目タイプだと
みて取れる。

オレがこういう第一印象を持った奴は、大抵が教科書通りのありふれた話しかしな
い。

現に奴が話した言葉は、『生徒会長になったら学校をより良くする』だとか、『バイリ

ンガルな生徒の育成に尽力する』だとか、抽象的で理想論だけを語る演説に思わず大きなため息をつく。

実につまらない。

現に奴の話に最後まで耳を傾けた生徒なんて半数もないだろう。

演説が十数秒たった今でも、奴がなにを言ったかほとんど覚えていない。

奴の演説に協力した補佐役の人間が可哀想だと、哀れみの気持ちすら出てくる。

やり切った、と胸を張る候補者と入れ替わりでプラチナが演説台に立つ。

数度、大きく深呼吸を行いマイク越しに放たれた一言はオレ以外の生徒の度肝を抜くものだった。

「私は……………一人では何もできません」

……………

……………

時は少し遡り、プラチナと初めて会った日。

どのような演説をするか迷うこの女に、オレは一つ案を持ちかけた。

『まずはだな、第一声でお前の弱気な性格を全面的に押す言葉を発しろ』

『弱気な……………性格を？』

『全く意味がわかりません。そんなことしたら、印象が悪くなるのは当然のことでしょう？』

『勿論その通りだ。だがな、氷川。自分からそんな欠点を見せる奴が嘘をついているように見えるか？』

『いえ、違います』

『人の印象というのは何より最初が肝心だ。どれだけハイパーポジティブなことを語ろうと、日々の立ち振る舞いから、それは真逆だと感づかれるのはそう遠い話じゃねエ。それにあきたりなことを言っても、どうせつまらねえ奴だと印象付けられるのが関の山だ』

『なら……………どうすれば……………？』

『答えは単純。お前の弱気な性格を隠さず曝け出せばいい。それも、自分の評価を落とすような言葉を添えてな』

『白金さん。真剣に聞かなくて大丈夫です。彼はその……………考え方が特殊という

か、人一倍捻くれているんです』

『おいコラッ。オブラートに包み切れてねえぞ』

『それでも、私は……………最後まで聞きたい……………です』

『なら、最後まで話させてもらうぞ。例えばそうだな、オレが演説台に立ったとして、「この学園の生徒から尊敬される生徒会長を目指します！」なんて言ったらどう思う？』

『まず間違いなく、あなたのことを知る全校生徒は票を入れないでしょう』

『その心は？』

『あなたの素行を少なからず耳にしているからです』

『そうそれだ。だからこそ、今の自分を隠す必要なんて無意味。むしろ逆効果だ。だからこそ、その場凌ぎの演技じゃなくありのままの自分で臨んだ方がいい。それに加え、嘘偽りない自分の本性をいうと更に良い。何せ大事な晴れ舞台、全校生徒の視線が一点に集まる演説台で自分から欠点を晒すようなバカが嘘を言っているように聞こえるわけがねエ。それで、お前を知らない生徒の第一印象と話の掴みは完璧だ』

『すごい……………。どうしてそこまで……………考えられるの、ですか……………？』

『決まってる。その方が何倍も面白えからだ』

……………

……

そして現在に至る。

あたりを見渡すとプラチナの発した、たった一言に学園全体がどよめいている。

それもそのはずだ。

学校を代表する生徒を決めるこの場ではありえない発言をした上に、本人は至って堂々としているからだ。

プラチナはこの空気を意にも介さず言葉を続ける。

「私だけに限りません。人は、一人だけでは何もできません。スポーツ競技においても個人種目などがありますが、その人を支えるトレーナーやコーチがいて初めて成立します。それはこの学園生活にも同じことが言えます。私一人が頑張ったところでその力はほんの僅かですがこの学園全生徒の力を合わせればそれは何百、何千倍にもなるはずです」

プラチナは一度言葉を止め、深呼吸をする。

「今までは、生徒会が率先して学園生活をより良いものにしてきましたが、やはり全員が満足のいく学園にすることはできませんでした。それは全て、秩序だとか学園の為だと言うガチガチに固められた古い思考に他なりません。現に私は、学園長先生にこのような嘆願書を提出させていただきました」

プラチナはそう言うと、数枚の紙を高々と上げる。

もちろんここからでは文字が全く見えない為、代行としてプラチナが読み上げる。

「前回行った、”学園に対しての要望”というアンケートを前生徒会長から譲り受けた物です。上位に位置する要望を読み上げます。

『スマートフォンの使用を可能にして欲しい』

『体育の授業をいくつかの競技に分け選択可能にして欲しい』

『制服をもっとアレンジしたい』

などが挙げられました。スマートフォンの使用についてですが、昼休みのみに限定し使用可能に。体育の授業に関しては先生方とも相談し、3つの選択を可能に。制服については、風紀委員会とも協力し正式な校則を作ると共に、生徒全員が納得のいくものに

すると学園長先生に約束していただきました」

その言葉に会場は拍手が巻き起こる。

理想だけでなくちゃんと現実にした、その功績に対しての感謝の表れだろう。

女子生徒もキヤーキヤー喚いているし、男子生徒もスマホの使用許可が下りて喜んで
いる。

奴はキツチリと成果を上げた。

もう文句はないだろう。

「これらの実現は、私一人で成し得たものではありません。これらの要望をした生徒の皆さん、そして私と共に協力してくれた月島くん、氷川さんのおかげでもあります。初めに私は、一人では何もできないと言いました。しかし、このように誰かと協力することができれば校則だって変えられるのです。これからも全校生徒の皆さんが満足のいく学園生活を送るために、私にどうか力を貸してください。私はそんな、全員で助け合えるような学園作りに尽力します。以上です。御静聴ありがとうございました」

プラチナが深々と礼をすると同時に会場がスタンディングオベーションに包まれる。

「決まったな」

オレは小さくそう呟き、会場を後にする。



次の日の放課後、学校の掲示板に選挙の結果が掲載された。

無数の生徒で埋め尽くされていたが、オレの身長だと余裕で見える。

結果は分かりきっていたが、生徒会長選挙はプラチナの圧勝に終わった。

得票数は実に98%。

オレや氷川の助力はあったものの、プラチナ自身よくやってくれた。

——さて、オレが気がかりなのは風紀委員についてだ。

生徒会役員で唯一立候補者が現れず、存続が怪しまれた委員会だが学園長「ハゲ」は一体どんな手を打ったのやら……………。

そう考えていると、後ろから白鷺と松原が声をかけてきた。

「あらっ、月島くん」

「月島くんも見に来てたんだ」

「おお。とりあえず、アイツは無事生徒会長になれて一安心だな」

「あつ！ほんとだ！燐子ちゃん、当選してる！」

松原が嬉しそうにはしゃぐ。

「……………お前、見えてるのか？その身長で」

「も、もちろんだよ！背伸びをすれば！」

「ギリギリじゃねえか」

松原の横にいる白鷺に目をやる。

「そういえばコイツは、松原よりチビだったよな？」

松原でギリギリってことは……………。

ふと白鷺に視線を向けると白鷺はニコリ笑い返す。

笑みを浮かべるその顔とは対照的に、背後にどす黒いオーラをオレは感じ取る。

『それ以上言ったら、あなたの頭をハンマーで突いて身長縮めるわよ？うふふつ♡』

この女、ホント恐ろしい。

「あれっ？風紀委員長の名前も記載されてるね名前は……………」

おっと、白鷺このチビに気を取られて大事なことを忘れていた。

風紀委員に任命された名誉ありで可哀想な野郎は一体……。

「風紀委員長、月島奏……………」

思わずその名前を何度も見返す。

月島 奏？オレと同姓同名の生徒がこの学園にもいたのか。

なんだ、ビックリした。

そうだよな。オレがそんなものになるわけがねえよな。

「現実逃避してもダメよ。間違いなく、あなたの名前よ、月島くん」
白鷺の言葉で現実に取り戻される。

「……………つ！あのヤロオおおおお！！」

オレは一目散に学園長室へと走り出す。

「おいハゲっ！オレを風紀委員長つてどういうことだゴラア！！」

乱雑に開けた扉の先には対面ソファに腰掛けてヘラヘラと笑う学園長「ハゲ」とため息をつき学園長の対面に腰掛ける氷川の姿が目に入る。

予めこの出来事が起こると予想していたように待ち構える二人に怒りが込み上げる。

「まあまあ、落ち着きなさい。あつ、もう掲示板を見たからわかってると思うけど、副会長は氷川くん——」

「んなことはどうでもいい！！……………いや、どうでもよくはないがつー！」

氷川が副会長になったのも驚きだが、それ以上にオレのことが第一だ。氷川のことはスルーして話を戻す。

「全て学園長が決めたことです。素直に受け止めてみれば良いのでは？」
「バカかつ!? オレが風紀委員長なんて務まるわけねえだろ!! もっとマシな人選できねえのか!」

「これでも私は真剣さ。ちなみにだが、キミの風紀委員長就任を推したのは私だけじゃない。生徒会長である白金くんもだ」

「プラチナが？」

「彼女の代弁をすると『月島くんにはこれからも私を支えて欲しい。そして私も彼を支えられるようになりたい』だそうだ」

「理由になつてねえだろうが……………」

要らぬお節介を受けた。

今のオレからはその言葉しか浮かんでこない。

深くため息をつき、頭を抱える。

「安心してください。私は副会長と言えど、風紀副委員長も兼任していますので」

「そうかよ、それは助かる」

「とりあえず納得してくれてよかつたよ。はははっ」

「納得はしてねえよ！はあ………何でオレがこんな面倒な役目を………」

「あなたも身を持って知ればいいと思います。書類管理に委員会議、校内の活動に生徒会議。やることは目白押しです」

「面倒なことは全部お前に丸投げするから覚悟しろよ？」

「絶対に逃しません」

「言つてろ」

「それじゃあ、決まりということでもいいんだね？」

「………ああ。やることは今までと何も変わらねえぞ？」

「もちろん。期待しているよ」

不本意ながらオレは風紀委員長になることを承諾した。

——それと同時にオレの知らないところで不穏な動きがあった。

誰も近づくことのない路地裏。

悪人たちのホームグラウンドであるその場所で、ある事件が起きた。

花咲川学園女子生徒に対する暴行事件。

被害にあつた生徒は全員意識不明の重体。

犯人は不明。

手がかりになる痕跡も残っていないことから相当なやり手だと見解されたそうだ。そして場所は移り変わりとある無人倉庫にて。

数十人の不良共を従えた野郎が、声高々と宣言する。

「準備は整った。これより、月島 奏及び花咲川学園との全面戦争を開始する！」

第20輪 花を枯らす害薬

生徒会長がプラチナに変わってから色んな校則が見直された。

服装、頭髪、携帯等の持ち込み物など曖昧だった校則も全て見直され明言されるようになったのだ。

あの生徒会選挙が終わった後からもキッチリと目に見える実績を残す生徒会を支持する声は増す一方で、今まさにこの学園は新しく生まれ変わろうとしている。

そんな中、オレはというと――。

「あーっ……………今から風紀委員会議を行うが、特に何も異常はないな？」

不本意な役を担い、月に一度行われる委員会議に出席している。

これまでは全て氷川に丸投げしていたが、風紀委員長となった今それをする事は許されない。

現にオレの隣で副会長兼副委員長様はこちらを睨んでいる。

「……………よしつ、何も無いな。それじゃあ解散——」

「できる訳ないでしょう」

面倒な会議を即刻終わらせようとすると、副委員長は横槍を入れてくる。

「んだコラつ。今のこのご時世、時短だ時短だと人が密になる時間を極力割いてるつてのに、オマエはオレの配慮を踏み躪ろうつてののか？」

「あなたが変に圧力をかけるから皆さんが怯えて何もいえないだけです」

「そんな訳ねえよな？なあ!？」

オレの問いかけに委員共は下を向いたり、巻き込まれないようにと上の空を見る。

ハッキリしないのは大嫌いだ、脅したところで氷川がまたゴチャゴチャいつてくるのは目に見えている。

「結果が目に見えています」

オレは大きいため息をつき、進行を氷川に委ねた。

「皆さんもご存知かと思いますが、ここ数日間で何人もの生徒が何者かに暴行を受けています。夜は極力出かけず、一人にならないように心がけてください」

「困った時はちゃんと119番通報しろよ」

「学校にかけても構いません」

「もしくは、フリーダイヤル0120—パパとママは今晩もプロレス?*****にかけてくれれば頼り甲斐

のある酔っ払いマツチョ軍団がすぐにでも駆けつけてくれるから覚えとけよ」

「そんな読み方ありません!」

「ちなみにだがこの番号、ありとあらゆる携帯機器だと通じないから要注意な」

「どうやってかけろというんですか!?!」

先ほどまで重苦しかった空気だった教室が笑い声に包まれる。

今度は氷川が大きいため息をつき、最後のまとめの言葉をオレに委ねた。

「とにかく野郎と遭遇した場合は金的を狙え。いいな?」

委員共は口々に返事をし、教室を後にする。

教室内がオレたち二人だけになった時、ずっと腕を組み眉間に皺を寄せていた氷川の口が開く。

「全く、あなたは風紀委員長としての自覚はあるんですか？」

氷川の口ぶりから、オレに対する怒りを感じる。

「自覚も何も、勝手に任命しやがったのは学園長あのハゲだろうが。お前がどう言おうがオレの好きにやらせてもらうぜ」

「はあ……………先が思いやられます」

氷川はわざとらしく、ため息をつく。

「別に不安を煽る必要はねえんだよ」

「なぜですか？危機感を持たないと、いざという時に何もできないでしょう？」

「出会った時点でやられるのは目に見えてるのに、危機感もクソもねえだろ」

「それは確かにそうですが……………」

「だから最低限、” 集団行動をとる”、” 誰かに頼る” ことの2つだけ頭に入れとけば助かる確率はグッと上がる。現に今まで襲われた奴は皆、” 夜に”、” 一人で” 出歩いてる奴だったからな」

氷川はオレの話に納得したのか無言で頷き肯定した。

「結局は暴行を受けただとか、何人もの生徒がやられてる、なんて話は無駄なんだよ」
「それじゃあ、あなたが話したあのくだらない電話番号はなんなんですか？アレも私にとつては無駄だと思いますが？」

「生徒を不安がらせないためのボケに決まってるだろうが。それにオレって野郎はどうも怖がられてるみたいだからな。少しはユーモアに接してやらないと誰も頼ろうとしねえだろ？」

「……………本当にあなたは捻くれてますね」

「要領がいいと言え、バカ真面目」

「なっ!？」

「だからこそオレたちが今やるべきことは——」

オレは氷川に背を向け歩き出す。

「校内外の見回りをして1日でも早く犯人を見つけることだろ？」

そのまま教室を後にし、見回りを開始した。

暴行事件が起こってからちようど3日。

水面下に潜んだ悪人は必ず顔を出す。

それまでオレはじつと待とう。

オレの拳に力が入る。

「オレの監視領域テリトリで被害者を出した時点で、オレは負けてるんだよな……………クソツ
！」

この嘆きは誰の耳に入ることもしなかつた。

……………

………

見回り、というのは建前でオレはある場所へと向かっていた。

そこは今やオレの第二のサボリスポット。

部活動。碁、茶道部以外で使うことはないその部屋は、和を象徴とする畳部屋で物音一つすらろくにしない静けさを持つ。

茶道部と言っても所詮は名ばかりで、そのほとんどが幽霊部員。オレが会ったことのあるのも、せいぜい3人だけだ。

「邪魔するぜ」

何の前触れもなくその和室に入ると、二人の姿が目に入る。

「あつ、月島くん！いらっしやい！」

一人はクラスメイトの松原。

「……………コクツ」

もう一人はヨボヨボの婆さん。

茶道部の顧問らしいが、話しているところを見たことがない。

一応伝えておくと、今ここにはいないがもう一人ちゃんとした部員がいる。

一年生のどつかの国のハーフ女子で、外人特有の日本文化大好き女だ。

松原同様に当たりがよく唐突にここへきても嬉しそうに歓迎してくれる変わった奴だ。

「いつもいつもホント悪いな。二人の静かな空気を壊しちまって」

悪びれもなくそういうと、松原はオレをもてなすかのようにお茶と茶菓子を出す。

今日は……………ほお、栗羊羹か。遠慮なくいただこう。

「私は全然構わないよ。風紀委員の見回りはもう終わったの？」

「いや、まだまだこれからだ。少なくとも今じゃねエ。……………苦っ！」

差し出された茶を一口啜る。

コーヒーとはまた違う苦味。

決して悪くはないが、まだオレの舌ではその旨さがわからん。

だからこそ、絶対に『結構なお味で』なんて口にしない。

「風紀委員長になってやつぱり大変だよね」

「氷川のサポートがあるから全然苦ではねえよ。問題があるとしたら、アイツと考えを共有することができないことだな」

「よく喧嘩してるもんね……」

松原は表情を曇らせながら話す。

「喧嘩というか、反発というか、氷川とは分かり合える気がしねえんだよなあ。そういえば、今日の風紀委員会議も揉めてよ。何でもかんでも嘯み付いてきやがるから、ツツコムのもめんどくせえよ」

「それでも、楽しんでやれてるんじゃないかな？」

「松原にはそう見えるのか？」

「うん！私にはそう見えてるよ」

「松原は満面の笑みで返す。

「……………変な奴」

「えへへ」

「なあ。一つ聞きたいことがあるんだが、真剣に答えてもらってもいいか？」

「うん？いいよ？」

オレはもう一度茶を啜り、一呼吸置く。

「お前——他人に怒りとか感じたことはねえの？」

その質問に松原は考える間も無く即答する。

「怒り？特にないな」

「はっ!? おまつ、イラつてすることねえの?」

「私ね、自身おつちよこちよいというか、ドジだから、人に迷惑をかけることが多いんだ」

(……………知ってる)

「だから私は人には優しくしたいと思うんだ。私自身そうやって接してほしいし、そうやっていくためにまず私からやろうっ! という感じかな」

実に立派な思想だ。

コイツの懐の深さは、こういった考えから生まれるんだとおもい知らされる。

「松原」

「どうしたの?」

「お前、本当に人間か」

「えっ? ……ええ!？」

「婆さんもそう思うだろ? なあ?」

そう問いかけると、婆さんはニコリと笑う。

「どうしてそう思うの?」

「この世の生物の中で人間ほど薄汚ねえのはいねえと思うんだ。無駄な争いを好み、集団生活しかできねえくせに他人を妬みあまつさえ危害を加えようとする。なのにお前にはそれがねえ。何故だ? オレには全くわからん」

「そ、そんなこと言われてもなあ……………」

「少しでも心当たりはねえの? 家族、友人、クラスメイトでも何でもいい」
「無いものはどれだけ考えても無いよおー!」

「どうやらコレが松原の本心らしい。」

「ホント、こっちがドン引きするぐらい良い性格してやがる。」

「そうか、問い詰めるようなマネして悪かった」

「ううん、気にしないで」

「逆にお前はオレに聞きたいこととかねえの?」

「聞きたいこと?」

「ああ。答えれる範囲なら何でも答えるぞ」

「そ、そうだなあ。うーん……………」

松原はじつと考える。

「じゃあ、これからは月島くんのことを下の名前で呼んでもいいかな？」

「なんだ、そんなことでもいいのか？」

「うんっ！せっかく友達になれたんだしね！」

「別に構わねえけど。なんて呼ばれようが気にしねえし」

「ありがとう！奏くん！」

「っ……………」

唐突に下の名前で呼ばれるとなんだか変な気分になる。

上手く言えねえけど、きつとアレだ。

むず痒い気持ちというやつだ。

「慣れねえなあ、当分は」

「私のことも『花音』って呼んでいいんだよ？」

「……………いや、別にいい」

「なんでっ!？」

「だが、その時がくればそう呼ばせてもらう。松原」

「わかった、待ってるね」

「お前がその婆さんみたいになるまで松原って呼び続けても恨むなよ?」

「それでも——待ってるよ?」

「くっ! な、何なんださつきから!!」

「な、何もしてないんだけど……………」

「——あ、ああ、もうこんな時間か! そろそろ見回りに戻らねえと、氷川にバレちまう。今日も奴に何か聞かれても黙秘で頼むな。邪魔したな、また明日!」

オレは強引に部屋を後にする。

今は気持ちが悪く落ち着かないと言わんばかりに心臓がバクバクいつてる。運動した後とは違う心臓の動き。

これ以上あの部屋にいたらオレはどうなっていたのか、オレ自身わからなかった。いや、考えたところでわかりやしない。

本人が意図していない言動ほどわかりにくいものはない。

純粹というか、無垢というか………松原はそう言った類の典型的なタイプだ。

さつきの松原の言葉、表情。

白鷺あの子千聖よりよつぽど恐怖した瞬間だった。



月島くと別れて数時間。

学校内だけでなく、校外にも搜索範囲を広げたものの何の足取りも掴めないまま下校時刻寸前の時間を迎えた。

私は再び風紀委員会議で使用した教室へと戻り彼の到着を待つ。
そう待たないうちにその時は訪れた。

「お疲れ様です。進捗はどうですか？」

「残念ながら空振りだ。犯人の”は”の字も出てきやしねエ」

月島くんはお手上げと言わんばかりのそぶりを見せる。

「私も同じでした。もう犯人はすでにこの近辺から離れたのでは？」

「何人もの生徒に手を出したんだからな。そろそろ学校だけでなく警察も動き出すと考えたんだろう。現に学校周辺の警備も強化されたところだしな」

「完全に行き詰まった、ということでしょうか」

「オレたちは探偵じゃねえんだ。犯人探しはあくまで大人たちの仕事だろ？」

「しかし……………」

「お前の気持ちもわかる。だがな、こつちの手札はあまりに乏しい。向こうは防犯カメラの映像も見れるし、警察犬だっている。対してこつちは聞き込みか見回りぐらいしかできることがねえ。あくまでオレたちは子供でしかねえんだよ」

彼の意見はもつともだ。

それでも、被害にあったのはこの学校の生徒たち。

身内に被害者が出た以上身内だけで解決したいところだけれど……………現実はい。厳し。

「それでも私たちがしていることは決して無駄では無いはずです。もうしばらく見回りを続けましょう」

「そうだな。ったく、ホントこの学園はトラブルがつきねえよな」
「ええ。全くです」

「まさかこの近辺に事件を呼び寄せる小学生探偵がいるんじゃないやねえよな？ だとしたらもう手の打ちようがねえぞ？」

「……………一体何の話をしてるんですか？」

私がそう問いかけたと同時に下校時刻を告げるチャイムが鳴り響く。

「おっ、もうそんな時間か。オレらも帰るぞ」

「そうですね。テストも間近で部活をしている生徒もほとんどいないみたいですし、見回りは必要ないでしょう」

「だな。オレは学園長に呼び出しをくらったから寄つてから帰るが、お前は どうする？」

「私もこのまま帰ります。特に予定もないですし」

「おいつ、まさか『一人で帰る』なんて言うんじゃないやねえだろうな？」

「もちろんそのつもりはありません」

「ならいい。妹にでも頼みやがれ」

「そのつもりです」

「間違つても一人で帰ろうなんて考えるんじゃないやねえぞ？」

「わかっています！もう、私は子供じゃないんですよ？」

「ハハハツ、そうだったな。人を下僕イヌのように扱える奴はもう立派な大人だ」

「揶揄わないでください!!」

ケラケラと笑う彼の前を通り過ぎ、強引に教室を後にする。

部屋を出ると同時に日菜に電話を入れる。

——しかし、一向に出る気配がしない。

ほとんど日菜に電話することはないけれど、私が日菜に電話をかける時はワンコールも経たないうちに出るはずなのに。

こう言う時に限って……いや、この間の悪さこそ日菜らしいと言うべきか。

全生徒が下校し、月島くんも学園長と話があると聞いた今、私の頼れる人は完全に居なくなってしまった。

月島くんの帰りを待つことも選択肢の一つだろうけど、学校のすぐそばに帰る家がある彼にとっては面倒であると思うに違いない。

『間違っても一人で帰ろうなんて考えるんじゃないぞ?』

彼の言葉が頭をよぎる。

だけど、これほど警察が蔓延る中、犯人だつて迂闊に動けないはず。こんなことでお母さんやお父さんに迷惑はかけられない。

私は携帯画面を閉じ決意する。

「——私一人でも大丈夫、よね」

彼の言葉を見殺し、自己判断で帰路についた。

.....

.....

時刻は18時を経過した。

冬へと着々と進みつつある秋空はすでに暗黒模様。

まるで暴行事件に難儀する私たちを示しているようでどこか気分が悪い。

街頭も所々で光るだけで視界が悪く、人通りもあまりない。

たまたま警察官の方々ともすれ違うけれど、どこか疲れ切った表情をしている。

彼らも私たちと同じ。

なかなか犯人が見つけられず寝る間も惜しんで捜査に励んでいるんだろう。

本当に申し訳ない気持ちでいっぱいな気持ちなのと同様に、犯人への怒りにも似たものが溢れている。

不甲斐ない自分に腹が立つ。

（そういえば今まで暴行を受けた生徒は、“夜に”、“一人で” いたからだっただけ……）

フツと私はある考えに行き着く。

『放課後に見回りをした意味は、決してなかったのでは？』と。

真つ暗な時間。

人通りの少ない場所。

単独行動をする私。

犯人にとってこれほど都合な相手はいない。

(……………背に腹はかえられませんね)

さつき彼に対して見せた態度は謝ろう。

そして彼に家までついてきてもらおう。

そう決心したその時だった。

「——————きゃっ!」

突如腕を掴まれた私は、人が複数人も通れない狭い十字路に体を吸い寄せられた。

景色が光が全くささない真つ暗な場所へと映ると、背後にいる見知らぬ影が私の体を抱き寄せる。

「グフフツ、捕まえた♡」

耳元に聞こえるその声は、あまりに不快で下品。

「キミ、花咲川の生徒だろ？スタイルいいねえ、何年生？」

不敵に笑う男の声に体の震えが止まらなくなる。

抵抗しようとするも、腕でガツチリと抑えられ身動き一つ取れない。

「あなた……………こんなことして、タダで済むと……………思っているの……………？」
「タダで済む？その言葉をそのまま返すね。キミ、今からナニをされるかわかっているのかな？」

「っ!!」

私の体を抑えつけていた男の手は徐々に、足下半身、そして胸へと動く。

片手で私の胸を揉み、もう片方の手はスカートの中を弄っている。

とても不快。

縮こまった私の体ではもはや声を出すこともできず、男のされたい放題となる。

これも全て私の責任。

日菜を頼らなかつた。

彼を頼ることができなかつた私のプライドのせいだ。

背後にいる変質者だけが悪いだけじゃない。

この男に狙われるような状況を作ってしまった私が全ての原因だ。

「おやつ？抵抗しないんだね！グフフツ、ボクのテクニクに感じちやつたのかな？」

気持ち悪い言葉を吐く男は上機嫌に話す。

対して私は案山子同然。

身動き一つ取れず男の思うがままになる。

「そろそろ我慢できないし……………ヤツちやうよ？ほら……………ボクのも興奮してこんなになつたんだよ……………」

男はズボンのファスナーをおろす。

「キミも初めてかな？グフフツ、ボクは初めてなんだ。キミみたいな可愛い女の子で童貞卒業できるなんて嬉しいな。それじゃあ、いただき——」

男の言葉が途中で途絶える。

それと同時に私の体を触れていた手が離れると同時に、『ドカツ！』という鈍い音が入る。

「グホツ!？」

驚く声のする方に顔を向けると、男は数メートル飛んでいた。

「うっ、うおおおおあああ………」

あまりの痛みからか脇腹を必死に抑え、目には涙を浮かべている。

（一体何が………!?!）

困惑する私の前に、見覚えのある金髪メツシユの男子生徒が宙に浮く姿が目についた。

着地するや否や、変質者の間合いに一瞬で詰め寄り驚く顔面に二度両拳のストレートを打ち込み、最後は顎を蹴り上げ男はノックダウン。

そこにはボロボロに打ちのめされた下半身露出男と、両拳を強く握り仁王立ちで佇む男子生徒という構図が映る。

私は乱れた服を元通りにしながら、彼の元へ駆け寄る。

「月島くん!!」

彼の名前を強く呼びかけると、月島くんは目を強張らせ今にもこの男に襲い掛かろうと言わんばかりの怒気にも等しい形相だった。

「——おいつ、大丈夫か?」

唐突に私を氣遣う言葉が投げかけられ、彼の口から本当に出たものなのか疑いの眼差しを向ける。

「わ、私なら問題ありません」

「嘘つけ。この変質者にエロいことされたんだろ」

「そ、それは……………」

「オマエが何と言おうと、コイツにはそれ以上の屈辱を受けさせてやる。安心しろ。まずは顔面の骨を粉々にするところから始める」

「そこまでしなくて結構です!」

「じゃあこの小つせえ股間を裂く。鎌か何か持つてるか?」

「だから、私はもう大丈夫だと言っているでしょう!」

「だがな——」

「……………ふんっ!」

何かと制裁を加えたがる月島くんに向かって私は、股間目掛けて思い切り蹴りを入れた。

予想外の行動に彼は対処することができずノーガードでそれを受ける。

側で倒れる変態男の隣で蹲り、声にならない声を発しながら股間を抑える。

私には決して知ることのない痛み。

彼はそれを直に感じているんだろう。

「て、テメエエエ……………」

「月島くんは委員会議で言いました。『野郎と遭遇したら金的を狙え』と」

「相手が違うだろおがああ……………」

彼は姿勢を崩したまま途中呻き声を発しながら蹲る。

「この男にはあなたが十分制裁を加えました。これ以上は入院どころでは済まなくなります。なので、私の判断で止めさせていただきます。ですが、あの……………やり過ぎてしまったことは謝ります。ごめんなさい」

「……………氷川にも付いていれば分かる。この痛みがな……………。だが、お前を責める気は微塵もねエ。だから早く、警察と救急車、それから——」

「酔っ払いマツチヨ軍団とやらは呼ぶつもりはありません」

「く、クツソオ……………」

月島くんはぐったりと倒れ込みピクリとも動かなくなるのを確認し、私はすぐさま携

帯を手に取り各番号へ連絡を入れる。

もちろん彼の言う冗談には付き合わない。

数分もするとパトカーと救急車が一台ずつ到着し、変質者は救急車へ。

私と月島くんはパトカーへと乗り込む。

現場を見るや否や、警察の方々は私を襲ったのは男二人で、私がそれを撃退したと勘違いしていたけれど私は全て否定。

私には顔が凹むほどのパンチなど打ち込めない。

救急車が到着しても尚、月島くんは蹲ったままだったので『あなたも救急車に乗ったほうがいいのでは?』と尋ねたところ、『問題ない』と多量の脂汗を流しながら答えたので私と同乗した。

あくまで彼はクールを気取りたいらしい。

同い年の女子高生に膝をついたことがそんな屈辱なのかしら?

男の子の考えてることって本当にわからない。



後日、私は何事も無かったかのように登校した。

もちろん両親や日菜、学校にもこの事件を知られ非常に心配をかけたと反省している。

日菜に至っては大量の涙を流しながら私に抱きつき大泣きされてしまった。

本当にあの娘はアイドルとしての自覚があるのかしら。

月島くんも、私を助けてくれたとはいえ変質者の体を大分メチャメチャにしたように、下顎骨粉碎骨折等の重傷を負わせてしまい警察の方々にはキツく注意を受けていた。

しかし彼のこういった騒動は見慣れているらしく、あくまで私を守るために行った暴行ということで停学及び退学といった処分は一切降りることはなかった。

だからこそ、私は今こうして彼の横を歩いている。

「昨日は本当に助かりました。感謝してもしきれません」

私は深々と頭を下げる。

しかし彼はどこか納得がいていないようで、やや不機嫌である。

「オレはオマエに受けた蹴りのせいで、ずーっと耐え難い苦しみを味わっていた

わけだが………それに対しての弁解は？」

「月島くんを止める為には、ああするしかありませんでした。弁解の余地はない、と言いたいところですが仕方のないことだと割り切ってください」

「ぎけんなっ！こちとら警察サツから犯人扱いされるわ、お袋からゲンコツ食らうわで散々だったんだぞ!!」

「それはアナタの日頃の行いの所為です」

「んだコラア!!」

怒鳴り声をあげる月島くん。

私たちの話を聞いてか、学園の生徒たちが群がってきた。

「何？また委員長と副委員長が言い争ってるの？」

「二人つて付き合ってた？」

「痴話喧嘩かな」

「もう見慣れた光景だよねー」

野次馬たちはあろうことか憶測でしかないことを口にし始めた。

「おいコラツ!!見せもんじゃねエぞ!!」

「風紀委員長く、隠さなくてもいいんですよ」

「黙れっ!!!」

野次馬たちが一斉に笑い出す。

月島くんは顔を紅潮させ、怒りをあらわにする。

「はぁ……………本当に恥ずかしい……………」

私はため息をつき呟く。

慌ただしい日々がまた始まった。

第21輪 猛毒の薔薇

学期末試験。

それは、学生ならば誰もが頭を悩ます行事の一つ。

それは女優である私も例外ではなく、紗夜ちゃんみたいに学年トップクラスとは言わずとも平均以上の点を取れるように勉強してきた。

今日がその本番なのだけれど……未だ二人の姿がない。

月島さんと花音。

サボりがちな彼なら ” そのまさか ” を起こしえるけれど、あの真面目な花音が試験日に休むなんてとても考えられない。

花音がいくら方向音痴と言っても、通い慣れた登校道で迷うはずもないからその線は考えにくい。

心配で心配で、今すぐにも探しに行きたいけれどその衝動を必死に抑える。

「はい、それでは試験を開始します。欠席は……月島さんと松原さんですね。まず、筆記用具ですが——」

担任の先生が淡々と説明に入る。

どうやら二人がいないことはあらかじめ知っていたような口ぶりだったが、本当に大丈夫か不安な気持ちでいっぱいになる。

もしかしたらただの風邪かもしれない。

けれど、私の勘はこう囁いている。

『二人は何らかの事件に巻き込まれたんだろう』と――。



とある廃倉庫にて。

オレの携帯に着信を入れた野郎が指定したこの場所に単身丸腰で乗り込む。

「随分物騒なところだな」

何故今オレがこんな状況にいるかというと、今から小一時間前に遡る必要がある。

嫌々、学期末試験を受けに行こうと家を出ようとした時だった。

オレの携帯に一件の着信が入った。

送信主は不明。

携帯には非通知、とだけ記載されておりオレは渋々その電話に出た。

『誰だ』

やや高圧的に答えると、電話越しの野郎は不敵に笑いオレを挑発する。

『迷惑電話なら切るぞ。さっさと名乗れ。テメエは誰だ』

それでも笑うことをやめなかった野郎に腹が立ち、通話を切ろうとしたその時だった。

『ウフフツ、お久しぶりね。月島 奏くん』

『……………!?!? テメエ、北谷か』

『フフツ、せいかい♪』

嬉しそうに話す送り主は、羽丘の女帝という異名を持つ不良女。

そしてオレを歪めた張本人。

北谷 桃子からだった。

『オレに一体何のようだ？ どうしてこの番号を知っている？ 一体何が目的だ？』

『そんないつぺんに言わなくても、後で全部答えてあげるわよ。だから今は一つだけ答えてあ・げ・る♡』

奴はそう吐き捨て通話を切ると、一通のメールを送りつける。

そのメールには一枚の写真が添付されていたんだが………まあその写真がびつくり。

手足を縛られた状態の松原がそこには映っていたのだ。
再度着信音が鳴り、一コールも待たずして通話に出る。

『写真、見てくれたかしら？』

『テメエ………松原に何をした!？』

思わず声に力が入る。

北谷はその様子すらも面白いと言わんばかりに笑う。

『まだ何も、とだけ伝えておくわ。今から一時間以内に、市内の海沿いにある大きい廃倉庫に一人で来なさい。もしも警察に伝えたり、一人で来なかつたりしたら………どうなるかわかるわよね?』

『バーカ。どうなるかわからねえのはオマエの方だ。松原に手エでしたら、髪の毛全部むしり取ってやるよ』

『ウフフツ、あなたとの再会を楽しみにしてるわ。私は素手で戦^やるつもりだから、アナタもそのつもりでね♪』

そして再び通話が切れる。

オレはすぐ学園長に電話を入れ、今の状況を伝えるとすぐさま家を飛び出した。

家の駐輪場に止めてあるバイクを取り出し、スピード違反なんてお構いなしの速度で廃倉庫へと向かった。

——そして現在。

乗ってきたバイクを廃倉庫の前に停車させ、正面から堂々と入る。オレの視界に入る限りは誰もその姿を捉えることはできない。

中は暗く、天井の僅かな隙間から木漏れ日のように指す光のみ。

オレはただっ広い空間の中に一人、仁王立ちする。

そこで一度息を大きく吸い——

「北谷いいいいいい!!」

倉庫の外からでも聞こえる声量で奴の名を叫ぶ。

それでも奴は一向に姿を表すことはない。

「月島 奏が来てやったぞ! さっさと出て——」

話している最中に、ヒュンツ、という風切り音が聞こえたと思いきや、右足に激痛が走る。

「……………ッ!？」

痛む右足を確認するため一瞬目線をおろしたその時、正面から何者かが猛ダツシユでこちらとの間合いを詰め、拳を振り抜く。

間一髪で後方に飛び込みながら躲し、強襲者と距離を取る。

再度右足を見ると、多量の出血と共にあるものがぶつ刺さっていた。

それは、クロスボウで使用する太く短い矢。

脚は貫通していなかったが……………それを差し引いても激痛が全身に巡る。

「おいおい、シャレになつてねえぞ……………」

まさかここまでやるとは——あのおんな北谷もどうやら本気でオレを殺す気らしい。

足に刺さった矢を引っこ抜き投げ捨てると、そこからさらに血が流れ出してきた。動きづらいから抜いたはいいものの、足がズキズキとさらに痛む。

矢を放った奴もどうやら姿を隠したらしく、その影を見ることもできない。

次もまた同じように足を狙われたら、The・エンドかな。

目を凝らし強襲者の方に顔を向けると、わざとらしい拍手をしながら不敵に笑う北谷の姿が目映る。

白のトツプクを羽織り一端のヤンキーを気取った格好をしてやがった。

「二射目を躲したのは素直に褒めておくわ。流石よ、月島くん」

神経を逆撫でするようにオレを褒め、煽る。

「人に向かってクロスボウを放てる手下がいるなんて、驚いたぜ。どうやらそいつの恨みも随分かってるらしいな、オレって人間は」

オレも無理に笑みを浮かべ余裕の態度を示す。

「フフフツ、アナタは正義の味方面して色んな人を殴り回っていたものね」

「流石は羽丘の女帝！厨二病満載の肩書を持つだけのことはある。情報は全て筒抜けだったってか？」

「アナタもよく覚えているでしょう？同じクラスの種村さん」

種村。文化祭で白鷺千聖を痛めつけた三人組のリーダー格だった女だ。確か奴は北谷と接触して暴行のイロハを叩き込まれた。北谷の口から種村の名前が出るのは不思議ではない。

「ああ、よく覚えてるぜ。人にナイフを突きつける危ねえ女だったな」
「もちろん、私が教え込んだからよ？まあ恨みが強いだけで何の才能も感じなかったのだけだよ」

「冷てえなア。一発KOされる奴は使いもんにならねえと言いてえのか？」
「アナタ相手とはいえど何かしら傷を負わせないと意味がないわ。せつかく武器を持つているのだからね。それで手も出せずに終わるなんてクソ、ゴミ以下よ。フッフッフ」

笑顔で罵倒する北谷。

コイツに限ってではないが、女つてのは考えることがえげつない。
男なんかよりもその本性はドス黒く陰湿。

オレにとっては、国民的アニメのガキ大将が可愛く見えるほどに。

「クククツ、誰が情報源か知らねえが、そこまでオレに固執するのは何故だ？やはり中学の復讐か？それとも、他に理由でもあるのか？」

オレがそう問いたですと、北原から笑みが消え虚ろ目を開き口を閉ざす。

ただただ冷徹なその目は今までにない、新しい北原と見て取れた。

だが、何も話さなければ進展しない。

オレは再び問いかける。

「おいおい、だんまりなんて卑怯じゃねえか。オレは今日、大事な大事な学期末試験をポシャってここにいるんだからよ」

オレがヘラヘラと笑いながらそう言うと、北原は何も言わずフィンガースナップをする。

その音を聞きつけ、廃倉庫の至る所から柄の悪い野郎たちがぞろぞろと湧いてきた。数にして八。

手にはそれぞれ、バット、鉄パイプ、木刀、スタンガンらしきものなどなど目白押し。

階段で上がれる高所にはさつきオレを脚を射抜いたクロスボウを持つ野郎もいる。全員が鋭い目つきでオレを睨み、今にも襲い掛かろうとしている。

「ハッ、素手でやると言っておきながらこのザマか。全く、汚いにも程があるぜ」
「言つたはずよ。私はと」

「なるほどな。オマエ単体は素手と言っておきながら、取り巻きたちが着実にオレのスタミナを削り最後は北谷が締め、と。女らしいチマチマセコいした作戦だな」

「アナタが私の手で、この場所で、虫ケラのように死ねばそれでいい。身体的にも、精神的にもズタズタにね。さあ、余興もこれでおしまい」

「本番はこれからってか……………。もう少し、怪我人を労って欲しいんだけどな！」
オレは腰を低くし身構える。

戦闘体制を整えるのはいいものの、明らかにオレの分が悪すぎるな。
コッチは丸腰の上に右足の負傷。

対して向こうは武器を手取る取り巻きたちと、女帝とまで恐れられる北谷の存在。過去にも危険な武器で脅されたことはあったものの、あの程度の小物は本気で殺そうとはしない。

対してコイツらは全員が同じ意思で、オレに向けて殺意を抱いている。こういう相手は正直手強い。

北谷はともかく、野郎から先に片付けるか——。

「オマエらがどんな手を使つてこようが関係ねエ。既に承知してるとは思うが、オレは女だろうと知らねえ人間だろうと、平気で手エあげる野郎だから覚悟しろよ？」

オレは奴らに中指を立て挑発する。

とつと松原の居場所を吐かせてここからトonzラだ。

「それじゃあ——いくわよ!!」

北谷の号令と共に取り巻きたちが一斉に詰め寄つてきた。

居合い斬りをする木刀野郎を躲し、スタンガン野郎は脚を引つ掛け転ばし、鉄パイプを素手で受け止め腹に蹴りを入れる。

いつ飛んでくるかわからない矢も警戒しながら、襲いかかる野郎を全て捌く。

しかし、北谷はあくまで来ない。

オレが弱るのを待つかのようにタイミングを見計らっているようだ。

……………にしても、コイツらの動きが並じゃねエ。

ただの不良とは違う機敏な動き。

そして技の応酬。

導き出された答えは一つ。

「おいつ、北谷！まさかコイツら、スポーツ経験者か!？」

オレが奴らの動きを間一髪で躲しながらそう問いかけると、奴は笑みを浮かべその答えを物語る。

「ピンポン、正解♪それぞれが中学では腕を鳴らしたエキスパートたちよ。ソコらの不良とは訳が違う動き。数人がかりで襲えば、アナタでも手が焼くでしょう？」

しかしこの状況、かなりヤバいな。

オレが一人でも捌ききれなかった時点でゲームセット試合終了だ。

とりあえず、クロスボウにだけは細心の注意を払いつつ一人一人確実にKOするか。

「どうしたどうした!?! 所詮エキスパートと言ってもこの程度か?」

オレが手招きし煽ると、背後から北谷が回し蹴りをしてきたが片手でそれを受け止め、顔面に渾身の右ストレートを放つ。

しかし北谷は両腕でガードして数歩後退する。

「やっぱ攻撃が軽いな。痛くも痒くもねエ。所詮、女帝といえどオマエじゃオレに勝てる訳ねえんだよ」

「よく周りをご覧なさい。決して私だけじゃないことを、お忘れなく」

そして再び野郎たちが一斉に襲いかかる。

オレが身構えたその時——今度は左腕に激痛がはしる。

「……………ッ痛!?!」

散々警戒していたクロスボウ野郎から矢が放出された。

この入り乱れた中では使いづらいただろう、と少し油断があつたのは事実。重大なミス。

それによりオレの身体は再びその激痛に見舞われ、一瞬の硬直を生む。

「しま……………つ!!」

左腕の痛みで怯んだ隙に、木刀野郎の居合い斬りを頭にモロに喰らう。

「かはつ……………!!」

あまりの衝撃に血反吐を吐く。

「どあつ……………ぐあ!!」

手を緩めることなく襲いかかる野郎たち。

スタンガンの強い電撃で気を失いかけては、メリケンサックで腹を殴られ、鉄パイプ

で脚を強打されては、バットで背中をフルスイング。もはや立つことすらままならなくなり、ぶつ倒れるのも時間の問題だ。身体を殴られるたびに血を吐き、足元が真っ赤に染まる。

これが——今までの報いというやつか。

朦朧とする意識の中、オレはただひたすらに殴られ続ける。



「あれっ……………？…ここは、どこだろう……………」

目覚めた時には、どこか知らない場所で手足を縛られ、壁に貼り付けにされていた。全くこの状況が掴めない。

戸惑う私の元に暗い影から小柄な人が近づいてくる。

「はじめまして、松原花音さん」

「あ、あなたは、一体………?」

「月島 奏くんのお友達です。彼もここにきていますが、お会いになられますか?」

丁寧に話す人だけど、笑い方が少し変。

どこか無理矢理と言うか、心からの笑顔じゃないことは私でもわかった。

それに顔も何だか千聖ちゃんに似てて違和感も感じた。

「奏くんも、ここにいますか?」

「ええ、もちろん。ただ——変わり果てた姿で迎える羽目になるかもしれません
がそこは覚悟してくださいね」

女の人はそう言い、私の手足縛る紐を解きはじめる。

私にはこの人の考えが全くわからないし、私が今、何故、この状況下にいるのか理解
することはできないけど一つだけ確かなことがある。

この人に逆らったら、私はただでは済まない。

数分も掛からずに紐は解き終えた。

『ありがとう』とお礼を言う間もなく、女のひとは何も言わずに前へ進む。

私もその後ろを黙ってついていく。

.....

.....

細長い廊下を歩いている途中。

私たちの間に会話は無い。

『何か話した方がいいのでは？』と頭によぎるけど、『余計なことはしない方がいい』と否定的な意見もよぎる。

おどおどしていると、女の人から声をかけられた。

「松原さんは、月島くんの彼女ですか？」

唐突に聞かれたその質問に私は全力で首を横に振る。

嘘ではない、と強調するように。

「そうですか。お似合いだと思えますけどね♪」

この人は一体どこまで知っているんだろう？

その疑問だけがただただ残る。

「緊張することはありませんよ。楽にしてください」

「え、えつと、じゃあ……………」

何を聞こうか数秒考える。

「あなたは……………誰なんですか？」

私の質問にこの人はすぐに答えた。

「月島くんから聞いていませんか？羽丘女子学園の女帝、という名を」

その名前に聞き覚えがある。

台風が来て奏くんのお邪魔した時に教えてもらったその名前。危険だから気をつける、と言われたけどまさかこの人がそうだったなんて。私の、『逆らわない方がいい』という考えは正しかった。

「し、知ってます……………」

「それで、彼は何と？」

「『危険だから気をつける』とだけ教えてくれました」

「ウフフツ、確かにその通りですね。私はこれまで多くの人とケンカをしてきて、勝ち続け、今ではこんな異名が付き恐れられるようになった。この意味、アナタには分かりますか？」

「い、いえ……………」

女帝さんは一度立ち止まり、一呼吸置く。

振り向くとずっと笑顔だった表情は消え、光の灯らない目を開く。

「彼を始末することなんて容易い、ということですよ」

その言葉から女帝さんの強気が感じ取れた。

でも、信じたくない。

奏くんが、あの無敵にも思えた強さを持つ彼が負けるはずがない、と。

「信じらないのならアナタの目で確認すればいいわ。もうすぐでその姿を拝ませてあげる」

女帝さんは再び私に背を向け歩き出す。

そうだ、私は信じない。

彼は絶対、悪に屈することは決してない！

数分も歩けば廊下の出口が見えはじめる。

それと同時に何かを強くぶつける鈍い音が少しずつ、だけど確実に聴こえてくる。

私は一目散に出口へと走りあたりを見回す。

廊下で聞こえた音の正体は私の下。

広い空間に、一塊になった男の人の集団から暴行を加えられる奏くんの姿が目に見える。

「奏くんっ!!」

響き渡る私の声に集団たちが顔を上げる。

彼も片目だけ開け私をみると、苦しそうに名前を呼ぶ。

「マツバラ……………ゴホッ!!」

咳き込むと同時に多量の血を吐く。

身体も痣だらけになり頭からも血が流れ、彼を中心にコンクリートの床は真っ赤に染まっている。

腕や背中には矢が刺さり息継ぎも荒く、いつ倒れてもおかしくない、そんなボロボロの状態だった。

「感動の○○対面ね。心境はどうかしら?」

私の後方で女帝さんが嬉しそうに話す。

「こんなの………あんまりだよ………」

「こんなの？ウフフツ、まだまだ甘いわ。彼がこれまでいっただれだけの人を苦しめてきたと思っているの？」

私の横に並び問いかける女帝さん。

奏くんの過去なんて私にはわからないけど、これだけは言える。

彼は決して間違ったことはしていない。

「クククツ、言ってくれるなア………」

「まだ笑うの余裕があるのね。なら———」

女帝さんが指を鳴らすと男の人たちは再び彼に暴行を加え始めた。

「やめてっ!!これ以上殴ったりなんかしたら、奏くんが死んじゃう!!」

私の必死の叫びも彼らには伝わらない。

どれだけ涙を流してもこの状況は変わらない。

私って本当に無力だ。

そう痛感させられる。

「ねえ月島くん。まさかとは思うけれど、このおんな松原花音のことをアナタを誘い出すためのエサなんて思っていないでしょうね？」

「……………えっ？」

女帝さんは驚く私の前にナイフを突きつける。

「おいつ……………！テメエ……………！！」

「ずっと探していたわ。アナタが大切だと思ふ女性をね。候補は三人、氷川紗夜、白鷺千聖、そして松原花音。初めは白鷺千聖だと思っていたわ。だって何だか私と似ていたもの。だけど違った。幾度となく彼女を痛めつけてきたけれどアナタが本気で怒ったことは決してなかった。

次に氷川紗夜。彼女はアナタと風紀委員として長い付き合いがある。恋愛というより、アナタと彼女はビジネスパートナーに近い間柄だった上に、揉め事も絶えず起こし

ていた。何度か嫌がらせをしたものの白鷺千聖と同様に、アナタが本気で怒ることはなかった。

私には確信があるわ。この二人ではないと。それが何故わかったのか教えてあげる。それは――」

女帝さんは一呼吸おき、言葉を強調するように強く言い放った。

「アナタが暴行を加えた人の怪我の具合よ」

怪我の具合？

女帝さんの言っていることを理解できないでいると、彼女は言葉を続ける。

「骨折、病院送りはあれど全て治癒できる範囲にとどまっていた。でもアナタが中学で起こした暴行事件。覚えているかしら？ 大人しかったアナタが大暴れしてクラスメイトや先生方を病院送りにした大事件を。アレは悲惨だったわ。新聞やニュースには「少年A」とだけ記載されていたようだけど、世間では結構騒がれたものね」

確かに聞き覚えはあった。

同い年の中学生が、大暴れして教室を大破。生徒教諭を含めた何十人も人が重軽傷を負わされたというニュース。

かなり近所の中学校で起こったものだったから鮮明に覚えている。

その犯人が奏くん？

とても信じることができない。

「アナタを止めに入った担任の先生はアナタに負わされた傷のせいで車椅子生活を余儀なくされた。私の仲の良かった子だってそう。割れたガラスが目に入り失明した。私だってそうよ、この額の傷……………二度と治らない負荷をこの男に負わされた。だから確信がついたのよ。アナタを本気で苦しむ様を見るにはこの女を痛めつけることが先決だってね」

女帝さんがナイフを振り翳すと、私の制服を切り裂いた。前面が破られ、見るも無惨な姿を晒される。

「きゃっ……………！」

「て、テメエ……………許さねエ……………!!」

怒りで血眼になる奏くん。

対し女帝さんは高らかと笑い声を上げた。

「ウフフツ、キャハハハハハハツ!!それよ!!その歪んだ顔を見たかったのよ!」

「……………ロス……………ぶつ……………殺す!!」

女帝さんは高さ7メートルにもなる高さから飛び降り、綺麗に着地すると彼の元へ近づきナイフを突きつける。

「どうかしら?アナタが惚れた女が痛めつけられる様を見るのは」

「おいコラツ、クソ女……………次、松原に手エ出してみろ。土手っ腹に……………穴開けて……………やるよ」

鋭い目つきで睨む奏くん。

それが気に入らなかつたのか、女帝さんは奏くんの顔を何度も、何度も殴りつける。

私も彼の元へ走り出そうとしたその時——足元に矢が飛んできた。飛んできた方向を見ると、弓をグツと引き追撃を加えようとする男の人が見えた。次、動けば命はないと言わんばかりに向けるその矢に私は屈してしまった。腰が抜け、床にへたりこむ。

「月島くん。アナタはやりすぎたのよ。何人もの人生を狂わせてきた。その報いを受けるのは当然のことよね？」

女帝さんは冷たくそう言い、奏くんの右目にナイフを突き立て切り裂いた。

「!!」

声にならない声を発し、血を流す奏くん。

もう彼は限界だ——そう思った時だった。

「クククツ………クハハハ」

この状況に相応しくない笑い声が極僅かに上がる。

一体誰が？

その小さな声は次第に大きくなり、その声の主がはつきりとなる。

「カハハハハハッ！」

それは、奏くんのものであった。

この異常事態に誰もが絶句し言葉を失う。

「オマエら、そんなに殴って、斬りつけて、射抜いて、本当に楽しいか？ 楽しくねえよなア!? オマエたちが憎んで恨んで仕方ねエ男は、一切弱みを見せることなく立ち続けているんだからよ。オレは最高に楽しいぜ？ お前たちの歪んだその表情を拝めてなアア!!!」

その様子に誰も何も言えない。

いや、言えるわけではない。

血塗れで今にも倒れてもおおかしくない人が、誰よりも活気に溢れてて余裕の笑みを浮かべている。

私にも言えることだが、女帝さんも、男の人たちも皆、彼に抱いたものはただ一つ。

圧倒的な威圧感。

この一言に尽きる。

その凄みに気圧されたのか女帝さんはナイフを落とすし、無言になった空間に金属音が鳴り響く。

それと同時に、遠くからパトカーのサイレンが鳴りだんだんとこちらに近づいてくる。

動けずにいた男の人たちは慌ててこの場を去り、女帝さんも後に続き姿を消した。

私も奏くんの元へ行きたいけれど腰が抜けて立つことすらできない。

だけど彼は一人になっても尚立ち続けた。

本当に生きているのかどうかもわからない。

だけど彼は耐え抜いた。

警察官が入ってきて安心したのか、私はその場に倒れ、意識を手放した。

この事件はのちに全国的なニュースとして取り上げられたのはまた後日の話。

第22輪 蝕まれた花

目覚めると雲に日差しを遮られ、暗くいつも以上に寒い朝を迎えた。

季節はもう冬に近い。

ドラマの撮影も近々始まるし、体調管理をしつかりしないと――。

話は変わるけれど、昨日の学期末試験は私にしてはよく問題を解けた方だった。

赤点なんてあり得ないほどに。

けれど、私にはテスト以上に心配にしていることがある。

月島^ふくんと花^{はな}音の行方。

テストの後に先生に聞いてみたけれど、『わたしには分からない』の一点張りだった。月島くんと同じ風紀委員の紗夜ちゃんに聞いても、そもそも学校に来ていないことすら知らない様子だった。

今日はテスト二日目。

連続で登校しなかったらもう二人に何かあったことは確定的と言つてもいいだろう。

そう考えテレビをつけると朝のニュースが報道されていた。

ニュースキャスターが神妙な面持ちで話し始める。

「続いてのニュースです。東京都の——で大変ショッキングな事件が起きました」

家からも随分と近場なところ。

そのニュースに食い入るようにして見る。

「昨日、都内の倉庫にて男子高校生と女子高生が襲われた事件で、警察は犯人と思われる複数人の実行犯を追っています」

どうやら私と年齢も近いよう。

この歳でそんな事件に巻き込まれるなんて、本当に可哀想。

場面が切り替わり、大きな古い倉庫が映し出された。

近場といってもどこにあるかわからないその場所で事件は起きたらしくニュースキャスターは淡々と言葉を続ける。

「警察によりますと昨日午後1時頃、高校生ぐらいの男の子が何者かに襲われている

と通報があり、警察官が駆けつけると犯人の姿はなく、制服姿の男子生徒に矢のようなものが刺さり大量の血を流していた状態だったと言います。そして数メートル離れたところで同じ制服の女子生徒も発見され意識を失っていたといいます。

女子生徒は軽症でしたが、男子生徒は複数箇所の骨折、刺し傷等で重傷を負い意識不明の重体だと言います」

朝から何とも残酷なニュースを聞かされた。

未成年に対しこんな仕打ちをするなんて犯人は正気じゃない。

悪くなった気分を治す為に珈琲を入れようとすると、このニュースの続きが報道される。

「被害にあった男子高校生は、月島 奏くん17歳で、警察は——」

……………えっ？

今、なんて言ったの？

ニュースキャスターの告げた名前に頭が真っ白になった。

手にしていたコーヒーカップは重力に逆らわず落下し、破片が床に飛び散る。それと同時に心臓がドクンツ、ドクンツと鼓動が早くなり息苦しくなる。床にへたり込み、バクバクとなる心臓を手で抑え心を落ち着かせる。

落ち着け——落ち着くのよ——！

そう言い聞かせても、鼓動は全く元通りにならない。

私の異変に気づいた母が来てくれて、何とか落ち着いたけれどテストどころではなくなった。

学校を休むことも勧められたけれど、今は大事な学期末試験の真つ最中。普段出席できていない為に休むわけにいかず、私は無理を言い登校する。きっとこのニュースを見たクラスメイトたちも驚いているだろう。早く試験を終わらせてお見舞いに行かなくちや——。



教室に着くと、やはりクラスメイトたちは月島くんたちの話で持ちきりだった。

どうやら新聞やネットニュースでも大きく報じられていたらしい。やっぱり、今日はテストどころではない。

チャイムが鳴り、担任の先生からも月島くと花音のことを告げられた。

どうやら先生方も詳しいことは何も知らないようで今日のテスト終わりにお見舞いに行くと言う。

私たち生徒は極力行かないようにと言われたけれど、そんなことを守る生徒の方が少ないことは目に見えている。

『まったく、無駄な忠告だ』

月島くんのならそう笑いながら罵倒するだろう。

私も今、彼と同じ気持ち。

有耶無耶な空気のまま始まったテストだけれど、全然解くことができない。

それはクラスメイトたちも同じ。

どこか気の抜けた、集中できていない様子だった。

テストが午前中に終わり、今日は何もないから早く帰ってお見舞いに行こうと思ったけれど、再度先生の忠告を受けた。

「どうやら学校側は、生徒たちの病院への立ち入り及び月島くんのお見舞いを禁止したらしい。」

「見つけ次第停学にすると付け加えられ、全員が意気消沈する。」

「確かに、マスコミ関係だっていそがし制服なんかで行こうものなら間違いないターゲツトにされかねない。」

「生徒をおもつての配慮でしょうね。」

『「これぐらいやって当然だ。だが、まだまだ爪が甘い。オレなら停学を受けず病院に行く方法がいくらでも思いつくぜ？」』

「彼の言葉が再び私の頭の中で発せられる。」

「そう、これぐらいで挫ける私ではない。」

「それに、病院にいるのは花音だって同じはず。」

「彼はともかく、気弱な花音が負わされた心身的な負担は計り知れない。」

「私が花音にできることなんてありはしないけど、少しでも元氣付けられたら——」

「そんな淡い期待を持つ。」

それに、彼には何度も助けてもらった恩もあるし、停学中にお見舞いに来てくれたこともある。

彼のお見舞いはついで、そう、ついでよ。

私の本命は花音。

だって先生は『花音のお見舞いに行つてはいけない』とは言っていないのだから。

.....

.....

家に帰りしばらく休んだ後、着替えてから市内で一番大きい病院へと足を運ぶ。

ニュースで聞いた限りの重症なら、彼が運ばれた病院はここ以外ありえない。

今日は何の仕事もなくてよかった。

手にはお見舞い用の花束を持ち、エントランスに立ち寄る。

花音のいる病室を聞き、周りに先生がいないことも一応確認しつつ向かう。

大きな病院だけあって、病室の数も半端ではないほど多い。

しばらくすると花音の名前が入った一般病棟の一室を見つけ、入室する。

花音の他にも数人、入院している人がいて軽く挨拶し最奥にある花音の元へ歩く。カーテンで囲われていて、外からは中の様子がわからない。

「花音、入るわね」

私はそう告げ、カーテンを捲る。

すると、花音はベットに横になりぐっすりと眠っているようだった。

何だか懐かしい花音の顔。

見た限りでは何もなさそうでホッと一安心する。

「松原さんのお見舞いですか？」

「……………ッ!？」

後ろから看護師さんに声をかけられる。

ビクツと肩を震わせたけれど、あくまで毅然と振る舞う。

「はい、彼女とは個人的な友人でして……………」

「そうですか、花咲川の生徒は見つけ次第伝えるようにと看護師長にも言われていたもので、すみません」

——危なかった。

どうやら学校側も本気で対処するらしい。

「あの、花音は………無事なんですか？」

「はい。目立った外傷はありませんし、近々退院すると思われれます。ただ、松原さんは間近で男の子の姿を見ているでしょうから精神的負荷がある可能性が高いです」

「そうですよね………」

「お見舞いの花束、よければお預かりしましょうか？目覚め次第お渡し致しますよ」
「わかりました。では、お願いします」

看護師さんに花束を渡し、そそくさと帰り支度をする。

「あ、あのっ！」

看護師さんが私を呼び止める。

「この花束の差出人を松原さんにお伝えないといけないので、よければ教えてください」

私は顔を上げ、柔かに答える。

「千聖、とだけ名乗っておきます。花音にもそうお伝えください」

私は一礼し、部屋を後にする。

向かう先は彼の元。

私は足早に彼の元へ向かう。



花音の病室を聞いた際も、スタッフさんから疑いの眼差しを向けられたから頼ることができない。

万が一バレたら本当に停学になってしまう。
この広い病院で患者を一人探すとなれば本当に大変で困る。

「何かお探しですか？」

十数分歩き続けたことで、ある看護師さんが声をかけてきた。
とても若く、胸には“研修生”と書き記されたバッジを身につけている。

「い、いえ。なんも……………」

ぎこちなく答えたけれど、研修生さんは特に追及することなく離れた。
もし次に同じ人に話しかけられたら面倒だ。
そう考えた私は逆に、私から話を続けた。

「そういえば、今日のニュースをご覧になりましたか？」

「今日の……………ニュース……………」

私の言葉に戸惑う研修生さん。

「とある倉庫で男子生徒が暴行された事件ですよ。その生徒がこの病院に入院しているんじゃないかってすごい噂になっているんですよ」

私はあくまで他人のふりをして話す。

そして携帯をカバンから取り出し、SNSをタップすると色んな人の吹きが掲載された画面を表示し看護師さんに見せる。

「ああー月島 奏くんのことですね！とても辛い事件でしたね……………少しだけ拝見しましたが、あれほどの傷を負わされて生きているなんてとても信じられません」

新人の研修生さんは口を滑らせる。

私が無関係の人間だと本気で思い込んでいるらしい。

ここから私はさらに追及する。

「少しお伺いしたいのですが、彼はどこにいますか？」

「そ、そのことは、お答えすることはできません。看護師長に止められておりますので……………」

「そういえば、彼を見たんですよね？ここに搬送された時に」

「あつ……………」

新人の研修生さんは口を手当て閉ざす。

どうやら失言したことに気がついたようだ。

「別に私は記者でもなければ、悪質な投稿をするものでもありません」

「ではあなたは一体……………」

疑いの目を向ける新人さんにニコリと笑いながらこう答える。

「彼の従兄弟です。叔母さまから彼がここに入院しているので見舞いに来てほしいと頼まれてきました」

「な、なんだ、そうだったんですか！そういうことならご案内いたします。どうぞこちらへ」

私は研修生さんの後をついていく。

子役時代から色んな役を演じてきた私にとって、人を騙す演技をすることなんて朝飯前。

少しだけしおらしくすれば簡単に信じてもらえる。

少し言い方は悪くなってしまったけれど今は仕方ない。

騙してしまったことはバレてしまった時に、また会った時に謝罪するでしょう。

エレベーターで階を上がり、数分も歩けば彼の元へはすぐに辿り着けた。

研修生さんは私を送り届けた後、すぐに持ち場へと戻る。

恐る恐る近づくと、三人の姿が目映る。

一人は学園長先生。

もう一人は長身の女性。

もう一人は………紗夜ちゃん？

どうして紗夜ちゃんがいるのか不思議だったけれど学校関係者がいる以上立ち寄ることはできない。

帰ろうとしたその時だった。

「……………白鷺、さん？」

紗夜ちゃんが突如声をかける。

学園長と女性もこちらに顔を向け、私は観念するように三人の元へ歩み寄った。

「学園長先生、すみません」

私は深々と頭を下げる。

停学になることは仕方ない、そう考えていたけれど学園長は私を咎めることなかった。

「気にすることはない。変な取材は受けなかったかい？」

「はい……………本当にすみませんでした」

私は再度頭を下げる

「アンタが白鷺千聖ちゃん？」

「はい、そうですが……………」

「ふーん」

長身の女性は顔を近づける。

私服姿のこの女性は、ヒールを履いてないのにも関わらず、この中で誰よりも背が高い。

目つきは鋭くどこか感じたことのある庄を感じる。

「白鷺くん、紹介しよう。彼女は月島 奏くんのお母様、なげきこ 渚さんだ」

「どーも初めまして。よろしく、千聖ちゃん」

やっぱりね、と心で呟き、差し伸べられた握手に応じる。

「初めまして。月島くんにはいつもお世話になっています」

「テレビで見るより断然美人だ。紗夜ちゃんといい、最近の若い子は整った顔の子が多くて羨ましいよ」

「いえ、お母様に比べたら私なんて……。とてもお綺麗で、こちらこそ羨ましい限りです」

「謙遜しちゃって、まあ！いい娘じゃん、気に入った！」

月島くんのお母様はケラケラと笑う。

実際、この女性もすごい美貌の持ち主。

肩にかかるぐらいの艶やかな金色の髪。

そして、まるでモデルのような整った顔、体つき——二十代だと言われても信じてしまいそうなほどだった。

「奏の見舞いに来てくれたんだろ？学校から止められてるのに、わざわざありがとね」

「い、いえ！そんな……」

「松原くんのお見舞いにも行つたんだろう？彼女はまだ眠っていたかい？」

「はい、花音を守ってくれた月島くんには本当に感謝しかありません」

「アイツが女の子をねえ……。未だに信じられないよ。入学前はあれだけ女嫌いだったのに、驚いたもんさ」

「入学してからも彼は変わらなかったよ。だが、ここにいる二人と松原くんのおかげ

「で彼は変わることができた」

「ああ、本当に感謝してるよ」

お母様は嬉しそうに話す。

彼の性格上、学校のことなんて話さないだろうし、自分の知らない月島くんの一面を聞いて喜んでいいる様子。

「引き止めて悪かったね。キミも月島くんのお見舞いにきたんだろう？よかったら一言声をかけてあげてくれないか？」

「はいっ……………」

三人に一礼してから彼の病室へと入る。

花音とは違う広々とした一人部屋。

この広い空間の奥、曇る空を映す窓のそばにあるベットの

ピツ、ピツ、と彼が生きていることを示す機械音だけがこの部屋に彼はいた。

ゆつくりとそこへ歩み寄る。

横たわる彼を見て驚愕する。

「月島くん……………」

頭には包帯を巻き、少し見える首元にも痣のようなものが見えた。毛布で隠れているからわからないけれど、その下にある体にも夥しい傷があるはず。とてもじゃないけど直視できない。

「静かだろ？アタシの息子」

私のそばに来た月島くんのお母様はなんだか寂しそうに話す。

「そうですね……………」

「家ではアタシと揉める事なんてしよつちゆうだし、学校でも迷惑ばかりかけてるだらうから——これほどおとなしくしてるなんて、信じられないよ」

お母様はそういうと、彼の顔に手を触れ目が潤う。

「月島くんには何度も助けられました。だからこそ、彼には元気になって帰ってきてほしいです」

「大丈夫だ。なんとたつてアタシの息子だからね」

「ニュースで報道されてたのですが……………その……………」

「こんなことを聞いてしまつて良いのか？」

「そう考え口が詰まる。」

「遠慮することはない。なんでも聞きな」

お母様は寛容に受け入れてくれた。

「それじゃあ……………彼にこのような怪我を負わせた犯人は……………う？」

「まだ逃走中らしい。目撃者によれば、犯人は複数いたそうだけど、まだその足取りも掴めてないんだと」

「そうですか……………」

「一体、奏が何をしたつていうんだろうね。まあ、あの子の事だし相当恨みがかつたん

だろう、じゃなきゃ、ここまでの傷を負わされることはない」

お母様の拳に力が入る。

突然と言って良い、自分の息子が訳もわからずこんな目に合えば誰だって怒るだろう。

私だって、花音が傷つけられて犯人に対してとてつもない怒りが込み上げているのだから。

「千聖ちゃん。一つ聞きたいんだけど、いいかな」

「はい、なんででしょうか？」

「いくら犯人が複数人とはいえ、奏がここまでボロボロにやられるはずがない。それに奏は決して非力じゃないから、一人ぐらいいは倒していてもおかしくないはずなんだ。けど、今回はそれがない。ずっと不思議で仕方なかったんだが……千聖ちゃんはどう思う？」

真剣な眼差しを向けるお母様。

けれど私には確信に迫れるほど、彼のことを知っているわけではない。

複数人VS月島くんなら彼の分が悪いのは明らか。

複数人といえど相手が何十人いてもおかしくない中、お母様は一人は倒すと言いつつた。

確かに彼の強さは異常と思う。

男の人の骨を簡単にへし折ることができるし、花音がいたとしてもうまく立ち回れるはず。

そんな状況の中、私が出した答えは――。

「彼に何かしら事情があったのかもしれない」

「事情？」

「例えば、花音を守るために身を挺したとか、脅されていたとか……それでも、彼があつさり負けることなんてあり得ないと思います」

「そうか、その通りだな。少し気が楽になったよ、ありがとう、千聖ちゃん」

「いえ、お役に立てて光栄です」

話し終えると、学園長先生から呼び出され家まで送ると言ってくれた。

お母様はもう少し残るといい、お礼を言った後紗夜ちゃんも含め三人で車に乗る。

また、お見舞いに来よう。
私はそう心に誓い病院を後にした。

第23輪 花の行方

「——はい、試験は終了です。回答用紙を後ろから回収し提出してください」

先生のその言葉にクラスメイトたちは安堵の声をあげ、学期末試験は無事に終わりを迎えた。

今回も特に悪いところは無し。

日頃の勉強の成果が存分に発揮された試験になった。

しかし、心の中ではどこか落ち着かない。

月島くと松原さんが何者かに襲われてから1週間。

犯人を逮捕したと言う報告もなければ、彼は一向に目覚める気配がない。

程なくして松原さんは目覚めたけれど、精神的不安から未だ入院したまま。

試験終了、学園長に二人のお見舞いの許可をもらい制服のまま病院へと向かう。

季節はとうとう冬を迎え、あれほど眩しかった陽の光は無く、空からは雪がしんしんと降り注ぐ。

マフラーや手袋が必須になり、コートも出さないといけないから何かと嵩張ってしま

う。

カイロだって買い足さなくてはいけない。

冬は四季の中で一番、衣替えが面倒な季節でもある。

手ぶらで行くのも気がひけるから、途中に花屋へ寄った。

外はこんなにも寒いのにこうやって咲き誇る花たちに口元が緩む。

繊細優美、けれど逞しい。

それが花というもの。

その一つ一つの花たちには意味が込められており、”花言葉”として体现されている。

代表的な花で例えるなら、チューリップは『愛の告白』、『誠実な愛』などの意味があり、冬の間に見られる花であるパンジーには『温順』、『慎ましい幸せ』などの意味がある。

見た目は似ているようでまるで違う。

それは私たち人間にも同じことが言える。

人種、性別、体格、思想——十人いれば十通り存在する。

しかしその中には、優雅に咲き誇る花たちを枯らす害薬のように、人に害をなすもの

も存在する。

月島くんを襲った犯人も言わばその害業。

荒くれながらも学園のために尽くしてくれた彼に危害を加えたことに、心底腹が立つている。

彼が全て正しいとは言わない。

けれど、単身丸腰で犯人たちの元へ向かった彼にここまでの仕打ちをするなんて、人間の所業じゃない。

私は犯人を絶対に、許さない。絶対に――。

……………私としたことが、少し熱くなってしまった。

テストがあつたせい或少しピリピリしていた気がする。

オレンジや黄色を中心とした花飾りを購入し、病院へと向かう。

この花たちは、彼を元気付けるための証。

何の助けもできなかつた私にできることなんて、これだけだから。

……………

.....

病院につき手続きを済ませると、すぐに彼の病室へと向かう。

すれ違う患者さんたちに挨拶をされては、小さい子供たちには『何しに来たの?』と尋ねられる。

『お見舞いです』と答えると子供たちは皆笑顔で『お姉さん、優しいね』と無邪気ながら褒めてくれる。

私なんて、全然――。

とても子供たちにはそんなことを言えず、『ありがとう』と返して別れる。

子供は純粹無垢で羨ましい。

今の私は、怒りや憎しみ、黒く汚れた感情が入り乱れ心の中を闇色に濁す。

今の私には、とても彼と顔を合わすことはできない。

日を改めようとしたその時――

「あれっ? 紗夜、ちゃん……?」

入院中の松原さんと遭遇した。

「松原さん。お久しぶりです」

唐突の出来事に驚いたけれど、私は毅然と振る舞う。

松原さんは入院着を着ていてそれも相まってから少し疲れたような様子だ。

「えへへ、久しぶりに花咲川の人と会えて嬉しいなあ」

「ずっと、お見舞いが禁止ですからね」

「じゃあ、何で紗夜ちゃんはここにいるの？」

「学園長に頼んで来させていただきました。松原さんは、何をしていたんですか？」

「えっと………奏くんの、お見舞いに………」

赤面しながら俯く松原さん。

奏くん、というのは月島くんのことの間違いないけれど、いつの間にそんな間柄になつたのか知らなかった。

「私も同じです。よければ一緒にいきましよう」
「うんっ！」

私たちは二人並んで病室へと歩み始める。

歩き方からも、ニユースで見た通り大きな怪我はなさそうだけれど、どこか顔つきは暗く見える。

先ほど見せた彼女の笑顔も、どこか無理をしているように見えたのは気のせいなのか？

言葉をかけようにも、何を話して良いかもわからない。

私が口を閉ざす中、松原さんは自ら声をかける。

「私ね、あの場に居ただけ……………何もしてあげられなかったの」

しんと静まったこの空気にはあまりに重く、暗い内容だった。

松原さんはさらに言葉を続ける。

「奏くんが暴力を振われる姿を遠くで見てただけ。苦しむ奏くんの姿を、ただ見るこ

としかできなかつたの」

「それは……………決して松原さんのせいでは——」

「ううん、違うの！私が何を言ったところで奏くんにとつては言い訳にしかならない。私がどれだけ傷つけられても、奏くんを助けるべきだった。でも、それができなかつたの……………」

ポロポロと涙を流す松原さん。

その震えた声も、後悔に溢れたものを感じさせる。

「松原さんは何も悪くありません。何もできなかつたのは、私も同じです」

「紗夜……………ちゃん？」

「いつもそうです。肝心な時にそばにいない、間が悪いとはよく言ったものです。結局最後は月島くんが全ての負担を背負うことばかり……………本当、自分自身に呆れてしまいます」

私なんて所詮無力。学園長からは月島くんをサポートするように頼まれているのに私は何もできていない。

寧ろこの前だつて、彼が駆けつけていかなかったら今頃私はどうなつていたのか。サポートする、と言いつつもいつもその足を引つ張つてゐるのは私自身。こんな沈んだ気持ちのまま彼に顔を合わせるなんて恥ずかしい。

「じゃあ……………お互い様、なんだね」

「松原さん？」

「私も紗夜ちゃんも、奏くんにお世話になつてゐるのに、何もしてあげられていない人同士……………」

「はい、その通りです」

「だからね、もし奏くんが目覚めたら誠心誠意謝ろう。そして、私たちも強くなろう」

松原さんから強い意志を感じた。

挫けている場合ではない、そう言わんばかりの決意に私も感化される。

「そうですね。私たちにできることをやりましょう」

「うんっ！早く目が覚めるといいね」

話している間に月島くんの病室の前までたどり着く。

数回ノックして部屋に入る。

窓は開けられ外から冷気が流れ込む。

「誰が来ていたのかしら？」

「ふええ………やっぱ寒いね」

「月島くん、お見舞いに——」

眠っているはずの彼に声をかけようと彼の元へ寄った時、驚愕の光景を目にする。

側にあつた機械が壊され、ベットも少量の血痕が残っていた。

何より——月島くんの姿がどこにも見当たらなかったのだ。



私たちはすぐさまナースコールを鳴らし、この異常事態を説明する。

看護師さんもすぐに月島くんを探すよう手配してくれ、学校、月島くんのお母様にも知らせてくれた。

「なんでこんなことに……………!?!」

「ど、どこにいつちやったの……………?」

困惑する私たち。

彼と関わるとこんなことばかりだ。

「とにかく、私は思い当たるところを探してみます。松原さんはここにいてください」

「ううん、私も探しに行く!」

「まだあなたは入院中の患者です。無理をしてはいけません!」

強く引き留めたけれど、松原さんが決して折れることはない。

「さつき話したよね。今行かないと、絶対後悔すると思う。だから、私も行くよ」

揺るがないその言葉を無碍にすることはできない。

でも、ここで無理をして松原さんに何かあつたら一大事だ。

「わかりました。ですが、単独行動は禁止です。看護師さん、もしくは学校の先生方と一緒に探してください。いいですね？」

「うんつ、わかった！着替えて、待ってるね」

松原さんにそう告げ、見舞い用の花を置いた後私は病院を出る。

彼はきつと目覚めたばかりな上に、あれほどの怪我を負っている。

そう遠くに行くことはないはずだ。

あまり期待できないけれど、彼の携帯に電話をかけた。

——やはり繋がらない。

このあと私は、思いつく限りの場所を徹底的に探し回った。

学校、彼の自宅、駅、商店街………：どれだけ探しても彼の足取りひとつ掴むことはできない。

まさか、彼を襲った犯人たちが攫ったのか？

そんな嫌な考えが頭をよぎる。

もしそのようなことが起きたのならば、今度こそ彼の命の保証はない。

私は必死に走り回った。

時間はあつという間に過ぎ、夕方を迎える。

それは既に夕日が落ち、夜になろうとしていた。

冷えていた気温がさらに落ちる。

息切れた口からは白い息が出て、その寒さを物語っていた。

(月島くん、あなたは今どこにいるの?)

どれだけ心配しても彼にこの声は届くことはない。

気がつけば私は病院へと戻っていた。

まさかとは思ったけれど、すでに戻っているのでは? つと淡い期待を寄せる。

彼のいた病室へと足を運んだけれど、やはり彼の姿はどこにも見当たらない。

この広い部屋に残されたのは荒らされたベットと壊れた機械、そして私の持ってきた見舞いの花飾りだけ。

長時間の搜索で疲れた私はベットのそばにあつた丸椅子に腰掛ける。

「はあ……………」

誰もいない部屋で一人ため息をつき俯いていると、数回のノックとともに松原さんが入ってきた。

「あつ！紗夜ちゃん」

「松原さん……………すみません、月島くんを見つけることはできませんでした」

病院着から私服に着替えた松原さんも彼を見つけることはできなかつたと言う。

松原さんは私の隣に腰掛けた。

「本当に、どこに行つたんだらうね。奏くん」

「思い当たるところは全て見てきました……………私自身、彼のことを全て知っているわけではありません。ひよつとしたら彼しか知らない、そんな場所があるかもしれないね」

もしそうだとしたらお手上げだ。

こうなったらもう、警察の方々に頼るしかない。

「あのね、紗夜ちゃん。学校の屋上って見た？」

「屋上？ いえ、見てませんけど……………」

「奏くんとはね、よく屋上で話してたの。だから、そこにいるはずだと思って行ってみたけど……………そう簡単には見つからなかったの」

「なら、この病院の屋上にいても不思議ではないですね」

何も考えず発したその言葉だったけれど、『もしかしたら！』と言う考えに至る。

「紗夜ちゃん！」

「ええ、行ってみましょう！」

私たちは足早に屋上へと向かう。

……………

.....

エレベーターで屋上へと駆け上がり、あたりを見渡す。

大きな柵に仕切られたこのスペースには人一人おらず、大きなベンチが数個あるだけ。

やはりそう簡単にいかないようだ。

「いませんね.....」

ため息まじりにそう呟く。

しかし松原さんは別の方向へと目を向けている。

屋上の端にある鉄梯子。

このスペースのほかに、まだ上に道があるらしい。

「奏くん.....!」

松原さんはその鉄梯子に手をかけると、一つ、また一つとテンポ良く登っていく。彼女には何か確信があるのだろう。

一目散に登っていく。

私も彼女の後を追いつつ、ゆっくりと登る。

登り切ると、屋上には満たないものの僅かなスペースがあり、寝転がる人影が目に見える。

それが誰か、私たちはすぐにわかった。

「奏くん!!」

松原さんが大きな声で呼びかける。

その人影はゆつたりと起き上がり、私たちに目を向ける。

「……………ああ。松原か」

気怠そうに答える月島くん。

私たちがずっと探していた彼は、一番間近の病院にいたのだ。

灯台下暗し、とはよく言ったものだど実感させられる。
松原さんは一目散に彼の元へと駆け寄り、抱きつく。

「おおっ!? な、なんだ!」

「奏くん……………よかった……………」

涙ながらに喜ぶ松原さん。

彼に何事もなくて、私も一安心した。

「月島くん、私もいますよ」

「げっ! 氷川」

「げっ! てなんですか!!」

「松原さんと明らかに反応が違って怒る。」

薄暗くて良くは見えないけれど、体には夥しいほどの包帯が巻かれ、右目には縦に切り傷を残していた。

「ずっと……探したんだよ……」

「おいおい、泣くなつて。あと、これでも怪我人だからあんま力入れるな？なつ？」
「だって……」

松原さんは月島くんから離れようとしなない。

よほど心配したんだろう。

彼は、そんな彼女を無理やり引き剥がし隣に座らせる。

私も彼の横に座り、事情を聞く。

「月島くん、あなたが何故ここにいるのか聞かせてもらってもいいですか？」

「何故って、なんとなくなんだが？」

「なんとなくなつて……一体どれほどの人があなたを探し回ったと思ってるんですか！」

「ああ、悪かったよ。ホントツ、はんせーしてるから」

「い、いえ……私も、少し言い過ぎました……すみません」

彼は決して頭は下げなかったけれど言葉では反省してる風を装う。

「しっかし、オレが夢の中にいる間にすっかり冷え込んじゃったな」

「寒い？よかつたら私の上着貸そうか？」

「気にすんな。こう見えて暑いのも寒いのにも耐性があるからよ」

「ねえ、月島くん」

「なんだ？」

「色々聞きたいことが山積みですが………一つだけ答えてください」

「おう。手短にな」

「その………傷でどうやってここまで来れたのですか？それからここでいったい何をしていたんですか？」

「ひとつじゃねえのかよ。ったく」

彼のツツコミの後、ハッと気がつく。

謝ろうとしたけれど、彼は考える間もなく答える。

「病室、窓が空いてたろ？そつからよじ登ってきた。正面からだど看護師連中に見つかる可能性があったからよ」

「なるほど、だから窓が——って、よじ登った!？」

「おお、前に白鷺の見舞いに行つた時でもできたからいけると思つてな。しつかし、まだ目覚めたばつかだから途中疲れてやばかつたぜ」

「も、もうそんな危ないことしないでね……………?」

「ああ、善処する」

彼が看護師さんたちに見つからず屋上に来れて理由はわかつた。けれど私が知りたいのもう一つの方だ。

「ここにきた理由か……………ホントツ、大した理由はねえけどいいのか」

「はい、教えてください」

「病院のベツトはどうも落ち着かなかつた。ただ、それだけだ」

「本当に大した理由じゃありませんね……………」

「だから言つたろ? オマエは真面目に考えすぎなんだよ」

「あなたが適當すぎるだけです!!」

「クククツ、ハハハハハハ!」

なんだかこのやり取りも懐かしい。

彼の笑いにつられ松原さんも笑い、私も笑みが溢れる。

この慌ただしかった一日も幕を閉じる。

第24輪 華の訪れ／花の戯れ

「はあ、ダリイ……………」

晴天の青空の下、病院の屋上で寝転びため息まじりに呟く。

もう入院生活も飽きた。

傷だつて塞ぎきつてるし、違和感もない。

なのに病院側は『まだ心配だから』だとか『もう少し検査が必要だから』とか抜かしやがる。

おふくろも、『入院ついでに悪いところ全部直してもらえ、特に頭の中な！』つて笑いながら言ってきた。

もう明らかに息子にかける言葉じゃないよな。

オレの身体の状態はオレが一番わかってる。

だからこそ一刻も早く退院したいんだが……………それを奴らは許さない。

今頃、花咲川の連中は終業式を受けていることだろう。

面倒な式にでなくていいのはラッキーだが、入院し続けるのと天秤にかけるなら、オレは断然前者を選ぶ。

それほどにオレは退屈してるのだ。

「誰でもいいから相手になってくれよ」

オレの嘆きに誰も答え——

「私でよければお話聞かれますよ？」

「……………ッ!？」

突如顔を表したこの女。

白鷺千聖は、ドツキリ大成功!と言わんばかりに腹を抱えて笑う。

確か、前にもこんなことあった。

コイツが入院してる時、病院の壁をよじ登って窓から侵入して驚かせたことがあった。

数ヶ月たった今。

こんな形で仕返しをされた。

実に屈辱的。一発分殴ってやろうか。

「何でオマエがここにいる？まさか、式をサボったつて言うんじやねエよな？」

「あなたと一緒にしないでほしいわね。私はドラマの撮影前にお見舞いにきただけよ？」

「はいはい、わざわざどーも」

「ふふっ、素直じゃないんだから」

「うっせえ」

白鷺は揶揄うように話しオレの隣に座る。

腹が立つのは確かだが、いないよりマシだ。

コイツの戯れにも少しばかり付き合ってやろう。

「それで、なんでオレがここにいることがわかった？」

「看護師さんに聞いたのよ。あなたはよくここで日向ぼっこをしているって」

「日向ぼっこ、随分可愛らしい言い方じゃねエか」

「他に何かあるの？」

「光合成」

「……………植物か何かかしら」

白鷺は呆れ顔をする。

「と、言うのはまあ冗談だ。実際のところ、病院のベットは落ちつかねエ。ただ、それだけだ」

「落ち着かないって……………あなた仮にも患者でしよう？少しは安静にすることも覚えたらどうかしら」

「安静も何も、オレはもう完治してるんだ。今更リハビリなんて———!?!」

オレがそう話していると、白鷺は包帯で巻かれた左腕をギュツと握ってきた。腕に激痛が走り、思わずその手を振り解く。

「ほらっ、やっぱり」

「テメエ……………ツ!!」

「痩せ我慢する方がカッコ悪いわよ? 全く、男の子ってどうして見栄を張りたがるのかしら」

「傷は塞がってんだから十分だが。これ以上入院なんてしてたら余計身体が悪くなるわ、クソツ」

「二つ気になっていたのだけれど、その右目……………ちゃんときいてるの?」

白鷺は神妙な面持ちで右目を見る。

「ああ? くつきりと見えるぜ? 見たくもねエオマエの顔面がな」

「眼球には傷はなかったの?」

「直前で頭を引いて目も閉じた。北谷は失明させたと勘違いしてるだろうが、まあ、あのまま斬られてたらマズかったかもな」

「さすが月島くんね」

「よせよ。1週間も寝たきりだった奴なんてたかが知れてるだろ」

「仕方ないじゃない。これほどの傷を負ったのだから」

「オレが目覚めなかったのは傷のせいじゃねエ」

「じゃあ、なんで……………?」

不思議そうに首を傾げる白鷺。

わかりやすく説明するために、左腕に巻かれた包帯を取り、傷口を見せながら答える。

「 ” 流した血の量 ” だ」

「血の、量?」

傷口に顔を逸らすも、少しづつではあるがちゃんと目にするようになる。

「オレの体には矢が四本刺さっていた。それにバットやら鉄パイプで頭を殴られ、口から出したものも含めると、1Lはゆうに超えていたらしい。なんせ、オレの足元が血溜まりになるほどだったからな」

「なるほど、人は4く5Lほどの血液があるとされている。そのうちの1Lが外に出たとすれば、命の危機に陥っておかしくない」

「そう。実際どれだけ殴られようが、臓器を傷つけない限りオレの体はどうともなる。オレ自身これほど血を流したのは初めてだったからな。正直かなりヤバかった」

「そう……………無敵と思われたあなたでも、死にそうになることはあるのね」

「アホか。オレだつて人間だ。痛エもんは痛エし、刃物で刺されたら死ぬ一般人だ」

「うふつ、臓器さえ守れば大丈夫なあなたを世間は一般人と呼ぶのかしら？」

「世の中には、腕にナイフが刺さつたまま犯人を薙ぎ倒す高校生の空手家や、土手つ腹をぶち抜かれても戦い続ける爺さんもいる。オレなんて、所詮はただの高校生だ」

「……………それは全部 ”アニメ” の話でしょう？」

「ハッ、確かにその通りだ」

オレはニカつと笑う。

白鷺はまたしても呆れた顔をしてため息をついた。

この時オレの腹が鳴り、寝返りをしたら見える時計に目をやる。

今の時刻は十二時ジャスト。

味気ない病院食が運ばれる時間になった。

オレは立ち上がり、鉄梯子に向かおうとしたら白鷺がオレの手を掴む。

「月島くん、もうすぐ私も行かないといけないから、最後に一つだけ、聞かせて」

「なんだ？」

「あなたは一体、何を考えているの？」

抽象的すぎる言葉に意味がわからず眉を顰めると、白鷺は今日の中で一番真面目な顔つきでオレを見ていた。

「何が言いてえ？」

「先週、あなたのお母様とお話しさせてもらったの。私たちは今回の事件に違和感を感じたの」

「違和感も何も、多対一なんて無傷で生還できるわけねエだろ。素手の喧嘩じゃなかったんだ。わかるだろ？」

「いいえ。たとえ大人数でも、あなたは一人ぐらい倒していてもおかしくないほどの強さを持っている。でも、警察は誰も捕まえてないと言ったの。おかしいと思わない？これじゃあ、あなたがわざと一方的にやられたとなってしまう」

白鷺の推理にオレは口を閉ざす。

最後まで聞きたい、そう思ったからだ。

「ねえ、教えてちょうだい。あなたは一体何を考えてこれからどうする気なの？」

いつもに増して真剣な白鷺。

そんな奴にふざけて返すのは失礼だと思ったオレは抱え込んでいたことを全てぶちまける。

「オレが中学でしたことは知ってるよな？」

「え、ええ」

「北谷はそれで癒えることのない一生の傷を負った。だから、奴が復讐するのは当然のことだと思ったんだ。だから、オレは丸腰でそれを受けた。まあ、松原を使ったのは流石にブチ切れたけどな」

「でもそれって——」

「まあ最後まででは聞けよ」

「……………」

オレの言葉に白鷺は黙る。

「アイツがどんなに汚ねエ手を使っても、オレが咎める理由はねエ。まして、女であるアイツがオレに勝てる可能性なんて一ミリもないからな。だから取り巻きを呼んだんだろう。一人一人がオレに倒されない程度の実力を持った奴を………だがな!!」

オレの握り拳に力が入る。

「取り巻きたちから恨みをつた記憶は一つたりともねエ!」

北谷にやられる分は仕方ない、そう割り切ったあの倉庫での事件だったが、奴はオレに縁もゆかりもない取り巻き、第三者を連れてきた。

そしてそいつらは奴の命令の元に動きオレを殴り、射り、斬った。

おかしいと思わないか？

何故関係のないやつがでしゃばってオレを攻撃した？

これはオレと北谷、二人だけの問題のはずだり

取り巻きを読んだ北谷もそうだが、それに賛同したアイツらは絶対許さん。

これがオレの ” 今 ” の考えだ。

「関係ねエ取り巻きたちをぶっ飛ばして、北谷の報復を受けようと思っていたが、流石に矢が数箇所も刺さったら動けなかった。オレがこの怪我を負わされたのはそれが原因だ」

「けれど、その人には何をされても抵抗しようとしなかったんでしよう?」

「ああ。その通りだ」

「ましてやナイフを持っていた………あなたはあの場で殺されていたとしてもおかしくなかったのよ!」

白鷺の言葉に力がこもる。

確かに奴の言う通り、アイツが心臓を刺してもすればオレはここにはいない。

だが、あの女の考えてることはオレにでもわかった。

それだけで復讐が終わるわけない、と。

オレを殺すのは簡単だ。

手に持つてるナイフを、オレの心臓に向けて、前に、突き出す。

幼稚園児のクソガキでもわかる単純作業だ。

だが、それが目的ならチャンスはいくらでもあったはずだ。

下手に呼び出しなんてせず、校舎から出てきたオレを不意打ちでもすれば簡単に済む

話。

ここまで手の込んだことをするなら、奴にも何か考えがあると察知すべきだ。だが、激昂した今の白鷺にそこまで考えるのは不可能だろう。オレは白鷺を宥めるように頭に手を置く。

「気にすんなよ。今オレはこうやって生きてるんだから別にいいだろう？」

「あなたね!？」

「オマエがいくらここでキレたところで何も変わんねエよ。その思いやる気持ちだけで十分だ」

急に静かになり俯く白鷺にオレは殆どかけたことのない言葉を送る。

「心配してくれてサンキューな」

ごく普通の感謝の言葉。

だが、白鷺に対しては全くと言っていいほど使ってこなかっただけに、効果的面らしい。

赤く染め上がった顔は、耳までその範囲を広げる。

「ほらっ、今から仕事があるんだろ？遅れず行けよ。オレの責任みたいになつたら溜まったもんじやないからな。アバよっ！」

オレは高速で鉄梯子を降り、昼飯を食いに部屋に戻る。

「——バーカ」



昼飯を食い終わったオレは看護師に許可を取る。

当然却下されたわけだが、伝えるだけ伝えたし別にいいだろう。
止めに入る看護師たちを振り切り、オレは病院の外へと飛び出した。

——
久々に踏みしめるコンクリート。

しゃばの空気は美味しい、と出所したヤクザたちは口にするけどオレには今、それと同じ感情が芽生えている。

これほど大地を踏みしめて歩くのは、歩けるようになったばかりのガキ以来か。外に出るや否や、オレはある場所へと直行する。

携帯に記された、とある高架下。

暗く静まりかえつてこの場所に屯する影を見つけ、足音をたてず近づき、一番近い距離にいた男の後頭部に思い切り蹴りを入れる。

ドゴツ！、と鈍い音をあげると同時に顔面から床に叩きつけた。

頭から足を退けると、男はピクリとも動かなくなり、顔面から大量の血が流れる。唐突のオレの登場に、たむろしていた男たちは一斉に後退りオレとの距離を取る。オレの顔を見た男たちは驚愕した表情を浮かべた。

「よお、会いたかったぜ……………！」

眉間に青筋を浮かべ、怒りを込めた笑顔に全員が怯む。

もちろんオレはストレス発散のためにこんなことをしているわけではない。

目的はただ一つ――。

復讐だ。

「な、何故それほどの傷を負いながら生きてるんだ!？」

一人の男が声を上げる。

確か……………そう、木刀でオレをぶん殴った奴だ。

驚くそいつにオレは優しく応答する。

「何故って、殺してもねエのに、オレが死ぬわけねエだろ？」

訳がわからないと言った様子の一団。

オレは、顔面血まみれになった男の頭を掴み晒す。

「コイツ、スタンガンを持ってた奴だよな？ どうだ？ オレもこんな感じで血を吹いていたか？」

何も言わない一同に腹が立ち、男の頭を離すと脇腹を思い切り蹴り飛ばし、まるでサッカーボールのように宙へ舞い、五メートルほどの距離を数回バウンドしたのち静止する。

「さあて、次はどいつだ？」

指をボキボキと鳴らし威嚇する。

震え上がる一同に、一人の男が前に出た。

「よくも……………よくもおおおお!!」

怒るこの男にも見覚えがある。

鉄パイプでオレの足に傷を負わせた男だ。

雄叫びを上げながら拳を振りかざしオレの顔面目掛けて振り下ろす。

二度、三度、何度も繰り返すがオレは全て一歩ずつ後退し顔を傾げるだけで躲して、息が切れたところを狙い顔面に右ストレットを放つ。

鼻からド派手に血飛沫をあげ、後ろにいた二人もろとも壁にめり込ませた。

「まったく、武器がなかったらまともな喧嘩ができねエのか？」

殴った際に付着した血を払い、再度指を鳴らす。

すると、一人の男が先頭に立った。

「二度、話し合わないか？」

「ああ？」

男は腕を横に伸ばし停止させる素振りを見せる。

応じるつもりはさらさらなかったが、コイツの顔を見てその考えが一変した。

オレの体をクロスボウで狙撃した奴だ。

「キミには聞きたいことがいくつもある。何もしないから、そこに座ってくれないか

「？」

優等生ぶつた話し方をする男に素直に従い、腰をかけようと――

「ハッ、嫌いやなこつた」

オレはその提案を拒否し、足元に転がっていた石を拾い、立ち上がろうとする男たち目掛けて放り投げた。

広く開いた額に綺麗にヒットし、ピクリとも動かなくなる。

鉄パイプの男を殴った時に一緒に吹き飛ばした奴らだったが、どうやら爪が甘かったらしい。

腹を押さえながらもまだ立とうとする男たちを今度はしつかり戦闘不能に陥らせた。

「き、キサマ……………！」

クロスボウの男は鋭い目でオレを睨み、拳に力を入れる。
いい子ぶつっていても所詮は不良の端くれ。

頭に血を登らせることなんて実に容易い。

「こつちは単独、そつちは複数。話し合うには少し人数調整がおかしいと思つてな」
「それにしても——」

「卑劣、とでも言うつもりか？」

オレが睨むと、男は口を閉ざす。

「いつオマエがオレより偉くなつた？身の程を弁えろよ。テメエの指図を受けるのは癪だからこつちから命令する——座れ」

残された四人は顔を合わせ、観念するかのようにその場に座る。
オレも奴らに続き腰を下ろした。

「話し合う、とオマエは言ったが………オレの何が聞きたい？」

クロスボウの男に指を刺す。

「……………まずは、キミ——」

「言っておくが言葉には気をつけろよ。こちとらオマエたちと話す間もなく滅多うちにされたんだ。本来、あの場で全員血まみれにする権利は俺にあったが……………それだと意味がねエ。情けをかけてやるから、意味のある単語を文にして説明しろよ？ さあ、話せよ」

「……………まずは、キミがどうやってここに辿り着いたのか教えてくれ」

「そうだなあ、警察でも見つけられなかったオマエらを病院着のオレがどうやって見つけたか……………これを見たほうがわかりやすいか？」

オレはズボンのポケットから携帯を取り出し、チャット画面を見せる。

そこには、今コイツらが潜伏している現在地を表した写真と共に、搜索し続けてくれた中学の友達との会話ログが記されていた。

「これは……………？」

「見たらわかるだろ？ LONEだ。オレの頼れる仲間の、な」

「なっ!?! 一体、どうやって……………!」

情報屋

「やり方は知らねエよ。だがコイツは、オレにとって大切な、警察たちで言うところの”S”^{情報屋} ってやつだ。相当優秀だぜ？ 転校した中学で苦楽を共にしたからつて理由だけで手伝つてくれる、情に厚い野郎だ」

現に、オレが連絡をよこすと一日とかからずに見つけやがった。

今はごく普通の公立高校に通つてゐるらしいが、将来は ” 探偵 ” というピッタリな職があることを教えてやろう。

「話は終わりだ。他に聞きたいことは？」

「……………キミはないのかい？」

「はあ？ オレが？」

「ああ。この際だ、互いに腹を割つて話そうじゃないか」

「テメエらモブに聞きたいことなんてねエよ。話が終われば全員血祭りに上げる未来に変わりはないからよ」

オレがニカつと笑うと全員が肩をピクつかせた。

クロスボウの男はそれでも食い下がり、立ち上がる。

「モブなんて失礼な！ボクには」進藤^{しんどう}　　と言う名前があるんだ！」

「ほー、ならばしんどーくん。今すぐ沈められたくなかつたら心を落ち着かせて、その場に座れ。誰が立っていいと言った？身の程を弁えろ」

「い、いったい何様——」

更に言葉が続けようとする進藤の鳩尾目掛けて右フックをかますと、その痛みに耐えかね嘔吐する。

「二度は言わん。座れ、今すぐに」

何度も咳き込み、呻き声をあげる進藤。

結構力を入れたから、まあこの反応には納得する。

オレが膝を立て腰を下ろした。

「ガハッ……………オオオオツ……………！」

未だ落ち着かない様子でゲロを吐く。

「話にならないな。誰か代役しろ」

「なら、オレが……………」

進藤の後ろに座っていた北谷の取り巻きの一人、木刀を使っていた男が名乗り出た。

「オレは暴力だけで解決しようとする野蛮な奴は嫌いだ。何せ、オレは結構お喋りだからな。相手が冷静で、オレと言葉を交わせる利口な奴なら話し合いだけで解決したいと思っっているんだ。さあ、なんでも答えてやるぞ」

「じゃあ、オマエの目的は……………」

「ここにいる全員を血祭りに上げること」

「そ、そんなサラツと!?!」

「他にはねエの? なかつたらもう話し合いとやらはお開きにするが?」

オレが立ち上がろうとすると、息を切らしながら進藤がこちらに視線を飛ばす。

「なんだ、何か言いたいことがあるなら言ってみろ」

「キ……………キサマ、は……………許さない……………!」

「そうかい。そのしわくちやなブツサイクな顔で言われても哀れみしかわかねえよ」

嘲笑うオレに鬼の形相で睨む進藤。

ここでオレはフツとある考えがよぎる。

「……………あつ!一つ聞きたいことを思いついたから、しんどー、オマエに尋ねよう」

オレはゆつたりと立ち上がり、尻についた埃を払い一呼吸置いた後こう告げる。

「過去、オレはオマエらに恨みをかうようなことをしたか?」

オレの問いに答えようとしない進藤。

——がつ、答えない代わりに、不敵な笑い声を上げ始めた。

なんだ?痛みで正気を失ったか?

血眼になる進藤は笑みを浮かべながら告げた。

「キミがボクらに何をしたか？別に何も？」

「ほお、なら北谷に唆されたからやったというのか？」

「その通り！別に彼女に特別な感情はない。ただ、むしろくしゃしてたんだ」

ようはストレス発散のためにオレは痛めつけられたってことか。

OK。もう遠慮する必要はなさそうだ。

オレが間合いを詰めようとする、進藤はさらに言葉を続けた。

「実はここにいるボクたち全員、部活動ではエキスパートだったんだ！けれど、高校でその道を断られた……………何故だかわかるかい？」

妙にハイテンションな口調に腹が立つがオレは冷静に返す。

「わからん。是非教えてもらおうか」

「——生徒会の介入さ」

「生徒会？」

「そう、奴らは人気がありイケメンたちが揃う部活動にのみ部費を渡し、ボクたちみたいなパツとしない、日陰者の所属する部活には何の手当もよこさなかつた。いくらその競技において実力があつてもね」

「酷い独裁政権だな」

「ボクたちも必死に抗議した。だけど、彼らは何と言つたか知つてるかい？『全国にも出たことない、地元でだけ有名なキミたちに投資する価値はない』とね。次の日には抗議しに行つた部活は廃部されたよ。生徒会だけじゃない、生徒会によつて唆された教師たちの手によつてね!!」

これが本当だとするのならば、その学校が間違つてゐるのは明らかだろう。しかし、それとオレにどう関係があるかまつたくわからない。

引き続きオレはコイツと話をする。

「それで、泣き寝入りしたつてののか？」

「部活を失つたボクたちなんて、その辺に転がる石同然だ！顔もブサイクだし、女子にも相手にされない………もはや、学校に在籍するのも烏滯がましい汚点だ！そういうキミ、生徒会に所属してゐるんだろ？風紀委員長だつて？」

「へえ、知つてるのか。その通りだ」

「相当な権力を持つているよね……………どうだい？ 予算会議だって、キミが一声掛ければどうとでもなるんじゃないのかい？ 喧嘩も強いし、顔もいいし、背も高い！ 逆らう人間なんていやしないだろう？」

「オレにそんな権限なんてねえよ、バーカ。どこのアニメの世界だよ」

「ボクはそんな横暴な生徒会を許さない。そして、女にチャホヤされるキミも……………絶対に対に許さない!!」

コイツがオレに妙に突つかかってくる原因はよくわかった。

一つは生徒会への復讐心。

理不尽極まりない軍団、”生徒会”と名のつくものを一切許せないと口ぶりで。

もう一つは己の容姿の醜さ。

正直どうでもいいとは思ったが、コイツにとつては重要事項らしい。どこから聞きつけたか、オレはイケメン認定されているらしい。

おまけに女子に好かれていると言う。あの三人以外とまともな話をしたことないオレがだ。

全く、呆れるほどの”逆恨み”だ。

そんなことが理由で北谷に手を貸したのか………ホントツ、単純な奴ら。

「許されなくて結構。顔も性格もブサイクなテメエに言われても怖くもなんともねエ。オマエらも同じ理由か？」

オレがそう問いかけると、各々が頷く。
類は友を呼ぶ、とはまさにこのことだな。

「どうせテメエらは、廃部になったから『はいっ、そうですか』で終わらせたんだろ？
ホントバカな連中」

「ば、バカっ!!」
「どうして手を考えなかったんだ？どうしてそれを簡単に受け入れた？どうして生徒会に反抗しなかったんだ!!」

「ええい！うるさい!!それ以上何も——言うなああああ!!!」
進藤が突如奇声を発する。

顔は怒りで真っ赤になり、息切れはしているものの、先ほどまでの痛みはすっかり消えて無くなっている様子だ。

「それにな、オマエたちがオレに対して何か恨みでもあれば仕方ねエと思つてた。北谷のようにな。だが、テメエの理由わけを聞いてがっかりした。その程度でオレを手にかけようとしたわけだな？なあ!？」

オレの言葉に誰も言い返さない。

「じゃあ、オレが今からオマエたちを血祭りに上げてもいいというわけだ。やられっぱなしはやっぱ性に合わねエ……………北谷にやられた分もテメエらに倍で返してやるよ。こう言うのを、なんていうか知ってるか——?？」

オレは後ろにいた取り巻きとの距離を一気に縮め、顎をバク宙の要領で蹴り上げた後、右左に拳を放ち、最後は浮いた男のその体を両手を合わせて地面に叩きつけた。一瞬の出来事で困惑する残りの男たち。返り血を浴びたその顔で睨み教える。

「 ” 八つ当たり ” だ 」

残るは三人。

メリケンサック男、木刀男、そして進藤だ。

三人が固まりオレから距離を取ると、数メートル離れたところに置いてあつた武器をそれぞれが手にする。

どうやら、武器さえ持てばオレに勝てるかと踏んだらしい。

奴らは不敵な笑みを浮かべる。

「全く、不良の風上にもおけん連中だ」

「へへへッ、手負いのあんたじゃあ、おれたちに勝つことなんて不可能なんだよ!!」

「まずはオレからだ! じっくりぜえええ!!」

メリケンサック男が突進してきた。

振り上げる右拳を受け止め、思い切り握りしめる。

男は悲鳴をあげ、握るオレの拳に手を当て必死に引き剥がそうとする。

もちろんオレは手を緩めることなく握り続け、挙げ句の果てにはメリケンサックが変形し、奴の手にめり込んだ。

「ギャアアアアア!!」

痛みにもがくメリケンサック男

しかし、たまたまそばに転がっていた鉄製バットを拾い上げ、大きく振りかぶった。

それをオレは仰反るようになしてかわし、鉄バットを横取りすると、膝を使つて一瞬で折り曲げた。

そのまま宙に回転をかけて放り、驚くメリケンサック男の頭上にヒットさせる。

「さあて、どーちーらーにーしーよーおーかーなっ!」

二人を指差し判断を神に委ねる。

最終的には木刀男の方へ指が止まり、次にのしてやる相手が決まった。

返り血で染まる服が、ダッシュすると共に靡く。

男は木刀をオレに向けると、面を狙い振り下ろした。

迫る木刀に向かって回し蹴りを見舞い真つ二つにへし折る。

その勢いのまま男の顎にアッパーカットしてKOする。

「ラストはオマエか」

最後に残った振動を前に、再び腰を低く構えると奴もそうに呼応し、矢を射る構えをする。

「どうやら、またオレに向かって放つらしい。」

「い、いくらキミでもクロスボウの矢の速さには対応できないだろう!？」

「そうか。んじゃ試すか？」

オレが手招きし矢を誘う。

「どうした? ビビってできねえってか?」

そう挑発すると、進藤は意に介さず矢を放つ。

一直線にオレへと放たれたその矢を半身になって躲し、胴の部分を体を回転させながら掴んだ。

「に、人間技じゃないだろ……………!？」

「油断さえしなけりや余裕でできる。まだ矢は残ってるだろ？ほらっ、どんどん放てよ」

オレはゆっくりと進藤に向かって歩き出す。

やけになった進藤はもう一発オレに向かって矢を放った。

当然オレは躲してへし折り、また放たれては躲してへし折る。

そんなやりとりが数度行われたら持つていた矢が全て無くなった。

鬼の形相で近づくとオレにビビり散らす進藤。

腰を抜き倒れたやつ顔に足を乗せ、軽く踏みつける。

「オマエで最後だ。何か言い残す言葉はあるか？」

オレの問いかけに答えられず頭が真っ白になつてる様子の進藤。

奴の回答は、”拒絶” ということでもいいだろう。

オレは虫けらを踏み潰す感覚で奴の顔面に圧をかけた。

白目を剥きもう抵抗はしなさそうだと判断したオレは足を退け、進藤の服から携帯を盗るとある人物に着信を入れる。

『もしもし？ちゃんと逃げれてるかしら？』

声の主は北谷 桃子。

事件を起こした張本人だ。

『よお、元気そうじゃねえか』

オレの声に一瞬驚いたようだったが、すぐに毅然とした態度に戻る。

『ウフフツ、あなたこそ、死に損ないのクセして随分元気そうね』

『ああ、元気すぎてついオマエの大事な取り巻きたちを壊しちまった。それに、この右目が疼いていたのは、オマエと関わりがあった奴だったからか？』

『……………別に壊れても構わないわ。どうせ、いらぬ人間なんだもの。警察にでも

病院にでも連れて行けばどうかしら？」

『ハツ、強がるなよ。時期にオマエも捕まるだろうよ』

『残念だけど、私は絶対に捕まらないわ。罪は全部そいつらが被つてくれるから』

ホントツ、コイツは人を人とも思わないゲス野郎だ。

取り巻きだった男たちに同情する。

『言っておくが、これでアイコだ。もうお互い恨みっこはなしだぜ？』

『ええ、構わないわ。次会う時は——』

『ああ。次会う時は——』

『『殺すつもりでかかってきな』』

そう言い捨て電話を切る。

ふう、と一息つくくと、左腕に激痛が走る。

「ツ痛エテな………やっぱ、無理すべきじゃなかったか」

オレは再度電話を鳴らし、救急車を要請した。
これでオレの八つ当たりは終了。

残るは女王のクビ、ただ一つだ。

第25輪 降り積もる雪花

窓を覗けば外は暗く静まり返り、テレビに目をやるとお笑い芸人たちが棒で尻をしばかれています。

今の時刻は正月を迎えた深夜0時。

世間は年越しを田舎で迎えようと帰省している頃だろうが、月島家は例外だ。

何せ、おふくろのおふくろや親父、オレにとつての爺ちゃん婆ちゃん家は歩いてもいける距離にあり、道を歩いているだけでも度々会うほどだ。

年末年始だからと言って帰る理由もない。

一応は帰るらしいが、今日は暖房の効いた家でのんびりと過ごしている。

—— あつ？クリスマスはどうしたかつて？

病院のベットの上で過ごしたんだよバカ野郎。

オレが、塞ぎ切つて間もない身体で無茶したせいで、傷口が開いて入院生活が伸びてしまった。

まあ、自業自得というやつだ。

北谷の取り巻きたちと共に入院生活を余儀なくされ、徹底監査のもとベットの上当か
でただひたすらじっとしていた。

まるで、冬眠中の熊のように。

そして日はゆつくりと過ぎ、痛みもひいたオレは年末年始ということもあつてか通院
することを条件に退院を認められた。

ただ、通院すること以外にも幾つかの条件が付け加えられた。

一つ、ケンカはしないこと。

一つ、病院やおふくろ指示には従うこと。

一つ、外出は極力しないこと。

この三つだ。

どれも我慢するまでもなく守れるものばかりだが、二つ目には納得がいかない。

要は、『余計なこととはするな』と命令されているともとれる。

よほど信頼されてないんだな、オレって野郎は。

「田中——タイキック」

無情のアナウンスと共に芸人が悲鳴を発し、それを見る他の芸人たちは笑い転げた。

酷い扱いを受けるこの顎の長い芸人に同情する。

タイキツクの刑が執行されたと同時に携帯の着信が鳴る。

発信者の名前は、松原だった。

「なんだ？」

「あつ、松原です！今大丈夫かな？」

オレが入院してた時、何度も見舞いに来てくれたし ” 久しぶり ” という感覚はな
いが、電話越しだとまた違った気分になる。

「おー、暇すぎて年を越す前に寝ちまうところだったぜ」

「あのつ、もしよかつたら………初詣、行きませんか？」

唐突の松原からの誘い。

せつかくの申し出を無碍にするのはなんだか申し訳ない、と思つたがオレには病院と
の制約に加え、家には最恐の鬼マイ・マザーがいる。

黙ってこそこそ出ようものなら、血○術の如く強力な鉄拳が放たれ、ロープで体をぐ

るぐるに固定されては二度と外へ出ることも許されなくなる可能性が大いにある。
オレにある選択肢はただ一つ。

”説得”だ。

「おふくろく、今から——」

テレビから目を離しおふくろの方に視線を向けると、テーブルに突っ伏したまま寝息を立てるおふくろの姿がそこにあった。

よくみるとそばには空になった大ビール缶が大量に置かれていて、これがどう言う状況かすぐに理解する。

(千載一遇の好機!!)

鬼は酒に飲まれ泥酔状態。

出るなら今しかない——。

「あの………奏くん？」

「ああ、すまん。オレも行こう」

「やった♪じゃあ、駅前に集合で！」

「わかった。すぐに出る」

オレは電話を切り、すぐに支度を始める。

鬼を目覚めさせないように、静かに……。

数分で済ませ、廊下に出たところでオレはフツと頭をよぎった考えを実行すべく再び部屋に戻る。

クローゼットの中から適当な上着を取り出し、熟睡するおふくろの肩にかけた。

「アンタが風邪でも引いて寝込んだら、誰がオレの飯作ってくれんだよ。もつと自分の体に気い使えよな。もういい歳なんだからよ」

オレの声はおふくろに届くことはない。

こんな言葉、シラフだとまず言えないしちようどいい。

何せ年始だからな。日頃の感謝は伝えとかないと。

「今度は、ちゃんと帰ってきてくるわ。行ってくる」

おふくろにそう言い残し、家を後にする。

外は暗く静まり返り少し息を吐くだけで白い息が出る程に冷え込んでいた。

誘われでもしなければ絶対に出ることのない極寒の外。

ヒューツと吹く風に体を震わせる。

「……………寒っ」

ポケットに両手を突っ込み呟く。

アパートの階段を降り、しばらく道を歩いていると、オレの前に五人組の野郎たちがまるで待っていたかのように一列に並び立ち塞がる。

路肩にはイカツイバイクが止められていてその風貌からも暴走^{あつち}族側の人間だと察する。

無関係、と言いたいところだがその視線はオレに向けられていた。

スルーするのはまず不可能だろうな。

「……………んだよ」

不機嫌そうに睨みそう問いかけると、ズルムケ頭の野郎が前に出る。

「お前が月島 奏だな？」

「だとしたらなんだ。こんな寒い中バイクなんて運転しやがって、グリップヒーター付きか？」

「そんなことはどうでもいい。お前に一つ聞きたいことがあるんだ」

「一方的かよ」

「羽丘の女帝」の取り巻きたちをお前が半殺しにしたって噂は本当か？」

「————本当、だと言ったら？」

何処から聞きつけたかわからないその事実在即答すると、野郎たちは驚きの表情を見せる。

「どうやら信じていなかったらしい。」

「実は、その取り巻きたちは暴走族界限の中でもかなりの実力者として知られていたんだ。それを手懐ける女帝も然り、それを倒したとなれば気にもなるのは必然だ」

「ヘエ、アイツらがねエ……………」

「以前全国的にニュースになった『花咲川倉庫での高校生男女暴行事件』。その被害者がたつた一週間で回復しこれほどの成果をあげたお前に興味が湧いてな」

「成果つて、オマエら一体何様なんだよ」

やたら上から目線でモノを言う野郎に腹が立つが、奴は意にも介さず話を続ける。

「その暴行事件の犯人もその取り巻きたちの仕業だろ？」

「ほお、よく知ってるな」

「あの倉庫はアイツらの溜まり場になっていたので予想はつく。流石は ”
不死身の暴君” と言われるだけのことはある」

「……………はあ!?!何だそりゃ」

奴から放たれた聞きなれない単語。

アンデッド? 何だその厨二病のような名前は。クソダセエ。

「知らないのか？お前の異名だ」

「やめろ！誰だ、そんな下らん名付けをしたのは!？」

「誰が名付けたかそれは知らない。だが、広まるのはかなり早かったな。お前はもう、不死身の暴君」として通っているぞ?」

「はあ、どんな顔して街を歩いたらいいんだよ……………」

今後のことを想像して、深いため息をつく。

別に、誰かに認められたいが為にこんなことをしてるわけじゃない。

ましてオレが暴走族扱いされてるのも気に入らん。

オレはオレだ。それ以上でもそれ以下でもない、ただの高校生だ。

「結局オマエたちはこの寒空の中、オレがやったことの事実確認をする為だけに待ってたのか？ご苦労なこった。これで用は済んだだろう。オレはこれで——」

「おっと、そうはさせないぞ」

野郎たちはオレを囲うかのように距離を詰める。

「俺たちの目的はここからだ。せつかくのこの機会にノコノコ帰るなんてできるわけないだろう？」

「ハツ、オレと喧嘩するってんなら残念だったな。オレはまだ通院してる身。病院からも喧嘩は禁じられている」

「そんなことは関係ない。それに、これは喧嘩ではない。」組手「だ」
「組手、か……………」

その言葉を聞き、オレは羽織っていたコートを脱ぎ捨て腰を低くし構える。

「……………なら問題ない。相手してやる。まだ傷は完治していないがちょうどいいハ
ンデだろ？全力でかかってきな」

手招きして挑発すると、野郎たちは眉間に青筋を浮かべる

「ナメヤがって……………!!いくぞおおおおお！」

怒りに満ちた声を大きく発し、腕を振り上げる。

オレにとつてこれは初詣に行く前の、冷え固まった身体をほぐす準備運動だ。ウオーミングアップ
精々オレの身体をあつたためる役割を果たしてくれよ？



「奏くーん！こっちこっち！」

跳ねながら手を振る松原にゆっくりと歩み寄る。

その格好は、ニットにマフラーに手袋、そして何重にも着込んだであろう分厚い上着。寒いにしても、そこまでする意味がわからん。

コイツは今から北海道にでも旅行しに行くのか？

「おお。待たせた……………な？」

「あらっ、月島くん。こんばんは」

松原の横に佇む小さい影。多忙の女優様もご一緒だ。

「何だ、いたのか」

「何だ、とは何よ！そもそもあなたをここに誘おうと花音に提案したのは私なのよ？」

「へーへー、感謝してますよ」

「ホントツ、冷たいんだから」

白鷺はわざとらしく目線を逸らす。

「いったいどの口が言ってるんだか。」

「……………あれ？どうしてそんなに服が汚れてるの？」

首を傾げながら尋ねる松原。

「ああ、これか。実はさつき変な輩に絡まれてな」

「変な輩？」

「なあに、ただの暴走族だ」

「暴走族って……………何であなたはいつもそうトラブルに巻き込まれるのかしら」

………

「安心しろ。オレにとつては突然家に押しかける、『よ○すけの隣の晩御飯』ぐらいのハプニングだ。しかしまあ、組手だ何だと豪語する割には大したことなかったな。きつと奴らは夢の中で年を越すんだろうぜ？クククツ」

今から三十分ほど前。

オレは全員が束になり襲われた。

もちろん逃げ場はなく、ガードするにもオレの手足の傷のせいで負荷には耐えられない。

オレはノーガードでの戦闘を余儀なくされた。

放たれる拳を全て体を数度傾げるだけで回避し、躲すことのできないものは最低限の力で受け流しダメージを防いだ。

全員の息が切れかけたと同時にオレは宙へ舞い、空中で何度も回転しながら敵の顎に目掛けて蹴りを当て続けた。

言わば、”ダイナミック・タイキック”だ。

着地する時には誰一人として立ち上がる野郎はいなかった。

全員が気絶していることを確認すると、オレは土埃のついたコートを払いそそくさと

その場を後にした。

これまでが先程の一部始終だ。

「とりあえずオレは無傷だし約束も破つてねエよ。また入院生活を送るなんてたまつたもんじゃねエからな」

「……………あつ！奏くんに言つてないことがあつたんだつた！」

大事なことを思い出したかのように、ハツとなる松原。

何をするかと思えば、深々と頭を下げた。

「少し遅くなっちゃったけど、あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願ひします」

「なんだソレか。おお、あけおめ。白鷺もな」

「ええ、こちらこそ」

二人に新年の挨拶を済ませ、神社に向かい歩き出す。

道中やはり時間が遅い為かガラの悪い連中が多く屯していた。

夏場は夜の方が涼しくてよく夜中に外出してたから暴走族たちに絡まれることなんてしよっちゆうだったが、冬は違う。

オレは冬眠する熊のように家に引きこもるから夜に外で見かけることなんて絶対ない。

ましてや、この前はあれほど暴れたんだ。

注目されることも必然なんだろうな。

「おいつ、見ろよ。アイツだ、”不死身の暴君^{アンドンデッド}”！」

「お前声かけてみろよ」

「はあ!? 無理に決まってるだろ!」

「血溜まりになるぐらいの出血をしても笑ってたって噂だぜ」

「俺は刃物で刺されても平然としてたって聞いたぜ?」

「おつかねえ……………」

通り過ぎる不良たち全員に視線を向けられてはコソコソと何かを言われる。

若干話が盛られているのは確かだが、無闇に絡まることが少なくなるのはいいことだ。

だがそれは、不良とは名ばかりのヤンチャボウズたちだけにとどまる話なんだけだな。

「お〜い! 不死身の暴君”さんよ〜! 俺といっちょタイマンでも——」

オレの肩を掴みニヤニヤと笑みを浮かべた野郎が現れた。

ジャラジャラとした金のネックレスやブレスレットを飾った金髪のその男の手を、オレの手の甲で払うと、野郎の鳩尾目掛けて拳を振るう。

野郎は声にならない声を発しながらその場に蹲り、その頭に足を乗せ腕を組む。

「でつ、オレになんか用?」

「い、いえ……………すみませんでじだ……………」

謝罪する男たちを放置しオレは再び歩み始める。

「あそこまでするのはどうかと思うけれど?」

白鷺は呆れ顔でそう零す。

松原は何も言わずただオロオロとしていた。

「ああいう野郎は大嫌いだ！ ったく、イライラさせやがるぜ……………」

思い出すだけで腹が立つ。

まあオレの身なりも世間一般からすればチャラケている方だろう。

だが、オレはあんな奴とは違う。

”殴りたいから” だとか、”強そうだから” などという理由で人に手を挙げようなんて考えない。

まして、己の欲求を満たす為だけに拳を振るうなんて言語道断だ。

そんな奴は外道。不良と名乗るなど烏滸がましい。

あんな人間にはクズという呼び名で十分だ。

「あなたもよく暴力を振るっているでしょう？」

「ああ？ オレが目的もなく無抵抗の人間を一度でも殴り飛ばしたことがあったか？」

「何をそんなにムキになっているの」

「あのクスと一緒バンビにされるのがムカつくだけだ！オレは暴走族でもなければヤクザでもねエ！ただの高校生だ!!」

激昂するオレに対して白鷺は冷静に返す。

そんな二人に松原は両腕を広げ割って入り、静止させようとする。

「二人ともストロップ！喧嘩は良くないよ！」

「ケンカじゃねエよ」

「喧嘩ではないわよ」

「ふえ、ふええ……………」

オレたちの反応に戸惑う松原。

事実オレたちは言い争ってはいるが喧嘩までには至っていない。

こんなこと日常茶飯事なのに、何をそこまで慌てる必要があるのか理解し難いな。

「とにかく、オレは考えなしに手をあげたりすることは無エつてことだ。次また履き違えたこと言いやがったら許さねエからな」

「はいはい、わかったわ」

少し場が重苦しくなったがオレたちは変わらず神社に向かい歩き続ける。

.....

.....

「ふええ.....すごい人.....」

「ああ、これは予想以上だな」

神社に着くや否やでた一言。

鐘の前には行列ができ、屋台に並ぶ人の数も計り知れない。
よくこんな寒い中、外に出てこれるもんだ。

松原に誘われる前のオレでは到底考えないだろう。

「本当にすごい人だから.....花音、はぐれちゃダメよ？」

「だ、大丈夫だよ！」

「そうだと松原。もしオレたちを見失ったらちゃんと迷子センターに行けよ？」

「わ、私は子供じゃないよお！」

「松原はまだまだ子供ガキだろ」

「花音はまだまだ子供よ」

「はう……………」

オレと白鷺の正論パンチをモロに受け松原はその場に膝をつく。

どうやら相当落ち込んでいるらしい。

事実、携帯のナビ機能すら迷子にさせるほどの女だ。

はぐれたとしても迷子センターにたどり着けるのも困難だろう。

「ほらっ、花音」

白鷺は松原に手を差し伸べる。

「うう……………ありがとう、千聖ちゃん……………」

「これならはぐれることはないでしょう?」

白鷺はそう言うのと松原の手をギュツと握る。
なるほど、いい案だ。

オレには到底できない、女同士だからこそできる技。
口では言わないが白鷺がいてくれて助かった。

「解決したか?」

「ええ。これなら大丈夫よ」

「えへへ、千聖ちゃんの手、あつたかいね♪」

「うふふ、花音もね」

「仲良しアピールはいいからさつさと鐘鳴らしに行くぞ………と聞いたところだが、流石に寒いな。何か飲み物買ってくるからちよつと待ってる」

「ええ、そうさせていただくわ」

「奏くん、ありがとう!」

二人から離れ、オレは屋台を見渡す。

フランクフルトに焼きそば、お好み焼き。

まあどれも腹にくるものばかりでミルクティーやらコーンポタージュみたいな飲み物系は全くない。

それに、こんな夜中にあんな高カロリーなものなんて食べたら女たち皆太るだろうに。

そういうところを考慮してもつと軽食となるものを出すべきだろ、普通。

全く、売店のおっさん共は何もわかっちゃいないな。

オレなら絶対——おっ、甘酒振舞所を発見！

しかもタダとはついている。

甘 ” 酒 ” とは言つても二十歳以上が飲む酒とはまた違うものだ。

オレたち未成年でも気軽に飲めるし、何より温まる。よしつ、これに決まりだ。

甘酒を配る婆さんに声をかける。

「甘酒三つ、大至急頼む」

「すみません、甘酒を二つお願いします」

オレと同時に婆さんに声をかけたその人物の方へ顔を向ける。

「……………よお、あけおめ」

オレがそう気軽に話す人物。

ビジネスパートナー
仕事仲間の氷川がお出ました。

「あけましておめでとうございます。まさかこんなところで遭遇するなんて……………」

「おいおい、人をモンスターみたいに言うんじゃないよ。それに、随分と気合入ってるじゃねえか」

改めて氷川見ると、髪色と同じ水色の袴姿でいかにも『正月を満喫しています』って感じの格好だった。

「別に、着たくはなかったのですが……………妹が……………」

「妹？それって確か——」

「お姉ちゃーん！見つけたーん！！」

「白菜!？」

氷川と瓜二つの顔をした女が氷川の背中を抱きしめる。会うのは夏以来か。しつかし、本当によく似てやがる。髪の毛の長さまで同じにされたらまあ間違いないだろう。

「よお、また会ったな」

「あれえ? おにーさん誰?」

「ぐっ……………」

不思議そうに首を傾げる氷川妹。

どうやら本気で覚えていないらしい。

まあ、無理もないか。オレも似たような感じだからな。

「夏祭り。屋台。焼きそば。ラムネ」

わかりやすいように単語を四つ並べると、氷川妹は思い出したと言わんばかりに目を

大きく見開く。

「あー！あの時の優しいおにーさん！」

「日菜、声が大きいわよ」

「本当に奇遇だな。まさかこんなところで出会すとは思ひもしなかった」

「それはこちらのセリフです。それに、貴方は自宅療養の身でしょう？一体ここで何をしているんですか？」

「初詣に決まってるだろ。だが、松原と白鷺も一緒だ。よかつたら一緒にどうだ？」

「えっ!? 千聖ちゃんもいるの!? あたし行きたい!!」

「氷川妹はこの様子だが、氷川姉は？」

「その呼ばれ方は気に入りませんが、ぜひお願いします」

「わかった、案内しよう」

婆さんから人数分の甘酒を受け取るとオレたちは松原たちの元へ歩き出す。

そういえば、中学の友達が言っていた。

『甘酒を飲んだだけで酔う女たちがいる漫画がある』と。

どうやらその女たちは暴走し、主人公に多大なる迷惑をかけた挙句その記憶すら失っ

たと言う。

そんな漫画のようなことは起こり得ないと思うが………この濃い連中だ。ありえない、なんてことはありえない。

この甘酒が漫画の女たちみたく酔わない程度の濃度であることを願おう。



時間が経つにつれ人がさらに増えてきた。

いわゆる ”密” と言うやつだ。

これだけ人が密集してるなら暖を取ることも可能だろうが、知らない人間と肩を寄せ合うつてのは正直好かん。

まして、その相手が小汚ねえおっさんなら尚のこと。

オレにはカイロさえあればそれでいい。

少し時間がかかったが、なんとか松原たちの元へ辿り着くことができたが………どうやら二人きりではないらしい。

高身長の大學生と思わしき若いチャラ男たちに絡まれているようだ。

「君たちかわいいね！歳いくつ？」

「え、えーつと……………」

「どう？よかつたらこの後俺ん家で年越し祝いやろうと思っただけど」

「いえ、間に合っています。それに人を待たせているので」

おどおどとする松原に対しキツパリと断る白鷺。

男の一人が白鷺に顔を近づけると、興奮するかのようにデカイ声を発する。

「……………あれ？君、ひよつとして白鷺千聖ちゃん!? P a s t e l * P a l e t t e
のー！」

「そうですけど」

「ほんとだっ！実物はマジで可愛いね！」

「お褒めに預かり光栄です」

「そんな有名人と会えるなんてラッキー！お友達も可愛いし、ほんと俺たち今日ついでるなー！」

「さっ、早く行こうぜ！」

「いやっ……………離して……………！」

「ち、千聖ちゃん……………！」

強引に二人の腕を引く男たち。

この光景を隣で見っていた氷川姉にオレは問いかける。

「氷川姉、一つ聞くだぞ」

「なんですか？」

「これでオレが手を出しても、何も悪くないな？」

怒る気持ちを沈めるように、あくまで冷静に問う。

どうやら氷川姉も眉間に皺を寄せていて、オレと同じ気持ちらしい。

「やりすぎないようにお願いします」

「了解」

氷川姉のゴーサインを受け、オレは手に持っていた甘酒を投げ捨て、足音を立てず男たちに駆け寄る。

まず松原の腕を握る男の尻に、走った勢いのまま足を振りかぶり思いっきり蹴飛ばした。

「いつてええええ!!」

松原から手を離し、蹴られた尻を両手で押さえる男は大声を発しその場に蹲る。

これが本家 ” タイキック ” だ。

バラエティとは違うリアルな反応。

素人のオレですらこんな威力を出せるんだなら、あのキックボクサーの蹴りは間違はなくそれ以上だろう。

顎の長い芸人が痛がるのも無理はない。

白鷺の腕を掴む男が突如現れたオレの姿を見て怒る。

「誰だオマエ!!」

「誰って、それはこっちのセリフだ。オレの友達ダチに、なんのようだ? コラッ」

今まで疎らだった人ばかりが一気に捌け、オレたちを中心に囲う。

「ハッ、友達^{ダチ}って……どう考えても無関係だろ！お前みたいな不良が、こんな可愛い子と知り合いなわけないだろ！」

「おいおい、人を見た目で判断するのはよせよ。それに、テメエみたいな底辺と一緒にされるのは癪^{イラ}だな」

「はあ？何言ってるんだこいつ！はははっ！」

男は嘲笑うかのように笑う。

一体何がおかしいんだか知りたくもないから、何も言わず男にゆっくりと近づくと右頬に拳を鋭く振り抜く。

男はこの状況を理解できず、右頬を押さえると同時に大きく目を見開いた。

「な、何すんだ!？」

”制裁のビンタ” だ」

「いやっ！お前今グーで殴っただろ!!」

「細かいことはどうでもいい。あのなあ、オマエもいい加減理解しろよ」

「ああ？何を」

「この二人が嫌がつてるのわかんねエの？お前らは所詮、脈なしなんだよ」

オレのその言葉に野次馬たちがクスクスと笑い声を上げる。

その声が聞こえたからか男は顔を真っ赤に染めさらに激昂する。

「うるせえ!! 黙れええええ!!」

男の声に当たりがしんと静まり返る。

誰も何も言わなくなった空間で一人、大声を発する男に膝を擦りながら近づく姿が目に入る。

オレがタイキツクしたもう一人の男だ。

「気をつける……………! コイツ、ヤベエぞ……………!」

野郎はオレの方を指さす。

「ああ!? たかが歳下の不良だろ!」

「違う………！街で聞いた噂話を思い出したんだ。金メツシユの髪、不意打ちの強力な蹴り、間違いない………コイツ、”不死身アンデッドの暴君”だ………！」

野郎の発言に当たりがざわつく。

全く知らないと言う奴もいれば、耳にしたことあると言う奴もいる。

「どうやら、オレの存在は不良界限で収まらなかったようだ。」

「そんなのただの噂話だろ！たとえこいつがそうだとしても、オレが負けるかよ！」

「やめろ………！殺されるぞ………！！」

「うるせえ！！尻に蹴りを食らったぐらいで立ち上がれない軟弱野郎が、俺に指図すんじゃねえよ！！」

仲間の静止を振り切り、男は着ていた上着を一枚脱ぐ。

そして、自分の筋肉を見せつけるように着ていた上着を全て脱ぎ捨てとうとう上半身裸の状態にまでなった。

「言っておくが、俺は中学高校とボクシングをやってたんだ。お前の鼻をへし折るぐ

「らいは容易いぜ？シユツ、シユツ！」

男は拳を数度前に突き出し、シャドーの動作をとる。

神社で上半身裸でボクシングつて。

全く、迷惑にも程がある。

コイツはアレだ、バカなんだろうな。

思わずため息をつく。

「よーし！体もあつたまつたし、そろそろいくぜ——」

粋がる男に対しオレは体を反転させ顔面目掛けて踵を振り下ろす。

足は男の鼻にクリーンヒットし、鈍い音が響いたと同時に多量の血が噴き出す。

男の背が地に着く直前に胸ぐらを掴み、胴体を引き上げる。

意識が朦朧とする男に向けオレはあることを告げる。

「言っておくがオレは格闘技未経験者だ。そんな人間に負けてさぞ屈辱だろう。けど、オマエもオレと同じはずだ。何せ、今はボクシングをしていないんだからな」

男は口をパクパクと動かす。

「なんで知ってるかって？オマエが言った言葉を振り返れよ。『ボクシングをやった』って言っただろ？オマエは所詮キツイ練習に耐えきれず退部し上辺だけ習った技術「スキル」を見せつけるだけの、ただの見栄っ張りだ。そんなエセヤンキーがオレに勝るとでも？ハッ、甘くみられたもんだ。こちとら1Lの血を垂れ流しても生きてる男だ。くぐり抜けた修羅場の数が違エんだよ」

オレがそう言い終わると、男の意識は完全に途絶え白目を剥く。タイキツクした野郎に向けて未だ血を流す男を投げ渡し近づくと見下ろすように眩く。

「オレの大切な友達に、手エ出してんじやねエよ……………」

怒りがまだ治らないのがオレ自身わかる。

今ここで二人がいなくならなければオレはきつとコイツらを血まみれになるまで殴

るだろう。

それを察してか、男たちは逃げるようにこの場を後にする。

男たちがさった後でこの一部始終を見ていた野次馬たちが歓喜の声をあげるとともに盛大に拍手を送る。

しまいには携帯でオレを撮影する奴も現れ始めた。

(もう、初詣どころじゃないな)

そう心で呟いたオレは白鷺と松原に帰ることを伝え、そそくさと神社から離れる。

階段を降り切ったところでオレの両腕が誰かに掴まれた。

振り向くと、四人の姿が目映る。

「あー……………騒ぎにして悪かったな」

四人に目も合わせずそう言うと、各々が返事を返す。

「助かったわ。ありがとう」

「奏くん、本当にありがとう！」

「やりすぎ、ではあったと思いますが今回は不問としましょう」

「おにーさん強いね！るんっ♪とききたーっ！」

「オマエら……………」

予想外の言葉に驚く。

「今日のはもういいわ。その代わりに、最終日にまた全員で来ましょうね」

白鷺の提案にオレは即答する。

「もちろんだ」

第26輪 Bitter Sweet / RED Rose

2月14日。

それは思春期を迎えた男女にとって特別な日。そう、バレンタインデーである。

男子は彼女や仲のいい女子からチョコをもらい、女子は彼氏や好きな男子にチョコを贈る大切な行事——なんてのはリア充に限る話だ。

オレはというと——

「おうおう、”不死身の暴君”さんよお。ちよいと俺たちの話を聞けや」

ニヤニヤと笑うリーゼント頭のヤンキーたちに”甘い菓子”ではなく”馬鹿の狩り”にあつていた。

……………全く上手くねエな。

自分のセンスにドン引きだ。

「初対面の人間に対してその態度はねエだろ。つてか、オマエら誰だよ」
「俺たちは人呼んで古風の暴走族”亜愛主陽”!!」

胸を張り堂々と名乗るヤンキーたち。

名前はきつとタバコの銘柄から来てるんだろぅがオレが思った一言は――

「だ……………だっせえ……………」

思っていることがつい言葉になって出てしまった。

その暴走族名にもだが、リーゼントにサングラス、更には丈の合わない革ジャンつて……………格好がもう名前のダサさを倍加させている。

オレの失言を耳にしてか、メンバーが各々口にし怒りをあらわにする。

「ああ!?なんだコラ!!」

「ナメてつと潰すぞ!!」

「テメエは絶対ボコす!!」

ヒートアップするヤンキーたちを花咲川の生徒たちが横目で通り過ぎる。

そう、オレたちが立っているのは校門の目の前。

つまりコイツらは、登校途中のオレを待ち伏せし迫ってきたのだ。

「あのなあ………勝手に盛り上がるのは結構だが、場所をもう少し考えたらどうだ？
それに、生徒たちの登校の邪魔になつてる。用がねエならとつと家に帰りな」

「用件か。なら、端的に話そう。月島 奏、オレたちの仲間に——」

「断る」

「はやっ!? えつ、早くね!」

「当然だろ。そんな時代遅れのリーゼントになるぐらいなら、鼻ピアス開ける方がマシだ」

「これの古臭い感じがいいんだろうがあああ!」

オレとのやりとりに激昂するヤンキー。

「全く、朝っぱらから盛りやがって………チヨコの食い過ぎで欲情でもしたか？
いや、そのダサさでチヨコがもらえるならみんなマネしてるだろうな。それが無いってことは、つまりそういうことだろ?」

嘲笑うかのようなオレの一言にヤンキーたちは沸騰するかののように顔を真っ赤にし、とうとうブチ切れた。

「よおくくしつ決めた!!今からお前をボコしてこの格好がいかにカツコよくて強いかを証明してやる!!」

「おいおい、そんな興奮してつと血管切れちまうぞ?ほらつ、これでも食って落ち着けよ」

オレはズボンのポケットから最近マイブームとなりつつある、激甘のチューイングキャンディを取り出しそれぞれに投げ渡す。

「イライラする時は甘いものを食うといいらしいからな。オレの好物だ。ありがたく受け取りな」

「だ……………だまれえええええ!!」

ヤンキーたちは全員鬼の形相でオレに向かい拳を振り上げる。

「人の善意を踏み躪りやがって、つたく……どうなつても知らねエぞ——」

そこからの展開は早かつた。

放たれる全員の拳を防御せず全て身体で受け止めた。

痛くも痒くもないその攻撃にため息をつき、接近したヤンキーたちの腹部を殴り蹴る。

本物の痛みを味わつたヤンキーたちは皆ノックアウトし声にならない声をあげ蹲る。

オレはリーダー格のヤンキーに近づきその場にしゃがむ。

「一発はまけてやるよ。まあ、蚊も殺すことのできない軟弱なパンチだったけどな。次会う時にはチエツク柄のシャツにでも着直したらどうだ？少しはモテるかもしれないぜ」

横たわるヤンキーたちを放置し、オレは何食わぬ顔で校舎へと足を踏み入れる。

朝礼のチャイムがなる頃にはすでに姿を消していたらしいが、このあとコイツらがどうなつたかはわからない。

だが、チエツクのシャツに着替えたところでヤンキーたちのギザギザに尖つた心を唄うわけじゃ無い。

歌い踊った。”彼ら”は、格好なんて関係なくただひたすらに自分の想いを歌にし世間にその名を轟かせた。

あのヤンキーたちも彼らを見習い、ケンカなんてやめて別の道に進めばいい。

もしその日が来たとしたら、全員でツーリングに行つて、共通の話題で夜を語り明かすのも悪くないな。



校舎に入り下駄箱を開ける——まあチョコなんて入つてないわな。

アニメやゲームだと、大量のチョコが湧いて出てくるなんてシーンがあるが、現実で起こり得るのだろうか。

そもそも男子の少ないこの学園じゃあまず見ることはないだろうな。

教室に入るとなかなか面白い光景を目にする。

それが女同士のチョコの渡し合いだ。

「奏くん、おはよ〜」

隣の席に松原が腰掛ける。

「おお。今日はなんだか教室が活気付いてるな」

「バレンタインデーだからね。やっぱり男の子って意識したりするのかな……………」
「？」

松原は他人行儀で話す。

「さあな。オレには理解できん感情だ。ちなみにだが松原、一つ聞いていいか？」

「ど、どうしたの!？」

「女同士でもチョコを渡すのが普通なのか？」

「うん。」友チョコ” っていうんだけどね、仲の良い人に感謝の気持ちを込めて送るんだよ。今はあまり珍しくないんだけど……………それがどうかしたの？」

「いや、なんだか不思議に思えてな」

「不思議？」

「なあに、くだらないことだ。女同士だと違和感はないのに、男同士って想像すると絵面が汚くていけねエ」

「あ、あはは………」

そう考えると、男って生き物は大変だ。

女だと華やかに見えそうなことでも、男だとそうはいかない。

過去に『世の中には ” 男の娘 ” と言う人種がいる』と、アニメが大好きな友人から教わったが、所詮は男。他の野郎共と何も変わらん。

女嫌いなオレにぴったりの結婚相手がいると見せてきたその写真は、見た目こそ女っぽい結局は股に棒がぶら下がっている同性だ。トキメキも何もない。

オレを変な世界に誘おうとしたアイツにはきつと天罰が下るだろう。心しておくことだな。

「あらっ、月島くんも来てたのね」

「千聖ちゃんもおはよう！」

「ええ、おはよう。花音」

声をかけられ振り替えると、白鷺千聖が上機嫌に松原に挨拶を返す。

「よお。オマエも今日を楽しんでるのか？」

「ええ、そうよ。ほらっ、花音。受け取ってちょうだい」

「わあ！ありがとうございます、千聖ちゃん！」

嬉しそうに笑みを浮かべる松原。

その様子を見て白鷺も微笑む。

この時オレは直で、初めて友チヨコの受け渡し現場を目撃したが、まあ別に普段と何も変わることはない、ただのお菓子交換だったと言う印象だ。

「仲のいいことで」

「あらっ、嫉妬かしら？月島くんは……………まだ一つも貰えてないのかしら？」

「大きなお世話だ」

「あ、あのっ……………」

松原が何か言いたげに言葉を詰まらせる。

何も言わず待っていると、カバンの中から小包を取り出しオレに差し出す。

「よかつたらこれ……………受け取ってください」

初めての経験に固まっていると、白鷺がオレの肩をポンと叩く。

「よかつたじゃない。人生初めてのバレンタインチョコレート♪」

白鷺のその言葉に、ようやく思考がまとまる。

「お、おお。松原、ありがとう」

「うんっ！喜んでくれると嬉しいなあ」

なるほど——うんっ、なるほど。

バレンタインチョコをもらうってこんな感じなんだな。

「間違っても、本命チョコだと思わないことね。どう考えても、ただの ” 義理チョコ

”
よ」

「うっせえ！当然のことをデツカい声で言うなっ！」

チビの毒舌にようやくまともになると、始業のチャイムが鳴り、担任のせんせーが教室に入ると今日の予定を淡々と説明する。

だがまあ、松原に感謝してるのは変わりない。

初めてもらったチョコを机の中にしまおうとすると、何かが既に入られていた。

オレは普段机の中は空の状態だ。

教科書やらは全部後ろにあるロッカーにぶち込んであるし、入れるものなにも
.....

恐る恐る中身を見ると、そこには長方形の型をした菓子が置かれていた。

それも、一輪の小さい赤い薔薇と手紙を添えられて。

(なんだこれ？ 新手的嫌がらせか？)

手紙を開き、内容を読む。

『月島くんへ』

どう？ 驚いたかしら？ 普段あなたとはいがみ合いばかりだから、今日は仲直りの意

を込めてこのチョコレートを贈らせてもらおうわ。文化祭の時は助けてくれて本当にありがとう。

p.s. これが初めてのバレンタインチョコだったら一生忘れられない思い出になるわね♪

白鷺千聖』

——— いや、オマエかい!!!

心の中で盛大にツツコミを入れる。

パツと白鷺の方を向くと、中身に気づいたことに気がつき、嬉しそうに笑みを浮かべる。

『してやったり』とどこか満足そうに見えるその態度にどうしようもなく腹が立つ。

全てアイツの策略だとするならば、完全にオレをおちよくつてるとしか思えない。

相変わらず、酷つでえ女!!

腹黒くなりすぎて頭の中までオールブラックになってるだろ、アイツ。

(……………だが、残念だったな!)

オレは無言で笑い返すと、白鷺は不思議そうに顔を傾けた。

このチョコがいくらオレの知らないところで仕掛けられたとはいえ、先に受け取ったのは松原のチョコレート。決して白鷺が初めてつてわけじゃない。

してやられはしたが、全て奴の思惑通りともなっていない。

つまりは、引き分け。

綿密に綿密にまで考えた作戦だったろうに、オレが気づかないばかりに松原に先を越されてしまったてよお。実に可哀想に。

”策士策に溺れる” とはこのことだろう。

先程の白鷺の嬉しそうな笑みに対抗し、まるで挑発するように笑みを浮かべる。

奴は意にも介さずそつぽを向く。

「よしつ、勝った」

そう確信するとつい言葉に出してしまった。

せんせーは話を止めオレの方を向く。

「月島くん? どうかしたの?」

「いや、なんでもねエ。続けてくれ」

適当に返事をしてこの場を乗り切る。

白鷺から贈られた手紙に再度目を通す。

明らかにオレをおちよくなるような内容に少し腹が立ったが、奴なりの気持ちの伝え方だろう。

何でもかんでも器用にこなす癖に、オレに対してはこんな子供じみたことしかできないのは何故だろうか？

……………考えたところでオレには到底わからないか。

だなまあ、せっかく貰ったんだ。ありがたく頂戴しよう。

溶けないうちにな。

……………

……………

放課後、オレはいつも通り氷川と見回りを行う。

ここ最近では校内で事件が起こることもめつきりなくなつた。

平和な日常を送れるようになったのはいいことなんだろうが、どうにも刺激が足りない。

「そういえば、今朝の件。聞きましたよ」

隣を歩く氷川が声をかける。

「今朝の件ってアレか？」

「恐らくそうです。また騒ぎを起こしたみたいですね」

淡々と話す氷川を見ると、どこか怒っている印象を受ける。

あまり表情に出さないこの女だが、一年近くともに風紀活動をしているとわかることも増えてきた。

今のオレには理解できる。

下手に誤魔化すと痛い目に遭うと。

「言っておくが、オレからケンカを吹っかけたわけじゃねエからな」

「わかっています。あなたがそこまで粗暴ではないということもよく知っています」

「ほう。じゃあオマエは何が聞きたいんだ？」

「いくらあなたに非がないとはいえ、やはり暴力は良くありません。その乱暴な心を少し………いえ、大幅に改めるべきでは？」

氷川の言いたいことはわかる。

つまりは、『お互い手を出し合うのはやめて、話し合いで解決したらどうか』と言いたいんだろう。

理想的ではあるが、所詮は理想論にすぎん。

オレがいくら心を開いたところで相手側が牙を剥くならこちらも正当な防衛をする他ないからな。

「ちっ、わーっつたよ」

「……………」

返事を返すと、氷川は何か言いたげに驚いた表情を見せる。

「んだよ」

「い、いえ……………いつもの月島くんなら『善処する』と言ってはぐらかすとばかり」

「ああ？ そう言つて欲しかったのか？」

「違います。なんだかこう、大人になったんだなあと」

「オマエはオレのおふくろかつ！」

「もしそうだとしても、断じてお断りさせていただきますが」

「そう言う意味じゃねえんだよ……………」

氷川がオレのボケに合わせるなんて珍しい。

やはり行事事があると人はどこか、違った一面を見せるもんなんだな。

「話は戻るが、今朝登校途中にヤンキーたちに絡まれてな。どうやらオレを仲間に取り入れるつもりだったらしい」

「もちろん、お断りしたんでしよう？」

「当然だ。あんな趣味の合わん奴らと連む気はさらさらねえよ」

「……………ずつと気になっていたんですが、一つ聞いてもいいですか？」

氷川は神妙な面持ちで尋ねる。

「別に構わないぜ。何せ今日は気分がいいからな。何でも言ってみろ」

オレが上機嫌にそう返すと、一呼吸置き思い口を開く。

「あなたの尋常ではないその運動神経はどうやって身についたのですか？何か運動をしているわけでもなく、どこかで鍛えている様子もないのに……………。正直、月島くんは謎が多すぎです」

「人をまるで珍獣みたいに言うなよ」

「ですが？本当に同じ人間か疑ってしまいます……………」

「クククツ。まあ、オマエの見解は間違っちゃいねエよ」

「それってどう言う……………」

「だが、今はまだ答えられん。正直に話したところで納得させられる説明をできる自信も、そんな言葉も持ち合わせてねえからな」

「そうですか………わかりました。その時が来れば真つ先に教えてください」
「わかった。約束しよう」

「——随分と脱線してしまいましたね。さあ、本来の仕事に戻りますよ」
「そうだな。とつとと終わらせて、暗くなるまでには帰るぞ」

オレたちは再び見回りを開始する。



18時を迎えたところで下校時刻となった。

見回りを終えてからは風紀委員の資料作成やら学園長のつまらん話に巻き込まれ、結局最後まで居残ることとなった。

外は完全なる夜。

真つ暗な夜空には星がポツポツと光るだけで大した光源にはなっていない。

街灯も少ないこの近辺では夜遅くになると変な輩が異常なほど多く出没し、警察の姿もよく見られるがいなくなった途端揉め始めるなんて日常茶飯事だ。

だからこそ、女子高生一人でこんなところを彷徨くなんてただの自殺行為だと言え

る。

「氷川。今日はもう遅いし駅まで送るぞ」

「そんな、申し訳ないです」

「この前みたいに氷川妹に連絡すると言いなから一人で帰ったバカな女が心配なだけだ。いいからオレに構うな」

「……………わかりました。お願いします」

氷川は渋々承諾する。

校内以外で二人並んで歩くのは正直初めてのこともかもしれない。

普段と何も変わることはないが、しんと静まり返ってる分どう言う会話を起こすべきか頭を悩ませる。

そんな雰囲気の中、先に口を開いたのは氷川だった。

「今日は何だか寒いですね」

「ああ。そうだな」

極一般的な気候の話。

こう言う時って、本当に話が續かない。

二人の間に再び沈黙の時間が流れる。

何とも重苦しい二人の間に、大柄な野郎が暗闇から姿を現す。

「クツフフ、いい女連れてるじゃねえか兄ちゃん！」

不敵に笑う野郎は舌を出し、いかにも下品な雰囲気をかもちだす。

二メートルほどある身長に、横幅の広い体格。

それも、ただデブいだけでなくしっかりとした筋肉を携えてるのが見て取れる。

オレたちを覆うかのような圧倒的な威圧感。

また面倒な奴に絡まれた、と長くため息をつくとそれが気に入らなかつたのか野郎はオレの首根っこを掴みあげる。

「おいつ、何なんだその態度は!?!」

「ちよつと、何するんですか!」

「女は黙ってろ!!!」

「……………っ!」

野郎の威勢に氷川は怯えた様子を見せる。

まあ、女なら誰でもビビるわな。

「気にするな。コイツはオレに用があるだけだ」

「しかし——」

「オマエがさつき言つてたことを、否定してやるよ」

く。
オレが余裕の笑みを浮かべると、氷川は心配そうな表情を浮かべながら一步距離を置く。

そうだ、それでいい。

万が一この男が暴れて巻き添えにでもなれば大変だからな。

「なあ、できればおろしてくれよ。そろそろ息苦しくなってきたんだが」

「そうか……………なら、このまま窒息させるのも悪くないなあ!!」

男の手に更に力が加わる。

どうやら人の話を聞かない典型的な悪人タイプらしい。

話に応じないとわかると、ぶら下がった足を思い切り振りかぶり金的目掛けて振り上げた。

それを察知してか、男は急に手を離し数メートルをひとつ飛びで後退する。

オレは猫のようにしなやかに着地し男に顔を向けると、一瞬の出来事に驚きはしていたが、ブーっつと一息吐き、呼吸を整えた。

「人間の急所を狙うなんて、クズ野郎だなあ」

「ハッ、いきなり人の首を掴み上げるテメエに言われたくねエよ」

「どうやら俺たちは、気が合うらしいなあ！」

「一緒にすんな。汚らわしい」

「女目当てで近づいたが、とんだ野郎がいたものだ。お前には用はないからとっと消えろお！今なら見逃してやる」

「つたく、自分が強いとでも言いたいのか？残念だが、オレはここから立ち去る気も、テメエとやりあう気もねエよ。願わくば、何も言わずただその道を通してくれるだけで

いい」

「アホか!?この俺がそんなことをさせるとでも!?!」

「そうか。バカにも伝わりやすいように言っただつてもりだったが、伝わらなかつたらしい。人語も理解できんやつは今すぐ動物園にでも帰つて芸の一つでも覚えてろ」

「お・れ・は!!人間だ!!」

「そうか。あまりのデカさだったもんだから、ゴリラと勘違い——」

オレが奴にとつての地雷を踏んだせいとか、目を真っ赤にし眉間に大量の皺を寄せた野郎は、一瞬でオレとの間合いを詰め、顔面目掛けて拳を振り下ろす。

それを間一髪、左足を下げ半身になり躲したが次に来た足払いに対応できず数十センチ宙に浮くと、奴はオレの顔を掴みコンクリートの地面に叩けつけた。

「クツ……………!!」

その衝撃に耐えきれず声を上げる。

「月島くん!」

「フッフッフツ、俺の怒りのままに、握力90キロの右手が握り潰したっていいんだぜえ？」

野郎はニタアつと笑みを浮かべるとギリギリツとオレの顔面を強く握る。

その痛みに耐えかね、奴の腕を掴み剥がそうとするもびくともしない。

まるで、深く根を張る大樹のように微動だにしないその腕は、海の家で世話になったおっさんクラスにある。

道理でオレが力負けするわけだ。

このまま握り潰されるのを覚悟したその時、オレのそばから離れたはずの氷川が自らのカバンを武器に野郎の顔面へと思い切り投げつけた。

「か、彼を離しなさい!!」

必死に訴える氷川だが、野郎は意にも介さず力を緩めることはない。

だが、目線はオレから氷川へと移り変わった。

「女！お前、そのカバンの中にチョコレートが入っているだろう？」

「な、なぜそれを……………」

「おいおい。テメエ、どんな嗅覚してんだよ。ト○コか？」

「俺は鼻がいいからな。特に甘いものが好物なんだあ……………」♪ どうせそのチョコレートも、この男に渡すものだったんだろう？」

「……………」

「んなわけあるかボケツ。第一オレたちはお前が妄想する関係じゃねえよ」

「嘘、だな。俺の鼻はそう言った類のものも嗅ぎ分ける。どうせだ、もし俺がこの男との喧嘩に勝ったなら、そのチョコを譲ってもらおう！どうだ？俺の喧嘩、買う気になったか？」

「馬鹿か。条件つてのは互いに利害が一致して成り立つもんだ。テメエだけの都合を押し付けてんじゃねえよ」

「ほお？ならお前は何を望む？」

「そうだな……………」このケンカのことを内密にする。今後一切語ることなく、墓場まで持つていく」これでどうだ？」

「クツクク……………」ハツハハハツ!!いいだろう！」

「交渉成立だな。なら、この手を退け——」

そう口を開いた途端、野郎はオレの腹部目掛けて拳を思い切り振るう。二度、三度、同じことを繰り返されオレはどうとう吐血する。

「カハツ……………！テ、テメエ……………！」

溜まりに溜まった怒りがさらに込み上げる。

それでも野郎は笑みを絶やさずオレ目掛けて拳を振るう。

「不公平だ！」　とでも言いたいのか？残念だなあ。誰も、一から仕切り直すとは言っていないもんなあ？ハツハハハハ！！」

「……………クズ野郎が————やっつてやるよ」

高らかに笑い声を上げる野郎にオレはどうとうブチ切れた。

振り下ろされた拳を掌で受け止め、逆の手で奴の頬に向けストレートを放つと野郎は鈍い声を発し、オレの顔面を掴む手が緩む。

その隙を見逃さず、手を払い、起き上がりざまにガラ空きの顎を両足の裏で蹴り上げた。

そのままオレは後方へ回転しながら退く。

数メートル距離を置き、野郎の方を向くと、口を大きく開け血を流し、両膝を地につけ白目をむきながら天を仰いでいた。

「どうやら、意識が飛ぶ寸前らしい。」

「どんな大男だろうと、急所への確に攻撃することができれば簡単に崩れ落ちる。」

それを再確認できたケンカになった。

意識が朦朧としている野郎に近づき、その顔面に足を乗せる。

「一つ教えてやるよクズ野郎。いくら腕っ節に自信があっても、薄汚ねえことバツカ考えてる奴ほどこうやって無様に敗北するんだ。わかるか、ゴリラ?」

「な……………ん……………」

「わからねえよな。なら、脳まで筋肉でできているテメエに分かりやすく教えてやるよ。オマエは————不良の風上にもおけねえゴミだからだ。ケンカだ何だどほざいてはテメエの都合よく解釈し相手を陥れる……………そんな奴が不良を語るのも烏滸がましい。とつとこの街から……………消え失せろ!!!」

オレは顔面から足を離し、その場で一回転して奴の頭を思い切り蹴り飛ばし、壁にめ

り込ませた。

野郎はピクリとも動かなくなり、この喧嘩に終止符が打たれた。

「クソが……………ペツ」

血まじりの唾を吐き、距離を置く氷川に声をかける。

「おいつ、大丈夫か？」

「それはこつちのセリフです！全く、またこんなに血を流して……………これを使つてください」

氷川はそう言うと、鞆の中からハンカチを取り出しオレに差し出す。オレはそれを拒否するように、口についた血を制服の袖で拭いた。

「要らねえよ。こんな傷、入院してた時よりよっぽどマシだ」

「しかし……………」

「それに、氷川が言ったことを否定してやっただろ？」

「そういえば、そんなことを言っていましたね。否定って、一体あなたは何をしたんですか?」

「オマエはオレに言ったな。『暴力は良くない』と。まあ、確かにその通りだ」

「……………えっ?何も否定してないじゃないですか」

「慌てるな。本題はここからだ。オレがいくら話し合いを持ちかけたとしても、相手側がそれを応じず手を出してきたらオマエはどうする?」

「それでも私は、交渉し続けます」

「ほお?なら今日みたいに、一方的に手を出されたとしてもか?」

「そ、それは……………」

氷川は対抗すると、口を閉ざした。

オレの言いたいことを理解したらしい。

「あれだけ頭に血の上った野郎だ。オレがどれだけ話し合いを持ちかけても拒否し続けていただろう。氷川の言う通りになっていたら、オレはあのまま顔面を握りつぶされてジ・エンドだったろうぜ?」

「……………」

「話し合いに持ちかける。言うのは簡単だが、これが難しいんだ。まず第一に、自分が相手より強くなくてはならない。自分より弱い奴の提案なんて受けるわけないからな。」

二つ目は自分の強さを証明することだ。手段は限られてるが、相手を殴り圧倒するのが手っ取り早い。自分が相手より強いことがわかれば、渋々従わざるを得ないだろ？」

「しかし、今日のあなたはそれを実行しなかった。それにもちゃんと理由があるのですか？」

「アレは………つい、カッとなっちまっただけだ。どのみち、あの筋肉ゴリラと話し合いはできなかつただろう」

「つまり、あなたに非があつたことは、認めるんですね？」

そう述べオレをじつと見つめる氷川。

この女はどうしても、オレにも悪いところがあつたと言いたいらしい。

返す言葉もないな。

「ああ、その通りだよ。いくらアイツが乱暴だったとはいえやりすぎた。そこは認める。悪かつた」

「……………素直に認めればそれでいいです」

心なしか、氷川の表情が穏やかになった。

この返答が奴にとっての最高回答ベストアンサーだったんだな。

「ところで、お前のカバンに入ってるチョコは誰に渡すつもりだったんだ？」

「えっ!? えっと……………」

氷川は焦り、カバンをぎゅっと抱き寄せる。

オレから視線を逸らし、何か悩んだ様子を見せると、カバンの中から少しクシャツとなった小包を差し出した。

「遅くなった上に少し汚れてしまいました……………日頃の感謝の印です。受け取ってください」

顔を真っ赤にしながら告げる氷川。

普段見ることのない照れたその様子があまりに面白く感じ、オレは盛大に吹き出す。

「な、何がおかしいんですか!？」

「いやあ、まさかオマエがそんな顔をするなんてなあ。これは驚いた」

「も、もうあなたには渡しません!!」

引つ込めようとする手を強引に掴み、物を受け取ると包装を剥がし中に入っている小さなチョコを口にする。

—— うん、少し溶けてるな。だが、それを差し置いても美味しい。

何事も器用にこなす奴だと分かっていたつもりだったが、まさか菓子作りまでできるとは。

普段はピリピリしてる癖に、こういった女らしいこともできたんだなと素直に感心した。

「ど、どうですか?」

「んあ? オマエの隠れた才能に驚いた」

「そうではなく、味は?」

「まるで、天から与えられた——」

「真剣に答えてください」

「……………美味かった」

「そうですか？なら、よかったです」

半ば強引に言わされた気もするが、まあいいだろう。

「月島くんのことです。松原さんや白鷺さんをはじめ、多くの女子生徒からチョコをもらったんでしょう」

「いや、オレが貰ったのは松原と白鷺だけだぜ？」

「そうだったんですか？少し意外です」

「まあ、生まれて初めてチョコをもらったんだ。欲張りはしねえよ」

「ところで……………誰が作ったチョコが一番美味しかったですか？」

「……………」

氷川の問いにオレは口を固く閉ざし、目も逸らす。

「月島くん？」

顔を近づける氷川を振り切り、全力疾走でこの場を去る。
ここでどの答えを出しても面倒になりそうだ。
そう判断してのことだった。

「ちよつと！私を置いていかないでください！月島くん!!」

氷川の静止も聞かずオレはただひたすら真っ直ぐ突っ走る。

「全く、何なんでしょうね。あなたに抱いたこの感情は……………」

第27輪 春は再び

季節はついに春を迎え、枯れきっていた木々に緑が色づき暖かい日差しが差し込むようになった。

とはいえ、まだ夜は冷え込むから夜にフラフラ出歩くのは控えている。

そして今日、オレは赤い半ヘルを被り愛車の ”CB400SS” に跨り海沿いの道を走行中だ。

もちろんただ走りまわるために乗っているわけじゃない。

目的は別にあるんだが、まずは今日が何の日か説明しなくてはならない。

3月14日。そう、今日は世間で言うところの ”ホワイトデー” というやつなのだ。

今までのオレにとっては全く関係のない行事だったが今年は違う。

物を貰ったからには返さなくてはいけない。

しかし、返すといっても何を選択すればいいのか？

ネットで調べるとアメやらホワイトチョコプレートを渡すものらしいが、あの三人はそれぞれ手作りをしてまで拘った。

そんな代物に適当に買ってきたチヨコを渡すなんて三人に失礼だろう。普段はチャランポランで適当な性格のオレだが、最低限の礼儀は持ち合わせている。そんな手抜きものを渡すなんて到底考えられない。では、どうしたか？

答えは単純。

別に物を贈るだけがホワイトデーじゃない。何かを奢ることだって構わないはずだ。そう考えたオレは三人に『カフエで好きなだけ奢る』と打診したところ、全員からO Kと返事をもらい今日を迎えた。

現地に集合、とは言ったがいくつか問題点がある。

一つは、足がなければ電車でないといけない店だということ。

氷川は問題ないだろうが、特に松原が心配だ。携帯すらバッグらせる程の方向音痴さ——電車を乗りかえる必要があるあの店まで一人でたどり着くのは不可能と断言している。

一応白鷺と一緒に着いていくとは言っていたが、どこか自信なさげだった。

まあ、別に問題ないだろう。

まさか ” 電車に乗るのが苦手 ” なんていうわけないだろうからな。

待ち合わせ時間の5分前に店の前に到着。

路肩にバイクを止め、店の前の扉に近づくと氷川の姿が目に入る。

「よお、氷川」

「おはようございます。月島くん」

適当に挨拶を交わし、奴の隣に立つ。

「もう来てたのか。まだ5分前だぞ？」

「早め早めに行動するのは当然のことです。あなたこそ、絶対遅刻すると思っ
ていました」

「バカヤロオ。友達ダチの約束を破るなんてことはしねえよ。まあ、あの二人も直に
来るだろう」

「ええ、そうですね」

二人の間に沈黙の時間が流れる。

ホントツ、コイツとは仕事以外だと何も話すことがない。

こんな真つ昼間では変な輩が出歩くこともないから、オレたちの間に割つて入るようなトラブルは起きそうにもないが、きて、何を話したらいいのやら……………。

そう考えていると、氷川の方から語りかけてきた。

「正直、今日は断ろうと思いました」

「何故だ？」

「あなたと関わっているとろくなことにならない。そう考えたからです」

「おいおい、人を疫病神みたいに言うんじゃないよ。オマエがただ巻き込まれ体質なだけだろ」

「ですが、最近はそういったトラブルもたまには悪くないと思いはじめました。もちろん、毎日続いているれば頭痛に悩まされていたでしょうけど……………。こういったことを”人生のスパイス”とでも言うんでしょうか？それが今は、不快だと感じることは無くなつたんです」

氷川から出た意外な一言。

堅物なコイツから出た言葉とは思えずキョトンとなる。

その様子を察してか、和やかに話す氷川はオレと目が合った瞬間顔を赤くし視線を逸らした。

「と、とにかく！あなたといると退屈しないと聞いたんです！」

「へえ、そうかよ」

「ええ！そうです!!」

必死に返す氷川にオレは思わず吹き出して笑う。

一年前、学園長を交えて対面した時は『オレとは絶対合わないタイプ』と一蹴した。

奴が女だったということもあつただろうが、なにより自分が一番正しいと他者を否定する態度がどうにも気に食わなかつたからだ。

それは、きっと氷川も同じだっただろう。

犬猿の仲。

オレたちの関係を言い表すにはピッタリな言葉だった。

だが、今は違う。

歪み合いながらも、しつかりとしたコミュニケーションをとり仕事仲間ビジネスパートナーと言えるまでの間柄にまでなつた。

この一年でお互い成長したんだろう。

語る氷川の表情にそれが全て滲み出ている。

オレがここまで変わっちまった要因は、氷川の存在が大きいのは間違いない。

少しは感謝しなくちやな。

「まあ、オマエが手綱を引いてくれるからオレが風紀委員としてやっていけたんだろう。これからもよろしく頼むぜ」

「……………」

オレが話すと氷川は急に黙り込み驚いた顔でオレを見つめる。

「んだよ」

「いえ、その……………何だか変だなと」

「お互い様だ。オマエとしんみりとした話をするのは、やはりダメみたいだ」

「だ、ダメってどう言うことですか!？」

「まあまあ。そう怒るなって」

感情の変化が激しい氷川を宥め、携帯を見る。

今は集合時間からおおよそ10分たった時刻。

二人の遅刻は確定したんだが、どうもオレの勘はこう囁いている。

『何かあつたに違いない』と。

そう考えていると、携帯に一件のメールが届く。

差出人は白鷺からだ。

「……………やはりな」

そう呟いたオレは路肩に停めてあるバイクに向かい、ヘルメットを被るとすぐさまバイクのエンジンをかける。

「月島くん!? 一体何を……………!」

「すぐに戻る。何かあつたら連絡をくれ」

氷川を置いていき勢いよく発進する。

白鷺から送られたメールには、単語で”三つ目の駅”、”広場”、”早く来て”と

記されていた。

どうやら勘は当たっていたらしい。

オレは二人の身を案じながらアクセルを思い切り捻り、全速力でぶっ飛ばす。



店からバイクを飛ばして数分。

カフェの最寄駅から三駅も離れた駅前広場に奴らはいた。

二人のチャラ男共に囲まれて――。

髪を染めチャラケた服装から察するにそこらの大学生だろう。

小つせえ女二人を束になってナンパしようとは、なかなかセコイ連中だ。

(これは、仕置きが必要だな……………)

オレは周りに人がいないことを確認し、バイクに乗ったまま集団へ突っ込む。

マフラー音を聞きつけて男は一斉に散り散りになり、横並びになる松原たちの前に並行して停車させた。

驚く松原たちだったが、オレがヘルメットを脱いだ瞬間その表情が変化する。

「よお。待たせたな」

オレは脱いだヘルメットをサイドミラーに引つ掛け、スタンドを立てる。

二人をナンパしていた男たちは齒軋りし、怒りを露わにオレを一点に見つめている。

「おいお前!!危ないだろ!!」

男の一人が声を荒げる。

「うっせえなあ。いちいち喚くなよ、みつともねエ」

「俺たちはこの子達と楽しく遊ぼうとしてただけだ!お前には関係ない!!」

「関係ない?大いにあるねエ。この二人とは今日お茶するって前々から約束してたんだよ。ほらっ、脈なしは帰った帰った」

オレは手で追い払う仕草を取ると、男たちの怒りは頂点に達したようで口々に罵詈雑言を浴びせる。

「嘘つくんじゃねえよ！この不良男が!!」

「お前みたいなヤンキーがこんな可愛い子と脈アリの方がおかしいだろ！とつとと消えろ!!この社会のクズが!!」

「ハツハハ、酷い言われようだなア。流石のオレも傷ついちゃうかも？クククツ」
「そんな冗談言ってる場合じゃないよお……………」

ふざけるオレに対し松原は動揺を隠せない。

白鷺はずつと無言を貫いているが、何を考えているかさっぱりわからない。
暴言を吐く男たちの前で数秒の沈黙後、作り笑顔を浮かべオレの腕を掴んだ。

「すみません。きょうだいと待ち合わせていたもので。ねえ、かなで？」

「……………はあ？テメエ、何言つて——」

「そ、そうだよ！久しぶりに会えて嬉しいな、お兄ちゃん」

松原も白鷺とは対の腕を掴み、ぎこちないながらも柔かな表情で話す。

一体、何が何やら……………。

未だ状況が掴めないオレの耳元で白鷺がそつと呟いた。

「いいから合わせなさい！あなたの言うことが信じられないと言うのなら、嘘でもついでこの二人に諦めてもらおうほかないの！」

「チツ、めんどくせえが仕方ねエ……………」

今のこの状況を簡単に整理しよう。

どうやらオレはこの二人のきょうだいという設定らしい。

二人の口ぶりだと松原は妹役、白鷺は姉役だと思いが……………まさかこの身長差で白鷺がオレの姉役な訳はない。

おそらくは双子。間違いなくそうだろう。

顔は似てないし性格だって全く似つかないオレたちだが、それ以外考えられん。

だからオレも遠慮することはない。

意を決して二人の演技に便乗する。

「すまねえなあ。随分と待たせちまつたらしいな。妹たち！」

「なっ……………!?!」

オレの言葉に白鷺は驚く。

「ケツ、なんだよ。仲良しきようだいだよ」

「なんか冷めたわ。行こうぜ」

そう言つて男たちは去つて行つた。

なんだか、乱闘にならず解決したのは随分久しぶりな気がする。

二人の姿が見えなくなったのを確認し、白鷺は怒りを露わにした笑顔でオレを問い詰める。

「月島く〜ん？」

「んだよ。オマエが合わせろつて言つたから演じてやつたんだろうが」

「私があなたの妹なんて、ドラマだとしても嫌だわ」

「こつちだつてテメエみたいな腹黒女の兄はごめんだ」

「ふ、二人とも……」

「でも、感謝はするわ。助けてくれてありがとう」

いつもなら険悪なままで終わるはずが、今日は白鷺が先に降りた。

「気にするな。オレが勝手にやっただけだ………とここで、オマエたちはなんでこんな場所にいるんだ？降りる駅はもつと先だろ？」

「うっ……」

「まさか——乗り換えができないのか？」

オレの問いかけに松原は苦笑いし、白鷺は視線を逸らした。

考えていた『まさか』が、現実に起きている。

どうやらこの女、電車に乗るのが苦手らしい。

芸能人だから、車での移動が多いからか？

いや、だとしてもあり得ないだろ。

昔はどうか知らんが、今は携帯のナビでどの電車に何時何分で乗ったらいいかがわか

るし、乗り換えだつて苦じやないはずだ。

……………あつ、そうか。松原れいがいがいた。

携帯のナビ機能を狂わす奴がそばにいたから、白鷺の携帯にもそれが移つたつてことか。

そうだとしたら、松原は本当に人間なのか疑つてしまう。

「携帯が使えないにしろ、駅員にでも聞けば済む話だと思うが？それに、駅にある路線図を見たらすぐわかるだろ」

「それが……………わからないのよ」

「はあ!？」

原因は白鷺本人にあつたらしい。

「松原ならまだしも、路線図が分からないつてどういうことだよ!」

「私ならまだしもつて……………」

「これだったら氷川に頼んで三人できてもらったほうがよかったな。あの時オマエが微妙な反応だった理由がよくわかったぜ」

「そこまで遠くなかったし、花音と協力してならいけると思ったのだけど………：………：現実には厳しいわね」

「松原と協力してる時点でオマエはジ・エンドだ」

「そうね、これからは気をつけるわ」

「私、そんなにダメかな………？」

「か、花音!?!別にあなたが悪いわけじゃないのよ?紗夜ちゃんに頼らなかつた私の責任で———」

「慰めてるとこ悪いんだが、今まさにその氷川を待たせてるんだ。とつとつオレは向かいたいんだが?」

「あつ」

二人は顔を合わせ、あたふたと駅に走る。

「いいか!?!ここから三駅先の駅だからな!間違つても逆走するんじゃないぞ!?!」

「うんっ!大丈夫!」

「次は失敗しないわ！」

二人は振り向きざまにそう告げ、駅の中へと消えていった。

「本当に大丈夫かよ……………」

心配そうに呟き、オレも元の場所へと戻る。

……………

……………

店に戻り10分ほどが経過したところで迷子の二人がようやく到着した。

氷川に深々と頭を下げる二人に氷川は『気にする必要はない』と宥め、全員で中に入店する。

その店の名は ”Charlotte”。

オレがずっと前に松原と来たあの店だ。

シックな雰囲気もガラガラの店内も、何ら変わらない。あの時のままだ。オレたちは適当な席に座り、メニュー表を開く。

「今日は好きなものを頼め。ホワイトデーのお返し、というやつだ」

「あらっ、そういうことなら遠慮なく。すみませーん、ここで一番高い紅茶とケーキをお願いします」

「おいっ、テメエ！」

一切容赦のない白鷺の注文。

「なら、私はロイヤルブレンドと日替わりケーキをお願いします」

以前と同じメニューの松原。

「すみません、こういったところには行き慣れてなくて、その……………何を頼めばいいのかわかるか」

一人困惑する氷川。

「気にすることはないわ。好きなものを頼めばいいのよ。」

「オマエはもつと自重しろ」

「ここのお店はどれもすごく美味しいんだけど、紅茶とケーキの組み合わせがおすす
めだよ！」

「そうですか、ならこの、アップルティーと日替わりケーキでお願いします」

「全員決まったな。ならオレは、マスターのセンスに任せるぜ」

マスターは全員の注文をメモし、キッチンへ場所を移す。

すべてのメニューが来るまで、オレたちは談笑することにした。

「それにしても、オマエら3人とこうしてテーブルを囲うことになるなんて、夢にも思
わなかったぜ」

「それはこちらのセリフです」

「それはこちらのセリフよ」

オレの発言に氷川と白鷺が横槍を入れる。

二人の反応とは対照的に、松原はなんだか嬉しそうに頬を緩ませていた。その様子を不思議に思い本人に問う。

「何がそんなに嬉しいんだ？」

「えっ？ええつと……………」

松原は上の空になり考える素振りを見せると、すぐに返答をする。

「この一年で、みんなとこんなに仲良くなれてよかったなあって思って、つい嬉しくつて……………」

「うふふ。その通りね」

「私も同じことを考えていましたよ」

松原の返答に二人が相槌を打つ。

思い返せば、この一年でいろんなことがあった。風紀医院になり、氷川と仕事仲間になったこと。

理不尽教師、藤村への報復。

夏休みのアルバイト。

文化祭の演劇練習。

何も無い日常も含めるといくら数えてもキリがない。

そんな濃すぎる日々をコイツらと過ごしてきた。

そんな高校生活も残り一年——。

つまりは、この3人とこうやって笑い合えるのあと僅かと言うことだ。

あつという間と思う反面、後悔にも見舞われている。

”女嫌い” という理由だけで、オレは最初の一年を無駄にしてしまった。

今となつては本当にくだらなかつたと思う。

昔のオレでは絶対に考えられないようなことだな。

様々な考えを持った多種多様の人間との関わりを経てオレは大きく変わることができた。

残りたつた一年。

いや、高校生活が残り一年だ。

たとえ卒業したとしても、オレたちの関係が切れることは決してないだろう。

大学、そして社会人になつてもこうしてテーブルを囲い昔話に浸るのも悪くない。

「なあ、オマエら」

オレの言葉に全員の視線がこちらに向く。

「これからよろしくな」

裏のない本心から出た言葉。

その発言に悪くいう奴は決していない。

「ええ、こちらこそ」

「私こそ、よろしくお願いします」

「奏くん、よろしくね♪」

そういうしていると、マスターが注文した品を全て持ってきてテーブルに綺麗に添えた。

「さあ、食べようぜ」

オレたちは甘美な品々に舌鼓を打つ。

第28輪 蕾たちの開花

「——あつ！あつたよ！！ほらっ、あそこ！」

松原が興奮しながら前方を指差す。

その指し示す方を向くと、デカイ掲示板にそれぞれの生徒のクラス分けが表示されていて松原のクラスはA組と記載されていた。

「うふふ、今年も同じクラスね。花音♪」

隣で笑みを浮かべる白鷺もどうやらA組らしい。

「やったね、千聖ちゃん♪」

「私は……………いえ、私もA組でした」

「ほんとっ!?すごい偶然！」

仕事仲間ビジネスパートナーの氷川もどうやら二人と同じクラスだったようだ。

この流れだと、もしや――

「……………そのまさかだったようだな」

オレは呆れたようにそう呟く。

A組の名簿にキチンとオレの名前も刻まれていた。

去年までは氷川だけ別クラスだったが、今年からはこの四人全員が一緒らしい。

「やった！みんな一緒だ！」

誰よりも大はしやぎする松原。

何がそんなに嬉しいのか理解できないがコイツの言い分はわかる。

松原の性格上、1人だけ別のクラスというのとはとても寂しいことなんだろう。

まして、オレたち3人が同じクラスなら尚更だ。

「まあ、退屈はしなさそうだな」

「月島くん。そんな呑気なこと言って大丈夫なの？」

「ああ？何が言いたい？」

「今までは別クラスだった貴方の飼い主が同じクラスになったことを忘れたのかしら？」

「別に、大したことじゃないだろ。風紀委員の仕事さえサボらなければ――」

「授業中の居眠り。サボり。テスト勉強。遅刻がなくなったのは結構だけれど、今までできたことができなくなるのをわかっているの？」

白鷺の言葉でようやく思い知らされる。

やばい……………このままだと、オレも真人間に調教されちゃう。

「そうですか……………月島くん、あなたは今までそんなこともしていたんですね……………」

唐突に放たれる殺気。

青い炎のようなオーラを身に纏い、頭から角を生やしたその姿はまさに鬼。

鋭く向けられた眼光に目を逸らす。

いや、目が合わずともこのまま突っ立っていけば殺られる!!

野生の勘がそう囁き、オレは一目散にこの場を去ろうと駆け出した。

しかし、鬼はそれを決して逃さない。

まるで猫の首を掴み上げるかのようにオレの足を地面から離すと、いつの日か使った

首輪を強引に付けた。

思い出したくもない圧迫感。

オレはまたコイツの下僕いぬと化したようだ。

「……………なあ」

「なんですか」

「まだ何もしてないんだが?」

「何もって、私から逃げようとしていたでしょう」

「あんな状況、誰だつて尻尾巻いて逃げ出すだろ」

「私に嘘をつきましたね。これまでの行いも含めて、今日は長時間正座でもして反省してもらいましようか?」

「おいおい、勘弁してくれよ……………」

「ダメです」

淡々と会話を続ける氷川。

こうなったら、梃子を用いても考えが変わることはない。

「……………ちつ、わーっつたよ」

「その前に、まずは入学式です。風紀委員長として、新入生の見本となるような格好で参加してください」

「わかったから、この首輪外してくれよ。息苦しくて仕方ねエ」

オレが首輪を指さすと、氷川は小さいカギを手に持ち鍵穴にそれを差し込み少し捻る。

カチャッとキーが外れる音が鳴り、首元の圧迫感が綺麗さっぱりなくなった。

数分ぶりの開放感。

しっかし、氷川がまだあんな物騒なものを持っていたなんて驚きだ。

これはまた、警戒が必要なようだ。

「松原さん、白鷺さん。すみませんが、私たちはこれから体育館へ入学式の準備をして

きます。また後ほど、教室でお会いしましょう」

「ええ。わかったわ」

「頑張つてね！」

オレたちは足を進める。

「松原ー。くれぐれも迷子になるなよー」

「さ、流石に校舎内は大丈夫だよー!!」

去り際にそう捨て台詞を吐くと、松原は顔を真っ赤にし必死に訴える。

松原の ”大丈夫” は少しばかり………否、全然信用できない。

1人にしておくにはあまりにも危険だ。

そう言った意味では、目の届く範囲で見守れるオレたちが同じクラスで良かったと思
うよな。



「し、新入生の、みなさん……………ご入学……………おめでとう、ございます」

プラチナが途切れ途切れながらも挨拶をする。

今日のメインイベントでもある入学式。

高校生活はじめての行事に一般だと真面目な態度を取り繕うものなんだが――

――今年の新入生は頭のネジが外れた奴らが多いようだ。

現に、プラチナの言葉に耳を貸す新入生はいるものの、やはりイレギュラーは存在する。

「それでさー！ここの喫茶店がー……………！」

「お前みたことある！あの中学出身だろ？」

「昨日見たテレビが面白くってさー！」

隣同士で面白おかしく話すその笑い声はプラチナのマイク越しに発せられるか弱い声に引けを取らない大きさだ。

風紀委員長としてこの行事に立ち会ってはいるが、不愉快で仕方がない。

「……………」

腕を組み眉間に皺を寄せている様子から察して隣に着座する氷川もオレと同じ気持ちらしい。

「あ、あの……………みなさん、静かに……………」

壇上で困惑するプラチナ。

一応カンペがあるらしいが、どうやらそれを読み上げるには精神的に厳しいように見える。

そう考えたオレはゆっくりとその場から立ち上がり、同じペースで壇上へ向かい足を進める。

途中、止めに入ろうとする教師もいたが全てスルーし、新入生全員の視線がオレに向けて一点集中しプラチナの隣まで歩み寄る。

オレが近づいたこともわからないのか、奴の目はグルグルと渦を巻き落ち着かない様子。

そつと耳元に口を近づき誰にも聞こえない音量で声をかける。

「あとは任せろ」

プラチナの目が元通りになり何も言わず深々と一礼すると、駆け足で壇上を去る。

この一連の行動に会場全体がどよめきを上げ始めた。

そんな空気を一刀両断するかのようには、オレはこう切り出す。

「えー、初めまして——クソガキ諸君」

マイク越しに伝わる言葉に会場がしんと静まり返る。

掴みは大成功。

このままの勢いでオレは話しを続ける。

「オマエたちは中学を卒業し、大人への階段を一步踏みしめた。だが所詮はたかが一歩だ。オマエたちは大人になったと錯覚してるに過ぎん。」まだまだ未熟なクソガキ” という称号がお似合いだろう？」

オレに対して向けられた視線の中で、まるで針を突き刺すように鋭く向けられた新入

生に向け、さらに言葉を重ねる。

「どうやらこの中にも、自分が完熟した大人だと勘違いをしている奴もいるな。染髪やピアスはまだいいとして、タバコを持つてる生徒もいるだろ？胸ポケットにでも隠してるつもりだろうが、その形状で丸わかりなんだよ。つたく、その歳で肺を汚してバカな野郎共だ」

オレが指摘した生徒たちは眉間に皺を寄せ、今にもオレへ殴りかかろうとイラついている様子が見て取れる。

「ここは数年前まで由緒正しき女子校だったのは周知のことだろう。だが、共学化したことも相まって、水面化で行われた悪事も浮き彫りになった。教師によるどの過ぎた指導や生徒同士のイジメ、この場では話せない真つ黒なことも多々あったな。今回はそれに加え未熟なガキのお守りときた……誰の影響か知らんが今年は不真面目な生徒が多いように思えるな」

ため息混じりにそう話すと、イラついていた生徒たちがオレに向かって怒号を発し始

めた。

「何様だお前は!!」

「引つ込め!!」

「ボコられてえのか!?!」

そんな声もオレにとつてはどこ吹く風。

何食わぬ顔で大きく息を吸い、マイク越しに叫ぶ。

「よく聞け!・喚き散らかす野郎共!!」

スピーカーから放たれる大音量の声が会場を包み、全員の鼓膜を揺らす。

「テメエらがこの学校で何年留年しようが、ボツチになろうが構わねエ。だがな!生徒に危害を加えたり、犯罪に手を染めようとする奴はオレが許さねエ!風紀委員長の名において、オレが”制裁”してやるよ。それに不満があるならいつでも相手になるぜ?さあ、かかってきな」

オレが手招きし挑発するようにそう言うと、新入生の1人が叫びながら壇上に向かい走ってきた。

「うるせええええ！」

オレは壇上から飛び降り突進してくる新入生の襟を掴み、勢いを殺すことなくそのまま背負い投げをする。

派手に背中を打ったからかピクリとも動かなくなり、体から手を離す。

「さあ、ほかに希望者は？」

小さく笑いそう問うも、立ち上がっていた生徒たちは皆大人しく着座した。どうやら、今ここで大喧嘩するのを躊躇ったようだ。

「……………オレからは以上だ。各々、青春を謳歌しろよ」

そう言い捨てオレは道のど真ん中を歩き会場を去る。

.....

.....

今日の大まかなノルマは全てこなし放課後を迎えた。

入学式と始業式があつた影響で今日は午前中で帰れるはずなんだが、風紀委員^オ長にそんな安息な時は訪れない。

今も学園長室のソファに座り氷川の説教を受けている真つ最中だ。

「あなたは.....本っ当に.....!!」

怒り心頭の氷川。

言いたいことはわかる。

だが、キレてばかりだと眉間に寄つた皺は2度と戻らなくなるぞ？

.....なんて冗談はもちろん言わん。

火に油を注ぐような愚行だからな。

「悪かったとは思ってる。だが、あのまま放置してたら入学式は崩壊してただろ？」
オレは反省する素振りを見せつつも、ありのままの気持ち伝える。

氷川もそれをわかっているから、これ以上何も話さずオレの正面に座り腕を組む。

「しっかし、今年に変な奴らが多くて困るな」

「確かにその通りですね。あの風貌や言葉遣い………まるで誰かを彷彿とさせるものがありましたね」

そう話す氷川の視線がオレに向く。

はいはい、その通りだっつーの。

全てはオレの責任だと言いたいんだな、この女は。

「別に、奴らに勧めて入学させたわけじゃねえよ。それに、奴らは顔すら知らねエ赤の他人だ」

「それはもちろんわかっていきます。しかし、あなたのその格好を直すいい機会だと思いませんか?」

「オレが正せば奴らも変わるとでも?」

「そうです」

「ハッ、そんなに上手いかねエから」不良「は存在するんだろうが」

「いずれにせよあなたはこの学校を代表する生徒会役員、それも風紀委員長です。一般生徒の手本となるように努めるべきですよ」

「なら、今度の生徒会役員会議で服装や頭髪の項目をゆるくするようにプラチナに頼んでみるかな」

「そういう問題では——ツ!」

氷川がそう話した途端、学園長室の窓がパリンツと派手に割れる。

急いで駆け寄ると、そこには硬式の野球ボールが転がっていた。

『野球部員の1人がボールをかつ飛ばして窓を割る』なんてシチュエーションが思い浮かぶが、グラウンドはこの窓から見えることはない。

明らかに、故意に行われたものだ。

「月島奏ええ!!今すぐ降りてこい!!」

窓の外から叫び声上がる。

どうやらオレの行動は筒抜けらしい。

「月島くん、これは一体……………」

隣で怯える氷川。

唐突の出来事に困惑している様子だ。

「……………どうやら奴らを躡ける必要がありそうだ。おい氷川。ここで待つてろ」

「えっ?」

そう言い捨て、オレは窓から勢いよく飛び降り高さ7メートルほど下にあるアスファルトへ綺麗に着地する。

それと同時に、同じ制服を着た複数の不良たちがオレを囲み今にも喧嘩が勃発しようとしていた。

「よお、入学式以来だなあ」

不良の1人がニヤリと笑いそう話す。

「盛るなよ。前座が」

小さく笑いそう眩くと、その不良は前に出てオレを見下ろす形で立つ。

そして、野太い力み声と共に放たれた拳を片手で受け止め辺りにパシーンつと高音が響いた。

「へえ、今のを受け止めるか。流石だな。」
不死身アの暴君デッ さん

感心するかのように話すこの不良はどうやら、オレのことを知っているらしい。
いや、それは全員と言ったほうがいいか。

オレの異名を口にしても、誰一人怯む様子はなかった。

「ふっ、お前をぶっ倒すのは難しそうだなあ」

「ククツ、お前らを片付けるのは楽そうだなあ」

「ぐっ……………!!」

あからさまな挑発に男は怒りをあらわにする。

「オレに正面から殴りかかってくる度胸は褒めてやるが、生憎オレは目的もなく殴りつける趣味はねエ。わかったらその拳を引っ込めろ」

「そんな趣味がなくても関係ないぜえ？だっってお前は今から、この人数を相手にしなぐちやならねえんだからなあ!!」

不良たちが声高らかに声を上げる。

「いくぞおおおお!!」

先陣に立つ男の声のもと、全員が襲いかかる。

「仕方ねエ、”先輩に対する礼儀 を教えてやろう。その身体に、忘れないようになあ！」

オレはその場に逆立ちする要領で両手をつき、体を思い切り捻り足を高速回転させる。

踵はヤンキーたちの顎に綺麗に入り、1人、また1人倒れていく。その数が10を数えたところで全員が襲いかかるのをやめ、一步後退する。

その様子を見てオレは両手を地面から離し、数秒中に浮いた後両足をつく。

「どうした？もう終わりか？」

オレが一步前へ進むと不良たちも後退する。

額からは冷や汗を流し、今にも逃げ出しそうな勢いだ。

もちろん、そんな真似を許すオレではない。

全てこの場で片付ける。

「デメエらも不良の端くれなら逃げずに立ち向かってこいよ。そうやって集団でいる

から強くなれねえんだ。少なくともオレがこの学校に在籍する一年間で、本物の ” 不良 ” ってやつを教えてやるよ」

そう言い残し、後退る不良たち目掛けて猛ダツシユし全員の頬を両の拳で振り抜く。全員を殴り倒す頃には、その様子を見かねた氷川が先生に事情を伝え、血相を変えて駆けつけていた。

不良たち with オレは、全員生徒指導室に連れて行かれこつぴどく怒られた。

最終的な処罰は学園長に任せるとの結論に至ったが、あのハゲは今急用ということでこの学園にいない。

もしあの場に学園長がいて、ガラスの破片が頭に刺さったなんてことが起きていたら………もつと大ごとになっていただろう。

そこは不幸中の幸いと言える。

(まあ、なんにせよオレが処分を受けることはないだろうな)

そう決め括り、顔を真っ赤にして怒る先生の言葉を右から左に聞き流した。

第29輪 杏

「『入学式後の暴行騒ぎで新入生たちが一週間の停学処分。その騒動を止めたのは風紀委員長!』か……………」

廊下に掲載してある新聞部による記事。

そこには、どこから撮ったかわからない写真が添えられていてもちろんオレが写り込んでいた。

大々的に取り上げられたこの事件は瞬く間に学校中へと広がり、オレは下級生から恐れられる存在となったようだ。

「うふふ。よかったわね♪」

こちらに揶揄うような笑顔を向ける白鷺。

言葉と表情が全く一致していない。

「何がよかったのか説明してもらおうか」

「何って、あなたが悪いなんて内容はどこにも見当たらないからよ？」

「それはそうだが、せめて掲載するなら本人の許可がいるだろ普通」

「その記者たちは拒否されると思ったからじゃないかしら。ほらっ、月島くんっていかにもおっかないから」

「人をまるで怪物みたいに……………」

「怪物というよりは、化物の方が近いわね」

「変わらねエじゃねえか!!」

「うふふふふふ」

この女はほんつとうに性格が悪い。

もう悪魔だ悪魔！洗っても洗っても落ちることもない腹黒い性格を持った小悪魔だ

！

黒い翼やら黒いツノが生えていても全く驚くことはないだろう。

「それにしても、新入生たちは処分を受けたのにあなたは何もなかったのね」

「当然だろ。理由が理由だ。正当防衛って形でなんとか認められたけどな」

「今回も、ちゃんと目撃者をつけたのね」

「万が一のことがあるからな。だが、どうやら暴力というやつは ” 悪 ” として捉えられるらしい」

「当たり前じゃない」

「アホか。暴力にも色々あんだよ」

「色々つて?」

「それは——」

オレが語り始めたその瞬間、朝礼のチャイムが廊下に鳴り響く。

「続きはまた後でだ。とつとと教室に戻るぞ」

「ええ。楽しみにしてるわ」

オレは白鷺の前に出て歩み始める。

教室に入ると担任は教壇に立ちクラスメイトたちもすでに着席していて、オレたちも静かに腰を下ろす。

そういうえば、昨日は入学式の出来事が濃かったから気にならなかったが、オレの左隣

の席が二日続け空席だ。

このクラスは全員合わせて35人。

周りを見渡し数を確認するが、やはり数に間違いはない。
だとしたらまさか……………。

「今日から授業が始まりますが、その前に……………入ってきてください」

担任が廊下の方を向きそう声をかけると、1人の男子生徒が入室する。

整えられた金髪に黒い瞳。背丈は170センチあるかないかでどこかキラキラとしたオーラを身に纏っていた。

その生徒は担任の隣に立つと元気発刺といった感じで自己紹介を始める。

「はじめまして！大阪から転校してきました、杏井きょうい 朝陽あさひです！今日からこの学校、そしてこのクラスでお世話になります！不束者ですがよろしくお願いします！」

深々と頭を下げる関西からの転校生にクラスメイトたちは拍手を送る。

「杏井くんの席は、月島くんの隣です」

「わかりました！」

転校生は咳ではなくオレの方へとゆっくり歩み寄る。

「月島 奏くんだよね。どうぞよろしく！」

柔かな笑顔で差し出された右手。

間違いなく握手を求めているんだろう。

大勢の目の前でこうも堂々とやられると、こつちも対応せざるを得ないよな。

「ん」

オレはその手を仕方なく握る。

「ふふふ。仲良くしようね」

なんてコミュカの高い爽やかな転校生だ。

きつと前にいた学校でも最上位グループでクラスを仕切っていたに違いない。これでスポーツも勉強もできたらと考えると、未恐ろしい奴だ。

「杏井くん。そろそろ着席してくださいね」

「あつ、すみません」

転校生はそう言い、オレの隣の席に腰を下ろす。

数少ない男子生徒の追加にこのクラスはどうなるのか――。
きつと、争奪戦が勃発するのは間違いないだろうな。



授業は恙無く進められ、昼休みを迎えた。

転校生はクラスの女子たちに囲まれキヤーキヤーと喚く。

どうもこの甲高い声が苦手だ。

思わず耳を塞いでしまう。

それにしても、アイツがかなりできる奴なのは十分に理解できた。授業は至つて真面目に受けてるし、体育でやったバスケットでも楽々ダンクできるぐらいの身体能力もある。

要するに完璧超人という奴だ。

女子生徒が群がるのも頷ける。

もちろんだが、転校生を羨ましがってるわけではない。

未だに ” 女 ” に少し抵抗があるし、恋愛なんてとてもする気が起きん。

「あつ、かなでくん！今日もお昼一緒にどうかかな？」

群れる女子生徒をかき分け、松原が声をかける。

そばにはもちろん、白鷺もいる。

「ああ。構わねえよ」

「なら、私もお邪魔するわね」

「オマエは風で飛ばされるなよ。ただでさえ小せえんだから」

「なっ!?!失礼ね！」

「氷川はどうする?」

「私は生徒会の書類整理があるのでここに残ります」

「そうか。まあ頑張れや」

そう言い残し、オレは2人を連れて屋上へと向かう。

夜はまだまだ冷え込むことが多いが、日中は陽の光が程よく差し込み体を暖めてくれる。

冬の間は寒すぎて来れたものじゃなかったが、この気温なら寝転がっても寒さを感じることはないだろう。

ようやく、待ち侘びた春がやってきたのだ。

「それにしても、あの転校生には恐れ入るな」

オレの第一声に2人は黙々と飯を食べながらきよとんと首を傾げる。

「何よりヤベエのがあのコミュ力だな。顔色一つ変えずに全員と会話してやがった。あれが演技じゃなけりやあ、俳優だって目指せるんじゃねえの?」

オレはそう言い、白鷺に視線を向ける。

子役から ”演技” というものを熟知してるであろう奴に聞くのが一番だと思っただが、どこか表情は険しい。

「本音と建前の使い分けは誰にだってできるわよ。それに、あれほど過度に迫るのは彼にとつて失礼でしょう」

「転校生だから目新しいさもあるんだろうな。オレだって中学の転校の時はさぞ注目を浴びたぜ？」

オレの場合は紆余曲折色々あったがその全貌を知るのは極一部だ。

まさかあの転校生にそんなやましいことはないだろう。

「それに、関西から来たって言つてたのに全然関西弁を使わないね」

「どうせ親が転勤族なんだろう」

「凄いなあ。引越しのお金とかすごくかかりそう……」

「まだ本人と詳しく話せてないからそこまでは分からないけどな。なんにせよ、害が

なかったらそれでいい」

「害、ね……………」

「ん？どうした白鷺」

「いえ、何も無いわ。それで、あなたにとつて杏井くんの印象はどうだったのかしら？」

「『明るくて人当たりのいい爽やかくん』って感じだな。オマエらはどうなんだ」

「えーつと……………キラキラした人、かな」

「別に。興味なんてないわ」

「おいおい。酷エ言い方だな」

「本当の話よ」

そつぽを向き再び箸をすすめる白鷺。

オレの直感だが、おそらくこの二人は面識があるに違いねえ。

白鷺がこれほど嫌悪にするってことは余程の碌でなしかバカな野郎なんだろう。

……………そういえば、そんな男が他にもいたな。

作られた笑顔を顔面に貼り付け、色々ちよつかいを出されてきた日々。

あれも嫌われているうちの一つに入るんだろう。

白鷺が嫌いに思われているであろう当の本人は考えるのをやめた。別に、オレも白鷺のことは好きでも何でもないからな。嫌われようが別に構わん。

「まつ、問題ごとを起さなければそれでいい」

たとえ人に嫌われようがオレは気にしない。

チャホヤされてる他人のことなんて羨ましいとも思わない。

少なからうと、オレが信頼できる奴がいればそれでいいんだ。



Pastel*Paletteのバンド練習が終わり、夜道を歩いていると携帯に着信が入る。

差出人は不明。

「……………もしもし」

私がそう返答しても発信者はクスクスと笑っているだけ。

明らかな迷惑電話。

嫌がらせの他にありえない。

「何か用かしら？あなたと話すことはないのだけれど」

少しキツク言うと言信者は笑いながらもようやく言葉の口にする。

「いやあ、クラスで見た時は心底驚いたよ。まさかこんなところで再開するとはねえ」
「それはこちらと同じことよ。杏井くん」

そう、電話の主は杏井朝陽。

今日、花咲川にやってきた転校生だ。

彼の番号は知らなかったけれど向こうはどこで手に入れたか、私にピンポイントでかけてきた。

「今も女優をやってるんだろ？いや、どちらかというところは今はアイドルの方が忙しいのかな？テレビでも最近よく目にするよ」

「……………あなたはどうかのかしら？最近はめっきり名前を聞かなくなったのだけど」

「主役を張るほどではないがちよくちよく舞台に立たせてもらってるよ。やはり僕は演じることが好きだからね」

彼と出会ったのは私が中学生だった時まで遡る。

子役から本格的な女優として仕事をもらい始めた時、杏井くんと出会った。

私は主役の友達役として。

彼はエキストラとしてドラマに出演し、同じ歳ということで接点を持ったのだけど彼にあまりいい印象はない。

どこか自分に酔った、あまりにも芝居がかりすぎている演技にあまり好感を持てなかったのだ。

そのこともあって、彼が重大な役に選ばれることは決してなく、このような関係性がしばらく続いた。

そんな時だった。

ドラマの撮影が終わったある日、2人きりになったところを見計らって告白してきたけど、特に関わりもない彼に私が惚れる要素はどこにもなく気持ちに応えられなかった。

それから彼はしつこく私を遊びに誘い、渋々付き添いはしたけどそれ以上の進展はなかった。

その仕事がなくなってからは完全に関係が絶たれもう2度と会うこともないと思つてたけど……………運命とは実に残酷だ。

こんな悪男とまた顔を合わせることになるなんて——。

「そう。差し詰め、クラスでのあなたは『明るく人当たりの良い爽やか系男子』と言つたところかしら」

「その通りだよ。これからの学校生活に胸を踊らせる転校生……………僕にピッタリの役だとは思わないかな？」

「はあ……………あなたは相変わらずなのね。そういえば、あなたのその演技にまると騙された素人が1人いるわ」

「1人？違うだろ。クラス全員がそうさ！」

どこか自信満々に語る彼。

正直、今にでも電話を切つてやりたい。

「私の電話番号をどこで聞きつけたかまでは聞かないわ。だけど、一つだけ教えてちょうだい」

「ほお？何かな？」

「あなた————一体何を企んでいるの？」

強調するように発したその言葉。

彼は沈黙することなくすぐさま答える。

「別に、何も？」

「嘘をつかないで！私は知ってるのよ………あの事件のことを!!」

「やだなあ。そんな昔のことを掘り返すことないだろうに。僕の言い分を伝えさせてもらうと、ここへ転校してきたのは本当に偶然さ。勿論、キミに危害を加えることは決してない。改心したんだよ。僕はただ、残り少ない高校生活を楽しまたいだけさ」

白々しいその言葉の数々に怒りが込み上げる。

「……………あなたの言うことは信じることができないわ。もし、変なことを考えているのなら今すぐやめた方がいいわ」

「どうしてだい？」

「——不死身の暴君があなたを始末するからよ」

語尾を強くし放ったその名前。

しかし、彼は決して怯む様子を見せない。

「ふふつ、怖い怖い。誰のことかさっぱりわからないが、”不死身の暴君”か

……………僕にもそんな呼び名がついたらカッコいいかなあ」

「彼を怒らせない方がいい。それだけは肝に銘じときなさい」

「僕の方こそ君の言うことが信じられないからね。これからじっくり見て考えるところよ」

「そう……………もう、あなたと話すことは何もないわ。それじゃあ」

「ああ。また学校で」

ブツンツ！

半ば強引に電話を切る。

緊張状態からようやく解放され、フーツと息を吐き肩の力を抜く。

一刻も早く月島くんに彼の正体を話したいところだけど………とても信じてくれそうになさそうね。

それに、そのことが彼の耳にでも入ったら私は終わりだ。

クラスメイトだけにとどまらず学校全体から嫌われ者のレッテルを貼られるのは間違いない。

それだけは絶対に避けなくちや。

だって私は、彼のような底辺な人間に構う暇なんてないもの。

第30輪 白色の水仙

ネット社会の今、オレたち学生だけでなく老若男女に重宝されているYouTube^e。

幅広いジャンルに加え、テレビのバラエティ顔負けの面白い動画もあれば考察系で為になるものもあつて長時間でもついつい見入ってしまう。

これらの配信者は俗に ” YouTube ” と呼ばれ皆に親しまれているんだが……………この中にももちろん害があるのは皆が知っていることだろう。

「なあオマエら。YouTubeってみるのか？」

とある日の昼休み。

いつも通り屋上でのんびりしている最中、氷川も加えた3人に尋ねてみる。

「YouTubeですか？いえ、ほとんど見たことはありませんね」

表情を一切変えず氷川は即答する。

まあ、妥当と言ったところから。

バカ真面目なコイツに対して聞く内容じゃなかったな。

「私は、海の生き物の動画とかよくみるよ。ダイビングとか行ってみたいなあ♪」

「私もあまり見ないわね。それがどうかしたの？」

「いやな、オレらの一個下にY o u T u b e rがいるって噂を耳にしてよ。少し

……ほんの少しだけ気になっただけだ」

「そうですか。しかし、その歳で娯楽に身を捧げるのは私には考えられません」

「だろうな。氷川ならならそういうと思ったぜ」

「まさかあなたもY o u T u b e rになろうとしてるわけないわよね？」

「ハッ、バカ言え。通常業務で手一杯だっつーの」

動画の撮影に編集、チャンネル登録者数増加の為のキャラ作りなんて到底オレにできっこない。

なんだかんだ凄いなと思うな。

「その一個下の YouTuber さんのことなんです。以前生徒会会議でも話題にあがったことがあります」

「へエ。その内容は？」

「どうやら、生徒会長である白金さんに学校での動画撮影の許可を申請したそうです」
「燐子ちゃんに？」

「まず間違いなく学校側は承諾しないだろうからな。そいつの判断は間違ってるよ」

「それで、燐子ちゃんはなんて言ったの？」

「もちろんその場で返答はしなかったそうです。その後の対応をどうするかで討論になりましたが、満場一致で許可しない方針になりました」

「ふん、お堅い生徒会らしい考えだな」

「あらっ、それじゃあ月島くんならどうしていたのか教えてもらえないかしら？」

全員の視線がオレに集まる。

その中でも特に氷川の目が鋭くこちらを向く。

謝る気は毛頭ないし、誤魔化すつもりもないからオレは本心を話す。

「まずは、そのYouTubeの話聞いてからの方が良かったんじゃないの？『動画を撮りたいです』『ダメです』ってやりたいだけじゃあやりたい側は不満に思うだろう。どんな動画になるか分からないしよお」

「でも、生徒会が許可してたとしても先生たちが止めるんじゃないかな？」

「だからこそ生徒会に許可の申請をしたんだろ。もし教師陣に見つかっても、『生徒会長が許可した』とさえ証言したら、重い処罰の対象はプラチナに早替わりだ」

「責任の擦りつけ、ですか……………」

「ああ。姑息だが、理にはかなっている」

そう話していると、オレの携帯の着信音が鳴り響く。

発信者を見ると、杏井からだった。

「なんだ……………ああ——いいぜ。わかった」

数十秒話した後、電話を切る。

「誰からだったの？」

「杏井からだ。どうやら放課後に用があるらしい。氷川、今日は風紀委員の仕事は特に予定はなかったな？」

「はう」

「じゃあ決まりだ。もうすぐ昼も終わりだし、降りようぜ」

オレたちは鉄梯子を降り、教室へと向かう。

しかし向こうからコンタクトしてくるとは驚いた。

隣の席だからと連絡先を交換したばかりだったが、いきなり活用するとは………つづく奴のコミュ力には感心させられる。

それにしても——オレに用、か。

多少なりともオレのことは耳にしてるだろうし、厄介ごとに巻き込まれることだけは勘弁して欲しいところだな。



特に真面目に受けることもなかった授業を終え迎えた放課後。

担任の話が終わり、すぐさま杏井に呼び出され奴の横を歩く。

「それで、オレに一体何をしようってんだ？」

オレは憤然と澄ました顔で歩く杏井の顔を睨んでそう聞くと、奴は表情を変えずそのまま返す。

「キミに、会ってほしい人がいるんだ」

「会って欲しいだあ？まさかそいつの頼みでオレを連れてこうっていうのか？」

「その通り！何の接点もないキミと話すのは嫌悪されるだろうから、仲裁役として僕が選ばれたらしいんだ」

「転校して僅か数日の人間に仲裁役ねえ……………」

「あははっ、なんだかその人に信頼されてるみたいだね」

杏井の人柄だと難しくないだろうが、どうやって知り合ったのか気になるところだ。

「そういえばオマエ、新聞部に入ったんだってな。しがた文化部なんかに入って、何が目的なんだ？」

「僕はね、昔から記者をやってみたいと思つていたんだ。インタビュアーとも言うのかな？人と話すのが好きでね、つい人の核心まで迫つてしまうことがあるんだ。話している人からすれば知つてほしくないことも多々あるだろうけどね、一人で抱え込むなんてナンセンスだと僕は考えてるよ」

「なら訊くが、オマエはどうすべきだというんだ？」

「簡単なことさ。共感して貰えばいい。自分の考え、想い、意見。何でもいいんだ。そうすればまた交友は広がり、内容がより深く感じられるようになる。素敵だと思わないかな？」

「交友関係だとかはどうでもいい。だが、一人で何もかも抱え込むのは良くないというのは共感できる」

「それでしよう！それでしよう！」

目を輝かせながら顔を近づける杏井。

気持ち悪さしか感じられなかったから、強引に杏井の顔を引き離す。

しばらく歩くと、普段使われていない教室が続く人気の少ない廊下へとたどり着く。

しんと静まり返つたこの場所に、相反する雰囲気をかもちだす1人の男子生徒が仁王立ちしていた。

「来てくれてサンキューっす！きよーいパイセン！」

……………はあ？なんだ、この珍獣は？

歳上の相手に対して全く敬意が感じられ——いや、それ以前にオレたちをナメキつてると考えていい。

派手な金髪、ジャラジャラと鳴る金のネックレスにゴーグル型の眼鏡……………もう、何て言ったらいいのやら。

個性に個性と個性が重なってハンバーガーが完成してやがる。

「紹介するよ。彼は2年生の金田くんだよ」

「……………なあ杏井」

「ん？どうしたんだい？」

「このおかしな生き物は一体なんなんだ」

「ちよいちよいちよいちょくすい！ひつどい言い方ですねえ！オレっちこう見えて、YouTuberなんですけどお!!？」

どうやら噂の YouTuber はコイツだったらしい。

まあ、いかにも ”らしい ” と言う感じだな。

見た目のインパクトに関しては百点満点だろう。

「それで、オレに話ってなんだ」

「おーつと！早速本題入る感じいい？」

「……………いいからさっさと話せ。この廊下がオマエの血で汚れんうちにな」

「ひえ〜！こっわ!! ツツキーパイセンが恐ろしいことはオレツち知ってるもんねー

☆

「ツツキーパイセン……………!?!」

「金田くん。月島くんは多忙なんだし、手短に済ませたらどうかな？」

「ちえ〜、みんなせつかちなんだからあ」

頬を膨らませながら残念がる下級生に、正直今は殺意しか湧かん。

理由もなく殴るのは嫌いとは言ったが、オレは気が短い方だ。

つい、カツとなって物に当たることだって当然ある。

ただ腹が立つからという理由で殴り飛ばしてやろうかと本気で考えたのは初めてだ。

この場に杏井がいてくれてよかった。
もし一対さし一しだったたら、本当に廊下りやが真っ赤に染まっていたらどうからな。

「じゃあ話すね☆ツツキーパイセンには、オレツちの動画に出て欲しいのよ！」
「めんどくせえなあ」

「名付けて『オレツち、最恐のパイセンに喧嘩売られたww』!!どうよお?」

「喧嘩けんかだあ? テメエ、オレに勝てるかと本気で思ってるのか」

「いやいやいや、まさか本気で闘やるわけないじゃん! あくまでふりだよ! ふ・り!」
「つまり、金田くんが月島くんと喧嘩する様子を動画にしたいわけだね?」

「そのとおり! 一応企画書もあるから読んでちょ☆」

金田はそういうと、数枚の紙を手渡す。

手書きで書かれたその汚ねえ字をなんとか解読し、頭の中で整理する。

役割を言うと、金田が本人、杏井がカメラマン、オレが悪役らしい。

まずオレが金田と接触し、なんやかんやあった後、喧嘩になり金田がオレに殴り勝つてか——まあなんというか、完全にヤラセだとわかるような内容だな。

事実、本気の喧嘩をしたら金田がオレに勝つなんてことはまずあり得ない。

例えるなら、チャンピオンのポ○モンにトレーナー自身が戦うようなものだからな。金田もそれをわかって提案しているんだろう。

「結局のところオマエの目的はなんだ？」

「どどのつまり、オレツちが強いってことを視聴者に見せればそれでOKって感じ」
☆

「どうかな？引き受けてくれるかな？」

「つまり、オレが金田の強さの広告塔になればいいってわけか。別に構わねえよ」

「マジで!?!いやあ、ツツキーパイセンマジさい——」

「だが、オマエは本当にそれでいいのか？」

「……………へっ？」

奴の先回りした言葉に、金田は腑抜けた返事を返す。

「自分で言うのもなんだが、オレは殴り合いという観点において負けたことがねエ」

「おお、さっすが！」

「無論、その相手つてのも腕に自信のあった奴らだ。武器を使う奴もいた。2メートル

ル近い変人もいた。オレはコイツらを素手で沈めてきたんだ。さて、オマエにクイズだ。オレがオマエに負けたと知れ渡ればこの街の不良共はどんな行動を取ると思う?」

「さ、さあ?」

「オレ以上に強いと知れ渡れば、オマエの元に喧嘩自慢たちが集まるってことだ。毎日毎日の相手をしなくちゃいけない。体の保証なんてとでもできやしねエ」

「それはキチイなあ……………」

「それに、動画制作どころじゃなくなるだろうな。まあオレからしたら、余計な連中から絡まれることは無くなるだろうからありがたいんだけどな」

「うー………」

「これまでのオレの話を踏まえて、オマエは本気でこの企画を通す気なのか?」

オレの意思は伝えた。

危険性もわかりやすく教えた。

奴だつて理解しているはずだ。

常人ならここで踏みとどまってくれるだろうか……………。

「それでもオレっちはやるぜ!」悪を倒す正義の味方”なんてかっこいいし☆それ

に、そんな奴らに追いかけてられでもすればまた動画のネタになるしね☆」

「どうやらオレの考えは甘かったようだ。」

結局この男は自分の存在価値をアピールすることしか頭にないらしい。

己が身の危険を顧みない心意気には感心するが、周りの迷惑も考えるべきだ。

まずは動画を撮影するカメラマン。

金田に同行するとなれば当然危険な目に遭うのは目に見えている。

その時に金田自身が助けてやれば問題ないが、コイツにそんな力はないだろう。

1人で撮影できるなら問題ないが、人に頼む以上は誰かにやつてもらわないと奴の動

画制作は始まらないと見た。

次に学校の生徒たち。

オレ関連でちよつかいをかけられる輩が多いと氷川に聞いたことがあるが、それがさ

らに増えるに違いない。

”学生 YouTuber” で有名なこの男に近づこうとよからぬことを考える連

中もきつと現れる。

最後にこのオレ。

企画上は金田に敗北する予定だから、この動画を見た奴らはオレを『YouTuber

rに負けた貧弱野郎』というレッテルを貼るだろう。

ヤラセだと気づいてくれればそれでいいが、多少なりともオレが他人に見下されるのは癪だ。

それに、金田一行が万が一襲われでもすれば生徒会として今後の防犯対策を徹底するとかで仕事を押し寄せてくる。

面倒ごとになるのは絶対避けたい。

「……………好きにしろ」

呆れたように金田にそう言い捨て2人に背を向け歩き出す。

文字どおり金田は好き勝手にやるだろう。

別にそれで構わん。

奴にその気があるうとなかろうと、オレはオレのやり方で金田の依頼を遂行するだけだ。

そのためのプランは既に頭の中に描き切っている。

今からその下準備を始めるとしよう。

「テメエに似合った、ド派手な企画にしてやるよ」



迎えた動画の撮影日。

結局のところ、学校の許可は得ずプラチナにも極秘でやることにした。

万が一教師陣にバレてプラチナが今日のことを知ってたとすると最悪生徒会長を降ろされかねないからな。

関係のない奴は極力巻き込みたくない。

撮影に指定した場所は校庭。

集合時間も放課後すぐにした為、帰り支度を済ませ下校する生徒で賑わい、また教師たちも会議だなんだで忙しいからオレたちを気にする余裕もない。

目立つことが大好きな金田にとってはまさにうってつけの環境だ。
もちろんこれらを全て考え提案したのもオレなんだがな。

「おーっす！ツツキーパイセン☆」

集合時間きっかりにやつは堂々と姿を現した。

「来たな。じゃあ、早速始めるとするか」

「わかった。撮影準備に入るね」

「オレは持ち場に着く。終わったら連絡してくれ」

「うん。すぐ向かうね」

オレは杏井にそう言い捨てこの場を去ると見せかけ、野次馬たちの輪から外れた誰にも認識されない場所であることを見守る。

そんなことも知らずに杏井はカバンからカメラと携帯を持ち出し、金田に向ける。

カメラがYouTubeに投稿する用で、携帯は学校の掲示板に生配信する為のものらしい。

これも、あの3人の集まりの後に決まったことだ。

どうやら今日の様子を間近で見れなかった生徒たちのために見せたいとか言つて強引に意見を通してきた。

奴の考えてることなんて手に取るようにわかる。

要はヤラセではなく真正銘、オレを陥れる為に仕組んだことだろう。

その意見に対してオレは異を唱えることはしなかった。何せ、生き恥を晒すのはオレじゃないからな。

カメラが向けられる中、野次馬が次々と集まって来る。

携帯で写真を撮ったり、動画にしたり………有名人にあつたとするとすぐにSNSで呟きたがるクセはオレには理解できん。

「グッドモーニング、アフタヌーン、イブニング☆どうも ” マネヤン ” でつす！なんと今日は、オレツちの母校で企画を行いたいと思いまーす！」

金田の自己紹介と共に、群がった生徒たちが歓声を上げる。

自分の出身校で撮影をするなんてバカな真似だとは思うが金田のことだ、後のことは決して考えていないだろう。

奴の頭の中にあることは、自分の名前を売って売って売りまくって有名になることだけだろうからな。

「実はオレツちの高校には、不良たちから恐れられている男子生徒がいるんよね。ボクの一つ上で、入学式当日に新一年生の不良たち………20人ぐらいかな？を、1人

で全員薙ぎ倒したらしいのよ！じゃあ、そのこわーいパイセンについてインタビューしたいと思いまーす☆」

金田はそう言い、1人の女子生徒に近づきカメラを向ける。

「不良に恐れられてるパイセンについて何か知ってる？」

「えっと、すごく背が高く………あと、目つきがすごく鋭いです」

「なるほど。ありがと☆じゃあ、次！そのキミ！」

次々とインタビューする相手を変え、オレの情報を引き出す。

「まあご覧の通り恐ろしいパイセンだということが分かりましたよね？今日はそんなパイセンに対して、喧嘩を売ってみたいと思いまーす☆」

金田のその言葉に、野次馬たちは衝撃の声をあげる。

「理由は単純！オレツちの方が強いってことを証明するためだよ!!」

高々と発したその言葉。

野次馬たちを活気立たせる為には十分なものだった。

「オレツチ実は、ボクシングやってたことあるからワンパンで終わるかもね☆所詮は噂だから大したことないかも！」

こうなったらもう止まらない。

湧き上がる観客に対しオレは陰で呆れたようにため息をつく。

「それじゃあ早速行ってみよー！」

オープニングも終わり、杏井のカメラが降りたところでオレは所定の位置に向けて歩き出す。

それと同時に初めからずっと影に隠れていた氷川が姿を現しオレの横に並ぶ。

「準備は万全か？」

「ええ。ですが、本当にいいんですか？」

「当たり前だ。例え相手が人気者だろうが悪人は悪人だ。ちやーんとその悪行を晒してやる必要がある」

「はあ……………毎度毎度、月島くんの突拍子もない発想はどこから湧いてくるのか不思議で仕方ありません。決して良い成績とはいえないあなたは一体何を考えているんですか？」

「そうだな……………ひとまずオレは置いといて、世の中の大半は『勉強は嫌いで頭が悪い奴』か『勉強はできるが頭が悪い奴』のどちらかだとオレは思う」

「その根拠は？」

「『勉強は嫌いで頭が悪い奴』は言わずもがな、”バカ”と区別される。対して『勉強はできるが頭が悪い奴』はどうだ？学校の成績は良くテストの問題もスラスラと解くことができるだろう。だが、日常生活においては”バカ”と揶揄されるやつと同レベルな人間ばかりだ。数学なんていい例だろう。数字は嘘をつくことないから予め答えが決まっているが、こと人生においてはその限りじゃねえ。普段の生活で”解答”を迫られた時、大半の人間はどれが正解かで必ず迷う。完璧な回答を求めてな。分かりもしないクセに、バカな行為だぜ全く」

「つまりあなたはどれにも当てはまらない、特別な人間だと言いたいのですか？」

「特別だとは思ってねえよ。そうだな………あえて言うなら『勉強は嫌いだが応用が効く奴』だな。オレは回答を求められたときは全て「勘」で答える。例えその選択が間違っていたとしても別に構わん。それがオレの人生だからな」

「やっぱり、捻くれてますね」

「褒め言葉として受け取っておく」

そう話し切ったところで目的地へと辿り着いた。

「手筈通り、よろしく頼むぜ」

「月島くんも、どうかお気をつけて」

オレは廊下の角を曲がった階段のところでスタンバイする。

この後曲がり角で金田とぶつかり、オレがキレたところで金田と殴り合いになり、金田が勝つって流れだ。

廊下には既に奴の声が聞こえている。

いや、奴の声だけじゃない。野次馬たちもそのまま引き連れてきたようだ。

よしっ、こちらとしても都合だ。

「さあ、噂のパイセンはどこにいるのかなあ？」

声はすぐそこまで聞こえてきた。
出るなら今だ。

——
ドン。

オレと金田の体がぶつかる。

「痛ってて……………」

金田はオレとぶつかった衝撃で尻餅をつく。
オレは上から睨みつけるように見下ろす。

「おい。誰だテメエは」

威圧するようにそう問いかけると、金田は意にも介さずスツと立ち上がる。

「YouTubeのカネヤンツス。アナタが噂のパイセンつすね？」

「噂？なんのことかさっぱりだが、ぶつかっておいで謝罪の一言もねエのか？」

演じてすらいない普段のオレの態度。

まあ、流石にここまで悪いとは思っていないがな。

「パイセン、オレッち知ってるんだよ。パイセンが喧嘩強いことを」

「うるせえ。とつとと頭下げろや。蹴り落とすぞ？」

「オレッちのクラスメイトや友達もみんなビビってた。だから、喧嘩に勝ち続けて調子に乗ってるアンタを今ここでオレッちが沈めてやるよ!!」

その言葉に野次馬たちは歓喜の声をあげる。

芝居がかったこのセリフの後、喧嘩が始まる予定だ。

低く身構える金田に対しオレも首を鳴らし、仁王立ちで迎え撃つ。

「それじゃあ、いくぞ——」

「ちよーつと待った！」

「……………えっ？」

オレの唐突な言葉と態度に金田は腑抜けたような返事を返す。

「喧嘩なんてよくねえよ。それに、問題になるのはオレだって避けたい。仮にも風紀委員長だからな」

台本にはない言動。

金田が困惑するのも無理はない。

「だが、喧嘩に勝ち続けて調子に乗ってるのはイラツときたから物理的ではなく精神的にテメエを潰してやるよ」

親指を下に向け、ニヤリと笑う。

そんなオレに金田は耳元に近づきボソボソと話し始める。

「ちよつ、ツツキーパイセン!!こんなこと言つてなかつたじゃん!アドリブ入れないですよ!!」

かなり焦っている様子だ。

だが、オレはそんな奴を無視して言葉が続ける。

「まずは、これを見てもらおうか」

オレは廊下の端に隠して置いたプロジェクターの電源を起動させ、壁にその映像を映し出す。

そこには、あるSNSのアカウントの画面が表示されそれを見て金田の顔色が一気に悪くなる。

『氷川。次だ』

予め電話で繋げて置いた氷川にパソコン操作を頼み、次の画面を移す。

その画面とは、アップされた動画だ。

それらのタイトルは抜粋して以下の通り。

・未成年者が飲酒運転してみた

・不良集団とガチ喧嘩

・エアガンで通行人を狙撃してみた

くだらないものばかりだったが、中には犯罪とも取れる行為をした動画もある。

言葉による書き込みも、『オレが1番の悪人』だとか『ヤクザのトップもすぐにでも狙える』だとか警察に喧嘩でも売ってるのかと言わんばかりのものがほとんどだ。

その犯人も既にオレは特定済みである。

「なあ金田」

「ひえっ!?!」

「オマエ、これに見覚えはないか?」

「さ、さあっ!?! ななな、なんのことかなあ?」

挙動不審になる金田とざわつく野次馬たち。

どうやら奴らも察し始めたようだ。

「恍ける気か？なら、そんなオマエにこの動画を見てもらおうか」

『月島くん。次の画面に移行しますね』

『ああ』

画面が切り替わり1人の男子生徒が映し出された動画が映し出され、氷川はそれを再生する。

『僕は、金田くんと行動を共にしていた元カメラマンです。僕は他校出身の為、そちらの高校に行けないということで ” 動画 ” という形で発言させていただきます』

唐突に現れた男の発言に野次馬たちはさらにざわつき出す。

肝心の金田はと言うと、目を大きく見開かせ動揺を隠しきれずにいる。

『僕は本来の動画に加えこれらの犯罪動画をずっと撮影してきました。初めは普通の動画ばかりでしたが、金田くんは売名行為に勤しみ犯罪を犯すことになりました。僕は彼についていけなくなり、カメラマンを辞めました。口止め料として多額のお金をもら

いしましたが、今回、金田くんを助けてくれる人が現れた為、そのお金は返金し話させてもらいました。

この動画が公開されている頃には僕は警察に行っているでしょう。罪はそこで、償わさせていただきます。迷惑をかけた方々、本当にすみませんでした」

男子生徒が頭を深々と下げたところで動画は終わった。

「さあ、何か言い分はあるか？」

全員の視線が金田に集まる。

「……………嘘だ……………嘘だ嘘だ嘘だウソだ—————!!!」

大声で叫び否定する金田。

怒りで目が真っ赤になり、プロジェクターに近づき持ち上げ壁に投げつけた。

派手にぶつ壊れる音が廊下に響く。

あーあ。あのプロジェクターは学校から借りたやつなのに、弁償しないといけねえ

な。

「オレッちは——こんな奴知らない!!でつちあげだ!!」

「ほう。全てはあの男の嘘だと?」

「ああそうだ!!きつとオレッちの人気を妬んでいる奴だ!そうに違いない!」

「なら聞くが、「何故今日は杏井がカメラマンなんだ?」

「……………!!?」

「ずっと気になってたんだ。これまでの動画を振り返ってみても、テメエが自撮りしてる形跡はねエ、誰かしらのカメラマンを同行させているんだ」

「そ、それがどうしたんだってんだよお!そんなことザラにあるに決まってるじゃんかよお!」

「ポイントは、カメラマンとの会話だ」

「……………はあ?」

「オマエの企画を全て見させてもらったが、その全てにカメラマンとの会話がある。初めの方はずっと同じ声の人間だったが、ある日を境にプツリと消えた。それはいつか?」

「まさか……………」

「そう。金田が犯罪行為に走った時期とちようど重なる」

「っ?!?!」

確たる証拠は突きつけた。

さあ、足掻けるものなら足掻いてみる。

全校生徒が見ている前でな。

金田の第一声に全員が注目する。

「あ、あのさ……………」

先ほどとは雲泥の差である弱々しい声。

「んだよ」

「ツツキーパイセンってさ、オレに恨みでもあんの？」

「あるわけねえだろポケッ」

「じゃあ、なんで!?!」

「初めにオマエの企画を聞いた時、邪魔してやろうと考えた。何かヒントはないかと

動画を見ていたが、カメラマンが変わったことはすぐ気がついた。オレの人脈でようやく辿り着き、会うことができた。とりあえずテメエの恥ずかしいことを聞ければそれでよかつたんだが……もう出るわ出るわ犯罪の数々！思わず笑っちまったよ」

「あ、アイツ……………!!」

「テメエに足りなかったのは ” 信頼 ” だ。金で人を黙らせることができると思っただか？バカが。人はそんな単純じゃねえよ」

「じゃ、じゃあどうやって黙らせればいいんだよお!？」

「はあ？黙らせる前にそんな犯罪行為すんなよ」

まさにその通りだ、とその場にいた全員が頷いた。

「うっ……………!!」

「どうしてもやらかしまった時に大切なのが ” 信頼 ” だ。日々の積み重ねでそれは確固たるものになる。オマエはそれを怠ったから金で買収なんて汚ねえことをして裏切られた。テメエはもう終わりだ。今は家に警察たちが待ち構えているだろうよ」

もう完全に詰みだ。

金田今更どう足掻こうが、この場をひっくり返すことなんて不可能だろう。ただ、一つを除いて——。

「オレツちは……………負けない。お前なんかには、夢が潰されてたまるかああああ!!」

声を上げ勢いよく突進してくる金田。

腕を大きく振りかぶりオレの顔面目掛けて腕を振り切ろうとしている。

それはまるで全てを投げ打って敵に一撃を与えようとする獣のようだ。

だが、そんな攻撃をモロともせず片手で受け止め思い切りその拳を握る。

「ぐっ、ぐわああああああ!!」

金田の悲鳴が耳に響く。

結構本気で握ったから骨がいつちまったか？

まあ、なんにせようるさいから黙らせるためにもう片方の手で口を塞ぐ。

「やらかして、信頼もなく、金もない人間が唯一相手を黙らせる方法を教えてやる。」

暴力”だ。体に、心に、その痛みを植え付けてやるだけで人は恐怖し従わざるを得なくなる。力で制圧するのもいい。言葉で追い詰めてやるのもいい。要は、自分が相手より格上だと認識させればいいんだ」

「う、ううう!!」

「テメエはつまらん人間だ。この学園にとつても害しかないだろう。テメエに拒否権はないが、ここで終わりにさせてもらおうぜ」

拳を握る手を離し、口を塞いでいた手にさらに力を入れ金田を持ち上げる。

そしてそのまま、奴の頭から廊下の床に叩きつけた。

「いっしょ」

奴は鈍い声を上げ血を吹き倒れた。

そして、杏井の持つカメラに向かいこう発言する。

「動画は以上だ。テメエらも、つまらんことはするなよ」



次の日。

金田は病院に運ばれると同時に警察にお縄になったそうだ。

動画も全て削除され、もう跡形も残っていない。

一方オレはと言うと、金田の悪行を暴いたことで褒められたと共に嚴重注意を受けた。

『キミはやりすぎだ』とな。

確かに、オレが本気で殴った相手は皆救急車で運ばれているような気がする。

まあ、力の加減ができないことは仕方ないだろう。

こっちも必死なんだからな。

だが、今のオレはと言うと――。

「あーっ、あつたま痛え……………」

体温は38度。おまけに頭痛も来ている。

完全に風邪をひいてしまったのだ。

「人1人持ち上げることなんて今はできっこない。
今は布団の中で寝ることしかできないのだ。」

「くっそお……………ふざけんよ……………」

誰に向けていいかわからない怒りを独り吐き続けている。

第31輪 病のあなたにガーベラを

「それではホームルームを始めます。最近、風邪が流行っているようなので皆さんも気をつけるようにしてくださいね」

担任の先生から告げられたその言葉。

いつも近くにいたその大きい背中は今、この教室にはいない。

彼ほど強い人でも、風邪をひいてしまったようだ。

会えなくて残念と言うか、なんとというか……………なんだか不思議な気分だ。

ホームルームが終わるとすぐに千聖ちゃんが私の机に来てくれた。

「ねえ花音。これから予定はあるの?」

「今日はバイトもバンドもないから大丈夫だよ」

「私も今日は何も予定がないから、その……………よかったら、月島くんのお見舞いに一緒に来てくれないかしら?」

千聖ちゃんからの突然の提案に驚いたけど、断る理由もない。私は二つ返事で返答する。

「もちろん！」

「ありがとう♪そうだね。ねえ、紗夜ちゃん。よかつたら一緒にどうかしら？」

「えっ、私ですか？」

千聖ちゃんは偶然そばを通りかかった紗夜ちゃんにも声をかける。少し迷っていたような表情をしていたけど、答えはすぐに返ってきた。

「すみません。これから生徒会の仕事があるので……………」

「そう、わかったわ。お仕事がんばってね」

「ありがとうございます。よければ、月島さんに『早く治すように』と伝えておいてください」

「ええ、もちろんよ♪」

紗夜ちゃんに別れを告げ、私たちは横に並び廊下を歩く。

「なんだか、寂しいわね」

「え？」

「月島くんと過ごすようになってから毎日が慌ただしくて、とても刺激的で………」
それにすっかり慣れちゃったもの」

千聖ちゃんはどこか感慨深く話す。

その様子は、奏くんと会えなくて悲しんでいるようにも見えた。

「楽しければそれで良いと思っていた学校生活が彼のせいで劇的に変わってしまったわ」

「確かにそうだね」

「こうなってしまった責任をちゃんととってもらわなくちゃいけないわね」

「責任？」

「いいえ、なんでもないわ」

「そ、そっか」

千聖ちゃんの言葉に違和感を覚えたけど深掘りはしない。

無理やり言わせてしまうのは、友達として酷いことだと思っただからだ。

千聖ちゃんとは私にとって唯一無二の友達。

些細なことがきつかけでその関係が崩れてしまうと考えると少し怖い。

独りぼっちは、絶対に嫌だ。

「そうだ、せっかくだし月島くん到手料理を振る舞うのはどうかしら？彼の事だし、料理は苦手でしょうから」

「うん！いいと思う！」

「花音は料理はできるの？」

「お菓子なら多少は作れるけど、料理は……………」

「私も難しい物は無理だけれど、簡単な物なら作れるから下拵えだけお願いしてもいいかしら？」

「うん！それなら大丈夫だよ」

「ありがとう花音♪」

二人で話していると、あっという間に奏くんの家に着いた。

学校からこれだけ近かったら迷う事なく登校できると思うと少し羨ましく感じる。

それに、電車の遅延にも影響されないし、万が一雨が降って傘を忘れても走って帰れば問題ない。

いい事づくしだ。

「それじゃあ、インターホンを鳴らすわね」

千聖ちゃんはそう言い、インターホンを押す。

……………どうやら誰も出る様子がない。

もしかしたら、奏くんは寝てて気づかないだけかもしれない。

「月島くん。白鷺です。いらっしやいますか〜?」

ドアをどんと叩き呼びかけるも、返事が返ってこない。

「おかしいわね。何で出ないのかしら?」

「千聖ちゃん。奏くんを無理やり起こすのは良くないよ。また日を改めよ。ね?」
「もしかしたら……………あらっ?」

千聖ちゃんはドアノブに手をかけ、少し捻りながら引くと扉が開いた。
玄関は真つ暗で廊下の先に見えるリビングにも光が一切灯っていない。

「月島くーん?」

奏くんの名前を再度呼びかける。

……………ただ、やっぱり返事は返ってこない。

「ち、千聖ちゃん。勝手に人の家に入るのは……………」

「月島くんに万が一のことがあったら心配でしょう?別に、彼はこんなことでは怒らないわ」

「で、でも……………」

「月島くん。お邪魔するわね」

私の反対を押し切り、千聖ちゃんは廊下を進む。

ダメなことだとは思ったけど、さっきの言葉がどうしても頭から離れなかった。

『万が一のことがあつたら』

奏くんのお母さんは仕事でいないだろうし、彼に兄弟がいるって聞いたこともない。

独りで辛い思いをしてると考えると、そのような思考は綺麗さっぱり無くなった。

私も千聖ちゃんの後を追う。

すると――

「ぎゃあああああ!!」

リビングの方から千聖ちゃんの悲鳴が響いた。

急いで駆け寄ると、明かりのついた部屋に黒のジャージ姿で横たわる奏くんの姿が目に入る。

それも、ただ横になっているだけじゃない。

明らかに途中で倒れたような感じだ。

「奏くん！奏くん！」

彼の体を揺らし呼び掛けてみるも、目を閉じたまま全く動かない。

額に手を当てるととても熱く、息遣いも荒い。

どうやらかなり重い状態なようだ。

「千聖ちゃん！まずは奏くんをベットに！」

「え、ええ。そうね」

二人で奏くんの体を起き上がらせ、腕を二人の肩に乗せゆっくりと歩く。身長差があるから足は引きずっているけど、何とか動くことができた。奏くんの部屋の扉を開け、ゆっくりと降ろし布団をかける。

「どうしてあんなところで倒れてたのかな……………？」

「確かにそうね。彼なら大方……………あら？」

千聖は何かに気がついたようだ。

「千聖ちゃん？」

「ふふっ。月島くんの寝顔、結構可愛いらしいのね」

「えっ？」

私も奏くんの寝顔を見る。

いつも活発で元気発刺としたのとは違い、静かな寝息を立てる彼の姿はとてもギャツプがあった。

可愛い、かどうかはわからないけど見てて微笑ましく思えた。

そんな彼に千聖ちゃんはカメラを向け、パシャッと写真を撮る。

ニヤリ、と悪戯に笑みを浮かべるその表情はまるで小悪魔のよう。

良からぬことに使おうとしているのは目に見えていた。

「さて、月島くんが目覚める前にお粥でも作っておこうかしら」

「うん！」

私たちはキッチンへと向かい、早速調理の準備を始めた。

閉まってあった包丁やまな板などの調理器具を出し冷蔵庫の中を確認する。

「まあ……………」

残念そうな声を出す千聖ちゃん。

私も続いてみると、中は牛乳と僅かな調味料しか入っておらずこれではなにも作る事ができない。

「ちよつと買い出しに行つてくるわね。花音は留守番を頼んでもいいかしら？」

「うん！任せて」

「じゃあ、行つてきます」

千聖ちゃんはそう言い残し、家を後にする。

しんと静まり返つた家の中。

それも、寝ているとはいえ奏くんと二人きりになるのは随分と久しぶりだ。

（えつと確か、カバンの中に……………あつた！）

私はカバンの中から薬の入った瓶を取り出した。

あれは昼休みのこと。

お手洗いに行こうと廊下を歩いていると偶然こころちゃんと会った。

どうやら暇になって校内を散歩していたようだ。

奏くんが風邪になって心配だと話したところ、こころちゃんは風邪薬をくれた。

彼女曰く、『絶対治る!』ものらしい。

ありがたくそれをもらい、明日返す予定だ。

そして今。

その薬とコップに入った水を奏くんの部屋に持っていく。

「奏くん。起きれますか?」

彼にそう問いかけると返答はない。

よく見ると、顔は赤くうなされているような状態だった。

とても薬は飲めそうにない。

そう考えた私は、ハンカチを水に濡らし、奏くんの額に乗せた。少しでも体を冷やそうとしたけど、あまり状態に変化はなさそうだ。

「奏くん……………」

彼の顔をじつと見る。

なんだか、とつても苦しそう。

私が代わりになれたらいいのに……………」

まるで吸い込まれるかのように、奏くんの顔との距離がゆつくりと近くなる。

あと30センチ……………10センチ……………もう、目と鼻の先——

「花音く。帰ったわよく」

「……………!?!」

千聖ちゃんの声に驚き、顔をパツと離す。

(あれ……………? 私は今、なにをしようとしたの……………?)

今の一瞬、私が私でないような気がした。

奏くんの熱が移ったのかな？

なんにせよ、こんな事は千聖ちゃんには話せない。

今の出来事は心の中に閉じ込めておこう。



奏くんの部屋から何食わぬ顔で迎えると、千聖ちゃんは大きなビニール袋を持って帰ってきた。

「おかえり。千聖ちゃん」

「ただいま。近くにスーパーがあつて助かったおかげで、いろんなものが買えたわ」

ビニール袋には、ネギや卵、梅干しが入っていていかにも「お粥」という感じのものばかりだ。

他には桃とみかんの缶詰、玉ねぎに……………ニンニク？
なにに使うかわからないものまで入っている。

「それじゃあ花音。早速始めるわよ」

「う、うん！」

制服の袖を捲り調理を始める。

……………と言っても、私がやることと言ったらお米を洗って渡すぐらいだ。

火や包丁とか危ないものを扱うこともないから安心できる。

その間千聖ちゃんは卵を溶き、ネギを小口切りにし、玉ねぎをみじん切りにする。
とても丁寧で手際がいい。

まるで、誰かのお嫁さんのような……

「花音？それ私にはまだ早いと思うわよ？」

「えっ……………!?!」

どうやら私の考えを見透かしていたらしい。

でも、もしその時が来たのなら千聖ちゃんの旦那さんは幸せ者だと思う。
私はまだ、想像なんてとてもしないけど。

「あー………あつたま痛エ………」

そう考えていると部屋から奏くんが姿を見せた。
眉間に皺が寄り、その頭痛の度合いがすぐわかる。

「おはよう。月島くん」

「あ、この際だ。なにも聞かん」

奏くんは気怠げにそう言い、ソファに腰掛ける。

「まさか風邪がこんなに長引くなんて、予想外だ………」

「ホントあなたらしく無い」

「ああ、全くだ………」

「でも、あなたの寝顔が意外に可愛くて驚いたわ」

「テメエ、何見たんだコラア……………」

「いつもの覇気がないけどどうしたのかしら？まるで幼稚園児が覚えた手の可愛い言葉で罵倒してるようにしか聞こえないわよ♪」

写真を撮っていた時よりも千聖ちゃんは揶揄うように笑う。

もうこれは小悪魔じゃない。悪魔そのものだ。

「決めた……………治ったら真っ先にぶん殴る」

「あらっ、それなら一生寝てもらって構わないわよ」

「おいコラ、遠回しに ” 死ぬ ” って言ってるじゃねえよ……………」

「ふふっ、あはははっ！」

奏くんの返しが面白かったのか、大胆に千聖ちゃんは笑った。

「そうだね。お粥を作ったのだけど、よかつたら食べる？」

「ああ、食う……………。おふくろが出張で家をあけてて食い物がねえんだ。常備してるカップ麺を全部切らしてみたいで……………。買いに行こうとしたら、そのザ

マだ」

「それでキツチンで倒れてたの？」

「松原たちが来なかつたら空腹と熱で本当に死んでたかもな……………」

「カツプ麵だけ食べてたら体壊すわよ。現に崩してるんだけど」

「育ち盛りだからか腹が空くんだよ。現に今も腹が鳴ってた。飯ができてるなら早く食わせてくれ」

「はいはい。全く、仕方ないんだから」

呆れ顔でそう言い、お粥をお椀に盛り付ける千聖ちゃん。

てっぺんに梅干しが乗り、所々に散るネギの色合いが良いお粥を奏くんはあつという間に平らげソファに横になる。

「そういえば奏くん。お菓は飲んだ？」

「薬い？そんなもん家にはねえよ」

「奏くんの部屋に置いてあつただけど、よかつたら取ってくるね！」

私はそう言い残し奏くんの部屋へと入る。

改めて見渡すと、彼の部屋と私の部屋は全然違って見えた。

ぬいぐるみなどの可愛らしいものは一切なく物が少し散乱し筆筒の上に置いてある大きなバイクのヘルメットが目立つ。

もちろん異性ということもあるけど私にはとても新鮮に思える。

少ししてからテーブルに置いてあった薬と水を手に持ち奏くんの元へ行こうとしたその時、目の端にあるものが目に映った。

(あれは……………写真?)

コルクボードに付けられた様々な写真。

私は立ち止まりその写真たちをまじまじと見る。

中学の頃かな? みんなとても笑っている。

その笑いの中心にいるのももちろん奏くん。

なんだか、見ているこつちまで明るくなるようなキラキラとした写真だ。

彼のこんな笑顔を私は見たことがない。

『世界中を笑顔に』と目標を掲げるバンドのメンバーだけど、私はいつも助けてもらってばかりだ。

私だっていつか必ず彼の力になれるようになりたいなあ。

(あれ、これって……………)

数々の写真の中でも一つ、私の目が奪われたものがあつた。

それは高校生の奏くん。

それも花咲祭で彼がロミオの格好をした時の写真だ。

その隣にいるのは——千聖ちゃん。

恐らくだけど、演劇の練習中に撮られたものだと思う。

驚いた顔をして映る二人。

決して仲がいいとは言えない二人だけど、この大切な写真たちの中に飾られてるってことはそれだけ濃い思い出だったんだろう。

全てを見渡しても高校生の奏くんの写真は唯一それだけだった。

「花音〜?」

「あつ、はーい!」

千聖ちゃんの呼ぶ声でふと我に帰り、部屋を出て奏くん薬とお水を渡す。

険悪だったはずの二人の関係。

彼が私の親友にどんな感情を抱いてるのかわからないけど、改善されつつあるのかな

？

私は争いごとが好きじゃない。

だからこそこうして笑って過ごせているのならそれで良い。

だって私は、世界に笑顔を届ける ”ハロー、ハッピーワールド！” のメンバーなの

だから。

第32輪 造花

うざつたいほどに眩しい朝日によってオレは強制的に目覚めさせられた。

昨日までうなされた熱や頭痛もなく、軽く伸びをのしてから起き上がるが、まだ少しふらつく。

時計を見ると、針は間もなく8時を示すところで急がなければ学校に遅刻する時間帯だ。

(はあ、ダリイ……………)

心の中でそう呟き、倦怠感の残る体を前に進める。

おふくろはまだ出張から帰っておらず朝飯も自分で作らなければならない。

しかし、病み上がりの状態ではそんな気も起こらずコンビニで適当に済ませようと考えた。

オレは目を覚まさせようと顔を洗いに洗面所へと向かった。

時間が経つにつれ様々な症状が始める。

腹や喉の痛み、肩もなんだか重くいまいち調子が上がらない。

普段のオレならこの症状を理由に休むことを考えるが、ずっとベッドの横になっていたせいか眠ることに飽きてしまった。

熱や咳もないから学校に行っても問題ないだろう。

そう考えていた時だった。

「……………はっ？」

洗面所の鏡に映った姿を見る。

小さい顔立ちに、つり上がった大きなカーネットアイ。

メロン級のデカさのある胸に、腰まで伸びた金メツシユの髪……………まさか――

「は、はあああああ!？」

前のめりになりご近所にも迷惑がかかるほどの声を発する。

鏡に映る人物は間違いない、オレだ。

昨日まで見慣れた屈強な姿形はそこになく、声も身体も完全なる女になって現れるのだから。

「い、これは一体どういうことだ……?!」

頭の中は現在大混乱だ。

これはもう学校なんて行ってられない。

今すぐ病院に——いや待て、病院に行つたところで何もどう説明する？

『昨日まで男だったけど急に女になった』なんて言つても間違いなく信じてもらえないだろうし、とあるアニメに影響されて冷水をぶっかけられない。

ああ、そうだ。これは夢だ。

だからオレはこんな姿になつてしまったんだ。

試しに頬をつねってみる……うん、痛え。

次に、目を瞑つて数秒待つ……ダメだ、何も変わりはない。

もう、この現実を受け止めるしかないようだな。

「仕方ない、学校行くか……」

オレは考えることをやめ、顔を洗い制服に着替える。

いつもはちょうどいいサイズのカッターシャツもキツキツでボタンが上まで止まらない。

逆にズボンがぶかぶかでベルトを一番深いところまで閉めてもまだまだ余裕があった。

パンツもサイズが合わず、女物の下着もあるにはあるが全ておふくろのものだ。

いくら洗ったとはいえ借りるのは気がひける。

オレは仕方なくノーブラノーパン、女の姿で男の制服を着て登校する。

家から学校まで近くて本当によかった。

多少変な目で見られるだろうが、氷川に首輪をつけられ下僕姿を晒されるくらいの被害で済む。

しかし、この状況をまず誰に話すべきか。

学園長、氷川、松原、白鷺——何人かは頭の中に思い浮かぶが白鷺はおちよくつてくるのが目に見えているから除外して良いだろう。

「おはようございま………ちよつとそこのあなた、止まりなさい！」

校門を通り抜けようとする氷川に静止させられる。

その言葉に従って立ち止まり、朝の仕事をサボったことに対してまたネチネチ言われるんだと覚悟したが、その反応は違ったものだった。

「あなた、その制服……………もしかして、転校生ですか？」

「はあ？」

「学校から渡された制服が男子生徒のものだったとお見受けしますが」

「あ、ああ」

否定したところで特に言い訳も思いつかないから、オレは氷川の勝手な推測に頷く。

「それじゃあオレはこれで。仕事頑張れよ」

「ええ、ありがとうございま……………んっ？オレで？」

オレは氷川もんぼんとのやりとりを終え校舎へと足を踏み入れる。

すれ違う生徒全員から視線を浴びるが気にすることなく足を進め、教室のドアを開け

た。

賑やかだったクラス内が一気に静まり返り、ツカツカと歩く異端児に視線が一挙に集まる。

普段座っている椅子に着座すると、クラスメイトたちはヒソヒソと何かを話す。

「あれって誰？ 転校生？」

「でも、月島くんの席に座ってるよね？」

「いや、まさか……………ね？」

どうやらクラスメイトたちも動揺しているようだ。

「あ、あのっ！」

「ああ？」

後ろから声をかけられ振り向くと、松原と白鷺がオレを見て驚いた表情をしていた。

「奏くん、だよね？」

「ああ。そうだ」

「ふえっ、ええええ!？」

「私は……………夢でも見ているのかしら」

「1番夢であつてほしいと思つてるのはオレだつての」

「な、なんで女の子に？」

「知らん。急に女になるもんだから履く靴も着る服も無ければ下着もねえ」

「ええっ!?!つ、つまり今つて……………」

「あなたつてもしかして、痴女？」

「オレは女じゃねエよ!つか、人を変態扱いすんな!!」

声色の変わった女らしい高い声が教室中に響く。

「おはようございます。みなさん」

朝の仕事を終え氷川が通りすがりに挨拶をする。

「紗夜ちゃんおはよう!」

「おはよう。紗夜ちゃん」

「……………」

オレは視線を逸らし氷川との接触を避けようとするが、氷川は立ち止まりオレの姿をまじまじとみる。

「あらっ？あなたは今朝の……………」

「よ、よお。また会ったな。はははっ」

「転校生って……………」

「紗夜ちゃん、実は……………」

「はあ。なんとなく察しはついていますが、あなた——月島くんでしょう?」

「げっ!? な、なんでわかんだよ!!」

「その髪に制服、話し方。何もかもあなたと酷似しすぎです。それに、私との別れ際に「オレ」と言ったでしょう? それでわかったんです」

「オレとしたことが、流石に口調まではどうにもできんな」

簡単に騙せた、と思っていたが流石氷川。些細なミスをも見逃さない見事な洞察力

だ。

オレだって嘘をつきたくて嘘をついたわけではない。

この姿でオレが ” 月島 奏 ” だと名乗ってもお堅い氷川は絶対に信用しないに決まっている。

面倒ごとを避けたい。

それがオレの答えだ。

「とにかくその格好でいられては困ります。今すぐ保健室にいつて制服の替えを貰いに行きましょう」

「おい、まさかオレにその制服を着るとも言うんじゃねーだろうな？」

「その通りです」

「別にこれでいいだろ。そのうち元の姿に戻るだろうからよ」

「強引にでも連れさせていただきますね」

氷川が鞆をゴソゴソとした瞬間、オレは立ち上がり勢いよく走り出す。

どうせまた首輪をつけて引きずり倒そうって魂胆だろうがそうはいかん。

人が密集した教室ではそんなことできるわけ――

「……………あつ」

ダボダボになったズボンの裾が引つかかり派手に転ぶ。

すぐにでもまた逃げ出そうとしたが時すでに遅し。

氷川が既にそばにいてオレは観念するかのようになつた。

そして、お決まりの首輪に加えて手錠もつけられ、体を引きずられながら教室を後にする。



迎えた昼休み。

オレたちはいつも通り屋上で飯を食う。

「しつかし、スカートはどうにも落ち着かん」

「仕方ないよ。男の子だもん」

ただ歩いてるだけでなく座ってる時ですらなんだかひらひらしていて違和感があった。

まあそれもノーパンだったせいなのかもしれないが。

だから今はスカートの下にはジャージを履きその違和感を無くしてると言う感じだ。

「よくもまあこんなものを着るもんだ。発情しまくった野郎どもに狙ってくれと言ってるようなもんだろ?」

「学校が決めたことなので仕方ありません」

「オレだったら私服でもこんな着ねえよ。動きづらい、肌寒い、違和感まみれの酷評の3連コンボだ」

「違和感は知らないけれど、肌寒いのはタイツを履いたらいいし、動きづらいのはそもそもあなたのように跳び回るのを想定してないから構わないと思うわよ?」

「男の制服でサイズの合う服がなかったから仕方なく着たが、やつぱスカートは性に合わん」

「そ、そうだよね……………」

「あなたの体だと仕方ないわよ」

白鷺と松原の視線がオレの胸に向く。

「女は巨乳に憧れると聞くが、大していいことはないぞ？なあ、氷川」
「はあ？」

自分で言っておいてなんだが、聞く相手を間違えた。

3人の中で一番背は高いが ”発育” という項目においては二人よりも劣っていると思う。

オレにとつてはどうでもいいことだったが氷川にとつてはそうではなかったらしい。怒りに満ちた声と鋭い眼光がそれを物語っている。

「いや、なんでもねえ。女の魅力ってやつは乳だけじゃねえから気にすんな、氷川」

「まるで私が胸にコンプレックスを抱えているという口振りですか？」

「なんだ、違うのか？」

「……………!!」

純粋な目をして首を傾げると、氷川は立ち上がりオレの頭を両手をグーにしてグリグ

リと押す。

「まったく、あなたって人は………！」

「月島くん。紗夜ちゃんに失礼よ」

「こればかりは、私も擁護できない、かな………！」

「いたたたつ。地雷を踏んだのなら謝る。悪かった」

しん〇のすけはいつも母親にこんな仕打ちを受けていたと思うと同情する。

これは確かに痛い。

今となってはもう見ることもないシーンだけどな。

「そうだ！奏くん、放課後って予定はあるのかな？」

「委員会の仕事もないし、特にはないぞ」

「流石にそんな破廉恥な格好で外は歩けないよね？」

「別にそんなことは——」

「いいから松原さんの話を聞きなさい！」

「お、おう」

「よかったら………下着を見に行かない？」

「はあ？なんでそんなところに行かないやならねえんだ」

「だ、だって、もし見られちゃったりしたら大変でしょ？」

「ジャージを履いてるから大丈夫だろ」

「あなた、本当に痴女なのね………幻滅したわ」

「だから！女じゃねえっての!!」

「じゃあ決まりですね」

「決まってねえよ！」

「月島くん。私は部活があるので行けません、風紀副委員長、そして副会長として命
じます。行きなさい」

「つたく、仕方ねえなあ」

「元はと言えばあなたの買い物なのよ？」

「へいへい。連れてかれてやるよ」

強引な約束を取り付けられ、鐘の音と共に昼休みは終わりを告げた。

………

.....

校門を出ると、今度は生徒たちだけでなく一般人からの視線も集まってしまった。特に男、目が完全にオレの胸へと向いているから頭の中でエロい妄想でもしてるんだらう。

考えただけで寒気がする。

「ところで、奏くんはなんで女の子になっちゃったのかな？」

「それはオレが一番聞きたいことだ。普通ありえねえだろ？去勢したわけでもあるまいしよ」

「あなたに恨みを持つてる人は多そうだし、寝ている間にももしかしたら.....」

「あるわけねえだろそんなもん」

「でも、奏くんが学校近くのアパートに住んでることはかなり有名だと思うよ？」

「だとすれば、その噂を聞きつけた誰かが月島くんを毒を盛ったのね。うん、納得したわ」

「コ○ンじゃねえんだよ！」

「何か変なものを食べたとかはないかな？」

「ここ数日はカツプ麵しか食ってねえからその線は薄いな。万が一、カツプ麵にそんな異物が混入してたら世の中の男はみんな女になって大ニュースになるはずだろ」

「そっか、もうこれ以上は何も思いつかないや……………」

「もういつそのこと女の子としてこれからの人生を歩んでもいいんじゃないのかしら？」

「ふざけんな！おふくろとか中学のだち公になんで説明すりゃいいんだよ！」

おふくろもだち公たちもまずオレの姿を見て大爆笑するに違いない。

『女嫌いの奏がー』とか『息子が娘になった』とかいつて揶揄ってくるに決まっている。そんな恥ずかしい思いをするのは絶対に嫌だ。

そう考えると、当分は知り合いに顔を合わせないようにしないといけない。しばらくは夜遊びどころか出歩くことすら困難になるだろうな。

「今は焦らず女の子として慎ましく過ごすことね」

「その生活の第一歩が……………これか」

3人で話していると目的地である下着屋に着いた。

駅の近くにあるどデカイシヨツピングモールの中にあるその店は男子禁制の女の園。店員も客も皆若い女ばかりだ。

「どうかしら？初めて入るお店の空気感は？」

白鷺はそう言うとおレの方を向いて悪戯に笑う。

コイツ、オレが興奮したと勘違いしてるらしい。

「別に。どうってことねえよ」

オレは表情を一切変えずに白鷺に返す。

「私たちもよくここで買い物するのよ。ねっ、花音？」

「ちよつと！千聖ちゃん!？」

またしても白鷺は悪戯に笑って見せた。

やつはともかく、松原の顔は茹で上がったかのように真っ赤だ。他人に羞恥を晒された松原には同情する。

「この前は何を買ったかしら？ 確か……………」

「テメエがどんなパンツを履いてようが興味ねえよ」

「気にならないの？」

「オレからすれば下着なんてただの布だ」

「やっぱり、ドライなのね」

白鷺はつまんなそうにため息をつく。

「何を基準にどう選べばいいかわからんから適当に見繕ってくれ。なんでもいいから」

「ええ、わかったわ」

「任せて！」

店員に旨のサイズを測ってもらった後、二人は各々オレの下着を探しに散り散りにな

る。

しかし、女は大変なことばかりらしい。

”男尊女卑” という言葉が蔓延るストレス発散社会の中、家事や子育てに加え仕事との両立をする奴もいる。

更には男を振り向かせるためにこういった下着選びも欠かせないというのだから、つくづく男に生まれてよかったと思う。

「月島くん。お待たせ」

そう考えていると手に多数の下着を持った白鷺が先にオレの元へ戻って来た。

「なんだ。早かったな」

「インスピレーションで選んだのだけど、これはどうかしら？」

「……………却下だ」

オレが拒否きたのにはもちろん理由がある。

白鷺が持ってきたのは、殆ど布がない紐のような下着だったからだ。

「あらっ、ならこれはどうかしら？」

今度はまともな奴だと思つたら、大事なところが隠せてないものだった。

「アホか！テメエはオレにどんな変態プレイをさせる気だ！」

「あなたに似合うと思つて選んだのだけれど」

「オマエの感性がバグリ散らかしてるのはよくわかつた。そのふぎけたもんをとつとしまつてこい！」

「まつたく、わがままなんだから……………」

白鷺はそうぶつくさ言いながら去る。

なんでもいい、とは言つたがそれはあくまで

常識の範囲内での話だ。

あんな下着をレジに持つて行つた日には新種の死因である ” 恥ずか死 ” するだろう。

白鷺にはもう二度と頼み事はしない。

オレはそう心に誓った。

「奏くん！お待たせ！」

しばらく経つと今度は松原がやってきた。

「おい、一応聞いてもいいか？」

「どうしたの？」

「それは………全年齢対象のものだよな？」

「えっと、それはどういう………？」

訳がわからないと言った様子で松原は首を傾げる。

まあ当然か。さつきまでいたアイツとの会話が異次元すぎた。

「いやなんでもねえ。さて、見せてもらおうか」

「色々あつて迷つちやつただけど、これなんてどうかかな？」

松原はそういい一つの下着を掲げる。
さっきのとは違って全然普通。

むしろこれでもいいとすら思ったんだが――

「ちいつと子供過ぎないか？」

「えっ？ そうかな？」

破廉恥さのかけらもない下着、だったのだがデザインがイマイチ好みではなかった。
流石にこの歳になって水玉みたいなお子ちゃま女子が好きそうなものはなあ、と頭の中が否定した。

ん？ 待てよ……………一年前に松原の着替えを誤って見ちまった時のコイツの下着は――
いや、これ以上は記憶を掘り起こすのはやめておこう。

「なら、これはどうかかな？」

「……………おお。いいじゃねえか」

黒が主体のヒラヒラとした生地金色のラインが入った下着。

オレの髪色と同じ色ですぐに気に入った。

「よしっ、これにする」

「ほんとっ？よかつたあ」

「あら？もう決まったのかしら？」

「ああ。やつぱまともな松原に頼んで正解だったな」

「えへへ」

「ちよつと、私がまともじゃないみたいない分だけけど？」

「だってそうだろう？あんな変態御用達みたいなものばかり選びやがって。……………」

ああ、さてはオマエも普段はあんなものを——」

「違うに決まっているでしょ」

「ハッ、どうだか」

「奏くん！喧嘩はダメ！」

「へいへい」

オレは適当に流しこの場を収める。

その後、二人が選んだ下着を見ては買うかを決め、何着か購入した後店を出た。

………ん？何を買ったかって？
教えるわけねーだろが。変態。

第33輪 生花

「お疲れ様です！姉御！」

「姉御！どうかお気をつけて！」

放課後を迎え、帰ろうとする生徒たちを押し退けて柄の悪い不良どもが列を作つてオレを出迎える。

まるでドラマでよく見るヤクザの行動そのものだ。

「おー。〆〆苦勞〆〆苦勞」

そんな不良どもをオレは適当に遇らう。

女の姿になつてから一週間ほど経つが、なんの進展もなく停滞した状態が続いている。

学内外問わず、オレに言い寄ってくる野郎があまりにも多くオレはうんざりしていたその時一つの案を出した。

それは、『オレを打ちのめすことができれば付き合つてやる』というものだ。

街の片隅にある空き地で参加者を募り全員と拳を交えたが結局、誰一人として指一本触れさせることなくノックアウトした。

打ちのめした男が100人を超え、両手が返り血で真っ赤になったところを見てある言葉が囁かれた。

『鬼だ………花咲川に、赤鬼あかおにが現れた………！』

挑戦者の一人が名付けたその名は一気に広がり、翌日からオレに挑むものは一人もいなくなった。

もちろん、赤鬼あかおにと不死身アンデッドの暴君ドが同一人物だということは誰も知らない。

「すみません。お待たせしました」

オレにとって鬼、氷川が声をかけてきた。

「おー。それじゃあ行くか」

「ええ」

今日は久々の風紀委員の活動で、校外のパトロールを行う。

学園長の命令でこうなった原因は全て、この街で犯罪が多発しているからだということに他ならない。

最近では強盗や強姦などの犯罪に加え、ニュースでも取り上げられた殺人未遂事件までこの町で起こっている。

更には空き地で未成年の男子生徒が多数暴行を受けた事件が——あつ、この犯人はオレか。

ともかく、校内が平和になりつつあると思つた途端にこれだ。

学園長の生徒たちを守りたいという気持ちは風紀委員「俺たち」をこき使っていることとよく伝わっている。

校門を出てオレたちは横並びに歩く。

「教師陣と風紀委員が共同でパトロールを行い生徒たちの安全を守る、か。まるでオレたちが警察官みたいな役回りだな」

「仕方ありませんね。こうも事件が多ければ警察の方々も捜査で手一杯でしょうし、自分たちの身は自分たちで守らなければいけない。私はそう思います」

「さすが、優等生。言うことが違うな」

「揶揄わないでください」

悪戯に笑いながらおちよくって見たものの、氷川は冷たく返す。

「他の班の人たちが事件に巻き込まれなかったらいいのですが……………」

「安心しろ。教師を一人含めた5人1組で構成した班編成に加えて防犯ブザーも常備させているし、万が一巻き込まれてもそのブザーのボタンを押したら携帯に通知がいくようになっていくからな」

「何かあってからでは遅いのは身に染みて理解してるつもりですから」

「まあ、そのブザーが間違つて押されたことを願うだけだな」

「ところで……………私たちは二人だけなんですけどいいんですか?」

「ああ? そんなもん、オレ一人いればどうとでもなる」

「すごい自信ですね」

「おうよ。野郎の10人や20人なんて余裕で——」

「おいつ! そのメツシュ!!」

オレと氷川の会話を遮り現れたのは、トツプクを着たいかにも柄の悪い不良の女。どうやら今回の相手は野郎ではなかったようだ。

「アンタが噂の ” 赤鬼 ” かい？」

「そうだと言ったら？」

「アンタを、うちのチーム ” 撫子^{なでしこ} ” に勧誘しにきた。どうだ？うちに入らないか？」

まるで猗〇座の勧誘のようにオレに問い詰める女。

答えるまでもにも道の影からゾロゾロと不良たちが出てきて、あつという間にオレたちは囲まれてしまった。

「月島くん……………！」

氷川は即座に防犯ブザーに手をかける。

だが、オレは腕を横に広げそれを止める。

「その必要はねエ」

相手が噂の犯罪者ならまだしも相手はただのチンピラだ。それにオレに用があるらしいから他人を巻き込むのも気が引けるからな。

「こんなに寄って集って威圧して、オレに拒否権なんてねえんだろ？」

「その通りだ」

「残念だが、ごんだけ頼まれようがその誘いを受ける気はねえよ。オレはもう ”
” なんだからな」

「はあ？何を訳のわからないことを言ってるんだコラ！」

「冗談が通じないか。みんな大好き鬼○の刃ネタだったんだがな」

「テメエ舐めてんじやねえぞ!!」

ため息混じりにそう嘆くと、俺たちを囲っていた一人の女が背後から殴りかかってきた。

オレは体を反転させながら足を振り上げ、女の顎に目がけて踵を強振する。

他の女もろともガードレールに体をぶつけその場に蹲った。

「やめときな。強硬策はオレには通じねえぞ」

「くっ……………」

「こちとら ”青鬼”あわわに」

もつれてるからな。全員病院送りにされたくなければ今すぐ

失せろ!!仕事の邪魔だ」

「い、いくぞお前ら!!」

蹲る女たちを抱え、レディースは去っていく。

オレは、ふうつと息を吐き何事もなかったかのように平然と道を歩く。

氷川も遅れながらついてくる。

その顔はどこか驚いているような、しかし呆れてすらいそうなものだった。

「本当にあなたは問題ごとしか起こしませんね」

「ああ?好きでやってるわけじゃねえよボケツ。正当防衛だ正当防衛!」

「ひとつ聞きたいのですが……………あなたが言っていた ”青鬼” というのは、私
のことでいいんですね?」

「あ、あれはあれだ。ものの例えだ。オマエはオレを捕まえる時は鬼の形相で捕まえ

てくるからよ。それに、髪も青いしちようどいいじゃねえか」

「はあ、誤魔化すならもつと上手くやってください」

「全くだ。我ながら語彙力に欠けた言い分だったな」

「しかし、私が鬼ですか、そうですね………」

「ひ、氷川？」

いかん。ベラベラと喋りすぎた。

氷川の颯感を買っちまったか？

オレは咄嗟に青鬼ひかわと距離を取る。

「ふふつ。何を怯えているんですか？」

「べ、別に怯えてねーよ。バーカ」

「次にもしあなたが抵抗するようなら金棒でも使って気絶させるのも悪くないって考えただけですよ」

「おいおい、シヤレになってねえよ」

「冗談です」

「それに、鬼と言ったら刀だろ。こう、首をぶった斬られるのが定番だろ」

「え？その方がよかったですか？」

「真面目に受け取るな！」

氷川ならやりかねない恐ろしさがある。

下手をすりや本当に首を——うっ、想像するだけで身震いするぜ。

これは、当分は大人しくした方が良さそうだな



レディースと一悶着あった後はというと、たまたま見つけた強盗を即時捕まえ警察に引き渡すという出来事があった。

これでひとつ街の問題は消え去ったが、オレの抱えた問題が解決することは決してない。

全く、気が滅入っちゃう。

こういう時、昔は派手に暴れ散らしていたのだが高校3年生にもなり大人になったオレは静かな空間でただブーツとすることを好んで行う。

風紀委員の仕事を終わらせ、学校内に唯一存在するその場所へと一目散に向かう。

「よおつ、邪魔するぜ」

そこは普段茶道部が活動で使う和室。

フローリングのうちの家にはないこの畳が敷かれた部屋と微かに香る抹茶の匂いがオレの心を落ち着かせてくれる。

屋上で仰向けになり青空を眺めるのもいいが、肌寒い今の季節は温いこの部屋で寛ぐのが好きだ。

「奏くん。いらっしやい」

茶道部員の松原は和かな笑顔を見せ迎えてくれる。

「婆さんも、久しいな」

「……………コクツ」

相変わらず口を開かないヨボヨボの婆さんもオレを迎えてくれているようだ。

それに加え――

「カナデさん！押忍っ！」

「おお。今日はオマエもいたか、若宮將軍」

若宮將軍ことこの白髪の女、若宮イヴは幽霊部員がほとんどを占めるこの部活で唯一まともに来るひとつ下の後輩だ。

なぜオレがこの女を ” 將軍 ” と呼んでいるかというと、少し話は遡る。

氷川と学校内の見回りをしてしていると、体育館で剣道部が練習してる姿をたまたま目にしたことがあった。

その時練習相手に綺麗に面を喰らわせたのが若宮だったのだ。

その姿はまさに武士。

オレは面白半分で將軍と呼ぶも、本人もどうやら喜んでくれたようで今はその呼び方で通している。

「風紀委員の仕事はもう終わったの？」

「ああ。今日は近所の見回りをして終わりだ」

「お疲れ様です！」

「サンキュッ」

「よかつたらお茶でもどうか？和菓子も用意できるけど」

「いいのか？」

「うん！」

「なら、遠慮なくいただこう」

松原はお茶を点て始め、若宮将軍はそばに置いてあつた紙袋から菓子を取り出し皿に盛る。

二人はずっと正座をしていたが、オレはそれに反し肘枕で寝転がった。

この数時間の間だけでもそれなりの距離を歩いた上に喧嘩までした。

今にもここで眠れそうなほど消耗しているのだ。

「悪いな。こんな無作法で」

「気にしないです！」

「私もだよ。奏くんの好きにしているからね」

「……………コクッ」

「カナデさんにとってここは、『ヒーリングスポット』なんですよ！」

「そうだな。ここにはうるせえ奴がいなくて助かる」

「それって、紗夜ちゃんのことなんじゃ……………」

「アイツはいちいち細げえんだよ。多少なりとも、ルーズでいいこともあるだろうに」

「真面目なところがサヨさんのいいところです！」

「度が過ぎるんだよ」

「奏くん。お待たせ、完成だよ」

松原はオレの前にお茶と菓子を出し、そのままの体勢でそれらを食らう。

お茶は相変わらず苦いし美味しいとは感じないが、この心の中まで穏やかになりそうな優しさを感じるのは何故だろうな。

この空間がそうしてくれているのか、はたまた松原が淹れてくれたおかげか……………
オレにはよくわからん。

「どうかかな？」

「まあまあだ」

「そっか、まあまあなんだ」

「オレにはまだこれが美味しいと言えるほどの味覚がないだけだ。わかるやつが飲んだら、美味いって思うんじゃないの?」

「これは最大級の褒め言葉ですよ!カノンさん!」

「そ、そつか、えへへ」

松原は照れるように顔を赤くする。

「ところで、カナデさんはどうして女の子になってしまったんですか?」

純粹な目をオレに向け問う若宮將軍。

その質問は正直されたくない。

「さあな。熱を出して、1日寝てたらこのザマだ」

オレは手を大きく横に広げ首を振る。

「私と千聖ちゃんがお見舞いに行った時は男の子だったんだけど………夜に何か

あつたのかな？」

「まさか本当に毒を盛られてたりしてな。はははっ」

白鷺に揶揄われた時は反論したが、うちの古いアパートだとありえる話だ。

エレベーターなんてものはなく監視カメラだつてアパートの入り口にある一つだけというあまりに欠けたセキュリティの低さがウリである。

監視カメラに映らない場所を通れば誰が犯人だなんてわかるわけもない。

真実はあるが、ないようなものだ。

「性別が変わるなんて、すごいですね！」

「そうだな。いい迷惑だ」

「私が男の子になったら、もっと筋肉をつけてカッチュウも似合う人になりたいです！」

「ふふっ。イヴちゃんは本当の將軍様になれるかもね」

「なりたいです！」

「そうだな、まずは高熱を出すところからスタートだ。その後自分に恨みを持って
そんな奴に毒を盛られるように仕向けて……………」

「か、奏くん！イヴちゃんにそんな恨みを持つ人なんていないよ！」

フィンランドのハーフ、白髪の地毛、女の中では高身長、人気アイドル&モデルという、まるで二郎系ラーメンのトッピングのように盛られた個性を妬むやつなんてごまんといるだろう。

まあ、純粹無垢な若宮將軍ならそんなこと全く気にしなさそうだけだな。

「話を戻すが、本当に記憶がねえんだよ。松原たちが帰ってからは窓も扉も閉めてたし、誰も入ってこれねえはずだ。謎は深まるばかりだな」

「なんでかなあ……………」

「私もわかりません……………」

「……………ああ。そういうば、オレの机の上に置いてあつた薬つて松原が持つてきてくれたやつだよな？」

「うん。こころちゃんから風邪薬だよつて言われて持つてきたものなんだけど」

「おい、その薬——変なもんが入つてたりしないよな？」

「そ、そんなまさか……………」

そんな時、この静かな空間に携帯の着信音が鳴り響く。

その音を発している携帯の持ち主は松原だ。

すぐにその電話に出る。

「はい、もしもし……………はい……………えっ!?!……………はい、わかりました」

電話を切ると、松原が真つ青な表情を浮かべ呆然としていた。

「どうした?」

「さっき、こころちゃんの黒服さんから電話があっただけ……………その……………」

言葉に詰まる松原の仕草を見てオレはなんとなくだが状況を察した。

「その薬……………クロだな」

「う、うん……………じつは……………」

松原は黒服とやらから聞いた話をわかりやすくまとめ説明してくれた。

要は、その薬は開発中の『性別を入れ替える薬』だったようでオレが飲んだものは試作品だったらしい。

その薬が何故か松原の友達（弦巻こころとかいうお嬢様）に渡り、友達から松原に渡り、最終的にオレへと渡ったという。

どうも信じ難いが、その薬の臨床試験とやらは成功しているらしい。

「それで、オレが元に戻る薬はあるんだろうな？」

「う、うん！ 誤って飲んでしまった時のために作ってたらいいんだけど……………それも効果がわからないらしいんだ……………」

「構わん。すぐにそれを寄越してくれ」

「わかった！ すぐ連絡するね！」

松原はそう言い再び電話をかける。

それにしても、こうもあつさりと終わると気が抜けるな。

毒を持った犯人は、何の自覚もなく平然と持ち込んできやがったんだから夕子が悪

い。

しかも、それが松原ときたもんだ。

疑いの線から外れるのは仕方のないことだろう。

それにしても、今回のことどうも腑に落ちない点がある。

今更この出来事の真犯人を見つけないなんてことをするほど暇じゃないから見過ぎすが、頭の片隅に入れておいた方が良さそうだ。

オレの野生の勘がいつている。

『オレの身に危険が迫っている』ってな。

第34輪 ソメイヨシノ 純潔

私、氷川紗夜の朝は早い。

「おはようございます。おはようございます」

生徒会、そして風紀委員に席を置く私は毎朝こうして校門に立ち挨拶すると同時に風紀の乱れをチェックする。

「ふあ〜……………ダリイ」

「だらしがないですよ」

「仕方ねえだろ。朝早えんだから」

寝癖を直さず私の横に立つ彼、月島くんは恐らくこの学園で一番風紀を乱しているといっても過言ではない人だ。

けど、注意をしたところでどうしようもないことはわかっている。

彼ほど適当で野蛮な男性を私は知らない。

「おはよう。二人とも」

「おはようございます。杏井さん」

爽やかな挨拶をする彼、杏井さんは彼とは対極のような人だ。

服装の乱れもなく清潔で、クラス内外で人気が高く悪い噂なんて一つも聞いたこともない。

私からすれば、全員が真似してほしいと言える程の模範的な生徒である。

「今日のお昼休み、二人にちよつと取材したいんだけどいいかな?」

「なんだ、新聞部の活動か」

「そうだよ」

「残念だが、噂の熱愛疑惑なんてものは存在しねえぞ」

「ははは。そんなものは掲載したりしないさ。学校の風紀を取り締まる二人にインタビューしたいだけだよ」

「私は構いませんよ」

「手短に済ませるならいいけど」

「ありがとう！それじゃあ、また教室で」

笑顔で手を振り彼は校舎へと向かって歩く。

「月島くんも彼を見習ってははどうですか？」

「ハッ、嫌なこった」

「そう言うと思っていましたよ」

「じゃあ言うんじゃねえよ」

月島くと杏井くんは言うなれば、隠と陽。

相反する男子生徒がこうして同じクラスにいるのだから、見ていて違いがハッキリとわかる。

その姿を見て女子生徒は「どっちが魅力的か」などといった論争に発展していると聞く。

数で言うくと、杏井くんに好意を寄せている人は大勢いるけれど月島くんにも少なからずそう思っている人は存在する。

クラスメイトにどちらが好きかと聞かれても、私は解答しかねる。だって私には異性に恋愛感情といったものを持ちあわせたことは一度たりともないのだから。

「ふふっ」

「何がおかしい?」

「少しですが、あなたのことを理解することができて嬉しいんですよ」

「ほお。じゃあ、オレが今何を考えてるかわかるのか?」

月島くんは私の目をじっと見る。

それは、『わかるものなら答えてみる』と言わんばかりの鋭い眼光だった。

彼は一体どこまで傲慢なんだか……………。

「わかるわけありません。私は決してエスパーではありませんから」

「まあ当然か。とあるゲームだと、エスパータイプはあくタイプに弱いから現実でも

同じなんだろう」

「エスパータイプ?あくタイプ?」

聞きなれない単語に混乱する。

「……………前言を撤回します。やはりあなたの考えてることを完璧に理解することは不可能なようですね」

「べーつにいいだろ？わかんなくなつてよ。人の考えてることなんて三者三様、千差万別。的確に読み取るなんてのは不可能な話だ」

「それでも私は理解しようとすることを諦めません」

「ケツ、強情な奴」

月島くんは呆れたように舌打ちする。

「つて言うかオマエはいいのかよ。杏井をそんなに信頼して」

「信頼も何も、クラスメイトとして普通に話してただけですけど」

「ドーもきなくさい感じがしてよ。変なことを企んでなければいいんだがな、アイツ」

「月島くんほど物騒なことを思いつく人はいませんよ」

「安心しろ。それで苦しむのは加害者だけだ」

「はあ、暴力だけで解決するのはもうやめてくださいね」

「善処する」

全く信用できない返事を受け取り私たちの会話は終わった。

どうやら月島くんは杏井くんを警戒しているようだけど私にはその気持ちがわからない。

だって、あれほど真面目で他人に好かれる人格者なのだから。

——— だけどそれが表の顔で、実は裏ではとんでもないことをしているというのはドラマや小説ではよくある話だ。

空想の世界を現実には当てはめるなんてバカげたことだとは思うけど、月島くとまでは言わずとも少しばかりは用心するに越したことはないだろう。

万が一………いや、億が一にでも彼が本性を見せるその時が来るまでは。



昼休みになろうと私に休む余裕はない。

机を片付けてからお弁当を持ち杏井くんの待つ新聞部の部室へと向かう。

花咲川の部活の定義は5人以上が在籍（兼任は認めない）が条件だけど、新聞部はその人数ギリギリの6人しかない。

それも、部活動として始動したのもつい最近の話だ。

これまでは学校行事の写真を撮り掲載する程度だったけど彼が入部してからは少し趣旨が変わった。

それが、今から行うインタビューだ。

彼がレポーター兼執筆者となり対談の内容を掲載している。

その他にも噂話などを持ち込んで執筆することもあるらしいけど決して他人が傷つくようなスキヤンダルは決して書かない。

詳しく読んだことはないけどどれも面白いものばかりで生徒には人気のコンテンツのようなのだ。

「失礼します」

扉をノックし部室へと入る。

そこには既に月島くんの姿もあつた。

「やあ。待ってたよ」

「おっせえぞ」

「あなたのように机を散乱したまま来たわけじゃありません」

「まあまあ。適当にかけてよ」

杏井くんに勧められ椅子に腰掛ける。

「月島くん、氷川さん。今日は急に呼び出してごめんね」

「別に構わねえよ」

「私もです」

「ありがとう。早速だけど訊かせてもらうね。あつ、お昼ご飯を食べながら答えてくれて大丈夫だから」

「そうか。なら遠慮なく」

杏井くんは机の上にボイスレコーダーらしきものを置き、月島くんはビニール袋からパンを取り出し一口かじった。

私も弁当箱を開け、食べ始める。

「それじゃあ、いくね。最近、というか二人は風紀委員になってから関わりが増えてい
ると思うんだけど、お互いのことをどう思っているのかな？」

「おいおい、それなら朝も言っただろうが。この女に惚れることはねえぞ？」

「あはは。別に恋愛感情について訊いてるわけじゃないよ。仕事仲間ビジネスパートナーとしてどう
思ってるか教えてほしいな」

「なんだそのことか。そうだな……………」

月島くんは腕を組み考えるそぶりを見せる。

「氷川さんはどうかな？」

「私、ですか……………」

私も頭の中で考えを巡らせる。

月島くんと同様に、彼に恋愛感情を抱いたことはないしこれからもないだろう。

がさつでいいかげんで、カツとなると手に負えないという欠点はあるけれど、いざと
いうときにはすぐ頼りになるし人には思い付かないような大胆な発想も持ち合わせ

ているのは彼の長所である。

彼の良いところは私も見習わなくてはならない。

しかし、それを差し引いても ” 好意 ” とするには私と合わないところが多すぎるのが現状だ。

何故なら、気苦労でこつちが倒れてしまいそうだから。

「総じていうなら………頼りにはなっていますよ」

「おいつ。なんだ、その上から目線な言い方は」

「事実ですから」

「月島くんはどうか？何か考えついた？」

「結論から言うと、合うわけがねえよ。オレと氷川は水と油みたいなもんだからな」

「そっか」

「だが、” 嫌い ” ってわけじゃねえんだぜ」

「とうとう？」

「そりゃあ初めは馬が合わねえ事ばかりで衝突しまくってはいたが、ここ最近氷川の考えもわかるようになってきてな。今までのオレは独りで突っ走ってきたが、他人と協力することも悪くないって思えるようになってきたところだ」

「なるほど。つまり、異性としての好意はなくても、思考や人間性に一目置いているってことかな？」

「ま、そんなところだ」

「……………」

普段見られない月島くんの素直な一面を目の当たりにして言葉を失う。

「んだよ」

「いえ、なんでもありません」

胸に手を当て小さく深呼吸をして心を落ちつける。

「それじゃあ次の質問にいくね」

「おお」

「共学化してからこの学校では男女交際が多いようだけど二人はどう考えているのかな？」

「しつこい奴だなア。今回のテーマは恋愛についてとでも言うつもりか？」

「ふふっ。まあ、そんなところさ。花咲川の風紀を取り仕切る二人の意見を是非訊かせてほしいな」

和かな笑みを浮かべる杏井くんはどこか、私たちをからかっているのかと思えるほど落ち着いている様子だ。

あくまで彼は部活動の一環として私たちに取材をしているだけ。彼に裏があるとはとても思えないのだけれど……………。

「別に個人の自由でいいんじゃないやねえの？恋愛なんて」

「そうでしょうか」

「ああ？」

「学生の本文は勉強にあります。恋愛にうつつを抜かしては本末転倒です」

「そうかなあ？実際、恋愛を経験してわかることもあるんじゃないかな」

「しかし……………」

「だからよお、何でもかんでも硬く考えすぎなんだよ teme は」

月島くんは私の頭を大きい掌でバシバシと叩いた。

「な、何するんですか!？」

「恋人になろうが24時間365日ずっと一緒にいるわけじゃねえんだ。互いと離れている間に勉強すればいいだろう?」

「それが本当に可能なんでしょうか」

「さあな。それは本人たち次第だろう」

「それだと意味がありません」

「意味、ねえ……………」

「若いうちにそういったことを経験するのも必要でしょうが、それは大人になってもできること。今急いではいけないと思います」

「つまり、氷川さんは恋愛には否定的。月島くんは肯定的ということでもいいんだね?」

「そんなところだろうか」

「月島くんは適当なだけです」

「恋愛禁止なんて校則はこの学校は設けてないからね」

「校則があつたとしてもやる奴はどーせ隠れてコソコソ付き合ってるだろうぜ?クククッ」

「確かにその通りですね……………」

「世の中、テメエみたいな真面目な奴はそういないってことだ。これが集団、これが会社だ」

秩序のない世界なんてなんの意味もない。

法律という絶対的な ” 正義 ” は存在するけれどそれを犯す人間は止まることを

知らず出てくる一方だ。

いい人間と悪い人間。

世の中はこの二択以外に存在しない。

私は絶対に前者でありたいと心底思った。

「それじゃあ次の質問をするね。二人は——」

その後もしばらく杏井くんの質問は続いた。



放課後も私は激務に追われている。

生徒会の日報や学校行事についての会議、風紀委員の見回りや部活動——あげればきりが無い。

頭が痛くなり眉間に指をあてる。

「おーい氷川。見回り始めっぞ」

「ええ。行きましょう」

近頃はサボりもなくなり、彼を探すこともなくなったけど書類関係に関しては別の話。

溜まりに溜まったその全てを私にいつも押し付ける。

試しにやってみたら時には、適當すぎる書き方に呆れ全てを受け持つことになったけど納得はしていない。

彼は『自分は頭が悪い』と常々言い続け、テストも平均を下回ることが多いけれど、私は知っている。

月島くんはただ、やる気がないだけでちゃんと勉強すればとても頭がいいことを。とどのつまり、極度のめんどくさがりなのだ。

「しっかし、この学園も随分と平和になったもんだな」

彼から放たれた唐突の言葉。

「そう、ですね」

月島くんが風紀委員長になってからは校内の問題は全くと言っていいほど起きなくなつた。

偏に彼の ” 強さ ” が要因だろう。

入学式では騒いでいた一年生たちも今ではすっかりおとなしくなり、先生たちも彼に一目置くようになっていた。

素行は決して褒められたものじゃないけれど、彼が中心となりこの学園は確実に良くなつていくと目に見えてわかる。

「最近また変質者が出るらしいから、今日も外の見回りでいいだろう」

「はい。そうしましょう」

二人で横に並び校門を出てすぐに、いかにも不良な二人組の他校の生徒に目をつけられ絡まれる。

「オマエが ” 不死身の暴君 ” かあ?」

「女連れとはいいいご身分だなあ!!」

月島くんに近いつき威嚇するも、彼は全く気にすることは無い。

「誰だか知らねえが、オレと戦り合う気か?」

「『そうだ』と言ったらどうなんだコラツ!」

「所詮噂つてのはデカくなるだけで実際は大したことないつてのが相場では決まってるんだよ!」

ヒートアップする二人組に月島くんは全く動じない。

そして、この状況に慣れつつある自分が怖くも感じる。

「やれやれ、ケガしてもしらねえぞ」

「待ってください」

首を鳴らし戦闘態勢に入る月島くんの前に私は立った。

「おい氷川。そこをどけ」

「いいえ、できません。あなたが手を出せばこの人たちがどうなるかわかりません」

「人を凶悪犯扱いしてんじゃねえよ。テメエもケガだけじゃすまねえぞ？」

「大丈夫です。ここは私に任せてください」

「つたく。どうなつてもしらねえからな」

月島くんは一步下がり、私は二人組と正面から向き合う。

「まずは女！テメエからだ!!」

「覚悟しろよ!!」

猛ダツシユで距離を詰め、腕を振りかぶる二人の拳をかわし、片方の男の足を引っかけ勢いのまま転ばせる。

片方の男は再び拳を振るうも私も再度避け背負い投げをして背中からコンクリの地面に叩きつけた。

ふう、と一息吹き二人の方を見るとそれぞれの箇所を抑え痛がるそぶりを見せる。

「わああお……………」

どうやら月島くんも驚いている様子だ。

「なんですか？」

「いや、意外にやるもんだと思ってよ」

「護身術を学んだ結果です。それに、集団相手だと私では太刀打ちできません」

「前に暴力がどうだとか言ってたかったか？」

「正当防衛です」

「ハッ、テメエも言うようになったじゃねえか」

「勘違いしないでください。軽くあしらう程度でいいものを、あなたはやりすぎです」

「そうか？反撃の意志を潰してこそ初めて————みる。奴らはまだピンピンしてるぜ」

フラフラと立ち上がり私を睨む眼光に少し怯む。
どうやら彼らはまだ戦う気らしい。

「よ……………よくも、やってくれたな……………！」

「テメエ、は……………絶対……………！」

「ゆるさねえ!!」

「そうか。だが、残念——」

二人に向かって月島くんは鳩尾めがけて思い切り蹴りを入れた

「テメエら三下じゃあオレたちには勝てねえよ」

男たちは蹲り、戦闘不能になった。

月島くんは彼らに構うことなくこの場を後にし私も彼の横に並ぶ。

「やはり、やりすぎなのでは？」

「いーんだよあれぐらいで。また絡まれたんじやあ面倒だからな。それに
……………」

月島くんは悪戯な笑みを浮かべ私を見る。

「今日はいいいもん見させてもらったな。あの氷川が暴力を振るうとは」

はははっ、と嬉しそうに笑う彼に少し怒りばかりの感じつつも冷静に返す。

「違うと言ってるでしょう！」

「そう怒るなって。それに、それだけ強かったら彼氏なんて存在は必要ないつても
領けるな」

「私なんてまだまだです。それに、私だって恋愛に興味がないわけじゃ、ないんですよ
？」

「……………はっ？」

私の言葉を聞いてか、月島くんは急に立ち止まった。

振り返ると、その顔つきはどこか呆然としたものだった。

「月島くん……………」

私が声をかけても返事がない。

それほど驚くことなのでしょうか？

すると、突如我に帰ったかのように歩き出し、私の肩に手を当てこう告げる。

「……………テメエに釣り合う男なんざ世の中にいねえから、恋愛は諦めろ」

何かを諭すように発したその言葉。

私の少しばかりの怒りが爆発した。

「ふ、ふざけないでください!!」

彼に言われる筋合いはない。

今日ほどこのように感じたことはない瞬間だった。

第35輪 バードンベルキア く奇跡的な再会く

夏休み。それは、神からの褒美。

『何か行動を起こせ』と言わんばかりに与えられた長い連休のことだ。

去年のこの時期、オレはバイクの免許を取り友達と昼夜問わずツーリングに出かけたものだが今年はずう。

「おお……………なんだ、このデカさは!？」

オレは今、アイドル事務所のビルの高さに驚愕し立ち尽くしている。

「おはよう。月島くん」

正面の玄関から白鷺が軽く手を振りながら姿を現れた。

「流石、テレビにも出演しているアイドルグループの大元だ。その辺のとじゃあ規模

が違うな」

「別に私たちだけじゃないのよ？他にも沢山のアイドルや女優がこの事務所に所属しているの」

まさに女の園、といったところか。

これを取り仕切る社長はさぞかし贅沢な暮らしをしているんだろうな。

「それで月島くん。これから社長に会うわけだけど………その、ちゃんとしてね？」

「ああ。わかってる」

「本当かしら」

有り余った休日を得たオレの元に白鷺からある仕事話が舞い込んできた。

それが、アイドルのマネージャー、つまり、白鷺の下僕になれとのことだった。

もちろんオレはそんな仕事お断りだとパスしようとしたが、雇用されれば普通の高校生では稼げそうにない報酬金額を提示され、喜んで承諾した。

今日はそのための面接を受けに事務所まで来たと言うわけだ。

将来二度と入ることはないであろう芸能事務所に第一歩を踏み締める。

「やっぱ、中も広いなア！」

全面ガラス張りのロビーに、巨人も見上げれるであろう高い天井。

中にはいかにも高そうなソファがいくつも配備されており、そこにはスーツを着た大
人たちが何やら話している様子が見える。

ロビーでこの規模なのだから上層が一体どうなっているかなんて想像もつかない。
まさに選ばれし人間が立ち入る場所と言えるだろう。

しかし――。

(……………んっ!?!な、なんだ。この淀んだ空気は……………?)

ここへきてから少し経つと何やら息苦しさのようなものを感じた。

誰もが憧れる芸能人がいる場所のはずなのになぜ……………。

「何をしているの?」

「……………いや、なんでもねえよ」

恐らく気のせいだろう。

オレは深く考えることなくエレベーターに乗った後、社長がいる階層まで上がり長い廊下を二人並んで歩く。

「なあ、女のオレがもしアイドルのオーディションを受けたらどうなると思う？」
モヤモヤした気持ち振り払うように、バカのような話題を振る。

「性格診断で落選間違いなしよ」

「そんな診断ねえだろ」

「あなたは顔に出やすいもの。どうせすぐにバレるわ……………こんにちは」

「……………ツ！」

「……………?」

白鷺の挨拶にアイドルらしきフリフリとした服を見に纏う女は肩をビクつかせ頭を

下げた後足速に廊下をかける。

「だがまあ、スタイルだけは良かったと思うけどなあ。少なくとも、オマエよりは」
「はあ、あなたは本当に何もわかっていないのね」

白鷺は呆れるようにため息をつく。

「何がだよ。一番重要なのはそこじゃねえの？」

「いい？ 芸能界で生き抜くためにはそれ以外にもっと重要なことがあるの！」

白鷺はそう強いいい、指を一つずつ立てながら説明する。

「まずは礼儀作法。挨拶はもちろん、笑顔を絶やしてはいけないわ。その次にトーク力。司会者から何か話題を振られたら期待以上のことを話さなくてはならないの。その次には——」

芸能界に対して興味もないから、ペラペラと饒舌に話す白鷺の言葉を右から左に聞き

流す。

しかし、この事務所に入った時から感じる違和感は一切何なんだろうか。

すれ違う人間は皆一切の笑みを浮かべず何かにつと怯えているかのように縮こまっている。

まるで圧政でも強いられているような。

テレビの前ではニコニコと煌びやかな芸能人が、裏では仕事を勝ち取るために手段を選ばずなんでもやつてる——いや、やらされているとも言うつもりじゃないよな？

そんなの、奴隷と同じじゃねえか。

夢のために辞めることもできず、社長の作り出した ” 蜘蛛の巣 ” に絡まり抜け出せない蝶がすれ違った女たちなんだろう。

救い出してやりたいのは山々だが……オレの妄想が間違っている可能性もある。それは、社長と話さないとわからないだろうな。

「その次に……ちよつと月島くん？ちゃんと聞いてるの？」

「んー？あー、オマエも苦労してるんだな」

「わかったならそれでいいわ。スタイルさえ良ければいいなんて考えがいかに愚か

だったかちやんと理解できたかしら？」

「へーへー。さーせんした」

二人でそう話していると社長室の前にたどり着いた。

コンコン、と白鷺はノックする。

「入りたまえ」

中から誰かの声がしてオレたちは部屋に入室する。

「失礼します。社長」

「……………どーも」

深々と頭を下げる白鷺とポケットに手をつ込み適当に挨拶するオレの目の前に映るのは黒髪の後ろ姿の男。

社長室とネームプレートが記されていた部屋に一人いるこの男が社長なんだろう。

男は後ろを向いたまま口を開く。

「おはよう。諸君」

「おはようございます」

「白鷺、少し喉の調子が良くないようだね」

「そ、そうでしょうか？」

「ここ最近では忙しかっただろう。体のケアは怠らず、休みの日はゆつくりと羽を伸ばすといい」

「はい。是非そうさせて頂きます」

社長と言うもんだから歳老いたじじいを想像していたが、現実とは違いとて若々しく渋い声をしている。

「月島くん。この方が——」

「随分と、大きくなつたな」

白鷺の紹介を遮つた男は立ち上がり、オレたちの正面を向き、全身真っ黒のスーツを纏つたその男の目線はオレを見ていた。

さっきのセリフもどうやらオレに対して言ったものらしい。
男はツカツカとゆっくり歩み寄る。

「大きくなると顔つきも変わるものだが、目元はやはり母親似だな」

他人とは思えないほど親しげに話すこの男はオレの頭から爪先まで凝視したあとそ
う口にした後、衝撃的な言葉を発した。

「十数年ぶりか。久しぶりだな、奏」

まるで呼び慣れているかのような口ぶりでオレの名前を言い放ったこの男の顔に心
当たりがあつた。

それが、家の写真立てに飾られた写真だ。

家族3人で移った唯一の一枚の中にこの男はいた。

少し老けてはいるが、その余裕のある表情やすらつとした体型は今も変わらない。

そう、コイツは——。

「……………そつちは随分と、偉くなったもんだな」

「月島くん……………」

「元氣そうでなによりだぜ。クソ親父」

「えっ!？」

「ほお、俺のことを覚えていたのか」

「ああ。何せおふくろから散々愚痴を聞かされたものでな。金の使い方が荒いことも酒癖や女癖が悪いことも、ありとあらゆることを知ってるぜ? もちろん、離婚の理由もな」

「くくくつ。まあ、酒癖が悪いのはお互い様なんだがな。奏もよく知っているはずだろ」

「当然」

普段は控えているらしいが、翌日が休日ならおふくろはかなりの量の酒を飲む。

ビールにウイスキー、日本酒に焼酎……………まるで居酒屋のようなラインナップだ。

たいして強くもないくせに飲むもんだからすぐに酔い潰れ机の上で寝ることなんてしよつちゆうである。

まあ、酔って手足を出さないからマシだと言うべきか。

「しゃ、社長！そろそろ本題に入った方がいいかと思えますよ」

オレたちの間に白鷺が割って入ってきた。

クソ親父と話してすっかり存在を忘れていたところだ。

「おっと、この後レッスンがあるのにすまないね、白鷺。立ち話もんだからその椅子にかけなさい」

クソ親父に勧められオレと白鷺は黒のソファに腰をおろす。

「それにしても、白鷺が推薦するマネージャーの名前を聞いたときは驚いたものだ。まさか俺の愛息だったなんてな」

「この女から金になる仕事話を持ちかけられたから来たただけだ」

「もちろん報酬は出す。だが、今日はあくまで面接をするために呼んだまでと言うことを忘れるなよっ」

「ああ。そうだったな」

対面に座るクソ親父はオレの履歴書に目を通す。

「花咲川では風紀委員長をしているんだったな」

「ああ。学園長に強制的にな」

「噂で耳にしたことだが、花咲川には ” 不死身ァレンデツドの暴君 ” などという男がいると聞

いたんだが、それは奏で間違いないんだな？」

「その通りだ。誰がつけたかもわからん名前ですう呼ばれてる」

「カッコいいじゃないか。学生らしくて」

「よせよ。そんなことで喜ぶのは厨二病ぐらいだ」

「ククク。お前は大人だなあ」

久々の再会だからかクソ親父は楽しそうに話す。

一方の白鷺はというと、オレの言葉遣いを直すことを諦め、ただジツと座っている。

「面接のついでだ。逆にオレから一つ聞いてもいいか？」

「なんだ？」

「オレみたいな腕っ節だけのど素人をマネージャーとして雇おうとしてる理由を教えろ」

「なんだ。白鷺から何も聞いていないのか」

「それは、彼にとって全く気にする必要のないものだと思ったからです」

その理由とやらは白鷺が絡んでいるものらしい。

クソ親父は立ち上がり自分の机に向かうと、その引き出しを開け一枚の封筒を取り出しオレに渡す。

「これが、事務所宛に届いたものだ」

封筒を開け中の文を見る。

「……………そういうことか」

概要はこうだ。

『白鷺千聖さん。私はあなたのファンで、あなたが———にお住みで花咲川高校

に通っていることは知っています。私はあなたのことが大好きで、ぜひお付き合ひしてほしいとも考えています。”みんなの白鷺千聖”ではなく、”私だけの白鷺千聖”になってほしい。もしそれが叶わないとなれば私はあなたに強硬手段を取らなければならぬ。どうかそのことを考えた上でご返答ください」

とどのつまり脅迫文ということだ。

こういった内容の手紙が数枚に加え、花咲川高校と白鷺の家らしき写真が入っていてその言葉の重みが伝わってくる。

「オレは金が欲しい、アンタは白鷺を守りたい。なるほど、利害は一致してるわけだな」

「その通りだ。この依頼を引き受けてくれるか？」

「引き受けるも何も、今日はオレの面接をしに来たんだろ？そっちから頼み込むなんておかしな話だと思わないのか？」

「クククツ。奏がこの場に来てくれた時点で採用は決まっていたんだ。どうやら白鷺は来ないものだと考えていたようだが」

「普段の彼を見ていれば予想できます。しかし、今回は私の思い違いだったようですね」

「ハッ、残念だったな」

皮肉混じりにそう言うと、白鷺はギロリと睨みつけてきたが特に口を開くこともなく再びクソ親父の方を向く。

「万が一白鷺に危害が加わるようなことがあれば報酬は無し。そして、犯人諸共損害賠償を請求させてもらうつもりだが、いいな？」

「この女がどうなるのがオレの知ったことじゃねえが、高校で初めてできた友達が悲しむからなあ。いいだろう。だが、それならこつちも条件を出させてもらう」

「なんだ？言ってみろ」

「オレがその手紙の送り主をとっ捕まえることができれば報酬は倍もらうぜ？何せこつちも危険な橋を渡るわけだからな」

「クククツ。抜け目がないな」

「アンタの息子だからな」

「いいだろう。例え犯人を捕まえなくても白鷺を守ることさえできれば報酬は弾んでやるぞ」

「ククツ、太っ腹だな」

「これでも社長だからな」

クソ親父は書類とペンをオレに渡す。

「ここに注意事項がすべて書かれてある。見通したらサインしてくれ」

「ああ」

細かな文字がズラリと並べられた書類を見て面倒だとは思ったが、一言一句見落とすことなく全てを見通す。

万が一にもヤクザがやりそうな小さい字で有る事無い事書かれたらたまったもんじやないからな。

ところが奴はそんなセコイことをする器じゃなかったようだ。

要約すると

- ・ 白鷺を絶対守り切ること
- ・ 白鷺が家を出てから家に着くまでが勤務時間とする
- ・ 学校でも常に一緒にいること
- ・ 期間は3ヶ月とする

といつたところだ。

「なあ、なんで3ヶ月なんだ？」

「10月に入れば大学受験に専念し、一時的に芸能活動を休止することになるからだ」
「本当は3年になってからのはずだったんだけど、予定がどんどんずれてしまつて今に至っているってわけなの」

「なるほど、わかつた」

そこまでして大学に進学したいものなのか、甚だ疑問だ。

もしオレが白鷺の立場なら迷うことなく高卒で女優業を続けるんだが、どうせ奴のとだから先を見据えてのことなんだろう。

どーせ仕事をしてたら学校に通う余裕も無くなるだろうに、ホント馬鹿なやつ。

「他に訊きたいことはあるか？」

「今はねエ。訊きたくなつたら訊くようにする」

「いいだろう。さあ、サインしてくれ」

クソ親父の言う通り、書類に名前を書く。

これで契約成立。

オレは晴れてこの社長と白鷺の下僕イヌと成り果てたわけだ。

「契約は明日からだ。10時に白鷺を撮影現場まで無事に送り届けてくれ」

「言っておくがオレの交通手段はバイクだけ？そつちで車とか出したりしねえのかよ」

「生憎人手不足でな。免許を持ってて、ある程度の信頼ができて、強い人間となるとなかなか見つからなかったのが本当の話だ」

「電車は……………ああ、白鷺がダメか」

「なつ、どう言う意味よ？」

「万が一があつたら、あんな人ごみの中を助けられる義理はねえからな。それに、オレは電車が嫌いだ。ただでさえ狭い上にあんな密集されたら吐き気がする」

「結局月島くんが嫌なだけじゃない」

「うっせエ」

「交通手段はキミたちに一任するよ」

「まあ契約しちまつたんだ。事故らないように気いつけねえとな」

「くれぐれも、よろしく頼んだぞ」

長いようで短かった社長面談は終え、部屋を後にする。
廊下をしばらく歩いたところで白鷺はようやく口を開いた。

「それにしても驚いたわ。まさか社長があなたのお父様だったなんて」

「父親じゃねえ。元だ」

「そ、そうね。ごめんなさい」

「オマエはアイツのことどう思ってる？」

「社長は……冷静沈着で人を見る目があると思うわ。これまで数多くのアイドルや女優を輩出してきたもの」

「ホオ……………」

「そう言うあなたはどうかだったのかしら？久しぶりの会話は」

「別に、今日話したから全てわかる訳じゃないからなあ。おふくろからは ”最低な男” と言う烙印を押されているから、オレにはそのイメージしかねえよ」

「正直、今の社長からはそんな想像はできないわね」

「本性を隠すことなんて誰にだってできる。その気になればアイツを丸裸にだってし

てやるぜ?。」

「別にその必要はないわ」

「なぜだ」

「する必要がないもの。あの人は私にとって ”害” になっているわけじゃない。むしろ感謝しているのよ」

「万が一、”害” になつたとしたらどうする」

「その時はその時になつて考えるわ。今は私を守ることに尽力してほしいの。よろしくね、月島くん♪」

「へーへー。好きにしゃがれ、お姫様^{ジュリエット}」

「も、もう! その言い方はやめなさい!」

3ヶ月もこの女をマネージャー、基ボディーガードとして守らなくてはならない。金のため、初友のため。

不純な動機と言われようが目的さえ達してしまえばそれでいい。オレの身体がどうなろうとも。

第36輪 向日葵

月島くんを見送ってから私はレッスンを励んでいた。

残り少ない高校生としての芸能活動。

悔いは絶対に残したくないからだ。

「それじゃあ、みんなお疲れ様」

長時間のレッスンを終えメンバーに別れを告げる。

パスパレが結成されてから早一年。

紆余曲折あつたけれど、今はどちらかと言うと楽しくやれている気がする。

”元子役”ではなく、”女優”でもなく、”アイドル”としての白鷺千聖も浸透してきた。

順調にいけばみんなと武道館に立つことだって夢じゃない。

活動を休止する前に達成したい目標だけれど、現実はそう甘くないのはわかっている。

目標はあくまで目標。

達成できなければまた次の目標を定めればいいだけのこと。

私は現実主義リアリストなんだから、決して高望みなんてことはしないわ。

プルルルッ。

ポケットにしまつてあつた携帯に電話が入つた。

発信者は………不明。

以前、同じ出来事があつたから尚更その相手に恐怖する。

もしかして、手紙の送り主？

そんなことが頭をよぎる。

「も、もしもし」

意を決して電話に出るも向こう側の人物は返事を返そうとしない。

数秒、数十秒待つても状況が変わらずまるで私をからかっているのかとすら感じる。

「あの、何も用がなければ切りますよ」

少し強めに告げたその時、くすくすと小さく笑う声が聞こえた。

「どちら様？」

電話の送り主に聞いただと、その声の主はようやくやく返事を返した。

『初めまして、と言った方がいいかしら？』

「少なくとも私はあなたのことを知らないわ」

『羽丘の女帝』 という二つ名は聞いたことなくて？』

「……………!?!」

以前月島くんを殺害しようとした張本人。

これまで私となんの接点もなかったその狂女から電話がかかってくるとは思わず驚く。

『ウフフツ』

「一体何の用かしら？別に私はあなたと話すことなんてないのだけれど」

『そう。でも、残念。私にはあるの。よかったら聞いてちょうだい』

「……………手短にお願いするわ」

『もちろんよ♪』

どこか余裕があり落ち着いた様子の彼女。

まるで、社長と話しているみたいだ。

『最近あなたの身に異変が起きたと言う噂を聞いたの。それは合ってるかしら？』

「……………ええ、その通りよ。でも、このことを知ってる人は限られているわ。どこからその情報を得たのかしら？」

『私って結構情報網が広いの。あなたが知られたくないこともなんだって知ってる。

例えば、文化祭の出来事もね』

「……………あなたの目的がわからないわ。私への嫌がらせ？それとも、彼のようにわたしにも恨みを持っていたりするの？」

「別にあなたなんてどうなろうと構わないわ。少なくとも私は、ね？」

意味深なその言葉。

まるで誰かが私にどうかなって欲しい人がいるみたいな言種だ。

「どうやら私は酷く憎まれているようね」

『ウフツ、正解よ。例えばあなたに如何わしい手紙を送りつけた人とかね』

やはり、と言うべきか。

手紙の送り主と彼女が繋がっていると自ら吐露した。

これで月島くんに伝えさえすれば彼女は終わったも同然。

だからこそ、彼女の真の目的が分からずにいた。

「あの手紙のことが本当だろうと、今の私には月島くんが付いているわ。あなただつて彼の強さは知っているはず。こんなことをしてメリツトなんてないと思うのだけじゃ。」

『知られたつて構わないわ。近い将来絶対知られることなんだから。言わせて貰えば、これは “ 宣戦布告 ” 。月島くんを取り巻くもの全てを壊すためのね』

「あらつ、随分物騒なことを言うじゃない。集団で襲つた挙句警察に捕まることを恐れて逃げ出した人が吐くセリフじゃないと思うのだけれど」

『……………確かにあの時は驚かされたわ。彼の生命力はゴキブリ以上よ。だからこそ、今度は——ちゃんと殺す』

「あなたにできるのかしら？あの暴君を相手に」

『もちろんよ。どんな屈強な大男でも、どれだけ血を流しても倒れない化け物でも、必ず殺せる手段を私は持っている。彼にもよろしく伝えておいてね♪それじゃあ』

羽丘の女帝さんは自分勝手に電話を切り、緊張から解放されたからか私はふうつと息を吐く。

「本当に、驚いたわ」

今はただその一言に尽きる。

これまでなんの接点もなかった危険人物からコンタクトされたとなると、軽く受け流すことなんてできるわけがない。

彼女は『殺る』と言い切った。

もうこれは嘘偽りない言葉と受け取って間違いないだろう。

「……………もしも月島くん？白鷺です。実はさつき——」

私はすぐさま月島くんに電話をかけ先ほどの彼女との会話を全て話した。

彼は驚く様子もなく私の話を聞き、淡々と返事を返す。

『アイツが何を考えてるから知らねえけど、マズイのは確かだな』

「やはりそうよね……………」

『とりあえずオマエは一人で出歩かねえこと。仕事中はオレの側から離れるな』

「ええ。もちろん」

『それと、あの時みたく誰かを人質に取られることだつてあるだろうから、クソ親父に頼んで松原と氷川に護衛をつけるようにしてもらおう』

「私からもお願いしておくわ」

『オマエは仕事に集中してたらいい。余計なことは全て忘れろ。万が一にもしくじりはしねえよ』

「頼りにしてるわ。月島くん」

『よせよ。柄でもねエ』

「フフツ、本心なのだけれど?」

『オマエが言うど嘘臭く感じるんだよ。そういう演技はドラマの中だけにしとけ。じゃあな』

月島くんは捨て台詞を吐き電話を切る。

「やっぱり、月島くんの声を聞くと落ち着くわね」

いつからだろう?

こんなことを思うようになったのは。

いつもは歪みあつてばかりの私たちだったが、今となっては普通の友達………いや、それ以上の良好な関係まで築かれていた。

でも、彼はそんなこと一切気にしない。

今の私たちは、女優とマネージャー。

ただ、それだけの関係だ。

「……………」

ベッドに置いてあるクマのぬいぐるみをぎゅっと抱きしめる。

(なんだか、モヤモヤする……………)

この気持ちは電話で脅されたからか、それとも別の何かなのか。脳裏に浮かぶ彼のことを考えながら今日は寝付くことにした。



今年も性懲りも無くやってきた暑すぎる夏。

夜は比較的涼しく感じるが、昼間となるともう完全に日差しがオレたちを殺しにきている。

汗はとめどなく流れ、日傘や帽子、洗剤の香りのするタオルは必需品だ。

何せオレはいま、白鷺のドラマの撮影に同行しているんだからな。

「はい、カーツト！………おっけい！ひとまず休憩にしようか」

監督の一言で役者たちが散り散りになる。

白鷺は真つ先にオレの元へと駆け寄り、キンキンに冷えた水を手渡す。

女優といえど人は人。

疲労の色が見てとれた。

「辛そうだな」

「ええ。けれど、嫌いじゃないわよ？」

「DMかよ」

「そういうわけじゃないのだけれど」

にこやかに笑う白鷺だが、肩から息していて呼吸が荒い。

今まで何とも思わず見ていたドラマだったが、裏側ではこんなことをしているのかと思ふと俳優や女優の演技力は素晴らしいと言う他ない。

他のマネージャーとも話をしたが、海外での撮影だともっと大変だと言う。

今回は国内、もとい近場での撮影で助かった。

「今のが『幼馴染と水辺で戯れ合うシーン』か………………。せつかく海まで来たのに潜れないなんて、監督も鬼だな」

「このシーンでの目的は二人が絆を深めあうことよ。幼馴染といつても二人は高校生。気難しい年頃だということを監督もわかっているんじゃないかしら？」

「普通の高校生はこんなことしてるんだな。オレにとつての普通とはかけ離れすぎて想像もつかん」

「喧嘩ばかりしているとそうなるかもしれないわね」

「うっせえ」

「あなたにはそういった人はいなかったのかしら？」

「……………」

思えばオレに ”友達” はいれど、 ”幼馴染” と呼べる存在はいない。

ガキの頃はバカだったから、頭に血が昇りやすくすぐに揉め事を起こしては色んな奴との殴り合い、喧嘩三昧だった。

歳は問わず、オレがカチンときた瞬間に闘いのゴングは鳴っていた。

そこからはもう想像する通りだ。

そこからできるのは、敵、自分、噂を聞きつけた挑戦者ばかり。

あの頃のオレは友達すらろくにできなかつたのだ。

「そういうオマエはどうなんだよ」

「私は子役としてずっとテレビに出ていたから、そういった人はいなかったわね。学校にもあまり通えなかつたし……………」

どうやら白鷺もオレと同類らしい。

しかし奴はオレとは違い幼少期を棒に振るつたわけではない。

その時の活躍があつたからこそ今こうやって仕事ももらえてるわけだからな。

……………いや待てよ。

それならオレもあの頃に力をつけたおかげで誰にも負けることなくいられてるわけ
で————。

「ふふつ、何か変なことを考えている顔ね」

「昔を懐かしんでんだよ」

「小さい時の月島くんはいつも傷を作っていたものね。写真に映っていたものの全部、どこかしらに絆創膏をつけていたわよ？」

「今だから言えるが、自分でもどうかしていたと思う。中学に上がってからはもうそんなこと一切しないように陰でひっそりと学園生活を送っていたんだけどな」

「あなたが陰に？想像もつかないわね」

「情緒が不安定な時期だからな。結局、最後は暴れ回って今に至るわけだ」

「たった17年だけど、あなたほど濃い人生を歩んだ人はいないでしょうね」

「まあ、つまんねえ人生よりよっぽどいいんじゃない？この方がよ」

「これが、今のオレの考えだ。」

『ストレスは人生のスパイスだ』と、ハンス・セリエが言ったようになるの刺激もない日常を送ることなんて退屈で仕方ないだろう。

オレはつまらんことが大嫌いだ。

勉強だつてそう。ただ机にじつと座り話を聞くだけなんて面白くもなんともない。

学校で習ったことが将来役に立つことなんてさほど多くない、と大人は口を揃えて言う。

その考えにオレも賛同する。

オレが目指してるのはそんなものを必要としない。

単純な身体能力、友好な人間関係、そしてその場の閃き。

それらさえあれば他になにもいらん。

「まあ、月島くんらしい考え方ね」

「オマエも同じだろ」

「もちろん女優を目指すけれど、ちゃんと大学には通うわ」

「なんでそこまでして大学にこだわるんだ？」

「^{シーン}ごく普通の日々を過ぐす」 ことも、役を演じる身としては経験しておくべき
光景なのよ」

奴は『白鷺千聖』という物語を歩む主人公であり、それを彩る演出家でもあり、全てを決める監督でもある。

その物語がどういった経緯を辿り、完結するのか少々興味が湧いてきた。

一年前のオレならこんなことを言うなんて想像もつかないだろうが、白鷺とは幾度となく行動を共にした。

怒り、悲しみといった感情も、女優であるための努力も、松原たちと話す時の和やかな表情も——もはやクラスメイトという関係では収まらない。

こういつた関係性をなんと言うのか。

今のオレには答えかねる議題だ。

.....

.....

ドラマの撮影も終わり、辺りはすっかり暗くなり夜を迎えた。

太陽の光を反射して輝いていた海も今は静かな波音をたてるだけで、魅力なんてこれっぽっちもない。

「夜だとやはり涼しいな」

「ええ。そうね」

オレたちは二人並んで砂浜を歩く。

日中はまるで砂漠のように熱していた砂浜も、この時間だと裸足でも余裕で歩くことができた。

いや、むしろ心地よさすら感じる。

海水で少し湿ったところなんかは冷たくて最高だと言えるな。

「朝からずっと水辺みづべにいたのに、また行きたいって……………そんなに海が好きか？」

「……………昔はとつても好きだったわ。家族でよく海水浴も行っていたし」

「なんか含みのある言い方だな。今は海が嫌いだとも言うつもりか？」

「いえ、そういうことではないの。決して、嫌いではないわ……………」

白鷺は少し俯きどこか暗い表情を浮かべていた。

「ドーせ海は日焼けしやすいとか海水は肌に良くないとか、そんなところだろ」

「よく、わかったわね」

「オマエのことだからな。そんなこつたらーなと思っただけだ」

「ふふ、私をよく見てる証拠ね」

「冗談はよせ。気色悪い」

「まあ、酷い言い方」

もはや見慣れたやり取り。

今日は松原もいないから互いが言いたい放題だ。

二人きりというのも酷な話だな。

「そんなに海が嫌なら断れよ」

「そういうわけにはいかないわ。それに、しっかりとケアをしていれば問題ないのよ」

「芸能人つてのはつくづく面倒だな」

ストイックという言葉からかけ離れたオレはその一言に尽きる。

「でも、やっぱり海は好き。特に静寂に満ちたこの夜の風景が」

「そうかあ？オレにはなにも感じないが」

「横になって空を見上げてみて。きっと驚くはずよ」

白鷺の言葉に従い、横になる。

すると目の前にはいくつもの星が光り輝く満天の空が広がっていた。都心部では決して見ることでできない光景にオレは思わず声をあげた。

「これは……………驚いたな」

「そうでしょう？ビルや高層タワーの光がないからより一層綺麗に見えるの」

白鷺は横になるオレの隣に腰掛ける。

「あなたに、一度見て欲しくて」

「いい場所を教えてもらった。これは、マネージャーのお礼と受け取っていいのか？」

「別に、そういうわけではないわ」

「ならなんだ？」

「ただ単に、あなたとこの光景を共有したかったのよ」

「ほお、ロマンチックなことを言うじゃねえか。だが元ネタはあがってるぞ」

「どういう意味かしら？」

「それは今回のドラマで主人公がヒロインに向かっていうセリフを振ったな」

「よく覚えてるわね。その通りよ」

「あんな言葉、クサくてオレには言えねえよ。ドラマとはいえ、主人公役のあの俳優はよく表情を変えず演じれたものだな」

「その……………どうだったかしら？」

「どうって？」

「こう、ドキドキしたとか……………ときめいたとか」

「ハッ、あるわけねえだろ。んなこと」

「そう。残念」

相手が白鷺千聖だからか？

いや、オレは恋する乙女じゃない。

たとえオレが女で野郎から言われたとしても『は？なに言ってるんだコイツ』と冷めたことを考えてしまいそうだ。

「なんだ、オマエはそんなセリフを言われて嬉しいのか？」

「そうね。好きな人に言われたのなら、もちろん嬉しいわよ」

「好きな人ねえ……………」

「月島くん。私にそんな人ができないとでも言いたいのかしら？」

「いや、オマエと釣り合う野郎なんてこの世にいるのか想像もつかんだだけ。女優の夫ともなるとプライベートもろくに過ごせなさそうだからな」

その上、スキヤンダルなんて起こせば一躍週刊誌に取り上げられニュースにもなる。
”罪人” というレッテルを貼られた人間はこの格差社会では生きていくことすらできなくなるだろう。

オレはそんな人生真つ平御免だ。

「女優を辞めて専業主婦になるのも悪くないかもしれないわね」

「これまでの努力を全て捨てる気か？そんな勿体無いこと、あのクソ親父が許すわけねえだろ」

「私の人生なんだもの。他人の指図なんて受け付けないわ」

「ククツ、それでこそ白鷺千聖だ」

「将来私がどうなっているかなんてわからない。でもハッキリしているのは、私がどんな人生を歩もうと必ず、楽しく笑って日々を過ごせている。だって、私が失敗することなんてあり得ないもの」

この女らしい傲慢とも取れる考え方だ。

だが、否定することはできないほど白鷺千聖という女は完成されている。

同年代の女優共はたまったもんじやないだろうな。

こんな完璧超人が同じ世界にいるんだから。

「オマエに好かれる奴はさぞかし光栄だろうな」

「……………ねえ、月島くん」

「なん——」

ずっと星空を見て会話していたが、奴の声のトーンが下がったのに気づき始めて顔を合わせると、なにやら真剣な目つきでオレを見ていた。

「誤魔化さないで、ちゃんと答えて欲しいの」

「お、おお。バッチこい」

「私のこと、どう思っているのかしら?」

「は、ハア?」

突拍子もない質問に思わず間抜けな声を出してしまった。

白鷺のことをどう思っているか、だど？

今更そんなことを聞いてなにになるのか。

奴の考えていることがさっぱりわからん。

「そういうオマエはどうなんだ」

質問を質問で返し白鷺の動向を探る。

「そうね。あなたに聞いたからには私も答えなくちゃいけないわね」

一度顔を逸らし、ふうつと息を吐き心を落ち着かせる。

「率直に言わせてもらおうわ」

再度オレの方を向き小さく微笑むと奴はこう告げた。

「……好きよ」

「……………ハッ？」

白鷺の言った言葉が理解できず思考が固まる。

「月島くん、あなたのが好き。わたしはあなたに恋をしているの」

「ま、待て……………一体、なにがなにやら……………」

オレの思考回路はショートし、白鷺がなにを言っているのか全くわからずにいた。それでも奴は悪戯に笑うとオレの顔にそつと手を当て耳元でそつと囁いた。

「別に月島くんが私のことをどう思っている構わないわ。必ず私があなたを振り向かせてみせるから。覚悟しててね♪」

この後の記憶は一切ない。

初めての出来事にオレは動揺を隠せなかったんだ。

これが、告白というやつか。

普通の男女はこんな気持ちになるんだと実感させられた瞬間だった。

第37輪 火の花

白鷺のマネージャーを務めてから一ヶ月が経過。

夏の暑さが変わることはないが、オレの身の回りにはある変化が起きた。

「それじゃあ月島くん。行ってくるわね」

「お、おお」

笑顔で手を振り、白鷺は撮影現場へと戻る。

忘れもしない、あれはドラマの撮影後の出来事だ。

オレは奴に告白された。

生まれて初めての出来事にあの日は動揺を隠しきれなかったが時間がたつた今、大分落ち着きを取り戻すことができたが、白鷺に対してなんの返答もしていない。

いや、出来るわけがないというのが正しい言い方か。

もちろん、率直に嬉しいと感じているがそれ以上に白鷺との関係性が崩れるのを危惧している。

”OK” をすれば晴れて恋人同士となり、”NO” と答えればただの友達になる。

白鷺は松原や氷川とも仲がいいから奴らとの関係性も考えなくてはならない。ハッキリ言っておれは今、すごく困っているのだ。

「やあ。元気にしてるか？ 奏」

「……………なんだ。親父か」

普段現場には顔を見せないオレの雇い主が仏頂面で歩み寄ってきた。

スタツフたちが奴に頭を下げる中、奴はオレの隣の席にゆつくりと腰掛ける。

「『仕事の方は』 順調そうだな」

「ああ。あんたらのスケジュール管理のおかげだ」

クソ親父は実の息子とは目を合わさず、笑顔でポーズをとる白鷺の方へと顔を向ける。

しかしオレはそんなこと気にせず話を続ける。

「仕事をいれるのは結構なんだが、もう少し場所を考えてくれよ。あちこち移動してこつちは大変なんだからな」

今日は雑誌に掲載する写真の撮影にドラマのインタビュー、新曲のレコーディングと仕事が目白押しだ。

場所も全て異なり移動がとてつもなく面倒である。

クーラーをガンガンに効かせた車に乗れるならまだしも、こちとらお日さんの光をモロに受けるバイクだ。

もちろん体を冷却させる装置なんでものは備わっちゃいない。

少し跨っただけで汗を掻く。

「折り合いがつかなくてな。許してくれ」

「赦しを請うならオレより白鷺にしろよ」

「あの子は許してくれる。何せ、優しいからな」

「ハッ、あんたに嫌われたくないからだと思うぞ」

「そんなことはない。何故なら、そんなちゃんけなことを考え怯えているようなら私が

とうの昔に見限っているからだ」

(おふくろに見限られた男がよく言う……………)

今すぐにも解雇クビにされてもおかしくないこの心の声を口に出すことなく、会話は進む。

「どうやら私の心配は不要だったようだな。他のマネージャーにも話は聞いたが、問題なく仕事やれているようだ」

「つたりめえだろ。勤務時間内はちゃんと働く」

「良い心掛けだ。そういえば、今月の給料はちゃんと口座に振り込まれていたな？」

「ああ。全く、高校生がこんな額もらっているのか疑心暗鬼になったぜ」

「他のマネージャーとは比べ物にならないほど危険な仕事内容だからな。あれぐらいは貰って当然と言えるだろう」

「さっすが社長。太っ腹なこと」

親父は『あれぐらい』と言ったが、とんでもない。

あまり大きな声で言えることではないのだが、そうだな……………高校生がバイトをし

て稼げる平均金額の5倍近くはあったとだけ伝えておこう。

「万が一の時のために貯金でもしておくんだな」

「安心しろ。万が一なんて事は起こらねえよ」

「フツ、そうか」

一定だった親父の固い表情はオレの一言で柔らかくなった。

それはどこか、嬉しそうともみとれた。

「さて、そろそろお暇させてもらうか」

親父はそういいながらゆっくりと立ち上がる。

「なんだ、白鷺の仕事姿をもっと見ていかなくていいのか？」

「こう見えて忙しい身だな。今日はたまたま近くで打ち合わせがあったから来ただけだ」

「そうか。まあ、気をつけて」

「……………おっと、そうだった。大事なことを言い忘れていたよ」

背を向け歩き出した親父は立ち止まり、衝撃の一言を言い放った。

「白鷺と恋人関係になるのは結構だが、私情を仕事場に持ち込まず、学生らしい節度のあるお付き合いをするように」

「……………!?て、 temeエー!その情報をどこから……………!!」

「私からは以上だ。そのうち、二人の馴れ初め話でも聞かせてくれ」

ハツハツハと笑いながら去るクソ親父。

誰かに聞かれたのではないかと辺りを見渡したが人影は一切なく、親父はわかってあんなことを言ったんだろう。

流石は芸能プロダクションの社長と言ったところか。

しかし、どうやら親父はオレと白鷺が付き合っていると誤解しているような口振りだった。

どこで情報が漏れたか気になるところだが、まずはきちんと事実を伝えるところから始めなくてはならないようだ。

「月島くん。おまたせ」

小さく手を振り戻ってきた白鷺。

だが、オレの目線は親父の方を向いていた。

「あれは……………社長？何でこんなところにいるのかしら？」

「さあな」

「何か話したの？」

「……………」

オレは頭の中で先程の会話を思い出す。

「……………別に」

「嘘、ね」

「白鷺は頬を膨らませながらオレの顔を両手で押し、不満そうにオレの目を見ていた。

「本当は何を話したのかしら？正直に言わなかったらこのままあなたの唇を奪ってもいいのだけれど？」

冗談と思えない発言に負け、オレは親父との会話の内容を全て話した。しかし、白鷺は表情をひとつも変えることなく淡々と返事を返す。

「うちの事務所に ” 恋愛禁止 ” なんていうルールはないからじゃないかしら？現に、結婚にまで発展した人もいるのよ」

「だからといって決めつけられるのは違うだろ。もしその話がオマエのグループのメンバーや事務所のスタッフ、最悪の場合マスコミにバレたら面倒くせエなんてレベルじゃなくなるぞ」

「でも、どのみち私は芸能活動を少しの間休止するのだから、すぐに別の話題で持ちきりになるはずよ」

「確かに、近頃は物騒なニュースが多いからな。不倫やら、人身事故やら」

「新人の子が出てきて厄介なベテランが弾かれていくように、芸能人は日々入れ替わり立ち替わりの世界なの。私は、いつまでもテレビと関わる仕事をしていきたい」

「立派な志だな」

「月島くんには夢はないの？」

「おいおい、オマエの後に言わせる気か？」

「恥ずかしがらなくてもいいのだけれど」

「そういうわけじゃねえんだよ」

奴に比べてオレの将来なんてあまりにもちっぽけだ。

並べることすら烏澁がましい。

「そんなことより、撮影が終わったならとつと次の現場行くぞ。今日のはかつかつだから休む暇はねえからな」

「ええ。望むところよ。夜のお楽しみのためにもね♪」

オレたちは現場のスタッフに別れを告げ、次の仕事場へと向かう。



時刻は午後7時。

昼間にミンミンと鳴いていた蝉の声はバタリと止まり、静かな夜を迎えると思いきや周囲はガヤガヤと人の話す声で溢れていた。

そう、今日は年に一度の花火大会が開催されているのだ。

去年は店員としてこの人混みに紛れることはなかったのだが、今年は一人の客としてこの祭りに参加している。

もちろん、オレは一人ではない。

「ごめんなさい。10分も遅れてしまつて……………」

「ううん、大丈夫だよ」

「お仕事お疲れ様でした」

「はあ……………ホント、ギリギリだったな」

そう、白鷺の言っていた夜の楽しみとはまさにこれのことだ。

この日はたまたま松原、氷川の予定も空いていて、なら全員で花火を見に行こうと決まったわけだ。

……………はっ？如何わしいことを考えていただど？

まさか、オレがこの女に手エ出すわけねえだろうが。

まあ、そんな話はさておき。

仕事自体は集合時間の1時間前には終わったものの、この夏祭りの影響もあつて道路は大渋滞を引き起こしていた。

そのせいで白鷺を家に送り届けるのが遅くなり、結果オレは浴衣を着る間も無くこの会場へ来たわけだ。

もうすでに体はヘトヘト。

笑顔を作る余力すら残っちゃいない。

「奏くん、大丈夫？」

「問題ねえよ。腹でも満たせば回復する」

「マネージャーも大変なんですね」

「大変なんて生易しいもんじゃねえよ。もうブラックだブラック！」

「でも、かなりの収入があるんじゃないかしら？」

「お陰様でな」

「それじゃあ、今日は月島くんに奢ってもらおうかしら♪」

「つぎけんな！第一テメエの方が儲かってるだろうが！」

「あらつ、そんなこともないのよ？どれだけ仕事を頑張っても、事務所が殆ど持つていつてしまうから」

「ああ……………」

オレは何も言い返せなかった。

白鷺が仕事できているのはあくまで事務所が仕事をもらってきてくれてるおかげで、なんの後ろ盾もなければ今頃一文なしになっているだろう。

「と、いうわけで今日は月島くんが私たちに日頃の感謝を込めて恩を返す番だと思うのだけれど？」

「そうですね、一理あります」

白鷺の提案に氷川も乗っかる。

普段は絶対こんな茶番に付き合わないはずなのに、コイツ……………！！

「花音も遠慮しなくていいのよ」

「それはオレのセリフだろ!？」

「気にすることありません。松原さんも被害者の一人なんですから」

「ふ、二人ともお……………」

困惑する松原。

多対一なんて喧嘩だと楽勝で勝てるのに、口喧嘩となるとどうもオレは弱者らしい。仕方ない、ここはオレの懐の広さを証明してやるか。

「……………わーったよ! オレの負けだ。その代わり一人10000円までだからな」

「うふふ、ありがと♪」

「何にするか迷いますね」

「本当にいいの? 奏くん」

「気にするな。30000円なんて安いもんだろ」

「そう? なら私はもう少し——」

「オマエはもつと遠慮しろ」

調子に乗る白鷺の頭を叩き、痛そうにしながらも笑顔を見せる。

「人が多いから逸れるんじやねえぞ。特に小さいの二人！」

「ふええ………が、頑張ります」

「私も含まれているのは心外なのだけれど」

「オマエらは前科があるからな。二人で仲良く手でも握つてろ」

「なら、私が間に入ります。これなら迷子になる心配はないでしょう」

「ありがたい、紗夜ちゃん」

「ねえ、月島くん。私と花音の片手が空いてるのだけれど？」

「のらねえよ。バーカ」

揶揄うように話す白鷺に背を向け、屋台を目指し歩き始める。

それにしても、例年通りすごい人だかりだ。

参加人数に合わせてか連ねる屋台も多いような気がする。

鉄板焼き、リング飴とかの食い物系に、金魚掬いやスーパール掬いなどの遊び系などなど、つい目移りしてしまうほどだ。

昔はおふくろと来て、散々遊び回って最後はおんぶされながら帰ったという話もあるんだが、これは絶対に口外しない。

結局のところ、体は大きくなれど心はあの頃と変わらないガキだということだな。

そしてそれらの屋台で一際目立つのが――。

「へいへいへいへいへいらっしやい!!」

「早い美味しい安いの三拍子が揃った焼きそばだよ!」

酔っ払い二人が営む焼きそばの屋台。

それも、オレのよく知る二人組だった。

「おお、奏!久しぶりやないか!」

「相変わらずだな。おっさん」

一人は海の家とかで世話になった筋肉ダルマ。

「奏え!我が愛息子!」

「寄るな。呑んだくれ」

もう一人がオレのお袋。

去年は酔っ払いが一人だったはずが今年は二人。

こんなんで店が回るのか甚だ疑問だ。

「こんなところで何してやがるんだ」

「見たらわかるやろ！出店や出店！」

「今年はあるが来ないからってアタシが誘われたんだよ！」

「そうやで！渚ちゃんには感謝せんとな！アツハツハ！！」

高笑いするおっさんに対し、後ろの3人はどこか引き気味だ。

まあ無理もない。

オレだって知り合いだと思われたくないんだからな。

「……………あれ？アンタ、友達と来るって言ってなかったっけか？」

「ああ。だからこうして連れてきたんだろうが」

オレが指を刺す3人を凝視する。

「……………三叉とは、とんでもない野郎だね」

「おい待て。とんでもない勘違いをしてるぞ」

「奏もとうとうモテ期が来たってか？」

「違うっつってるだろ!!」

もう罅があかん。

そう考えたオレは店を立ち去ろうとするが、筋肉だるまの腕に捕まり半ば強引に焼きそばを4人分押し付けられた。

タダなのはありがたいが問題は味だ。

あんな奴らが作った焼きそばなんて不味いに――。

「美味しいですね」

「うん!とつても!」

「驚いたわ」

「……………なんか、悔しいな」

文句の一つでも言ってやろうかと思ったが味は完璧だ。
決して冷めてるわけでもなく出来立てで熱々。
どうやら腕は確かなようだ。

「まあ、二度と近寄らねえけどな」

あんなウザ絡みしてくる大人たちに構ってられん。
オレたちは次の屋台を目指し再び歩き始めた。

.....

.....

祭りも佳境に入り、花火が打ち上がるまであと数分というところまで来ていた。
さて、オレたちはどうと——。

「つたく、テメエら！どんだけ食う気だ!？」

「まあ、せっかくなんだしね」

「大丈夫ですよ。食べられるように調整しましたから」

手にはフランクフルトにリンゴ飴、綿菓子なんかも持っている。

自ら祭りを楽しみ尽くしていると曝け出しているような格好だ。

「わ、私は見てるだけでもお腹いっぱいになっちゃうよ……………」

白鷺と氷川は上限ギリギリになるように飯を買い込んで遊び回り、松原もなんだかんだ遊びで結構な金額を使った。

遠慮する松原を二人が無理やり使わせたって言うほうが正しい言い方だけだな。

一方オレはというと、射的でもらったココアシガレットを口に入れていた。

「月島くん、そのお菓子はあなたに似合いすぎているから食べるのはやめた方がいいですよ」

「似合いすぎてどういう意味だ？コラッ」

「ライターもあれば、間違いなくアレに見られるわね」

二人の言い分はよくわかる。

とどのつまり、オレがタバコを吸っているように見えると言いたいんだろう。確かにこの姿ナリじゃあ、疑われてもおかしくない。

だが、残念なことにオレは生まれてこの方タバコなんて吸ったことはない。最近の漫画じゃあ未成年でもタバコを吸う奴がいるから、風評被害でしかない。

「でも、ココアシガレットって美味しいよね。私も昔はよく食べたなあ」

「そうか。なら、一本どうだ？」

「いいの？ありがとう」

ポケットに入れていたココアシガレットを一本渡し、口に啜える。

「……………うん、久しぶりに食べると美味しいね♪」

その様子をオレはただじつと見ていた。

「……………？あの、奏くん？」

夢中になって食べていたはずの松原がオレの視線を察して、首を傾げた。

「なんか、似合ってねえなと思って」

「えっ？それってどういう……………？」

「気にするな」

万が一にもありえないが、松原がタバコを吸う姿なんて想像もできん。

それ故にギャップがあるというか、なんとというか……………不思議な気分させられる。

「月島くん。花音を汚しちゃダメよ？」

「アホか。第一オレだって汚れてないつつうの」

「……………えっ？」

「おい氷川。訳がわからないみたいな顔をするな」

「ふふふ、あははー！」

天然、まつぼら悪魔、しらすぎクソ真面目。か

タイプが全く違う3人のツツコミには骨が折れる。



仲のいいみんなで来た花火大会。

去年は千聖ちゃんただけだったけど、今年は奏くんも、紗夜ちゃんも一緒に嬉しいなあ。

自然とニヤけてしまう。

「ねえ、花音。よかったら一緒に飲み物でも買いに行かない？」

「うん！いいよ」

「おいおい。二人だけで行く気か？」

「そんなに心配なら月島くんも一緒にどう？」

「つたく、めんどくせえなあ」

「では私はここで待ってますね」

「ありがとう。紗夜ちゃん」

私たち3人は立ち上がり、近くの屋台へ向かう。

その間も私と千聖ちゃんは手を繋ぎ、逸れないように心がける。

「ねえ、花音」

「なあに？」

奏くんの大きな背中ので後ろで千聖ちゃんは私の耳元で小さく囁く。

「実は私………月島くんに告白したの」

「え、ええええええ?!?!」

あまりの唐突な発言に思わず大きな声を出してしまう。

そのせいで周りにいた人の注目を浴びてしまった。

奏くんも私たちの方を振り向いた。

「どうした？」

「い、いや、なんでもない……………よ？」

「嘘つけ。さては白鷺、松原に変なことを吹き込んだんじゃねえよな？」

「ふふふ、そんなことないわよ♪」

千聖ちゃんの言ってることは全くの嘘だけど、否定できるほど私の心は落ち着いていなかった。

悪戯に笑う千聖ちゃんがちょっと怖く恐ろしく見える。

さすが女優さん、ということなのかな？

「まあ、どーでもいいけど」

奏くんは再び背を向け歩き出す。

それを見計らって、千聖ちゃんは私に近いた。

「驚かせちゃったかしら？」

「も、もちろんだよ！」

「うふふ、だって誰にも言つてなかったものね」

「二人はその、あんまり仲は良くなかったと思うんだけど………」

私が思ったことを口にする。

事実、奏くんと千聖ちゃんはいつも揉めてばかりだったはずだ。

最近では良くなつたとは言え、去年までは本当に酷かったから今でもとても信じられない。

千聖ちゃんは考えるそぶりを見せると、何やら嬉しそうに語り出す。

「確かにそうね。でも、私は決して心の底から憎んでいた訳じゃないのよ？あくまで彼が面白かったから揶揄つていただけ。恋愛感情を持つようになったのはもう少し後のことだったんだけれど」

「やっぱり、文化祭の出来事が大きかったの？」

「ええ。ずつと接しているうちに彼の魅力に気づいたというべきかしら。心の底から好きだと、そう思うわ」

「そっか………もしかして、二人はもう付き合ってるの？」

「それが……………」

千聖ちゃんは私の質問に言葉を濁す。

「告白、したんだよね？」

「そう、そうなのよ。でも彼からまだ返事は受け取っていないの」

「えええ!!」

「花音はどうしてだと思おう? どうして月島くんは何も返答しないと思おうか教えてほしいの」

「どうして、と言われても……………」

恋愛経験のない私からすれば既に未知の領域であるこの会話にどう本当すればいいのかわかるわけがない。

少し考えるそぶりを見せ、思ったことをそのまま口にしてみる。

「多分だけど、月島くん自身悩んでるんじゃないかな?」

「悩んでいるって?」

「その、千聖ちゃんはアイドルで女優さんだし、他の人の目も気にしているんじゃないかな？」

「確かに、そのようなことを言っていたわね……………」

「もう少し仕事が落ち着いてから聞いてみてもいいんじゃないかな？ほらっ！大学受験もあるんだし」

もっともらしい理由なように聞こえるけど、答えになつてないと私自身わかつてい
る。

先延ばしにしたところで答えが見つかるとも限らない。

こればかりは奏くんの問題だ。

「……………そうね。答えを急いではいけないものね。少しスッキリしたわ。ありがとう、花音」

「うん！これからも、相談に乗るからね」

親友との初めての恋愛話。

千聖ちゃんの顔つきもどこか晴れやかで、煌びやかに見える。

私もいつか恋をするのかな？

だとしたらきつと——ううん、こんなことを想像するなんていけないことだ。

私はまだ18歳と未熟にも程がある。

これからの人生、きつと素敵な人と出会えるといいな。

第38輪 秋明菊く淡い思いく

新学期始まって早々、オレたち花咲川高校が向かった先は京都。

そう、オレたち修学旅行当日を迎えたのだ。

大学受験を間近に控え、時期があまりにも遅いと感じざるを得ない状況だが、京都にさえしてしまえばもう関係ない。

生徒たちの目には、普段見ることのない景色が映っているのだから。

「以上で注意事項の説明を終わります。各班固まって、迷惑のかからないように心がけてください」

せんせーからの挨拶も終わり、事前に組んだ班で人が固まる。

オレが組んだ奴らはもちろん、アイツらだ。

「月島くんは目立つからすぐ見つけられて助かるわ」

「背も大きいからね」

「こう言う時に限っては、ですけど」

「褒めてんだが、貶してんだか」

京都に来てても変わらぬ毒舌。

しかし、その表情はどこか童心のように楽しみに満ちている見えた。

「まずはどこか回るんだ？」

「清水寺だよ」

「バスの時間も迫ってるので急ぎましょう」

氷川は早足でバス停へと向かい、オレたちも後を追う。

その最中、白鷺はオレの横に並んで耳打ちするような声で話す。

「社長がよく認めたわよね」

「ああ。意外にも、すんなり受け入れたぞ」

話は数日前に遡る。

今回の修学旅行について初めは行かない方向で話は進んでいたそうだが、社長が待ったをかけた。

『あの二人はあくまでも学生。その自由を奪う権利は我々にはない』

その一言で合議は決着。

特例という形でオレたちはこの行事に参加することになった。

これはオレだけが知ることだが、たとえば京都だろうと親父の息のかかった奴らが周囲を常に監視しているという。

だが、これだけの人混みだ。

まずこの3人に気づかれることはないだろうが、常に見られて親父に逐一報告されるとすると迂闊な発言もできやしない。

揉め事のひとつとして起こすわけにはいかないな。

「大人に、学生に、外国人………やはりここは観光の名所といったところでしようか」

バスの窓から映るその光景に氷川が眩く。

「私たち以外にも修学旅行生がいるんだね」

「関西人は血の気の多い奴が大量らしいから、気をつけることだな」
「一番気をつけなければならぬのは月島くんじゃないのかしら？」

白鷺はそう言い悪戯に笑みを浮かべる。

「安心しろ。オレから喧嘩をふっかけることはない」

「面倒ごとに巻き込まれるのはゴメンですよ」

「オレだってゴメンだ」

「でも、奏くんって本当に優しくなったよね」

「あつ？　どういう意味だ？」

「へ、変な意味じゃないんだよ？　ただ、昔はもつと争いごとを好んでいたように見えたから……………」

オレは決して喧嘩や殴り合いが大好きな戦闘狂ではない。

ただ、暴力こそが他人を屈服できる最高の手段であることはよく知っている。どれだけ言葉を並べようが、頭に血が上った奴らはそれを聞き入れようとはしない。仲裁に入ったところで結局は手足が出ることになり、結果争いごとが起きるわけだ。身についた腕力パワーも俊敏性アジリも、そういった中で培われた代物だと言える。

「まあ、騒がしいのは嫌いじゃないぜ？」

「やっぱり……………」

「月島くん、もし暴れるような事があれば容赦なく捕縛しますからね」

「おいおい、怖いこと言うじゃねえか」

まさかとは思うがこの旅行中ですらあの首輪を持ってきたとでも言うつもりなのか？

いや、この女ならやりかねない危うさがあるのは身に染みて理解している。オレだつて学習はするからな。

「あと10分もしないうちに到着しそうです」

氷川が時計を見てそう告げる。

「ふふふ、楽しみだね♪」

「ええ。素敵な思い出を作りましょう」

和やかな雰囲気に入れられ、バスは清水寺へと向かう。



清水寺に最も近いバス停で降りたのはいいものの、ここから徒歩で向かわなくてはならない。

およそ10分ほどの距離。

完全な坂道だからか、時間以上に長く感じることになるだろう。

「歴史を感じる街並みね」

「ええ。非常に趣があります」

「白鷺と氷川はこういうの好きそうだもんな」

「古くは首都であった平安京は日本の政治・文化の中心だったそうです。応仁の乱や禁門の変などの戦乱や伏見稲荷大社や清水寺といった寺社仏閣も有名ですね。それから——」

「歴史の授業はもういいから。とつとつと行こうぜ」

長くなりそうだからと話を切り、坂を登る。

しかしその道中、やはりバカな奴は現れるもので……………。

「キミたちかわいいやん！高校生？」

「そうですけど」

「修学旅行できたんかな？どうや？今から美味しい餡蜜がある店行くんやけど一緒に行かへん？」

「え、えつと……………ふええ……………」

「ごめんなさい。私たち、今から清水寺に行くんです」

「清水寺か！ほな、良い穴場があるから教えたるわ！一緒に行こー！」

全然食い下がる気配がない関西人のナンパ野郎。

そばにいた氷川に耳打ちするように問いかける。

「アレは ” 敵 ” として認識していいんだな？」

「穏便に済ませてください。ただし、暴力は禁止します」
イエスマン
「了解」

氷川から条件付きでGOサインが出た。

オレは絡まれている二人を助けるべく間に割って入る。

「待たせたなあ、二人とも」

「奏くん！」

「ああ？ なんや我え！ どこの馬の骨がでしゃばつてくんや!!」

声を荒げるチャラ男。

「氷川も心配していたからな。ほらっ、さっさと行くぞ」

「う、うん」

「そうしましょう」

まるで相手にしないと云わんばかりに二人を氷川の元へ逃す。
オレの一連の行動にチャラ男はどうとうブチ切れた。

「おいテメエ……………」

肩を掴まれるや否や、右頬をグーで殴られる。

大した威力ではなかったが口の中が切れたようで、溜まった血を吐き出す。

「いきなり殴りかかってくるとは……………やはり噂は本当だったか」

なんてことを口を拭いながら呟いていると、殴ってきた男がオレの胸ぐらを掴み上げ
鋭い眼光で睨み、再度拳を振るう。

まばらだった人だかりも、今はオレたちに注目が集まっていた。

「なに邪魔してくれとんのじゃコラッ！あんまわしのこと舐めとつたらいてまうぞ

！
」

関東人は関西人を怖いという印象があるようだが、人を威圧するようなこの口振りからきているんだろう。

だが、オレにはそんなもの通用しない。

おちよくるようにニカつと笑ってみせると、男はさらにオレを殴った。

「奏くん！」

「ダメよ花音！」

止めに入ろうとする松原を白鷺は止める。

そうだ、それでいい。

オマエたちはあくまで部外者。

これはオレの問題なんだからな。

「ヘラヘラしよって……………ぶち殺したる!!」

男は再度拳を振り上げ、顔面めがけて振り下ろすがオレは額でその拳を受け止める。

「……………おいつ、あんま調子に乗るんじゃねえぞ」

先ほどまでの笑顔とは一転、真顔で男にそう告げる。

「殺す殺すって連呼するんじゃねえよ。安っぽく聞こえちまう」

「なんやと……………!」

「オマエはオレに三発も拳を入れたんだ。もちろんその報復を受ける覚悟もあるわけだよな?」

「はあ?なにを言つて——」

拳に当てられた拳を掴み、相手の肘に向かって膝蹴りをし鈍い音と共に90度折り曲げる。

「ぎゃあああああ!!」

悲鳴をあげる男の顔面を掴み、コンクリの地面へとめり込ませた。

顔の半分以上は埋まり、ピクピクと小さく痙攣するだけで男の悲鳴は止まった。

「……………やっべ、やりすぎた……………」

その直後、端で一部始終を見ていた氷川に視線を向ける。

奴は額に手を当てやれやれと言った感じのため息をついていた。

数分もしたら救急車が到着し、男は病院へと搬送されオレは警察から事情聴取をされることとなった。

実はこの男、数々の女性を襲う強姦魔だったらしく、警察も足取りを追っていたらしい。

しかし、やり過ぎだと注意を受けオレはすぐに解放された。

「全く、あなたという人は……………」

眉間に皺を寄せ氷川。

どう見てもご立腹だ。

「やっぱ一方的にやられるのは好かん。どうせバレルだろうが、担任にチクるなり何なり好きにしろ」

投げやりにそう答えるが、止めたのは白鷺だった。

「状況が状況だけに仕方なかったんじゃないかしら？ねえ、花音？」

「う、うん。奏くんはなにも悪くないよ！」

「松原さん、彼に一切非がないわけじゃないんですよ？」

「そ、それもそうだね……………」

松原の天然ボケで場が和む。

できることならこの噂が広まり、ちよつかいをかけてくる奴がいなくなればいいんだけどな。

……………

……………

「つたく、これで何度目だ？」

呆れるようにそう呟く。

流石の氷川も、手の施しようがないとばかりにため息をついた。

「月島くんが離れた途端、ああなってしまうんですから」

あその後、清水寺に産寧坂、伏見稲荷大社と回ったんだが、絡んでくる輩は後を立たなかつた。

しかも、松原たち女子3人組が孤立している時に限りだ。

皆、修学旅行で浮かれているのか、それともただ単に発情しているだけなのか。

しかもそういう奴らに限って短気でオレが介入すると皆怒って殴りかかろうとする。

そんな奴らをちぎっては投げ、殴り飛ばしては追い払い、その数は有に30を越した。こうも絡んでくると、狙ってやられているのではないかと勘繰ってしまう。

「今日はもう疲れた。とつとつと風呂に入つて寝る」

「そうですね。もう時間も遅いですし、ホテルへ向かいましょうか」

時計の針は18時を示していた。

幸いなことに、ホテルは目と鼻の先の距離にありすぐにたどり着いた。

京都ということもあり、和の印象が強いこのホテル。

いや、旅館と言うべきか。

中に入れば、ゲームコーナーなどの娯楽施設に加え土産屋も非常に充実していたし、何より晩飯も超絶美味かった。

さすがは金持ち学校。いいところ選択しやがる。

そして何よりも気に入ったのが、男子生徒のみ許された広い個室だ。

「はあ、つつかれたあ……………」

真つ先にベットへとダイブし、肩の力を抜く。

女子生徒に対し圧倒的に人数が少ない男子生徒は、日々の学校生活でそれなりのストレスを抱えている。

その褒美と言わんばかりの大盤振る舞いだ。

「それにしても、京都にまで来て喧嘩三昧とは驚きだ」

誰もいない部屋でそう呟く。

ここ最近は大人数しくしていたつもりだったが、根っこはなにも変わつちやいない。殴られた瞬間から、オレの喧嘩スイッチはONとなるのだ。

改善しようとはしているが、長年染み付いたクセは簡単に拭うことができない。力加減は上手くなったはずなんだけどな。

「風呂に入らなくちゃだが………めんどくせえ、なあ………」

オレは瞳を閉じ夢の世界へと足を踏み入れた。



目が覚める頃にはすでに夜中を迎えていた。

眠い目を擦り、廊下へと出る。

入浴時間は定められておらず、いつでも入っていいシステムになっていたのだが時間によつては男女入るところが逆になっていることがあると聞く。

看板をちゃんと確かめてから入るようと告げられたが、そんなハマをする奴が果たしているのだろうか。

いや、わざと間違える変態がいるのは違うが……………。

しばらく歩くと浴場まで辿り着き、まだ入浴が可能なことを確認する。

「男は……………左か」

看板に従い、暖簾をくぐる。

明かりはついていたが人の気配は全くなく、貸切なようだ。

服を脱ぎ扉を開けると幾つもの風呂が設置されていて、さらにはサウナまであるという何とも豪華な作りをしていた。

かけ湯をしてから一番近くにあつた露天風呂へと向かつていたその時だった。

「……………えっ?」

「……………はっ?」

いるはずのない人と真っ正面から向き合う。
それも最悪なことに、相手はオレのよく知る人物だった。

「か、奏……………くん……………？」

顔を赤らめ、目をグルグルと困惑させる松原。

「何でオマエがここに……………」

看板は確かに男風呂だったはずだ。

なのになぜコイツがここにいるのか、答えはすぐに見つかった。

「松原、オマエが来るときここは女風呂だったのか？」

「う……………うん……………」

先ほど、時間で男女の風呂が入れ替わると言ったがオレたちはその最悪のタイミング

で入浴していたらしい。

「わ、わたし……………」

背を向け体を隠す松原。

当然の恥じらいと言えよう。

女風呂とわかつていたらタオルは持って行くはずないのだからな。

「悪気はない。今すぐここを出れば誰にも見つからないだろう」

そう促すも、松原は動かない。

潤んだ瞳でオレを見上げ、小さく呟く。

「奏くんなら……………いいよ」

「はあ？」

「私、二人でお話ししたいなって思ってたの……………だから……………」

「話したいって、オマエなあ……………」

松原の言いたいことはよくわかったが、ここで話すようなことなのか？
下手すればオレとは別の男性客に裸を見られる危険性だつてあるのに。
のぼせて判断力が鈍ったか？

「今日、守ってくれたし………背中、流すよ？」

何とも突拍子もない提案だ。

天然なのか、本気なのか。

オレには奴の思考が読めない。

「松原がそこまで言うなら………受けよう」

どうやら、疲れ切ったオレの脳内とまともな判断ができないようだ。
適当な風呂椅子に腰を下ろし、松原に背を預ける。

「じゃあ、お湯かけるね」

適度な温度のシャワーがオレの体を濡らす。

裸の男女がこんなことしてゐるなんて、はたからみればソー〇と勘違いさせるだろう。もうこれ以上顔見知りとは出会いたくないもんだ。

「背中、大きいね」

松原はそう呟き、小さな手を背中に当てる。

「男だからな」

「それに、すごい筋肉………………。わあ、硬いんだね」

「………………。おい、洗ってくれるんじゃないのか？」

「ああ！ごめんね！」

目を瞑るオレの視界にはなにも映っていない。

わかるのは、松原の声と小さな手の感触だけだ。

「オマエ、男の裸は見慣れているのか？」

「えつと……………弟が、いるから」

「なるほどな。通りで落ち着いている訳だ」

「だ、だからって……………恥ずかしくて、死んじやいそうだよ……………」

「ならここまでしなくてもいいのによお」

「でも、奏くんには本当に感謝しているから……………いつも、私たちを助けてくれるのに、私はなにもしてあげられない」

「今こうして背中を流してもらってるわけだからちゃんと恩は返してもらっているぞ」

オレが望んだことでは決してないが。

「奏くんは、本当に優しいね」

微笑むような声でそう口にする。

「だから——千聖ちゃんも好きになったのかな？」

「知っていたのか」

「うん。夏祭りの時、千聖ちゃんから聞いたの。奏くんのが好き。だから告白したって」

「それで、何で答えたんだ？」

「相談になるよって言ったよ」

「なるほど。オマエらしい回答だ」

「なんで千聖ちゃんの告白に返事をしないの？」

二人きりで話したいと言っていたが、本命はこれのようだ。

オレはありのままの事実を話す。

「白鷺の気持ちは知っている。だが、オレは今の関係を壊したくないとも考えてる」
「どういうこと？」

「白鷺の告白にYESでもNOでも答えれば白鷺はおろか、氷川や松原との関係にも影響する。今の良好な関係を自ら壊したくないんだ」

「奏くん……………」

「まあ、そう言うとき声はいいが、悪くいえば、女の気持ちに応えられない根性無し野

郎っただけなのかもしれないけどな」

「そんなことないよ。奏くんは、なにも悪くないんだよ」

「オマエはオレに対してはとことん甘いな。氷川なら罵倒の一つや二つ出てもおかしくないんだがな」

ケラケラと笑っていると、松原は身体を洗っていた手を止め、オレの耳にそつと手を添える。

「私も——だよ」

松原の声は完全に遮られた。

「なんだ？何て言ったんだ？」

そう問いかけるも、松原からの返事はない。

そのままシャワーを浴びせ泡を一通り落とし切ると、ようやく声を発した。

「こんな感じでどうかな？」

「あ、ああ。サンキューな」

「どういたしまして♪」

「もう用は済んだんだ。さつきと身体乾かしてここから出たほうがいい」

「そ、そうだね！それじゃあ、おやすみなさい！」

「ああ」

小走りで松原は去る。

足音が完全になくなったと同時に、オレはその場から立ち上がり湯船へと浸かる。

「アイツ、本当は痴女なのか？」

白鷺や氷川がこの場にいたらビンタされるであろう失言をかます。

だが今回ばかりはアイツが悪い。

とつとと浴場から出ていけばいいものを……………。

「……………」

湯気の立ち上る上部を見上げる。

今オレの脳裏に浮かんでいるのはさっきの松原の話した『私も』——だ
よ』という言葉。

「……………聞こえてんだよ。バカ野郎」

第39輪　ハナズオウく裏切りく

2日目の自由行動はクラス単位の移動となる。

オレたちAクラスは嵐山に来ていた。

「これが竜安寺庭園ね」

「とても神秘的ですね……………」

悦に浸る歴史マニアたちだが、オレにはこの魅力がさっぱりわからん。

氷川曰く、エリザベス女王も心を奪われたと言っていたがその気持ちは分かり合えない。

「なあ松原。これを見てオマエはどう思う？」

「えっ？えっと……………すごく、歴史を感じるといっか……………」

松原の反応に納得だ。

「月島くんの感性だと、この光景の素晴らしさは分からなかったかしら？」

「アー、ソノトオリ。オレニハワカラナイナー」

「全く、馬鹿馬鹿しい」

「ふええ………さ、三人とも」

白鷺の言うことは事実だから何も言い返せない。

「そんなことより、とつとつとここを離れて和菓子食いに行こうぜ」

「昨日も散々食べてた気がするのだけれど」

「抹茶って今まで苦手だったんだが、なんか美味く感じるようになってな。京都様々だな」

「味を感じるのもいいですが、こういうった景色もちゃんと観るべきでは？」

「確かに、今の私たちじゃあ何度もそう簡単に来れないよね」

「花より団子」 ってことわざがあるだろ？今のオレは、まさにそれだ」

決して京都の歴史や風景を馬鹿にするわけではないが、何せ飯が美味しい。

旅館の飯も関東とは違った味付けでこれもありだと思つたし、祭りなども盛んで退屈することもないだろう。

将来暮らすなら、やはり関西か。

そんな考えが脳内をよぎる。

「仕方ないわね。それじゃあ、次の場所へ向かいましょうか」

白鷺の提案で竜安寺を出て、再び狭い道を進む。

のちに気づいたことだが、これも観光の名所と知られてるはずなんだが、オレたち以外に観光客はあまり見られなかった。

静かなことは結構なのだが、どうにも引つかかる。

まるで、嵐の前の静けさのような――。

「……………ああ？」

そう考えていると、どこからか現れた黒マスクの男に突如背中になにかを当てられ、バチバチツとスパーク音が鳴ると同時に身体中に電流が駆け巡る。

「ッ!!!」

あまりの威力に怯んでいると、そばの大木に隠れていた二人の男も姿を見せた。

片方は持っていた鉄パイプで後頭部目掛けて思い切りフルスイングし、もう片方は背中をドロップキックし、オレは前方へ大きく飛ばされ地面に体を打ち付ける。

頭からは多量の血が流れ、その血が目に入り視界を霞ませる。

「つ、月島くん!?!」

「なんで……………」

「一体誰が!?!」

あまりに突然の出来事に困惑する3人。

その3人の背後に立っていた黒マスクの男たちは、オレの元へ詰め寄り頭を踏みつけ見下ろす。

「これが月島 奏。存外、大したことないやん」

「スタンガンで痺れさせたとはいえ、一発KOか」
「所詮は高校生。噂だけが一人歩きした雑魚やろ」

口々に言う男たち。

「どうやら計画的な犯行らしい。」

「あなたたち！一体何してるんですか!?!」

声を張り上げ、キツと睨む氷川。

握った拳は小刻みに震え、怒りは頂点に達しているようだ。

「安心しいや。お前たちに危害を加えるつもりはないねん。用があるんは……………」
「ふんっ！」

男は鉄パイプを振り上げ、再度オレの後頭部に向けて振り下ろす。

「この男だけや」

この一撃で流血がさらに加速する。

おまけに、さっきのスタンガンの影響で身体が痺れて指一本動きそうにない。

今まで経験してきた中で、最大のピンチかもしれないな。

「おいおい。まさかもう終わり!?!」

「2時間スタンバツてたのによ〜」

「つまんねえなあ」

「おっ、可愛子ちゃん発見♪」

3人の男の他に、ゾロゾロと他の仲間も集まってきやがった。

数にしておよそ30人。

状況がマズすぎる。

「今からコイツを捌り殺す。間違っても、女には手え出したらあかんで。契約に入つてへんからな」

スタンガンを持った男が仲間にもう告げる。

男たちはゾロゾロとオレを囲むように集まり、蹴る、殴るの暴行を繰り返した。

「や、やめて……………」

男たちの力み声の中、松原の弱々しい声が聞こえる。

「月島くん……………そんな……………」

「や、やめなさいと言ってるでしょう!!」

氷川の声も虚しく、男たちは見向きすらしない。

「さもなくば——!」

「だ、ダメだよ! 紗夜ちゃんまで巻き込まれたら、絶対ダメだよ!!」

「しかし!!」

「二人とも……………落ち着いて……………」

観光客が誰もいないことが仇となった。

精神的に不安定になったあの3人ではまともに動くことすらできないだろう。今の状況を打破するには、もう――。

「なんや、死んだか？」

「ピクリとも動かねえよ」

「とつとと運んで、報酬ゲツトや」

男たちは暴行をやめ、無理やりオレの両腕を掴み上げる。

「……………おい」

微かにしか聞こえない小さな声。

しかし、その声には明確な怒りが込められていた。

「人の身体アボコスカ殴りやがって……………こちとら旅行に来てんのにわざわざ怪我までさせられて……………ざけんじゃねエ」

「ぶち殺してやるよ」

血に濡れた真つ赤な瞳を見開くと、野郎共は驚きの表情を浮かべ一歩後退する。

まだ身体は痺れちやいるが、怒りでもう何も感じられん。

これ以上ないほどの憎悪を内に溜め、怒りのオーラを身に纏う。

オレの頭にあるのはこの男たちに対する殺意ただ一色だ。

「何で生きてんねんコイツ!!」

「死なへんのか!」

「冥土の土産にくれてやるよ。オレの ” 殺す ” って言葉、決して安くねエぞ」

腕をつかみ上げる男の顎を両足で蹴り上げ、気絶し膝をついたところでその顔面に目がけて殺意のこもった拳を振るう。

そのまま後頭部が地面へとめり込み、白目を剥いて動かなくなつた。

「次は……………どいつだ……………?」

フラフラとしながらも立ち上がったも尚、血で染まった目を敵に向ける。だが、敵はスタンガンを浴びてもないのに怯んだ様子。一向に向かつてくる気配がない。

「な、なんやこのバケモノ……………!!」

「人間ちやうやろ……………」

”逆鱗” や……………オレら、”逆鱗” に触れてしもうたんや……………!”

そう口々にする男たちのうちの一人に、有無を言わず顔面に膝蹴りする。

そして厨に浮いたままもう一人の男の頭を蹴り落とすと、最初にドロツプキックしてきた男の鳩尾目がけて蹴りを入れる。

これで4人が動かなくなった。

残りはおよそ26人。

「に、逃げろおおおお!!」

奇声を発し、一斉に逃げ惑う男たち。

「バカが……………逃がしやしねえよ!!!」

そこからの展開は早かった。

全員が大通りへ出る前に、土に体を埋めては骨を折り、宙へ舞ったと思いきや殴り飛ばし、一人、また一人と人数を減らしていく。

その中でも唯一鉄パイプの男たちは反撃してきたが、それを掴み腕力だけで真つ二つにし、顔面に渾身の右ストレートをお見舞いした。

鼻からは血の噴水が湧き出て、辺り一面真つ赤に染める。

そして一番最後。

真つ先に逃げ出したスタンガン男の首根っこを掴み、誰も見えない場所へと引きずる。

男はこれ以上はないほど醜く、汚い面をしていた。

「お、俺たちが悪かった!!い、い、命だけわあ……………!!」

わんわんと泣き喚く黒マスク男。

「オレの質問に正直に答えろ。嘘をついたとオレが判断したら、近くの湖に仲間もろとも沈める。いいな？」

そう忠告すると、男はウンウンと何度も頷いた。

「目的は何だ」

「め、命令されて……………あなたを、始末しようと……………」

「誰からだ」

「名前は、知りません……………け、けど、報酬を渡すと言われて、つい……………」
「金で釣られた半グレ集団か。なあ、知ってるか？スタングアンって結構痛いんだぜ？」

男の持っていたスタングアンを奪い取り、腹部に当てスイッチを入れる。

「あがあああああ!!」

男は痛みに耐えかね悶絶する。

そんな男の喉を血まみれの手で握り締める。

「声出すんじゃないよ。警察にバレたらどうする。殺すぞ?」

そう脅すも、男は体を痙攣させるだけで返事を返さない。

くたばる寸前か?

オレは手を離してから頬を殴り無理矢理にでも起こす。

「寝てんじゃないエ。逝くにはまだまだ早エよボケが」

「ぐ……………ごめん、なさい……………」

「謝ったところでもう遅エんだよ。今日からお前たちはグチャグチャの惨めな顔を晒し、親や友人から見捨てられ、一人寂しく生きていくんだ。わかるか? オマエたちは社会的に抹殺されるんだ!!」

「ひ、ひ……………!」

「今までも散々人のことを殴って、陥れてきたんだろ? 今度はオマエがそれを味わう番だ。知らなかっただろ? 死ぬことより辛いことなんて山ほどあるんだぜ!」

男の顔は恐怖という色で染まる。

これからのことを想像してか、震え上がっている。

「オマエの仲間はどうなってるんだろうなあ？ 久しぶりに加減せず殴ったから、下手してら死んでるかもな。オマエの仲間が言った通り、オレの ” 逆鱗 ” に触れたんだから、死んだって構わねえだろ？ 生きていたってどーせ惨めな人生が待ってるだけなんだ。だが……………それを世間は許してくれなさそうだ」

遠くでパトカーと思わしきサイレンが耳に入った。

きつと白鷺たちが知らせたんだろう。

「オレがオマエらを半殺しにしたのは事実だし、証言しても構わないぜ？ だが、同じ牢屋にぶち込まれたその時は————また殺し合おうぜ♪」

「あ……………ああああああ!!!」

男は発狂すると共に気を失った。

これで30人全員のした。
気持ちが悪れたからかこれまでの疲労がどつと体を襲う。

「……………だいぶ、やり過ぎたな」

手に付着した野郎共の血を見て、ふと考える。

今回の件、まさか北谷は関わっていないよな？

信じたくはないが、奴が関わっていたとしたら大事だ。

すぐに親父に報告を――。

「あつ、やつべ……………」

立ちあがろうとしたその時、フラツときてその場に倒れ込んだ。

血を流し過ぎたし、松原たちにも迷惑をかけた。

反省することが山ほどある喧嘩だったな。

オレはその場で意識を手放した。



病室のベットで静かに横たわる奏くん。

修学旅行に来ているはずが、思わぬ事件に巻き込まれてしまった。

「また、傷を負わせちゃったね……………」

頭に巻いた包帯が痛々しそうに映る。

お医者さん曰く、命に別状はないそうだけどそう言うことじゃない。

せつかくの楽しい旅行が、私が弱いばかりに台無しにしてしまったのだ。

「ごめんね……………奏くん……………」

泣いて許されることではないのはわかっている。

けど、涙を流さずにはいられない。

奏くんのことを思えば思うほど、涙が溢れて止まらなくなる。

所詮私は路傍に転がる石ころ同然の存在。

やっぱり私では不釣り合いだ。

「奏くんのごことが好きだなんて——とても言えないよ……………」

……………

……………

「……………うん。それじゃあ、予定通りに」

ホテルの一角にある薄暗い廊下。

地図には非常階段しかないそのフロアで何やらコソコソとしている人影を見て後を追ってみたのだけれど、やはりというべきか。

「そこで何をしているのかしら？」

その人物に対して臆することなく声をかけると、彼は同様の色を見せないままゆつく

りと振り返った。

「やあ。白鷺さん」

白々しく爽やかな対応をとる杏井くん。

彼は転校してきたその日に私にコンタクトを取り、何か企んでいるような口ぶりをしていた。

クラス内にとどまらず、学内でもかなりの人気者らしいけれど、私は全く好きになれない。

「今は二人きりよ。今更正体を隠したって無駄なことだと思っただけけれど」

「そうかい？それじゃあ遠慮なく……………」

彼のキラキラとした目からハイライトが消え、上つ面の小さな笑みを浮かべた。

これが、彼の本当の素顔。

何の感情もなく中身は空っぽ。まるでマリオネットを見ているかのような印象を受ける。

「これでどうかかな？」

「よくお似合いよ。あなたが主役を張れない理由がよくわかったわ」

「流石は未来の大女優。ひと目見ただけでわかってしまうんだね」

「だって、何も感じられないもの。あなたらしさのかけらがひとつもない。きつと、つまらない演技しかできないんでしょうね」

「あはっ、挑発しているつもりなのかな？」

「いいえ。ただの罵倒よ」

彼のはぐらかすような話し方にすごく腹が立つ。

「それで、さつきは誰とどんなことを話していたのかしら？」

誤魔化さずストレートに問うと、彼は表情を一切変えることなく淡々と話す。

「キミには関係のないことさ」

「嘘をついても無駄よ。あなたが碌な人間じゃないのはよく知っているもの。今回月

島くんが襲われたことだって、本当はあなたが仕組んだのでしょうか？」

「……………ちなみに月島くんはどうなったんだい？」

「彼を襲った連中と一緒に病院へ搬送されたわ。残念だけど、命に別状はないわ。彼を襲った男たちは骨折等の大怪我を負ったそうだけど、誰も死んでいないわ」

「そうなんだ」

「とぼけても無駄よ。今すぐ密告する準備もできているのだから」

「脅しているつもりなのかい？」

「忠告よ。今すぐ自首しなさい」

語尾を強くし、彼を静止させようとする。

しかし、彼はクスクスと意に介さないような笑い声を出す。

「無駄だよ。大切な友人からの頼み事は断れない」

「……………」羽丘の女帝「さんかしら？」

「そう、せいかい♪」

彼は薄ら笑いを浮かべ拍手する。

「彼女とは昔ながらの付き合いでね。月島くんのごことは入学前からよく聞かされていたんだ。『アレは、人間のクズだ』ってね」

「あらつ、それ以上のクズがよくいうじゃない」

「まあね。今回は死ななかつたみたいだけど、下手をすると次こそ彼は死んじやうかもね」

「そんなにやわじやないわよ、彼は」

「わかつているさ。だから、腕力こつちじやなくて頭脳こつちを使う」

何を考えているのかわからないけど、相当自信がありそうだ。

今すぐにも月島くんに知らせたいところだけど、目の前の男はそれを許さない。

ここから一步でも動けば、私が酷い目に遭う危険性があるからだ。

そうなれば彼は………結局、どう転ぼうが月島くんに迷惑をかける選択ルイは避けられない。

それをわかつて今こうやって全てを話しているんだろう。

「私から何も言うことはないわ。だって、月島 奏が負ける姿なんて想像できないも

の
」

あくまでこつちが優勢だ。

そう思わせる。

「それはこれからわかることだ。キミもきつと目の当たりにするだろうね」

彼はそう告げ、身構える私を横切り背を向けたところで立ち止まる。

「くれぐれも僕の話さないほうがいい。月島くんに負担をかけないためにも、
ね」

「脅しているつもりかしら？」

「忠告だよ。言葉を返すようだけどね」

「趣味が悪いこと……………」

彼の考えつきそうなことだ。

ため息をつき呆れていると、彼は突如私の肩を掴んだ。

「僕の昔のことも含めて誰かにバラしてみろ。死だけじゃ済まさねエぞクソ女ア」

虚の目を大きく見開き、肩をギリギリと力強く握りそう告げる。

「テメエの一挙手一投足は常に監視されていると思え。不審な動きを少しでも見せたら、テメエの仲間もろとも殺してやるよ」

「忠告どうもありがとう。私から彼に告げ口することはない。約束よ」

間に受けて、流してみせると彼はパツと手を離し私の元を去る。

完全に姿が見えなくなるまで動かず、その時を迎えると大きく息を吐き、袖にしまつてあつた携帯を取り出し録音を切る。

「コレを晒せば共に死に、何もしなければ彼が……………。楽しい修学旅行のはずが、とんだ場面に遭遇してしまったものね」

私の方から余計なこととはしない。

今は、
それに徹するしか道はないと心に言い聞かせ部屋へと戻る。

第40輪 アザミ 報復

修学旅行の後半はベッドの上で過ごすこととなり、悔いが残ることとなった。

向こうでも警察の世話になり、オレの悪名は関西にまで広がることとなり頭を抱えている。

ネットニュースを見れば、その時の事件が載っていて本名こそ伏せられていたが、このコメント欄にはこう書き込みこまれていた。

”逆鱗” がやった。

”逆鱗” の仕業や。

男たちはソイツの ”逆鱗” に触れてもうたんや。

などと、また新たな二つ名が浸透していった。

関東では ”不死身アデシの暴君デッド”。

関西では ”逆鱗あつち”。

この二つが同一人物だと知るのはオレを含めて数人だけ。

今更弁明する気はないが、ここまで目立つと後の生活に支障をきたしそうだからあまり喜べない。

そして京都から帰ってきて早速、厄介ごとに巻き込まれる。

「おかえり。どうやら災難に遭っていたらしいね」

「うっせえよ。ハゲ」

揶揄うように笑って話す学園長。

昨晚、直接電話が入りオレと氷川が朝早くに直接呼び出された。

要件は既に把握済みだ。

「ここら一帯で暴力事件が多発しているのは知っているね？」

「はい。ニュースにもなっていましたね」

オレたちが帰ってきてからの話だが、道端に血まみれで倒れる一般人が続出して
る。

犯人は不明で全員、顔や体をコレでもかかというほど痛めつけられていたらしい。

病院へ搬送されたが、未だ意識を取り戻した奴はいない。

警察も捜査が難航しているようだ。

「コレは知らないことだろうけど、先ほども同じような被害者が出たそうだ」

学園長は部屋にあるテレビを起動させ、ニュースをつける。

『速報です。近頃多発している。』花咲川無差別暴行事件”の被害者が新たに発見されました。顔や体を複数回殴打された跡が残っており、身元は明らかになっておりません。警察は——』

花咲川無差別暴行事件。

なんとも物騒な名前がついたものだな。

「被害者は老若男女関係なく、関係性も明らかになっていない。猟奇的暴行犯なのは間違いないだろうね」

「酷い……………」

「被害者を殺さず生かしておいてるあたり、犯人の異常さが窺えるな。まるで自分の快楽のためだけに暴行を繰り返しているみたいだ」

「まさかとは思うが、キミじゃないだろうね？」

「無抵抗な人間を傷つけようとするほどオレは頭のネジは飛んじやいねえよ。久々の登場でボケちまったのか？」

「……………一体何を言っているんだい？」

「とにかく、この生徒が被害に遭わなかったためにも警備を強化しておく必要があるそうですね」

「氷川くんの言う通りだ。警察にも依頼して、その件について今日コレから話す予定だよ」

程なくして扉が数回ノックされ、お堅いスーツ姿の男たちが入室する。

「失礼します」

「ご足労感謝いたします。件の話になりますくだんが——」

「申し訳ございませんが、学園長先生。私たちは別件でここへ来させてもらいました」と、言いますと？」

学園長は困惑した様子だ。

オレと氷川は状況が全く掴めない。
スーツの男たちはオレのそばへと近づき、鋭い目つきでオレを睨む。

「キミが月島 奏くんだね」

「そうだけど」

その威圧に屈することなく平然と返す。

すると、この目つきの悪い刑事から耳を疑うようなことを言われた。

「花咲川無差別暴行事件の重要参考人として、キミを連行する」

「はあ!？」

刑事がそう言い終わると、後ろに控えていた警官たちがオレを取り押さえる。
あつという間に身柄を拘束されたが、未だ口での抵抗はやめない。

「意味不明だろ！第一、オレは被害者たちと接点なんてないだろうが!!」

必死の思いで伝えるがそれは届くことはなく、冷たい目で見下ろす刑事は小さく告げる。

「キミの普段の素行に全国に広まったキミの悪名————点でバラけてようが繋げようと思えばいくらでも繋がるものなんだよ」

「ハッ、警察はクサツてるなんてよく耳にするが、マジだったんだな」

「……………今のはガキの戯言として聞き流してやる。次はない」

「上等だ。刑務所だろうと牢屋だろうと何処へでも連れて行きやがれ。それでも、オレの無実が証明された時にはお前を真っ先にブン殴つてやるよ」

「その時はまたキミを逮捕するまでだ」

「ケツ、くえねえおっさん」

「それじゃあ、署に連行するでしょう」

警官たちに抑えられたまま前を歩く。

「……………まっ、待つてください！彼は決してそのようなことは……………！」

氷川も抵抗して見せるが、刑事の凍り付くような目線で口を閉ざされた。

「心配すんな。すぐ戻る」

そう笑ってみせ、部屋を出る。

歩いている最中も、通り過ぎる生徒や教師たちの注目を浴びる。

「まさか、オレをこうやって陥れるためにあえてこの時間を選んだわけじゃあるまいな？」

「……………」

「だとしたらいい趣味してるぜ。オッサン」

オレの挑発まがいな言葉に刑事が反応を示すことは決してない。

この手のタイプは、言葉だけでは通じないから強硬手段に出るのが鉄則のだが、相手が悪すぎる。

本当に手を出したら、オレは身に覚えのない罪まで被せられる危険性があるからだ。

そこから一言も会話することなく、パトカーへ乗せられ発進する。

刑事に話しても無駄だと思ったオレは、隣に居座る警官に話を向ける。

「ニュースでは捜査が難航してると言ってたが、それはオレを油断させるためのものか？」

「……………」

「指紋にDNA鑑定、ありとあらゆる検証に協力してやるが、間違いなくアンタらは間違ってるぜ？何せオレは犯人じゃないからな」

「……………」

ダンマリだった警官がようやく口を開いた。

「少しは慎みを覚えたらどうだ？そんな詭弁を並べても我々は信用しない」

「アンタみたいな下っ端に言われても響かねえよ」

「なっ!？」

「なあ、刑事さん。これはオレの妄想に過ぎないんだが、アンタ、オレに特別な恨みでもあるんじゃないの？」

「いいかげんに……………」

「無駄話は嫌いだね。署に着いたらいくらでも話を聞いてやろう」
「そうか。ならこの場は黙つといてやるよ」

これ以上、オレからも刑事からも口を開くことなくパトカーは静かに進み続ける。



何気ない日常というものは突如として崩れ去る。
とある日の朝。

いつも通り花音と登校していると、学園内に一台のパトカーが止まっていた。
その異様な光景に私たちはすぐに気づいてしまった。

「なんであそこにパトカーが………？」

「何かあったのかもしれないわね」

今朝、ニュースで報道されていたことを思い出す。

最近、無差別に暴行を受ける被害者が続出しているようでそれも花咲川周辺で起こつ

ているという。

何か嫌な予感があるけれど、それは思わぬ形で中することとなる。

校舎から多数の野次馬と共に、スーツ姿の男と警察の制服を着た男たちに加え、月島くんの姿が目に入ったのだ。

「なんで月島くんが警察に……………!?!」

驚きを隠せずにいる花音。

もちろん私も同じだ。

思わず、彼の元へ駆け寄り言葉をかける。

「月島くん!!」

しかし、彼は反応を示さない。

まるで、届いていないかのような雰囲気すら感じる。

「まさか……………彼が……………!?!」

脳裏に浮かんだ考えを元に、教室へと一目散に駆け出した。

「ち、千聖ちゃん!？」

花音の呼びかけにも応じず、私は一目散にそこへと向かう。

ガラツと勢いよく扉を開けると、彼は涼しい顔で席につき何かの本を読んでいた。

そんな彼の前に立ち、机を思い切り叩き鋭い目つきで睨むも彼はその態度を崩さない。

「……………どうい(う)と」

怒気のコもつたその言葉。

彼、杏井くんは首を傾げながら問う。

「それはこっちのセリフだよ。僕になんの用かな?」

「とぼけないで!これも、あなたの仕業なのでしょう!？」

賑やかだったクラスが静まり返る。

彼も、まずいと思ったのか立ち上がり和かに答えた。

「なんのことかわからないが、どうやらキミは誤解しているようだ。落ち着くためにも、ここを離れた方が良さそうだ」

「ええ。構わないわ」

彼の後ろにつき、教室を後にする。

そして、人気の無い空き教室のある廊下へ行くと、突如私の口を掴み殺意のこもった瞳で威圧する。

「なんのつもりだ？ テメエ。バラしたら殺すつったよな？」

あくまで私の前では本性を見せる彼。

掴み上げる手を引き離すように抵抗するも、彼はそのまま顔を放り投げ体を地に打ち付けた。

「彼は何もしていないわ……………なのに、どうしてこんなことをするの!？」

目に涙を浮かべ必死に訴える。

「京都で奴の身体能力の高さはよくわかった。アレは化け物だ。彼女の言っていることがよくわかったよ」

「だから、こんな非道を選んだのね」

「大丈夫。彼はすぐ解放されるさ。ただ、これから問題行動を起こせば彼は真つ先に疑われる。それが狙いさ」

「そんなことのために警察を利用したと言うの?」

「そうだよ。リークしたのはもちろん僕さ。精神的にじわりじわりと追い詰めて、最後は物理的に殺す。あの化け物を殺すのはそう簡単じゃ無いだろうけどね」

淡々と語る杏井くん。

ここに監視カメラや盗聴器がないとわかったのことだろう。

「何度も言うけれど、彼はそう簡単に死なないわ。返り討ちに合うのがオチよ」

強気にそう言い返すも、彼は一切動揺の色を見せない。

「こう見えて僕、演劇のために体づくりに励んでいてね。力、あるんだよ?」

彼は不敵な笑みを浮かべて握り拳を作ると、私のお腹を目掛けて振り抜いた。

あまりの痛みに、咳き込み吐きそうになる。

「キミ、2年の時にイジメられてたらしいね。何度も何度も暴行を受けて、さぞ辛かっただろうね」

「ゴホツ……………あなたに、関係ないわ」

「次は松原花音の番かな。あの女、月島と仲いいし殴られたらどんな顔するかなあ。ヒョロつちいから軽く吹っ飛びそうだ」

「花音に、手を出したら……………絶対に、許さない……………!」

彼のことが憎い。

憎くてたまらない。

これは演技ではなく本心。

素の感情で彼を見る。

「わかってるさ。キミが余計なことをしない限り僕は何もしない。今、キミが地べたを這いつくばってるのもキミが原因だからね？」

彼は小さく笑うと教室へと戻ろうと背を向ける。

「くれぐれも僕の株を落とすんじゃないやねえぞ。テメエの行動一つにクラスメイトの命運が握られてるんだからな」

去り際にそう吐き捨て、姿を消した。

「……………はあ」

彼がいなくなったのを確認し、大きくため息をついた。

「警戒心がなくて本当に呆れるわ」

絶対に見えないところに隠していた小型カメラを取り、撮影を切る。
再生すると、さつきまでの光景がこのカメラにしっかりと映っていた。

「私の気持ちは、もう決まってる」

カメラをぎゅっと握りしめ、教室へと戻る。

.....

.....

HRが始まると早速先生から月島くんのこと話があつた。
どうやら、犯行現場付近で彼の目撃者がいたそうので取り調べを受けているそう。
もちろん、彼が犯行に及んだと疑う人はこのクラスにはいない。

素行が悪いとはいえ、彼は今まで私たちに害をなしたことは無かつたし、三年生になつて親しみやすくもなつた。

それをあの男は——背中を向ける憎き彼に刺すような視線を送る。

そこからは平常の授業を受け、迎えた昼休み。

私は、花音と紗夜ちゃんを連れ月島くんの行きつけの屋上へと向かつた。

ここは彼の憩いの場ということで知られていて、誰も近づくことは決してない。ここなら、どんな話をしようとも誰かにバレることは決してないだろう。

屋上への梯子を渡つたところで、二人にわたしの考えを話す。

「唐突に誘つてごめんなさい」

「ううん。大丈夫だよ」

「私もです。それで、お話があるとは何ですか?」

「実は私………京都で月島くんを襲つた犯人の黒幕を知ってるの」

「えっ!?!」

「本当ですか!?!」

「ええ。それと、今回彼が警察に連れて行かれたのも同一犯ということがわかつてるの」

「何で千聖ちゃんがそのことを知ってるの？」

当然の疑問ね。

首を傾げる二人にさらに詳しく説明をする。

彼が私のマネージャーになっていたこと。

事務所に脅迫状が届いていること。

それらの犯人は杏井くん、そして羽丘の女帝であること。

それら全てを、隠すことなく話し切る。

「そうだったんだ……………」

「本当に、許せませんね……………」

悲しみの表情を浮かべる花音と怒りに震える紗夜ちゃん。

「彼が事件を起こしたという証拠も既に掴んでる。明日、これをクラスで公表するつもりよ」

「でも、そんなことしたら千聖ちゃんが!？」

「ええ。得策ではないと思います」

「もちろんわかっているわ。でも、私が黙っているだけでは彼はもつと酷い目に遭う。彼は、月島くんを殺すと言いつつ切ったの。とてもじゃないけど、見過ごすわけには行かないの」

私の意志は固い。

だからこそ、逃げないためにも今こうやって二人に全てを打ち明けているのだ。

「そこで紗夜ちゃんにお願いがあるの」

「私に、ですか」

「明日の昼休み、私は全てをクラスメイトたちに話して、杏井くんを追い詰める。きつと彼は私を殺そうと躍起になると思うの。だから、生徒会室で花音を匿ってほしいの」

「ダメだよ！そんなこと、私はできない！」

「私も賛同しかねます。杏井くんが暴拳に出るとわかっていながら、聞き逃すことなんてできません」

「二人とも……………お願い。これは、私の問題なの」

二人はとても優しい。

だからこそ、容認してくれないことも理解できる。

だけど、今回は一切譲る気はない。

二人を危険な目に合わせてしまったら、京都で彼が守ってくれた意味がなくなってしまう気がしたから。

それに、私は間違いなく後悔しない。

どれほど傷つけられようと、例え死ぬような大怪我を負ったとしても、彼のためと思えば何だってできる。

これ以上、私から口を開くことはない。

懇願するように、真つ直ぐな目で紗夜ちゃんを見る。

「……………なんだか、月島くんみたいですね。その目は、覚悟を決めた彼にそっくりです」

「紗夜ちゃん……………?」

「わかりました。松原さんの安全は保証します。必ず、私が守って見せます」

「紗夜ちゃん!?!」

「ありがとう。お願いね」

彼に似ている。

そう言われるだけで、こうも勇気が湧くものなのかしら。本当に、不思議なものね。

「ねえ、二人とも。私は……………足手まといななの？」

「そんなことないわ。これは、あなたを守る為で——」

「違うの!!」

突如声を張り上げた花音。

あまりの唐突の出来事に私も紗夜ちゃんも怯む。

「千聖ちゃんは、奏くんのが好きだって私は知ってる。奏くんがどう思ってるかは知らないけど、きつと千聖ちゃんのことをよく思ってる。そんな二人が、危険なことをするって言うのに、私は見てるだけなんてとてもできないよ!!」

「花音、お願い。わかってちょうだい」

「嫌だ!!」

「松原さん。これは、私たちが介入すべき問題ではありません。白鷺さんの気持ちも考えてください」

「紗夜ちゃんはいいの？二人が、傷つくとわかってるのに見過ごすって言うの？」

「それは……………」

「私は絶対に教室に残る。例え杏井くんが暴れたとしても、私は千聖ちゃんを守る。千聖ちゃんが意地を張るみたいにならぬ、私も譲らないから」

花音から揺るぎない意志を感じた。

真つ直ぐに私を見る目は、紛うことなき月島くんの目。

こうなれば、もう逆立ちしようとも覆うことはない。

花音も、一切譲らないつもりだ。

「花音。私は、あなたや紗夜ちゃんにだけは傷ついてほしくないの」

「私だって、千聖ちゃんにも紗夜ちゃんにも傷ついてほしくないよ」

「……………このままじゃ埒があきませんね。それでは、折衷案を出させていただきます」

私と花音の間に紗夜ちゃんが割って入る。

「折衷案？」

「白鷺さんは私たちに傷ついてほしくない。松原さんは白鷺さんたちに傷ついてほしくない。互いの意見は噛み合っていないませんが、傷ついてほしくないと言う点は合致しています」

「ええ」

「ならば、杏井くんが暴れる前に私が彼を取り押さええます。そうすれば、誰も傷つくこともなく問題は解決します」

「そんなこと、可能なの？」

「ええ。こうみえて、逃げ惑う月島くんを何度も確保していますから」

自信満々に語る紗夜ちゃん。

彼女もまた、月島くんによって変えられたうちの一人だ。

決して不可能ではない。

そう、目が語っている。

「……………当然なら、とても頼もしいわね」

「任せてください。必ずや、成功させて見せます」

「決まりね。それじゃあ、決行は明日の昼休み。二人とも、二言は無いかしら？」

「もちろん！」

「当然です」

結局、私は根負けした。

月島くんによって帰られた二人によって。

これは恥じるべきことか、喜ぶべきことなのか。

今の私にはわからない。

「二人とも、ごめんなさい」

「今更謝らないでください」

「必ず、奏くんを取り戻そう」

決意を新たに、明日へ向け作戦を練る。

第41輪 トリカブトくあなたは私に死を与えたく

学校から連行されてはや1日が経過した。

警察から聞かれることは毎度同じことで、もう聞き飽きてしまった。

大きくあくびし、耳をほじる。

「もういい加減諦めろよ。オレからは何の情報までやしねえよ」

冷たい目をした刑事にそう告げるも、聞く耳を一切持たない。

「キミは不良だ。これまでも数々の暴力事件を引き起こしている。拘束するとう意味でも、世間も納得するだろう」

「堂々と冤罪発言か？そろそろここを暴れて飛び出してもいいんだぜ？」

指をボキボキと鳴らし、威嚇する。

「無駄な抵抗はやめなさい。罪が重なるだけだ」

「まあ、暴れなくても時期に出られるはずだがな」

「どういう意味だ？」

余裕の面を見せていると、扉をノックし一人の警官が部屋へと入ってきた。

耳打ちするように刑事へとことを伝達する。

「内容はこうだろう。『これ以上不当な理由で拘束するといふのであれば、こちらとしても相応の対応をさせてもらう』といったところか。ハッ、実にあのクソ野郎おやの考えそうなことだ」

「……………その通りだ」

「さて、今度はオレのターンだ。昨日アンタに言ったよな？無実が証明された時はオマエを真っ先にぶん殴るってよ」

腕をぐるぐると回し、凝り固まった筋肉をほぐす。

刑事も納得したのか、仁王立ちでその場に立った。

「いいだろう。好きにしまえ」

「北谷刑事!？」

「それじゃあ遠慮なく……………!!」

渾身の右ストレートを刑事の頬に当て、激しく体を打ち付ける。

その場にいた警官は呆然とし、今の状況を理解できずにいた。

「あゝスッキリした!」

両腕を上げ、グツと伸びをする。

「間違っても、公務執行妨害で逮捕なんてするんじゃねえぞ? 約束は約束だ。アンタも一端の刑事なら守らねえとな♪」

そう笑いながら吐き捨て、部屋を出る。

長い渡り廊下を歩き証明玄関へと出ると、オレを救った救世主がそこに立っていた。

「手続きは済ませた。災難だったな」

「マジで助かったぜ。このままだったらオレは確実に少年院行きだったろうからな」

「腹が空いただろう。何が食べたい？」

「肉。それ以外は却下だ」

「よかろう。いい店を紹介してやろう」

「流星は社長♪」

「学校にも連絡しておいたから、飯を食べたらそのまま送る」

「何から何まで助かるぜ」

刑事を殴ったことはあくまで内密。

いくらこの男といえど警察と一悶着あったとなれば、手を焼くだろうからな。

しかしこの時のオレは気づきもしなかった。

学校では今、とんでも無い事件が起きているということ。



みんなと屋上で話した次の日、やはり月島君の姿は教室にはなかった。

それに花音も。

先生からは体調を崩したという連絡しかもらえなかったけど、やることは全てやってもらった。

何が起きててももう頼る人がいない。

私たちだけで、やるしかないのだ。

昼休み、クラスメイトたちが散らばる中席についたままの杏井くんの前に立つ。

「何か用かな？」

笑みを浮かべ問う杏井くん。

「ええ。少し付き合ってほしいのだけれど」

「わかった。白鷺さんのお願いは断れないからね」

彼は素晴らしい立ち上がり、私の後ろをついて歩く。

そしてバレない程度に紗夜ちゃんに視線を送り作戦決行の合図を出す。

廊下を歩いている最中も不用意に彼は言葉を発したりはしない。

私が口を開くまで何もしないつもりなのだろう。

だとすれば好都合。

今から行く場所に行けば確実に彼を終わらせることができる。

しばらく歩くと、空き教室へとたどり着く。

事前に職員室で借りていた鍵を差し込み、ロックを解除する。

「どう言う名目で借りたのかな？」

彼がそう尋ねるのは理由がある。

去年までは鍵の管理なんて一切していなかったけど、とある空き教室でイジメが起きた為に規制が厳しくなったのだ。

「ドラマの演技の練習で使うためと言ったら喜んで貸してくれたわ」

「今放送しているやつだね。キミは出番も多いし、嘘をついてもバレなさそうだ」
「嘘だとわかっていてついてきたの？」

「ああ。キミが僕に何をするのか楽しみだからね」

余裕の表情を浮かべる杏井くん。
扉をガラツと開け、教室に入る。

埃が少し被ったこの教室には嫌な思いつきがある。

さつき話したイジメは私がこの教室で行われたもの。

今思いつきだけでも吐き気がする。

「大丈夫かい？ 顔色が悪いけど」

「気にしないで。それに、もう他に誰もいないわよ？」

「そうかい？ じゃあ……………」

彼は笑顔を崩し、私だけに見せるハイライトの消えた空っぽの目を向ける。

「腹が減った。さつきと要件を言え」

「わかったわ。まず言わせてもらおうけど————あなたの秘密をクラスメイトたちに公表させてもらおうわ」

「はあ？」

首を傾げ理解できない彼に構わず話を続ける。

「およそ5年ほど前。私と別の芸能事務所に所属していたあなたは、あるドラマの撮影後に私に告白してきた。そうよね？」

「また随分昔の話をするんだね。ああ、その通りさ」

「もちろん私は振ったけれどあなたはしつこく付きまとった。たまたまそれを見た同じ事務所の子があることないことを吹聴し、あなたの悪評はあつという間に知れ渡った」

「……………」

「思えばあのドラマ以降あなたの名前は聞くことがなくなつたわね。それも当然よ。世間のニュースでは ”少年A” という名で報道されたけれど、あなたはその芸能事務所で大暴れし多数の重軽傷者を出した犯罪者なのだから」

私の言葉に彼は口を閉ざす。

肯定、と見ていいだろう。

「失明に過剰出血、幾多の骨の骨折に加えて下半身付随。これは全部その時に被害に

遭った人たちの負わされた傷よ」

「……………」

「芸能事務所もボロボロにされた挙句、スタッフや芸能人たちも怪我を負わされた為にその事務所は潰れてしまったわ。一体、あなたにいくらの賠償金が請求されたのかしらね」

「……………どこで調べた」

「匿名希望の被害者さんよ。長く芸能界にいるから顔が広いの」

「そうか。それをバラされたら俺の居場所は無くなっちゃうな」

「そうね。あなたは人気者から嫌われ者に大逆転。残り半年の学校生活は陰でひっそり過ごすしかないわね」

「嫌な未来だ」

「自業自得よ。あなたが月島くんに何もしなければ、私もこんなことをしなかった。全てはあなたの責任よ」

「だが、それを話したところで誰が信じる？俺は信頼に溢れた無敵の生徒だ。そうなる為になんだってしてきたんだ！俺の信頼は揺るぎない。あのバカなクラスメイトたちは俺の演技に騙されちゃホヤしてくる。最高の気分だ。やっぱ俺は演技の才能があるらしい。主役を張れるほどの才能がな!!」

うちに秘めた想いを全て吐露する杏井くん。

偽りもない真実は、彼の表情を見ればすぐにわかった。

「才能、ねえ……………」

「あの事件さえなければ俺は今頃『実力派俳優』としてテレビに出続けていただろう。俺が堕ちたのも全部、俺の魅力に気づかなかったお前のせいだ!!」

「ふざけないで。あなたの勝手な考えに付き合えるほど、私はお人好しじゃないわ」

自分のことしか考えていない杏井くんに呆れて、冷たく言い放つ。

「そこまで知ってるなら俺がわざわざ大阪からここに引っ越した理由もわかるやな？」

「わかるもなにも、誰だつて気づくわよ。つまらない復讐でしょう」

「復讐、その通りだ。お前だけは苦しんでもらおうと思っていたんだが、このクラスには邪魔者がいる」

邪魔者。きつと、月島くんのことだ。

「アイツをまず追放し、お前と一対一になる状況を画策した。だが、都合だ。お前と接点を持つにはどうやったって警戒される。お前から話を持ちかけてくれて助かったぜ」

「それはどうも」

「今からバラすんだろ？別に構わないぜ？その前にお前をここで殺す寸前まで痛めつけるんだけどな。ハーっハッハッハ！」

高笑いする杏井くん。

私はあくまで冷静な態度を貫く。

「この教室に監視カメラはない。廊下にもな。俺たちの話は今、誰にも聞かれてないからアリバイ工作だって簡単にできる。お前は所詮、月島あのおとこ 奏がいないと何もできねえんだよ!!」

「本当に、そうかしら?」

「はあ?」

私は黙って3時の方角に指を指す。

そこには普段先生たちが使う教壇があつて、その中央に埃を被つた黒い立方体が置いてある。

そう、彼をここまで連れてくるまで全て私たちが仕組んだことだ。

「あれは………まさか………?!」

「あそこから、今までの出来事を全てクラスメイトたちは見ているわ。もちろん、音声は拾つてる」

「い、いつのまに………」

「昨日の放課後、紗夜ちゃんと花音がやつてくれたわ」

話は昨日の昼休みに遡る。

どうやって彼を追い詰めるか考えていたところ、私は過去に月島くんに助けられた時の案を持ち出した。

彼は私が何もできないと油断する。

あの空き教室なら誰も見ていないと考えるだろうし、廊下、教室に監視カメラはない。

まさにうってつけの場所だ。

黒の小さいカメラは紗夜ちゃんが以前風紀委員の時に犯人から取り上げたものを使い、花音はクラスメイトたちにグループラインでこのことを予め伝えていた。

あの時と同じことをやるのは気が引けたけど、彼の報いを受けさせる為にも、彼の考えたこの作戦を使わせてもらった。

現にこの映像も携帯越しにみんな見ていることだろう。

月島くんがいない。

私に度胸がない。

自分は完璧だ。

その積み重ねで引き起こした現状だ。

「信じられないのなら、これで確かめるといいわ」

私は携帯を見せ、今まさに私たちが写っている映像を見せる。

閲覧人数も月島くんを除く全員がしており、唯一見てないのは杏井くんただ一人。彼は自ら落ちたのだ。

「なぜあの時私はあなたの告白を断ったと思う？それは魅力がないからよ」

「……………」

「あなたからは決して何も感じられない。実力派俳優になれた？バカにしないでちよ
うだいあなた程度の実力じゃあ到底不可能よ！」

今まで溜めていた感情を吐き出す。

「悪いことは言わないわ。月島くんを無実の罪で警察に引き渡したこと、私の悪質の
手紙、そして羽丘の女帝さんとのつながり——全て自分の口で吐きなさい」

ようやく追い詰めた。

昔からの因縁、と言っても一方的なものだけれどこれで終わりを迎えたんだ。

「……………ス」

「えっ？」

小さく何かを呟いた彼は私の眼前に近づき、頬に向かって拳を振るう。

だ。大して体は大きくないのにすごい力で、並べてあった机や椅子もろとも体が吹き飛ん

「痛っ……………！」

痛みが全身を駆け巡る。

立つことすらままならない。

「……………！」

無言のまま私の前に立つ杏井くん。

声を荒げることも、叫ぶこともなく、静かな怒りを秘め直立する。

「ふふっ、やはり花音は正解だったようね」

初めはクラスで暴露するつもりだったけど、優しい花音はそれを拒んだ。

いくらなんでも、事実を知らない人を巻き込むのは違う、と。

私が彼と対峙することも望んでなかったようだけど、それは致し方ない。

そのせいで準備に手間がかかったけれど結果、彼は今こうやって標的わたしを目の前にして拳を振るっている。

「殺すつもり？いいわよ。一緒に死にましょう」

私は物理的に、彼は社会的に殺される。

まだまだやり残したことがあるけれど、それは将来の話。大事なのは今だ。

「……………?」

突然ガチャリつと金属音が鳴り、彼の手首と両足を拘束具のような物で固定する。ずっと教室の外で待機していた紗夜ちゃんの仕業だ。

「白鷺さん！大丈夫ですか!？」

紗夜ちゃんはそう言い、私に駆け寄る。

「大丈夫よ。気にしないで」

「まさか本当に暴れるとは……………すみません、彼が暴れ出す前に捕縛すると言ったのに……………」

「無理もないわよ。殴られた瞬間、私だつて何が起きたのか分からなかったのだから」「すぐ保健室へ連れて行きます。立てますか？」

「ええ。ありがとう」

う。紗夜ちゃんの方を借り、立ち上がるもまだ痛みが全然引いていなくてよろけてしま

下手をしたら、どこか骨が折れているのかも……………。

これじゃあドラマの撮影は難しそうですね。

「杏井くん」

紗夜ちゃんは睨みつけるように杏井くんを見る。

「あなたが良い生徒だと私は本気で信じていました。昔の恨みだとか、そんな理由で人を痛めつけるなんて……………最低です」

彼は俯いたまま、紗夜ちゃんは言葉を続ける。

「既に先生は呼んであります。もうすぐでここへくるでしょう。大人しくそこで待っていてなさい」

本当の意味で終わる。

そう心の中でホッとした時だった。

「……………まだ」

「……………？」

「まだ……………終わって、ねえぞ……………？」

「何を言って——」

振り返ると、彼は手首についた錠を力ずくで外し、脚についたものも同様に破壊した。

「そんな?!月島くんですら壊せなかったのに……………」

「お前も……………殺してやるよ」

大きく目を見開いた彼は紗夜ちゃんに飛び蹴りし、紗夜ちゃんから離れた私はその場に膝をついた。

紗夜ちゃんは腹部を抑え動けない。

追撃を加えんとばかりに、杏井くんは彼女との距離を詰める。

「ま、待つて!」

必死の思いで彼を呼び止める。

「紗夜ちゃんは関係ないわ。やるなら——私をやりなさい!」

せめてもの抵抗だった。

彼は近くの窓ガラスを素手で破り、その破片を私の額に当てる。
彼は元芸能人。

顔が一番傷つけられたらダメだとわかっている。

(……………私の芸能生活も、終わりね)

心でそう嘆き彼の復讐を受けた。



「奏、ひとつ聞いてもいいか?」

「なんだ?」

「この世で一番、絶対的な力とはなんだと思う?」

肉を頬張る俺に投げかけられた唐突の問い。

考えることもなく即答する。

”情報” だろ？

「正解だ」

親父は嬉しそうに微笑む。

「相手を掌握するには必要なことだからな」

「情報は時に人を殺すことだってある。弱み、クセ、過去——人はいろんなものを背負ってるから、突かれたら嫌なことだってある」

「見えない刃というべきか。そんなモノ、握られた時点で終わりだろ」

「刃どころか爆弾だな。とある大企業だって、パワハラや超過労働という秘密をバラされ大問題に発展したことがある」

「そうやって世間に暴露し続けて、今の地位に成り上がったのか？」

「人間の悪いことを言うな。うちはあくまで健全だよ」

「どうだか」

そんなクリーンな会社があるなら見てみたいものだな。

「いくら腕力であろうと、拳銃ピストルで撃たれば人は死ぬ」

「いくら頭脳であろうと、その知識を応用できなければ意味がねエ」

「ククツ。私たちが合わされば、完璧な人間になれそうだ」

「よせよ。気色悪い」

完璧な人間なんてこの世に存在しない。

どれだけ極めようが人は所詮、煩悩の塊。

神は自分に似せようとして人を作ったと言うが、限りなく不出来になるようにできているんだからな。

「……………おっと、失礼。電話だ」

構わず肉を食らっていると、電話をしている親父の顔がこわばった。

しばらく相手の話を聞き電話を切った後、すぐに立ち上がった。

「どうした？」

「緊急事態だ。奏、落ち着いてよく聞いてくれ」

ネクタイを締め、とんでもないことを口にする。

「白鷺が……………クラスメイトに暴行を受け緊急搬送された」
「……………!?!」

第4 2輪 キンセンカ～絶望～

車を走らせ、病院へと向かったオレは車に親父を置き去りにし一目散に受付と駆け寄る。

「花咲川の生徒だ!!運ばれた生徒たちはどこにいる!?!」

息を切らしながら尋ねるも看護師は怖気付いて話そうとしない。

そこに数分遅れで親父がやってきた。

「驚かせてすまない。私はこういう者で」

自分の名刺を看護師に見せ、白鷺の部屋の場所を聞くとまたもオレは親父を置き去りに4階にある病室へと階段で駆け上がる。

「白鷺っ!!」

勢いよく扉を開けその名を呼ぶ。

白鷺はベットに横たわり、腕や頭に包帯を巻いた状態で眠りについていた。

その有様にオレは言葉を失う。

数分遅れて親父も病室へと入ってきた。

「全く、少しは落ち着いたらどうだ」

「……………るせえ」

「さっき看護師さんから容体は聞いた。打撲や切創はあるが命に関わる怪我はしていないらしい」

「そうか」

安心したのも束の間、親父は包帯が巻かれた白鷺の額を指差し残酷な通告を受ける。

「しかし、額にできた傷は深く、一生残るかもしれないらしい」

「……………はっ！」

その言葉に頭が真っ白になる。

「ガラスの破片で思い切り傷付けられたのだろう。出血も酷かったみたいだ」

白鷺はアイドル、そして女優だ。

テレビや雑誌、表舞台で活躍する人間だからこそ外傷には特に気を張っている。

そんな奴に対し犯人は分かかって傷つけた。

恨みなんて生易しいものじゃない。

犯人は、芸能人白鷺千聖を殺したんだ。

「……………親父」

「なんだ？」

「約束は守る。白鷺を守れなかったのは、オレの責任だ」

親父に頭を下げる。

約束、それは白鷺を絶対に守ると言うこと。

それを守れなかった場合は違約金として損害賠償を請求することだ。

「今回お前は警察に拘束され、身動きが取れなかった。その当日にこのようなことをしたと言うことは、犯人の計画的犯行とみていい。お前に落ち度はない」

「だとしても、オレの気が済まない。金は必ず払う」

「残念だが、俺は今更金を得たところで何も変わらない。あれはお前に仕事させるための脅しだったにすぎないからな」

「……………そうか」

「だが、まだ期限はある。必ず犯人を捕まえてきなさい。慰謝料等はその子から徴収するでしょう」

「わかった。白鷺を頼む」

親父に別れを告げ部屋を出る。

することはただ一つ。

白鷺の敵討ちだ。

病院を出てそのまま学校へと徒歩で向かう。

普段ならその道中に絶対誰かしらは絡んでくるんだが、今日はその相手すら現れな

い。

いや、姿を消したと言うべきか。

すれ違う人間全てがカタギであり、必ずいた不良、半グレ、世の中から悪と分類される奴らはこの場にはいない。

「……………チツ」

普段、ウザイと感じていた奴らが肝心な時にいやしない。

理由は知らんが役に立たん連中だ。

沸々と湧き上がる自分への怒りの吐口がどこにも見当たらない。

結局誰とも関わることもなく学校へと着くとすぐにオレたちの教室に顔を出す。

いつもは賑やかな様子が嘘のように静かで電気も消され扉も完全に閉められていた。

「何しに来たんですか？」

オレの背後にいつも通りの腕組みポーズで立ち、ため息混じりにそう問いかけてきた女。

奴はまるで、オレが来ることをわかっているかのように顔色ひとつ変えずただオレを見ていた。

「白鷺の敵討ち」

「残念ですがその敵はここにはいませんよ」

「テメエは」

「自分の鞆を取りに戻ってきました。もう帰るところです」

「ハッ、どうやらテメエも被害にあつたらしいな」

腕組みをする氷川の右腕には白い包帯が巻かれ、それを隠すように氷川はその部分を覆い隠す。

「別に、たいした怪我ではありません」

そう言い張る氷川にゆっくりと近づき、その腕を握ると奴は苦痛の表情を浮かべた。

「っ!!」

「無茶すんじやねえよ。怪我が悪化するだけだ」

「……………大きなガラスの破片が刺さりました。咄嗟に右腕で庇ってしまったので、致し方ありませんが」

「おいおい。重傷じやねえか」

「白鷺さんに比べれば私なんて……………」

「ああ。オレもさつき会ってきた」

「見たんですね」

「ありやあ、酷いってもんじやねえよ。白鷺千聖の女優人生を完全に殺そうって怨念がこもってるかのようだった」

「あの時、私が止めていれば……………」

「おいっ、一体何があったんだ。一から詳しく教えろ」

「わかりました。全てお話しします。まずは、被害にあった場所へと向かいますね」

「そういい、氷川は背を向け歩き始める。」

「オレはその後ろを黙ってついていく。」

「通り過ぎるすべての教室にも人はおらず、ところどころ損傷していた。」

「恐らく犯人が暴れてつけたものだろう。」

どうやらそれほどまでに大きな事件だったらしい。

近頃は平和だと思っていたが、卒業間近にとんでもない大騒動を起こしやがった。

「ハイ」です」

氷川の脚がびたりと止まりその教室を見ると、凄惨と言う他ない状況だった。

窓ガラスは全て割られ、綺麗に並べられているはずの机や椅子も倒れそのいくつかは足も折れていた。

オレはもつと近くで見ようと割られた窓を飛び越え教室へと入る。

歩きたびガラスがパリパリと割れ、辺りを見渡すと血痕のついた壁が目に入った。

白鷺か、氷川か、あるいは他の誰かか知らんが相当な量だ。

べつとりとこびりついている。

「ひでえな」

膝をつき、その血痕を見る。

「誰のだ？」

「白鷺さんのものです」

氷川も窓からこの部屋へと入り、オレの後ろに立つ。

「白鷺に個人的な因縁を持つてる奴がいることは知ってる。奴の所属事務所に脅迫状が届いていたからな。まさかその犯人が外部から侵入してこの惨劇を生んだわけじゃないだろう」

「……………」

「となると外部犯、北谷の可能性はねエ。白鷺の知り合いか？あのクラスにいたというのか？じゃあ誰が……………」

考え込むオレに、氷川はある人物の名を口にした。

「杏井くんです」

「杏井だと？」

「はい。彼が白鷺さんを傷つけた、この惨劇を生んだ張本人です」

「おい待て。ありえねエだろ。アイツがこんなことする訳……………」

「私たちは、騙されていたんです。彼の演技に」

「演技？ どういうことだ」

「まずは、白鷺さんの過去を遡る必要があります」

氷川はその全てを話す。

白鷺が杏井に言い寄られていたこと。

それを拒み、その事実をネタに笑った連中を半殺しにして事件になったことも全て。どこか聞き覚えのあるその似通った過去に、オレは耳が痛くなった。

「それで大暴れしたのか」

「彼をどうするつもりですか？」

「武力行使。ぶん殴る」

「やはり、ですか」

「やむを得んだろ。オマエお得意の対話で解決ができる相手だったらこんな風にはなつちやいねえよ」

「なら私も——ツ!!!」

でしゃばろうとする氷川の腕、それも包帯を巻いてるところをギュツと握ると、奴は苦痛の表情を浮かべた。

「そのケガで何もできんだろ。捕まって足手まといになるのが関の山だ」
「しかし……………」

それでも食い下がるのがこの女だ。
こういう時の対応をオレは心得ている。

「いいか氷川。迷惑をかけるな」

奴の肩に手を置き放ったその言葉。

冷たいようにも聞こえるだろうが、これだけはつきり言わないとこの女には伝わらない。
い。

こんなことで傷つくようなやつでもないからな。

「……………わかりました」

渋々といった様子で受け入れる氷川。
ここで引き下がろうとしないのは賢明だ。

「安心しろ。白鷺の分もテメエの分も、キツチリ借りは返しといてやる」

「……………こんなことを言うのは間違っているとは思いますが、お願いします。どうか……………」

「任せろ」

氷川から思いを託され、オレは教室を出る。
それと同時にとある人物に電話をかける。

「オレだ。至急頼みたいことがある」

奴を、杏井だけは。

絶対に許さん。



「——とにかく、お前は無事で何よりだ」

『心配かけさせてごめんね』

結局のところ、二人を除くクラスメイトたちに被害はなく松原も無傷で済んだそう。電話での反応しかわからんが問題なさそうだ。

「安心しろ。杏井は必ず警察に突き出す」

『む、無茶だけはしないでね』

「また病院送りになったら鼻で笑ってくれ。もちろん、五体満足で終わらせるように善処する」

『うん。待ってるね』

松原は優しい声でそう励まし電話を切る。

「さて行くか」

そう呟き、杏井のいる場所へと足を踏み入れる。

氷川と別れたあと、オレはすぐ頼れる友達に奴の居場所を探ってもらい乗り込む手筈を整えた。

毎度のことながらオレのわがままに付き合ってくれるアイツらに感謝しかない。

今度、飯でも奢ってやるか。

奴らの潜伏先は驚くことにとあるビルの地下室だった。

杏井の他に複数人の出入りもあつたそうでおそらくだがガチガチの迎撃体制で臨んでいるはずだ。

だがそんなことは関係ない。

挑んでくる野郎は全員薙ぎ倒すまでだ。

鉄扉の前に立ちそれを蹴破つて中に入る。

「邪魔するぜ」

オレの視界に入ったのは数十、百数人ほどの男たち。

ここ最近見かけなかった街の不良どもだ。

手には何かしらの武器を持ちやる気満々の様子。

その群衆の最後尾に奴はいた。

「オレのいない間に、随分と好き勝手暴れてくれたらしいな」

「……………」

その問いかけに、杏井は椅子に腰掛けたまま頬杖をつき鋭い目で睨む。

「もう時期ここに警察も来る。諦めて投降するんだな」

「……………ハツタリはよしなよ」

「ああ？」

杏井は重い口を開いた。

「キミがそんなくだらしない手を使うわけがない。復讐しに来たんでしょ？この僕に」

「復讐？ 誰の」

「キミの大切な人たちだよ」

「生憎だが、復讐なんて悍ましいモンのためにきたんじゃねエよ」

「じゃあ、なんだと言うんだい？」

「決まってる。オレのクラスに迷惑をかけた野郎をとつ捕まえるためだよ!!」

オレは勢いよく飛び出し、近くにいた男の顔面目掛けて脚を振り抜き、はるかかなたへ吹っ飛ばす。

鉄パイプを振りかぶるやつにはそのパイプの原型をなくす一撃をお見舞いし変形させる。再び蹴りで数人巻き込んで気絶させる。

敵をちぎっては投げ、ちぎっては投げを繰り返す数がおよそ3分の1まで減ると、杏井の表情も険しくなった。

「強いね。やっぱり」

「これでも生身の人間なんだぜ？」

オレは氷と炎が出る個性もなければ、体からチェンソーが飛び出すこともない。

ピストルで撃たれれば死ぬし、殴られれば痛みだつて感じる。

「雑魚の相手は疲れた。ほらっ、かかってこいよ」

手首を曲げ挑発すると、奴は徐に立ち上がりそばに置いてあつた何かを顔につけ指を鳴らした。

その瞬間。

「……………ッ!？」

部屋中の換気口から紫色の煙が勢いよく吹き出し、この地下室を覆う。咄嗟の出来事にオレは対応できず、その煙を吸い込んでしまった。

「なっ、なんだ!？」

「苦しい……………」

「た、助け……………」

杏井の仲間だったはずの連中が次々と倒れていく。

オレ自身、目が少し霞んできた。

袖でなんとか口を覆っているがいつまで息が続くかわからない。

「て、テメエ……………!!」

「卑怯。とでも言うつもりかい？」

ガスマスク越しに杏井は話す。

「これは学生の喧嘩なんて生やさしいもんじゃない。殺し合いだよ。本物の命をかけた、ね」

もはや高校生がやっていいレベルではない。

れっきとした殺人だ。

紫色のガスが霧散する頃には敵は杏井を除き全員が倒れ、オレも片膝をつき霞む目で奴を見る。

「仲間にも知らせてない毒ガス攻撃か。ゴホッ！」

「安心しなよ。死にはしない。多少後遺症は残るかもしれないけどね」

「どこが、安心しろだ。吸っちゃまったつうの………」

「それでも意識を保っているのはさすがと言う他ないよ。不死身アデッドの暴君ドと言われるだけのことはある」

このまま戦闘すれば、まず間違い無く敗北するだろう。

オレはここで殺され、病院にいる白鷺たちに更なる危害を加える可能性が高い。必ずここで食い止めなければ。

「花咲川無差別暴行事件の犯人もオマエだな？」

「そうだよ」

「見ず知らずの他人を一方的に危害を加えて、どうだったんだよ」

「最高だった。演技では味わえない、緊迫としたあの光景。泣き叫ぶ女。手に残る鈍い感触。血の匂い。今思い出しただけで昇天しそうだ」

悍ましい顔を浮かべる杏井。

まるで自分に酔いしれているかのような、そんな感じだ。実に狂ってる。

「それがオマエの本性か？ クラスの時とえらい違いだ」

「ボクは演じることが好きなんだ。アレも実に楽しかったよ。クラスの人気者になったからね」

「まんまとオレも騙されたよ」

適当に会話を促し時間を稼いで回復を試みるも状態は戻らない。

そのことを杏井も承知済みだろう。

肩を抱き、体を捻りながら杏井は告げる。

「ああ、そうだった。キミ、今から死ぬけど何か言い残すことはあるかい？」
「……………はっ?」

その言葉と同時にパンツ！と銃声が響き、オレの体に命中する。

強烈な痛みと共に、口から大きく血を吐き、目にした先にいたのは。

「うふふ。 さよなら、 奏くん」

「まつ、 ば……………」

片手に拳銃を持ち、青い髪を束ねた松原の姿だった。

第43輪　ダイブーく死んでも離れないく

毒ガスで意識が霞む中、オレの目はしっかりとその姿を映した。
紛れもない。

あれは、松原花音そのものだ。

誰かのなりすましと信じたいのは山々だが、声も顔も本人そのものだった。
その事実を受け入れられず頭の中は未だフリーズしたままだ。

「ごめんね、奏くん」

拳銃を片手に松原はそう呟く。

「オマエ……………」

「なぜ、って訊きたそうな顔だね。いいよ、教えてあげる」

ニコリ、と笑い松原は話を続ける。

「千聖ちゃんのがね、憎くて憎くて仕方なかったの。私にないものを全部持つて、挙げ句の果てに好きな人までも奪おうとしている……だから、本気で殺そうと思っただの」

「……………」

「結果、大成功。あの女は顔に一生の傷を残し、愛してやまない男を今ここで失おうとしている。女優としても一人の女としても、もう終わりなんだよ、彼女は」

鬼気迫る勢いで今までの想いを吐露する松原。

これが奴の腹の中か？

いいや、オレはわかってる。

「……………松原」

オレの考えが間違っていれば松原との関係が絶たれることになる。

荒れくれていたオレに優しくしてくれた唯一の女。

だが、この違和感はどうやったって拭い切れるもんじやない。

毒で痺れる体を無理やり起こし、手を蹴り上げ拳銃を引き剥がすと、そのまま顔面目掛けて拳を振るう。

オレの拳は松原の頬を直撃し鈍い音と共に体が彼方へ吹き飛ぶ。渾身の、そして不意の一撃はオレの疑惑も晴らす形となった。

「ククツ。どうやらオレは一人、友達を失わずに済んだ様だな」

再度殴り飛ばした相手の方を見ると、見事に顔は崩れ別の人間だということが明らかになったのだ。

松原、いや、別の何かはオレを鋭い目つきで睨む。

「今までは、全て演技だったの？」

「バカいえ。これでも万全の体調とは程遠いんだぜ？ 撃たれて体は痛えし、毒で手足は痺れて目眩もハンパねえ」

「油断したね。」羽丘の女帝　さん

「察しはついていたが、やっぱテメエか」

羽丘の女帝、北谷は松原のマスクを脱ぎ捨て元の顔を曝け出す。

その瞳は松原とは対極。

凍りつくほど冷たく、オレを見下す様にのぞかせる。

「これも北谷オマエからの発案か？」

「ええ。もう物理的にはあなたを殺せそうになかったから、特別に用意させてもらったわ。まあ、無意味だったようだけれど」

一体どんな裏ルートを辿れば、たかが一女子高生が毒ガス兵器や拳銃、声までそっくりになる擬態マスクを入手できるのだろうか。

闇は深い。果てしなく。

「二人が知り合いだったのも驚きだったが、まさかこうして手を組むとはな」

「まさか」

「ただの一蓮托生よ」

「へえ」

どちらともオレの友達を傷つけたことに変わり無い。
行き着く先は、決まっている。

「面倒ではあるが好都合だ。オレが本気で殺したいと考えてる二人が今こうして目の前にいるんだからな」

「……………ツ!？」

第六感が働いたのか、オレの渾身の蹴りを間一髪のところかわし、後ずさる北谷。奴の目には、フラフラと揺れるオレと空振った脚がコンクリの地面に突き刺さりひび割れた光景だった。

さつきまでの澄ましたような表情は無くなり、目を大きく見開きながらオレを見る。

「よくかわしたな。今のをガードしてたら、容赦なく骨を砕いていたはずなんだが」
目眩のような症状がオレを襲う。

かわした、とは言ったが厳密に言えば当たらなかったという方が正しい。

今も目が霞んでどつちがどつちなのか区別はつかない上に、その姿を正確には捉えき

れていない。

「女にも手を出すなんて、堕ちたものね」

「バーカ。オレはそもそも男女関係なく捻り潰す極悪人だぜ？」

「彼女相手なら手も抜いてくれると考えたけど、そうもいかないみたいだね」

「凶器だろうが兵器だろうが構わねエ。殺すつもりでこいよ」

殺気を奮い立たせ戦闘体制をとる。

まず動き出したのは北谷。

ポケットからナイフを取り出しオレに突き刺そうとするが苦も無くそれをかわし、肘打ちで背中を強打する。

遅れて杏井も動き出すがアクションを起こす前に腹部目掛けて蹴りを入れ、後方へ飛ばす。

最終手段、と言わんばかりに北谷は銃口をオレに向けるが引き金を弾く前に腕を手刀でへし折り、銃を手放させると奴の顔面にフルスイングで拳を振るう。

向こうが殺す気でオレに向かってくるなら、こつちもそれ相応のことをするまで。

今のオレなら視覚がなくても感覚だけでも動けちまう。

まるでゾーンにでも入った気分だ。

「まったく……………手に負えないね」

「痛ッ……………痛ッ……………!!」

「つまらん。もう終わりか」

今のオレは誰にも歯が立たない。

その絶対的な自信がより際立つ。

「羽丘の女帝さん。動けそうかい？」

「……………無理。骨を、やられたわ……………」

「僕も、肋骨を何本かやられた。パンチ1発でここまで負荷を負うとは、さすがだね」

「あなた、笑ってる場合じゃ……………」

「おいっ」

「……………!?!」

北谷の声のする方へ歩み寄り、見下ろす。

「これまで散々オレの学校生活を邪魔してきたな？中学の時が発端とはいえ、元はテメエが招いたことだ。なぜオレにそこまで固執する？」

眼前まで距離を近づけ、詰め寄る。

「何も答えられないのか」

「……………」

「北谷イイ!!!」

オレの怒声が部屋に響き、二人の鼓膜を揺らす。

涙を流すこの女の髪を引っ張り上げさらに問い詰める。

「結局のところ復讐だろうが。額の傷をつけたオレに対して」

「うう……………」

「今更女扱いらしくともいうのか？オレの友達を傷つけ、凶器を手にし、あまつさえオレを殺そうとしたテメエがか？ハッ、笑わせる。オマエは女でも、人間でもねエ。ただの犯罪者だ」

「やめ、て……………」

「後悔しようがもう遅エ。オレの逆鱗に触れたオマエらはここで死ぬんだ。惨めな姿を世に晒されてな!!」

「たす、け……………杏、井……………」

身悶えする北谷を遠くで見つめるだけの杏井。

協力関係といえどそこまでの義理はない。

そう言わんばかりの行動だ。

「おいつ、杏井。邪魔したらテメエも殺すからな?」

「……………」

杏井はオレの忠告に対し無言で頷く。

（あれはまるで、修羅。視線だけで相手を威圧できるって、もはや人間じゃないね」

杏井の心の声はいざ知らず、北谷から手を離れたオレは仰向けになる奴に跨り、グッ

と腕を引く。

「死ね」

勢いよく振り下ろされた拳は北谷の顔面にモロで直撃し、血飛沫を上げる。

再度、今度はもう片方の腕を振り上げ下ろし、また血を流す。

引いては殴り、殴っては血飛沫をあげの繰り返し。

二桁殴る頃にはオレの両手は真っ赤に染まり、北谷の顔はかつての面影すら残らぬほど悲惨なものになっていた。

これが報い。

奴はオレの大切なものを幾度となく傷つけたんだ。当然の結果だろう。

「あー、頭がボーツとする……………」

血濡れた手で顔を覆い天を仰ぐ。

これが毒ガスの影響なのか、怒りが頂点を越えたからかわからないが気分は悪くない。

全身を包む血の香りも今はどこか心地よきすら感じるのだ。

どうやらオレは完全にイカレちまったらしい。

おかしくて、思わず笑ってしまふ。

「さて、次はテメエだ。何か言い残すことはあるか？」

指をパキパキと鳴らしゆっくりと近づく。

「敵討ち、なんて柄じゃないけど僕も少なからず君のことは嫌っているからね。一矢報いさせてもらうよ」

「いい遺言だ」

膝を狙い、脚を振り抜くがその場でジャンプしてかわされ逆にオレが蹴りを喰らう。

地面を滑るようにしながら後退するが、杏井は勢いそのままにオレに向かい胸ぐらを掴むと顔面目掛けて思い切り拳を振るつた。

細腕からは信じがたいパワーを誇る拳、そしてスピード。

この一瞬に限っては不死身の暴君を上回ったというほかない。

「役者で鍛えたおかげ、か？そこらの不良よりできそうだな」

口の中に溜まった血を吐き捨て、そう問いかける。

「……………々うるせえ」

突如、杏井の口調が変わり丸みが特徴の目つきも鋭くなった。

これが氷川の言っていたやつ豹変した姿か。

「白鷺千聖に群がる蠅が。オマエにも一生残る傷を与えてやるよ」

オレを指差し血走った眼でそう宣言する杏井。

”喧嘩に明け暮れ、人を痛めつけることしか脳のない不良” って設定か？とことん役者なんだな、オマエは……………まあ、返り討ちにしてやるよ。演技中毒者!!”

オレは再度速攻を仕掛ける。

先ほど華麗にかわされた得意の蹴りで決着をつけようと考え、搦手を用いる。

やつの腕を掴み顔面掛けて掌底打ちをするも顔を傾けるだけで回避し、お返しと言わんばかりに肘打ちでオレの腹部を強打する。

そのままオレの襟を掴み脚を引つ掛かけ背負い投げをされるも、体を捻り両足で着地し逆に投げ返す。

そのまま滑るように地を這う杏井目掛けて脚を全力で振るうも、杏井も同様に脚を振り抜く。

両者脛へ激突し、痛みが全身を駆け抜ける。

「痛ッ、今のは効いたぜ。打撲程度では済まなそうだ」

「お互い様、だ」

膝をつくように片足を抑える杏井。

無理な大勢で攻撃してきた分、威力は控えめで向こうのほうにダメージが乗ったようだ。

だが、オレの蹴りに匹敵するほどのパワーには素直に驚かされた。

「ギブアップか？」

「誰が」

眉間に皺を寄せながらも杏井は立ち上がる。

しかし、片足に重心がかかりすぎているのが一目見ただけでわかる。

相当傷は深いようだ。

足払いすれば簡単に転びそうだな。

「ここまでオレに張り合う奴と出会うのはいつぶりだろうな。もう手加減いらなそうだな」

「傲慢な」

「それが強者の特権だ」

どんな汚い手を使われようとも、どれだけ大人数が相手だろうとオレは喧嘩で負けたことは一度もない。

毒ガスを浴び、拳銃で撃たれた今でも負ける気が一切しない。

「黙れ、羽虫が………テメエを今、ここで殺して——」

「油断禁物だぜ？」

こうして会話している間も命取り。

奴らお得意の ” 不意打ち ” で今度こそ杏井の頭を脚で捉えた。

ドゴッ！と鈍い音が響き杏井は力無く床に体を預ける。

「動かねエほうがいいぞ。脳震盪なんてチャチなレベルじゃねエからな」

目を回す杏井を跨り、見下ろす。

「卑怯だ、とでも言うつもりか？言わせねエよ。こちららそれで何度も襲撃されてきたんだからよ」

その場でしゃがみ、力の入っていない細腕を掴む。

「まずは——松原の分」

本来の可動域とは大幅にズレた場所まで腕を動かし、へし折る。

「次は——氷川の分」

先ほどへし折った対の腕を同様にする。

「最後は脚だ。これで当分は介護なしには生活できないぜ？」

「……………殺せ」

「ああ？」

「殺せよ。オレとあの女に恨みがあるんだろ？」

命乞いをするどころか、自らを殺すよう促してくる杏井。

そんな言葉を返すこともなくオレは奴の足をボキッとへし折った。

「今のが——オレの分」

残った最後の足を手に再度警告する。

「殺せつつあったか？いいぜ。この恨みを晴らしてから、な」

これまでと同じようにグツと力を込め、そして叫ぶ。

「これが——白鷺千聖の分だああ!!」

今までより数倍も力を入れ、真つ二つにへし折った。

これでやつは立ち上がるは愚か、当分碌な生活を送ることはできない。

「はあ……………はあ……………」

ようやくことを成し遂げ、突如として眩暈が襲ってきた。

ガンガンと頭に響く頭痛も鬱陶しい。

早いところ、病院へ——

「おい」

この場を去ろうとしたオレを杏井が呼び止める。

「このまま、置いていくつもりか？」

「だつたらなんだ」

「オマエの恨みはそんなもんか。俺たちを殺したいと思っていたんじゃないのか？」

「るせえ。本当に殺したら、アイツらに合わせる顔がねエだろうが。言っておくが、

北谷あのおんなも死んじやいねエよ。顔面は整形しなければ治らんほど殴ったがな」

「……………一つ頼みがある」

「事によつては受けかねるが」

「俺にも……………彼女と同じ傷を」

「つまりは顔面を粉々にしろと？」

「そう、だ。もちろん、弁明はする」

「いいぜ。後悔すんなよ」

断る理由すらない。

そつと目を閉じる杏井の顔面目掛けて、オレは今日一番の力を振り絞り拳を振るつた。

鈍い音が響くと共に顔から大量の血が吹き出し、オレの手を汚す。完全に動かなくなったのを確認しオレは地下室を出る。

「あー、しんどっ……………」

壁に体を預け、這うように外へ出ようとする。

平衡感覚は失われ頭痛も目眩もひどくなる一方だ。

先ほどまでは興奮状態イになっていたからか、ここにきてどつとそれらの症状が重くのしかかってきた。

死ぬのも時間の問題か。

「……………ここです!!」

「はやく……………きてください!!」

どこことなく複数の足音が聞こえ、霞む視界に何人かの姿が目に入る。

「月島くん！大丈夫ですか!？」

「奏くん……………!!」

声だけでわかる。

氷川と松原の二人だ。

「よお、なんだか、久しぶりに会った気が、するなア」

力を振り絞り俯きながら話す。

「動かないで！もうすぐ救急車が到着するから！」

「クククツ。今のオレには、霊柩車がお似合い、だぜ？」

「冗談言ってる場合ですか！」

氷川のそんな叱責をよそに、一人の男が割って入る。

「警察の者だが、キミが月島 奏くんだね？」

「ああ………犯人なら、奥で、伸びてるはずだ」

「わかった。キミは一刻も早く病院で治療を受けるんだ！」

「とつとと行けよ。逃げられたら、アンタらの責任。だからな？」

「もちろんだ。おいっ！急ぐぞ！」

警察官たちは杏井たちの元へ走り、オレは氷川と松原に抱えられ外へと目指す。

「よく、ここが分かったな」

「後について行きました。松原さんも、察して連絡をくれたんです」

「無茶はしないでって、言ったのに……」

「説教なら、後で聞く。今は、もう——」

そこでオレの意識は失われた。

ああ、コレが ” 死 ” か。

なんともあつさりくたばっちゃまったな。

この世に生を享けて早18年。

随分と人の道から外れた人生を歩んできたが、決して悪い者ではなかった。もしまた人に生まれ変わったのなら、今度は真つ当に生きてやるか。

——そう懺悔していたのも束の間、生きて再び目覚めたのはこの事件から3日ほどすぎた日のことだった。

オレの気持ちを返せ!!

小っ恥ずかしいじゃねエか!!

バカヤロオ!!

第44輪 花に嵐

月島くんが病院に緊急搬送されてから3日。

たびたび面会には訪れているけれど未だ目覚める様子はない。

怪我をして、こうやって治療を受ける姿は何度も見てきたけれど、全く慣れることがない。

特に、私が関わっていたことなら尚更。

自らの力の無さに心底腹が立つ。

(……………ダメ。弱気になつては、ダメ)

そう心の中で呟き自分を奮い立たせる。

これから会う人にそんな姿を見せてはいけなと思ったから。

「失礼します」

こんこんと扉をノックしその部屋にいる人に声をかける。合図を確認するとゆっくりとその扉を開き部屋へと入った。

「いらつしやい。紗夜ちゃん」

「お邪魔します」

小さく笑い対応したのは白鷺さん。

月島くんが病院に搬送されてきたと同時に目覚め、今は日常生活が可能なほど回復している。

直に退院できるだろうと、お医者様からも言われたらしい。

「月島くんのお見舞いには行ったの？」

「ええ。先ほど」

「まだ、目覚めそうにないのね」

「どうやら私の表情から察したようだ。」

「そのうち元気に飛び起きるはずですよ。なんなら、もう少しだけ大人しく寝ててもらっても構わないぐらいです」

「ふふっ。それもそうね」

「もうすぐ大学生なんですからもつと落ち着いた生活をしてほしいんですけど……」

「それは諦めた方が良くもしいわね。頭の中まで筋肉でできてるような人なんだから」

ニコツとした表情とは裏腹になかなかの毒を吐く。

まあ、お互い彼をよく知っている身。

白鷺さんに至っては学外でも行動を共にしているのだから、私の知らない一面を知っていても不思議ではない。

「……………どうして笑ってるの？」

「いえ、なんでもありません」

「隠さなくて良いじゃない♪」

「その……………少し、安心しました」

「安心? どうして?」

「正直、自暴自棄になってしまっているのではないかと勝手ながら心配していました」
その一言で私が何を言いたかったのか白鷺さんは理解する。
杏井くんにつけられた額の傷にそつと手を当てる。

「もう気にしていないもの。お医者からももう治すことはできないって言われたから」
「しかし……………」

「心配してくれてありがとう。その気持ちだけでも嬉しいわ」

白鷺さんはそう答え小さく笑みを浮かべる。

「すみません。私はこれで」

「あらっ、もう帰っちゃうの?」

「この後警察の事情聴取を受ける予定なので」

「そう。気をつけてね」

「ええ。また来させていただきます」

私は頭を下げ病室を後にする。

完全にその姿が見えなくなるまでいつも通りの表情を保ち、扉が閉まり切ったのを確認し、ふうつと息を吐く。

そして、そそくさと廊下を早歩きする。

白鷺さんは良くも悪くも笑顔が素敵な女性だ。

誰に対しても（月島くんに対しては例外）人当たりが良いから腹の底まではわからなけれど、本心でないことはわかる。

気にしていない、と言う言葉も裏を返せばそうじゃないことになる。

顔に傷を負ってしまったのだから、女優でアイドルである彼女がなんともないわけがない。

わかってる。わかっているけれど——私ができることなんて何も無い。もしかしたら、彼ならば………そんな淡い期待を寄せてしまう。

全て他人任せ。

そんな無力な自分が情けなくてたまらない。

誰にもみられることなく悔し涙を流し、私は警察署へと向かう。



紗夜ちゃんが部屋を出て、私はベッドに背を預ける。

「はあ……………」

誰もいない病室で一人ため息をつく。

どこか気を遣われているような、そんな話し方をされてすごく息苦しく感じる。

「気にしてない、ね……………」

再び、額の傷にそつと手を当てる。

上手く隠すこともできるだろうけど、水に濡れるなどのアクシデントがあれば簡単に見つかってしまう。

コレがある限り私はテレビに映ることはできない。

女優として、アイドルとして、そして芸能人として、白鷺千聖はもう終わったのだ。

「これからどうしようかしら」

このまま表舞台から姿を消して普通の学生生活を謳歌するのも良い。

花音や紗夜ちゃん、そして月島と同じ大学に通うのも楽しそうだ。

そう、自分の気持ちを取り繕う。

——もう、叶わぬ夢なのに。

実現不可能な理想を抱くことなんてしたくないのに、私の頭の中はそれらの生活を否定する。

私は、女優 ” 白鷺千聖 ” 。

子供の頃からテレビにでて実績を積み上げてきた芸能人。

根本にあるのは昔からそう、これからもテレビで活躍し続けるのが私の願い。

私は徹底した現実主義者^{リアリスト}。

自分の不利益になると思ったことは徹底してその道を避けてきた自負がある。

けれど………こんなにも簡単に今までの生活が奪われるなんて、とても耐えられない。
い。

「どうしたら、いいの………」

自らの腕を抱え、涙をこぼす。

人知れず、誰にも気づかれることもなく、私はただ独りで泣き叫び続けた。

………

………

一頻り泣いた後鏡に映る自分の顔を見る。

「これは………酷いわね」

目元が赤く腫れ、髪も顔もぐしゃぐしゃ。

とても芸能人とは思えない姿だ。

もう、自分が芸能人でいられなくなるとどうでも良く思えるけど、白鷺千聖がそれを拒む。

テーブルに置いてあつた化粧ポーチを手に取り、恥ずかしくない程度に顔を作り部屋を出る。

今日は平日ということもあり、人とあまりすれ違うこともなく月島くんの病室へとたどり着く。

変装、とまでは言わないけれどマスクもしてるし私が入院していると知れ渡ることはないだろう。

扉をノックしようとしたその時、病室で話し声が聞こえたからその手を寸前で止める。

「奏くん……………」

その声はすぐにもわかった。花音だ。

「まだ、夢の中にいるのかな」

入ることも可能だけれど、今行くのは違う気がして私は扉の前で花音の会話を聞くことにした。

「私ね、ずっと考えてたんだ。奏くんのことを諦めようって、ずっと……………」
「……………えっ?」

花音のその一言で心臓がドクンッ、とはねる。

「でもやっぱり、できないよ……………。だって、奏くんは誰よりもカッコいいし、優しいし、頼りになるし。私なんかとはとてもつり合わないと思うけど、この気持ちだけはどうしても抑えられないの」

(願い、それ以上は……………言わないで——)

心で懇願する私だったけれど、その言葉は二人に届くことはない。

「私、やっぱり奏くんが好き。千聖ちゃんよりも、その気持ちが強いって、思う」
(花音……………)

臆病だけど女の子らしい、私の大切な友達の告白。

それも、同じ想いを寄せる相手の男の子に。

突如、胸が締め付けられるような痛みに襲われる。

「もちろん、奏くんの気持ちが一番だからね。千聖ちゃんとお似合いなのはわかってるし、二人が一緒にいるのが一番だとも思うけど……………その、私の気持ちも、知ってて欲しかったの」

「……………」

「それじゃあ、私は千聖ちゃんのところにも行くね。また起きたら、いっぱいお話しようね♪」

私は一目散に駆け出し、病室ではなく、トイレへと向かう。

今は、とても花音に合わせる顔がない。

それにどこか体調も良くないようだ。

トイレへと駆け込み、戻す。

「はあ……………はあ……………」

必死になって胸を抑えるがその痛みが収まることは決してない。
花音の言葉を思い出すたびに、気分が悪くなり、戻ってしまう。
まるで呪いの言葉のようだ。

「どうして、こんなことに……………」

涙ながらにそう吐露する。

全ては、月島くんが悪いんだ。

彼が私に関わったから、花音に優しくしたから、そう、全ては彼が。
彼が全て悪いんだ。

「……………ふふふふ」

誰にも聞こえない声で小さく笑う。

「ホントっ。私って最低、ね」

自分の醜さに思わず笑ってしまう。

これが演技でもなんでもない、素の私。

卑屈で下劣で醜い女。

ドラマだと一番嫌われる役だ。

けれどそれが私にはお似合いだと思う。

「もう、これで決まりね」

自らと向き合いそして決心する。

ポケットにしまつてあつた携帯を出し、ある人物に電話をかける。

「すみません。社長。お話があります」

なんだ？と問いかける社長に提案を持ちかける。

「どんなことでもします。だから私———女優、そしてアイドルの白鷺千聖にチャンスをください」

第45輪 言わぬが花

翌日、学校の授業を受けすぐさま事務所へと向かう。

そういえば、問題を起こした杏井くんは退学を余儀なくとされ、彼の席はなくなった。今は警察に身柄を拘束されているよう。

願わくば一生そのままでもらいたいものね。

社長室の前まで来て、ノックし部屋へ入る。

「失礼します」

深々と頭を下げる私に社長に招かれるがまま、その対面に腰を下ろす。

「わざわざすまないね」

「いいえ。こちらこそお時間をいただきありがとうございます」

「ケガの方はもう大丈夫なのかい？」

「ええ。もう痛むこともなくなりました」

額に深く刻まれた傷。

それは芸能人、白鷺千聖を終わらせる象徴になってしまったけれど今はもう気にして
いない。

仕事の幅は激減するだろうけれど私にしかできないことはきつとある。

その可能性を見出すために今日私は事務所を訪れたのだ。

「それで、昨日の件なんだが」

早速と言わんばかりに話を始める社長。

その言葉と共に社長室に一人の中年の男が入室する。

「失礼します」

男は頭を下げこちらに近づく。

「紹介しよう。プロデューサーの田辺くんだ」

「初めまして。田辺です」

「白鷺千聖です。こちらこそよろしくお願いします」

笑顔で手を差し出す田辺に対して営業スマイルを返す。

小太りというよりは肥満に近い体型のこの男の噂はよく耳にしていた。

なかなか芽の出ない若手アイドルたちを積極的に起用して一躍人気グループに押し上げた素晴らしい手腕を持つ一方、悪い噂も絶えない人物だったからだ。

数々の功績からテレビ局においてかなりの地位を持っているのだが、好印象を持つにはやはり何かが決定的に欠けている。

初めて顔を合わせて感じたことが一つ。

絶対に関わりたくない人種だということだった。

「白鷺千聖ちゃん、だったね」

「はっ」

「子役時代から活躍を続け、今はPastel*Paletteのベーシストとしても活動中、か……なるほど。素晴らしい経歴の持ち主だ」

「それほどでもないのですが」

「それに、高校生らしからぬ大人「アダルト」な雰囲気も持ち合わせている。いかようにも活かせそうな逸材だ！」

「それは……………光栄です」

彼は私の内面を全く知らない。

何か、全てを理解しているかのような発言の数々に嫌気がさす。

「額に傷があるということだけど、本当にもう治療のしようがないのかな？」

「お医者様からはそう伝えられています」

「誤魔化すと言ったら言葉が悪くなりますが、隠すことも可能ではありません」

「なるほど……………そうなれば水に濡れる仕事は基本NG。外に出ることも極力避けたい方がいいというわけか」

「どのような形でも構いません。テレビに出続けられるなら、なんでも」

「わかりました。他ならぬ社長の頼みです。それに、僕からしても彼女のような逸材を埋もれさせてしまうのは避けたい。手は尽くしてみましよう」

「よろしくお願ひします」

私は社長に続き頭を下げる。

男は仕事がある、と告げそのま部屋を後にした。

無言な部屋に私と社長だけが残る。

「白鷺」

「はい」

「キミには、申し訳ないと思っっている」

「それは私のセリフです。ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ございません」

「活動休止するまでの間は今受けた仕事を降りるわけにはいかない。必ずやり遂げるんだ」

「わかりました」

私は再び頭を下げ社長室を出る。

正直、今の私の心は荒んでいる。

将来の絶望感と、あのような男にしか頼ることのできない自分への怒り。

様々な感情が入り乱れ、一人で背負うにはあまりにも重い。

そんな時に頼れるのはいつも――。

そう考えたところで私の思考は立ち止まる。

今の彼に頼れることはどうしてもできない。

花音のこともあるけれど、何より彼に頼りっぱなしなのはこれからの人生において必ず苦勞することになるだろう。

けれど、このままにしておくわけにもいかない。

今の私が頼れる人物は一人だけね。

.....

.....

私の所属する事務所から少し離れた場所にある喫茶店。

ここは最近できた新しいお店で、街外れにあるからそこまで客の出入りが多くなく、落ち着いて話すにはもってこいの場所だ。

「すみません。お待たせしました」

「いいえ。来てくれてありがとう」

私呼び出した相手は紗夜ちゃん。

今の私にとつてとても頼りになる存在だ。

「珍しいですね。白鷺さんからお誘いされるのは」

「ふふふつ。少し、相談したいことがあつて」

私の対面に腰を下ろす紗夜ちゃんに私の胸の内を話す。

「紗夜ちゃんは、恋つてしたことあるのかしら？」

「な、なんなんですか!?!突然っ!?!」

「お願い。答えて」

動揺する紗夜ちゃんだったけれど、私の真剣な顔つきを見て冷静を取り戻し、考えるそぶりを見せ答える。

「すみません。これまで、誰かを好きになるといった経験はないですね」

「そう」

てつきり紗夜ちゃんも彼のことを、なんで想像をしていたけれど違ったみたい。もしそうだとしたら違う悩みを相談していたけれど、正直助かった。

「なら言い方を変えるわね。もし、自分の好きな男の子が自分の親友が同じ思いを寄せる相手だとしたら紗夜ちゃんはどうする？」

「それってまさか……………」

「どうやらその一言で察したようだ。」

「私は否定も肯定もしない。」

「それは……………難しい質問ですね」

「ごめんなさい。どうしたらいいかわからなくなっちゃってしまって」

「ですが、少なからず言えることはあります。白鷺さんが遠慮する必要はないということですよ」

「ほんと?」

「ええ」

「どうしてそう言い切れるの？」

「白鷺さんと松……もう一人の方が同じ殿方を好きでいたとしても最終的に決めるのは相手の方。ここで引いてしまつては白鷺さんのためになりません」

「でも、私の大切な友達とはこれからどう接すればいいの？」

「いつも通りで構わないと思いますよ。偶然、同じ人に好意を寄せたからといって関係が切れるほど二人の仲は易いものではないことは重々理解していますから」

「それでも………やっぱり不安だわ」

紗夜ちゃんには申し訳ないけれど、やはりその気持ちだけは拭えない。

たとえ花音がいい子だとしても私たちの関係に亀裂が入るのは事実。

どちらかが笑えばどちらかが必ず泣く。

この恋愛において双方がハッピーエンドを迎えることは決してないのだ。

「安心してください」

紗夜ちゃんは優しい声でそう告げる。

「私はこの2年間ずっとそばで見してきました。あなた方がこのような関係になつてしまつたのは驚きましたが、たとえ二人だけが幸せになつたとしてもその二人を応援できる。そんな人たちだと私は思っています」

「私がそんな優しい人間に見えるの？」

「ええ。あなたほど友達思いの人は他にいません」

「買い被りすぎよ」

「それに、白鷺さんがうまくいこうともいかなくとも、いくらでも話を聞かせてください。私にできることはそれぐらいしかありませんから」

なんとも心強い。

彼女なら私の本当の姿を見ても決して引かずいつも通り接してくれるだろう。

「ありがとう。こう見えて私、結構腹黒いのよ？」

「ふふっ。私だつて負けてません」

二人して面白おかしく笑つた。

こうして悩みを誰かに話すのはいつぶりだろう。

今の私はいくつもの枷をはめているような状態なのだが、その中でも特に気にしていた問題が解決できて気分が少し晴れやかになった。

残る大きな問題は一つ。

あのプロデューサーのことだけれど、コレばかりはもうどうしようもないと諦めている。

社長からメールが届きその内容を見ると、明日、再び面談してほしいとのことだった。もう既に私を活かすという案が浮かび上がったのかはたまた別の理由かわからないけれど、頼れるのは私だけ。

どうか清らかな身のままでもいいものね。



後日私は指定された場所へと向かう。

そこは呼び出したプロデューサーの管轄にあるビルのとある個室。

エレベーターで上に上がり、薄暗い渡り廊下を歩いてきたけれど人の影も気配すらない。

想像していたことが脳裏をよぎる。

「失礼します」

扉をノックし入室すると、男はバスローブ姿で私を出迎えた。

「ようこそ。待っていたよ」

「お待ちせして申し訳ございません」

気にするな、と言わんばかりに歓迎する男。

私に近づき背中に手を回して座席へと誘う。

「呼び出すような形になってしまつてすまないね」

「いえ、昨日はプロデューサーの方からいらしてくれましたですから当然です」

「はははっ。キミは本当にいい子だ」

「お褒めに預かり光栄です」

男の一連の言動に吐き気を覚える。

笑って対応する表の顔とは裏腹に裏では何を考えてるのか想像もつかない。どこかドス黒い闇を感じるのだ。

「それで早速なんだけど」

プロデューサーはそう切り出すと、棚の引き出しの中から何かを取り出し私と男を隔てるテーブルの上に置いた。

「まずはそれを着てみて欲しいんだけど」

そう渡されたのは、布面積がほとんどない際どすぎる水着。

これがどんな意味を持つのか。

理解してはいるが、あくまで知らないふりをする。

「それはなぜでしょう?」

「千聖ちゃん。キミはスタイルがいい。だから、こういった仕事も受ける必要がある

と思うんだ」

「グラビア、ということでしょうか」

「言うなればそうだ」

含みのある言い方をするプロデューサー。

グラビア撮影はまだ高校生ということもあつて受けたことはなかったが、今回は別の目的があるということは男の表情を見て分かった。

「ご存知かと思いますが、私はまだ未成年です。こういった仕事は……」

あくまで冷静に私らしく断りを入れる。

「キミのとこの社長から既に了承は得ている。白鷺千聖を活かすためなのであればどのような仕事もお受けいたします、と」

そんなこと、社長から聞かされていない。

それが嘘の可能性が大いにあるけれど、事実ということだつてある。

私はゆつくりと立ち上がりその水着を手に洗面所へと向かい着替えようとする。だが、そこで男は私の前に立ち行手を阻んだ。

「ダメダメ。ここで着替えなくちゃ」

「……………それも仕事の範疇だど？」

「その通りだ」

「一度、社長に——」

カバンから携帯を取り出そうとしたその時だった。

「そうするのは勝手だけどボクは気分屋でね。あくまでこれはそちらから依頼してきたことなんだから、僕にとってはどうでもいいことなんだ」

「っ！そんな言い方……………!!」

「ほらっ、早くしてくれないと仕事無くなっちゃうよ？」

女性を、それも未成年を相手に脅すなんて最低極まりない行為だ。

だがしかし向こうが立場としては遥かに上。

野生動物における肉食と草食ほどの違いがあるのは明らかである。

「……………」

渋々といった表情で羽織っていた薄ピンクのカーデイガンを脱ぎハンガーにかける。その様子を見てプロデューサーは嬉しそうに気持ちの悪い笑みを浮かべる。

「そうそう。その調子♪」

そのまま続ける、と言わんばかりに楽しそうな様子のプロデューサー。次にカーデイガンの下に来ていた黄色のシャツに指をかける。

「……………っ!!」

少し躊躇い、ゆつくりとシャツの裾を上げた。

「ふふふっ。可愛らしい下着だね」

男の視界には半裸姿の私が映っている。

手で下着を覆い隠したい気持ちはあったけれどまた何か言われることは目に見えていた。

プルプルと震えながら手を後ろに組み私の恥ずかしい姿を晒す。

「そのまま下もいってみようか」

人差し指をくいくいと下へ曲げ催促する男の指示に従い、ブルーのスカートのリボンを解く。

手を離すと重力に逆らわぬままスルスルと床に落ちたスカートだが、私をさらなる醜態を晒すこととなる。

上下色の揃えた下着。

誰かに見せるために買ったわけではないけれど、かなりお気に入りだったのをこんな男に見られて屈辱的だ。

「黄色、好きなんだね」

「ええ。まあ……………」

「髪色ともあつてるし似合つてるよ♪」

「ありがとうございます」

ここまで褒められて嫌悪感に満ち溢れるのは初めての経験だ。
法で許されるのであればこの男を今ここで平手打ちを喰らわしたいぐらいだ。

「じゃあ下着は僕が外してあげよう」

「……………お願い、します」

手招きするプロデューサーに背中を向け、ブラのホックに手をかけ、慣れた手つきで外される。

ブラはテーブルに雑に置かれ、その汚らしい手は私の胸を下から撫でるように触れる。

「小柄なのに結構大きいよね」

「遺伝、だからでしょうか……………」

「この水着もよく似合いそうだな♪」

男はそのままショーツにも手をかける。

スツと足まで下ろされ片足ずつあげ外されると、私は生まれたままの姿を見られることとなった。

男は私の腰を掴み正面を向かせる。

「へえ。下の毛はないんだ」

「……………体毛は薄い方なので」

「僕の知ってる子なんかは脱毛してるらしいからね。千聖ちゃんはラッキーだ」

私の裸をまじまじと見るプロデューサー。

こんなもの屈辱以外の何者でもない。

握る拳に力が入る。

「それじゃあ着せてあげるね」

男はテーブルに置いてあつた水着を私に着せると、カメラを向けそのまま写真を撮る。

そのポーズというのもグラビアというよりは裏ビデオで用いられそうなものばかりで男の趣味が窺えた。

写真に満足したのか男は再度棚から何かを取り出しテーブルに置いた。

それが穴の空いた下着と二つ小瓶という怪しさの役満セットだ

「これは？」

「次の仕事だ。コレを着て僕を奉仕するんだ」

「つまり、ここであなたに犯されろと」

「言い方が悪いなあ。コレはあくまで ” 仕事 ” だ。受けるか受けないかはキミ次第なんだよ？」

あくまで私の考え次第。

男は選択肢を渡しているようで鼻から答えなんて一つしかない。

私は自らの意思で水着を脱ぎ、渡された黄色の下着をつけた。

ブラは胸の中心がぼっかりと穴が開き、ショーツも割れ目に沿って布地がなく、変態

御用達とも言える形成だった。

「うん。よく似合ってる」

そう褒める男は、小瓶を一つ開けそれを飲み干しもう一つを私に手渡す。

瓶の蓋を開けると無色の液体はムツと独特の香りを放つが私は息をすることなくそれを一気に飲みの干した。

「……………っ!？」

液体が胃に到達したその時、全身が痺れるような感覚に陥される。身体に力が入らなくなり床にへたりつく。

「即効性の媚薬だ。よく効くだろ？」

気持ちの悪い笑みを浮かべるプロデューサーを下から睨む。息遣いが徐々に荒くなり、身体はどんどんと火照っていく。

今までに感じたことのない感覚に私は抗うことができなかつた。

「それじゃあそろそろ始めようかな」

男は立ち上がりバスローブを脱ぎ捨てた。

「それじゃあ千聖ちゃん。仕事だ。僕を奉仕してくれ」

「……………はい」

こんなの本当の私じゃない。

薄れゆく意識の中、男の足元まで床を這って近寄り膝をつきながら上目遣いで男を見る。

頬は紅潮し、快楽を求め男に懇願するように男の身体に触れる。

もうやめて……………!!

こんなこと、私は望んでない——!!

コンコンッ。

人の気配のなかった扉の向こうから扉がノックされる。
私たちはそこへ視線を向けた。

「なんだね」

男はそう問いかけるが向こう側から返事は返ってこない。
しかし、再び扉をノックされ僅かながら異常性を感じた。

「仕方ない。少し待っていてくれ」

男は扉の前へと向かうとその奥にいるはずの人物に声をかける。

「今は大事な仕事だ。用があるなら手短かに頼む」

そう告げた男だったが扉越しにいる人物はスウツと息を吸いこう切り出した。

「ならこちらも手短かに話そう。うちの女優を返してもらおうぜ」
「はあ？ 一体何を——」

その瞬間、扉は派手に蹴破られ男と共に後方へ吹き飛ばされた。

唐突に起きた出来事に頭が整理できなかつたが、この光景、何度も見たことある。

遅れてやってくるヒーローのようにいつもピンチになったら駆けつけてくれる、私の想い人。

「月島、くん……………」

「待たせたな。白鷺」

ニツと白い歯をみせ笑う彼。

私は嬉しさとこれまでの恐怖から自然と涙がこぼれ落ちた。

「これでも着て少し待ってろ」

月島くんは自分の羽織っていたライダーズジャケットを投げて渡し、それを着た。

(……………月島くんの、匂い)

あの小瓶の影響か、いつもよりそれを強く感じる事ができた。

肝心の彼はというと、むくりと血を流しながら起き上がるプロデューサーと対峙していた。

「オレの大事な女に随分好き勝手してくれたらしいな」

「キミはいつたい誰だ？何が目的だ!？」

「決まってるだろ。白鷺千聖の奪還。そして————テメエを地獄に叩き墮とすことだよ」

親指を下に向け、刺すように鋭い眼光はそれだけで相手を殺してしまいそうなほどの迫力がある。

それはプロデューサーも感じ取ったようだ。

「……………わかった。彼女にしたことは謝ろう。だが、僕は今の立場から下されるわ

けにはいけない。ここはビジネスといこうじゃないか」

「あつ?」

「僕は裏の業界にも精通している。身体の関係を求めることだって可能だ。どうだ? キミも男なら一度は夢見たことあるんじゃないか? 若くて可愛い女の子をハーレムすることだって可能なんだよ」

「ハーレムか。それは結構なことだ」

「そうだろう!?!ならっ……………」

「興味ねエよ」

「……………えっ?」

「生憎オレは女に一切興味がねエ。そんな低俗なことでオレを支配できると思うな。極悪人」

「なら、キミは何が望みなんだ」

「白鷺千聖を真つ当な方法でテレビに出られるようにすること。そしてこれまでの詫びとしてテメエの解雇及び慰謝料の請求。まずはこんなところか」

「わ、わかった。全てこちらで対処しよう。だから、命だけは勘弁してくれ!」

男はその場で土下座する。

私にだけ見せた威勢はどこへ行ったのやら。

強者の威圧に這いつくばり、醜い姿を晒すその様は実に醜いものだった。

「安心しろ。殺しはしねエよ」

「よ、よかった！なら………」

顔を上げた男に一瞬で距離を詰めたと思いきや、月島くんは怒りのままに脚を振り抜き、男はまるでスーパーボールのように身体を壁や天井に身体を打ち付け、ピクリとも動かなくなつた。

「悪人が悪人の言葉を信用するんじゃないやねエよ。テメエは今ここで死ぬんだ。人としてな」

月島くんは男の髪を掴み上げる。

もう顔は原型がわからないほど陥没していて本当に生きているのかすら危うい状態だ。

これまでの破壊音を聞きつけ数人の警備員が部屋に押し寄せてきた。

「うっ、動くな！」

事の異常性を察し警備員は銃を突きつける。

しかし、月島くんは全く動揺するそぶりを見せない。

「デメエらが動くな。このおつさんを早く助けたかつたら救急車を呼べ。あと、その女に着せる服も用意するんだ。わかつたらとつとと行け」

警備員たちはそそくさと各自散り、月島くんは男をその場に捨て私の方へ歩み寄る。

「大丈夫か？」

優しくそう投げかけられた言葉に再び涙が溢れる。

「とても、怖かったわ……………」

「だろうな。もう安心しろ。時期に救急車が——」

淡々と話す月島くんの体の後ろに手を回しぎゅっと抱きしめる。

彼から渡されたライダーズジャケットはハラリとその場に落ち、私は男から手渡された下着姿を月島くんの前に見せつける。

「バカッ。早く服着ろ」

「ねえ。月島くん」

先程の興奮が盛り返し、ゆっくりと彼を床に押し倒す。

「身体がね、すごく、あついの……………一度でいいからお願い。私を——」

彼の唇との距離がおよそ10センチに達したところで首に強い衝撃が加わり、そこで意識を失った。

全く見えなかつたけれどおそらくは彼の手刀のせいだろう。

か弱い乙女にこんな乱暴するなんて、ホント最低な人。

でも、そんなところもどこか愛おしい。

私は、月島くんが大好きなんだ。

第46輪 事件と喧嘩は花咲川の花

白鷺を床に寝かせたまま、警備員が来る前にオレはビルを後にする。

このまま止まったところで警察に身柄を拘束されるのは目に見えてる。

この行動が最適解だろう。

そして奴がここにいる情報をくれた人物に廊下を駆けながら電話をかけた。

「アンタの情報通りだった。白鷺は救急搬送される予定だ」

『そうか』

まるで全てわかっていたかのように冷静沈着のクソ親父。

つい数十分前までは病院のベッドの上だったのだが、目覚めた直後携帯に届いていたメッセージが届いていてそれがこの場所への位置情報と白鷺の今日の仕事についてだった。

その内容を見てすぐさま親父を問いただし、現地へと向かったというわけだ。

「アンタにも話がある。間違っても逃げるんじゃないぞ」

『わかつている。私は逃げも隠れもせず社長室でオマエを待つ』

そう話したところで電話が切れる。

幸いなことに、このビルから事務所までの距離はそう遠くなく入り口を出て走れば3分ほどの位置にありすぐさま親父の元へ向かう事ができた。

社長室の扉を勢いよく蹴破ると、親父は長椅子の後ろにある窓ガラスからワイン片手に外を見ていた。

「随分と余裕だな」

「今更ジタバタなんてしない」

顔は一切こちらに向けず話を続ける。

「アンタ、今日の仕事内容知ってたのか？」

「だいたいはな」

「正気か？もしオレが間に合わなかったら白鷺は取り返しのつかない傷を負わされて

たかもしれないんだぞ!？」

ズカズカと近寄り、親父の肩を掴む。

それでもなお顔をこちらに向けようとせず、窓ガラスには無表情の親父の姿が映る。

「正義のヒーロー気取りか。そんな事白鷺は百も承知で受諾している」

「そんなはずねエよ。アイツの性格はよく知ってる。そんな手を使ってまで芸能界にしがみつこうとは考えないはずだ」

「よく知ってるだど？誰が、どの口で言ってるんだ」

「デメエ……っ!!」

ようやく振り向いた親父の瞳には一切光が灯っておらず、身体のコまで凍らされるような感覚に陥る。

思わず手を離し、数メートル後方に飛び距離を取る。

「あの子はデビュー当時から、誰よりも近くで見ってきた」

再度顔を窓の外に向け淡々と語り始める。

「言うなればもう人の私の子供。いや、それ以上の存在といっても過言ではない」

「そんな女を、アンタは潰そうとしたんだ。矛盾してるぞ」

「……………私は本気で悩んだ。芸能界を引退させて普通の幸せを与えるべきなのかと。だが、白鷺はそれを拒んだ。私としては芸能人として彼女のプライドに誇りを感じると共に、大きな不安を覚えた」

「額の傷、か」

「その通り。オマエは『取り返しをつかない傷がつく』と言ったな。白鷺はそれを既に背負わされている」

「……………!!」

「不可能を可能に。医者も匙を投げるほどの傷を隠してテレビに出続けられるほど芸能界は甘くない。タレントの入れ替えが激しいまさに弱肉強食の世界だ。あの子の傷は、そのスタートラインに立たせてもらえないほどのハンディキャップと言える」

「そうだとしても、やり方つてのがあるだろ。あそこまでする必要があったのか?」

クソ親父は沈黙する。

それは自分が間違つたことをしたと認めるような行為だと仮定し、オレは主張を続けた。

「アンタも考えてたんだろう。だが、アイツの気持ち、清廉潔白な女優、白鷺千聖を真つ当な方法で活かしてやろうと、マジで考えた結果がコレか!?なあ、答えろよ!!」

すると親父は持っていたワイングラスの縁を五指でグツと圧を加え粉々に砕く。

パリんとガラスの割れる音が響き中に残っていたワインは重力に逆らうことなく床にこぼれおちる。

静かだが、その背中には確かな怒りのオーラを感じ取る事ができた。

「他に、どんな手段があつたと思う」

そう問いかける親父。

「わかんねエよ。だが、これだけは言えるぜ。アンタは間違つてる」

「言ってくれるな……………」

「それがオレだからな」

親父はようやくオレと向き合い、ゆっくりと歩み寄る。

手を伸ばせば届く距離まで近づくと、手をポケットに突っ込んだままこう告げた。

「私を殴れ」

「はあ？」

「白鷺には本当に悪いことをした。たとえ土下座をしても許されないようなことを。だが、彼女は私に手を挙げることはできない。心が優しい子だからな」

「おいおい。オレの心が荒んでるとでも言いたそうだな」

「違うのか？」

「間違ってるねえよ。クソが。だがアンタは殴られて解決できると思ってるのか？だとすればそれは思い上がりだぜ？」

「そんなことは考えていない。コレは私が私に課した罰だ。千聖だけではない、奏だって私に腹の立つ事がいくつもあつただろう。この十数年放つたらかしにしていたことも全てその拳に込め私を殴るがいい。もちろん、慰謝料なんて巻き上げる気はない。契約の違約金だつてもう私には必要ない」

「……………覚悟はいいようだな」

「ああ」

今の親父は自暴自棄だ。

あくまで表情は冷静そのものだが、頭の中はぐちやぐちやなんだろう。

オレに殴られたらスツキリするとも考えてるのだろうか。

まあ、やれと言ってきたのは向こうだ。

オレに遠慮する必要はどこにもない。

「歯ア食い縛れよ!!」

拳を振り振り親父の顔面目掛けて振り切ろうとする。

——だが、眼前でピタリと拳が止まった。

親父は何もしていない。

第三者の介入もない。

オレは、オレ自身で拳を止めたのだ。

あまりの勢いにオレの拳は風圧を生み出し親父の髪を靡き窓ガラスを振動させる。

「どうした」

不思議そうにそう問いかける親父。

オレは拳を引つ込めポケットに突っ込んだ。

「やつぱ、なんか違うわ」

「違う?」

「オレはこれまで色んな人間を殴り蹴り飛ばしてきた。そいつらはなんの考えもなく人に迷惑をかけ、オレの大切な友達^{ダチ}を脅かしてきたからだ。だが、アンタはこれまでの連中とは明らかに違う。言葉にはできねえけど、なんか……………」

相手が実の父親だからではない。

目の前に仁王立ちするこの男は過去、不倫をしておふくろと離婚した最低な野郎なのだから、殴られて当然の男だ。

だが、今日この場で話して、どれだけ白鷺を大切に思っていたのかを知る事ができた。それは紛れもなく白鷺のため。

苦渋の決断だつただろうが、奴が芸能界で生き抜くために思考を巡らせ今回の件にいきついた。

やはり親父は悪人だ。

だが、白鷺からすれば恩人。それは忘れてはならない。

オレが殴るにはあまりに善人すぎるのだ。

「アンタはあの男と同じクソ野郎だ。だが、本気で白鷺を何とかしようとした。相当悩んだんだろ？」

「そうだ」

「だが、白鷺に身も心も全てあの男に捧げようとしたことだけは絶対に許せねえ」

「ああ、それでいい。奏は何一つ間違っちゃいない」

親父の冷え切った表情は微かにほぐれ小さく笑みを浮かべた。

「本当に、オマエがいてくれて助かった。おかげで白鷺が救われた」

「牢屋に入って罪を償え。これまで行った悪行に対して、謝罪の意を示していくんだな」

「警察は呼んだのか？」

「もちろん。もうすぐでくるはずだぜ？」

そう言い切るとともに数人の警察官が社長室へと入り、親父に任意同行するよう話しそれに応じる。

去り際に再び立ち止まり、最後の会話を始める。

「これだけは教えてくれ。彼女は——オマエの母親なまは元気まにしてるか？」

「安心しろ。アンタのことなんてとうの昔に忘れてピンピンしてるよ」

「そうか……オマエも彼女に認められるほどのいい男になったということだな」

「おふくろの男を見る目は当てにならないから、その言葉はどうかと思うぜ？」

「違うない」

フツと二人して小さく笑う。

「私みたいな犯罪者になるんじゃないぞ」

「バーカ。むしろ取り締まる側になってやるよ」

「ククツ。いい夢だ。これからも精進していくといい」
「ああ。さらばだ、クソ親父」

そのまま親子の会話は終わり警察に連れて行かれる親父の背中を見送った。
決して軽い罪にはならないだろうが、きつと改心するはずだ。

何せオレと血のつながった男だ。

悪いところは悪いとキチンと認め、悔い改める事ができるはずだからな。
警察に続き事務所から離れ外へ出るとそのまま電車に乗り帰路に着いた。



何度も見たことのある光景。

私はまた、病院に搬送され深い眠りについていたようだ。

心なしか身体もダルく感じ、気分がすぐれない。

目覚めたはいいものの私は再び眠りにつこうとするが、扉をノックされ誰かが入室してきたり

「し、失礼しまーす……………」

聞き慣れたその可愛らしい声の主はすぐにわかった。

「おはよう。花音」

「千聖ちゃん！目が覚めたんだね！」

「ええ、先ほど。こんな格好でごめんなさい」

「ううん、気にしないで。そのまま横になって大丈夫だからね」

「ありがとう。そうさせてもらうわ」

ベッドに背中を預け花音はそばに置いてあつた丸椅子に腰を下ろした。

「そうだ。リンゴ、持ってきたんだけどよかつたらどう？」

「今は食欲がないから、また後でいただくわ」

「うん。それじゃあ、テーブルに置いとくね」

花音の優しさにはいつも助けられている。

まるで慈愛の女神のようだ、なんて口には出せないけどそれほど包容力が彼女にはある。

「救急車に運ばれてから正直記憶がないの。よかつたらその後のことを教えてもらってもいいかしら？」

「いいよ。それなら………」

話を切り出しはしたけれど、花音は後方の扉に視線を向けガラツと勢いよく開いた。

「どうやらオレの出番のようだな」

まるでしめしあわせたかのようなタイミングでやってきた月島くん。
私はベッドから起き上がり、彼を迎え入れる。

「いいって。寝とけ寝とけ。オレに構う必要なんてミジンコー匹分もねエよ」
「そう。なら、失礼するわね」

私は再び横になり、布団を被った。

月島くんは花音の横のもう一つの丸椅子に腰を下ろす。

「どうしてあなたがここに……それに、病院着まで……」

「まあ病院着^レについてはおいおい説明するとして、オマエに話さなければならぬことが山のようにあるんだ」

「覚悟はできてるわ。全て話してちょうだい」

「いいだろう。まずは——」

彼の口から訊いたことは信じ難いことばかりの内容だった。

まず、私に毒を盛ったあのプロデューサーは警察に逮捕されこれまでの罪も合わせて二度と刑務所からは出られないだろうということ。

それに連なり、今回の事件を手引きしたとして社長も捕まったこと。

事務所には新しい社長が就任し、今回の件が繰り返さないよう尽力してくれているとのこと。

目覚めた直後、すぐ私の元に駆けつけてくれた月島くんは再び傷口が開いてしまい入院してしまったということ。

冷静になるよう頭の中を整理するけれど、どれも受け入れ難いものばかり。特に社長に關しては御両親が離婚したとは言え彼の實の父親だ。

思うところも必ずあつたはずだ。

なのにどこか吹っ切れたような様子でいる彼に、私は疑問をぶつけてみた。

「どうしてもう切り替えられているの?」

「どうしてつて、仕方ないだろ。変わつちまつたもんをいちいち嘆いてる暇なんてないだろ?」

「ふふつ。実にシンプルね」

「難しく考えることはねエ。受け入れろ、全てな」

強引、ではあるけれど実に合理的だ。

大雑把でも懐の深いところが彼の真骨頂なのだろう。

「やはり、あなたはすごいのね」

「随分抽象的だな」

「千聖ちゃんは褒めてるんだよ?」

「2年もクラスメイトだったらそれぐらいわかる」

「今はそれ以上の関係だと思っただけれど？」

「変な言い方はやめろ！」

照れたような言い方をする月島くんをみて、花音と互いの顔を見合つて笑う。

『○○室の月島奏くん。間も無く検査時間となるので今すぐ病室へ戻つてきてください。5分以内に戻らなければすぐさま親御様に連絡し、強制的な措置を取らせていただきます。繰り返します——』

館内放送、にしては随分と怒気を含んだ言い方だった。

それほど月島くんを危険視しているんだろう。

彼のお母様に知らせると言ったのがいい証拠だ。

彼はあの綺麗な奥様を非常に恐れている。

「つたく、人の名前を盛大に呼びつけやがって」

「戻らなきやダメだよ？」

「当たり前だ。こんなくだらないことでおふくろを呼ばれてたまるかってんだ」

「そうでなくてもちやんと検査は受けなさい」

「もうなんともないっつーの!」

スツと立ち上がる月島くん。

私は花音だけにわかるように小さく手招きし、そつと耳打ちする。

それを訊いた花音は無防備な彼の腹部をちよんと小突くと、バツと飛び跳ねるように距離を取り、突かれた腹部を押しさえ込む。

「な、なにしやがる!」

「やっぱり無理してるんだね」

「う、うるせえ!これは……………」

「はあ、強がつてないで安静にしなさいね」

「テメエにだけは言われたかねエよ!!お・だ・い・じ・に!!」

そう文句を垂れながら彼は部屋を後にした。

まるで嵐が過ぎ去ったように静まり返る病室。

窓の開いた部屋に風が入りカーテンを靡かせる音だけが部屋に残る。

「本当に騒がしい人よね」

「でも、そこが素敵なんだと思うよ」

「ふふっ。まるで月島くんが好きなのかな言い方ね」

「あつ、ちがつ………これは………」

手をブンブンとふり顔を紅潮させながら否定する花音。

可愛らしい反応だ、と何も知らなければそれで流すのだけれど私は訊いてしまった。

花音が、眠りにつく月島くんに告白する姿を。

夏祭りの日に、花音にだけは私が月島くんに告白したことを伝えた。

もちろん、返事がないことも知っている。

それを訊いた上で花音も自らの思いを伝えた。まあ彼は知らないのだろうけれど。

決して怒っているわけではない。

ただ、中学からの親友の抱えている気持ちを知りたくなつたのだ。

「隠さないで。花音」

決して表情には出さずそう切り出す。

「教えてちょうだい、あなたのことを。そして——月島くんへの想いを」

その言葉に花音は黙って俯いてしまった。

彼女も今、頭の中で必死に考えているのだろう。

けど、これだけは約束してほしい。

決して、嘘はつかないと。

「……………ごめんね。千聖ちゃん……………」

涙ながらに、弱々しい声で呟く花音。

「何に対して謝っているの？」

そつと頭を撫で優しい声で問う。

冗談で言つたつもりなのだけれど、真に受け取られていなくてよかつた。あんなドロドロとした世界を花音には見せたくない。

汚れるのは私だけで十分。

花音には、もっと自分を活かせる仕事があるはずだから。

「中学からの付き合いだけれど、今は同じ相手を好きになる者同士………不思議な関係ね」

「うん。本当に」

「いくら花音でも譲らないわよ？」

「わ、私だって！」

「今日から私たちは親友であり好敵手。彼を振り向かせた方の勝ちね」

「私、負けないよ」

「私こそ」

花音。ありがとう。

こんな私と友達でいてくれて。

だけど、私にだって譲れないものがあるの。

情けなんてかけない。
彼を虜にするのはこの私よ。

第47輪 花は折りたし梢は高し

月島くんと出会って私の日常は一変した。

ただ学園のためにと思つて所属した風紀委員。

そこに突如現れた学園の異分子。

一目見た時から私はこう感じていた。

この男子生徒とは根本的に合わない、と。

実際初めはそうだった。

そりが合わずいがみ合つてばかりで、互いの胸ぐらを掴み合ったほど険悪だった。

どれだけ言つても遅刻はするし服装は乱れているし、言葉遣いは治らない。

私とは対極にある彼の存在がただただ鬱陶しくてしかたなかつた。

あまりの酷さにネットで拘束具を購入し、首輪をつけては捕まえたほどだ。

けれど、いつの間にか私は彼を信頼するまでに関係が改善された。

度々事件に巻き込まれては苦難を乗り越え、学園長からの依頼もこなしてきたいわば

戦友。

相棒のような立ち位置にある。

今思えば、こんな忙しない日々は彼なしには過ごせなかつただろう。昔は平穩無事を望んでいたけれど今はもつと刺激的な出来事を求めている自分がいる。

本当に、私は変わった。

もちろんいい方だ。

これも全て彼の――

「邪魔するぜ」

あいも変わらずノックをせず生徒会室に入室する月島くん。

今日は私以外誰もいないからいいものの、女子生徒で大半を占めるこの学園は、彼のような人間に耐性のある人は少ない。

もう少し配慮してあげてほしいところだ。

「邪魔をするならお帰りください」

「あいよ………つて帰るかバーカッ」

「知ってたんですね」

「オマエこそ」

私たちは顔を見合わせ笑う。

彼は私の対面に腰を下ろし、カバンからお菓子を取り出し口に運んだ。

「食うか？」

棒状のお菓子を掴み、腕を伸ばす。

「いただきます」

私は遠慮なくそれを受け取ると、意外だ、と言わんばかりな表情を浮かべる。

「なんですか？」

「いや、またどうせ『校則違反です』だとか言うと思つてよ」

「学校に不必要なものの中にお菓子は含まれません。休み時間や放課後であれば問題

ないはずですよ」

「ククツ。少しは思考が柔軟になったか？」

「おかげさまで」

月島くんは鼻で笑い、お菓子を齧りながら話を切り出す。

「不本意、ではあるがオマエに話がある」

「はなし？」

「思春期を迎えた子供のくだらねえ悩みだ。興味がないなら適当に聞き流せばいい」

不本意という言葉はさておき、月島くんが私に相談事とは珍しい。

生徒会の日報はすでに書き終え他に仕事はないから断る理由もなかった。

「いいでしょう。乗りますよ」

「悪いな。ほらっ、もう一本」

彼にとってこのお菓子が相談を聞いてもらうための交換材料ということなのかしら

?

変なところで律儀。

2年経った今でも彼の考えはわからないことが多い。

「それで、あなたの悩みというのは？」

「……………自慢じゃないが、オレは二人の女に好かれているらしい」

「二人……………白鷺さんと松原さんですか？」

「なんだ知ってたのか」

「白鷺さんには以前相談を持ちかけられたことがあるので」

「松原は」

「女の勘です」

「ハッ、面白い冗談を言うようになったじゃねエか」

「ええ。単なる消去法ですよ。あなたと深い関係にある女子生徒の中で白鷺さん私を除くともう松原さんしかいません」

「いい考察だ。一本取られたぜ」

手放しに賞賛する月島くん。

しかしケラケラと笑う表情の奥に、どこか暗い影があるのを私は見逃さない。

「どちらかを選べば親友である二人の心に傷がつきかねない。そして自分自身もせつかく仲良くなった関係が崩れ去るのを恐れている。それがあなたの悩みといたったところでしょうか」

「要約するとそうだ」

それにしても、女嫌いを自称していた彼からそんな悩みが生まれるなんて。まるで彼のお母さんにでもなった気分になる。

「悩ましい限りですね」

「全くだ。一夫多妻制を認めない日本に生まれこれほど後悔したことはない」

「どちら共と付き合おうとでも？冗談でも最低です」

「失言だ。忘れろ」

私が本当に彼のお母さんなのだとしたら、ピンタは避けられない。

痛い思いをしてでもそんな考えは捨てさせようとするだろう。

……しかし、何故私はここまで親目線になるのだろうか？よくわからない。

「どちらとも気はあるんですね」

「ああ。オレがこの先、一組の男女として付き合うならあの二人以外考えられねエ」

「白鷺さんに松原さん。性格の良い二人だからこそ、あなたはここまで悩んでいるのですね」

「今回ばかりはオレにはどうすることもできん。二人の問題だからな」

最終的には彼が決めればそれでいいのだけれど、その展開まで進展させるのが非常に難しい。

以前白鷺さんと話した時は『いつも通りでいたらいい』と助言したけれど、そんな上部の言葉だけでは月島くんは納得しない。

まるで私のこの2年間の成長度合いを測るためのような難題だ。

あまりに荷が重すぎる。

私が同じような経験をしていればもつと的確なアドバイスができたのに、と心の中で吐露する。

卒業まで今のままの関係で——いや、それだと本人たちのためにならない。

二人の恋愛対象を別に——いや、そんな方法は現実的ではない。

なんとか、何としてでも全員が納得する形で終結できる案はないかと思いを巡らせるが一向にそれが浮かび上がることはなかった。

やはり、恋愛は不平等だ。

ドラマや小説のようなハッピーエンドを迎えることなんて決してない。

この三人の恋愛においてもだ。

「……………やはり、どちらか一人を選ぶべきでしょう」

シンプル。

実にシンプルな考えを彼にぶつける。

真正正銘、これが今の私にできる唯一回答だ。

「まあそうなるだろうな」

「どちらか一方が傷ついても、答えを出すべきです」

「だがいいのか？このままだと二人は今までとは違った関係になるんだぜ？」

「それは覚悟の上です。しかし、二人の関係が険悪になることは絶対ありません」

「何故そう言い切れる」

「言つたはずですよ。性格のいい二人、と。必ず相手の幸せを願い、いつもと何ら変わらず接してくれます」

「……………もし、最悪の状況に陥ればどうすればいい？二人の関係は崩壊し、心身共に深い傷を負わされることも想像できる。それでもオマエは一人に絞れと言うんだな？」

「それでも決めるべきです。例えそんな状況になつたとしても今のままでは進展なんてあり得ない。それに、未来のことは未来の自分に任せればいい。私は、そう考えます」

「そうだ。今、悩んだところで仕方ない。」

「いくら将来のことを考えたところでそれは未来の自分にしかわからないことだから。」

「大切なのは現在いまだ。」

「今の自分の悩みは今の自分にしか解決できない。」

「未来に対して憶測を立てることも大切だ。」

「だが、それはあくまで予想でしかない。そうならないことだつて大いにありうる。今、直面している問題から目を背けてはいけない。」

「何故ならそこに将来抱えるであろう悩みの解決方法があるかもしれないのだから。」

「……………クツ、クククツ」

「く？」

「クハハハハハハハツ!!」

何か吹っ切れたように彼は高らかと笑い声を上げた。

「その通りだ！オレも少しはアイツらを信じてやらなきゃいけないな」

「そうです。そのいきです！」

「ハア、何だか悩んでいた自分がバカらしく思えてきたぜ。ようやくスッキリした気分だ」

「お役に立てましたか？」

「ああ。おかげで助けられた」

月島くんからの素直な感謝。

あまり経験のないことに、頬を紅潮させ視線を逸らす。

「それにしてもオマエも考えるようになったな。人の悩みに『○○だと思う』とか『○
○のはず』だとか、曖昧な言葉を使っちゃいけないエ。余計不安を煽るだけだからな。こ
こは『○○だ』と道を示し、言い切るのが正しい。氷川のその言葉でオレは救われたん
だ」

「そんな、大袈裟です」

「本当に向いてると思うぜ？教師にな」

「そうでしょうか」

「安心しろ。オレが保証する」

「根拠が薄いですね」

「そんなもの必要ねエ。何せオレは未来が見えるからな」

「余計、心配になりました」

「ああ!？」

やはり私たちはこんな間柄なのが似合っている。

彼に恋心を抱いているのではないかと勘違いしていたこともあったけど、やはり違
う。

好きではなく、尊敬。

私が彼に抱いていた気持ちはきつとこれなんだ。



下校を知らせるチャイムが鳴り、私たちは学校を出た。

あれからしばらく話が続き気がつけば下校時間を迎えていたのだ。

急いで鍵を職員室へ返却し、門が閉まるギリギリになってしまった。

空は完全に日が暮れており、夏が完全に過ぎ去り秋も中頃まで迎えた今、夜は冷え込む。

「それでは私はこれで」

家が目の前にある月島くんにもうそう告げ、駅へ向かおうとするも彼は帰ろうとはしなかつた。

「もう少し話そうぜ。どうせ駅まで一人だろ？」

「え、ええ」

「話し相手になるついでにエスコートしてやるよ。相談に乗ってくれた礼だ」
「では。お言葉に甘えて」

やはり変なところで律儀だ。

けれど、ありがたい。

防犯グッズを携えているとはいえ、夜の街はまだ怖い印象がついている。

また誰かに連れ去られでもすれば、もう二度と一人で夜に出歩くことができなくなる
と思うから。

「ちゃんと受験勉強はしていますか？」

「当たり前だ」

「それにしてはちゃんと授業を訊いていないようですが？」

「知ってたのか」

「真面目に授業を受けるクラスメイトの中で一人机に突っ伏してたらわかります」

「仕方ねえだろ。話が長いだけでつまらねえんだから」

「内申点だつてあるんです。先生方からの印象は大事ですよ？」

「要領の悪い授業は受けるだけ無駄だ。必要なところをまとめれば点なんて簡単に取

れる」

「もしかして……………成績いいんですか？」

「心外だな。オレをバカと思ってたのか？」

「はい」

「見境ねえなこの野郎」

「事実そうでしょうか？あなたの成績は学園長から訊きました。お世辞にも良いものは言えなかつたはずですよ」

「犯人は学園長か……………覚えてろ……………」

「もう一度問います。ちゃんと大学に進学できるんですか？」

「心配するな。問題ない」

彼の言葉が全く信用できず、疑惑の目で彼を見る。

「……………んだよ。信じられねえってか」

「はい」

「なら、オレの最近の成績は知ってるか？」

「それは……………」

そう呟くと彼は一つ一つ指を折りながら答える。

「1学期中間総合12位。期末総合10位。2学期中間総合7位。わかったか？ テメエの知ってることがいかに古いかを」

「まさか、そんな……………!?!」

「驚いたか？」

望むような反応を見れて満足したのか、白い歯を見せニツと笑った。

「まさか、カンニングを……………」

「そつちかよおいつ!?!」

「それとも答案を盗んで……………」

「おーおー、今のはケンカの合図と受け取っていいんだな？」

「……………ふふっ」

くだらないけれど彼とのやりとりが面白おかしく感じ思わず笑ってしまう。

「ごめんなさい。決して怒らせるつもりはなかったの」

「嘘つけ！どう考えても今のはおちよくってたよなア!？」

「あなたの反応が面白くて、ついつい」

未だ冷静を保てず、クスクスと笑い続ける。

「こんなところまで成長しなくていいっつーの」

「これも全てあなたのおかげです」

「ケツ！もつと他のことで感謝してほしかったぜ……………」

もちろん、感謝していただきますとも。

今の私があるのも彼のおかげ。

忘れてなどいるはずがありません。

「なあ。氷川」

「なんですか？」

「今でも教師になりたいと思うのか？」

「何ですか、いきなり」

「気になつただけだ。答えたくなければ無視していい」

確かに私は過去に、教師になりたいと彼に宣言した。

それは小さい時から抱いていた漠然とした夢であつて今もそうなりたいかと言われれば少し考えてしまう。

「今はまだ、わかりません」

「なんだ。ガキの頃から『プリ〇〇アになりたい』とでも言つてオレを爆笑させてくれよ」

「バカにしてるんですか!？」

「仕返しだ。ククツ」

真面目に考えて損した。

頬を膨らませ、そつぽをむいていると前方で複数の男子生徒が二人の花咲川の女子生徒に絡んでいる様子が目に映った。

それは明らかに女子生徒が嫌がってるように見える。
他校の男子生徒が相手とはいえ、見過ごせない。

「月島くん」

「あいよっ」

月島くんは服の袖を捲り、二人の男の首に腕を回し集団に割って入る。

「よお。うちの生徒に何のようだ？」

そう切り込む彼を男子生徒たちは嫌悪する。

「お前が誰だよ」

「関係ない奴が首突っ込むな」

「どっか行けよ」

「ハア、酷いこと言う奴らだ。オレの格好がつかなくなるじゃねエか」

「だからそう言っ………っ!!」

月島くんの腕にグツと力が入り、男子生徒たちの首を締め付ける。

それも笑顔でやるのだから側から見れば恐怖でしかない。

パツと手を離すと、ゴホゴホと咳き込み地面に尻をつける男子生徒たちは月島くんを睨む。

「テメエ！何すんだ!!」

「他校の生徒が手えだしていいと思ってるのかよ!？」

「好き勝手言うんじゃねエよ。元はテメエらがうちの生徒を怖がらせたことが始まりだろうがさっさと散れ脈なし共」

「ぶっ、殺す!!」

男子生徒の人が拳を月島くん目掛けて振り切るが、掌で受け止め襟を掴み足をかけ男を宙に浮かせると、背負い投げで地面に叩きつけた。

試合なら余裕で一本。

ドゴっと言う鈍い音が静かな夜の街に響き、投げられた生徒は完全に気を失った。

「し、死んだ!？」

「バーカ。こんなカス、殺す価値もねエよ。ほらっ、とつと逃げねエとコイツの二の舞になるぜ？」

片手をポケットに入れ威圧する月島くん。

これ以上放置することはできないけれど、私が出る必要のないことは男子生徒たちの反応を見て理解した。

「こ、コイツあれだ!」^ア不死身^デの暴君^ド　だっ!! 関西では ” 逆鱗 ”　って呼ばれてる

やばい不良じゃんかよ!!」

「嘘だろ!?! 本当に実在するのか!?!」

男子生徒たちは顔を見合わせて月島くんを見ると、彼は笑顔を浮かべ拳を握ると近くの壁を勢いよく殴りつけ、粉々に砕いた。

……………どうやら彼は生まれる世界線を間違えたようね。

見慣れた光景と思っていたけれど、いつ見ても引いてしまう。

「に、逃げるぞ!!」

地面で横たわる男子生徒を抱え、集団は走り去っていった。月島くんは頭を下げる女子生徒を通り過ぎ、私の元へ歩み寄った。

「ハア〜! スツキリした♪」

やりきった、と言わんばかりに満面の笑みを浮かべる月島くん。

「もうすっかり悪者扱いですね」

「構わねエよ。わかる奴に理解してくればな」

その言葉通り、女子生徒たちは月島くんの元へ駆け寄り感謝の言葉を述べ頭を下げた。

良いことをすれば必ず報われる。

度がすぎるのが悪いところだけど、被害にあった人の思いも込めて二度とそんなことに巻き込まないように力を込める。

まさに、ダークヒーロー。

そのような役柄がよく似合う。

「そういえば、将来の話をしてたんだったか」

「そうでしたね。ちなみに、月島くんは何になりたいんですか？」

私がそう問いかけると彼は即答するようにこう答えた。

「オレは大学を出たら刑事になる。街に蔓延る悪人どもを全員とつ捕まえて、ここを全良の街に変えてやるのが夢だ」

実に壮大。そして清々しい夢だ。

彼なら必ず成し遂げられるだろう。

私はそう確信している。

願わくば、私も相棒として付き添っていけたら——

「……………なんて」

こんな日常が永遠に続くと考えたら、心身ともに持たないに決まってる。彼の手綱は他の人に握ってもらおうことにしよう。

「何言ってるんだ？」

「別に」

今はただ、今しか味わうことのできない毎日を楽しみたい。

第48輪 立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花

私を物語の登場人物で例えるなら、決して物語の根幹に関わることのない脇役だ。

村人A、手下B。色んな役のあるうちの一つにすぎない。

脇役は脇役らしく目立たないようごく普通の学園生活を送っていけばそれでいいと思っていた。

そんな私だけど、生まれて初めて恋をした。

誰よりも強くて、優しく、勇敢な男の子。

キラキラと太陽のように光輝く圧倒的な存在感を放つ彼、月島 奏くん。

そんな彼は脇役である私と親しくしてくれた。

これ以上ない喜びを噛み締め、私はあくまで一人の友達として彼と接するように尽くしてきた。

だけでもう、それはおしまい。

脇役を卒業する時が訪れたのだ。

だけど、長年染みついたネガティブな考えは拭うことができない。

彼のことは心の底から好きだ。とても好きだ。大好きだ。

千聖ちゃんにだって負けたくない！

月島くんとお付き合いをしたい！！

だが、その心の中の願望は所詮ただの望み。

どのように行動すべきか、どうやって月島くんを振り向かせるのか。所詮脇役の私では到底思いつくことはできない難題だった。

「はあ……………どうしよう……………」

誰もいない屋上で独り、小さくまとまるように座る。

こんな時はいつも千聖ちゃんに頼っていたけど今はとてもそんなマネはできない。

好敵手とまで言われたからにはフェアでありたいし、自分独りの力でどうにかしなくちやいけないのはわかってはいるけど……………私じゃどうしようも——

「先客か？」

「ひゃっ！」

ひよいっと梯子を飛び上がり、綺麗に着地する奏くん。
手にはパンの入ったビニール袋をぶら下げている。

「なんだ、松原か」

「ここ、奏くんの場所なのに、ごめんね……………」

「気にするな。横いいか？」

「うん。どうぞ」

奏くんは私の横に腰を下ろしビニール袋からパンを一つ取り出し頬張る。

「食わねエの？」

「え？……………あつ」

時計を見れば針は12時を差している。

そう、今はお昼休みだ。

授業中から今ずっと考え事をしていたから、お昼ご飯を食べることが頭から抜け落ち

てしまっていた。

我ながら、バカだなあと呆れてしまう。

「食欲ねえのか？」

「そんなことないよ！い、いただきます！」

両手を合わせお弁当箱を開き、甘めの卵焼きを端で割り口に運ぶ。

「朝からずーっと気になってたんだけどよ」

月島くんは人差し指を伸ばし、私の眉間に当てがう。

「な、なに!？」

「ずーっと眉間に皺がよってるぜ？」

「ええっ？そうかな？」

「なんか悩んでるのか」

「……………」

「まあ、話したくないなら別にいいけど」

奏くんは指を離し、パンを齧る。

唐突な彼の行動に顔が熱くなり頬を両掌で覆う。

正直、今の顔を彼に見られたくないな。

「私は、脇役なの……………」

「どうした、突然」

「主役たちを輝かせるいわば裏方。そんな私が、恋愛をする資格なんてない……………」

今日は一段と思考がネガティブだ。

顔を下げご飯を食べる手を止めると、奏くんは私の目の前にしやがみ、額を指で弾いた。

「いたっ……………」

パチン、と綺麗な音をたて額はジンジンと痛む。

「バカ野郎。なに弱気になってんだ」

「ば、バカは奏くんだよ！いきなり暴力を振るうなんてひどいっ！」

「勝手にブツブツと自分を蔑む松原を見てられなかったんだよ」

「えっ？」

「一人で抱え込むな。『話したくないなら』なんてもう言わねえ。命令だ、話せ」

真剣な眼差しを向ける奏くん。

言葉にも一切裏がなく真っ直ぐだ。

手をあげたのだからきっと私のためだったんだろう。

「実は……………」

私は内側に秘めていた想いを吐露する。

自分の好きな人に好きな人の話をするのはなんだか不思議な気持ちだったけど、心スツと軽くなるような感じがした。

予例のチャイムが鳴るまで話し、いつもは饒舌な奏くんも口を閉ざし真剣に聞いてく

れた。

お昼ご飯を食べる手も止め私が全てを話し終えた後、しばし考え答えを返す。

「思春期ならではの悩みだな」

「うん……………」

つい恥ずかしくて頬をあかく染める。

「なに照れんだよ」

「だ、だって〜！」

奏くんはまるで気づいていないようだけど、全て彼に対しての私の想いだ。

恥ずかしくないわけがない。

「それにしてもアレだな。オレのことをそこまで好きできてくれるのは、嬉しいものだな」

——どうやら彼は全て知っていたようだ。

奏くんは後頭部をかき照れるように笑う。

私はここから逃げ出したいくなるような、そんな衝動に駆られるもジツと堪える。

どこで聞いたの？

それとも、私の反応で気づいたの？

頭の中はパニックだ。

「知ってたの……………」

「まあな」

「いつ……………」

「修学旅行で泊まった宿の風呂場で鉢合わせた時だ」

「あの、時……………」

私は恥ずかしさのあまり顔を手で覆った。

あの日の記憶が蘇る。

あそこで告白したこともそうだけど、私は奏くん裸を見られていた。

もちろん故意ではなかったのは知っているけど、すぐに立ち去ればいいものを背中を

流すという常軌を逸脱することまでしてしまっている。

今からすれば、なぜ私はあんなことをしてしまったのかわからない。

その時から好きだったとはいえ、助けてくれたお礼をあんな形で返すなんて我ながらどうかしてる。

「奏くん、その……………私の裸、どうでした、か……………？」

「……………何言ってるんだ？」

「え、ええつと……………」

「……クツ、ハハハハッ！やっぱ今日のお前、なんか変！」

「ふええ……………」

彼の言う通り今日は情緒が不安定だ。

いつも以上にネガティブだし、口から出る言葉とフル稼働する思考が全く噛み合わない。
い。

ここで授業の始まりを告げる本鈴のチャイムが鳴り響くが、屋上で未だお昼ご飯を食べきつていない私たちは確実に間に合わない。

そのことに気がつき呆然とすると、彼は残りのパンを飲み込み床に背を預けそつと目

を閉じた。

「このままサボろうぜ。昼からの授業は全部つまらねエ教師の担当だからよ」
「……………いいよ」

これも普段私が言わないこと。

学校の授業は大切だけど、朝からこれまでの授業内容なんて全く頭に入っていない。
今、教室に戻ったところで遅刻なのは間違いないし、どうせまた上の空になるだけだ。
そんなことなら奏くんとこれからの話をする方がずっといい。

私は生まれて初めてサボることを決めた。

「奏くんは、恋、したことありますか」

「ああ。中学のクラスメイトにな」

「どんな、気持ちだったの？」

「そりゃあもうそいつのことで頭がいっぱいになったぜ。どんな些細なことでもその
女と関わりられることができたなら気分が高揚したもんだ」

「ふふ。奏くんらしいね」

「単なる若気の至りだ。実はオレ、中学の前半は陰キヤだったんだぜ？」

「えっ！意外！」

「オマエの言う、脇役中の脇役だ。クラスで目立たない方だったし、今みたいにガタイもできてなかった。人に嫌われるのを恐れていたのも合ったんだがな」

次々と語られる想い人の過去。

それは、まるで私のように……………。

「告白は失敗したが後悔はしてない。今となつてはな」

「どうやって立ち直ったの？」

「部屋で泣き続けた。枕がビツチャビツチャになるまでな」

「……………今でも、その人は好きなの？」

「……………」

その言葉に、スツと暗くなる表情を浮かべた奏くんだけ、すぐさま明るさを取り戻す。

「ついこの間再開したんだがな、あの頃の面影もないぐらい変わり果ててたんだよ。今はもうなんとも思っっちゃいねエ、クソビッチだ。あんな女に惚れた自分が恥ずかしくなつたぜ」

ケラケラと笑いとばす奏くん。

やっぱり、奏くんは誰よりも強いな。

まさに鉄壁。鋼の心身だ。

「オマエ、さつき言ったよな？ 『私に恋愛をする資格はない』 って。そんなもん、あるわけねえだろ」

「わかつてる。わかつてるけど………やっぱり私には無理なの………」

「ったく、オマエってやつは〜！」

奏くんは大きな手で私の頭を掴み、わしやわしやと髪をかき乱す。

「妙なところで肝が座ってるくせに、簡単に怖気付く。松原は誰よりもいい女だぜ？ オレが言うんだ、間違いないエ」

「……………」

まるで私を励ますような言葉。

嬉しい。嬉しいのは確かなんだけど、その言葉だけはどうしても受け入れられない。

「まずオマエは誰よりも人当たりがいい。相手が不良だろうが、人気アイドルだろうが、顔色ひとつ変えず対等に接することができる。とてもじゃないがオレにはできねえ」

「そんなの、普通だよ」

「あとは、人の悪口を言わないことだな。誰しも他人に対して不満を口にするが、松原にはそれがない。尊敬に値するほどだ」

「……………」

「あとは、細かい礼儀ができてるとこだ。『おはよう』『ありがとう』なんて日常にありふれた言葉でも松原はそれを欠かすことはない。さっきだって急いでるくせしてちゃんと手を合わせて『いただきます』って言っただろ？スゲエと思ったよ」

「……………いっぱい、褒めてくれるね」

「当たり前だろ。それだけオマエがオレにとって魅力的に映ってるってことだよ」

それは、私もだよ。

あなたからはいつもたくさんの勇気や希望、笑顔をくれた。
恩返しするには余りある日常、そして経験を。

「嬉しい」

私は私にできる最高の笑顔で答えた。

奏くんも嬉しそうに笑って返してくれた。

「でもねっ奏くん。私って、先に告白した親友の好きな人に告白するような、悪い子なんだよ?」

「告白に早いも遅いもねエよ。オレが欲しけりや惚れさせてみる、なんてな」
「うん。頑張る!」

ごめんね。千聖ちゃん。

やっぱり——奏くんは譲れないや。

相手が親友だとしても、負けたくない。

彼に、誰よりも大切な人として扱ってほしい。

こんな我儘な私を、どうか許して。



私の人生は、彼との出会いによって大きく変えられた。

子役の時からテレビで活躍し続け、将来はアカデミー賞を受賞するような女優になる。

”なりたい”ではなく、”なる”。願望ではなく、決意だ。

子供ながら抱いていた夢だけれど、今はもうそれが不可能な立ち位置にいる。

思えば高校生になってからの3年間は辛いことが多かったように思う。

学校では先生に嫉妬され、クラスメイトからいじめを受け、私に逆恨みする転校生がやってきたりもした。

仕事においては、SNSでの誹謗中傷に耐え、迷惑客に頭を悩まし、最近では不本意ながら闇の力をも借りて芸能界に居続けようともした。

思い描いていた私の人生設計とは大きく異なることばかり。

それも全て、月島奏くんと出会ってしまったことから始まったのだ。

はじめは心の底から嫌いだっただ。

先のことなんてまるで考えず、人当たりも最悪で、現在「いま」をギリギリといった様子でヘラヘラと過ごす彼のことが、理解できなかつたのだ。

彼を揶揄いバカにし続けたのは、私にこんな人間になつてはいけないという教訓に近い。

私は芸能人。こんな底辺な人物と同じになつてはダメ。

そう、信じてやまなかつた。

転機が訪れたのはあまりに突然の出来事だつた。

昨年の夏でのコラボカフェのことだ。

私の親友、花音が迷惑客に絡まれていたところを彼は私の気持ちを代弁するかのよう
に男に制裁を加えてくれた。

そこからは実に早かつた。

乱雑で、爽快で、スリリングな日常は私に今まで感じさせることのなかつた経験を与えてくれ、自ずと月島奏という男の子に惹かれることになる。

彼が私の専属マネージャーになった時はとても胸が躍り、興奮する気持ちを抑えるので精一杯だったことをよく覚えている。

海辺で告白したことだつて後悔はない。

彼に対する想いは誰にも負けない。

月島くんの彼女になるのは、この私よ。

キーン、コーン、カーン、コーン。

授業の終わり、もとい全ての授業の終わりを告げる鐘の音が鳴る。

お昼休み以降、花音と月島くんは帰ってくることはなかった。

花音はともかく、彼は確実にサボりだろう。

紗夜ちゃんもカンカンと言った様子だった。

終礼を終えどこかしらでサボる彼に電話をかける。

『……………あいあい』

いつものふざけた口調で電話を出す。

「今どこにいるの？」

『屋上。松原と話してた』

「花音と？それって……………」

私はそこで口を閉ざす。

相談内容はきつとあのことだ、と察したからだ。

コホンっ、咳払いをして話を変える。

「今日このあとは空いてるのかしら？」

『ああ。暇だ』

「今度開かれるライブに向けてベースの練習をしたいの。よかったら、スタジオまで送ってもらってもいいかしら？」

『いいぜ。アパート前で待ってな。ついでにオレのカバンも持ってきてくれ』

「わかったわ。紗夜ちゃんには内緒にしておいてあげる」

『察しが良くて助かるぜ』

小さく笑って返し電話を切る。

そこまで紗夜ちゃんを恐れているのなら、真面目に授業を受ければいいのに。やはり、今でも彼の考えは読み取ることができない。

月島くんの家の駐車場で待っていると、聞き慣れたバイクの排気音が聞こえこちらに向かいながら腕にかけていたヘルメットを投げて渡してきた。

「ちよつと、危ないじゃない」

「悪い悪い。カバン、サンキューな」

悪びれもなくそう口にする月島くん。

不本意に頬を膨らませ彼の肩を借り、バイクにまたがると勢いよく発進する。

スタジオへはあつという間に到着し、バイクを停め受付を済ませる。

「んじゃ、オレはこれで」

手を軽くあげ帰ろうとする月島くんの手をぎゅつと掴んだ。

「もう少し付き合っただけでいいからここにいて。ねっ？」

「このあと見たい番組が……」

「今日は暇なのよね？もう少しだけでいいからここにいて。ねっ？」

「ちっ、わーったよ」

彼は早々に折れ、強引に引き止めることに成功した。

スタツフさんに二人入ることを伝えスタジオへと足を踏み入れる。

防音完備で、扉の鍵を閉めて仕舞えば邪魔が入ってくることはない。

彼に気づかれぬよう鍵をして、密室に二人という空間を作り出す。

「一つ、訊いていいかしら」

「なんだ」

「花音とは、どんなことを話したのか教えてちょうだい」

「ただの世間話だっつーの」

月島くんの視線が不用意に泳ぐ。

「花音のため、と言うなら深掘りしないわ。それがあなた個人の意思ならこちらにも考えはある」

「ハッ、物騒なこと言いやがって！どうせこの閉じ込められた部屋の中で体を触られたとかでスタツフに泣きつく気だったろ？」

「よくわかったわね♪」

「恐ろしい女……………」

「教えてくれるわよね？」

「いいだろう。だが、あまり口外するなよ」

そんなこと話す友達は花音ぐらいしかいない、と言う自虐はさておき月島くんの言葉をチューニングを合わせながら耳にする。

実に優しいあの子らしい悩みだった。

「オマエには松原に譲るとか、遠慮するといった感情はないのか？」

「あるわけないわ」

「言い切るのか」

「それがなんであれ、欲しいものは必ずものにする。花音と約束したから、尚更

……」

「泥棒の台詞かよ」

「間違っているかしら？」

「いいや。オマエは正しい。その傲慢さこそが白鷺千聖だ」

「うふふ。よかった♪」

私は裏表のない笑みで返し、ベースを爪弾く。

彼はパイプ椅子に座り、ベースを弾く私の姿をただ見ていた。

「月島くん」

「今度はなんだ」

「どうしたらあなたの彼女になれるか、教えて」

「ストリートだな、おいっ」

「私はあなたの理想の彼女に必ずなれるわ。どんな性格だつて、どんな人柄だつて演じれる。花音に勝っているところがあれば、それしか思いつかないの」

長年積み重ねてきた演技力。それが私の武器。

家事は一通りこなせるし、スタイルにだって自信がある。

残るはもう、月島くんの理想とする女性像を体现するだけ。

今の私にはそんな考えしか浮かんでいない。

月島くんは椅子から立ち上がり眼前まで距離を詰めてきた。

目をそつと閉じると彼は腕をあげ、私の頭を軽く叩いた。

「なにっ!？」

突然の出来事に困惑するし、叩かれた頭上を抑える。

「バカか。演じたら意味ねエだろが」

「えっ……………?」

「オマエは一体誰だ? ドラマに出てくる面倒見の良い幼馴染Aか? それとも男に素直に慣れない恥ずかしがり屋な少女Bか?」

「どれも、違う」

「そう。オマエは白鷺千聖だ。他の誰でもない、白鷺千聖本人だ」

「……………正直、今の私では花音に見劣りしてしまう。だってあの子は、とっても優しい

子だもの……………」

ベースを弾く手を止め、ポロポロと涙をこぼす。

認めたくなかった。けど、認めざるを得なかった。

今の私は月島くんにあまりに不釣り合いだ。

関係が改善されたとはいえ、唾み合うことも多いし未だ理解できないことだってたくさんある。

けれど花音は、たとえ自分が不幸になろうともどんなことでも受け入れてしまうほどの器を持っている。

傲慢で、自意識の高い私にはない才能。

月島奏という、ヤンチャで負けず嫌いな男の子にはああいう子がお似合いだ。

「はあ……………つたく、ホントオマエらは!!」

また叩かれると身構えるけど、今度は私の頭にそつと手を置き撫でるように手を動かす。

「オマエが好きな男は誰だ？」

「月島くんよ」

「松原の好きな男は？」

「月島くん」

「オレはどつちに惹かれてると思う？」

「……………花音」

彼は鼻で笑い、手を休めることなく撫でる。

「アイツも確かにいい女だ。これからどんな嫌がらせや酷いことを言われようとも、嫌いになることなんてあり得ないな。」

「私はどうなのよ……………」

「少なくとも、素顔を隠してばかりだとなんの魅力も感じない。オレは完全にプライベートの、演技もクソもないありのままの女に惚れるんだぜ？」

「もう、バカっ……………」

私は彼の胸に顔を預ける。

グツと服を握る手に力が入り、涙を彼の服で拭う。

「オレが欲しけりや惚れさせてみるよ。大女優様」

挑戦とも言えるその言葉。

それを聞き体から顔を離した。

「……………ええ。絶対、振り向かせてみせるわ」

ごめんなさい、花音。

私はやっぱり彼が愛おしくてたまらない。

いくらあなたといえど、譲りたくないの。

蹴落としてでもなんて酷いことは言わない。

正々堂々、彼の心を掴んで見せる。

負けても恨みっこなし。

月島くんの彼女になるのは、白鷺千聖。

この私よ。

第49輪 高嶺の華

大学受験を間近に控え教室の空気は少し張り詰めている。

不安がないというわけではないが、そこまで悲観してもいない。

受ければよし、落ちればまた来年受け直せばいい。

そのスタンスでオレは現在の学園生活を謳歌しているのだ。

「次の授業なんだっけか」

「英語表現、だったかしら？」

「うん。確か、小テストがあつたはずだよ」

「サボりたくてもサボれねえな」

「許すわけがありません」

オレの机に群がる三人の女。

今思えばオレの学園生活はコイツらと歩んできたと言つても過言ではない。

松原は路地裏で不良たちに絡まれてるところで出会い、この学園での初めての友達に

なつてくれた。

白鷺は入学してからずっとウザ絡みしてくるクソみたいな女だったが、今となつてはマネージャーを務めるほどの仲にある。

氷川は仕事上のパートナー。学園長からの無理難題にも共に解決に導いた戦友のような存在だ。

そのうちの二人、中学からの付き合いでもある松原と白鷺は運命の悪戯か、同じ相手を好きになつた。

オレとしても二人の恋路を応援したいところだが、その相手というのがオレ。正直なところ本当に参つてゐる。

俺がこの先誰かと付き合ふとしたら間違いなくこの二人のどちらかになるんだろうが、未だ決めかねている。

卒業するまでにはどちらかの気持ちに答える。

とりあえず今はそのことしか頭にない。

始業のチャイムが鳴りそれぞれが席につき先生が入室すると、早速と言わんばかり英語の小テストが始まつた。

内容は簡単な英単語。

さつさと終わらせて眠りにつこうと、スラスラと解き始める。

Unrequited、片思い

Passion、恋情

Fate、運命

Trust、信頼……………つておいつ!!

なんなんだこのテストは!

今のオレの煩惱を映し出すかのような内容じゃねえか!

ふざけやがって。こんな問題、サツと書いてすぐに裏を向け机に突っ伏す。

なぜオレは恋愛に対してここまでひよってるのかオレ自身わからん。

今のままの関係がそれほど大事なのか?

二人の気持ちはどうなんだ?

氷川と話して吹っ切れたとはいえそんなことが脳裏にチラつく。

(恋愛って、難しいんだな……………)

形の見えない敵ってのはこうも恐ろしいものなのか。

得意の蹴りや殴打もできやしない。

オレにとって恋愛はテストなんかより難題な問いなのかもしれないな。



私は、月島くんのが好き。

何度も口にしてきたことだけど、それはどれだけ時間が経とうと変わることはない。

願わくば今すぐにでも彼の恋人になりたい。

そんな妄想を繰り返すけれど今のこの平和な日常が壊れることを恐れている自分もいる。

もしかしたらこのままの関係の方がいいのではないか？

そんなことが頭をよぎるのだ。

「はあ………ほんと、どうしたらいいのかしら」

独り部屋の天井を見ながらため息と共に吐きだす。

花音もそんなことを考えているのかしら。

少なくとも今は彼のこと以外全く頭がない。

ドラマの撮影でもよくセリフを飛ばすことがあるし、集中していないと監督から注意されることもある。

原因はわかっている。

今の私に必要なもの、それはきつと。

「……………覚悟を決める必要があるわね」

体を起き上がらせ、グツと握った拳を胸に当てフウつと息を吐く。

そして携帯の電源を入れ電話をかけた。

3コールもしないうちに彼女は電話に出る。

『もしもし?』

「夜遅くにごめんなさい。花音」

『ううん、大丈夫だよ』

気にしないで、と言葉を続ける花音に自らの想いをぶつける。

「明日、月島くんに告白しようと思ってるの」
『えっ………?』

戸惑った様子の花音。彼女も彼女なりにタイミングを見計らっているだろうけど、私は限界を迎えていた。

好きという気持ちが溢れて収まらない。

ふとした瞬間も彼のことを考えるし、ほんの些細なことでもときめくことがあるほどに。

「二人で彼を取り合おうと決意したあの日からちょうど三ヶ月。随分と時間が経ったわね」

『うん。そうだね………』

「もう、我慢できないの……!!」

花音には本当に申し訳ないと思ってる。

けれど、それ以上に彼に対する気持ちが抑えられない。

好き、好き、大好き。

何度だって言える。彼への愛の言葉。

今すぐにも家を出て伝えたい。

私の決意はどんな鉱石よりも硬い。

「……………ごめんなさい」

謝罪の一言を入れ、深呼吸し冷静になったところで話を続ける。

「この三ヶ月で私は何度も彼にアプローチしたわ。正直、手応えも感じてる。残り少ない高校生活だけど、私は月島くんと恋人関係となって最後を過ごしたいの」

『千聖ちゃん……………』

「これは私の^エ自己的思考^ク。花音が付き合う必要はないわ。あなたはあなたのタイミングで告白して欲しいの」

考えようによっては脅しとも取れる最低な発言。どれほど蔑まれようともかまわない。

それ以上に、彼への愛が強いからだから。

『私も……………奏くんが好き、大好き。今すぐにも、この気持ちを伝えたいって思う』
どうやら花音の意思も硬いようね。
これで心配することも、遠慮する必要もない。

「ふふつ、決まりね。明日、全ての決着をつけましょう」

『緊張、するね……………』

「あらつ、それだと月島くんは振り向いてくれないわよ？」

『ち、千聖ちゃん!!』

花音を少し揶揄い場を和ませる。

「……………負けないわよ。花音！」

『(ち)ち(ら)そー!』

宣戦布告をしたところで電話を切り携帯を抱きながら背中をベッドに預けた。たった十数分の会話だったけど少しばかり疲労感が込み上げる。

「はあ……………彼になんて告白したらいいのかしら……………」

その言葉が頭の中をぐるぐると駆け回る。

素直な気持ちを伝えればいいと思うのだけれどそれだとありきたりだ。

私らしくて彼に一番伝わりやすい言葉。それがなんなのかわからない。

明日が本番だというのにどうしようもないわね……………。

そんなことを考えていたら一睡もできず朝を迎えてしまった。

体は重く感じベッドから起き上がることが辛い。できるならこのままもう少し考えていたけれど、時間は刻一刻と迫っている。

いつも以上に気合を入れて部屋から出て支度を済ませて家を出た。

空を見上げれば雲ひとつない晴天でこの季節にはふさわしくない気温が覆う。季節はずれに冬に差し掛かるといふのにこれも地球温暖化の影響かしら？

いずれにせよ睡眠を取れなかった私にすれば最悪の環境だと言わざるを得ない。

眠い目を擦りながら学校の門を潜る。

「よお。白鷺」

軽く手を上げ挨拶を交わす月島くん。彼の顔を見て眠気はすぐに吹っ飛んだ。

「ええ。おはよう」

何気ない様子で挨拶を返す。隣には紗夜ちゃんもいて生徒会の活動なんだろうとすぐに察した。

「朝早いのにちゃんと仕事ができてる偉いわね」

「まあ、朝っぱらからコイツにモーニングコールされるわ、家まで向かいにこられるわで無理矢理な」

「今回は従順で助かりました。最悪の場合は武力行使も考えていたので」

「オマエが？オレに勝てるんでも？」

「ええ。今からやってみますか？」

紗夜ちゃんは表情を変えることなくどこからか取り出した手錠の金具をチラつかせ、殺気立つ月島くんを静める。

「……………仕方ねえ。それだけは勘弁だからな」

「なら諦めてください」

「へーへー」

二人の絡みも随分と見慣れた。最初は私同様険悪なようだったけれど今となっては名コンビだ。

？
さながら長年行動を共にしてきた刑事たちのよう。これも一つの証、というのかしら？

恋愛ではなく友情に近い関係。

そういう意味では紗夜ちゃんの他に並ぶものはいないわね。

「あつ、そうだわ。月島くん。今日は放課後予定はあるのかしら？」

「強いていうなら屋上でのんびり昼寝するつもりだが」

「もしよかったら放課後教室に残っていて欲しいの」

「なんで」

「あなたに告白するからよ」

淡々と話したその言葉が周りの空気を凍り付かせる。

「何かしら?」

「いや、何かしらじゃなくてだな……………」

「とにかくそういうことだから。忘れちゃダメよ」

ヒラヒラと手を振り背中を向けた私を指差し、風紀委員の子たちから質問攻めされる彼を置いてこの場を去る。

少し強引ではあったけれど約束は取り付けられた。あとはもう私の想いを伝えるだけ。けれどその言葉だけが未だに思いつかないでいる。

「あらっ、おはよう。花音」

靴を履き替えていると花音が姿を現した。

「おはよう。千聖ちゃん」

いつも通りといった様子で挨拶を交わす花音。そのまま二人並んで教室へと向かう。

「月島くんには伝えたわ。今日の放課後、全ての決着がつく」

「そう、だね……………」

浮かない様子の花音は俯き口をつくむ。

「負けないわよ」

牽制するような言葉を投げかけ私は足早に教室へと入る。これは戒め。

親友であると同時に恋敵でもある花音と今日だけ、少なくとも決着がつくまで仲良くするのは違う。私はそう思った。

ごめんさい、と心の中で謝りながら腰を下ろしその時を待つ。



放課後。いよいよその時は訪れた。

わらわらと群がっていた教室内はしばらく経つと私たちだけになり、全員がいなくなったのを確認すると二人で奏くんの前に立った。

「月島くん。覚悟はできたかしら？」

その言葉に月島くんは腕を組み、俯きながら無言で頷いた。彼も答えを見出したようだ。

「まずは、こんなことになって本当にごめんなさい」

「気にするな。オレも遅かれ早かれ決めるべきだとは思っていたからな」

もう後戻りはできない。

この先の未来を捻じ曲げることも、この先訪れるであろうどのような結末だろうと。

「私は屋上で」

「私は教室で」

『あなたを待ちます』

それぞれの思い出の場所。

私は文化祭の時に二人で話した屋上で。

花音は静かな空間で和やかに二人で過ごした茶道室で告白することを決めた。

ここから先は神のみぞ知る。

それぞれの運命は神に委ねられた。

「それじゃあ、私たちは行くから」

「奏くんの好きだと思おう方に来てください」

二人で教室を後にし公言した場所へと向かう。

なぜだかわからないけど、互いの顔を見合ってしまったてはいけないと思いついて振り

向くことなく足を進める。

普段何の考えもなく通る階段だけど今日はいつもと違う感じた。

まるで、これまでの私の人生を振り返るような……そう、私の始まりは暗いどん底からだ。

父親はサラリーマン。母親も元OLで芸能界とは全く関わりのない状態からスタートした白鷺千聖の芸能生活は、コネや頼る人物さえおらず独りで歩み始めることになった。

親の絶大な期待に反する周囲の嘲笑が非常に辛かったのをよく覚えている。わかっている、私は才能がない。

努力に努力を積み重ね、芸能人となつて早十数年。失敗や挫折を幾度となく味わってきたけれど今の私はアイドル兼女優。唯一無二とも言える立ち位置を獲得した。

そんな私でも努力だけでは手に入られないものをこの3年で知ることになった。初恋の男の子。月島奏くんの存在だ。

将来に何の希望もなくその日をのうのうと生きている彼に対して、最初は心の底から嫌悪していたのだけれど度重なる関わりを経て今は恋心を抱いている。

現実主義者の私が聞いて呆れる。

月島さんと関わってはいずれ自分の身を滅ぼす危険があると言うことも重々承

知済み。それでも尚、この数年味わった刺激的な毎日は冷め切った私の感情を昂らせてくれた。

これからも彼と共に。今はただその願いが強い。

「……………さて」

長い階段を渡り歩き屋上へと辿り着く。

この扉はいわば、これからの人生への幕を開ける未来の扉。

もう引き返すことなんて許されない。なんの躊躇いも戸惑いもなくドアノブに手をかけガチャリと開く。

「やっぱここはいいわね」

普段は危険だからと言う理由で立ち入り禁止の屋上。月島くんが勝手に解放したことにより極数人しか知らない花咲川高校の静かなスポットの一つとなった。

図書室もその一つに入るのだけどあそこは人が多くて居心地はあまり良くない。誰もいない屋上だからこそ、より一層魅力に感じる。

「いつ、来るのかしら……………」

そう溢しフェンスに背中を預ける。

視線を背に向ければグラウンドで部活動に励む生徒たちを一望することができ青春を謳歌する学生たちにフツと小さく笑い視線を戻す。

部活、部活動か……………」

帰宅部の私からすれば非日常的な生活の一つ。多忙であるからずっと何もせずにいられど大学では何かのサークルに入るのも悪くなさそうね。

ガチャリツ。

「……………!?!」

誰も来るはずのない屋上に聞こえるドアの開閉音。それだけで誰が来たのか顔を見ずともすぐにわかる。

「よお。待たせたな」

「ふふつ。待ってたわ」

軽く手を振り立ち上がると、表情を一切変えることなく月島くんはこちらに近づく。

「寒くないか？」

「ええ。大丈夫」

今日は冬の季節に見合わずポカポカと陽の光が暖かい日を迎えていた。雪が積もった様子もなく、部屋に籠るなんて勿体無いほど。

「それで、覚悟は決めたのかしら？」

「まあ、な。……………なあ——」

「待って」

手のひらを前に出し彼の言葉を遮る。

「ここは嫌。上へ行きましょう」

私が指を指すところ。よくみんなでお昼ご飯を食べた懐かしの場所へ向かい足を進める。

少し錆びついた梯子を一段一段ゆつくりと登り、花咲川の街を一望する。

雲ひとつない快晴の空の下、先ほどとは比べ物にならない景色が目映った。綺麗、と眩きながら辺りを見渡す。

「今日は晴れてよかったな」

軽快に登り切った彼はポケットに手を入れたまま私の隣に立つ。

「最近雪が多かったものね」

ヒューッと吹く風で髪が靡く。

唐突に吹いたその風で月島くんは身を震わせる。

「やはり冬は好かん」

「どうして？」

「寒いのが嫌いだからな。路面が凍結してバイクだと事故りやすいのもあるけどな」

「車には乗りたいと思わないの？」

「バイクにはバイクだけにしかない魅力があんだよ」

「うふふつ、かつこいいこと言うのね」

「忘れる。恥ずかしい」

鼻を嚙り照れた様子を見せる月島くんを見て笑みを浮かべる。今の私にはその魅力はわからないけれど、いずれ共有できたらいいわね。

女番長が主役のドラマがあればきつとバイクに乗れるだろうから受験が終わったタ
イミングで教習所にでも通ってみようかしら。

「……………」

「……………」

二人揃って口を閉ざす。

「……………どうだった？この3年間は」

思い出を振り返る形で彼が話を振る。

「すごく楽しかったわ。仕事も、プライベートも」

「そうか」

「月島くんは？」

「楽しかったぜ。後半は特にな」

「まさかあなたとこんな関係になるなんて想像もしていなかったわね」

「ああ。同感だ」

「覚えてるかしら。去年の秋、ここであなたと話したことを」

懐かしむような様子で告げる。

「文化祭の時だったか。今思えば、あれがオマエとまともに会話した初めての機会だったかもな」

「ええ。あのときは本当に辛い思いをしたわ」

あれは仕事が忙しかった時期。

学校に出席することが少なくなり文化祭で主演をするというのだから一部のクラスメイトたちから酷い嫌がらせを受けていた。暴言を吐かれ、あまつさえ暴力も振るわれた。

今となってはただの思い出話である出来事も当時の私からしたらすぐ辛くて苦しんだけれど、それを救ってくれたのが私の隣に佇む彼。

恩人にして最愛の人。今思えば、この頃からだったかしら……私が彼に好意を抱き始めたのは。

「良くも悪くも、あれが分岐点だったのかもしれないな」

「どうしてあの時、私を見捨てなかったの？」

今だからこそ聞ける話。それを思い切って彼にぶつけてみる。

「ん？ああ」

俯きながら後頭部を掻き照れくさそうに頬を赤く染める月島くん。

「友達を大切にする奴に悪い奴はいない。だからこそ助けたくなくなった、つていつたらいいのか……………」

「え？」

あれほど嫌悪していた私を、どうして？

そんな疑問が溢れ出る。

「と、とにかく！見捨てるなんて選択肢はオレにはなかったんだよ！言わすなっ!!」

そつぽを向き照れながら怒る月島くんを横目につい頬が緩む。

そつか、そんなこと思ってくれてたんだ……………」

時間が流れ、当時の心境を話しているとあの時に挫けることなく耐え切った自分を褒めあげたい。

決して無駄ではなかった。彼の言葉が今こうして私の心は満たされているのだから。

「それで、本題にはいつ入るのかしら？」

「テメエがあそこじゃ嫌だつたからここにきたんだろが！」

「そうだったわね。うふふ♪」

月島くんを揶揄いっつ話に戻し向き合い直す。

「それじゃあ、あなたの気持ちを聞かせて」

ドキドキと鳴り響く鼓動をグツと抑え込み、平常心を保つ。

「……………正直、悩んだ」

「？」

「二人の気持ちは痛いほど伝わってる。だからこそ、オレの言葉ひとつがどれほど重
いのか自覚してるつもりだ。もう、保留にするつもりはない。答えは決めた」

私は表情を変えることなく、その言葉を待つ。

「——すまん」

「えっ？」

「白鷺。オマエの気持ちに応えることはできない」

「……………」

頭を下げ申し訳なさそうな声を出す月島くん。その言葉を受け、頭が真っ白になる。

「……………そう」

かろうじて、短く吐く。

「顔をあげて。月島くん」

肩に手をそつと置きそう投げかける。

「白鷺……………」

「あなたが謝ることなんて何ひとつないわ。それがあなたの気持ち。その結論を私はずっと望んでいたのだから」

毅然と。そして笑顔すら浮かべて口を開き続ける。

ダメだ……まだ、その時じゃない……。

「一つ。一つだけ、私のお願いを聞いてくれるかしら」

「ああ」

「二度だけ、私のことを名前で呼んで欲しいの」

それは私がずっと望んでいたこと。

他人行儀ではなく、本当の友人である証を記すために。

「おやすいよようだ」

咳払いし、私の目を見て口を開く。

「3年間、世話になったな——千聖」

「……………私の方こそ。ありがとう、奏」

その言葉に笑顔で返す。

月島くんが屋上に来てから30分ほどが経った。きっと花音が待ちくたびれているはず。

「ほらっ、私のことはもういいから早く花音のところへ行きなさい。間違っても寄り道するんじゃないわよ?」

「当たり前だ」

彼はそう言い残し、梯子を伝うことなく颯爽と飛び降り扉の方へ向かう。

彼は私を見上げ手を軽く振って別れの挨拶を交わすと花音の元へ走って向かった。

「……………」

月島くんが見えなくなるまでその姿勢を貫く。

そして――

「……………っ」

身体から力が抜け、その場に背中をつけ横になる。

「……………はぁ」

腕で目元を覆い隠す。

「仕方ないわ。これが運命なのよ」

自分にそう言い聞かせ天を仰ぐ。

雲ひとつない快晴の空。微かに聞こえる部活動に励む生徒たちの声。
また私は一人になった。今は誰も私を見ていない。

「……………あーあ」

「失恋……………しちゃったわね……………」

突きつけられた、いや、待っていた現実。必然の運命。

これはドラマなどではない、ノンフィクションの物語。決してこの結末を書き換えることなどできはしない。

「本当っ、残念だわ……………」

ただ、その一言に尽きる。けれど後悔はしていない。私にできることは全てしたし想いも伝わった。

それだけで十分満足。悔いなんて、あろうはずが——

「……………ねえ、奏。私の分も、花音と幸せになって、ね……………」

ずっと溜め込んでいた雫が眼から流れ出る。

失恋^{まけ}した。

私は、失恋ましたんだ。

第49輪 路傍の花

オレの楽しい学園生活も残りわずか。

数ヶ月もすればオレたちはバラバラの大学に進むことになるまできていた。

なんだかんだ、別れを感じると辛くなるもんだ。

今はただ、コイツらと何気ない日常を味わいてエ。

「次の英語、サボるから………氷川、メモ頼んだ」

机に突っ伏し、ノートを氷川へと渡そうとするが手で払われる。

「自分でやってください。次欠席するようなことがあればまた首輪で繋がりますからね」

「まだ持ってるのかよ」

「当然です」

生憎、オレと氷川は同じ大学を志望している。

高校よりは自由になるとはいえ、またこの女に縛られるのは勘弁してほしい。

「小テストもあるのだけれど、ちゃんと勉強はしてるのかしら?」

「問題ない」
モーマンタイ

「信じられないわね」

「でも、成績はすごくいいんだよね。奏くんって」

「本気出したらこんなもんだ」

オレの机に群がった女たちにピースサインをする。

学力において流石に氷川には敵わないが、松原とはいい勝負をしているだろう。

特に白鷺なんて、芸能活動に勤しみすぎたせいで出席日数が足りず留年する危険性があるくらいだからな。

「言っておくけど、あなたに心配されるほど私、バカじゃないのよ?それに、これまでのことを考えて卒業が危ういのは月島くんの方じゃないかしら?」

「ほざけっ。他人の過去を掘り返す暇があったら足りない学力分内申点でも稼いど

け

「内申点のかけらもないあなたに言われても……」

「んだとコラッ！」

この言い争いも日常になってきた。

かつてのような一触即発、といったピリついた空気はもうどこにもない。

そして予鈴のチャイムが鳴ると、英語の教師が入ってきて号令、そして着席する。

早速と言わんばかりにその教師は英語の小テストを配り始め、その紙がオレの元へも回ってきた。

その内容は簡単な英単語問題。

僅か十数問しかないからこんなもの、1分もかからず終わるだろう。

はじめ、と言う合図と共にテストは始まりオレは別のことを考えていた。

白鷺と松原からの告白の件。

それが今のオレにとって期末テストなんかよりも難しい難題だ。

もちろんオレは二人のことを友達として信頼しているし、他の何を差し置いても一番大切な存在だと言い切れる。

そんな二人の間も中学からの関係性があり互いを一番の友達だと信じている。そんな二人の、ひよんなことから始まった恋物語は全く違う道を歩んできた。

片や不良に絡まれているところを助けたことで始まり、片や歪みあつてきたが何度も助けられて好意を抱き始めたり。

本来なら互いの恋愛話で悩みを相談しあったり、付き合うまでのサポートをしたりなどをしていたんだろうが、親友同士の二人にはそれができなかつた。

何故なら、恋した相手が同じだったから。

運命の悪戯か、白鷺と松原は親友から恋敵のような関係になつてしまった。

そのことで三人は深く悩み、各々がハッピーエンドを迎えられるような展開を考え続けた。

しかし、恋愛はそう甘くはない。

どちらかが笑えばどちらかが必ず泣く。

誰もが幸せになれる選択肢なんて存在しないのだ。

(さて、そろそろ始めるか)

心の中でそう呟きようやくテストに目を通す。

Dearest、親愛なる。

Fondness、愛情。

Sweetheart、恋人。

Marriage、結婚………っておいおい、もしかして狙ってやってるのか!?
今のオレの煩惱に当てはまる英単語ばかりじゃねえか!

ふざけやがって。

尚更集中できねえじゃねえか………。

煩惱に支配されることなくスラスラと単語を書き終え、紙を裏返し机に突っ伏した。

(恋愛って、クソ難しいな)

殴り蹴ることもできない。

形のない敵ってのはなかなかどうして面倒なのか。

オレにとってはテストなんかよりこっちの方が難題だ。



それは突然の出来事だった。

部屋でクラゲのクッションを抱きベッドに横になっていると携帯の着信音が鳴り響いた。

発信源は千聖ちゃんですぐ電話に出る。

「もしもし?」

『突然ごめんなさい。今大丈夫かしら?』

「うん。どうしたの?」

『実は相談したいことがあって……………』

何か思い詰めたような様子で千聖ちゃんは話を始める。

『二人で彼を取り合おうと決意したあの日からちょうど三ヶ月。随分と時間が経ったわよね』

「そうだね」

『私……………もう我慢できないの』

「えっ?」

『私は明日、彼にもう一度告白する』

「ええっ!？」

千聖ちゃんの唐突な独白に戸惑うが、構うことなく話を続ける。

『この三ヶ月で私は何度も彼にアプローチしたわ。正直、手応えも感じてる。残り少ない高校生活だけど、私は月島くんと恋人関係となつて最後を過ごしたいの』

「千聖ちゃん……………」

彼女の意思は相当に固い。

もちろん私だって、ただボーツと毎日を過ごしていたわけじゃない。

水族館や遊園地、カフェでお茶をしたりと何度も彼を誘い二人だけの時を過ごした。

もちろん私だって彼へ告白する気持ちは整っている。

それをしなかったのはただタイミングがなかっただけ。

言い訳にはなるけど、抜け駆けして告白が成功するのも失敗するのも絶対に嫌だったのだ。

やるなら一緒に。

私の心の中には常にそれが存在していた。

『彼を愛してるといふ気持ちをもう抑えることはできない……………花音はどうなの？』
「私は……………」

グツと握る拳を胸に置き、決意を表すかのように告げる。

「私も……奏くんが好き、大好き。今すぐにも、この気持ちを伝えたいって思う」
『ふふっ。なら決まりね。明日、全ての決着がつけましょう』

「緊張……………するね」

『負けないわよ。花音♪』

「こ、こちらこそ！」

そう宣戦布告し電話を切る。

いよいよ明日が決戦の日。

あまりに唐突に決まったけど気圧されることなんてない。

少しでも躊躇すれば敗北する。

それほどの気持ちを胸に私は深い眠りにつく。

鳥の囀り声が聞こえてくると共に起床し、覚めきつていない目を擦りグツと伸びをする。

少し乱れた布団を直し両親に挨拶し、朝食、身支度を済ませ家を出る。

決して変わることはないいつも通りの朝。

今日、全てが決まるというのに妙に落ち着いている自分に驚く。

鼓動も正常で一切の乱れもない。

勝つても負けても、私は絶対に後悔しない。

それほどまで、彼との恋愛に本気になったからだ。

「よお。松原」

校門をくぐると奏くんは生徒会の仕事で紗夜ちゃんと共に立っていた。

「奏くん。紗夜ちゃん。おはよう！」

「朝から元気だな」

「うん。よく眠れたからかな？」

「オレなんて朝から氷川コイツにモーニングコールされるわ家まで向かいにこられるわ

………つたく、勘弁してほしいぜ」

「目を離れたら絶対サボるでしょう？」

「否定はしねえ」

「なら諦めてください」

「あはは………」

紗夜ちゃんは相変わらず手厳しい。

私は二人に別れを告げ、校舎へ入ろうとすると下駄箱前で千聖ちゃんと遭遇する。

「あらっ、おはよう。花音」

「千聖ちゃん！おはよう」

何気なく挨拶を交わすけど、千聖ちゃんの顔色はあまりよくなかった。

「何かしら？」

「な、何でもないよー！」

きつと昨日電話した時から寝られなかったのだろう。

私とは対極。それほど今日の告白にかけているということだ。

「月島くんにはさつき伝えたわ。放課後、教室に残っていてほしいって」

「そうなんだ」

「花音はいつも通りね」

「そ、そうかな？」

「私は……………すぐく悩んだわ。彼にどのような言葉を伝えるかを、ね。けれど私はありのままを話そうと思うわ」

「うん。私もそのつもりだよ」

互いに後悔をしないように。

それぞれの恋の行方はすぐそこだ。



放課後。いよいよその時は訪れた。

わらわらと群がっていた教室内はしばらく経つと私たちだけになり、全員がいなくなったのを確認すると二人で奏くんの前に立った。

「月島くん。覚悟はできたかしら？」

千聖ちゃんのその言葉に奏くんは腕を組み、俯きながら無言で頷いた。彼も答えを見出したようだ。

「まずは……こんなことになって、本当にごめんなさい」

「気にするな。オレも遅かれ早かれ決めるべきだとは思っていたからな」

もう後戻りはできない。

この先の未来を捻じ曲げることも、この先訪れるであろうどのような結末だろうと。

「私は屋上で」

「私は教室で」

『あなたを待ちます』

それぞれの思い出の場所。

千聖ちゃんとは文化祭の時に二人で話した屋上で。

私は静かな空間で和やかに二人で過ごした茶道室で告白することを決めた。
ここから先は神のみぞ知る。

それぞれの運命は神に委ねられた。

「それじゃあ、私たちは行くから」

「奏くんの好きだと思おう方に来てください」

二人で教室を後にし公言した場所へと向かう。

なぜだかわからないけど、互いの顔を見合ってしまったてはいけなと思ったから決して振り向くことなく足を進める。

長い渡り廊下を歩く私は走馬灯のような光景を目にした。

それはこれまで私と奏くんが歩んできた道。

楽しかったこと、辛かったこと、そして幸福と感じたこと。

どれも私にとっては大切な思い出。

そして長い渡り廊下を歩き終えた先に見えるのは屋上の扉。

私はその扉の前に佇む。これは言わば今の私の現状。

この扉を超えた先には私の未来が待っているのだ。

「……………よしっ」

ドアノブを掴みながら眩き扉を開く。

普段立ち入り禁止ということもあつてここには誰もいない。これから来るとすれば奏くんのみだ。

風がヒューッと強く吹き髪が靡く。金網越しに映る景色は部活動に励む生徒たちの姿。頑張れ、と小さくエールを送り金網に背を預け腰を下ろす。

どんな結果になろうと私に後悔はない。

奏くんを好きになったことも、千聖ちゃんと争うことになったのも……………。

私は——絶対負けない。

「奏くん。待ってる、よ……………」

……………

……………

屋上にきてから30分ほどが経過したが想いを寄せる彼はまだ姿を現さない。

私はもう、この時点で察していた。

初めての恋が成就することはなかったんだと。

けれど私に涙はない。後悔をしていないからだ。

やり切った。ちゃんと言葉にして伝えたいし、行動もした。

悔いなんて……………あるはずがない。

(泣かないよ……………私、絶対、泣かないもん……………)

心でそう眩き、暗い表情で薄く笑みを浮かべる。この後千聖ちゃんたちにどんな言葉をかけようか？

『おめでとう』それとも『お幸せに』かな？ いずれにせよ二人の幸せを願う言葉をかけることは決まっている。

例えば、高校3年生になってからは千聖ちゃんと奏くんはずっと一緒にいた気がする。学校外、特にマネージャーになってからはプライベートでの関係も濃くなっていた。

それらを通じて千聖ちゃんは私の知らない彼の姿もきつと知っているのだろう。ほんの少しだけど、羨ましく思う。

「……………そろそろ、降りようかな」

二人に贈る言葉は考えた。精神も安定してる。今の私なら表情を崩すことなく二人を祝えるはずだ。

私はスツと立ち上がり扉に向かう。

ガチャリツ。

「よっ、待たせたな」

急に扉が開き私の想い人が姿を現す。いつもの通りの軽快さで軽く手をあげ私に言葉を投げかける。

「ううん。大丈夫、だよ」

私は笑顔を貼り付けそう答える。

「さっきまでちさ……………白鷺のところに行ってたんだけ。すまん。遅くなると連絡すればよかった」

「気にしないで。来てくれたことが、嬉しいんだから……………」

「……………？なんだ、泣いてたのか？」

「ち、違うよ！そうじゃ、ないの」

手をブンブンと振り誤魔化して見せた。

ふーん、と口を尖らす彼は私の隣を横切りフェンス越しに屋上から目にするのできる景色を一望しながら口を開く。

「一度はここから一望できる夜景を見してやりたかったんだけどな」

名残惜しそうに話す奏くん。

卒業まで残り数ヶ月あるけど、実際に登校するのはほんのひと月程。時間なんてあつという間に過ぎる日数だ。

「ダメだよ。夜に学校に侵入するのは」

「監視カメラの位置は全て把握してるから問題ねえよ」

「もう。そういう問題じゃないよ」

景色を眺める奏くんの横に並んで立つ。

少し腕を伸ばせば彼の手を握れるほどの距離。その距離およそ10センチ。それが遙か遠く、とても触れられるような感じがしない。

「奏くん、3年間の学校生活はどうだった？」

「ああ、楽しかったぜ。特にオマエらと出会えてからは特にな」

「そっか」

彼が嬉しそうな表情を浮かべるのを見てこちらも同じような気持ちになる。

「松原はどうだ？」

「私は……すごく刺激的な毎日で新鮮だったよ」

「ククツ。その殆どがオレのせいだったろ」

「そうだね。ふふっ」

「おいおい、そこは否定してくれよ」

「もちろん、嫌な意味じゃ無かったんだよ？」

「知ってる」

何気ない日常の会話。それが今はただ楽しくてしょうがない。それはこのまま幸せな時間が続いてほしいと願うほどに。

しばらくその会話をしていた時だった。後頭部を搔きバツが悪そうな表情を浮かべ

ながら彼は話の内容を変えた。

「あー……その、だなっ……」

言葉を詰まらす奏くんをキョトンとした顔で覗く。

「さっき、白鷺のところに行つてだな……」

唐突に始まったあまりに重い話。そうだ、私たちは今日、決着がつくんだ。もうわかりきつてる。私は、失恋まけしたんだ……。

「告白——断つてきた」

「えっ……」

何故、どうして？

そんな疑問が思考を支配する。

「オレが好きなのは、松原花音。オマエだ」

ずっと待っていた愛の言葉。真剣なまなざしでそう伝えてくれたけど今の私には全く耳に入らない。

嬉しいというより疑問の気持ちが何よりも強い。まずはその経緯を訊くことにした。

「なんで、私を……………」

「前にも言ったが、松原は誰よりも人当たりが良くていい意味で裏表のない女だ。人のことを悪く言わない。誰に対しても優しく接することができる。そんなところにオレは惚れたんだ」

「……………っ！」

「オレといたら迷惑をかけ続けるし、性格もひねくれてる。全国的に有名になっちゃった悪童でもいいというのなら……………オレと付き合ってくれ」

片膝をつき手を差し伸べる奏くん。

まるで届きそうに無かった愛しの彼の手がもう目の前にある。ゆっくりとその手の上に自分の手を添え涙を流しながら答えた。

「（こちらこそ、よろしくお願いします……………！）」

絶対泣かないって決めてたのに自然と涙が溢れてくる。嬉しくて仕方がない。今はもう幸せすぎて胸がいっぱいだ。

「そこまで泣かなくていいだろお？」

「だ、だってえ……………！」

指で涙を拭う私を奏くんは優しく頭を撫でる。まるで子猫でもあやすかのように。

「奏くん、ズルイよ」

「何がズルいんだよ」

「私ばかりドキドキしてるから…………」

「つつてもオレも付き合った経験がないからよく分からんけどな。まあこれから長い付き合いになるんだし、ゆっくりでいいんじゃないかねえの？」

恋人関係になったにも関わらず奏くんはいつもと態度を変えない。いや、変わらないと言った方がいいのかな？

ムーっと頬を膨らませた私は、

「ねえ、奏くん。お願いがあるの」

背の高い彼を見上げながら目を見る。

「珍しいな。なんだ？」

「私のこと、これからは……………名前で呼んでほしいな」

ずっと一方的だった名前呼び。今は私たちも恋人関係にあるのだからそのような証明が欲しいと思った。

別に契約してるわけじゃないんだけど、それでも私は彼に、好きだ！って思えてもらってる実感……………というのかな？そういうのがあればと考えている。

「名前、名前か……………」

奏くんはそう眩きながら頬を掻きながら視線を逸らす。どこか照れ臭そうな、そんな表情だ。

「まあ、せつかくの頼みだ。やってやる」

もう一度向き合い真つ直ぐな瞳で私の名前を口にする。

「——花音」

出会ってから数年。ようやく私の名前を呼んでくれた奏くん。嬉しくて今にも踊り出しそうな高揚感で溢れる。

それを行動で表すようかのように彼の頬に手を添えそつと唇を添えた。チュツ、と数秒のキスを交わし驚いた様子の彼にイタズラな笑みを浮かべこう告げた。

「奏くんの初めては全部、私がもらうからね♪」

「コイツ……………!!」

優しい怒りと恥じらいが入り混じる感情を昂らせる奏くんはわしやわしやとサファ
イア色の髪を乱す。乱暴だけど心地いい。私は彼に全てを捧げるつもりだ。

水族館や海などをデートで行ったり、バイクを乗せてもらったり、恋人らしいことを
たくさんやりたい。もう、やりたいことだらけだ。

将来のことなんて今は考えない。今はただ、この幸せな時を彼と共に過ごしたいか
ら。

第50輪 高嶺の華と路傍の花

思えばあつという間だった3年間の高校生活。それは苦難の日々だった。

最悪の一年生。クラスメイトたちと馴染むことはなく、学校外の不良たちとケンカする毎日で、だった十数年の人生において最も無駄な時間を過ごした歳だった。

改善の二年生。白鷺や氷川、そして花音たちとの関わりを経て少しずつまともな学校生活を送るようになった歳。学校行事はもちろんのこと、プライベートでも奴らと接することでオレの心境に大きな変化が見られた。

最良の三年生。これまでの経験が実を結び、人付き合いや学校生活が一変した。後半は受験だなんだで面倒な日々が続いたがこれほど楽しいと感じた一年は他にない。信じられないことではあるが、彼女もできたわけだしな。

そして冬が過ぎ去り、暖かな春の日差しが眩しいこの日、オレは花咲川高校を卒業する。

式自体は大して特別なことはしていないがこの3年間で振り返るとやはり思うことがある、しみじみとした気持ちになった。

卒業式が終わり校庭に出ると、卒業生たちがそれぞれの思い出を語り合い、写真を撮り、今日を目一杯楽しんでいる様子が見える。

「みなさん。お疲れ様でした」

せんせーたちへの挨拶が終わり、氷川がオレたちの輪に加わる。

「長かったなあ。この3年間」

「あら、私はそうは思わなかったけれど？」

「テメエは登校した日が少なかったからだろうがい」

「別に、好きで欠席してたわけじゃないわ」

白鷺は大学受験に向けて芸能活動を休止していたが、高校を卒業した今日、再び再会となる。

額に受けた傷は未だ痛々しく残ってはいるが、仕事に支障はないとのこと。メイクや前髪やらで隠せると判断したんだろうな。

新しい事務所に所属し、順風満帆な芸能生活&大学生活が送れそうだ。

「月島くんも、大学でサボってばかりではいけませんよ?」

「じゃあ毎朝オレを起こしに……いや、やめておこう。テメエならやりかねん」
「やりましようか?」

「結構デス!!」

氷川はオレと同じ大学の法学部へ。

出会った頃は教師になるとか言っていたやつが、今の夢は警察官。高校での日常がやつを変えたらしい。

オレもそうなるのが目標だから、これからも奴の下僕イヌとして生きていくことになるんだらうな。はあ、気が滅入るぜ……………。

「奏くんなら大丈夫だよ。ねっ?」

「一人で起きられるかが心配だ。実家を出るわけだからな」

「ふふっ。楽しみだね♪」

「どちらかと言うと不安が勝つぞ」

「それも醍醐味だよ」

オレの彼女、花音は白鷺と同じ大学に合格しこの春からルームシェアを始めるそう
だ。

仲のいい二人だから決して心配はしてないんだが……新しい家の場所がわからなくなつて迷子になることが容易に想像できる。

花音には誰かと一緒にいさせないと心配でたまらん。

「なら、私があなたの家の隣に引っ越ししましょうか？それとも、松原さんたちと同様に私が住みつきましょうか？」

「やめろその言い方！幽霊かテメエは!!」

「タンスを漁ってきたら引っ叩きますからね」

「するか!!」

実現することのない妄想に強烈なツツコミを入れる。

こんな几帳面な幽霊が住み着いてきたらたまつたもんじやない。

毎日規則正しい生活を送らされるし、部屋を片付けろだのと言われるだろうし、何よりオレのプライバシーが無くなる。

氷川にはオレの家の住所は絶対教えん。絶対だ。しばらく四人で話していると、下級生の男子生徒たちがぞろぞろと群がってきた。

「総長!! 3年間のお勤め、お疲れ様でした!!」

『したあ!!』

「ああ?」

総勢50名の野郎どもが一斉に頭を下げる。

舎弟になりてえ、タイマンを張りてえ、オレを超えてエって連中が後をたたず大勢のバカがこの学園に入学した。もちろん全員を完膚なきまでに叩きのめしたのだが、結果全員がオレの下につくことになって暴走族『逆鱗』を結成することになった。

もちろんウチは、犯罪行為に一切手を染めないクリーンな集団。警察が手を焼く輩を殲滅し町の治安維持に貢献している………といえば聞こえはいいが、おれはあくまでコイツらに名前を貸してるだけ。決して懇意にしているわけじゃない。

「うっせえなあ。とつとと散れ、クズ共」

『ええっ!?!』

他人行儀で野郎共を一蹴するが、奴らは驚愕の表情を浮かべ叫ぶ。

「それはないですよ!!」

「総長が受験勉強に励んでる間、俺たち頑張ってたのに!!」

「制服の第一ボタンの一つくらいくれたっていいじゃないですか!!」

よってたかかってやかましい。

全員骨折させたろか。

「文句があるならかかってこいよ。テメエら如き、15秒ありや十分だが?」

ゴキゴキと手を鳴らし威嚇すると、野郎どもは顔が真っ青になり道を開ける。

本気で喧嘩する気はなかったが、奴らは察したらしい。いい判断だ。

無闇矢鱈に特攻しても無駄。勇敢と無謀はイコールじゃない。

「……………まあ、なんだ」

大群を横切り立ち止まると、振り返ることなく言葉を投げかける。

「花咲川は任せたぞ」

「……………う、うつす!!」

未だ潰えることのない悪の芽。全てを取り除くことはできないがこれだけの人数が目を見せれば大丈夫だ。

見た目は野蠻だが、これらの不良とは違うことをオレは知っている。

受験勉強に励んでいる間、この学校で騒ぎが起きなかったのは単に奴らのおかげなんだろう。

スタスタと校門へ向かい歩いていると、後ろから花音がひよこつと顔を覗かせる。

「すごく慕われてるね」

「オレにそんな威厳はねエよ」

「奏くんを尊敬することに変わりはないよ」

「慣れねえなあ……………」

「照れてる?」

「照れてねエ!」

「ふふふっ♪」

悪戯に笑う花音。それはどこか白鷺にも似た揶揄い方だ。長く付き合っているからかクセが移つちまつたんだな、きつと。

「……………おやつ」

道中、保護者たちと談笑していた学園長と目があった。ちようど話し終えたばかりらしく、保護者たちに礼をしてからオレの元へ歩み寄る。

「月島くん。卒業おめでとう」

「ああ。おかげさまでな」

オレは白い歯を見せ返事を返す。

こうして進級、卒業できたのも単にこのジジイの影響が大きい。風紀委員なんて面倒

な仕事を押し付けてきたことに当初は怒りもあつたが、今となつてはいい思い出。

在学させてなんの得もねエこの超問題児の不良を退学させずに、学校に居続けさせてくれたのは素直に感謝している。

「2年間の風紀委員の任、ご苦労だつたね」

「大変だつたんだぜ？マジで」

「はははっ。だが、君の働きのおかげですっかり問題事が起きなくなつた。感謝しているよ」

「よせよ。そういうの、慣れてねエんだ」

「照れてるのかい？」

「もういいわ！そのノリ!!」

「全く、騒々しいですよ？」

オレと学園長の間には氷川が割つて入る。

「改めまして学園長先生。3年間、お世話になりました」

「こちらこそ。キミにはとても助けられたね」

「当然のことをしただけです」

「大学は月島くんと同じなんだってね。二人の活躍が見れないのはすごく残念に思うよ」

「ケツ！こんな堅苦しい奴、高校だけで十分だったの」

「私こそ、あなたのような粗暴な人は大学までだと考えてるので」

互いに睨み合い険悪な空気になる。

犬と猿、水と油など仲の悪い意味を表す言葉は多数存在するが、心の底から憎んでいるわけではない。

これは一種の友情表現。

仲良しこよしよりもこっちの方がオレたちに合っている。

二人で言い争いをしているその時だった。

「どけどけどけエエ!!」

族車に跨り、ド派手に校内へ侵入してきた十数人の男たちが生徒たちを押し除け道を塞ぐ。

先頭に立つ男がバイクから降り、オレの眼前までゆっくりと近づく。

「お前が月島奏だな？」

「そーだけど。アンタは」

似合もしない金髪リーゼントを突き出し威嚇する男。

オレよりタツパがあるから見下ろされてる形になるが、決して圧は感じず平然と返す。

「俺は怒^ド狗^ク露^ロの峰田ってんだ。覚えとけ」

その名前を聞き逆鱗のメンバーたちがざわつく。

「怒狗露って、荒川の……………」

「ああ。俺たちの3個上。超有名の暴走族」

「確か、女子供関係なくフルボッコにするって有名だよな」

「そんなヤバイ人がなんでここに……………」

「決まってるだろ！総長をノシにきたんだろ」

「大丈夫かよつ、おい……………」

奴らの会話を聞く限り、相当ヤベエ連中なのは間違いなさそうだ。完全な悪人面のこの男がオレに何の用があつてきたのか。

目を見ただけでわかる。

「勧誘しにきたんだろ。オレを」

「その通り」

やはりオレの勘が当たった。

「俺とお前が組んだら東京一の暴走族になるのは間違いない。どうだ？荒川を仕切る

この俺と——」

「クタバレ」

「はあ……………？」

オレはとーんと跳び、上から見下ろす無礼なこの男の頭を踵落としすると、ゴツと鈍い音を立てながら顎を地面に強打し気絶する。

「群衆モブがイキがるんじゃないよ」

気を失っている男の顔面を踏みつけそう吐き捨てる。

「人を傷つけるだけの暴走族なんてオレがいくらでも潰してやる。さて……………」

キツと残りの男たちを睨みつけると、男たちは奇声を発しながら校舎を後にし逃げ去った。

「あ……………」

冷静になった頭で今のこの状況を整理する。

卒業式後に喧嘩。

他校の生徒への暴力。

余裕で大学進学取り消しモンだな、コレは。

「月島くん」

学園長がゆつくりと歩み寄る。

言い訳をするつもりはねエ。ここはきちんと頭を……………。

「大学でも、精進しなさい」

「……………はっ?」

思いもなかった学園長の言葉にポカんと口を開く。

「怒らねえの?」

「彼も他所ではおいたをしてきたんだろう?当然の報いだと私は思ってる」

「アンタ、変わってるな」

「はははっ。じゃなかったら高校の学園長なんて務まらないさ」

豪快に笑い飛ばす学園長に呆れて苦笑いする。周りを反応を見ると、まるでいつものことか、と言わんばかりに既に卒業生たちが会話を再開していた。

学園長はオレの肩に手を置き話を続ける。

「その力は、誰かを守るために使いなさい。キミならそれができるはずだ。」弱きを助け強きをくじく、これからのキミの活躍を大いに期待しているよ」

……………おいおい、なんだよ。

なんで、こんな老耄の言葉が、こんなに心にくるんだ。

誰に言われるまでもなく、生まれて初めて、自ら頭を下げる。

「……………お世話に、なりました……………」

父親が長きに渡りいかなかったオレにとってこの人は第二の父。おふくろも世話になつた恩人だ。

だからこそ、伝えなければならぬと思った。

これまでの感謝と、謝罪を込めて。

「ほらっ、彼女たちが待っているよ。早く言ってあげなさい」

笑顔でポンポンと肩を叩く学園長に再度頭を下げ、校門で待つ花音たちの元へ駆け寄る。

「全く、あなたはいつまでたっても変わりませんね」

「まあ、それが月島くんだものね♪」

「あんまり無茶しちやダメだからね？」

「……………すまんとは思ってる」

三者三様の言葉に言葉を返しつつ、オレは振り返り学園長に最後の言葉を告げる。

「またな、^ジ学園長!!」

ニコリと笑う学園長は軽く手を振り見送る。

波瀾万丈だったこの3年間。全く、いい日々を過ごした。

名残惜しい気持ちもあるが、まだまだオレの学生生活は長い。大学、そして社会人になってもこんな楽しい毎日を通ぐすことができたら本当に幸せだろう。

暴れん坊だったオレを、どうしようもないクズだったオレを、ここまで育ててくれたことを感謝するぜ。花咲川高校。

数年後、立派な大人になって恩返しに来てやるよ。あばよっ!!



「はあ、つつかれたあ……………」

ベッドに背を預け、大の字になる。

さつきまで行われていた謝恩会にも出て、みんなの前で話までさせられて疲労感に襲われた。

まあ、楽しかったのは事実だからオレとしては満足しているんだが。

少し冷えた体を温めようと毛布に包まろうとしたその時、着信音が鳴り響く。

「あいあーい」

『あつ、もしもし？奏くん？』

電話の声の主は花音だった。

「どうした？」

『今、奏くんのお家の近くにいるんだけど、よかつたら話せない？』

「ああ。なんなら、家来るか？」

『いいの？』

「おふくろも仕事で帰ってこねえし、寒いだろ？」

春を迎えたと言っても、まだまだ冬を越したばかり。気温は一桁になることがザラだ。

こんな寒空の下、落ち着いて話すことなんてできないだろう。

『それじゃあ、お邪魔しようかな』

「着いたらチャイム鳴らしてくれ」

『うん！わかった！』

元気にそう返し、電話を切る。

しばらくベッドで横になつてると花音は言葉通りチャイムを鳴らし、家へと上がる。お邪魔します、と礼儀正しく挨拶し居間へ案内し椅子に腰掛ける。

「コーヒーでいいか？」

「うん。ありがとう♪」

そう言うだろうと思って予めお湯を沸かして正解だった。

棚からインスタントのコーヒーを出し、カップの中でお湯と混ぜる。花音は甘いのが好きだから砂糖とミルクも入れ、手渡す。

「なんだ、家に帰ってなかったのか」

花音の服装を見ると、未だ制服のまま。

ジャージに着替えたオレとは違い謝恩会の後、そのままここへきたようだ。

「すぐにも奏くんに会いたくて……………」

「オレはどこにも逃げやしねえよ」

「目を離すとすぐどこかにいつちやうから心配」

「大学は真面目に勉学に励むつもりだ」

「えへへ。少し想像しづらいかも」

「言つたな。このつ」

冗談混じりに笑う花音の額を指で優しくつつく。

騒がしかった先ほどの会とは違い、至つて穏やかな空気だ。

「白鷺とはいつからシェアハウスに移るんだ？」

「来月の予定だよ。これからまたドラマの撮影とかで忙しくなるから、それが落ち着いてからかな」

「相変わらず多忙だな」

「もうマネージャーはやらないの？」

「ハッ！あんなクソ忙しい仕事、いくら金払いが良くてももうごめんだね」

「大変だったんだ……………」

「大変なんてもんじゃねえよ。マネージャーってよりボディガードに近かったし、送り迎えやスケジュール管理……ああ、もう面倒つたらありやしねえ」

決して表に立つことのない裏方の仕事。

その凄さたるや、オレなんか語れるはずもない。

「花音はファストフードのバイトは続けるのか？」

「うん。お家賃もあるし、将来のために少しでも貯金しないとね♪」

「耳が痛い話だな………」

「奏くんはバイトするの？」

「当然。職種は決めてねエけど、肉体労働なりして稼ぐ予定だ」

「奏くんらしいね」

「脳筋とでも言いてえのか？」

「勉強ばかりで運動不足になったらダメだよ？」

「両立は厳しそうだ」

まあオレの場合、勉強不足になるのがオチだと思うが………そこは青鬼さん「ひかわ」

にでも頼んで試験対策するか。

「ふふっ、楽しみだね♪」

「ああ」

小さく笑みを浮かべながら少し冷めたコーヒーを口に含む。

見栄を張ってブラックにしてみたが、やはり苦い。まだまだオレの舌はお子様なようだ。

この味が美味いと感じるような大人に、いつかなるんだろうな……………。

「……………ねえ。奏くん」

和やかな空気から一転、真剣な顔つきになる花音。

「何だ？」

「私たち……………本当に恋人同士、だよね……………？」

何を言うかと思いきや、訳のわからんことを告げる花音の頭を撫でながらこう答える。

「当たり前だろ」

「何だか、未だに実感が湧かなくて……」

「まあ、恋人らしいことは全然できてないからな」

自分で言うとは何とも情けなく感じるが、受験があつたから仕方ない。

突如、花音はスツと立ち上がりオレの元へ歩み寄る。

「立って。奏くん」

花音の言葉通り、その場に立ち上がるとオレの胸元に顔を埋め、ぎゅつと抱きしめてきた。

珍しく積極的な花音の行動に動揺する。

「なんだなんだ、どうした急に」

もちろん、拒絶なんてせず再度頭に手を添える。

「大好き……………」

「ああ。オレもだ」

「私なんか、奏くんに恋してもいいの、かな……………？カツコよくて、頼り甲斐があつて、優しく、素敵で……………そんな高嶺の華のような奏くんと私が、釣り合うのかな……………？」

あの時の威勢の良さはどこへいったのやら。

告白から時間が経って再び弱気になったらしい。

オレは言葉ではなく態度で示すことを決め、頭から手を離し花音同様、背中に腕を回しギュツと抱きしめる。

「私 “なんか” じゃねえよ。花音は花音だ。オレは花音だから惚れたんだ」

「奏くん……………」

「言つても分からねエならこうしてやるよ。花音。目を閉じろ」

「えっ……………うん……………」

そつと瞳を閉じた花音。

オレの目的はただ一つ。無防備な唇を強引に奪う。

「……………っ!？」

唐突な行動に驚く花音。

思わず手を離すがオレは花音から離れることなく、数秒間。キスをし続けた。

何ともクサイ、ドラマでしかみたことのない行為だが、花音を分からせるには十分だった。

「これがオレの気持ちだ。言っておくが、花音が初めてだからな」

「うん……………ありがとう……………!」

ようやく安心したのか、オレの胸元で涙をこぼす花音。全く、泣き虫にも程がある。だが、面倒だなんて思わない。これも花音。彼女の個性だ。

これからはそんなネガティブな気持ちにならないよう、好きと伝え続けていかななくてはいけないな。

最後になるが、聞いてくれ。

高山に咲く高嶺の花だろうと、道端に咲く路傍の花だろうと、その花の価値は等しく同じ。

咲けば花は美しく育つ。

その価値を見出せるかどうかは自分自身だと言うことを伝えたい。

この3年間楽しかったぜ。

最後まで読んでくれて、ありがとな。

番外編

番外編

大人になった花たちは今……………

今日も賑やかな商店街。

かつてはここで学校終わりにフラフラと寄り道することもあったこの場所で全国ニュースに取り上げられるほどの事件が起きた。

それが『地蔵通り 通り魔殺傷事件』

犯人は20代から30代ほどの痩せ型の人物だが、性別すら判明してない神出鬼没の殺人犯だ。

オレの地元であるこの場所のパトロールも兼ねて事件の詳細を知るために住人に聞き込みを行っていた。

「それで、どんな感じだった？」

サングラス越しに視線を送る主婦にそう問いかけると、どうやら事件が起きた後のことを目撃してたらしく詳しく教えてくれた。

「突然悲鳴声が聞こえてきて……そこへ近づくと、血まみれになって倒れる人が何人もいたんです……」

主婦は事件の凄惨さが滲み出るように、震えながらそう話す。

「犯人の顔は？」

「見ていません。黒のフード姿でナイフを持っていたのは見えたんですが……」

「そうか。呼び止めて悪かったな」

この周辺の監視カメラの映像も確認したが、犯人を特定するような証拠は一切上がっていない。

こういった住民の記憶を手がかりにすることも多々あるのだが、犯人も相当慎重なんだろう。事件が起きてからおよそ一週間。全く進歩しやしねえ。

「あの……」

立ち去ろうとするオレを主婦呼び止める。

「こんなこと訊ねるのは失礼だと思うんですけど、あなた……誰なんですか？」

オレは自らの格好を再確認する。

タイ無しで黒シャツのボタンを開け、その上にストライプの黒スーツを羽織ったサン
グラスの男。まあ、疑問に思うのも無理ないか。

「そういえば、まだ見せてなかったな」

思い出すかよのようにそう呟き、胸ポケットに入れていた警察手帳をその主婦に開い
て見せる。

「警視庁刑事部捜査一課強行犯捜査三係、月島 奏だ。何かあつたらこれからもよろ
しくな」

そう、オレは大学を出て警察官になった。

それも準キャリア。それなりに頑張った結果だ。

すでに現場で数年経験を積み今こうして事件に関する情報を集めて回っている。デスクワークなんかより現場の方が向いてるからな。

主婦にニカツと笑って別れを告げ、別の聞き込みを行っている相棒の元へ向かう。さほど離れたところにはいなかったようで、すぐさまその姿を視界に捉えた。

「よお。進展してるか？」

サラリーマンらしい男と話をしている背後から声をかける。

「邪魔しないでください」

「へいへい」

邪険にされ、しばらく天を仰いでいると話し終えた相棒がシャッターに背を預けぼーっとしているオレの元に歩み寄る。

「お待たせしました」

「まったく、遅えつつの」

「仕方ありません。昨日のことを事細かに思い出してくれていたのですから」

透き通るような水色の髪を一つに束ねキツチリとスーツを着こなす女、氷川紗夜は手帳にびっしり記したメモをオレに見せつけた。

「ほー、こりやあスゲエ。犯人でもなければ分からんほどの情報量だ」

「残念ですがこれまで調べた目撃証言と、先ほど聞き込みをしていた方とは外見が一致しません」

「バーカ。見りやわかるつつーの」

氷川から情報提供者に視線を移すと、小太りで大柄な体型の男でどこか清潔さに欠けている。

「……………なるほど。やっぱ他と同じだな」

「ええ、ほぼ100%一致してますね。しかし体は華奢でまるで女みたいだったらしいです」

「女ねえ……………」

刃物を振り回す危険な女はオレの中では一人しかいないが、あれ以降全く姿を見せるどころか名前すら聞かなくなった。

別の街に身を隠したか、あるいは死んだか。

後者の方が有難くはあるが今のオレには関係のないことだな。

「そんなことより、サン^そグラス^れ、取ったらどうですか？」

「なぜだ」

「警察官に相応しくないからです。分からないのですか？」

氷川の言葉に従いサン^そグラス^れを外すと、かつて切り刻まれた左目付近に刻まれた縦の刀傷が顕になる。

「これを見ても尚、そう言えるか？」

「……………せめて、警察署内では外してくださいね」

「あいよっ」

再びサングラスをかけ辺りを見渡す。

昼下がりの繁華街に平然と群がる人間たち。ニュースになったとはいえ、犯罪者が潜んでいるかもしれないこの場所を何食わぬ顔で歩いているのは、オレからしたら異常な光景だ。

自分は関係ない。

事件に巻き込まれるわけなんてない。

そんな気の緩みが自らの命を落とすことにつながることを、いくら説明しても理解し
たがらん。

オレの嫁もそうだ。できることなら一番安全な家の中にいて欲しいものなのだが、
『今日は大切な予定があるから』と言って昼過ぎ、ちょうど今ぐらいの時間に誰かと待ち
合わせをしているらしい。

人付き合いが大切なのもわかるが、おつちよこちよいなアイツが心配でたまらん。
オレは変じゃない。これは夫として当然の気持ちだ。

「時間も時間だ。そろそろ飯にしないか？この辺にオススメの本格中華料理の店があるんだが」

「いいですね。ぜひ連れて行ってください」

「一応言っておくが、辛いぞ」

オレのその一言に氷川の鋭い視線が飛ぶ。

「私の舌はお子様だとでも？」

「後の仕事に支障をきたしたくないなら甘口にしてもらうこった」

「ナメないでください」

「ククツ。テメエの反応が楽しみだよ」

キリツと鋭い視線を向ける氷川だったが、注文した麻婆豆腐が想像以上に辛かったのか汗が止まらず、なかなか蓮華が進まなかった。

その姿を揶揄うように笑いながらオレはこの店で一番人気の坦々麺（辛さ控えめ）を平らげた。

オレは決して甘口をバカにしていたわけじゃない。むしろ辛いのが得意じゃないからな。

安い挑発に乗り自滅した氷川がバカだったと言う他ないが、奴は持ち前の気力と根性

で完食しやがった。素直に脱帽。残したらもつと煽つてやろうと思つてたのに、チキシヨウ。

その後その辛さがクセになつた氷川に激辛料理のプチブームが訪れたのはまた別の話。



この世にはいい奴と悪い奴が存在する。

その悪い奴の中でも、救いようのある人間バカもあれば救いようがねえ人間クズもいる。

前者が貧困に苦しんだ挙句、金に困つて犯罪に手を染めちまつたという例。オレの経験上、そういった人間は後に悔いや自らを責め立てるような気持ちに駆られるやつが多く厚生之余地がある。

後者は自らの欲求のために犯罪に手を染める奴。牢屋にぶち込んだとしても、刑罰を受けたとしても、数年後にはまた同じことを繰り返す。

これもオレの経験則。頭のネジが外れた奴らに後世之余地はねエ。だからこそこつちだつて容赦などしない。

そんな中、数年刑事として働いてわかつたことなんだが犯罪は減るところか増す一方

にあるのは悩ましいところである。

「待ちなさい!!」

昼飯後に事情聴取を再開していたところ、覆面マスクをつけた男がひつたくり事件を引き起こした。

オレはひつたくられた婆さんに寄り添い、相棒である氷川はその犯人を追い猛然と追いかける。

「はあ……………はあ……………」

ヒールを履いていることもあり男との距離は縮まるどころかぐんぐんと離されていく。

遠距離で人を拘束具で捉えられるほどの動体視力とオレとの付き合いで得た護身術もここでは全く役に立っていない。

仕方ない、と呟き奴らに追いつこうと全力で駆ける。地面を力強く蹴る音が響き、風を切り、数秒もすると数十メートル離れていた氷川にあっさりと追いつき肩に手をおき

こう告げた。

「あとはまかせろ」

氷川を置き去りにし、犯人目掛けて直走る。

曲がり角を曲がったところを確認し追跡するが犯人はその手前で待ち構えており、オレの顔面目掛けて拳を振るってきた。

それを掌で受け止め捻り上げ胸板からコンクリートの地面に叩きつけた。

「えーっと、午後13時48分。現行犯逮捕な」

時間を確認し以前抵抗を続ける男に手錠をかける。

「お、俺の話聞いてくれ!!」

捉えた男が待ったをかける。

「はっ？何言ってるんだテメエ。バカか？」

もちろんそれに応じるオレじゃねえ。抑えつける手にさらに力を込める。

「イタタツ……！！ほんと、少しでいいから聞いてくれ！！」

「救いよしのねエ人間に貸す耳は持ち合わせていないもんでな」

「俺には家族がいるんだ！家に娘2人と嫁と両親……みんなが俺を待ってるんだ
！！」

勝手に話し始めた男の口実に耳を傾ける。

「だったらこんな行為に手を染めんじゃねエよ」

救いようのある人間の可能性があらうと犯罪は犯罪。取り逃すわけにはいかん。

「つたく。仕方ねえ」

オレは男から手を離しポケットからあるものを取り出し男に差し出す。

「へ、これは……?!？」

そのモノに男も驚愕した様子だ。

「拳銃だ。見りゃわかるだろ」

本来手放すことを許されないそれを震えながら手に取る男。弾倉も確認しちゃんと実弾がこもっていることを確認する最中、ある取引を持ちかける。

「アンタには二つの選択肢がある。一つ、その拳銃でオレを撃ち逃げる。二つ、無駄な犯罪に手を染めず大人しく捕まる。さあ、あんたはどちらを選ぶ？」

単独か道連れか。本当に家族が大事と思っているのであれば無駄なことではないはずだが……荒々しく息を切らし、昂った表情を浮かべる男の様子を見てオレは全てを悟った。

「バカが!!俺に家族なんていねえよ!!まずはテメエからだ!死ねええええええ!!」

「……パッパラパー。残念デシタwwww」

迫真に迫る男の様子に似つかわしくない陽気な音が響く。

「え………なんで………」

「あーそれ、おもちゃなんだわ」

「は、はあああああ!!」

奴が手にしているのは見た目や質量、構造までもが本物と同じレプリカ品だ。

プロでも見分けがつかないほど繊細な作りをしたそれはセーフティを解除し引き金を引いたところで弾なんて出てきやしない。

実弾に見えたそれは製造者曰くカセットテープみたいなものでそれをセットし引き金を引くとおもちゃのような音を流すことが可能だという。

そんな無駄な機能は求めてなかったんだが、彼の遊び心ということで水に流してやった。

「悲しいぜ。救いようのない人間の無様な最期はよオ」

グツと握った拳を男の顎に強打し気絶させた。それと同時に氷川が遅れて現地に到着する。

「はあ………すみません。助かりました」

膝に手をつき感謝する氷川。

歳をとり運動能力も落ちた………とは口が裂けても言わん。

一連の行動を隠すようにおもちゃの銃を懐にしまう。

「気にすんなよ。氷川警部補」

「全く、あなたには敵いませんね。月島巡査部長」

皮肉も込められたその肩書を口にする氷川とオレ。

警察学校では氷川が主席、オレが次席で卒業し様々な経験を経て今は警視庁捜査一課

へと配属されているんだが、階級は別。

配属早々にオレは横暴なことで有名な署の上層部の男に反発し、病院送りになるほどの怪我を負わせちまった為に昇格が見送られてしまったからだ。

直接言われたことはないが、さつきみたいな違反行為も原因の一つなんだろうが検挙率においてオレの右に出る人間は全国でもそうはいない。

言い訳に聞こえるだろうが、昇格なんて別にしなくていい。上の立場になれば面倒ごとが増えるだけだからな。

対して氷川は順調にステップを踏み今やオレの上司となった。

このままキャリアを積めば警部、警視へと進みゆくゆくは女性初の警視総監だって夢じゃないだろう。

「とりあえず、コイツを連れて帰るか」

「ええ。パトカー回してきますね」

氷川はそう告げこの場を後にする。

その間何をしようか悩んでいると、とある店のテラス席で二人の姿を目撃した。

捉えた男を電柱に縛り上げ、二人の元へ駆け寄る。

「よお。邪魔するぜ」

オレの登場に二人は驚いた様子を見せた。

「奏くん!？」

「あらっ、随分とお久しぶりね」

その二人というのは妻の花音。そして、大女優の白鷺千聖。どうやら二人はお茶をしていたそうで、空いていた席に腰を下ろす。

「お仕事は大丈夫なの？」

「ああ。さつきそこでひったくり犯を捕まえたところだ」

「相変わらず忙しいのね」

「オマエほどではないけどな」

白鷺は今やテレビでその顔を見る日がないほどの大女優へと成長した。

去年は主演女優賞を獲得し、人気も上々。様々な役を演じ分ける実力派として認知されている。

「花音も無茶するんじゃないぞ?」

「うん。心配してくれてありがとう」

オレはそう言い花音の膨らんだ腹を摩る。

「そういえばまだ伝えられていなかったわね。妊娠おめでとう。二人とも」

「ああ」

「ありがとう♪」

自分のことのように笑みを浮かべる白鷺。

結婚しておよそ2年。

紆余曲折あったが今は順風満帆と言えるほど幸せの真っ只中にある。

「男の子か女の子、どっちかわかっているの?」

「女の子だよ」

「10ヶ月目だからもうそろそろだろうな。近々入院予定だ」

「二人がその子の親になるのね………何だか、感慨深い思いだわ」

「えへへ」

「名前はもう決めてるの？」

「考えてはいるんだが、これがなかなか難しくくてな」

「どんな名前になろうとも素敵な子に育つと思うわ。なんとって、二人の子供なんだから」

まるで自分のことのように喜ぶ白鷺。

この女を振ったオレが言うのもなんだが、白鷺も幸せな家庭を築いて欲しいものだな。

「全く。こんなところで何をしているのですか」

しばらく談笑していると、パトカーをとりに行っていたはずの氷川が突如として現れる。

「早かったな」

「まだ仕事中ですよ。さっさと戻って……あらっ」

「お久しぶりね。紗夜ちゃん」

「お仕事お疲れ様♪」

「お元気そうで何よりです。皆さん」

眉間から皺がなくなり、穏やかな表情を浮かべる氷川警部補。

「奏くんがいつも迷惑をかけてるみたいで」めんね……」

「いえ。松原さ……失礼、月島さんが謝る必要はありません。それに、高校の時からなのでもう慣れっこです」

「人を疫病神みたいに言うな」

「彼と仕事をするのってすごく大変じゃない？」

「ええ。それはもちろん」

「うふふつ、わかるわよ。その気持ち♪」

二人は互いに見合い小さく笑う。

「月島さんこそ大変じゃないですか？妊娠もされてますし、彼、すぐくがさつなので心配です……………」

「バーカ。家ではまともにしてるつつうの」

「奏くんの言う通りだよ！掃除も洗濯も、なんでも手伝ってくれてるし」

「へえ。意外ね」

「仕事もそれぐらい真面目にしてくればありがたいんですけどね」

「テメエらはオレの何を知ってるって言うんだ？ああ？」

散々な言われようだが、オレは母子家庭ってこともあつてか最低限の家事はできる。料理はからつきしだけだな。精々、うまい具合に半熟の茹で卵が作れるぐらいだ。

「……………おっと、いけません。そろそろ戻らないと」

「まだ話してて大丈夫だろ」

「そうもいきません。あの事件の調査もまだ途中ですし、一旦署に帰りましょう」

「チツ、仕方ねエ」

る。
オレはヨッコラセと立ち上がり、花音のお腹の中にいる二人の子供を摩り別れを告げ

「それじゃ、行つてくるわ」

「うん。気をつけてね」

「白鷺！花音のこと、くれぐれも頼んだぞ!!」

「それはこちらのセリフよ。花音を泣かせたら許さないんだから！」

「心配無用だ！ばーか！」

「ふ、ふええ………」

白鷺に花音を託し、パトカーへと乗り込む。

白鷺や氷川に心配されるほど生活に困っちゃいない。順風満帆そのものだ。

いずれ生まれるオレたちの子供のためにも、愛する嫁花音のためにも、この後の仕事を頑張るかな。